

根室市

おん ね とう
温根沼 2 遺跡

— 一般国道44号根室市温根沼改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成30年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター



1. 調査区全景（東から）



2. トビニタイ式土器を伴う竪穴住居跡調査状況（ⅢH-5・南東から）

口絵 2



1. 擦文文化期竪穴住居跡調査状況（Ⅲ H-2・北から）



2. 続縄文時代竪穴住居跡炭化材出土状況（Ⅲ H-1・南西から）



1. 続縄文時代竪穴住居跡 (Ⅲ H-12・南西から)



2. 縄文時代後期竪穴住居跡 (Ⅲ H-7・西から)



1. 下田ノ沢式土器 (集合写真)



2. 下田ノ沢式土器 (突起)

例 言

1. 本書は、国土交通省北海道開発局釧路開発建設部が行う根室道路事業に伴い、公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成29年度に実施した、根室市温根沼^{おむろしおんねとう}2遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 温根沼2遺跡の地番は、北海道根室市温根沼271番2外である。
3. 調査は第2調査部第2調査課が担当した。
4. 本書の執筆はV章を除き、笠原 興、影浦 覚、阿部明義、広田良成が行い、編集は影浦が行った。執筆者については、文末に（ ）で氏名を記してある。遺構の事実記載はすべてに執筆者を記載したが、遺物の記載等で同一執筆者が連続する場合は、その連続の最後、あるいは章・節の最後に記名した。掲載遺物に関する記載は、金属製品（広田）を除き、すべて影浦である。
5. 現地調査で作成した図面の整理は影浦・阿部、遺物整理は影浦が担当した。
6. 現地調査での写真撮影は各調査員が行い、整理は阿部、室内での写真撮影は第1調査部第1調査課中山昭大の助力を得た。
7. 石器の石材鑑定は一部、第2調査部第3調査課立田理の助力を得た。
8. 各種分析・鑑定については、下記に委託した。V章にその結果を掲載してある。
放射性炭素年代測定：株式会社加速器分析研究所
黒曜石産地同定：株式会社パレオ・ラボ
炭化樹種同定：株式会社古環境研究所
炭化種実同定：パリノ・サーヴェイ株式会社
動物遺存体同定：株式会社パレオ・ラボ
岩石学的分析：アースサイエンス株式会社
鉄製品分析：岩手県文化振興事業団
9. 調査報告終了後の出土遺物は、根室市教育委員会で保管される。
10. 調査にあたっては、下記の諸機関および諸氏に御協力、御指導をいただいた（順不同、敬称略）。
北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課、根室市教育委員会
根室市歴史と自然の資料館：猪熊樹人・福田光夫・前田 潮

記号等の説明

1. 遺構の呼称について

(1) 遺構名は略号（H：竪穴住居跡、P：土坑、S：集石、F：焼土、FC：フレイク集中）の前に基本層序名を付して表した。なお、土器集中に略号は用いなかった。

ⅢH：Ⅲ層の竪穴住居跡 ⅢP：Ⅲ層の土坑 ⅢS：Ⅲ層の集石 ⅢF：Ⅲ層の焼土
ⅢFC：Ⅲ層のフレイク集中

VH：V層の竪穴住居跡 VP：V層の土坑 VS：V層の集石 VF：V層の焼土

2. 遺構図等について

(1) 土層の表記は自然層位（基本層序）がローマ数字、遺構の層位がアラビア数字である。

(2) 土色の判定には、『新版 標準土色帖』26版（小山・竹原 1997）を用いた。

(3) テフラについては、以下の略号を用いたところがある。

Ta-a：樽前 a テフラ Ko-c₂：駒ヶ岳 c₂ テフラ Ma-f~j：摩周 f~j テフラ

(4) 平面図の方位は座標北（方眼北）を示す。

(5) 縮尺は原則として40分の1であるが、土器集中では異なるものがある。いずれもスケールを付してある。なお、調査区の土層図は60分の1である。

(6) 平面図の「+」はグリッドラインの交点で、傍らのアルファベット - アラビア数字はグリッド名を表す。グリッドの見方はⅢ章 1（1）に記載している。

(7) 平面図の「・」付きアラビア数字は、その地点の標高を表す（単位：m）。

(8) 土層図・遺構図では、遺物やテフラを表すのに以下の記号を用いたところがある。

Pまたは●：土器 Fまたは▲：剥片・剥片石器 Sまたは■：礫
C：炭化木片 t：テフラ

(9) 土層説明では土の混在度合の多少を「>」で表したところがある。

(10) 遺構の規模は以下のように示した。一部が失われているものは現存長に「()」を付し、計測できないものは「—」で示した。

「上端の長径×短径／下端の長径×短径／最大深（最大厚）」（単位：m）

3. 遺物図について

(1) 縮尺は原則的に、剥片石器・磨製石器・鉄製品が2分の1、復元土器・拓影図・礫石器が3分の1、台石・石皿類が4分の1である。例外的に、径20cmを超える大型砥石を4分の1とした。一部が失われているものは現存長に「()」を付し、計測できないものは「—」で示した。

(2) 復元土器については、復元前と復元後に重量を計測した。実重量と復元重量として記載している（単位：kg 小数点以下第二位）。残存状況に応じて、器高、体積高、口径、底径を計測した。体積高とは、液体が入る範囲の器高（突起部や高台を除く）である。また、ほぼ完形復元できたものについては、容量を量っている（単位：L 小数点以下第一位）。復元土器の中にシリカゲルを充填し、3,000mlのポリプロピレン手付きビーカーに移し替える方法で計量した。

(3) 内面実測をした復元土器について、○を十字で四分割した記号「⊕」を用いて内面の実測範囲を太線で示した。記号は土器の上面観を表したもので下部中心が正面中心である。

(4) 石器等の計測値は以下のように示した。欠損部分がある場合は現存長に「()」を付して示した。「最大長×最大幅×最大厚」（単位：cm）

(5) 石器実測図に付した記号で、V-Vは敲打痕、|←→|はすり痕を表す。

目次

口 絵
例 言
記号等の説明
目 次
挿図目次
表目次
写真図版目次

I 章 緒 言

1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査にいたる経緯	1
4 調査の経過	4
(1) 発掘作業	4
(2) 整理作業	6

II 章 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と地形・地質	7
(1) 遺跡の位置	7
(2) 地形と地質	7
2 自然環境	10
3 歴史的環境	12

III 章 調査の方法

1 発掘調査の方法	18
(1) グリッドの設定	18
(2) 基本層序	20
(3) 発掘調査の方法	30
2 整理作業の方法	31
(1) 整理作業の方法	31
(2) 遺物の分類	34
3 調査結果の概要	37

IV 章 遺構と遺物

1 V層 縄文時代早期後半の遺構と遺物	57
(1) 概要	57
(2) 遺構	57
(3) 遺構出土の遺物	82
2 V層・VI層出土の遺物	93
(1) 土器	93
(2) 石器等	93
3 III層 縄文時代の遺構と遺物	101
(1) 概要	101
(2) 遺構	101
(3) 遺構出土の遺物	126
4 III層 続縄文時代の遺構と遺物	139
(1) 概要	139
(2) 遺構	139
(3) 遺構出土の遺物	181
5 III層 重複する遺構と遺物	207
(1) 概要	207
(2) 遺構	207
(3) 遺構出土の遺物	222
6 III層 時期を特定できない遺構と遺物	232
(1) 概要	232
(2) 遺構	232
(3) 遺構出土の遺物	245
7 III層 トビニタイ式期を含む擦文文化期の遺構と遺物	246

(1) 概要	246
(2) 遺構	246
(3) 遺構出土の遺物	272
8 III～I層出土の遺物	293
(1) 概要	293
(2) 土器	293
(3) 石器等	293
9 近代の遺構と遺物	310
(1) 炭窯関連遺構群	310
(2) 家畜馬の墓	321
(3) 近代の遺物	321

V章 自然科学的分析

1 温根沼2遺跡における 放射性炭素年代測定 (AMS測定) (株式会社 加速器分析研究所)	341
2 温根沼2遺跡出土黒曜石製石器の 産地推定 (株式会社 パレオ・ラボ)	356
3 温根沼2遺跡における樹種同定 報告 (株式会社 古環境研究所)	360
4 温根沼2遺跡出土種実の同定	

引用・参考文献

写真図版

報告書抄録

(パリノ・サーヴェイ株式会社)	369
5 温根沼2遺跡の動物遺存体 同定 (株式会社 パレオ・ラボ)	371
6 温根沼2遺跡出土石製品の岩石学的 分析 (アースサイエンス株式会社)	374
7 温根沼2遺跡出土鉄製品の 金属考古学的調査結果 (岩手県文化振興事業団)	383

VI章 総括

1 遺物の出土傾向について	389
2 下田ノ沢式期の遺構と 遺物について	391
3 下田ノ沢式期の住居跡 (III H-1) で検出されたヒグマの焼骨について	397
4 擦文文化期の住居跡 (III H-2・3) で検出された動物遺存体について	398
5 トビニタイ式期の住居内の集石と 集石に含まれるたたき石について	399

挿図目次

I章 緒言

図 I-1 根室道路の用地と調査区	2
図 I-2 温根沼2・3遺跡位置図	3
図 I-3 重機による表土 (および一部IV層) 除去範囲区分図	4

II章 遺跡の位置と環境

図 II-1 遺跡周辺の砂・礫採取位置図	9
図 II-2 根室市内の遺跡分布図 (内陸部)	13
図 II-3 根室市内の遺跡分布図 (半島部)	14
図 II-4 遺跡の位置と周辺の遺跡	15

Ⅲ章 調査の方法

図Ⅲ-1	グリッド設定図	19
図Ⅲ-2	土層柱状模式図	20
図Ⅲ-3	北側平坦面の土層堆積状況図	22
図Ⅲ-4	西側斜面部の土層堆積状況図	23
図Ⅲ-5	南側斜面部の土層堆積状況図	24
図Ⅲ-6	南東側斜面部の 土層堆積状況図(1)	25
図Ⅲ-7	南東側斜面部の 土層堆積状況図(2)	26
図Ⅲ-8	東側緩斜面部の土層堆積状況図	27
図Ⅲ-9	地割れ痕(全体)	28
図Ⅲ-10	地割れ痕と噴砂	29
図Ⅲ-11	I・Ⅲ層遺構位置図	46
図Ⅲ-12	V層遺構位置図	47
図Ⅲ-13	遺構位置図(Ⅲ層時期別)	48
図Ⅲ-14	包含層出土遺物点数分布図(1)	49
図Ⅲ-15	包含層出土遺物点数分布図(2)	50
図Ⅲ-16	包含層出土土器点数分布図	51
図Ⅲ-17	包含層出土石器点数分布図(1)	52
図Ⅲ-18	包含層出土石器等点数 分布図(2)	53
図Ⅲ-19	包含層出土石器点数分布図(3)	54
図Ⅲ-20	包含層出土石器・礫点数 分布図(4)	55

Ⅳ章 遺構と遺物

図Ⅳ-1	VH-1	58
図Ⅳ-2	VH-1断面	59
図Ⅳ-3	VH-2	61
図Ⅳ-4	VH-3	62
図Ⅳ-5	VP-1・2・4・5	64
図Ⅳ-6	VP-1・2・5断面	65
図Ⅳ-7	VP-3	66
図Ⅳ-8	VP-6・7	68
図Ⅳ-9	VP-8	70
図Ⅳ-10	VP-9・10	71
図Ⅳ-11	VP-11・12	73
図Ⅳ-12	VP-13・18	74
図Ⅳ-13	VP-14・15	75

図Ⅳ-14	VP-16・17・19	77
図Ⅳ-15	VS-1・土器集中1	80
図Ⅳ-16	VF-1~3	81
図Ⅳ-17	V層遺構出土の土器(1)	83
図Ⅳ-18	V層遺構出土の土器(2)	84
図Ⅳ-19	V層遺構出土の石器(1)	86
図Ⅳ-20	V層遺構出土の石器(2)	87
図Ⅳ-21	V層遺構出土の石器(3)	88
図Ⅳ-22	V層遺構出土の石器(4)	89
図Ⅳ-23	V層遺構出土の石器(5)	90
図Ⅳ-24	V層遺構出土の石器(6)	91
図Ⅳ-25	V層包含層出土の土器(1)	94
図Ⅳ-26	V層包含層出土の石器(1)	95
図Ⅳ-27	V層包含層出土の石器(2)	96
図Ⅳ-28	V層包含層出土の石器(3)	97
図Ⅳ-29	V層包含層出土の石器(4)	98
図Ⅳ-30	V層包含層出土の石器(5)	99
図Ⅳ-31	ⅢH-13・ⅢS-9	102
図Ⅳ-32	ⅢH-13(2)	103
図Ⅳ-33	ⅢH-13断面	104
図Ⅳ-34	ⅢH-7	107
図Ⅳ-35	ⅢH-7断面(1)	108
図Ⅳ-36	ⅢH-7断面(2)	109
図Ⅳ-37	ⅢH-8	110
図Ⅳ-38	ⅢH-8断面	111
図Ⅳ-39	ⅢH-8遺物出土状況	112
図Ⅳ-40	ⅢP-9・13・15	114
図Ⅳ-41	ⅢP-13・15断面	116
図Ⅳ-42	ⅢP-17	117
図Ⅳ-43	ⅢP-23・27	118
図Ⅳ-44	ⅢP-25	120
図Ⅳ-45	ⅢS-1	122
図Ⅳ-46	ⅢS-2	123
図Ⅳ-47	ⅢS-4・5	124
図Ⅳ-48	ⅢS-8	125
図Ⅳ-49	Ⅲ層遺構出土の土器(1)	127
図Ⅳ-50	Ⅲ層遺構出土の土器(2)	128
図Ⅳ-51	Ⅲ層遺構出土の土器(3)	129
図Ⅳ-52	Ⅲ層遺構出土の土器(4)	130
図Ⅳ-53	Ⅲ層遺構出土の土器(5)	131

図Ⅳ-54	Ⅲ層遺構出土の土器 (6)	132	図Ⅳ-94	Ⅲ層遺構出土の土器 (12)	188
図Ⅳ-55	Ⅲ層遺構出土の石器 (1)	134	図Ⅳ-95	Ⅲ層遺構出土の土器 (13)	190
図Ⅳ-56	Ⅲ層遺構出土の石器 (2)	135	図Ⅳ-96	Ⅲ層遺構出土の土器 (14)	191
図Ⅳ-57	Ⅲ層遺構出土の石器 (3)	136	図Ⅳ-97	Ⅲ層遺構出土の土器 (15)	193
図Ⅳ-58	Ⅲ層遺構出土の石器 (4)	137	図Ⅳ-98	Ⅲ層遺構出土の土器 (16)	194
図Ⅳ-59	ⅢH-1 炭化材検出状況 (1)	140	図Ⅳ-99	Ⅲ層遺構出土の土器 (17)	195
図Ⅳ-60	ⅢH-1 炭化材検出状況 (2)	141	図Ⅳ-100	Ⅲ層遺構出土の土器 (18)	196
図Ⅳ-61	ⅢH-1 平面 (1)	142	図Ⅳ-101	Ⅲ層遺構出土の石器 (5)	198
図Ⅳ-62	ⅢH-1 平面 (2)	143	図Ⅳ-102	Ⅲ層遺構出土の石器 (6)	199
図Ⅳ-63	ⅢH-1 断面	144	図Ⅳ-103	Ⅲ層遺構出土の石器 (7)	201
図Ⅳ-64	ⅢH-1 HP断面	146	図Ⅳ-104	Ⅲ層遺構出土の石器 (8)	202
図Ⅳ-65	ⅢH-1 HP土層注記	147	図Ⅳ-105	Ⅲ層遺構出土の石器 (9)	203
図Ⅳ-66	ⅢH-6 平面	149	図Ⅳ-106	Ⅲ層遺構出土の石器 (10)	204
図Ⅳ-67	ⅢH-6 断面 (1)	150	図Ⅳ-107	Ⅲ層遺構出土の石器 (11)	205
図Ⅳ-68	ⅢH-6 断面 (2)	151	図Ⅳ-108	ⅢH-9・14・15平面	208
図Ⅳ-69	ⅢH-6 土器出土状況	152	図Ⅳ-109	ⅢH-9 平面	209
図Ⅳ-70	ⅢH-10平面	154	図Ⅳ-110	ⅢH-9 遺物出土状況・断面	210
図Ⅳ-71	ⅢH-10断面	155	図Ⅳ-111	ⅢH-14覆土遺物出土状況	212
図Ⅳ-72	ⅢH-10HP断面	156	図Ⅳ-112	ⅢH-14平面 (床面)	213
図Ⅳ-73	ⅢH-11・ⅢF-16平面	158	図Ⅳ-113	ⅢH-14断面	214
図Ⅳ-74	ⅢH-11炭化材検出状況・断面	159	図Ⅳ-114	ⅢH-14HP断面	215
図Ⅳ-75	ⅢH-12遺物出土状況	161	図Ⅳ-115	ⅢH-15覆土上位～中位 遺物出土状況	217
図Ⅳ-76	ⅢH-12平面	162	図Ⅳ-116	ⅢH-15覆土下位 遺物出土状況・平面	218
図Ⅳ-77	ⅢH-12断面	163	図Ⅳ-117	ⅢH-15断面	219
図Ⅳ-78	ⅢH-16	165	図Ⅳ-118	ⅢH-15HP断面	220
図Ⅳ-79	ⅢP-1・3	167	図Ⅳ-119	ⅢP-26・ 出土石槍またはナイフ	221
図Ⅳ-80	ⅢP-2	168	図Ⅳ-120	ⅢP-28・ⅢS-10	223
図Ⅳ-81	ⅢP-6・7・8	170	図Ⅳ-121	Ⅲ層遺構出土の土器 (19)	224
図Ⅳ-82	ⅢP-10・11	173	図Ⅳ-122	Ⅲ層遺構出土の土器 (20)	225
図Ⅳ-83	ⅢP-12平面・遺物出土状況	174	図Ⅳ-123	Ⅲ層遺構出土の土器 (21)	226
図Ⅳ-84	ⅢP-12断面	175	図Ⅳ-124	Ⅲ層遺構出土の石器 (12)	228
図Ⅳ-85	ⅢP-14	176	図Ⅳ-125	Ⅲ層遺構出土の石器 (13)	229
図Ⅳ-86	ⅢP-16	177	図Ⅳ-126	Ⅲ層遺構出土の石器 (14)	230
図Ⅳ-87	ⅢP-24	179	図Ⅳ-127	Ⅲ層遺構出土の石器 (15)	231
図Ⅳ-88	ⅢF-2・土器集中2	180	図Ⅳ-128	ⅢP-18	233
図Ⅳ-89	Ⅲ層遺構出土の土器 (7)	182	図Ⅳ-129	ⅢP-19・21	234
図Ⅳ-90	Ⅲ層遺構出土の土器 (8)	184	図Ⅳ-130	ⅢS-3・6・11	236
図Ⅳ-91	Ⅲ層遺構出土の土器 (9)	185			
図Ⅳ-92	Ⅲ層遺構出土の土器 (10)	186			
図Ⅳ-93	Ⅲ層遺構出土の土器 (11)	187			

図Ⅳ-131	Ⅲ F-1・3・5	237	図Ⅳ-167	Ⅲ層遺構出土の石器 (21)	284
図Ⅳ-132	Ⅲ F-4・6・15、Ⅲ F C-1	238	図Ⅳ-168	Ⅲ層遺構出土の石器 (22)	285
図Ⅳ-133	Ⅲ F-7・8・9	240	図Ⅳ-169	Ⅲ層遺構出土の石器 (23)	286
図Ⅳ-134	Ⅲ F-10・11・14	242	図Ⅳ-170	Ⅲ層遺構出土の石器 (24)	287
図Ⅳ-135	Ⅲ F-12・13	243	図Ⅳ-171	Ⅲ層遺構出土の土器 (27)	288
図Ⅳ-136	Ⅲ層遺構出土の石器 (16)	244	図Ⅳ-172	Ⅲ層遺構出土の土器 (28)・ 石器 (25)	289
図Ⅳ-137	Ⅲ H-4 遺物出土状況	247	図Ⅳ-173	Ⅲ層遺構出土の石器 (26)	290
図Ⅳ-138	Ⅲ H-4 平面	248	図Ⅳ-174	Ⅲ層遺構出土の石器 (27)	291
図Ⅳ-139	Ⅲ H-4 断面	249	図Ⅳ-175	Ⅲ層包含層出土の土器 (1)	294
図Ⅳ-140	Ⅲ H-4 掘り上げ土範囲	250	図Ⅳ-176	Ⅲ層包含層出土の土器 (2)	295
図Ⅳ-141	Ⅲ H-4 掘り上げ土断面	251	図Ⅳ-177	Ⅲ層包含層出土の土器 (3)	296
図Ⅳ-142	Ⅲ H-5 遺物出土状況	254	図Ⅳ-178	Ⅲ層包含層出土の土器 (4)	297
図Ⅳ-143	Ⅲ H-5 平面	255	図Ⅳ-179	Ⅲ層包含層出土の石器 (1)	299
図Ⅳ-144	Ⅲ H-5 断面	256	図Ⅳ-180	Ⅲ層包含層出土の石器 (2)	300
図Ⅳ-145	Ⅲ H-5 掘り上げ土範囲	257	図Ⅳ-181	Ⅲ層包含層出土の石器 (3)	301
図Ⅳ-146	Ⅲ H-5 掘り上げ土断面	258	図Ⅳ-182	Ⅲ層包含層出土の石器 (4)	302
図Ⅳ-147	Ⅲ H-2 床面・ 床面直上遺物出土状況	260	図Ⅳ-183	Ⅲ層包含層出土の石器 (5)	303
図Ⅳ-148	Ⅲ H-2 平面	261	図Ⅳ-184	Ⅲ層包含層出土の石器 (6)	304
図Ⅳ-149	Ⅲ H-2 断面	262	図Ⅳ-185	Ⅲ層包含層出土の石器 (7)	305
図Ⅳ-150	Ⅲ H-2 掘り上げ土範囲	263	図Ⅳ-186	Ⅲ層包含層出土の石器 (8)	306
図Ⅳ-151	Ⅲ H-2、2・3 間 掘り上げ土断面	264	図Ⅳ-187	Ⅲ層包含層出土の石器 (9)	307
図Ⅳ-152	Ⅲ H-3 遺物出土状況	266	図Ⅳ-188	Ⅲ層包含層出土の石器 (10)	308
図Ⅳ-153	Ⅲ H-3 平面	267	図Ⅳ-189	炭窯および関連遺構群	311
図Ⅳ-154	Ⅲ H-3 断面	268	図Ⅳ-190	I P-1~8・I S P 断面	312
図Ⅳ-155	Ⅲ H-3 掘り上げ土範囲	269	図Ⅳ-191	炭窯 1 平面	313
図Ⅳ-156	Ⅲ H-3、3・4 間 掘り上げ土断面	270	図Ⅳ-192	炭窯 1 断面	314
図Ⅳ-157	Ⅲ P-20・Ⅲ S-7	271	図Ⅳ-193	炭窯 2 平面、 炭化木片・礫出土状況	315
図Ⅳ-158	Ⅲ層遺構出土の土器 (22)	273	図Ⅳ-194	炭窯 2 断面	316
図Ⅳ-159	Ⅲ層遺構出土の土器 (23)	274	図Ⅳ-195	I P-9~12、I S P	317
図Ⅳ-160	Ⅲ層遺構出土の土器 (24)	276	図Ⅳ-196	建物跡 1	319
図Ⅳ-161	Ⅲ層遺構出土の土器 (25)	277	図Ⅳ-197	I P-100、 サイダー瓶・ビール瓶	322
図Ⅳ-162	Ⅲ層遺構出土の土器 (26)	278	V章 自然科学的分析		
図Ⅳ-163	Ⅲ層遺構出土の石器 (17)	280	図Ⅳ-1-1	暦年較正年代グラフ (1) (cal BC/AD 参考)	350
図Ⅳ-164	Ⅲ層遺構出土の石器 (18)	281	図Ⅳ-1-1	暦年較正年代グラフ (2) (cal BC/AD 参考)	351
図Ⅳ-165	Ⅲ層遺構出土の石器 (19)・ 鉄製品	282			
図Ⅳ-166	Ⅲ層遺構出土の石器 (20)	283			

図V-1-1 暦年較正年代グラフ (3) (cal BC/AD 参考) ……352	図V-2-1 黒曜石産地分布図 (東日本) 356
図V-1-1 暦年較正年代グラフ (4) (cal BC/AD 参考) ……353	図V-2-2 黒曜石産地推定判別図 (1) ……358
図V-1-1 暦年較正年代グラフ (5) (cal BC/AD 参考) ……354	図V-2-3 黒曜石産地推定判別図 (2) ……358
図V-1-2 暦年較正年代グラフ (1) (マルチプロット図、cal BP、 参考) ……354	図V-2-4 黒曜石産地推定判別図 (3) ……359
図V-1-2 暦年較正年代グラフ (2) (マルチプロット図、cal BP、 参考) ……354	図V-6-1 温根沼2 遺跡試料の酸化物- SiO ₂ 図 (重量%) ……379
図V-1-2 暦年較正年代グラフ (3) (マルチプロット図、cal BP、 参考) ……355	図V-6-2 下川町サンル4 遺跡試料の 酸化物-SiO ₂ 図 (重量%) ……380
図V-1-2 暦年較正年代グラフ (4) (マルチプロット図、cal BP、 参考) ……355	図V-7-1 No.1 の組織観察結果 ……387
	図V-7-2 調査資料に含有される Cu・Ni・Coの三成分比 ……388
	VI章 総括
	図VI-1 下田ノ沢式期の遺構 ……392
	図VI-2 下田ノ沢式土器 (1) ……393
	図VI-3 下田ノ沢式土器 (2) ……394
	図VI-4 下田ノ沢式に伴った石器 ……396

表目次

II章 遺跡の位置と環境

表II-1 周辺の遺跡一覧 ……16

III章 調査の方法

表III-1 基準点成果一覧 ……18
表III-2 遺構数一覧 ……37
表III-3 出土遺物点数一覧 (1) ……38
表III-4 出土遺物点数一覧 (2) ……39
表III-5 出土遺物点数一覧 (3) ……40
表III-6 出土遺物点数一覧 (4) ……41
表III-7 出土遺物点数一覧 (5) ……42
表III-8 出土遺物点数一覧 (6) ……43
表III-9 時期別遺構一覧 (1) ……54
表III-10 時期別遺構一覧 (2) ……55

表III-11 時期別遺構一覧 (3) ……56

IV章 遺構と遺物

表IV-1 遺構一覧 (1) ……323
表IV-2 遺構一覧 (2) ……324
表IV-3 遺構一覧 (3) ……325
表IV-4 遺構一覧 (4) ……326
表IV-5 遺構一覧 (5) ……327
表IV-6 I層遺構一覧 ……327
表IV-7 遺構出土土器重量一覧 ……328
表IV-8 包含層出土土器重量一覧 ……328
表IV-9 集石重量一覧 ……329
表IV-10 掲載復元土器一覧 (1) ……329
表IV-11 掲載復元土器一覧 (2) ……330

表Ⅳ-12	掲載復元土器一覧(3)	331
表Ⅳ-13	遺構出土掲載拓影土器一覧(1)	331
表Ⅳ-14	遺構出土掲載拓影土器一覧(2)	332
表Ⅳ-15	遺構出土掲載拓影土器一覧(3)	333
表Ⅳ-16	遺構出土掲載石器一覧(1)	333
表Ⅳ-17	遺構出土掲載石器一覧(2)	334
表Ⅳ-18	遺構出土掲載石器等一覧(3)	335
表Ⅳ-19	遺構出土掲載石器一覧(4)	336
表Ⅳ-20	包含層出土拓影土器一覧(1)	336
表Ⅳ-21	包含層出土拓影土器一覧(2)	337
表Ⅳ-22	包含層(V層)出土掲載 石器一覧	337
表Ⅳ-23	包含層(Ⅲ層・I層ほか)出土掲載 石器一覧(1)	338
表Ⅳ-24	包含層(Ⅲ層・I層ほか)出土掲載 石器一覧(2)	339

V章 自然科学的分析

表V-1-1	放射性炭素年代測定 結果($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)	345
表V-1-2	放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、 較正年代 cal BP)(1)	346
表V-1-2	放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、 較正年代 cal BP)(2)	347
表V-1-3	放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、 較正年代 cal BC/AD)(1)	347
表V-1-3	放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、 較正年代 cal BC/AD)(2)	348
表V-1-3	放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、 較正年代 cal BC/AD)(3)	349
表V-2-1	黒曜石製遺物分析対象一覧	356
表V-2-2	東日本黒曜石製産地の判別群	357
表V-2-3	測定値および産地推定結果	359
表V-2-4	器種別の産地	359
表V-3-1	根室市温根沼2遺跡に おける樹種同定結果	364
表V-4-1	炭化種実同定結果一覧	370
表V-5-1	根室市温根沼2遺跡 動物遺体同定一覧	372
表V-6-1	分析試料一覧	374
表V-6-2	肉眼鑑定結果	374
表V-6-3	各元素の測定条件(例)	375
表V-6-4	温根沼2遺跡、珪質頁岩 ・珪化岩分析結果	378
表V-7-1	出土鉄器の分析結果	385
表VI-1	トビニタイ期の集石遺構	399

写真図版目次

口絵 1

- 1 調査区全景（東から）
- 2 トビニタイ式土器を伴う竪穴住居跡調査状況
（ⅢH-5・南東から）

口絵 2

- 1 擦文文化期竪穴住居跡調査状況
（ⅢH-2・北から）
- 2 続縄文時代竪穴住居跡炭化材出土状況
（ⅢH-1・南西から）

口絵 3

- 1 続縄文時代竪穴住居跡
（ⅢH-12・南西から）
- 2 縄文時代後期竪穴住居跡
（ⅢH-7・西から）

口絵 4

- 1 下田ノ沢式土器（集合写真）
- 2 下田ノ沢式土器（突起）

本文図版

Ⅱ章 遺跡の位置と環境

図版Ⅱ-1 遺跡周辺の採取砂……………9

Ⅲ章 調査の方法

図版Ⅲ-1 エゾノシシウドの茎と
円形刺突文……………35

Ⅳ章 自然科学的分析

図版Ⅴ-3-1 温根沼2遺跡の木材Ⅰ ……365

図版Ⅴ-3-2 温根沼2遺跡の木材Ⅱ ……366

図版Ⅴ-3-3 温根沼2遺跡の木材Ⅲ ……367

図版Ⅴ-3-4 温根沼2遺跡の木材Ⅳ ……368

図版Ⅴ-4-1 種実遺体 ……370

図版Ⅴ-5-1 温根沼2遺跡出土
動物遺体 ……373

図版Ⅴ-6-1 (1) 試料の写真と
分析ポイント ……376

図版Ⅴ-6-1 (2) 試料の写真と
分析ポイント (続) ……377

図版 1

- 1 遺跡遠景（西から）
- 2 調査状況（西から）
- 3 擦文文化期竪穴住居跡群検出（東から）

図版 2

- 1 VH-1上のMaテフラ堆積状況（西から）
- 2 VH-1上層調査状況（南東から）
- 3 VH-1東西断面（南東から）
- 4 VH-1南北断面（西から）
- 5 VH-1西側掘上土（南から）
- 6 VH-1礫出土状況（西から）

図版 3

- 1 VH-1完掘（南から）
- 2 VH-1HP-1完掘（南から）
- 3 VH-2検出（南東から）
- 4 VH-2遺物出土状況（南西から）
- 5 VH-2・ⅢP-23完掘（南東から）

図版 4

- 1 VH-3検出（北西から）
- 2 VH-3HF-1・炭化材検出
（東から）
- 3 VH-3東西断面（南から）
- 4 VH-3全景（東から）

図版 5

- 1 VP-1断面（西から）
- 2 VP-1完掘（北から）
- 3 VP-2断面（南西から）
- 4 VP-2完掘（南西から）
- 5 VP-3断面・完掘（北から）
- 6 VP-1～3掘り上げ土検出（北から）
- 7 VP-4完掘（南から）
- 8 VP-5完掘（北西から）

図版 6

- 1 VP-6完掘（西から）
- 2 VP-7断面（北から）
- 3 VP-8断面（南から）

- 4 VP-8 南側遺物出土状況（南から）
- 5 VP-8 北側遺物出土状況（西から）
- 6 VP-8 完掘（西から）
- 7 VP-9 土器出土状況（西から）
- 8 VP-9 完掘（南から）

図版7

- 1 VP-10 礫出土状況（南から）
- 2 VP-10 完掘（西から）
- 3 VP-11 断面（西から）
- 4 VP-11 完掘（南から）
- 5 VP-12 断面（南東から）
- 6 VP-12 完掘（南から）
- 7 VP-13 断面（東から）
- 8 VP-13 完掘（北東から）

図版8

- 1 VP-14 断面（南から）
- 2 VP-14 完掘（南から）
- 3 VP-15 遺物出土状況（東から）
- 4 VP-15 断面（北西から）
- 5 VP-16 断面（北東から）
- 6 VP-16 遺物出土状況（東から）
- 7 VP-17 断面（東から）
- 8 VP-17 完掘（南から）

図版9

- 1 VP-18 断面（西から）
- 2 VP-18 全景（北西から）
- 3 VP-19 遺物出土状況（東から）
- 4 VF-1 断面（南から）
- 5 VF-2 断面（南東から）
- 6 VF-3 断面（南西から）
- 7 VS-1 検出（北東から）
- 8 土器集中1 検出（西から）

図版10

- 1 IIIH-13 東西断面（南西から）
- 2 IIIH-13HP-15（南西から）
- 3 IIIH-13HF-1 断面（東から）
- 4 IIIH-13HP-10 断面（南から）
- 5 IIIH-13HP-13 断面（南から）
- 6 IIIH-13 完掘（東から）
- 7 IIIS-9 検出（南東から）

- 8 IIIS-9 土器出土状況（北から）

図版11

- 1 IIIH-7 西側断面（南から）
- 2 IIIH-7 東側断面（南から）
- 3 IIIH-7 南北断面（東から）
- 4 IIIH-7 周縁部遺物出土状況（東から）
- 5 IIIH-7 床面遺物出土状況（南東から）
- 6 IIIH-7 床面付近調査状況（西から）
- 7 壁際炭化材検出（南から）

図版12

- 1 IIIH-7HF-1 焼成面（西から）
- 2 IIIH-7HF-2 断面（南から）
- 3 IIIH-7HP-1 完掘（南東から）
- 4 IIIH-7HP-2 全景（東から）
- 5 IIIH-7HP-3 全景（北西から）
- 6 IIIH-7HP-11・12 断面（南から）
- 7 IIIH-7 出入口部付近（西から）
- 8 IIIH-7 完掘（東から）

図版13

- 1 IIIH-8 東西断面（北から）
- 2 IIIH-8 南北断面（西から）
- 3 IIIH-8 上位遺物出土状況（南東から）
- 4 同 拡大（南から）
- 5 IIIH-8 土器出土状況（東から）
- 6 IIIH-8 完掘（南から）

図版14

- 1 III P-9 検出・石皿出土状況（南から）
- 2 III P-9 断面（東から）
- 3 III P-13 東西断面（南西から）
- 4 III P-13 南北断面（南西から）
- 5 III P-13 遺物出土状況（南西から）
- 6 III P-13 完掘（東から）
- 7 III P-15 断面（東から）
- 8 III P-15 完掘（東から）

図版15

- 1 III P-17 掘上土検出（南東から）
- 2 III P-17 断面・遺物出土状況（南西から）
- 3 III P-17PF-1・2 断面（東から）
- 4 III P-17 完掘（西から）
- 5 III P-25 東西断面（南から）

- 6 ⅢP-25遺物出土状況（南東から）
- 7 ⅢP-27断面（南西から）
- 8 ⅢP-27完掘（東から）

図版16

- 1 ⅢS-1 検出（北東から）
- 2 ⅢS-1 断面（北東から）
- 3 ⅢS-2 検出（南から）
- 4 ⅢS-2 土器出土状況（西から）
- 5 ⅢS-4 検出（西から）
- 6 ⅢS-4 断面（南東から）
- 7 ⅢS-5 検出（北西から）
- 8 ⅢS-8 検出（北から）

図版17

- 1 ⅢH-1 東西断面（南から）
- 2 ⅢH-1 南北断面（北東から）
- 3 ⅢH-1 炭化材出土状況（東から）
- 4 ⅢH-1 炭化材取り上げ作業（西から）
- 5 ⅢH-1 炭化柱根検出（南から）
- 6 ⅢH-1 ヒグマ焼骨出土状況（南から）

図版18

- 1 ⅢH-1 小型土器出土状況（南東から）
- 2 ⅢH-1 HF-1 断面（南から）
- 3 ⅢH-1 HP-3 断面（南から）
- 4 ⅢH-1 HP-44断面（南から）
- 5 ⅢH-1 HP-70断面（東から）
- 6 ⅢH-1 完掘（西から）

図版19

- 1 ⅢH-6 東西断面（南から）
- 2 ⅢH-6 南北断面（東から）
- 3 ⅢH-6 土器出土状況（西から）
- 4 ⅢH-6 小型土器出土状況（西から）
- 5 ⅢH-6 HF-1 断面（東から）
- 6 ⅢH-6 HP-1 断面（南から）
- 7 ⅢH-6 完掘（東から）

図版20

- 1 ⅢH-10土器出土状況（西から）
- 2 ⅢH-10土器（南西から）
- 3 ⅢH-10東西断面（南から）
- 4 ⅢH-10南北断面（東から）
- 5 ⅢH-10HF-1 検出（南西から）

- 6 ⅢH-10完掘（北から）
- 7 ⅢH-10HP-11断面（西から）
- 8 ⅢH-10HP-18断面（南から）

図版21

- 1 ⅢH-11検出（北から）
- 2 ⅢH-11・ⅢF-16断面（南西から）
- 3 ⅢH-11HF-1、HP-9 断面（南東から）
- 4 炭化材出土状況（南西から）
- 5 ⅢH-11完掘（南東から）
- 6 ⅢH-11HP-2 断面（南西から）

図版22

- 1 ⅢH-12HF-1 断面（南西から）
- 2 ⅢH-12HP-11断面（南から）
- 3 ⅢH-12東西断面（南から）
- 4 ⅢH-12南北断面（西から）
- 5 ⅢH-12土器出土（北西から）
- 6 ⅢH-12土器出土（南西から）
- 7 ⅢH-12完掘（東から）
- 8 ⅢH-12HP-2 断面（南から）

図版23

- 1 ⅢH-16断面（南東から）
- 2 ⅢH-16HF-1、HP-2（南から）
- 3 ⅢH-16坑底噴砂検出（南から）
- 4 ⅢH-16完掘（南西から）
- 5 ⅢP-1 断面（南から）
- 6 ⅢP-1 完掘（南から）
- 7 ⅢP-2 断面（南から）
- 8 ⅢP-2PF-1 断面（南から）

図版24

- 1 ⅢP-2SP-1 断面（西から）
- 2 ⅢP-2 完掘（南から）
- 3 ⅢP-3SP-1 断面（南から）
- 4 ⅢP-3 完掘（南から）
- 5 ⅢP-6・7 断面（南から）
- 6 ⅢP-6 完掘（南から）
- 7 ⅢP-7 完掘（南から）
- 8 ⅢP-8 断面（南西から）

図版25

- 1 ⅢP-10断面（西から）

- 2 III P-10完掘 (西から)
- 3 III P-11断面 (南東から)
- 4 III P-11土器出土状況 (北西から)
- 5 III P-12東西断面 (南から)
- 6 III P-12南北断面 (西から)
- 7 III P-12焼土断面 (西から)
- 8 III P-12完掘 (南西から)

図版26

- 1 III P-14断面 (北から)
- 2 III P-14坑底検出 (南東から)
- 3 III P-14石器出土状況 (南東から)
- 4 III P-14完掘 (南から)
- 5 III P-16覆土上層土器出土状況
(北から)
- 6 III P-16断面 (南東から)
- 7 III P-16全景 (北東から)
- 8 III P-24断面 (南西から)

図版27

- 1 III H-9 検出 (南東から)
- 2 III H-9 土器出土状況 (西から)
- 3 III H-9 上層礫群出土状況 (南西から)
- 4 III H-9 断面 (南西から)

図版28

- 1 III H-9 H S-1 検出 (南から)
- 2 III H-9 H S-2 検出 (東から)
- 3 III H-9 H S-3 検出 (東から)
- 4 III H-9 H S-4 検出 (南から)
- 5 III H-9 H F-1 断面 (西から)
- 6 III H-9 H F-4 断面 (西から)
- 7 III H-9 H C-1 検出 (南から)
- 8 III H-9 H C-3 検出 (南から)

図版29

- 1 III H-9・14東西断面 (南東から)
- 2 III H-9・14南北断面 (南西から)
- 3 III H-14遺物出土状況 (南西から)
- 4 III H-14土器出土状況 (南西から)
- 5 III H-14 H C-2 検出 (南西から)
- 6 III H-14 H F C-1 検出 (東から)

図版30

- 1 III H-14 H F-1 断面 (東から)

- 2 III H-14 H F-2 断面 (南から)
- 3 III H-14 H F-3 断面 (南西から)
- 4 III H-14 H F-5 断面 (北から)
- 5 III H-14 H P-1 断面 (東から)
- 6 III H-14 H P-14断面 (西から)
- 7 III H-14 H P-16断面 (東から)
- 8 III H-14完掘・III H-15検出 (北から)

図版31

- 1 III H-15東西断面 (南西から)
- 2 III H-15南北断面 (南東から)
- 3 III H-15遺物出土状況 (北から)
- 4 III H-15 H F-1 検出 (西から)
- 5 III H-15 H F-3 断面 (南西から)
- 6 III H-15 H F-2 全景 (北西から)
- 7 III H-15ベンガラ検出 (東から)

図版32

- 1 III H-15 H P-1 土器出土状況
(南東から)
- 2 III H-15 H P-1 全景 (西から)
- 3 III H-15 H P-2 断面 (南西から)
- 4 III H-15 H P-12・13断面 (南西から)
- 5 III H-15完掘 (北から)

図版33

- 1 III P-26断面 (南東から)
- 2 III P-26坑底ベンガラ・遺物出土状況
(東から)
- 3 III S-10検出 (南から)
- 4 III P-28完掘 (西から)
- 5 III P-18完掘 (南西から)
- 6 III P-19断面 (西から)
- 7 III P-21断面 (南西から)
- 8 III S-3 検出 (西から)

図版34

- 1 III S-6 検出 (北東から)
- 2 III S-11検出 (北東から)
- 3 III F-1 断面 (南から)
- 4 III F-3 断面 (南から)
- 5 III F-4 断面 (南西から)
- 6 III F-5 断面 (南から)
- 7 III F-6 断面 (南から)

8 Ⅲ F - 7 断面 (西から)

図版35

- 1 Ⅲ F - 8 断面 (南東から)
- 2 Ⅲ F - 9 検出 (北西から)
- 3 Ⅲ F - 10 検出 (南から)
- 4 Ⅲ F - 11 検出 (東から)
- 5 Ⅲ F - 12 断面 (西から)
- 6 Ⅲ F - 13 断面 (南から)
- 7 Ⅲ F - 14 断面 (南から)
- 8 Ⅲ F - 15・Ⅲ F C - 1 検出 (北西から)

図版36

- 1 Ⅲ H - 4 検出 (北西から)
- 2 Ⅲ H - 4 掘り上げ土断面 (南から)
- 3 Ⅲ H - 4 東西断面 (南から)
- 4 Ⅲ H - 4 南北断面 (西から)
- 5 Ⅲ H - 4 遺物出土状況 (北東から)
- 6 Ⅲ H - 4 床面遺物出土状況 (南東から)

図版37

- 1 Ⅲ H - 4 H F - 1 断面 (西から)
- 2 Ⅲ H - 4 H P - 1 遺物出土状況
(南東から)
- 3 Ⅲ H - 4 完掘 (北東から)
- 4 Ⅲ H - 4 H P - 3 断面 (南西から)
- 5 Ⅲ H - 4 H P - 16 完掘 (南から)
- 6 Ⅲ P - 20 全景 (西から)

図版38

- 1 Ⅲ H - 5 検出 (南西から)
- 2 Ⅲ H - 5 掘り上げ土断面 (南西から)
- 3 Ⅲ H - 5 南北断面 (西から)
- 4 Ⅲ H - 5 床面遺物出土状況 (北西から)
- 5 Ⅲ H - 5 遺物出土状況 (南西から)

図版39

- 1 Ⅲ H - 5 床面土器出土状況 (南西から)
- 2 Ⅲ H - 5 H S - 1 検出 (北から)
- 3 Ⅲ H - 5 H S - 2 検出 (北東から)
- 4 Ⅲ H - 5 H S - 3 検出 (南東から)
- 5 Ⅲ H - 5 H P - 4 断面 (南から)
- 6 Ⅲ H - 5 H P - 20 断面 (西から)
- 7 Ⅲ H - 5 H P - 22 断面 (南東から)
- 8 Ⅲ H - 5 壁際杭列断面 (西から)

9 Ⅲ H - 5 完掘 (南東から)

図版40

- 1 Ⅲ H - 2 検出 (南東から)
- 2 Ⅲ H - 2 掘り上げ土断面 (南から)
- 3 Ⅲ H - 2 東西断面 (南東から)
- 4 Ⅲ H - 2 南北断面 (南西から)
- 5 Ⅲ H - 2 遺物出土状況 (西から)
- 6 Ⅲ H - 2 H S - 1 出土状況 (東から)

図版41

- 1 Ⅲ H - 2 床面検出 (北西から)
- 2 Ⅲ H - 2 カマド 1 検出 (北西から)
- 3 Ⅲ H - 2 カマド 1 燃焼部検出 (北から)
- 4 Ⅲ H - 2 H F - 2 断面 (南東から)
- 5 Ⅲ H - 2 H P - 1 断面 (南西から)

図版42

- 1 Ⅲ H - 3 検出 (南東から)
- 2 Ⅲ H - 3 掘り上げ土検出 (東から)
- 3 Ⅲ H - 3 掘り上げ土断面 (南から)
- 4 Ⅲ H - 3 南北断面 (西から)
- 5 Ⅲ H - 3 東西断面 (南から)
- 6 Ⅲ H - 3 遺物出土状況 (西から)
- 7 Ⅲ H - 3 土器出土状況 (北西から)

図版43

- 1 Ⅲ H - 3 カマド 1 検出 (北西から)
- 2 Ⅲ H - 3 カマド 1 燃焼部検出 (北西から)
- 3 Ⅲ H - 3 カマド 2 長軸断面 (北から)
- 4 Ⅲ H - 3 カマド 2 燃焼部検出 (北から)
- 5 Ⅲ H - 3 床面検出 (西から)
- 6 Ⅲ H - 3 H F - 1 断面 (南から)
- 7 Ⅲ H - 3 H P - 8・9 断面 (西から)
- 8 Ⅲ S - 7 検出 (南東から)

図版44

- 1 炭窯関連遺構群検出 (東から)
- 2 炭窯関連遺構群調査状況 (南西から)
- 3 炭窯関連土坑群断面 (西から)
- 4 炭窯 1 断面 (西から)
- 5 炭窯 1 断面 (南東から)
- 6 炭窯 1 焚口検出 (南西から)
- 7 炭窯 1 全景 (南から)

図版45

- 1 炭窯2 検出 (南から)
- 2 炭窯2 断面 (南西から)
- 3 炭窯2 断面 (北西から)
- 4 炭窯2 炭化材出土状況 (南から)
- 5 炭窯2 焚口検出 (西から)
- 6 炭窯2 煙道断面 (東から)
- 7 炭窯2 完掘 (南から)

図版46

- 1 建物跡1 完掘 (南から)
- 2 I P-9 断面 (西から)
- 3 I S P-1 断面 (西から)
- 4 I S P-10杭 (西から)
- 5 炭窯関連遺構群完掘 (南から)

図版47

- 1 I P-100馬骨出土状況 (南から)
- 2 Ⅲ層赤色顔料検出 (南から)
- 3 Ⅲ層擦文土器出土状況 (北東から)
- 4 Ⅲ層石槍またはナイフ出土状況 (南西から)
- 5 V層縄文早期土器出土状況 (南東から)
- 6 噴砂断面 (西から)
- 7 地割れ痕・噴砂検出 (西から)

図版48

- 1 調査区南東壁土層断面 (西から)
- 2 調査区南西側土層断面 (南から)
- 3 調査区北西壁土層断面 (南東から)
- 4 調査終了時全景 (東から)

図版49 V層遺構出土の土器**図版50** V層遺構出土の石器 (1)**図版51** V層遺構出土の石器 (2)**図版52** V層包含層出土の土器**図版53** V層包含層出土の石器 (1)**図版54** V層包含層出土の石器 (2)**図版55** Ⅲ層遺構出土の土器 (1)**図版56** Ⅲ層遺構出土の土器 (2)**図版57** Ⅲ層遺構出土の土器 (3)**図版58** Ⅲ層遺構出土の土器 (4)**図版59** Ⅲ層遺構出土の土器 (5)**図版60** Ⅲ層遺構出土の土器 (6)**図版61** Ⅲ層遺構出土の土器 (7)**図版62** Ⅲ層遺構出土の土器 (8)**図版63** Ⅲ層遺構出土の土器 (9)**図版64** Ⅲ層遺構出土の土器 (10)**図版65** Ⅲ層遺構出土の土器 (11)**図版66** Ⅲ層遺構出土の土器 (12)**図版67** Ⅲ層遺構出土の土器 (13)**図版68** Ⅲ層遺構出土の土器 (14)**図版69** Ⅲ層遺構出土の土器 (15)**図版70** Ⅲ層遺構出土の土器 (16)**図版71** Ⅲ層遺構出土の土器 (17)**図版72** Ⅲ層遺構出土の土器 (18)**図版73** Ⅲ層遺構出土の土器 (19)**図版74** Ⅲ層遺構出土の土器 (20)**図版75** Ⅲ層遺構出土の石器 (1)**図版76** Ⅲ層遺構出土の石器 (2)**図版77** Ⅲ層遺構出土の石器 (3)**図版78** Ⅲ層遺構出土の石器 (4)**図版79** Ⅲ層遺構出土の石器 (5)**図版80** Ⅲ層遺構出土の石器 (6)**図版81** Ⅲ層遺構出土の石器 (7)**図版82** Ⅲ層遺構出土の石器 (8)**図版83** Ⅲ層遺構出土の石器 (9)・鉄製品**図版84** Ⅲ層遺構出土の石器 (10)**図版85** Ⅲ層遺構出土の石器 (11)**図版86** Ⅲ層遺構出土の石器 (12)**図版87** Ⅲ層包含層出土の土器 (1)**図版88** Ⅲ層包含層出土の土器 (2)**図版89** Ⅲ層包含層出土の土器 (3)**図版90** Ⅲ層包含層出土の石器 (1)**図版91** Ⅲ層包含層出土の石器 (2)**図版92** Ⅲ層包含層出土の石器 (3)**図版93** Ⅲ層包含層出土の石器 (4)**図版94** 陶磁器片、ビール瓶、サイダー瓶

I 章 緒 言

1 調査要項

事業名：一般国道44号根室市温根沼改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局釧路開発建設部

受託者：公益財団法人北海道埋蔵文化財センター

遺跡名：温根沼^{おんねとう}2遺跡（北海道教育委員会登録番号N-01-307）

所在地：根室市温根沼271番2外

調査面積：4,040m²

受託期間：平成29年4月1日～平成31年3月30日

調査期間：平成29年5月11日～平成29年10月27日

2 調査体制

平成29年度

理事長 越田 賢一郎

副理事長 中田 仁

事務局長 山田 寿雄

第1調査部長 長沼 孝（常務理事兼務） 第2調査部長 鈴木 信

第2調査部第2調査課 課長 笠原 興（発掘担当者）

〃 主査 影浦 覚（発掘担当者）

〃 主査 阿部明義（発掘担当者）

〃 主査 広田良成（発掘担当者）

平成30年度

理事長 越田 賢一郎

副理事長 中田 仁

事務局長 山田 寿雄

第1調査部長 長沼 孝（常務理事兼務） 第2調査部長 鈴木 信

第2調査部第2調査課 課長 笠原 興

〃 主査 影浦 覚

〃 主査 広田良成

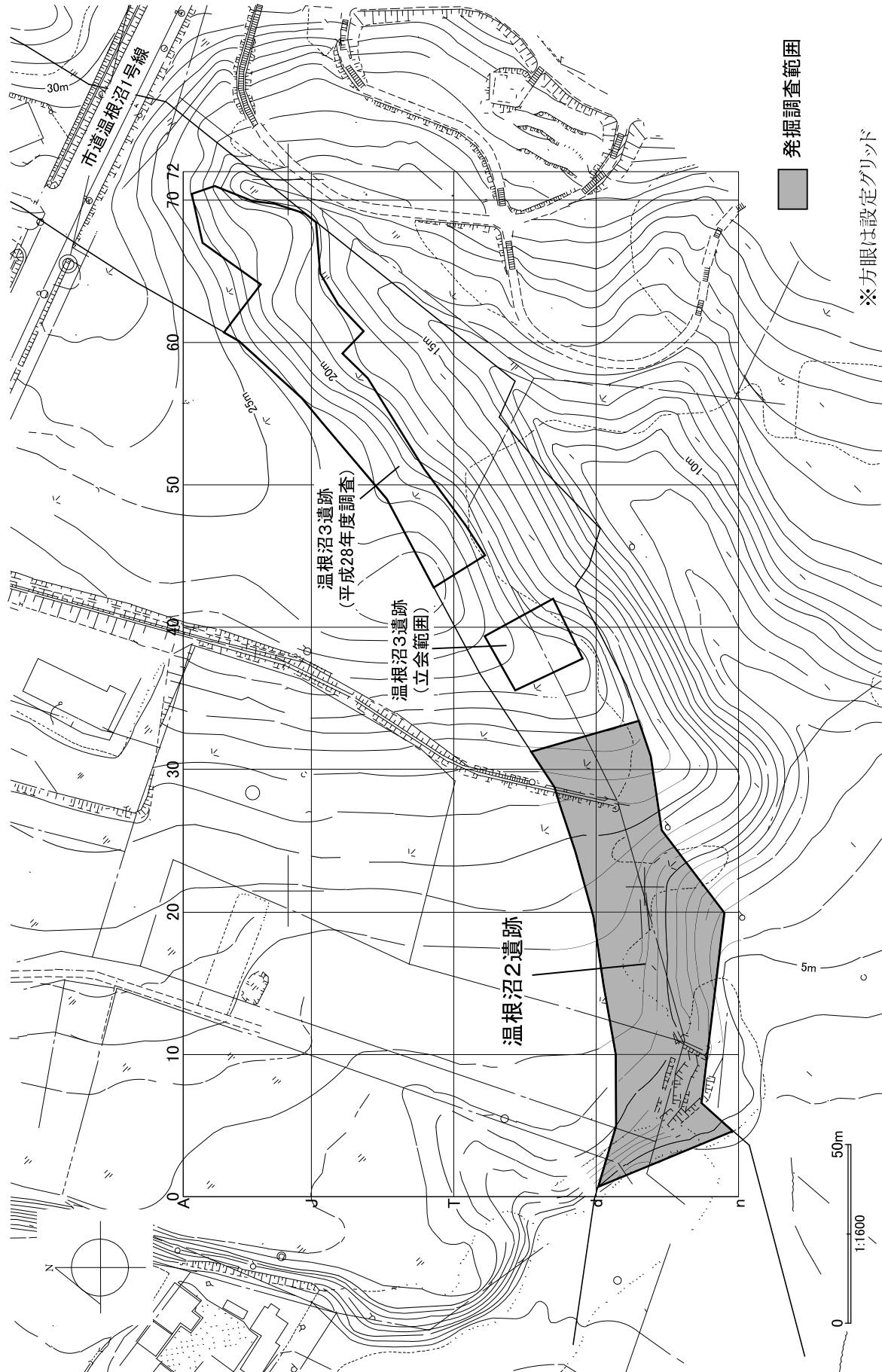
3 調査にいたる経緯

一般国道44号根室道路は、釧路市を起点とし、根室市へ至る総延長124kmの一般国道44号のバイパスとして、根室市温根沼から穂香^{ほにおい}を結ぶ延長7.1kmの区間に計画された自動車専用道路である。平成11年度に事業化され、平成17年度に着工、平成31年度中の全線開通が予定されている。

工事計画の具体化に伴い、平成10年10月19日に埋蔵文化財保護のための事前協議書が北海道開発局



図 I - 1 根室道路の用地と調査区



※方眼は設定グリッド

図 I - 2 温根沼2・3遺跡位置図

釧路開発建設部（以下、釧路開建）から北海道教育委員会（以下、道教委）あてに提出された。平成12年9月12日、根室市教育委員会（以下、市教委）の協力を得て、道教委による埋蔵文化財包蔵地の所在調査が実施され、同年11月21日、釧路開建あてに周知の埋蔵文化財包蔵地である穂香^{ほにおい} 堅穴群の発掘調査が必要であること、新規発見の幌茂尻^{ほろもしり} 1遺跡の平坦面については発掘調査とし、隣接する南側斜面については試掘調査が必要であること、他4か所についても試掘調査が必要であるとの回答がなされた。その後、関係者による協議や試掘調査を経て、（財）北海道埋蔵文化財センターが平成13～15年度に穂香堅穴群、平成16年度に穂香^{ほにおい} 川右岸遺跡の発掘調査を実施した（北埋調報170・184・198・212）。

平成20年8月8日には、温根沼付近の路線変更に伴い、埋蔵文化財保護のための事前協議書が釧路開建から道教委あてに提出された。同年10月23日、市教委の協力を得て、道教委による埋蔵文化財包蔵地の所在調査が実施され、同年12月17日、釧路開建あてに変更区域での試掘調査が必要であるとの回答がなされた。試掘調査実施の条件が整った平成27年12月16・17日、道教委の試掘調査によって、変更区域に温根沼2遺跡、温根沼3遺跡が確認され、同月24日、釧路開建あてに両遺跡の発掘調査（温根沼3遺跡の一部は工事立会）が必要であるとの回答がなされた（図I-1・2）。

その後、平成28年度に温根沼3遺跡、平成29年度に温根沼2遺跡の発掘調査を（公財）北海道埋蔵文化財センター（以下、センター）が実施することになった。温根沼2遺跡の発掘作業は平成29年5月11日～10月27日、整理作業は同年11月～平成31年3月にかけて行い、平成30年度末に調査報告書を刊行することとなった。（影浦）

4 調査の経過

(1) 発掘作業

平成29年2月9日付で、温根沼2遺跡について、工事計画区域にかかる4,040㎡の発掘を行うよう道教委から調査指示（教文博第2957号）を受け、それに基づいた調査計画を立てた。

調査区の西側と南側の地形が急傾斜であることや、排土場を確保する事情等を考慮し、調査区を大

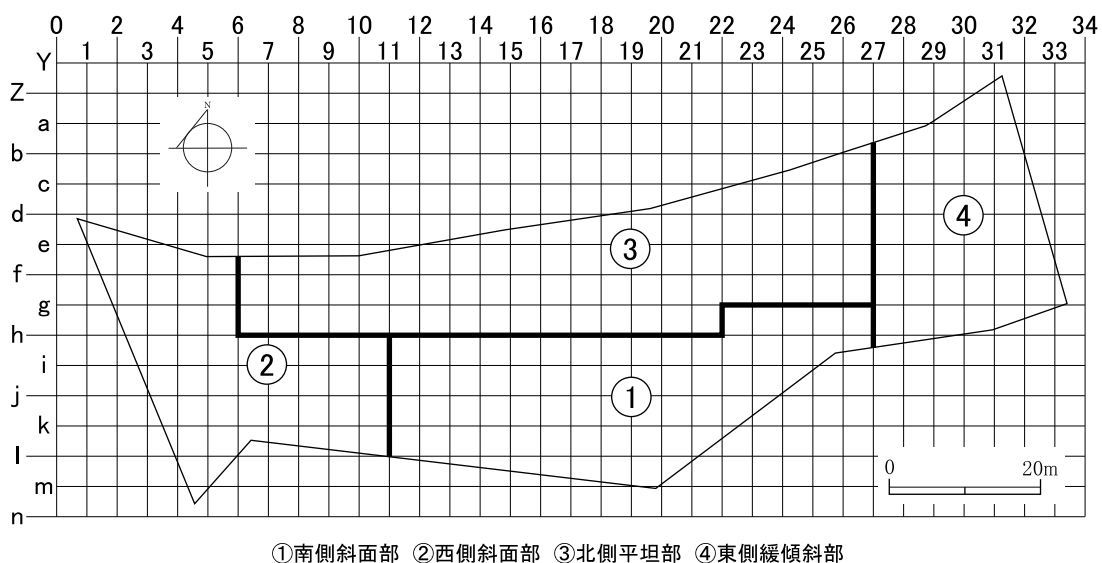


図 I - 3 重機による表土（および一部Ⅳ層）除去範囲区分図

きく三つに分けて調査を行うこととした。すなわち①南側斜面部と、②西側斜面部と、③北側平坦部に分け、それぞれに表土と、Ⅲ層調査後のⅣ層（摩周テフラ）を、重機主体で除去する計画である。重機等による無遺物層の掘削作業と方眼杭の打設作業は都合6回行った。その後、Ⅳ層の堆積状況の違いなど調査状況の実態に応じて、若干の計画修正を行っている。具体的には、北側の台地上平坦部についておおむね27ラインを境にそれ以東の④東側緩斜面部を別に重機で表土除去し、代わりに摩周テフラの堆積が薄いエリアや、Ⅲ層の遺構が密集している北側の台地上に関しては、Ⅳ層を手掘り掘削するなどの変更である（図I-3）。以下、発掘作業を時系列で述べる。

最初の重機による表土の掘削は、南側の急斜面部①を対象に平成29年4月25～28日に行った。斜面部には径の太い切り株が何か所も点在しており、表土だけでなくそれらの切り株の抜根も必要であった。しかし、斜面下の低地には近接して無名沢が流れており、それが数100mで海に注ぐことから、土砂流出による汚染を防護する必要があった。そこで、重機作業に着手する前に土砂流出防止策として、表土除去作業を委託した伊藤建設株式会社に沢際部分の土嚢積みを依頼した。この時点では、もっとも沢が調査区に近接している部分にのみ重点的に施した暫定的な緊急措置であったが、本調査開始後も発掘作業員に引き継ぎ、最終的には沢沿いに隙間なく土嚢堤防を連ねた。5袋6袋を高積みし、崩れないよう断面台形状にしたが、これは、斜面部の排土を上を持っていくことが困難であったため、斜面下と沢の間の平場を借地して排土場とした事情にもよる。調査終了前に借地の排土はすべて重機で除去、積み上げた土嚢も借地にかかる部分はすべて人力で解体、現況回復した。

重機で南側斜面部①の表土を除去した後は引き続きその範囲内のⅢ層上面に方眼杭を打設し、当初計画通り5月11日から当該範囲のⅢ層調査に着手した。

5月24日、25日に西側斜面部②の表土除去を行い、5月30日には西側斜面部のⅢ層調査にも入った。西側斜面部はⅣ層の堆積が薄かったため、人力でこれを除去した。引き続き同地区のⅤ層の調査を行い、多くの遺物が出土した斜面上のVP-8を除き、6月いっぱいではほぼ調査を終了した。

6月7日～14日にかけて南側斜面部①のⅣ層を重機で除去し、西側斜面部②のⅤ層調査と並行する形で6月後半に南側斜面部のⅤ層調査も行った。

西側、南側とも斜面部は遺構・遺物が希薄であったため、比較的スムーズに作業は進展した。そこで6月29日・30日に北側平坦部③の表土除去を行った。当初計画では東側の緩斜面部④も併せて表土除去する計画であったが、調査区内まで車を入れて測量機材等を搬出入することが可能であったことから、進入路から続く27ライン以東の範囲は秋まで表土を残すことにした。

北側の平坦部③は、擦文文化期の竪穴住居跡を中心に住居跡が想定されるくぼみが現地表面に数か所あり、地形的にも遺構の検出がもっとも予想されたエリアであった。表土除去後に清掃作業を行い、全体を写真撮影後、竪穴がくぼみとして残っている住居跡から順次調査に着手した。並行してグリッド単位での包含層調査にも着手した。基本的に包含層調査は南側から北側へ向かう形で進めていった。南側斜面部①のⅢ層を調査した際に、遺構の半分が表土を除去していない北側台地部③に及んでいるものが境界線のhライン上に複数あったため、その続きを優先して行う必要性があったことと、調査が終了した南側斜面部①も排土捨て場にしたためである。

北側平坦部③については、南側の斜面部においても西側の斜面部においても遺物の出土が非常に希薄であったことから、当初の見込みほどには遺構が存在しないのではないかと予想されもした。しかし、包含層調査を進めるにつれて、竪穴住居跡、土坑を中心に次々と新規遺構が検出され、それに連動するようにして包含層出土の遺物も増加した。これらの遺構にはおびただしい量の炭化材を検出した焼失住居跡（ⅢH-1）や、炉や焼土を中心に焼骨等動物遺存体を検出したものがあつた。状況に応

じて、図化、測量、写真撮影を行い、土ごと採取して、水洗選別作業を行っている。また、擦文文化期の住居跡ではカマド跡から土壌を採取し、炭化種実の採取を目的としてフローテーションを行った。

8月に入ると遺構調査範囲以外のⅢ層が大半掘り下がってきて、着手している遺構の調査が終わらないと掘削に人を入れられない状況になった。このためお盆休み後の8月17日に急遽、27ライン以東の東側の地区④についても重機による表土除去を行った。8月下旬以降は、北側の平坦部分③の遺構調査と、東側の緩斜面部④における包含層調査を併行する形で作業を展開した。

9月以降は、台風を初め、雨の日が多くなった。9月18日月曜日は敬老の日で祝日であったが、台風18号の直撃で、道東方面へ向かう鉄道・バスが全て運休になり、この日根室入りして前泊する予定であった調査員2名が現地入りできない事態となった。この影響で翌19日は作業中止となっている。

10月も依然として雨の日は多い傾向にあり、新規の遺構が検出し続けた。Ⅲ層の調査が終了したところと遺構調査を継続しているところとがモザイク状になっていたことから、Ⅳ層を人力で除去し、Ⅴ層の調査も併行して進めた。調査の進捗状況が明らかに計画よりも遅れていたことから、10月21日・22日の土曜・日曜を平日同様の作業日とした。さらに26日であった雇用満了日も27日まで延長することで遅延の回復をはかり、現地作業を終えた。

最終週は遺構調査に関わる作業員以外は現場作業を引き上げ、撤収に向けた発掘道具・器材の水洗・整備等の作業を進め、併せて遺物水洗と一次整理の残りを行った。

調査範囲の埋め戻し作業は、現地調査の翌週に行われた。11月1日・2日の日程で調査員1名が現地へ赴き、埋め戻しの状況を確認している。

(2) 整理作業

現地での整理作業は、主に雨天等で発掘作業が困難な日を利用しながら行った。作業内容は遺構図の点検、現像（外部委託）したフィルムの整理、水洗フルイ選別、遺物の水洗・乾燥・分類・重量計測・遺物カードの作成・台帳記載等である。台帳記載は、遺構出土のものは遺構ごと、発掘区出土のものはグリッドごとに分けて行った。出土位置、層位、型式ないし器種、点数、重量、出土年月日等を記録している。礫・被熱礫は、重量などを計測し、台帳記載後、一部の有意性のあるものを除き、現地で廃棄した。

平成29年11月から平成31年3月にかけては、引き続き江別市内にあるセンターで二次整理作業を行った。主な作業内容は、遺物への注記、土器の接合・復元、石器等の接合、分析試料の選り出し、掲載遺物の実測・トレース・写真撮影、土器片の採拓と断面実測・トレース、集計、遺構図面調整、図版作成、収納等である。現地で作成した遺物台帳をパーソナル・コンピューターによりマイクロソフト・エクセルに入力し、注記作業を行ってから、接合ならびに復元作業に着手した。

なお、平成29年12月に年代測定試料を株式会社加速器分析研究所に、炭化樹種同定を株式会社古環境研究所に、鉄製品分析を岩手県文化振興事業団に、平成30年1月には珪化岩の岩石学的分析をアースサイエンス株式会社に発送し、平成30年3月下旬に分析結果を受け取っている。さらに平成30年5月には黒曜石産地同定と動物遺存体同定を株式会社パレオ・ラボに、炭化種実同定をパリオ・サーヴェイ株式会社に委託発送した。炭化種実同定の分析結果は平成30年8月に、黒曜石産地同定の分析結果は平成30年9月、動物遺存体同定は平成30年11月に受け取っている。

(影浦)

II 章 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と地形・地質

(1) 遺跡の位置 (図II-1、3・4)

遺跡が所在する根室市は北海道最東部にある。太平洋に突き出た根室半島の全域と、内陸部は半島付け根から30kmほど西の厚床地区^{あつとこ}まで及ぶ東西に細長い市域で、面積は506.25km² (北方領土である齒舞群島の約100km²を含む)である。東端は離島を除いた日本の最東端でもある納沙布岬^{のさつぷ}で、北西部は別海町^{べっかい}、南西部は浜中町^{はまなか}と接している。

根室市は根室振興局の所在地であり、道東地方の中核市である釧路市との距離は約120kmである。平成28(2016)年における人口は約27,000人。根室振興局の市町村では最も多いものの、近年は周辺の多くの市町村と同様、人口減少が続いている。

今回調査を行った温根沼2遺跡は、根室市街地から南西9kmの海岸段丘上に立地する。根室半島の付け根部分に大きく湾入している温根沼の北東部に位置する。

遺跡名でもある温根沼(おんねとう)は道東地域の沿岸部に多くみられる海跡湖のひとつで、約6,000年前の温暖化にともなう縄文海進によって形成された。その名称は「大きい・沼」を意味するアイヌ語の「オンネ・トー」に由来する。高度1.0m、最大水深6.7m、平均水深1.2m、湖面積5.51km²、周囲約15kmの浅い汽水湖で、根室市内では風蓮湖(面積59.01km²)に次ぐ大きな湖である。南側においてオンネベツ川から流入し、北側にある幅500mほどの湾口部を経て海に注ぐ。流出口の周辺は濘筋^{みおすじ}以外が浅瀬で、干潮時には沖合まで直線距離で1.5kmほども干潟が現れる。

今回の調査範囲は、海岸段丘面の縁辺から無名の沢付近の低地部にかかる部分である。調査区の西側と南側は無名沢に向かって20~30度ほどの傾斜地となっており、南西部の無名沢に接した低地部分が標高4m前後、北側から東側の台地上は標高10~18mである。段丘面上は西から東に向けて徐々に高くなる緩斜面をなしており、東側に隣接する温根沼3遺跡に近い調査区の東端部分が標高18m付近と最も高い。(影浦)

註 浅瀬の川や海の中で船が通れるようになっている水路状の深み。温根沼では、南のオンネベツ川からの濘筋が、湾口部まで蛇行しながら中心部を南北に貫いている。また、温根沼の漁港から沖合へ出る濘筋もある。

(2) 地形と地質

根室市内の地形は、半島内部では標高20~40mのなだらかな平坦面を形成している場所が多い。これらの平坦面は礫層が発達していることから段丘と捉えられる。大きくみると、半島中央部において東北東—西南西方向にのびるなだらかな脊梁状の高まりとしてみられる分水嶺的な高位段丘面と、そこから南北の海岸線に向けてそれぞれ傾斜する段丘面との高低2段に区分されるが、さらに細かくみると海拔10~15m、17~25m、30~40m、40~50mに分かれ、それらの境はそれぞれ極めてなだらかに起伏し転換する。段丘の境界がなだらかになっている理由は、地表面が激しい風食作用を受けている上、摩周テフラを主とする火山灰層で厚く覆われているためである。標高40~50mの面は根室市街から花咲、落石へ、西南から西方へと細長く続いており、温根沼の東部で膨らみ、太平洋側に向けて広がりを見せる。続く標高30~40mの面は、標高40~50mの面と同様の分布を示すものの半島の東方において狭く

なり、西南方向で広がっている。17~25m及び10~15mの低位段丘面は、風蓮湖方面で発達し、根室半島北岸一帯から納沙布岬に向けて海岸沿いに続いており、遺跡が多く立地する面にもなっている。太平洋側では桂木方面で認められるが、それ以西の海岸沿いにはみられない(松井・吉元 1987)。なお、根室半島のつけ根から厚床方面にかけての内陸部では、さらに高い標高60~80mの段丘も分布しているが、こうした高い段丘は根室半島内においてはみられない。

エリアごとに段丘の高低差はあるものの、半島全体を通して低位段丘が沿岸部までせり出しているため、海岸線は急崖^{きゅうがい}を形成しているところが多い。

根室半島を構成する台地部分、急崖面として地層が露頭している地質構成物は、上部白亜紀に属する根室層群を主体としており、この地層内に^{かんにゅう}嵌入する塩基性火成岩体(主に粗粒玄武岩)、それらを不整合に覆う第四紀堆積物からなる。

根室層群は、下位より上位へ向かって、ノッカマップ層・根室層・^{ちようぼし}長節層・^{おちいし}落石層・ユルリ層に分層され、全体N60°~80°E・15°~25°SEの走行・傾斜を示す単斜構造をとっている。うち、温根沼地域を含め、半島北岸部に露出しているものはノッカマップ層と根室層(主に下部)である(いずれとも粗粒玄武岩を嵌入する)。

ノッカマップ層は半島東部北岸のノッカマフ地区周辺に露頭する層で、凝灰質砂岩(礫岩)、集塊岩および砂岩と泥岩の互層からなる。集塊岩は、玄武岩質安山岩を岩塊として、その間を凝灰岩が埋めたものが多い。また、この地層には他の地層にはない特徴的なアルコース砂岩がわずかに含まれることが知られている。アルコース砂岩は多量の斜長石と少量の輝石、角閃石から構成される砂岩であるが、温根沼2遺跡で出土した砥石、特に有溝砥石にアルコース砂岩製のものが確認されている。

根室層は根室層群の中でもっとも厚い層で、その岩相は凝灰質の砂岩と泥岩の互層である。岩相の特徴から下部・中部・上部に分けられるが、砂岩・泥岩の互層中に凝灰岩質砂岩や凝灰岩、斜長石の斑晶が目立つ粗粒玄武岩をはさみこんだ下部層が、半島北岸部の主体層である。

遺跡が多く分布する半島の北岸部は標高約10~15mほどの段丘面が続く。海岸線は細かい凹凸に富むが、これは堆積岩層中に火成岩が嵌入している根室層の成り立ちに起因するもので、凸部は火成岩主体、凹部は堆積岩主体となっている。半島周辺の海上には岩礁・暗礁も多く点在して波に洗われながら隠れているが、これらの大部分も火成岩類で構成されたものである(長谷川・三谷 1959)。

上述したように根室半島の海岸部は河川等によって開析された河口部、あるいは汽水湖の湾口部を除いて急崖をなしているところが多いが、温根沼地区周辺で見ると温根沼湾口部の西側(左岸)である^{とうばい}東梅地区では舌状にせり出た段丘縁において崖が露出している。東側(右岸)は、砂州が約1km続いたのちに、温根沼簡易郵便局裏あたりを起点として急崖地形が東(根室市街方向)へ向けて連なりだす。砂岩・泥岩の互層を主体とする根室層の堆積状況がよく観察され、礫石器の素材や炉石としてしばしば見られた板状の泥岩は、崖下のところどころで崖錐状に堆積し、崖下の海岸においても広く散乱、被覆している状況が確認できた。

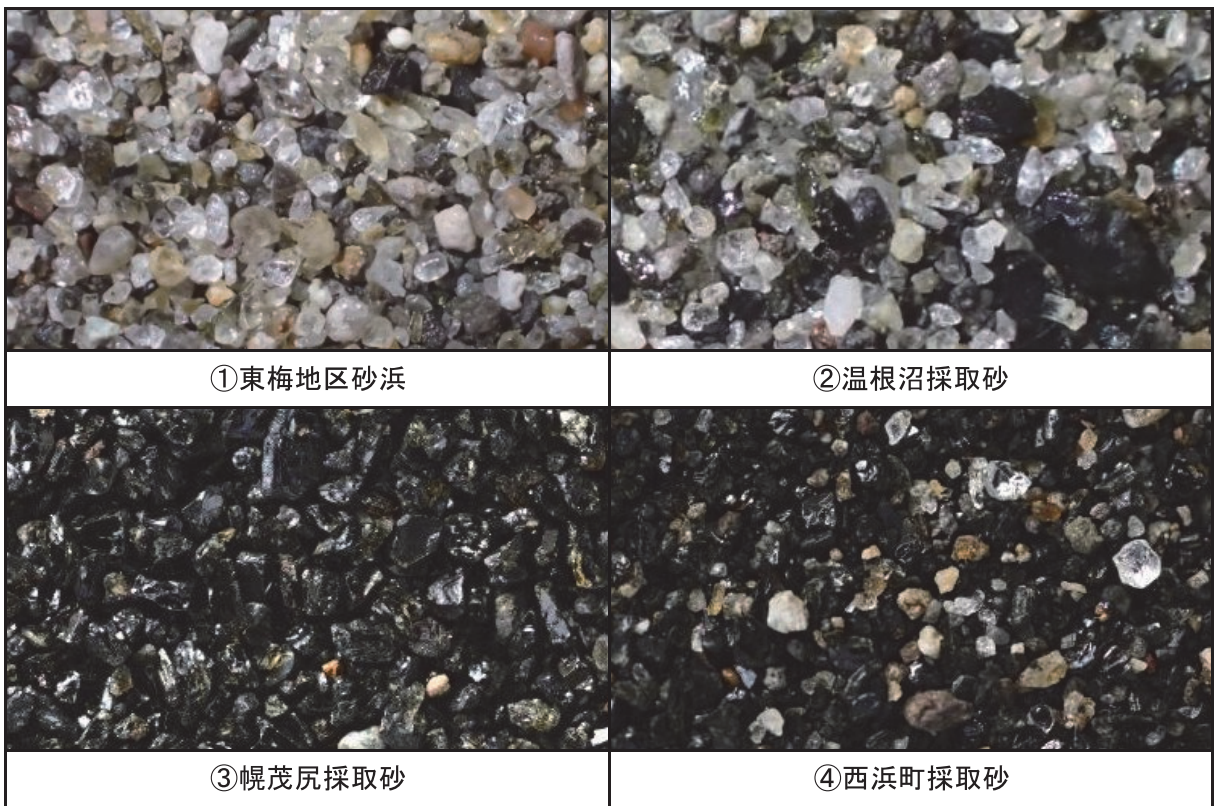
なお、温根沼の西に位置する東梅地区の崖下、温根沼地区、さらに東の^{ほろもしり}幌茂尻、^{ほにおい}穂香、西浜町等の崖下を踏査した際には、いずれの場所においても風が吹きつけるたびに、小礫が崩落していた。また、東梅地区では崖上の遺跡のものと考えられる黒曜石製のスクレイパーを崖下の浜で採取している。遺跡が形成された数千年単位の昔には、海岸線が現在よりもいくぶん沖寄りにあったのかもしれない。

根室半島北岸部は、全体に砂浜が少ない地域である。砂浜が形成されているところは、汽水湖等の湾口部周辺、海が湾入して入江状になっているところ、小河川や沢の河口付近である。海岸は、粗粒玄武岩を主とする磯・礫浜がほとんどで、部分的に形成されている砂浜(図Ⅱ-1)は薄い砂層が礫・



図Ⅱ－1 遺跡の周辺の砂・礫採取位置図

国土地理院発行の50000分の1地形図「根室南部」〔厚床〕（平成14年修正）を改変使用。



図版Ⅱ－1 遺跡周辺の採取砂

礫浜を覆っている。砂浜の砂は、風蓮湖周辺から温根沼の湾口部にかけては白から灰色の色調が目立つ（図版Ⅱ－1 上段①②）が、温根沼地区の崖下から東にかけて輝石の割合が徐々に増え出し、少なくとも实地踏査した西浜町周辺までは輝石を多量に含んだ黒い砂浜であった。特に幌茂尻地区、ゴミ焼却場裏の砂浜の砂はほとんどが輝石である（図版Ⅱ－1 下段③④）。根室半島内で出土している土器には輝石の砂粒を混和したものがしばしばみられるが、その有力な供給源と考えられる。

根室層群の上部は、段丘礫層、火山灰、ローム、および腐植土からなる第四紀層が堆積して、現地表面に至る。調査区の土層では、約40cmの層厚でMa-f~jと呼ばれる摩周起源の火山灰層がみられる。この火山灰は現在の摩周湖である摩周カルデラが形成された約7,600年前の最後の噴火に由来する噴出物と考えられている。（影浦）

2 自然環境

根室市の年平均気温は約7度。特に夏の気温が低いことで知られる。その成因は親潮（寒流）と黒潮（暖流）の衝突によって太平洋上に発生する濃霧が頻繁に半島部を広く覆うためである。たまたま調査中の2017年7月上旬には30度近くの日が数日続いたが、これは数年に1度あるかないかの非常に珍しい例であった。

遺跡周辺の植生は台地上の草地と斜面部の林地、斜面下に広がる無名沢周辺の低湿地からなる。調査区内では南側の斜面部と北側の台地上の境、肩部に沿って排根線^{註1}が堤状に連なっていたが、そこを境にして北側に草地の広がりがある。おそらく整理伐が行われて草地化したとみられる。

草地はアイヌミヤコザサ^{註2}（イネ科）が優勢で、スギナ（トクサ科）、ワラビ（コバノイシカグマ科）、ヤマドリゼンマイ（ゼンマイ科）、ナガバギシギシ（タデ科）、エゾオオヤマハコベ（ナデシコ科）、エゾエンゴサク（ケシ科）、ヤマブキシヨウマ（ユキノシタ科）、ナガボノシロワレモコウ（バラ科）、ホザキシモツケ（バラ科）、エゾイヌゴマ（シソ科）、エゾフウロ（フウロソウ科）、オオハナウド（セリ科）、エゾノシシウド（セリ科）、エゾヤマハギ（マメ科）、クサフジ（マメ科）、ヒロハクサフジ（マメ科）、センダイハギ（マメ科）、ノハナショウブ（アヤメ科）、ツリガネニンジン（キキョウ科）、ヤマハハコ（キク科）、セイヨウノコギリソウ（キク科）、オオヨモギ（キク科）、チシマアザミ（キク科）、エゾカンゾウ（ユリ科）、ユキザサ（ユリ科）、バイケイソウ（ユリ科）等がみられる。海に面した崖縁にはミズナラが何本か点在していたが、いずれも風衝作用を受けた偏形樹であった。

無名沢へ下る斜面部はミズナラ（ブナ科）、ダケカンバ（カバノキ科）、キハダ（ミカン科）等の林地であった。現地確認に赴いた2017年4月中旬にはすでに伐採されており、切り株が点在する状態であった。大部分は表土除去の際に重機で除去したが、中には径1mを超えるものも含まれていた。遺跡から見た周辺林地では、ミズナラ、ダケカンバ、キハダに加え、アカエゾマツ（マツ科）、トドマツ（マツ科）、カシワ（ブナ科）、カシワモドキ^{註3}（ブナ科）、ハルニレ（ニレ科）、オヒヨウ（ニレ科）、エゾニワトコ（スイカズラ科）、ヤマブドウ（ブドウ科）等が確認できた。そして、これらの林床部では、キツリフネ（ツリフネソウ科）、ツリバナ（ニシキギ科）、ハンゴンソウ（キク科）、ヨブスマソウ（キク科）、アキノキリンソウ（キク科）が見られた。

無名沢周辺の河畔林は、ケヤマハンノキ（カバノキ科）とオノエヤナギ等のヤナギ科植物が卓越する。その林床の低湿地はミズバショウ（サトイモ科）が非常に多く、調査開始後の5月上旬には一面に開花していた。他にヒメスイバ（タデ科）、ナガバギシギシ（タデ科）、ミゾソバ（タデ科）、ヒトリシズカ（センリョウ科）、オオバナノエンレイソウ（シュロソウ科）、マイヅルソウ（キジカクシ科）、ニリンソウ（キンポウゲ科）、エゾトリカブト（キンポウゲ科）、セリ（セリ科）、ドクゼリ（セリ科）等が確認できた。また、ヤチボウズ（谷地坊主）^{註4}も河畔林の各所に点在していた。

哺乳類では、エゾシカが非常に多く目についた。無名沢（水場）へと続く鹿の踏み分け道も周辺で複数確認されている。

鳥類は遺跡に近接する温根沼、風蓮湖、春国岱^{しゅんくたいてい}が非常に多い。日本鳥学会が2012年に発行した『日本鳥類目録』（改訂第7版）によると、日本産鳥類は81科633種であるが、根室市春国岱^{しゅんくたいてい}現生野鳥公園ネイチャーセンターが風蓮湖・春国岱^{しゅんくたいてい}で確認した野鳥は2016年現在59科339種。国内に生息する野鳥の半数強の種が生息する。

遺跡への飛来を目撃するか、鳴き声を耳にして種を特定できたのは、オジロワシ（ワシタカ科）、トビ（ワシタカ科）、オオセグロカモメ（カモメ科）、タンチョウ（ツル科）、オオジシギ（シギ科）、

キジバト（ハト科）、アオバト（ハト科）、カッコウ（ホトトギス科）、ツツドリ（ホトトギス科）、ホトトギス（ホトトギス科）、アカゲラ（キツツキ科）、コゲラ（キツツキ科）、ハクセキレイ（セキレイ科）、ノビタキ（ヒタキ科）、コヨシキリ（ヒタキ科）、カラ類（シジュウカラ科）、アオジ（ホオジロ科）、カワラヒワ（ホオジロ科）程度である。

昆虫は、チョウ目ではキアゲハ（アゲハチョウ科）、カラスアゲハ（アゲハチョウ科）、クジャクチョウ（タテハチョウ科）、クロヒカゲ（ジャノメチョウ科）、ゴマシジミ（シジミチョウ科）等が比較的多く飛来した。キアゲハなどは主にセリ科植物の花から吸蜜するのが目的で、カラスアゲハはキハダの葉に産卵する、あるいはエゾシカ等の尿や獣糞からの吸水が目的で集まったものであろう。クロヒカゲはササに産卵するため、また、ゴマシジミはナガボノシロワレモコウ（バラ科）の花に産卵するために集まったものと考えられる。ゴマシジミに関しては幼虫がクシケアリに育てられる変わった生態であるので周辺地にはクシケアリも生息しているであろう。ヒメヤママユ（ヤママユガ科）、ヒサゴズメ（スズメガ科）などの大型蛾、リンゴドクガ（ドクガ科）の幼虫も目にしている。

甲虫目では夏季を通じてオオセンチコガネ（コガネムシ科）を多く見かけた。この糞虫が多い理由は周辺にエゾシカの糞が多いからである。ほかキクビアオハムシ（ハムシ科）、ハイイロヒョウタンゾウムシ（ゾウムシ科）、ミヤマヒゲボソゾウムシ（ゾウムシ科）、ムネアカオオアリ（アリ科・キツツキ類の好物）等を確認している。また、1度だけルリボシカミキリムシ（カミキリムシ科）の飛来を目にした。

周辺環境に綺麗な水辺が多くあるためブユ（ブユ）、ヤブカの類は非常に多くが生息していた。気温、湿度が高めで、朝夕ないし曇り空の日によく発生する傾向があり、特に6月下旬から9月までは、虫除けスプレーや蚊取り線香を用意しても、刺されない日はないというほどであった。

（影浦）

註1 畑（草地）を造成するために伐採した木の切り株や根を堤防状に積み上げたもの。

註2 エゾミヤコザサともいう。雪の少ない太平洋沿岸に多く自生。開拓期の牧野林では冬季における馬の貴重な食料であった。当遺跡からは、家畜馬1頭が埋葬された土坑（I P-100）も検出されている。

註3 カシワとミズナラの雑種で、両種が混生するところで開花時期が一致すると受粉する。

註4 湿原に自生するカブスゲやヒラギシスゲなどのスゲ類が冬の凍結で株ごと地面から持ち上がり、春の雪融けで根元がえぐられることの繰り返しにより、谷地坊主の名前どおり人のアタマのように形成されたもの。気温が高いと枯葉がすべて微生物に分解されてしまうため、微生物の運動が不活発な低温過湿の環境が形成条件である。

3 歴史的環境

根室市内では平成30年現在で308か所の遺跡が確認されており、遺跡数は道内の市町村の中でも5番目に多く、遺跡の分布密度も高い。分布の特徴として、半島部では北側のオホーツク海（根室湾）に面した海岸線沿いに遺跡が多く、太平洋側の海岸沿いには遺跡が非常に少ない。また、半島以外の内陸方面（釧路側）をみると、風蓮湖の湖岸および風蓮湖に注いでいる別当賀川沿いに遺跡が多く集中する傾向が窺われる（図Ⅱ-2・3）。

エリア別で遺跡数を見て行くと、根室半島部北岸域94遺跡（30.5%）、風蓮湖沿岸68遺跡（22.1%）、別当賀川流域112遺跡（36.4%）、太平洋岸13遺跡（4.2%）、内陸21遺跡（6.8%）である。半島北岸域と風蓮湖沿岸を広義のオホーツク海沿岸とし、別当賀川流域および内陸の133遺跡を除いて、太平洋岸と対比すると、広義のオホーツク海沿岸162遺跡（92.6%）に対して、太平洋岸は13か所（7.4%）という割合である。そして、この傾向は各時期を通じて一貫している。寒流と暖流が衝突して混ざりあう太平洋沖が濃霧の主な発生源であることや、オホーツク海側（内海的な根室湾側）のほうが、概して潮流がゆるやかで、かつ波も穏やかであることなどが、遺跡数の極端な偏差となって表れたのではないかと考えられる。

また、晴天時には温根沼2遺跡から北西方向に、阿寒富士や、雄阿寒岳、雌阿寒岳を一望でき、半島部北岸域では根室海峡をはさんで対岸に横たわる知床連山や国後島を見渡せる。容易に「山あて」が可能な地域である。アイヌ文化期以前においては、長距離移動の手段として舟運が大きなウェイトを占めており、海岸線伝いに移動する、あるいは陸から陸へ最短ルートで渡海する、いずれにおいても目印となる山や地形が多いことは重要であったと考えられる。

別当賀川流域に遺跡が多い理由としては、川を遡上してくる食料資源として鮭の捕獲が考えられよう。今でも別当賀川にはたくさんの鮭・鱒が遡上している。（影浦）

根室半島の遺跡の時期については不明なものも多くあるが、縄文時代早期からアイヌ文化期の各時期がみられる。旧石器時代の遺跡は今のところ確認されていない。遺跡の種別では集落跡が最も多く、全遺跡数の3分の2以上を占めている。これは埋まりきらない竪穴住居跡などの遺構が、地表からくぼみとして確認でき、遺構の存在及び性格を把握しやすいことが理由として挙げられる。集落跡以外ではチャシ跡、墳墓、貝塚、遺物包含地がみられる。これらの中ではチャシ跡が35か所と多い。遺跡の時期は全体の約3分の1が把握されており、その中では縄文時代、アイヌ文化期が多く、その一方で続縄文時代やオホーツク文化期は少ない。

以下、温根沼2遺跡の周辺遺跡について述べる。周辺の遺跡については分布図（図Ⅱ-2～4）と、一覧表（表Ⅱ-1）を掲載した。北海道教育委員会の埋蔵文化財周知資料である「埋蔵文化財包蔵地調査カード」の根室市の分と北海道教育委員会ホームページ内サイト「北の遺跡案内」及び根室市教育委員会による「根室市埋蔵文化財マップ」等を基に作成した。なお、図中の数字ならびに表中のカッコ内の数字は、北海道教育委員会の遺跡登録番号である。

根室市内の国指定史跡は2か所ある。一つは昭和51（1976）年に指定された西月ヶ岡遺跡で擦文文化期の大小約350個の竪穴が密集して分布している。もう一つは昭和58・59（1983・1984）年に指定された根室半島チャシ跡群（21～24・27・28・30・37・85・86他）で、指定チャシは24を数える。

また、北海道指定の有形文化財では、考古学資料として平成5年に指定された「初田牛20遺跡出土の土偶及び墓坑出土遺物」がある。これらの内容は縄文時代後期の墓坑から出土した石器、石製品、漆製品や、完形に近い土偶である。道東では土偶の出土例が極めて少ないが、そうした中で副葬品と

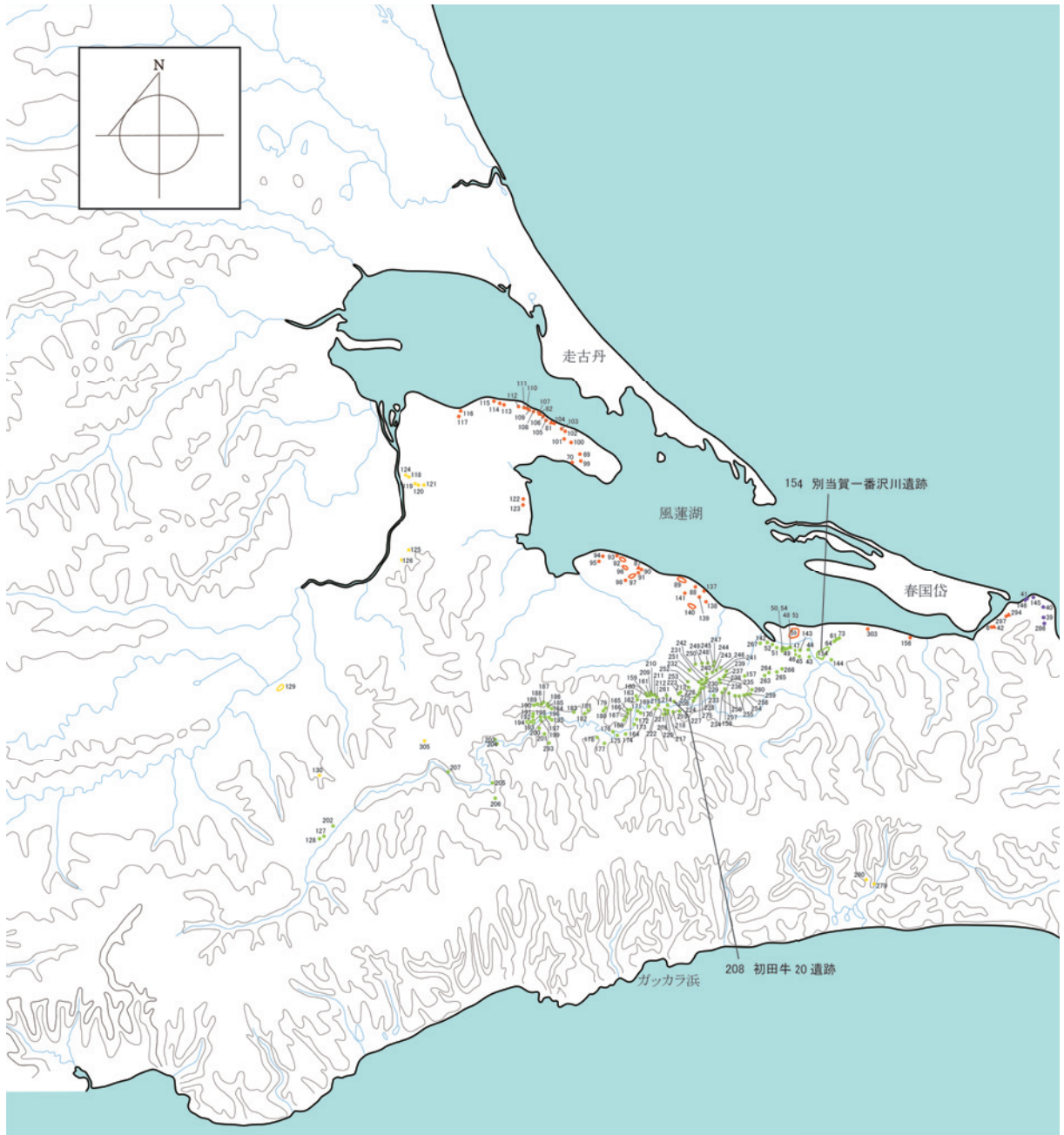
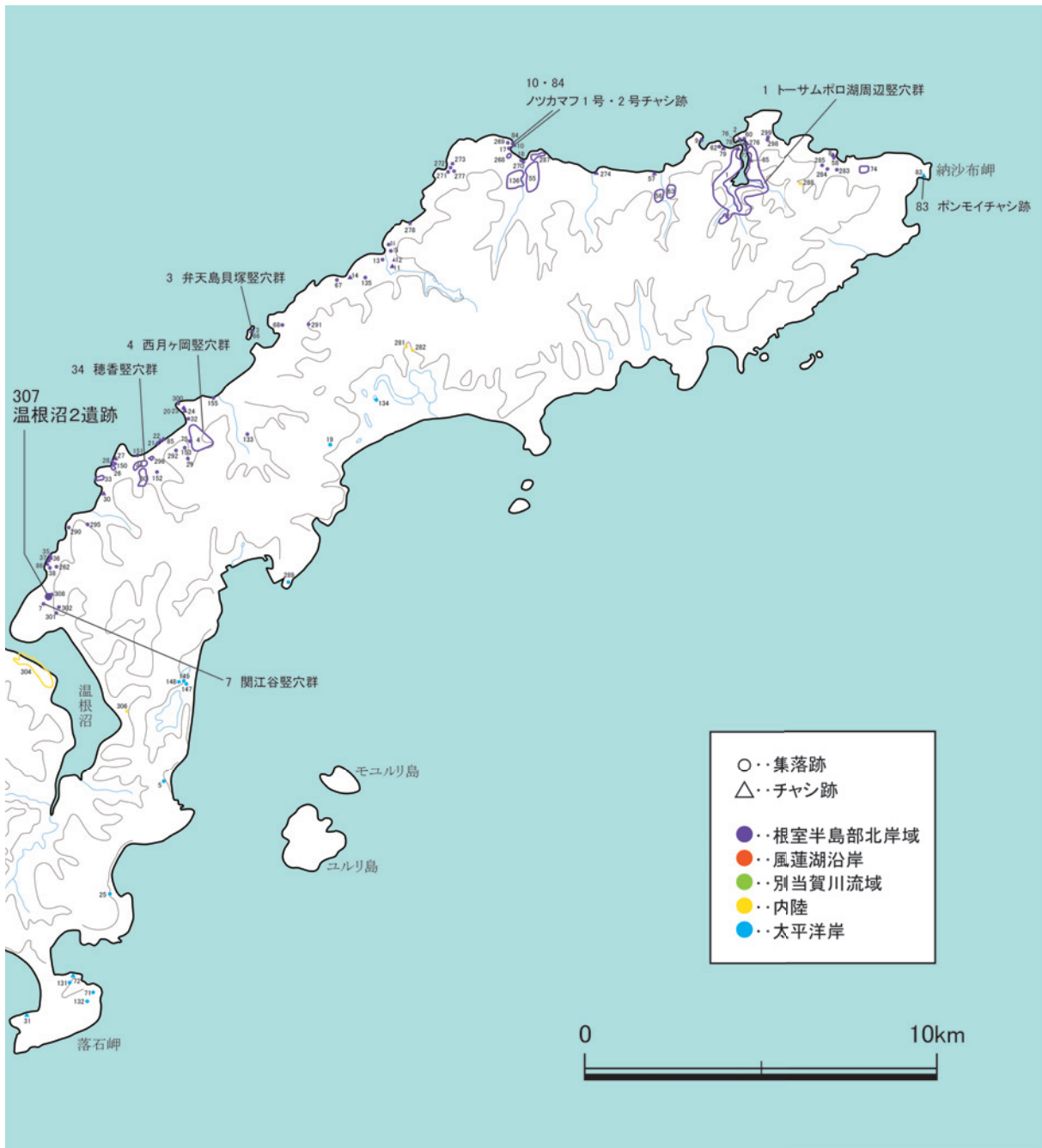


図 II - 2 根室市内の遺跡分布図 (内陸部)



図Ⅱ－3 根室市内の遺跡分布図（半島部）

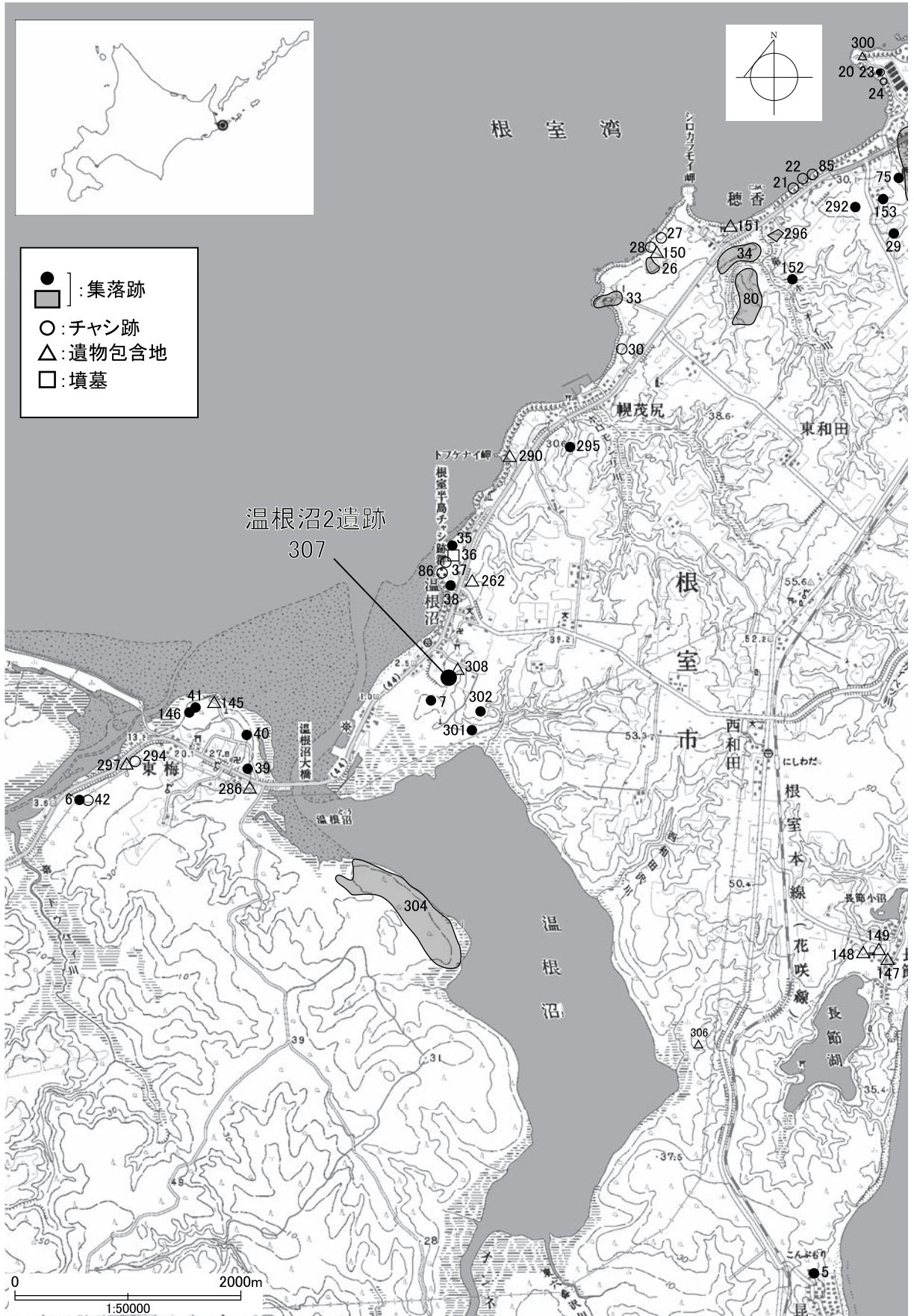


図 II - 4 遺跡の位置と周辺の遺跡

国土地理院発行の数値地図50000分の1（地図画像）
「根室南部」「東梅」「別当賀」「落石」（平成17年）を使用

表Ⅱ-1 周辺の遺跡一覧

No	遺跡名	種別	時期	所在地	立地	標高	発掘調査	文献	備考
5	昆布盛野穴群	集落跡	不明	根室市長盛25,25-2	海岸段丘上	30m	—	—	—
6	東風運湖河口右岸野穴群	集落跡	縄文(中期), 擦文	根室市長盛224-5	海岸段丘上	10m	—	—	—
7	岡江谷1野穴群	集落跡	縄文(前期・中期), オホホツク, 擦文, アイヌ	根室市温根沼343-2	温根沼の北岸丘陵上	12m	○	梶玉・大崎 1956, 猪熊・新美 2007, 猪熊・新美・大谷他 2011, 猪熊・新美・猪熊他 2012	国指定史跡
20	キナトイシ野穴群	集落跡	擦文	根室市西深町10丁目191, 192, 206-208, 210	海岸段丘上	16m	—	—	国指定史跡
21	ニランケウシ3号チャヤシ跡	チャヤシ跡	アイヌ	根室市徳香7, 13-5, 同地先	海岸段丘上	10m	—	—	国指定史跡
22	ニランケウシ2号チャヤシ跡	チャヤシ跡	アイヌ	根室市徳香7, 同地先	海岸段丘上	14m	—	—	国指定史跡
23	アツケエト1号チャヤシ跡	チャヤシ跡	アイヌ	根室市西深町10丁目206, 207, 同地先	キナトイシ湾の東畔	10m	—	—	国指定史跡
24	アツケエト2号チャヤシ跡	チャヤシ跡	アイヌ	根室市西深町10丁目206地先	海岸段丘上	10m	—	—	国指定史跡
26	帆茂尻東野穴群	集落跡	擦文	根室市徳香37, 43, 45, 48, 63	二つの小川にはさまれた舌状の微高地上	5m	—	—	—
27	ラーナイ1号チャヤシ跡	チャヤシ跡	アイヌ	根室市徳香43, 同地先	海岸段丘上	10m	—	—	国指定史跡
28	ラーナイ2号チャヤシ跡	チャヤシ跡	アイヌ	根室市徳香43, 同地先	海岸段丘上	10m	—	—	国指定史跡
29	東和田1野穴群	集落跡	不明	根室市東和田70	キナトイシ川左岸台地上	25m	—	—	—
30	ウエンナンナイチャヤシ跡	チャヤシ跡	アイヌ	根室市徳香59, 同地先	海岸段丘上	15m	—	—	国指定史跡
33	帆茂尻ポントマリ野穴群	集落跡	縄文(中期), 擦文(トビニタイ期)	根室市徳香57, 58, 60, 62	海岸段丘上	10m	—	—	—
34	徳香野穴群	集落跡	縄文(早期・中～後期)	根室市徳香72-1, 175, 185	ホニオイ川左岸台地上	10m	○	『北海道埋蔵文化財センター 2002, 『北海道埋蔵文化財センター 2003, 『北海道埋蔵文化財センター 2004	国指定史跡
35	温根沼チャヤシコロモイ東野穴群	集落跡	アイヌ	根室市温根沼2	海岸段丘上	10m	—	—	—
36	温根沼チャヤシコロモイ東野穴群	墳墓	アイヌ	根室市温根沼2	海岸段丘上	10m	—	—	—
37	チャヤシコロモイ東野穴群	チャヤシ跡	アイヌ	根室市温根沼2, 4, 同地先	海岸段丘上	10m	—	—	国指定史跡
38	チャヤシコロモイ西野穴群	集落跡	不明	根室市温根沼4	海岸段丘上	10m	—	—	—
39	東梅1野穴群	集落跡	擦文	根室市東梅1, 8, 10-12, 17, 24, 25, 44	湿地に続く緩斜台地上	15m	—	—	—
40	東梅2野穴群	集落跡	擦文	根室市東梅103	温根沼のオホツク海への注ぎ口 左岸台地上	10m	—	—	—
41	東梅3野穴群	集落跡	擦文	根室市東梅103	海岸段丘上	10m	—	—	—
42	東風運湖河口右岸チャヤシ跡	チャヤシ跡	アイヌ	根室市東梅224-5	風連運湖東側湖口の国道沿いの台地上	10m	—	—	—
75	徳香2野穴群	集落跡	不明	根室市徳香89	海岸段丘上	15m	—	—	—
80	徳香3野穴群	集落跡	不明	根室市徳香75	ホニオイ川左岸台地上川口より500m上流	10-20m	—	—	—
85	ニランケウシ1号チャヤシ跡	チャヤシ跡	アイヌ	根室市徳香7, 同地先	徳香の海岸段丘上	10m	—	—	国指定史跡
86	チャヤシコロモイ2号チャヤシ跡	チャヤシ跡	アイヌ	根室市温根沼4, 同地先	温根沼東方, 海岸段丘上	10m	—	—	国指定史跡
145	東梅4遺跡	遺物包含地	続縄文, 擦文	根室市東梅103	風連運湖岸台地上	10m	—	—	—
146	東梅5遺跡	集落跡	不明	根室市東梅103	海岸段丘上	10m	—	—	—
147	長節1遺跡	遺物包含地	縄文(早期)	根室市長節63, 64	海岸段丘上	10m	—	—	—
148	長節2遺跡	遺物包含地	不明	根室市長節134, 139	海岸段丘上	10m	—	—	—
149	長節3遺跡	遺物包含地	不明	根室市長節137-1, 2	長節湖北岸台地上	15m	—	—	—
150	徳香4遺跡	遺物包含地	不明	根室市徳香37, 43	海岸段丘上	10m	—	—	—
151	徳香5遺跡	遺物包含地	不明	根室市徳香22, 23	海岸段丘上	5m	—	—	—
152	徳香6野穴群	集落跡	不明	根室市徳香108	根室川右岸台地上	20m	—	—	—
153	徳香7野穴群	集落跡	不明	根室市徳香92-1, 93	西月ヶ岡窪穴群と沢をささんで西側	20-25m	—	—	—
282	温根沼1遺跡	遺物包含地	縄文(晩期)	根室市温根沼127-1	温根沼に面した小高い台地	10m	—	—	—
285	東梅1遺跡	遺物包含地	縄文	根室市東梅115-1	海岸段丘上	20m	—	—	—
290	トフケナイ遺跡	遺物包含地	縄文(晩期)	根室市徳香70-1	海岸段丘上	20m	—	—	—
292	徳香8野穴群	集落跡	不明	根室市徳香110-1	—	30m	—	—	—
294	東梅チャヤシ跡	チャヤシ跡	アイヌ	根室市宇東梅224-5	海岸段丘上	12m	—	—	—
295	帆茂尻1遺跡	集落跡	縄文, 擦文	根室市徳香140-2	低湿地に面した緩斜面	9-14m	○	(公財)北海道埋蔵文化財センター 2017	国指定史跡
296	徳香川右岸遺跡	集落跡	縄文(中～後期)	根室市徳香150, 163	根室川右岸段丘上	7-13m	○	(公財)北海道埋蔵文化財センター 2005	国指定史跡
297	東梅2遺跡	遺物包含地	続縄文	根室市東梅224-2・5, 224-5地先	海岸段丘上	12m	—	—	—
300	キナトイシ遺跡	遺物包含地	アイヌ	根室市西深町10丁目213	海岸台地上	10m	—	—	—
301	岡江谷2野穴群	集落跡	不明	根室市温根沼343-1	温根沼の切り通し	15m	—	—	—
302	岡江谷3野穴群	集落跡	擦文	根室市温根沼343-1地先国有林	温根沼北岸丘陵上	20-25m	—	—	—
304	温根沼西岸1野穴群	集落跡	続縄文, 擦文	根室市東梅12-1地先国有林	温根沼西岸の台地上	10-12m	—	—	—
306	温根沼東岸1遺跡	遺物包含地	続縄文	根室市西和田国行林 (1003林班の小班)	温根沼東岸 東西重複左岸	10-15m	—	—	—
307	温根沼2遺跡	集落跡	縄文(早期・中～後期), 続縄文, 擦文, トビニタイ	根室市温根沼271, 271地先, 285, 297, 298	温根沼東岸段丘上	4-18m	○	(公財)北海道埋蔵文化財センター 2019 『根室市 温根沼2遺跡』	当報告書
308	温根沼3遺跡	遺物包含地	縄文, オホホツク, 擦文	根室市温根沼284-1	温根沼東岸段丘及び斜面	15-25m	○	(公財)北海道埋蔵文化財センター 2017	—

して出土したことは学術的に極めて重要な事例であると言える。

周辺の遺跡は、オホーツク海側、根室湾に面した段丘上に多くが分布している。遺跡の種別は全体の傾向と同じく集落跡やチャシ跡が多い。

当遺跡の近辺では平成28(2016)年度に当センターが調査した温根沼3遺跡(308)が北東に隣接し、南西側へ直線距離にして約300m離れたところには過去に発掘調査が行われた^{せきえだに}関江谷1堅穴群(7)がある。また、南東側には^{せきえだに}関江谷2堅穴群(301)と^{せきえだに}関江谷3堅穴群(302)がある。

当遺跡北側の海岸沿いには、温根沼チャルコロモイ東堅穴群(35)等の集落跡、チャルコロフィナ1号チャシ跡(37)等、アイヌ文化期のチャシ跡他が^{きゅうがいべり}急崖縁に点在している。

温根沼を間にはさんだ西の対岸でも、海岸沿いに^{とうばい}東梅1堅穴群(39)等の集落跡、^{とうばい}東梅風蓮湖口右岸チャシ跡(42)等のチャシ跡他がみられる。

ほか温根沼周辺では、東側に温根沼東岸1遺跡(306)、西側に遺跡範囲が広大な温根沼西岸1堅穴群(304)が、2000年代になってから相次いで確認されている。

時代別でみると、縄文時代の早期では^{ちようぼし}長節1遺跡(147)、当遺跡(307)と温根沼3遺跡(308)、前期では^{せきえだに}関江谷1堅穴群(7)がある。^{せきえだに}関江谷1堅穴群は昭和29(1954)年に北海道大学の^{ちようぼし}大場利夫らにより、堅穴住居跡3軒と貝塚1か所が調査され、出土した縄文時代前期の押型文土器について「温根沼式押型文土器」が設定された(児玉・大場 1956)。その後、平成18~23(2006~2011)年には、名古屋大学と根室市教育委員会により、遺跡の測量図作成や昭和29年に調査した貝塚の再調査が行われている(猪熊・新美 2007他)。

縄文時代中期後半~後期前葉では^{とうばい}東梅風蓮湖右岸堅穴群(6)、^{ほろもしり}幌茂尻ポイントマリ堅穴群(33)等があり、過去に当センターで発掘調査を行った^{ほにおい}穂香堅穴群(34)、^{ほにおい}穂香川右岸遺跡(296)および当遺跡で北筒式土器の時期の集落跡を確認している(北埋調報170・184・198・212・354)。

縄文時代晩期では温根沼1遺跡(262)、トフケナイ遺跡(290)がある。

続縄文時代では^{とうばい}東梅4遺跡(145)、^{とうばい}東梅2遺跡(297)、温根沼西岸1堅穴群(304)、温根沼東岸1遺跡(306)、下田ノ沢式期の集落跡が確認された当遺跡(307・本報告)があり、いずれも温根沼周辺に分布している。

オホーツク文化期は、温根沼周辺では^{せきえだに}関江谷1堅穴群(7)のみである。

擦文文化期は遺跡数が多く、^{ほろもしり}キナトイシ堅穴群(20)、^{とうばい}幌茂尻東堅穴群(26)、^{とうばい}東梅1堅穴群(39)、当遺跡(307・本報告)等がある。

また、トビニタイ文化の遺構遺物を今回当遺跡(307・本報告)で検出している。

アイヌ文化期については、国指定のチャシ跡としてニランケウシ3号・2号チャシ跡(21・22)、アツケシエト1号・2号チャシ跡(23・24)、ヲーナイ1号・2号チャシ跡(27・28)、ウェンナイチャシ跡(30)、チャルコロフィナ1号・2号チャシ跡(37・86)、ニランケウシ1号チャシ跡(85)がある。それ以外のチャシ跡では、^{とうばい}東梅風蓮湖口右岸チャシ跡(42)、^{とうばい}東梅チャシ跡(294)がみられる。他に温根沼チャルコロモイ東墳墓群(36)や集石を伴う墓坑が確認された^{きなといし}キナトイシ遺跡(300)がある(猪熊 2013・2015)。

複数の時代が複合する遺跡として、^{とうばい}東梅風蓮湖口右岸堅穴群(6)、^{せきえだに}関江谷1堅穴群(7)、^{ほろもしり}幌茂尻ポイントマリ堅穴群(33)、^{とうばい}東梅4遺跡(145)、温根沼西岸1堅穴群(304)、当遺跡(307・本報告)が挙例される。(広田・影浦)

Ⅲ章 調査の方法

1 発掘調査の方法

(1) グリッドの設定 (図Ⅲ-1)

温根沼2 遺跡の調査区では、方位を平面直角座標第Ⅲ系（世界測地系）に一致させた4mグリッドを設定した（図Ⅲ-1）。設定に使用した基図は一般国道44号根室市根室道路の「用地実測図原図（縮尺1：1000）」（計画機関：釧路開発建設部）である。遺跡はⅢ系の座標原点より南東側の区画（第2象限）に位置するので、Xの座標値にはマイナス（-）が付く。第2象限では、Xの絶対値が原点から南に向かって、Yの絶対値が原点から東に向かって大きくなるため、後述する東西方向のライン名（アルファベット大文字）は南に向かって順番に並べ、南北方向のライン名（アラビア数字）は東に向かって数字が大きくなるようにした。なお、方位記号の天は方眼北（座標北）を示す。

試掘結果を受け、温根沼2 遺跡・3 遺跡が要発掘とされて調査範囲が確定した経緯から、隣接する両遺跡の調査範囲が収まるようにグリッド設定を行った。このため両遺跡のグリッドは連続している。

東西方向の基線は、平面直角座標（以下、座標）のY軸と平行する線のうちX軸の-79,700を通る線で、Aラインと呼称した。Aラインの南側には同ラインと平行する線を4mおきに引き、それぞれにアルファベット大文字のライン名を順に付けた。温根沼2 遺跡はZラインの南に及ぶため、アルファベットは小文字になる。すなわちZラインの南4mでaライン、さらに平行に4m南でbラインというように順番に付している。

南北方向の基線は、座標のX軸と平行する線のうち、温根沼3 遺跡の調査範囲にかかるY軸の102,000を通る線を52ラインとした。52ラインの両側には同ラインと平行する線を4mおきに引き、アラビア数字のライン名を付けた。東西方向にのびるアルファベットラインと南北方向にのびるアラビア数字ラインを4mおきに直交させることで調査区域に4mグリッドを設定した。

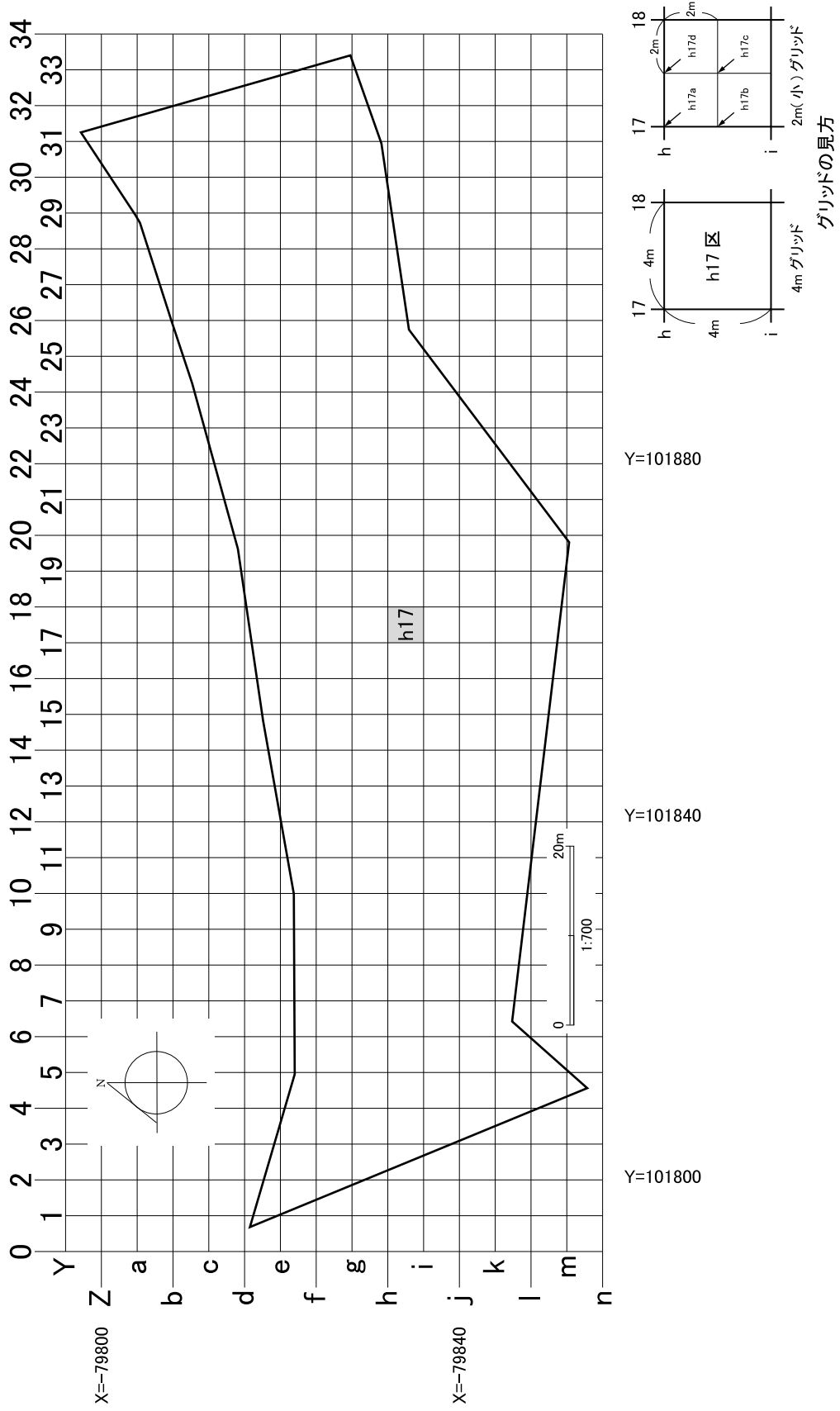
グリッド名は、各グリッドの北西隅で直交する2本のライン名を組み合わせて表す。例えば、f15区は、fラインと15ラインの交点より南東側に接する区画の名称である。

方眼杭の打設等は測量業者に委託し、調査区周辺に設置した2点の仮設4級基準点「401」・「402」から放射法で行った。同点を設置するために使用した既知点は、釧路開発建設部設置の2級基準点「H11-3」・「H11-4」・「K62-96」の3点である。仮設4級基準点の設置と方眼杭打設には、トータルステーションを使用した（表Ⅲ-1）。

水準測量は、上記の2級基準点「H11-4」の標高32.051mを、オートレベルで往復観測し、温根沼2 遺跡・3 両遺跡の仮設基準点等に取り付けた。（影浦）

表Ⅲ-1 基準点成果一覧

基準点	級	座標系	X (m)	Y (m)	H (m)	計画機関	備考
H11-3	2	XⅢ	-79,727.665	101,773.961	10.932	釧路開発建設部	旧日本測地系の座標値をTKY2JD・PatchJGD・PatchJGD（標高版）で変換した値。
H11-4	2	XⅢ	-79,711.288	102,140.600	31.792		
K62-96	2	XⅢ	-79,958.340	101,311.003	1.063		
401	4	XⅢ	-79,816.342	101,803.514	9.044	(公財)北海道埋蔵文化財センター	仮設のため調査終了後に撤去。
402	4	XⅢ	-79,818.822	101,929.665	19.929		



図III-1 グリッド設定図

(2) 基本層序 (図Ⅲ-2～8、図版48-1～3)

温根沼2遺跡では、調査区全体の地形・地層を網羅的に記録できるよう、基本土層図として計6本の土層面を記録した。調査区北側の平坦部の土層記録として、調査区境界線に沿ったd3区からe10区にかけての約27m (図Ⅲ-3)。西側の斜面地形として、l3区からg8区の約26m (図Ⅲ-4)。南側の斜面地形として、i18から18ライン沿いに調査区南端までの約15m (図Ⅲ-5)。南東側の斜面地形として、調査区境界線に沿ったl21区からj23区にかけての約10m (図Ⅲ-6) と、i24区とh25区にかかる約8m (図Ⅲ-7) の2本。東側の緩斜面地形として、調査区南東の境界線に沿って、27ライン上からf33区の調査区南東角まで約26m (図Ⅲ-8) の土層堆積を実測、撮影した。

温根沼2遺跡の平均的な基本層序を以下に示す。遺物包含層は、IV層とした摩周テフラ (Ma-f~j) を挟む上下の黒色土・黒褐色土 (Ⅲ層とV層) である。層相の記載にあたっては、『新版標準土色帖』26版 (小山・竹原編著 1997) の「土色」、『土壌調査ハンドブック』(ペドロジスト懇話会編 1984) の「野外土性」・「粘着性」・「堅密度」・「層界」を用いた。

I層：黒色の埴壤土で、粘着性は中、堅密度は堅、層厚は約10cmを測る。表土で、アイヌミヤコザサの根に富んでいる。

II層：過去に行われた根室市域での遺跡調査から設定した。トーサムポロ湖周辺堅穴群では黒褐色、穂香堅穴群では黒色・黒褐色、幌茂尻1遺跡では黒褐色、別当賀一番沢川遺跡では暗褐色を呈し、層中に灰白色の細粒火山灰 (樽前aテフラ1739年降下・駒ヶ岳c₂テフラ1694年降下) をまばらに含む。本遺跡では、調査区北側台地上 (平坦部) のごく一部で、灰白色のテフラが混じる暗褐色層を確認した。層位的に、これがII層の可能性はあるが、他の大部分ではⅢ層と区別できなかった。

III層：黒色・黒褐色の埴壤土で、粘着性は中、堅密度は堅、層厚は30~40cm程度を測り、IV層最上位にあるMa-fとの層界は漸変している。本遺跡では、縄文時代前期、縄文時代中期~後期、続縄文時代、トビニタイ式期を含む擦文文化期の遺物が得られている。II層の項で上述した通り、本層上位は樽前aテフラ (1739年降下)、駒ヶ岳c₂テフラ (1694年降下) とみられる灰白色の細粒火山灰がまばらに認められる部分もある。判然としないが、一部において上位がII層に相当する可能性もある。

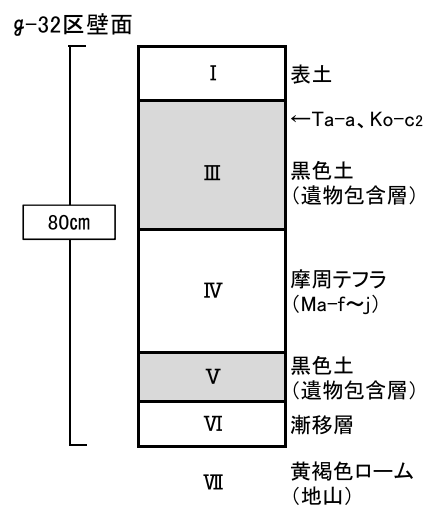
IV層：Ma-f~jの各テフラを一括した。テフラ同士の間には土壌の発達は認められない。層厚はMa-f~j全体で約25cmを測り、V層との層界は画然としている。各ユニットの特徴は以下のとおりである (花岡 2003)。

Ma-fは軽石混じりの褐色ローム。軽石は径粒2~10mm。軽石表面は褐色、内部は灰~灰黄色。軽石はやや円磨され、見かけの発泡度は悪い。分級が悪いので火砕流堆積物またはその二次堆積物である。温根沼2遺跡での層厚は約15cm。

Ma-gは黄橙色降下軽石堆積物。軽石は粒径1~4mm。やや風化し、内部は灰黄色。見かけの発泡度は悪い。層厚は約10cm。

Ma-hは降下軽石・岩片堆積物。径1mm程度の噴出物から成り、軽石は橙色、岩片は灰色。層厚は約2cm。

Ma-iは橙色降下軽石堆積物。基底から1cm上方までは比較的細粒 (粒径3mm前後)。その直上は粗粒 (粒径5~10mm) で、上方へ細粒化する。軽石はやや風化し、内部は黄橙色、繊維状発泡良好。温根沼2遺跡での層厚は約5~15cm。



図Ⅲ-2 土層柱状模式図

Ma-jはさらに上下3層に区分される。上部は灰黄色砂質火山灰堆積物で、径1mm以下の噴出物からなり層厚0.5cm。中部は黄色軽石堆積物で、層厚0.3~0.5cm。下部は灰色砂質火山灰堆積物で、層厚0.5cm前後。この下部層は含水量が比較的多く、色調からも鍵層として周辺地域で追跡できる。

近年の研究によれば、Ma-f~jはカルデラ形成期における一連の噴出物と考えられており（岸本他2009）、噴出年代は約7,600年前とされている（山本他2010）。

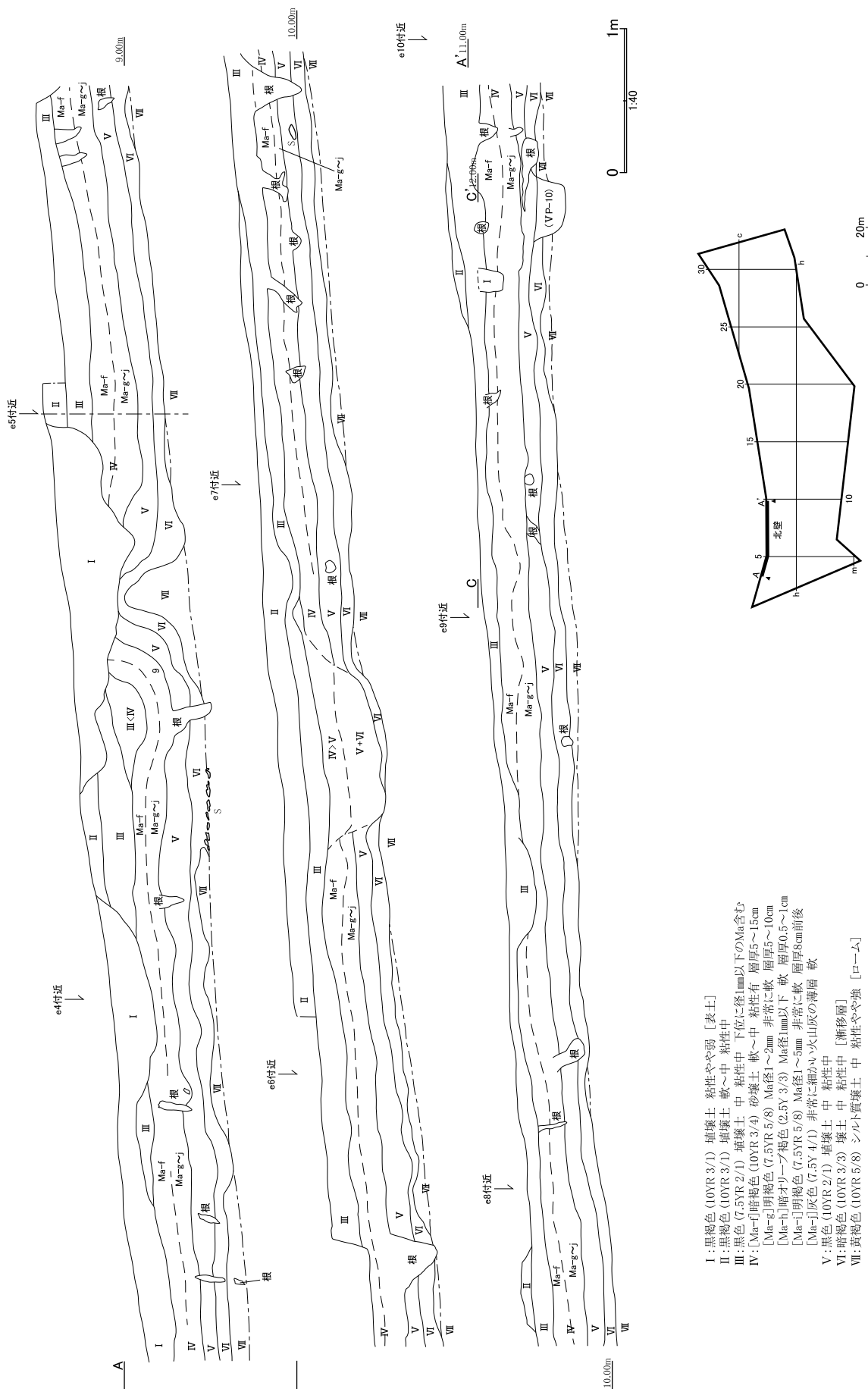
V層：黒色・黒褐色の埴壤土で、粘着性は中、堅密度は堅、層厚は20cm前後を測り、VI層との層界は判然としている。東釧路Ⅱ式期の遺構・遺物を包含する。土器集中として1個体であるがコッタロ式も出土した。平成28年度に調査した幌茂尻1遺跡、別当賀一番沢川遺跡では、凍上現象によってV層以下の地形が複雑に上下していたが、本遺跡では温根沼3遺跡同様、認められなかった。

VI層：黒褐色・暗褐色の埴壤土で、粘着性は中、堅密度は堅、層厚は10cm弱を測り、平坦部においてはVII層との層界が判然としている。V層とVII層の漸移層にあたる。

VII層：黄褐色の埴壤土で、粘着性は中~強、堅密度は堅、基底は確認していない。部分的に垂角礫が含まれる。本遺跡の地山にあたり、掘り下げは本層が現れるまで行った。いわゆる「ローム層（風化した火山灰層）」であり、風化した雲母等が認められる。

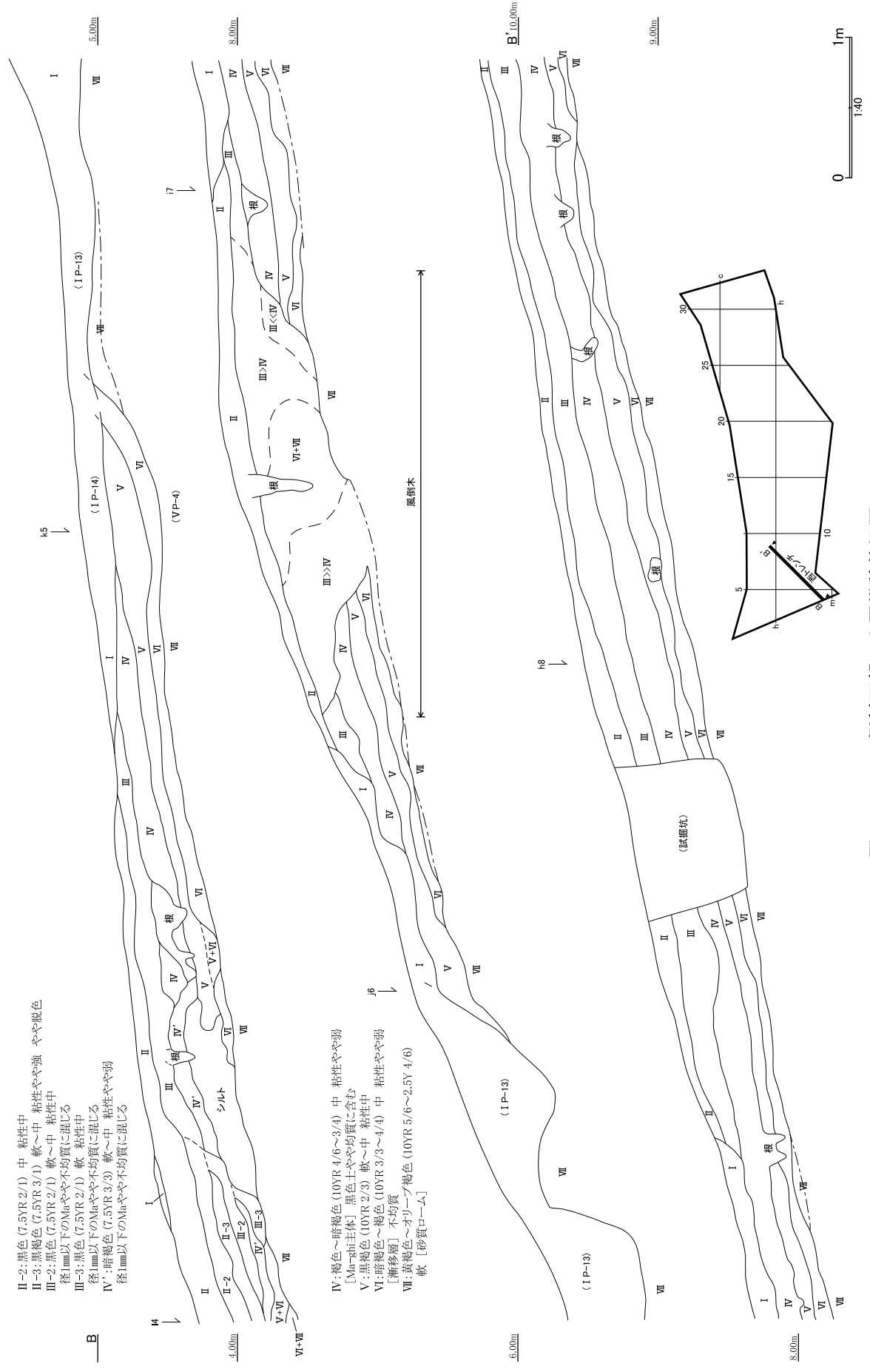
なお、過去に発生した大きな地震の痕跡である噴砂を調査区内の数か所で確認した。南側の急斜面に差し掛かる地形の変換点において、IV層上面まで掘り下げた際に何mにもわたって溝状の黒いへこみを検出した（図Ⅲ-9・図版47-7）。ちょうど、この台地の縁に沿う形で排根線が土手状に連なっていたため当初はこの造成にともなう攪乱かとも思われたが、溝部分を中心に周囲を清掃したところ溝の中央において、帯状に伸びた砂脈が確認できた。砂脈幅がもっとも広がっているg21区にトレンチを入れたところ、Ⅲ層が幅1m20cm、深さ10~15cmほどIV層中に陥没しており、その下部であるIV~VII層を最大幅6cmの砂脈が垂直に貫いていた。土層面を精査したところ、砂脈は、陥没したⅢ層内で横に広がりレンズ状の堆積を呈していた。このレンズ状の堆積は上下に三枚確認されており、その最大幅は80cmほどに及ぶ（図版47-6）。吹き上げによるレンズ状の砂堆積がⅢ層下部にとどまっていること、なおかつ噴砂時にある程度Ⅲ層が堆積していたことから、縄文時代中期から後期頃の地震^註によるものかと考えられる。（影浦）

註 道東地域の太平洋沿岸は、道内有数の地震多発帯として知られる。厚岸町郷土館には国泰寺地下から剥ぎ取った土層断面（深さ1.47m）が展示されているが、縄文時代後半期以降の大地震による8枚の津波堆積物が^{かんにゅう}嵌入している。また、『根室市歴史と自然の資料館』にも、市内初田牛のガツカラ浜で採取された剥ぎ取り土層が展示されているが、こちらは過去4,000年間、すなわち縄文時代後期以降に12枚の津波堆積物が^{はったうし}嵌入している。温根沼2遺跡で検出した地割れと砂脈の跡は、太平洋沿岸で発生した過去の津波イベントのいずれかに関連する大地震の跡であろう。しかしながら、本遺跡では地割れ痕が長いにもかかわらず、砂の吹き上がった範囲が局所的で、もっとも広がっているところでも、砂脈の幅は最大6cmと非常に細く、レンズ状の吹き上げ部も最大幅で80cm程度であった。長谷川潔・三谷勝利によると、「根室半島全地域にわたって地下水に不足」「この地域の基盤である根室層群のなかには、滞水層がみられない。基盤の上ののっている段丘堆積物が滞水層になっているが、その厚さがひじょうに薄いので、地下水に不足している」（長谷川・三谷1959）とあるので、おそらくは吹き上げてくる水そのものが少なかったのであろう。



- I: 黒褐色 (10YR 3/1) 堆積土 粘性やや弱 [表土]
- II: 黒褐色 (10YR 3/1) 堆積土 軟~中 粘性中
- III: 黒褐色 (7.5YR 2/1) 堆積土 中 粘性中 下位に径1mm以下のMkを含む
- IV: [Ma-f]暗褐色 (10YR 3/4) 砂壤土 軟~中 粘性有 層厚5~15cm
 [Ma-g]明褐色 (7.5YR 5/8) Mk径1~2mm 非常に軟 層厚5~10cm
 [Ma-h]暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) Mk径1mm以下 軟 層厚0.5~1cm
 [Ma-i]明褐色 (7.5YR 5/8) Mk径1~5mm 非常に軟 層厚8cm前後
 [Ma-j]灰色 (7.5Y 4/1) 非常に細かい火山灰の薄層 軟
- V: 黒色 (10YR 2/1) 堆積土 中 粘性中 [漸移層]
- VI: 暗褐色 (10YR 3/3) 壤土 中 粘性中 [漸移層]
- VII: 黄褐色 (10YR 5/8) シルト質壤土 中 粘性やや強 [ロー-A]

図Ⅲ-3 北側平坦面の土層堆積状況図



図III-4 西側斜面部の土層堆積状況図

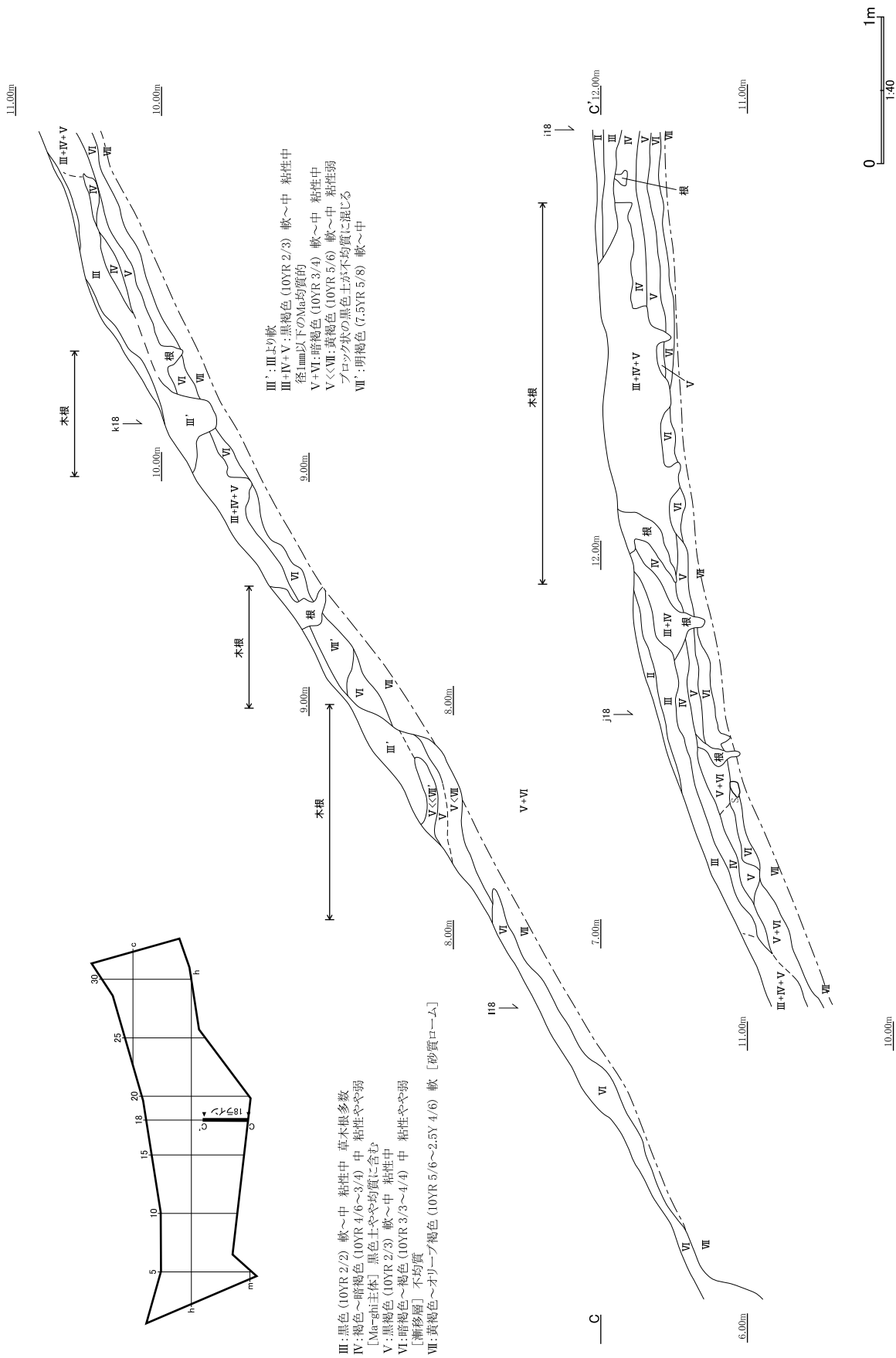


図 III-5 南側斜面部の土層堆積状況図

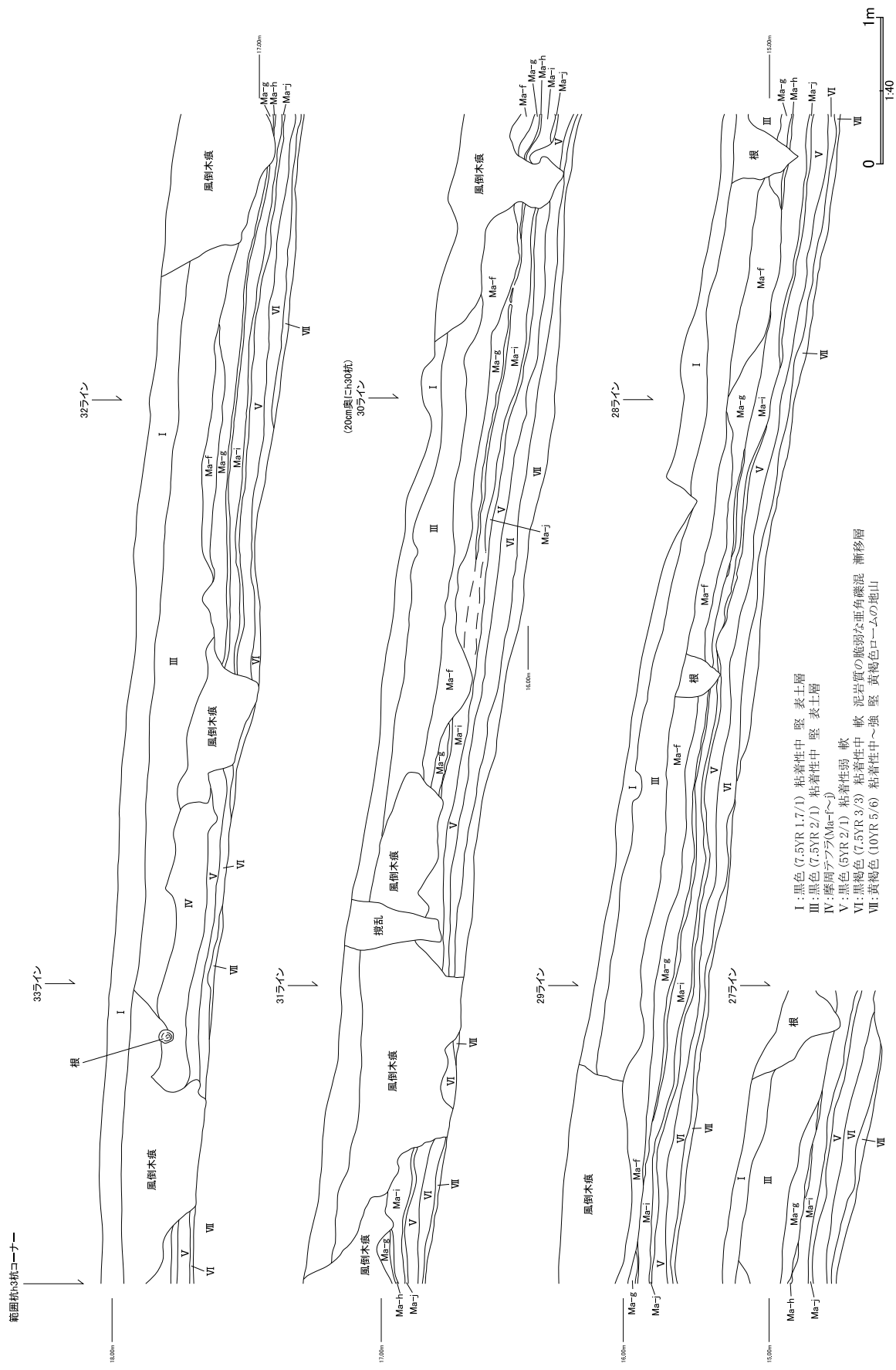
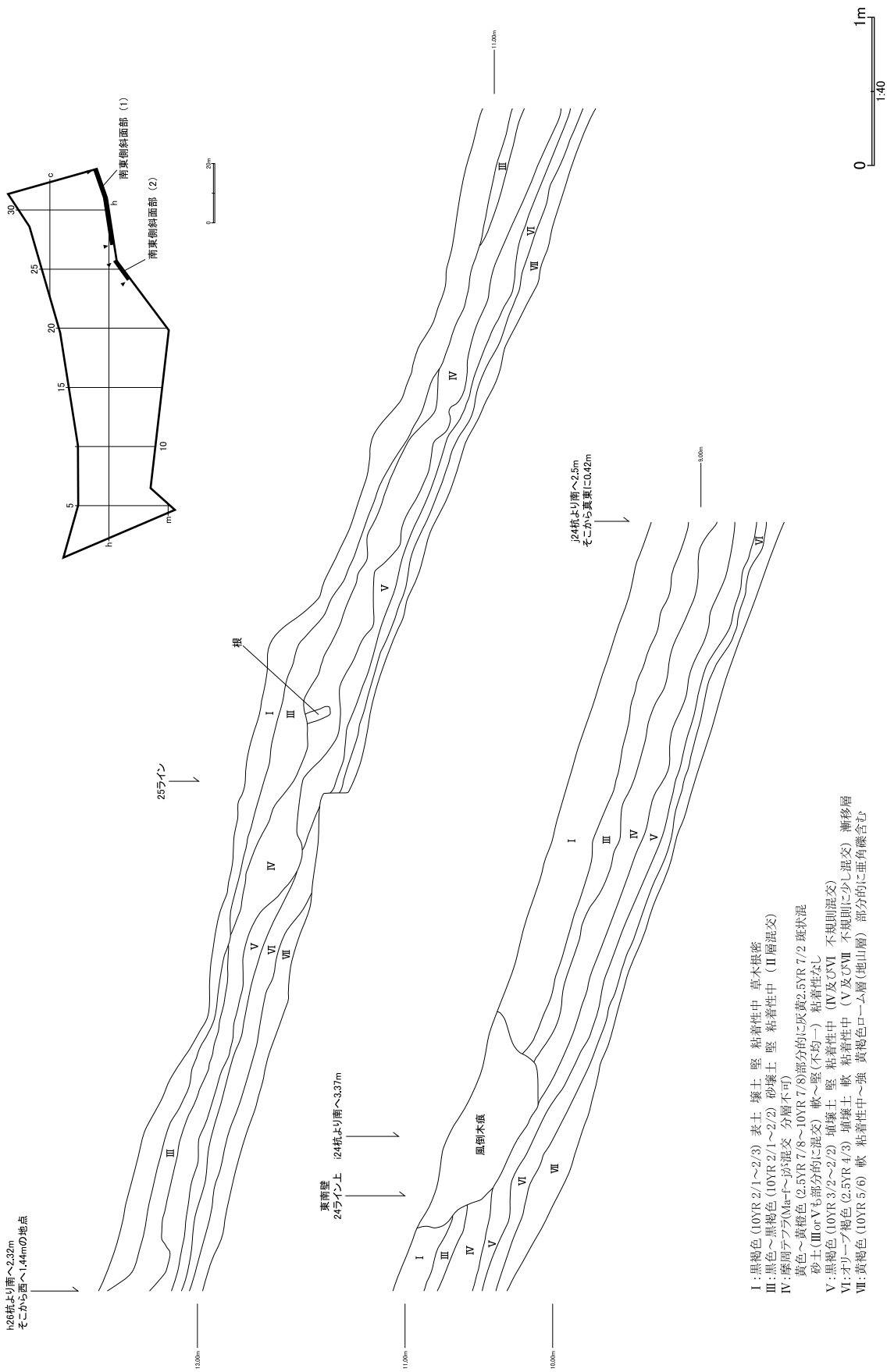
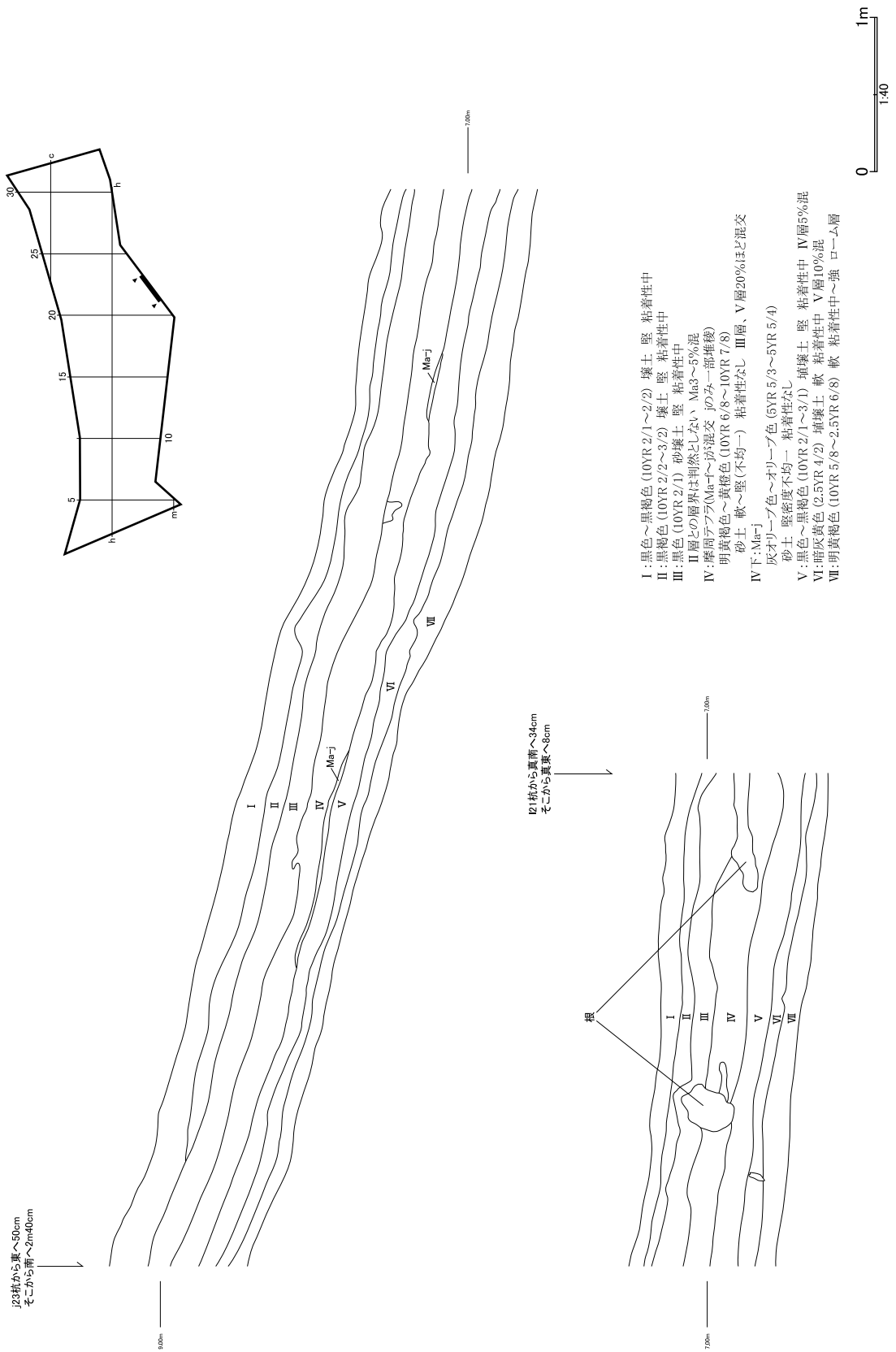


図 III-6 南東側斜面部の土層堆積状況図 (1)

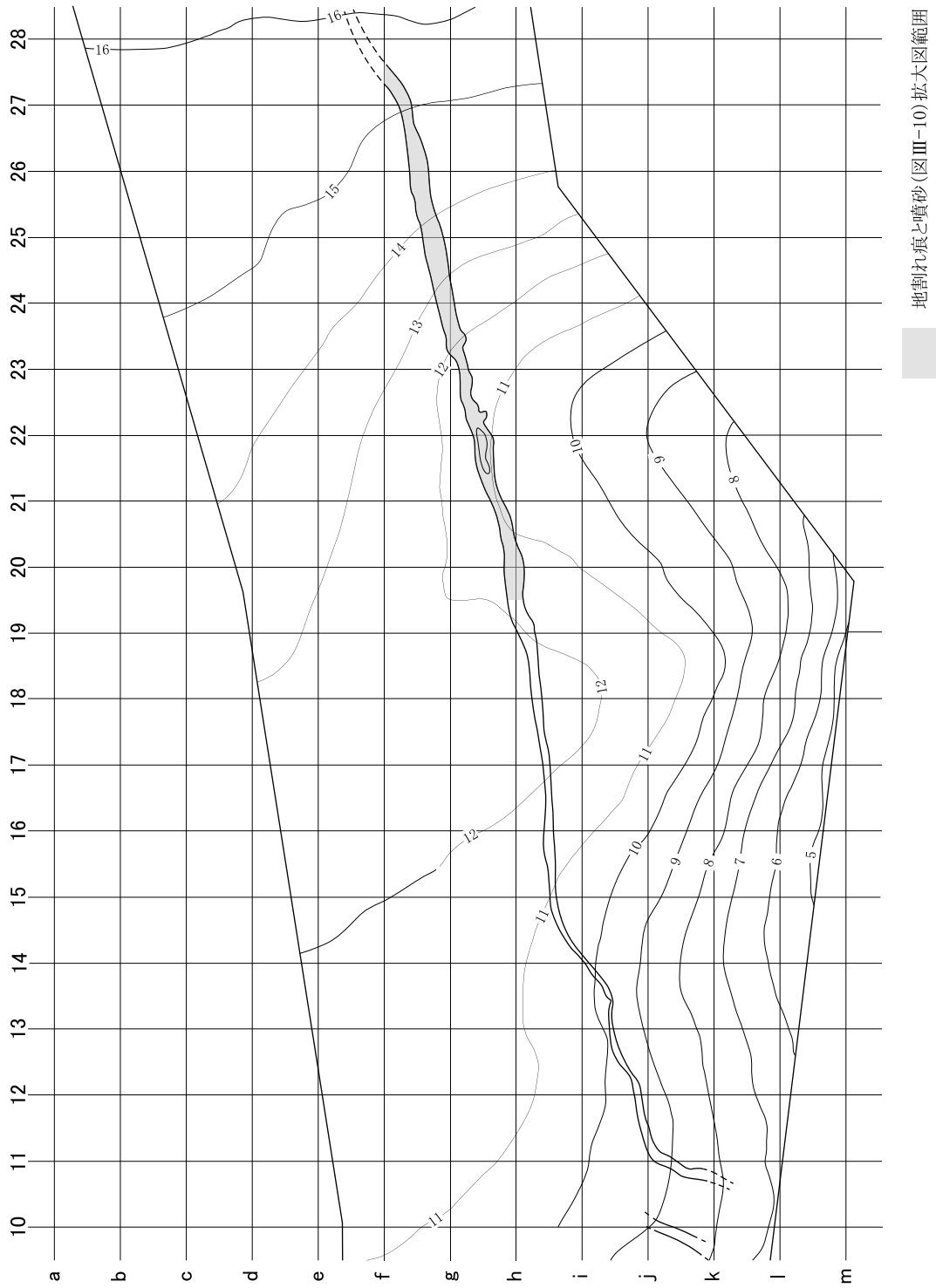


- I: 黒褐色(10YR 2/1~2/3) 表土 壤土 堅 粘着性中 草本根密
- III: 黒色~黒褐色(10YR 2/1~2/2) 砂壤土 堅 粘着性中 (II層混交)
- IV: 暗周アブラムシ/ムシの混交 分層不可
- 黄色~黄褐色(2.5YR 7/8~10YR 7/8)部分的に灰黄2.5YR 7/2 斑状混砂土(III or Yも部分的に混交) 軟~堅(不均一) 粘着性なし
- V: 黒褐色(10YR 3/2~2/2) 埴壤土 堅 粘着性中 (IV及びVI 不規則混交)
- VI: オリーブ褐色(2.5YR 4/3) 埴壤土 軟 粘着性中 (V及びVII 不規則に少し混交) 漸移層
- VII: 黄褐色(10YR 5/6) 軟 粘着性中~強 黄褐色ローム層(地山層) 部分的に垂角礫含む

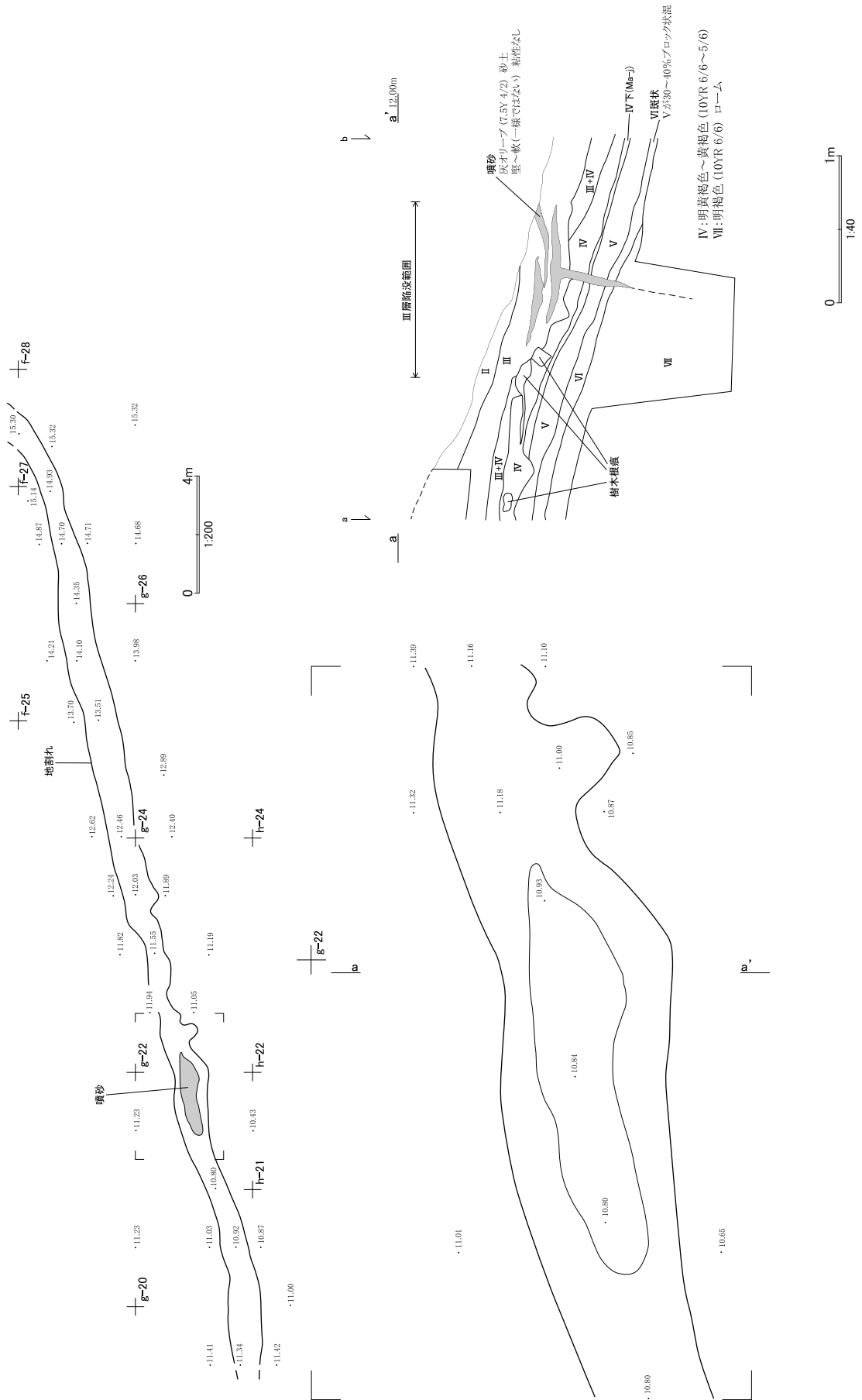
図III-7 南東側斜面部の土層堆積状況図(2)



図III-8 東側緩斜面部の土層堆積状況図



図Ⅲ-9 地割れ痕(全体)



図III-10 地割れ痕と噴砂

r-22

(3) 発掘調査の方法

I章4(1)で述べたように、地形の変換点等で、調査区を大きく4つに分けて、調査を行った。すなわち南側の斜面部と、西側の斜面部と、北側の台地上平坦部、それから東側の緩斜面部である。重機によりそれぞれ表土層・I層を除去後、III層を調査した。III層の調査後は無遺物のIV層(摩周テフラ)を重機ないし人力で除去し、V層以下を調査した。

包含層調査は、4×4mのグリッド単位で行った。重機による掘削残土をジョレン等で除去し、遺物の出土状況や土色等の変化に注意しながら、層ごとに移植ゴテ、ねじり鎌、スコップで掘り下げた。出土遺物はグリッド・層・遺物種類(土器・石器・骨等・礫)ごとにまとめ、出土位置と日付を記入したポリ袋に入れて取り上げた。掘り下げは基本的に深さ5cm単位で複数回繰り返した。

南側と西側の斜面部においては一輪車を使わず、排土を人力で上に排出することもできないため、調査区外の斜面下と沢の間を借地し、土砂流失防止の土嚢積みを行った上で、排土場とした。

急斜面部の掘削は原則、グリッド並びで下から順に行うことにし、その後は、グリッド単位で一列掘削が終わる度に、すみやかに地形測量を行い、そこを新たな排土場とした。最下部のグリッド列が排土で平坦に埋まると、そこから一輪車で借地した排土場へ排出した。斜面の調査が上部に達すると、転落防止の足場として、各所に土嚢を配置し、必要に応じて地面に足掛かりの切り込みを入れるなどして作業を進めた。この段階では掘った先から斜面下に排土を投棄する方式に切り替えている。

遺構は確認した順に調査を行った。土坑は範囲内の覆土を半分掘り下げて、土層断面の実測と観察所見の記載、写真撮影等の記録作業を行い、その後残り半分の覆土を掘り下げて全体を検出(完掘)し、写真撮影・平面図の実測を行った。焼土は小トレンチを入れて土層断面が入った全体を撮影し、土層図・平面図を作成した。一括土器・集石は竹バラや箸・串等を用いて個々の遺物の範囲や形状を明瞭化した上で、出土状況を実測・撮影した。

遺構に関連する遺物として、特に有意性があると判断したものに関しては、出土位置を図化・計測して取り上げている。土器片や黒曜石のフレイク・チップ等が微細なものについては、土ごとポリ袋に入れて取り上げ、水洗フルイ選別でそれらを回収した。

遺構等の記録は主に手実測で行い、遺構の平面図・断面図、調査区の土層図等を基本的に縮尺20分の1で作成した。ほか個体の形状を保った土器の出土状況図など、10分の1で作図したものもある。

断面図の基線はオートレベルを用いてきりの良い標高に水糸を張った。調査終了面(VII層)の地形測量はオートレベルを用いて2mごとに観測した。(影浦)

現地調査で使用したカメラは、6×7cm判のフィルムカメラ(マミヤ RZ67PRO II、フィルムは富士フィルムのNEOPAN ACROS100・FUJICHROME PROVIA100Fを使用)、デジタル一眼レフカメラ(ニコン D5500)、コンパクトデジタルカメラ(リコー WG-40 GPS)である。また大型遺構や遺跡全景などを対象に、カメラ・モニター分離式のデジタルカメラ(カシオ EX-FR100)を適宜利用した。

撮影は、遺構の検出状況(一部)・覆土堆積状況・完掘状況、遺物出土状況、調査区全景等について行った。ブレ・ボケ等を防止するため、撮影の際は三脚・レリーズを用いることを励行した。記録保存のため、同一カットを原則同じ条件(シャッタースピード・露出)で2コマ、作業用にコンパクトデジタルカメラで1コマ撮影し、これを1セットとした。またデジタル一眼レフカメラでは、RAWデータとJPEG画像を同時に記録した。被写体の撮影条件(撮影時刻、方向、撮影距離)が大きく転換する際にカラーチャートを写し込み、後の整理作業でRAW→TIFFデータ転換の際に使用した。

撮影の際には、撮影日・被写体名・被写体のあるグリッドと層位・撮影方向・カットNo・撮影者を野帳に記入し、これをもとに後日写真台帳を作成した。(阿部)

2 整理作業の方法

(1) 整理作業の方法

図面類の整理作業は、まず、現地調査時に作成した遺構平面図、断面図等の「原図」について担当した調査員が点検、修正を行い、原則的に「素図」を作成した。その後、素図をスキャナーで取り込みデジタルデータ化し、それを下図として、パソコン（OS：windows10）の描画ソフト（Adobe Illustrator CC）によりデジタルトレースを行った。

縮尺は、グリッド設定図等は600分の1等で作成したが、作図内容に応じて任意で変えているものもある。その都度スケールを付しているが、遺物分布図（図Ⅲ-11～13）に関してはページに収まるように任意で縮尺し、スケールも付けていない。

遺跡周辺を含む縮尺の大きい地形図は主に国土地理院発行の数値地図5万分の1等を使用し、適宜加筆した上で作成した。また、遺跡周辺の地形図等については、釧路開発建設部から提供を受けた用地実測図（縮尺1,000分の1）を使用し作成した。

遺構図は原則、縮尺20分の1で実測した原図（素図）を50%縮小した縮尺40分の1であるが、出土状況図など縮尺20分の1のものもある。

個々の地形図や遺構図の作成後に上記のパソコン及びソフトで報告書の版下を作成した。

現地調査時に撮影した遺構の写真については画像編集ソフト（Adobe Photoshop CC）とページレイアウトソフト（Adobe InDesign CC）を使用して版下を作成した。

遺構平面図等の原図・素図、撮影した写真のフィルム及びデジタルデータは整理・収納し、報告書刊行後は当センターが保管する。

一次整理作業

遺物整理は一次及び二次の二段階に分かれる。一次整理作業は2017年5～10月にかけて主に現地で行った。一次整理作業は、まず出土遺物をブラシ等で水洗して土を落とす作業を行い、次に調査員が分類作業を行った。土器であれば、時期（「群」「類」）、重さ、石器等であれば、器種（「石鏃」等）、石材（「黒曜石」等）、重さ、という項目ごとに分類し、さらに被熱の有無や使用痕について特記事項があれば備考欄に記載した。

出土地点や分類等は遺物カードに記入し、そのカードを基にして遺物台帳へ登録した。集石はカード記入の際、便宜的な遺構名として「S」という略称を用い、例えばⅢ層集石1であれば、「ⅢS-1」と記した。遺物台帳は最終的にパソコンの表計算ソフト（Microsoft Excel 2010）で作成し、遺物の集計作業等を行った。その後、土器は裏面に「遺跡名（略号：オ2）」・「出土地点（遺構名・発掘区）」・「遺物番号」・「層位」について白いポスターカラーで注記を行い、注記部分には保護用のニス塗った。

注記内容の例は、遺構VH-2の覆土出土、遺物番号1番の場合「オ2・VH-2・1・フク」となる（「フク」は覆土の略）。また、遺物番号の他に出土地点を記録した取り上げ番号がある場合は、取り上げ番号の方にNoを付して両方の番号を併記した。具体的に遺構（VH-2）の床出土、遺物番号65番、取り上げNo13の場合では、「オ2・VH-2・65・No13・ユカ」となる。包含層出土の例ではj22区のⅢ層出土、遺物番号1番の場合「オ2・j22・1・Ⅲ」となる。

注記は径が約2cm以下の小型の土器片や、器面が摩耗や剝離しているもの（残存状態「小破片」・「磨耗」・「剝離」）については行っていない。集石や包含層出土の礫・被熱礫については、遺物カード作成後、原則廃棄した。

土坑や焼土等の調査で剥片・碎片、骨片、炭化物等の微細遺物の採取を目的として土壌ごと取り上げポリ袋に入れたものについても、1mmメッシュのフルイによる水洗選別法で微細遺物を回収し、他の遺物同様、分類、カード記入、台帳登録作業を行った。

現地作業終了後、遺物をプラスチック製のコンテナに収納し、江別のセンターへ搬送した。

二次整理作業は2017年11月～2019年3月にかけて、江別市にあるセンターの整理作業棟で行った。作業内容は接合、復元、実測、作表、写真撮影等である。

土器の二次整理作業

遺物台帳および遺物カードの点検、台帳補正、接合、復元、実測図、拓影図作成・断面実測、属性の観察および計測を行った。接合作業にあたっては、出土状況の実測ないし写真撮影による記録を取ったもの、調査段階である程度まとまった出方をしたと把握されている土器を優先して進めた。

特に遺構出土の土器については、遺構に伴ったと考えられるもの、あるいはその使用時期を推測する上で傍証となり得るものを優先して復元したが、有意性があると判断した場合には、床面や坑底面の出土遺物より、覆土内の遺物のほうを掲載対象としたケースもある。よって床面・坑底面での出土は、それ自体で必ずしもその遺構にともなうことを保証するわけではなく、あくまで出土位置情報としての意味合いである。

遺構に伴う可能性がある程度判断できる遺物については文中においてその旨を記載した。包含層出土の土器は比較的残存状況が良好で型式ないし時期が判断できるもの、他に同じものがない特徴的な資料について掲載する方針で抽出した。接合した土器片は接着剤で固定し、補強が必要なものについては樹脂性の補填剤、(有)新成田総合社の『バイサム』を充填した。また、風化等により脆弱化が進んでいる土器については、同じく(有)新成田総合社による表面コート剤『ナチュラルコート』を塗布して、補強した。

掲載土器一覧には、時期、型式名、出土位置、層位、接合点数等を記載し、付着物等も必要に応じて備考欄に記載した。また、復元土器のうち完形品、あるいは口縁部から底部まで接合して器形復元ができたものを対象に、器高、体積高、口径、底径、重量、容量、復元率等の記録を取った(表Ⅳ-10～12)。体積高は液体が入る範囲の器高で、底面から口縁の一番低いところを測ったもの(突起部や高台を除く)。重量は復元前に接合できた土器の重量(実重量)を量り、復元後に補填材込みの重量(復元重量)を計量した。容量は、復元土器の中にシリカゲルを充填し、3,000mlのポリプロピレン手付きビーカーに移し替える方法で量った(表記はLリットル・小数点第1位まで)。リットルを kilogram に換算すれば、最大量の液体重量もおおよそ求められよう^註。

土器の復元率は目安である。全体のおよそ半分があると判断されれば50%、4分の3程度あると判断されれば75%、2分1程度を欠くと映れば95%と判断した。こうした手法が厳密さを欠くことは承知しているが、容量や重量との関係から残存率を示すことの有意性を考慮して行うことにした。

註 およその容量を求めるという観点から、口縁から底部まで接合できた土器に関して、径が推定されるものは、全体の半分程度の残存率でも、補填材を口縁部までしっかり回すことにした。また、口縁部から底部までほぼ復元できたもので、底面のみがないものは、底を塞いで計量した。その場合は掲載一覧表の備考に「底面無し」と記載している。

石器の二次整理作業

掲載遺物抽出の観点と方針は、基本的に土器と同じである。器種とその細分類を代表するものなどを選択して実測した。掲載遺物に対してはさらに長さ、幅、厚さ等を記録している。

遺構出土のものについては、遺構にともなう可能性が高いもの、あるいは遺構の廃絶・埋没過程の傍証として有意性があると判断されるものを重視した。包含層出土のものについては、欠損が少ないもの、時期的な特徴が表れているもの、他に同様のものが見られないものを抽出した。遺構出土の方で複数の類品を凶化掲載している器種については、包含層出土の側で大幅に割愛したものもある。

遺物の実測及びトレースは破片土器の断面図のトレースを除いて手作業で行っている。実測、トレース終了後、センター内の写場で報告書掲載用の写真撮影を行い、写真については画像編集ソフト（Adobe Photoshop CC）を使用して版下を作成した。

それらと併行して、遺物台帳を基に出土遺物の点数表（表Ⅲ－3～8）、発掘区ごとの遺物点数分布図（図Ⅲ－14～20）、掲載遺物一覧（表Ⅳ－10～24）等の表作成を行い報告書に掲載した。

報告書のレイアウトと事実記載の方針について

複数時期にまたがって遺構遺物を確認した遺跡の報告書においては、遺構が新しい時期から古い時期の順で掲載され、包含層出土の土器については型式が古い時期から新しい時期の順で掲載されるものが多い。今回は遺構についても古い時期の遺構から新しい時期の遺構へと時系列に沿った掲載とした。すなわち、Ⅴ層の縄文時代早期後半の遺構を先頭に置き、遺構出土の遺物、包含層としてのⅤ層出土の遺物。ついでⅢ層の遺構遺物は、縄文時代の北筒式の遺構遺物を先頭に置き、続縄文時代の下田ノ沢式の遺構と遺物、複数時期が重複する遺構と遺物、時期を特定しえない遺構と遺物、トビニタイ式期を含む擦文文化期の遺構と遺物、包含層としてのⅠ～Ⅲ層出土の遺物、Ⅰ層の炭窯跡、家畜馬の墓、近現代の遺物という順である。時期でまとめたため遺構番号順にはなっていないが、時期別遺構一覧表（1）～（3）（表Ⅲ－9～11、P.54～56）に各遺構の掲載ページを記載したので参照願いたい。また、住居跡の調査にともなって連動して検出した土坑や焼土に関しては、時期違いでも例外的にまとめて掲載したものもある。各遺構の覆土に関しても、ある程度推定できるものについては、下から上の順で埋没過程を記載している。

遺構出土の遺物については、資料として状態が良好なものを優先的に抽出して掲載した。その上で、遺構の構築時期にともなうと考えられる遺物がどれかを判断できるものについては極力記載している。

温根沼2遺跡ではいわゆる遺物包含層からの出土遺物よりも遺構覆土からの出土物が多い。さらに、複数の遺構覆土においては、特定の遺物が偏って出土する傾向も窺われている。それらは凍上など自然現象でも起こりうることはあるが、人為的な成因も可能性の一つとして挙げておきたい。

記録類・遺物の収納保管

遺物は、掲載遺物と未掲載遺物に分け、掲載遺物は報告書図版に対応するように収納した。

掲載土器のうち復元個体は、1点ずつエアキャップで梱包し、掲載番号を明示して数個体ずつ段ボール箱に収納した。破片は1点ずつ小袋に入れて掲載番号を記載し、図版ごとに中袋にまとめた。掲載土器、未掲載土器とも、基本的には遺構・遺物包含層に大別した上で、検出層位ごと（Ⅲ層とⅤ層の別）、遺構あるいは発掘区ごとに収納した。包含層の出土遺物は分類ごとに分けた上で、発掘区ごとに収納した。

石器の収納は、掲載遺物は図版に対応するように、1点ずつ小袋に入れた後、図版ごとに中袋に収

納した。未掲載遺物は、1点ずつ小袋に入れた後、土器と同じ振り分け方で収納している。

これらの遺物は、遺跡の所在地である根室市教育委員会に搬送し保管される。また、現地調査および整理作業で作成した各種図面、写真フィルム、遺物整理台帳は、道立北海道埋蔵文化財センターで保管する。

(影浦)

(2) 遺物の分類

・土器

以下のように分類した。本遺跡で出土している土器型式は、特にゴチック強調体で示している。

I群 縄文時代早期に属する土器群

a類：貝殻腹縁文・条痕文・沈線文のある土器群。テンネル式などに相当するもの。

b類：撚糸文・絡条体圧痕文・短縄文などが施される土器群。

東釧路式系土器群（東釧路Ⅱ式・東釧路Ⅲ式・コッタ口式・中茶路式・東釧路Ⅳ式）

II群 縄文時代前期に属する土器群

網文式。押型文土器。朱円式・温根沼式などに相当するもの。

網走式・シュブノツナイ式などに相当するもの。

III群 縄文時代中期に属する土器群

a類：押型文系平底土器に相当するもの。

b類：モコト式・北筒Ⅱ式（トコロ6類）に相当するもの。

IV群 縄文時代後期に属する土器群

a類：北筒Ⅱ式（トコロ5類）、北筒Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ式に相当するもの。

b類：手稲式・鮎潤式・エリモB式などに相当するもの。

c類：堂林式・御殿山式・栗沢式などに相当するもの。

V群 縄文時代晩期に属する土器群

a類：大洞B・BC式に相当・併行するもの。

b類：大洞C1・C2式、幣舞式などに相当・併行するもの。

c類：大洞A・A'式、緑ヶ岡式などに相当・併行するもの。

VI群 続縄文時代に属するもの

a類：フシココタン下層式、興津式などに相当するもの。

b類：後北A・B・C₁、下田ノ沢式などに相当するもの。

c類：後北C₂-D式、北大式などに相当するもの。

VII群 擦文式土器

VIII群 トビニタイ式土器

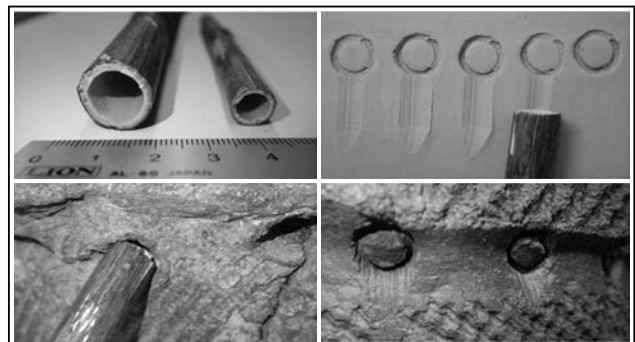
II群の温根沼式は、当該地域で従来、前期初頭の型式と目され、II群a類と分類されてきたが、当センターで調査報告をした『トーサムポロ湖周辺堅穴群』B地区H-2（温根沼式の住居跡）床面直上で採取した木炭を試料とした年代測定値は、5,090±40、5,090±30等、5,000～5,100年前の値でまとまりを示した（北埋調報 317・pp.493-504・2015）^註。そして、温根沼式とほぼ同時期に知床方面で展開したと考えられている朱円式の年代値も、斜里町ボンシュマトカリペツ9遺跡（斜里調報XⅣ・

2001)、大栄6遺跡(斜里調報X・1999)等で、およそ5,000～5,200年前の値でまとまりを示している。これが道南では前期後半(Ⅱ群b類)の円筒下層a式期の年代値であることから、今回はa類、b類と細分せず、あえてⅡ群でとどめた。なお、当遺跡で温根沼式の住居跡から採取した試料2件で放射性炭素年代測定を行ったところ、補正年代値で4,420±30、4,500±30yrBPと、2件とも縄文時代中期前葉～中葉頃の値が出たことを付記する。詳細はV章1節を参照願いたい。

Ⅲ群a類は本遺跡では出土していないが、押型文系平底土器とした。熊谷仁志によると常呂川河口押型文Ⅱ群の一部が充てられている(熊谷2008)が、常呂川河口遺跡において、北筒Ⅱ式(トコロ6類)の包含層(Xa・Xc)層の下、薄層をはさんでXⅡ層から出土していること。その年代値が4,360±60年であり、なおかつ押型文Ⅱ群において口縁部内面にも地文を施文している特徴(常呂町教委2000)が北筒式と共通することから、その一部がⅢ群a類にかかる可能性があるかもしれないにせよ、主体はⅢ群b類である可能性が高いと考えられる。ここでⅢ群a類を押型文系平底土器としたのは、道東において中期を通じて押型文系平底土器が存続した可能性がみられるからである。

北筒式は北筒Ⅱ式のうち古手のトコロ6類がⅢ群b類、新手のトコロ5類がⅣ群a類であるが、胴部片などで識別できないものが相当数あった。これらは便宜的にⅢ群b類～Ⅳ群a類と分類した。北筒Ⅲ式はⅢB式、羅臼式のみが出土。北筒Ⅳ式は出土していない。北筒Ⅳ～Ⅴ式については、近年、放射性炭素年代値の分析で後期中葉に相当する3,400～3,600yrBP($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)を示す結果がまとまりをもって出てきた(別当賀一番沢川遺跡・北埋調報355・2019)。当遺跡でも北筒式の住居であるⅢH-7出土の炭化材を分析に掛けたところ3,450±20yrBP($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)という結果であった。分類はⅣ群a類としたが、あるいは末期の北筒式がⅣ群b類(後期中葉)、道央で手稲式が展開していた頃に及ぶ可能性があることを付記する。

なお、現場周辺にはエゾノシシウドはじめセリ科植物が多く自生していたが、越冬した立ち枯れのエゾノシシウドを採取したところ、全体に乾燥・硬化しており、中空の茎を直線的に折損することができた(一本でも部位により様々な径が取れる)。北筒Ⅲ式などで特徴的な、中空工具による円形刺突文に合わせたところ、符節を合わせたように適合した。北筒式の施文に用いられた刺突具の一つの可能性が考えられる(図版Ⅲ-1)。



図版Ⅲ-1 エゾノシシウドの茎と円形刺突文

Ⅵ群の主体は下田ノ沢式である。下田ノ沢Ⅰ式とⅡ式の細別については、突瘤文の消滅を画期と目する宇田川洋の案(宇田川1977)及びそれを支持する熊木俊朗の見解(熊木2000)に従った。下田ノ沢Ⅰ式はⅥ群a類とすべきものであろうが、胴部片では復元個体として優勢なⅡ式と見分けるのが困難であったため、下田ノ沢Ⅰ式も一括してⅥ群b類とした。本遺跡出土の下田ノ沢Ⅰ式は後半段階、あるいはⅡ式との過渡的資料の可能性もある。なお、下田ノ沢式の年代については、後北A式・B式併行とされることから、紀元1、2世紀頃を予想していたが、 ^{14}C 年代の分析結果は紀元前1、2世紀の値に集中した。分析を行った(株)加速器分析研究所により「1～3世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線IntCalに対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある(尾畷2009、坂本2010など)。その日本産樹木のデータを用いてこれらの試料の測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある」とのコメントが記載

されている（V章1節）。

トビニタイ式の細分は『チャシコツ岬下B遺跡』（斜里町教育委員会 2011）の田代分類案に準拠した。トビニタイ中間型（Ⅱ型式）が出土している。

註 「そして、トーサムボロ遺跡の資料や温根沼式・東釧路V式も朱円式の仲間と考えられている」（熊谷 2001）。熊谷はこれらの押型文尖底土器を前期前半の土器としたが、後に押型文系土器を、円筒土器下層式～円筒土器上層式に対応させた大沼忠春（大沼 1986）に準拠する形で「前期後半～中期前半に編年され」とし、前期後半初頭と位置付けた（熊谷 2008）。

・石器等

剥片石器では石鏃、石槍またはナイフ、石錐、つまみ付きナイフ、ナイフ、両面調整石器、スクレイパー、二次加工・使用痕のある剥片（U・Rフレイク）がある。また、縄文時代早期の石刃鏃石器群として、彫器（彫刻刀型石器）、削片、石刃などがある。

礫石器では磨製石斧、石のみ、たたき石、すり石、石鋸、砥石、台石・石皿、加工痕のある礫がある。その他として礫、被熱礫、土製品がある。土製品には耳栓がある。石製品は出土していない。

なお用語であるが、「石器等」は剥片石器・礫石器およびフレイク・チップの総称で「礫・原石類」を加えていない。「石器」は「石器等」からフレイク・チップ、石核、石刃・削片を除いたものである。以下、「石器」の分類基準に関して特に説明を要するものについて述べる。

いわゆる尖頭器として分類されるもののうち、石鏃と石槍またはナイフの区別は、長さあたりの重さが重要と考えられたことから、重さ／長さにより分類し、数値0.7未満と0.7以上とで分けた。

つまみ付きナイフは、調整剥離によってつまみ部の「えぐり」が作出されたもの。ナイフは、平行な柄があるもの。

礫石器には複数の用途を兼ねたものが多く見られたが、基本的に主な使用痕と大きさとで器種分類を行っている。例えば、砥石の使用面に台石様の使用痕が複数見られた。しかし、実際に台石のように据え置いて使用したものか、たたき石のように手持ちで使用したものかは判断できなかった。また砥石片の縁辺の割れ面に、たたき痕が観察されるものも少なからずあった。これについても整形を主目的としたものなのか、たたき石的に使用した結果なのか、あるいはその両方なのかは判別できなかった。（影浦）

・金属製品

金属製品は、棒状鉄製品が2点（1個体）出土した。棒状鉄製品はトビニタイ文化期の竪穴住居跡（ⅢH-4）の覆土中から出土し、出土地点の計測、出土状況の撮影などを行った後に取り上げた。取り上げ後は乾燥させ、乾燥剤を入れた密閉容器内で保管した。その後、鉄製品の保存処理及び分析を公益財団法人 岩手県文化振興事業団に委託した。保存処理及び分析が終了した後に実測図作成、写真撮影を行った。分析結果についてはV章7節を参照していただきたい。（広田）

・動物遺存体

焼失住居跡（ⅢH-1）をはじめ、住居の炉跡・焼土等において焼けた動物骨が検出した。これらのうち大きなものは実測、地点計測、写真撮影を行った上、取り上げ番号を付して回収したが、魚骨等細かいものは土ごと取り上げて水洗し、篩ふるいに掛けて回収した。次いで、動物骨と魚骨とに大別し、

椎骨、指骨など判別できる部位で分類。判別できない微細片は不明とした。その後、良好な試料については(株)パレオ・ラボに同定を依頼した。分析結果はⅤ章5節を参照していただきたい。(影浦)

3 調査結果の概要 (図Ⅲ-11~20、表Ⅲ-2~11)

全部で計4,040m²を調査した。検出した遺構は竪穴住居跡19軒、土坑44基、集石12基、焼土19か所、土器集中2か所、フレイク集中1か所である。他に近現代の遺構として炭窯跡2基と家畜馬を埋葬した土坑が1基確認されている。遺物は土器が12,951点、石器等が10,922点、礫等が31,485点。その他に焼成粘土塊20点、近現代の遺物34点が出土し、総計55,412点が出土した。遺構遺物の検出層は摩周テフラの堆積層であるⅣ層を境にして上下に分かれる。

下位の黒色土層(Ⅴ層)では、縄文時代早期後半の東釧路式系の遺構遺物を確認した。遺構は竪穴住居跡3軒、土坑19基、集石1基、焼土3か所、土器集中1か所である。遺物はⅤ~Ⅶ層で土器等約4,800点、石器等約1,000点、礫が約2,200点。計約8,000点が出土した(主な包含層はⅤ層)。土器は小片が多いが、大半が東釧路Ⅱ式であった。Ⅴ層検出遺構の多くは東釧路Ⅱ式の時期と考えられる。なお、ⅤP-4出土の底部片は東釧路Ⅲ式、土器集中1か所はコッタロ式の1個体であった。

上位の黒色土層(Ⅲ層)からは、縄文時代前期から擦文文化期後期の遺構遺物を確認した。遺構は、縄文時代前期の温根沼式期の竪穴住居跡が1軒。縄文時代中期末から後期前葉の北筒式期の遺構として竪穴住居跡4件、土坑7基、集石6か所。続縄文時代の下田ノ沢式期の遺構として竪穴住居跡6軒、土坑13基、土器集中1か所、北大式期の可能性がある焼土が1か所。トビニタイ式期の竪穴住居跡が2軒、擦文文化期後期の遺構として竪穴住居跡2軒、集石1か所、焼土1か所を検出した。他に縄文時代前期から擦文文化期後期の間のどの時期か特定できなかった遺構として、土坑5基、集石4か所、焼土14か所、フレイク集中1か所がある。

下田ノ沢式期の竪穴住居跡であるⅢH-1は焼失家屋であった。北側の壁際に異地性の焼土ブロックが堆積しており、焼土中からヒグマの焼骨がまとまって出土した。ヒグマに関する儀礼行為が行われた可能性が窺われる。

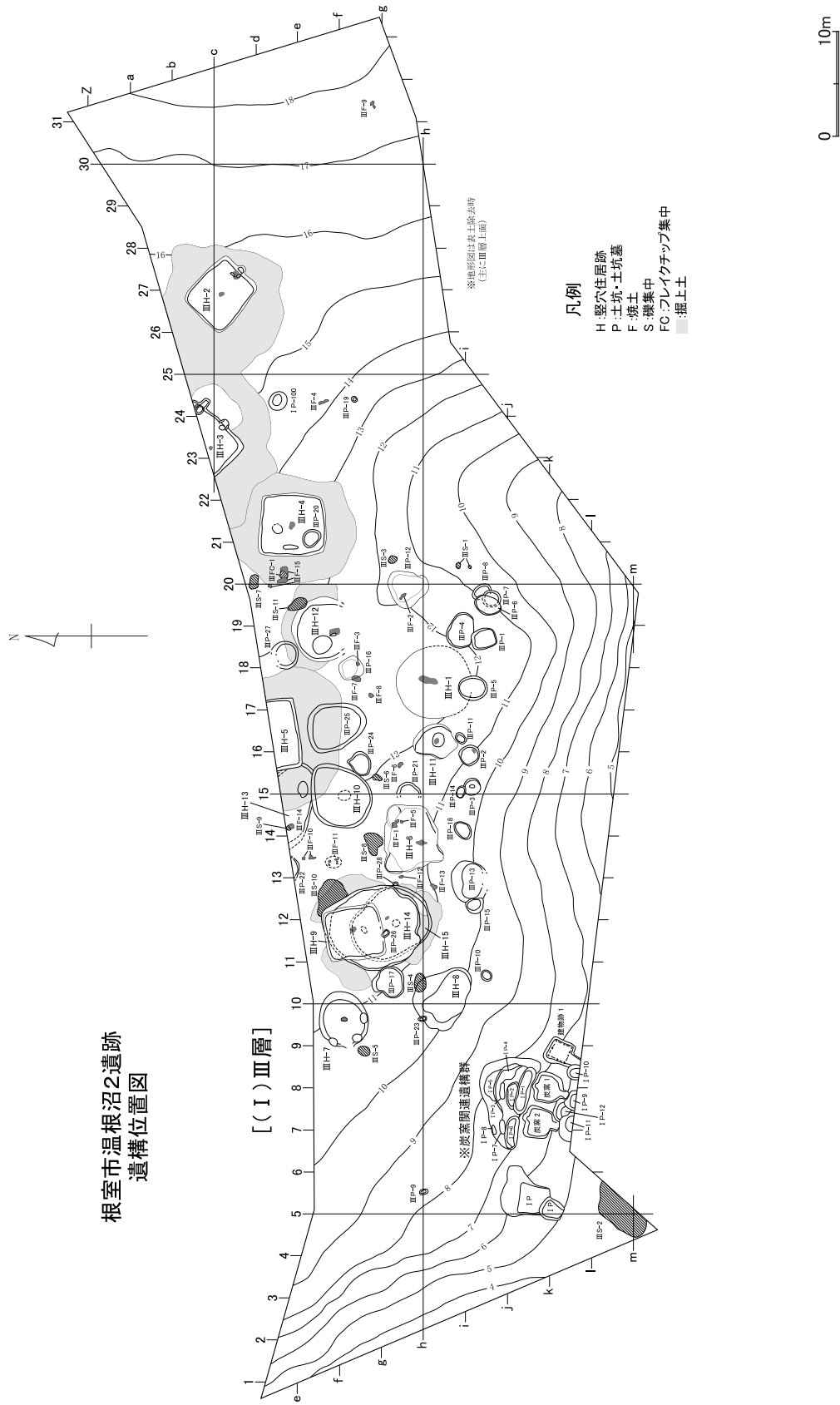
擦文文化期後期の住居跡であるⅢH-2の床面からはイヌ科や哺乳綱の骨。カマド1焼土からイヌ?の基節骨、ニシン科の腹椎、炉跡のHF-1からサケ科の歯が出土した。同じく擦文文化期後期のⅢH-3では南東壁にカマド2基が検出され、ヒグマやイヌ?の動物骨、ニシン科、カレイ科等の魚骨が出土している。

遺物はⅠ~Ⅲ層の遺構・包含層で土器等約8,200点、石器等約9,900点、礫等約29,300点が出土した。土器の主体は続縄文時代の下田ノ沢式であり、約4,500点とⅠ~Ⅲ層出土土器の半分強を占めている。

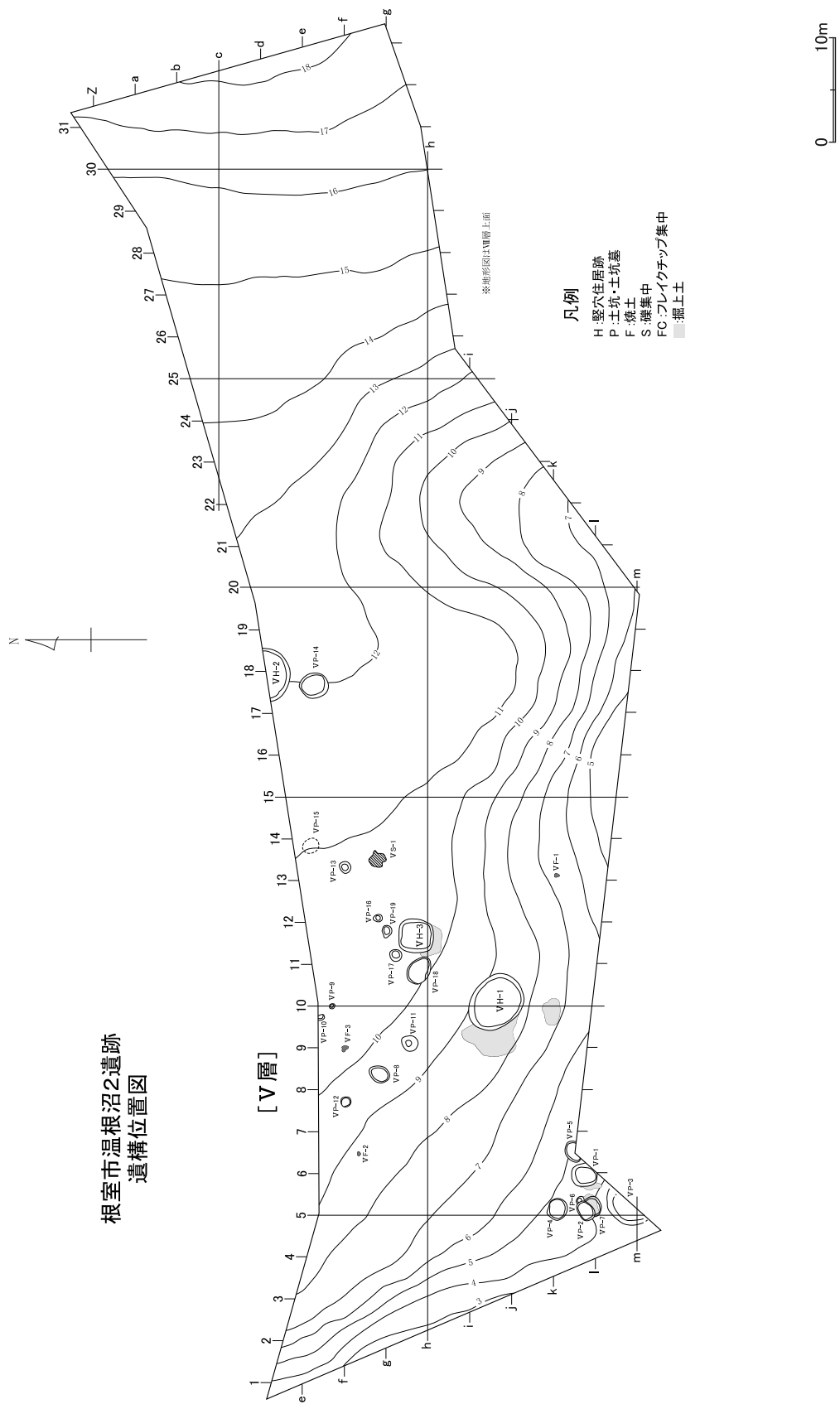
根室半島で調査例の少ないトビニタイ式期の住居跡および遺物が検出したことと、下田ノ沢式期の遺構遺物がまとまって検出したことは当該期の良好な事例として特筆されよう。(影浦)

表Ⅲ-2 遺構数一覧

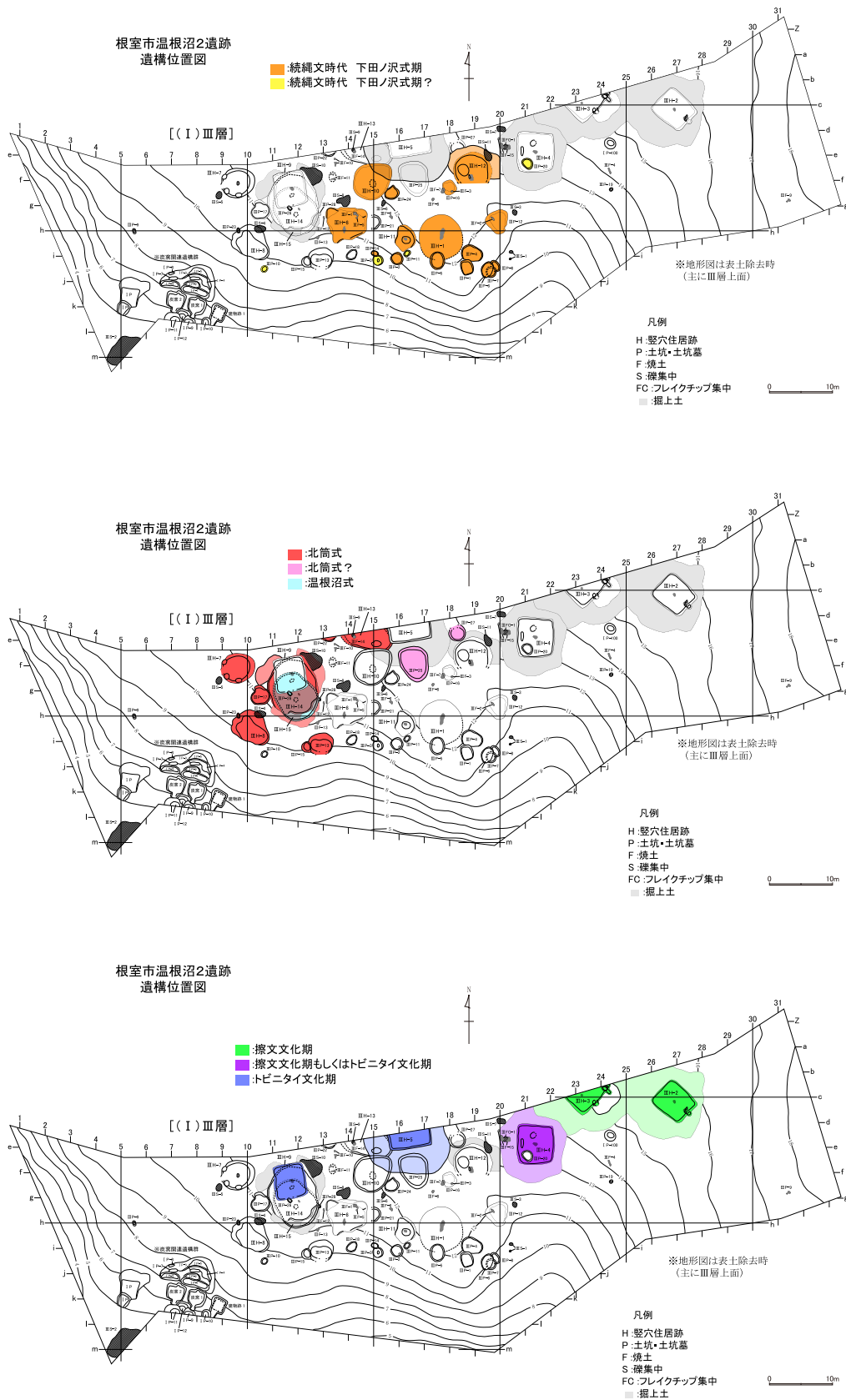
	縄文時代 早期後半	縄文時代 前期	縄文時代 中期後期	続縄文時代	トビニタイ 式期	擦文文化期 後期	近現代	不明	総計
竪穴住居跡	3	1	4	6	2	2		1	19
土坑	19		7	13				5	44
集石	1		6			1		4	12
焼土	3			1		1		14	19
土器集中	1			1					2
フレイク集中								1	1
炭窯関連遺構							2		2
家畜馬の墓							1		1
総計	27	1	17	21	2	4	3	25	100



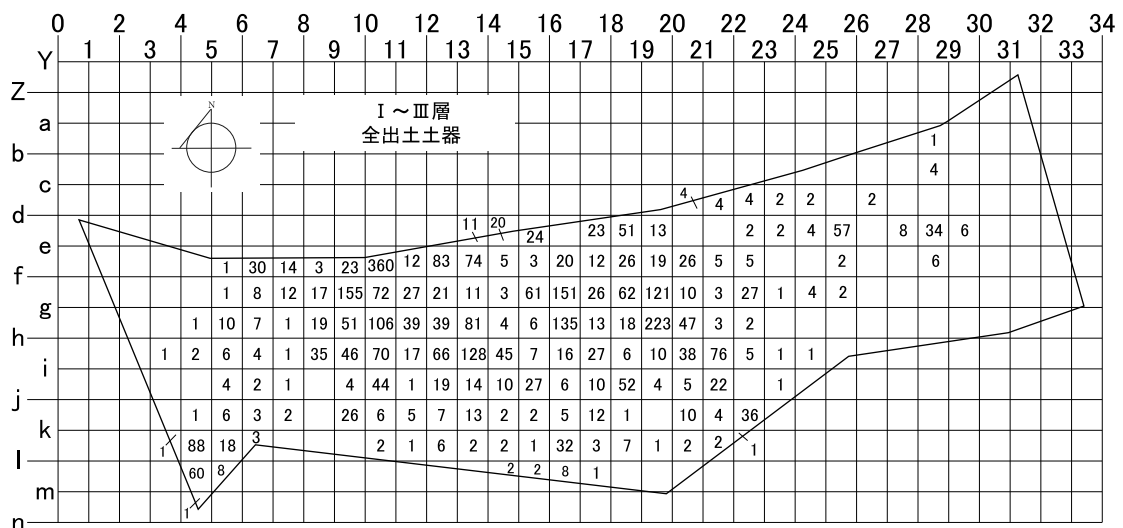
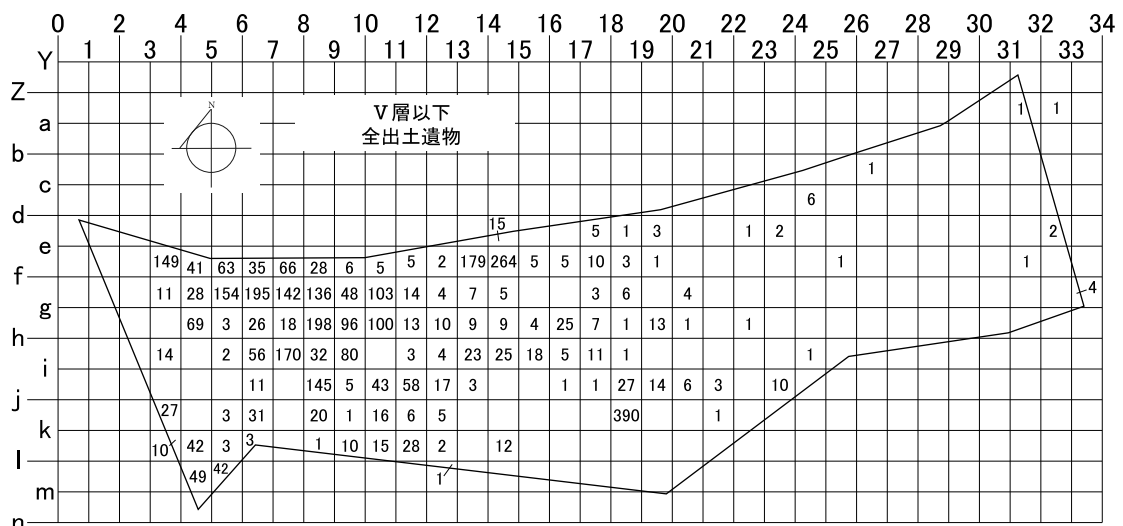
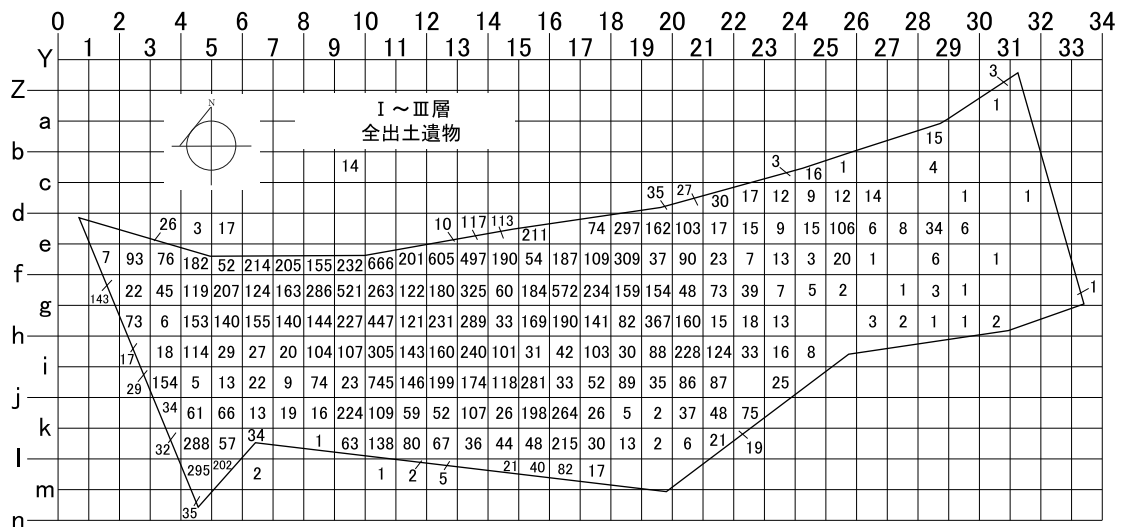
図Ⅲ一11 I・III層遺構位置図



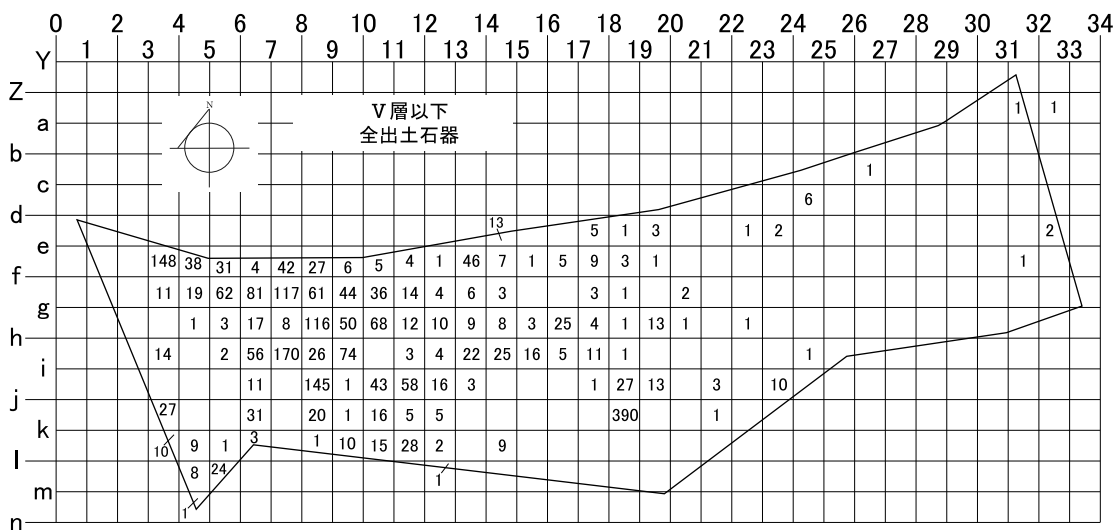
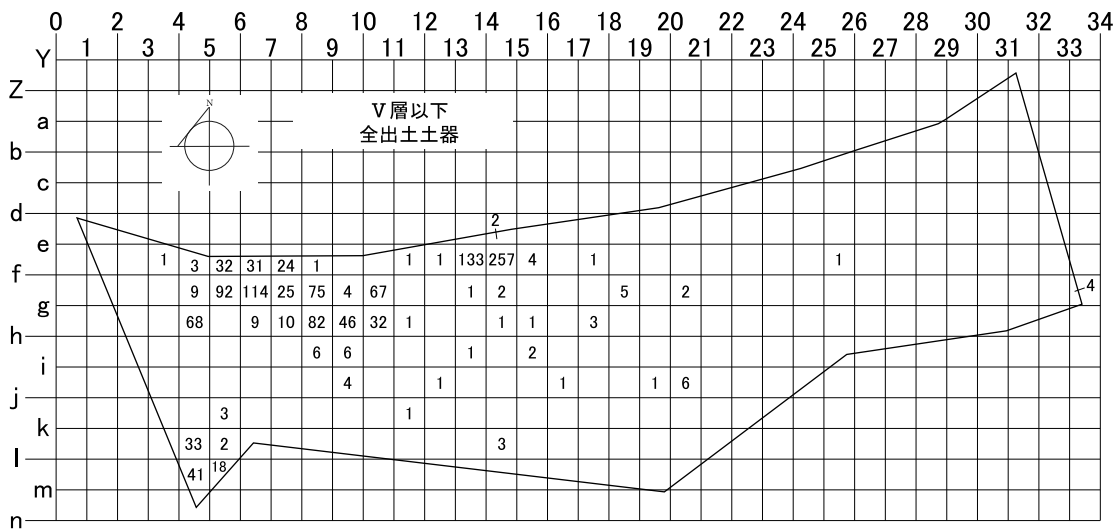
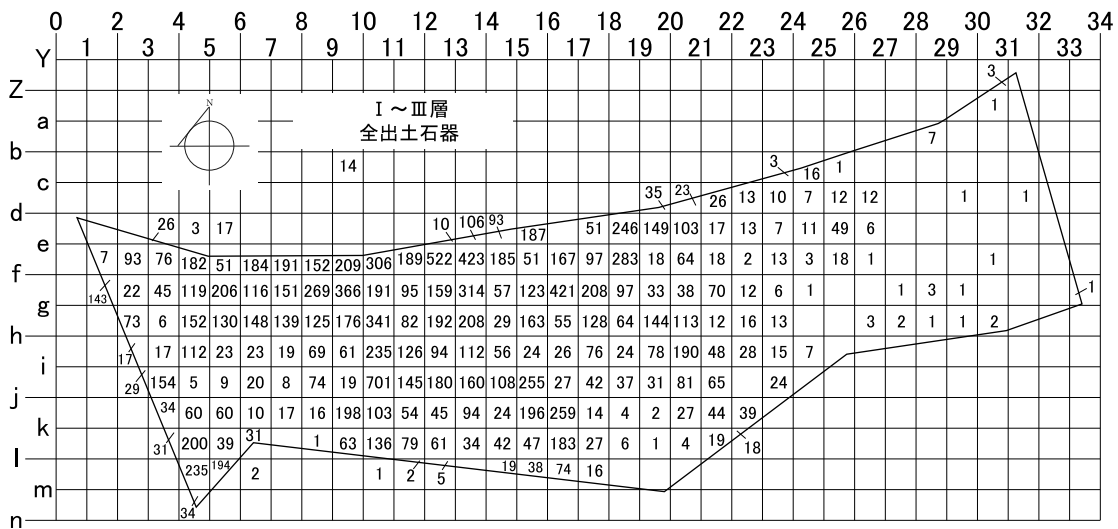
図III-12 V層遺構位置図



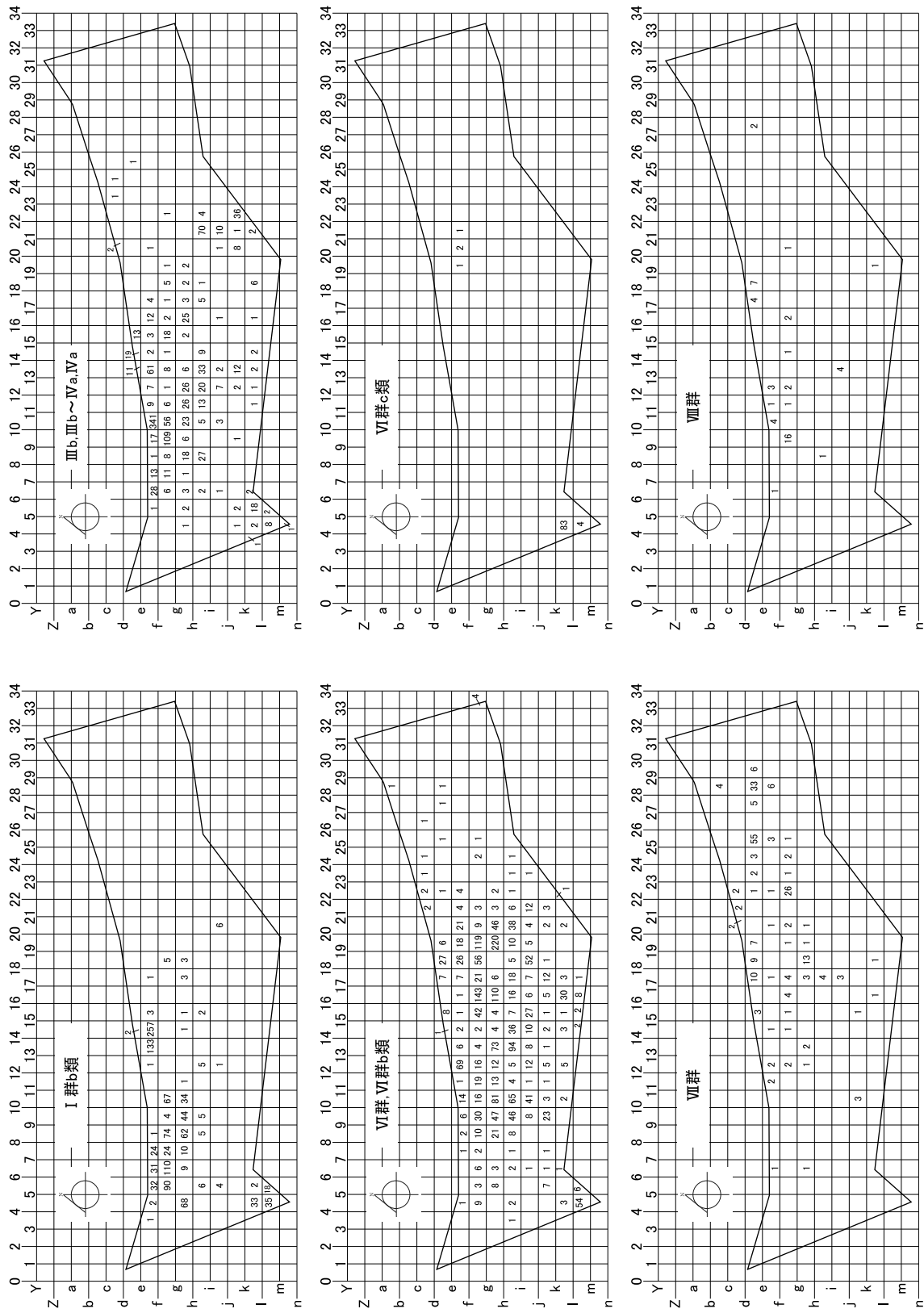
図Ⅲ-13 遺構位置図 (Ⅲ層時期別)



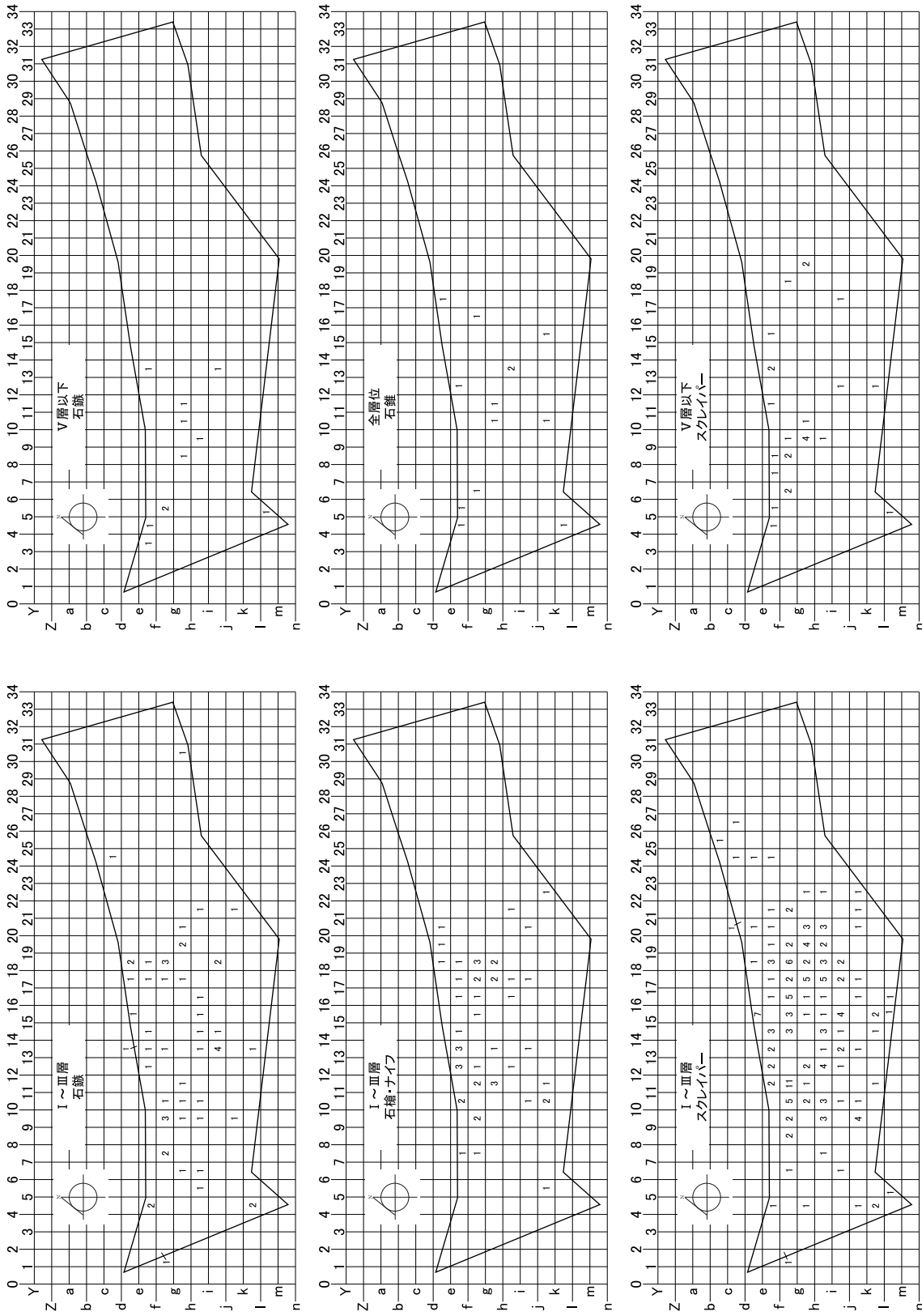
図Ⅲ-14 包含層出土遺物点数分布図(1)



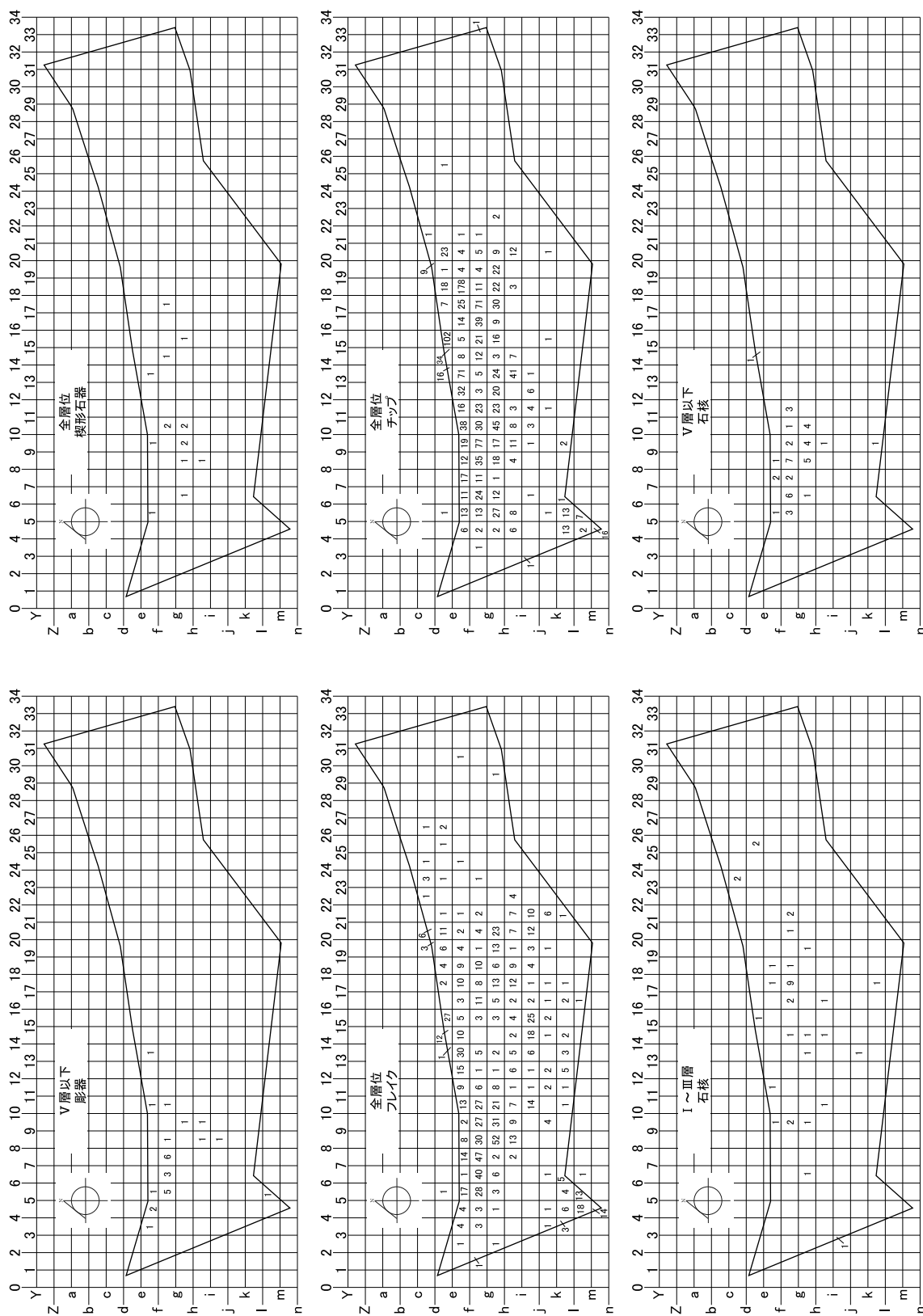
图Ⅲ-15 包含層出土遺物点数分布图(2)



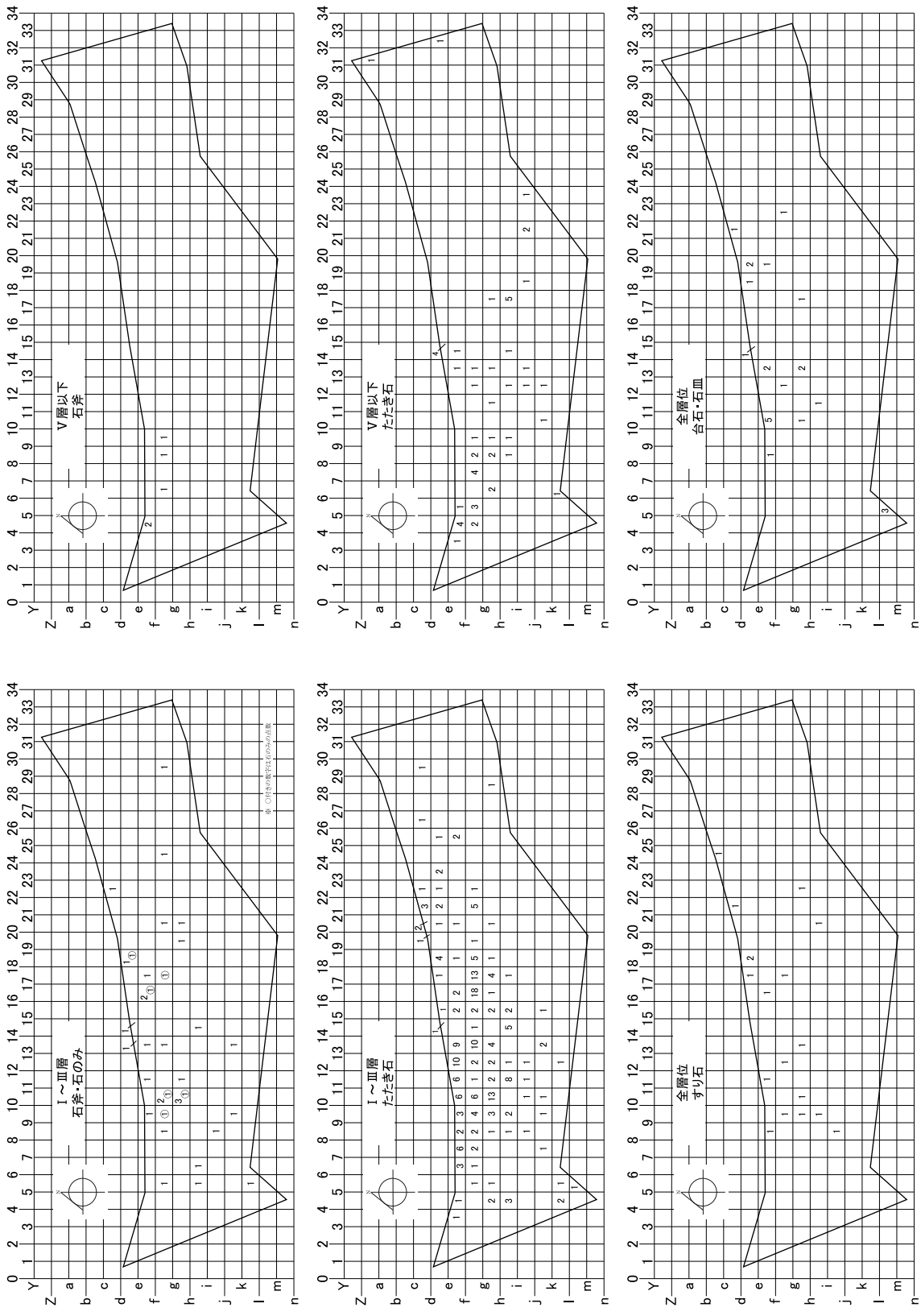
図III-16 包含層出土器点数分布図



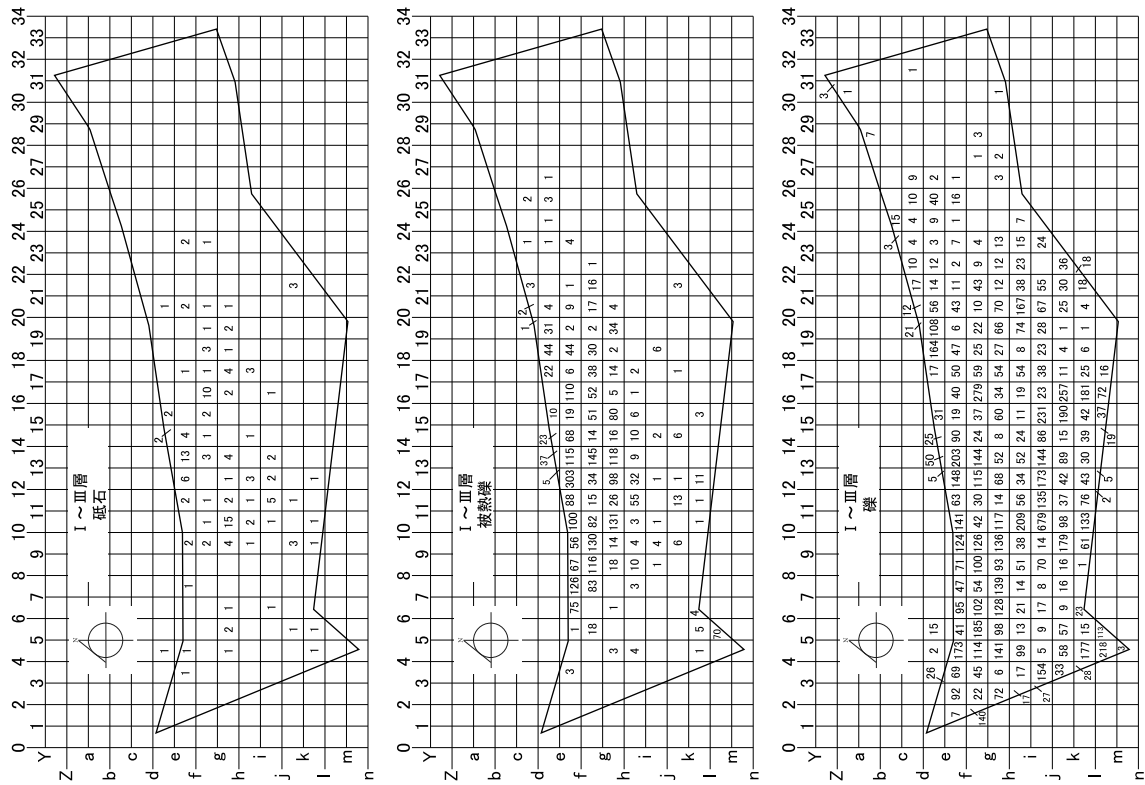
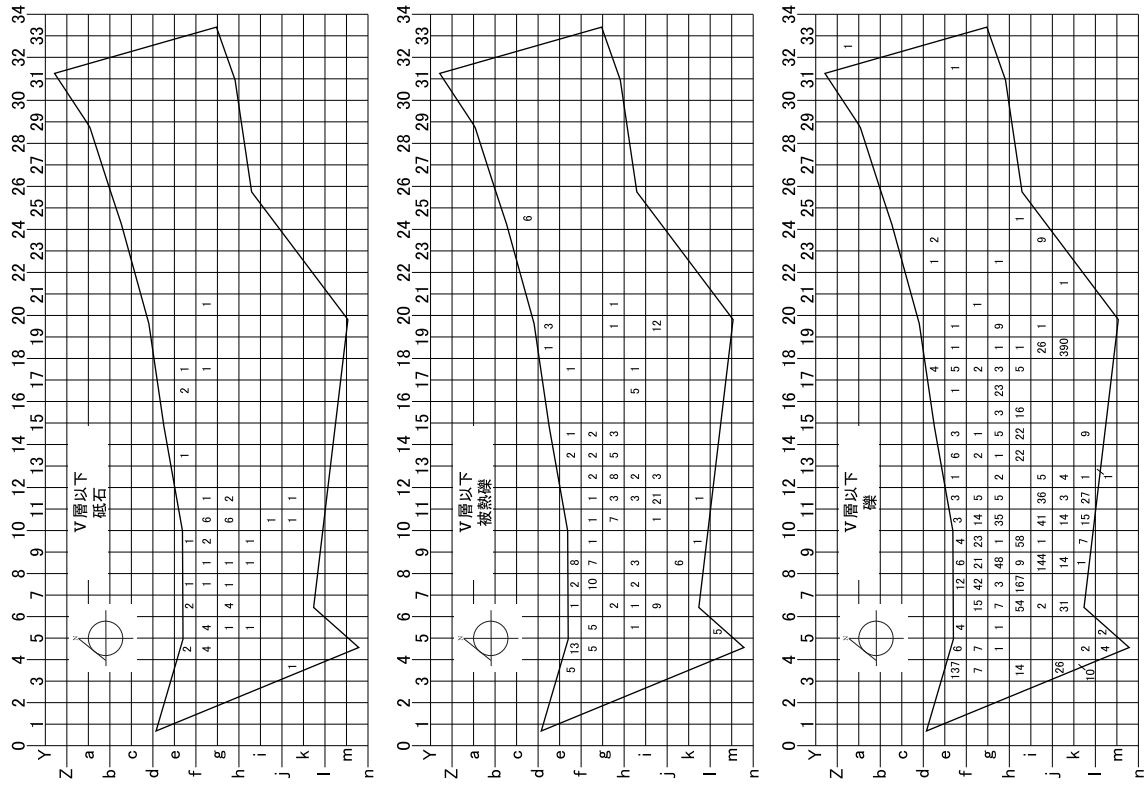
図Ⅲ-17 包含層出土石器点数分布図(1)



図III-18 包含層出土石器等点数分布図(2)



図Ⅲ-19 包含層出土石器点数分布図 (3)



図III-20 包含層出土石器・礫点数分布図(4)

表Ⅲ-9 時期別遺構一覽(1)

遺構名	区分	推定時期	発掘区	検出層位	重複・近接等	備考 形状・付属遺構・出土遺物	年代測定結果 (yrBP δ13C 補正值)	掲載ページ
V H-1	縄文時代早期後半の遺構	縄文時代早期後半 東銅路Ⅱ式	i・j 9・10	Ⅳ上		おおむね円形、覆土の大部分がⅣ層由来。床面中央に大型砥石。その下に太い柱穴を1本検出。他、床面から小形の台石が出土している。	未分析。	57~60
V H-2		縄文時代早期後半 東銅路Ⅱ式	d17・18	Ⅳ上	Ⅲ P-27	Ⅳ層除去後、くぼみとして検出。全体の約1/2調査。平面は直径約5mの円形と推定される。柱穴は確認できず、床面中央付近で炉跡を検出。遺物は床直・床面から、東銅路Ⅱ式土器、小型磨製石斧、フレイク・チップなどが出土。特に彫器が多い。	未分析。	60・61
V H-3		縄文時代早期後半 東銅路	g・h 11・12	V	Ⅲ H-14・15	隅丸長方形に近い楕円形、覆土に黄色土、覆土最下層に炭化材残存、炉・柱穴確認できず。	1件提出。6,810±30。	60・62・63
V P-1		縄文時代早期後半 東銅路Ⅱ式	k5・6	V	なし	皿状、覆土土器あり。	未分析。	63~65
V P-2		縄文時代早期後半 東銅路Ⅱ式	k4・5	V	V P-6・7	皿状、覆土土器あり。覆土中より東銅路Ⅱ式土器。同一個体とみられるが大半は粉状。	未分析。	63~65
V P-3		縄文時代早期後半 東銅路Ⅱ式	l4	V	なし	半分、調査区外。判然としない。	未分析。	66・67
V P-4		縄文時代早期後半 東銅路Ⅲ式	k6	V	なし	攪乱で大半の覆土を欠失し、平面形のみ確認。	未分析。	64・67
V P-5		縄文時代早期後半 東銅路Ⅱ式	k4・5	V	なし	半分近くが調査区外に欠ぶ。	未分析。	64・65・68
V P-6		縄文時代早期後半 東銅路Ⅱ式	k5・6	Ⅶ	V P-2	円形の小さい土坑。誤って覆土が掘りぬかれたため、土層断面の記録はない。遺物は出土していない。	未分析。	68・69
V P-7		縄文時代早期後半 東銅路Ⅱ式	k・15	Ⅶ	V P-2	楕円形の小さい土坑。土層断面は、誤って上位を掘りぬいたため覆土下のみの記録。遺物は出土していない。	未分析。	68・69
V P-8		縄文時代早期後半 東銅路Ⅱ式	f8	V	なし	覆土中から東銅路Ⅱ式の土器片、石鎌、石鏃、有溝砥石。たたき石多数出土。墓の可能性もある。	未分析。	69・70
V P-9		縄文時代早期後半 東銅路Ⅱ式	e9	Ⅵ	Ⅲ H-7	小型円形、覆土に東銅路Ⅱ式土器一括。	未分析。	69・71・72
V P-10		縄文時代早期後半	e9	Ⅵ	なし	小型楕円形、覆土に中型礫5点。	未分析。	71・72
V P-11		縄文時代早期後半	g9	V	なし	円形、V層上面で深くくぼみ。	未分析。	72・73
V P-12		縄文時代早期後半	e・f8	Ⅵ	なし	円形、浅い。	未分析。	72・73
V P-13		縄文時代早期後半	e・f13	V	なし	小型円形。浅い。	未分析。	72・74・76
V P-14		縄文時代早期後半	e17	Ⅳ下	なし	坑底付近に人頭大の扁平礫1点。	1件提出。6,790±30。	75・76
V P-15		縄文時代早期後半 東銅路Ⅱ式	e13	V	なし	東銅路Ⅱ式土器を伴う。掘りすぎで大部分を欠失。	未分析。	75・76
V P-16		縄文時代早期後半 東銅路Ⅱ式	f12	Ⅵ	Ⅲ H-9・14・15	小型楕円形、覆土中に東銅路Ⅱ式土器片。	未分析。	76~78
V P-17		縄文時代早期後半	g11	V	Ⅲ H-14・15	円形、V層上面で深くくぼみ。	未分析。	77・78
V P-18		縄文時代早期後半	h10	Ⅵ	Ⅲ H-15、V H-3	径約2m楕円形、浅い、地山礫多数。	未分析。	74・78
V P-19		縄文時代早期後半 東銅路Ⅱ式	g11・12	Ⅵ	Ⅲ H-14・15・Ⅲ P-26	覆土中に東銅路Ⅱ式土器片。	未分析。	77・78・81
V S-1		縄文時代早期後半	f13	V上	なし	円礫~亜角の被熱礫多数、周辺にも礫あり。	未分析。	79・81
V F-1		縄文時代早期後半	k13	V	なし		未分析。	80・81
V F-2	縄文時代早期後半	f6	V	なし		未分析。	80・81	
V F-3	縄文時代早期後半	f8・9	Ⅵ	なし	周辺に大型礫あり。	未分析。	80~82	
土器集中1	縄文時代早期後半	コッタロ式	l4	V				79・81・82
Ⅲ H-15	縄文時代前期~中期	縄文時代前期 温根沼式	f・g・h 10~12	Ⅲ	Ⅲ H-9・14	径約7m楕円形、地床炉・柱穴・小土坑あり。覆土下に石囲い炉?、温根沼式土器、覆土中黄色土(屋根土?)中に焼土・炭化材・ベンガラ集中あり。	2件提出。4,420±30、4,500±30。予想より600年ほど新しい。が、この年代値に該当するような遺物は出土していない。	216~220
Ⅲ P-26		縄文時代前期~中期	g11	Ⅳ	Ⅲ H-15・V P-3	土坑墓。楕円形、坑底ベンガラ散布、石棺またはナイフを伴う。覆土埋め戻し。	1件提出。4,520±30。Ⅲ H-15とはほぼ同じ年代値である。	216・220・221
Ⅲ H-7	北筒式の遺構	縄文時代後期初頭 北筒Ⅳ~Ⅴ式	e・f9	Ⅲ	V P-9	ほぼ円形・床面平坦(北筒期としてはよく整っている)、地床炉があり、柱穴めぐる。壁寄りに袋状土坑3基。床面付近に円礫集中と被熱した北筒Ⅳ~Ⅴ式土器があり、覆土にTa-c堆積。	1件提出。3,450±20。縄文時代後期中葉の年代値。北筒Ⅴ式の値か。通例に従ってⅣaと分類したが、Ⅳbの可能性もある。	105~109
Ⅲ H-8		縄文時代後期初頭 北筒Ⅲ式	g・h・i 9・10	Ⅲ	Ⅲ P-3・Ⅲ S-4	不整楕円形、床面段差あり、地山礫多数、覆土に北筒Ⅲ式のまとまり。上層で続縄文下田ノ沢式土器および礫多出、くぼ地利用の活動の跡。	未分析。	106・110~113
Ⅲ H-13		縄文時代中期末 北筒Ⅱ式 (トコロ6類)	e・f 13~15	Ⅲ	Ⅲ H-10・Ⅲ F-14・Ⅲ S-9 検討結果、旧Ⅲ P-22をⅢ H-13の西の立ち上がりとした。	判然としない。上部の土層が緩やかにくぼみ、火山灰がレンズ状に堆積していたこと。ベルトの何か所かに壁と思しき立ち上がりがあったことから住居を想定して調査を進めた。	1件提出。4,060±20。遺構は判然としないが、年代値は予想通り。	101~105
Ⅲ H-14		縄文時代後期 北筒式	e・f・g 10~12	Ⅲ	Ⅲ H-9・15	約9m楕円形、床面付近に複数焼土、柱穴多数、床面付近から北筒Ⅲ式のまとまり、下田ノ沢式もあり。覆土にやや厚い黄色土(屋根土?)および炭化材。	2件提出。3,500±20、3,450±20。いずれも北筒式の年代値。予想通りではあるが、出土している石器は続縄文の特徴を持つものが多いように映る。	211~215
Ⅲ P-9		縄文時代中期末~後期 北筒式	g・h5	Ⅲ中	なし	石皿・台石下の土坑、坑底はV層。	未分析。	113・114
Ⅲ P-13		縄文時代後期初頭 北筒Ⅲ式	h・i12・13	Ⅲ	Ⅲ P-15	覆土に北筒Ⅲ式大型破片。	未分析。	114~116
Ⅲ P-15		縄文時代後期初頭 北筒式	i12	V	Ⅲ P-13	円形、Ⅲ H-13より新しい。	未分析。	114~116
Ⅲ P-17		縄文時代後期初頭 北筒Ⅲ式?	g10	Ⅲ	Ⅲ H-9・14・15 V P-17	不整楕円形、覆土に焼土・炭化材片・Ⅲ H-14の黄色土(掘り上げ土または屋根土)。	未分析。	115・117・119
Ⅲ P-23		縄文時代後期初頭 北筒式?	g・h9	V	Ⅲ H-23	小型楕円形、覆土に珪化木あり。	未分析。	118・119
Ⅲ P-25		縄文時代後期初頭 北筒式?	e16・17	Ⅲ	Ⅲ H-5掘上土下	Ⅲ H-5南側で検出、大型で西側形状不明。	未分析。	119~121
Ⅲ P-27		縄文時代後期初頭 北筒式?	d18	Ⅳ	V H-2・Ⅲ H-12	楕円形、長軸約2.5m、遺物少量。	未分析。	118・121
Ⅲ S-1		縄文時代後期初頭 北筒式?	h20	Ⅲ	なし	被熱破砕礫集中、周辺にも礫あり。	未分析。	121・122
Ⅲ S-2		縄文時代後期初頭 北筒式?	l4	Ⅲ	なし	円礫~亜角礫多数、北筒式伴う。	未分析。	121・123
Ⅲ S-4		縄文時代後期初頭 北筒式?	g10	Ⅲ	なし	円礫・亜角礫の集中、破砕礫がほとんど。	未分析。	124・125
Ⅲ S-5		縄文時代後期初頭 北筒式	f8	Ⅲ	なし	Ⅲ H-7南西掘上土、被熱破砕礫。	未分析。	124・125
Ⅲ S-8		縄文時代後期初頭 北筒式	f13	Ⅲ上	なし	Ⅲ H-6に近接。複数の小さなまとまりを一括。	1件提出。3,780±20。	125
Ⅲ S-9		縄文時代中期末 北筒Ⅱ式 (トコロ6類)	d14	Ⅲ	Ⅲ H-13、Ⅲ F-14	トコロ6類土器を伴う。	未分析。	102・103・105

表Ⅲ-10 時期別遺構一覧(2)

遺構名	区分	推定時期	発掘区	検出層位	重複・近接等	備考 形状・付属遺構・出土遺物	年代測定結果 (yrBP δ ¹³ C 補正值)	掲載ページ
Ⅲ H-1	統縄文時代の遺構	統縄文時代・下田ノ沢Ⅱ式期	g・h 16~18	Ⅲ	素図作成時の検討結果、旧Ⅲ P-5はⅢ H-1の張り出し部として変更した。	焼失家屋。炭化材多数検出。樹種同定の結果、トネリコ属、ハンノキ属、モミ属、コナラ属、クルミ属、カツラ等、現在でも周辺で自生する植物であった。井桁状に検出した柱材はハンノキ属とトネリコ属、屋根材の可能性がある板状の炭化材はコナラ属とカツラであった。 中央部に板状で囲った細長い炉。柱穴は最大約70を数える。おそらく一時のものでなく柱の差し換え等を繰り返した結果である。 北側の壁際に堆積していた焼土層中からヒゲマ焼骨が検出した。軸骨、中節骨、基節骨、脛骨、四肢骨、寛骨があり、何らかの儀礼行為が行われた可能性が窺われる。 覆土中からは拳大の被熱礫、礫が多数出土した。 床面から台石・石皿、たたき石等、スクレイパーがまとまって出土している。	3件提出。2,020±20、1,980±20、2,030±20。予想年代1,900BPより古い結果。	139~148
Ⅲ H-6		統縄文時代・下田ノ沢Ⅱ式期	g・h13-14	I	なし	北東部テラス状。炉の直上の覆土において倒立土器出土(無文)。 柱穴は南西の一段低い面に集中。北西部と北東部の壁が外に少し張り出す。 掘削によってやや判然としないが、南西部もやや舌状に張り出していたとみられる。	1件提出。2,310±20。予想より400年近くも古い。古木効果か?	148~153
Ⅲ H-10		統縄文時代・下田ノ沢Ⅱ式期	e・f14・15	Ⅲ	Ⅲ H-13	床面から土器検出。中央の床面が焼成酸化を呈するが、炉石はない。	1件提出。2,160±20。予想よりずっと古い。古木効果か?	153~157
Ⅲ H-11		統縄文時代・下田ノ沢Ⅱ式期	g・h 15・16	Ⅲ	Ⅲ F-16	北東部テラス状。南西が一段低い。中央の付属土坑を埋めた上に炉? 覆土上部が掘り上げ土状。	1件提出。850±20。縄文文化期後期の年代値。この住居は、形状は下田ノ沢Ⅱ式であるが、掘り方がカタカタして非常に粗い。あるいはくぼみとして残っていた下田ノ沢Ⅱ式期の住居跡を縄文文化期の人間が掘り起こして住居として再利用した可能性も考えられる。	157~160
Ⅲ H-12		統縄文時代・下田ノ沢Ⅱ式期	d・e・f 18・19	Ⅲ	Ⅲ P-27	南側約1/4は削平、平面は長軸約6mの楕円形と推定される。床面西側が一段低くなる。壁外側の主に東側に黄褐色土主体の盛りつけがみられ、盛りつら後に壁を構築した可能性が強い。炉の周辺には礫と礫抜き取り痕があり石囲い炉と推定される。覆土中～床面にかけて下田ノ沢Ⅱ式土器が複数個体出土している。石器は石鏃、石槍またはナイフの類、ラウンドスクレイパー等剥片石器が目立つ。HP-8から石槍またはナイフ。HFC-2では石槍またはナイフ片多数出土。	1件提出。3,670±20。結果は北筒式の年代値である。	160~164
Ⅲ H-16		統縄文時代・下田ノ沢Ⅱ式期	h・i18・19	Ⅲ下		焼成礫、炭化材、土器片(下田ノ沢Ⅱ式)。 柱穴がある。旧Ⅲ P-4。	1件提出。2,130±20は予想より古い。古木効果?	164~166
Ⅲ P-1		統縄文時代・下田ノ沢Ⅰ式期	i18	Ⅳ上	Ⅲ P-4	焼成礫、炭化材、土器片(下田ノ沢Ⅱ式)。	1件提出。2,160±20は予想より古い。古木効果?	166~167
Ⅲ P-2		統縄文時代・下田ノ沢Ⅱ式期	h・i 15・16	Ⅳ上	なし	炭、魚骨、焼土粒、覆土中礫、黒曜石。	1件提出。2,170±20は予想より古い。古木効果?	166・168 ・169
Ⅲ P-3		統縄文時代・下田ノ沢Ⅱ式期?	h・i14・15	Ⅳ上	Ⅲ P-14	坑底平坦、SP-1礫・炭あり。	未分析。	167~169
Ⅲ P-6		統縄文時代・下田ノ沢Ⅰ式期	i19	Ⅲ中	Ⅲ P-7・8	礫、土器片、炭等出土。	未分析。	169~170
Ⅲ P-7		統縄文時代・下田ノ沢Ⅰ式期	i19	Ⅲ中	Ⅲ P-6・8	礫、土器片、炭等出土。	未分析。	169~171
Ⅲ P-8		統縄文時代・下田ノ沢Ⅰ式期	i19	Ⅲ中	Ⅲ P-6・7	礫、土器片、炭等出土。	未分析。	170~171
Ⅲ P-10		統縄文時代・下田ノ沢Ⅱ式期	i10	Ⅲ上	なし	覆土から統縄文土器出土。	未分析。	172~173
Ⅲ P-11		統縄文時代・下田ノ沢Ⅰ式期	h16	Ⅳ上	Ⅲ H-11	覆土1層がMa、坑底直上から下田ノ沢Ⅱ式土器。	未分析。	172~173
Ⅲ P-12		統縄文時代・下田ノ沢Ⅰ式期	g・h 19・20	Ⅳ上	Ⅲ S-3・Ⅲ F-2	北東部がテラス状、南西部が一段下がる。覆土下部に拳大の被熱礫多数。炭も少量検出。掘り込み深い(平均70cm)。覆土上位で採取した骨は焼けていないカレイの魚骨であった。	1件提出。3,450±20は北筒式の年代値。コンタミか?	172-174 ・175
Ⅲ P-14		統縄文時代・下田ノ沢Ⅱ式期	h15	Ⅲ	Ⅲ P-3・Ⅲ S-4	坑底直上から石鏃・スクレイパー・石のみほか出土。歯?あり 一土坑墓。	未分析。	175~176
Ⅲ P-16		統縄文時代・下田ノ沢Ⅱ式期	f17・18	Ⅲ	Ⅲ F-3・7	覆土上部に下田ノ沢Ⅱ式の小型土器。炭化材、礫が覆土中から検出。	1件提出。2,130±20。予想より古い。	177~178
Ⅲ P-20		統縄文時代・下田ノ沢Ⅱ式期	e20・21	ⅢH-4床面	Ⅲ H-4	Ⅲ H-4床面で検出、覆土中から下田ノ沢Ⅱ式土器出土。	未分析。	248・252 ・271
Ⅲ P-24		統縄文時代・下田ノ沢Ⅰ式期	f15	Ⅳ	なし	覆土下から下田ノ沢Ⅱ式土器。掘り込み浅い。剥片石器を各種伴う。	1件提出。2,110±20。予想より古い。	178-179 ・181
Ⅲ F-2		統縄文時代 北大Ⅰ式期?	g19	Ⅲ	Ⅲ P-12	壁穴のくぼみを利用した焼土。	1件提出。1,450±20。わずかであるが、温根沼2遺跡では北大式が出土している。	180-181
土器集中2	統縄文時代・下田ノ沢Ⅰ式期	f19	Ⅲ				180-181	
Ⅲ H-4	トビニタイ式期の遺構	トビニタイ式期	d・e 20~22	I	Ⅲ P-20	くぼみとして検出。平面は一辺約6mの隅丸方形で、地床炉、焼土、柱穴、掘り上げ土などがみられる。カマドはない。遺物は覆土中から主に統縄文土器・礫が出土。礫は大型のものが多く、床直上からは小規模な礫集中が出土。詳細な時期は不明だが、形状、覆土中の礫の出土状況などからトビニタイ式期と推定される。	1件提出。1,140±20。	246~252
Ⅲ H-5		トビニタイ式期	d15・16	I	掘り上げ土の下に、Ⅲ H-11・13・Ⅲ P-25・Ⅴ H-2	くぼみとして検出。全体の約1/2調査。平面は一辺約7mの隅丸方形と推定。調査範囲では炉はなく柱穴、掘り上げ土がみられる。柱穴は壁際に多く、南壁には斜位の杭状ビットが列状にみられた。遺物は覆土中から小～大型の礫が多数出土。床面からは礫集中とトビニタイ式土器1個体がつぶれた状態で出土。	2件提出。940±20、1,070±20。130年差で割れたが、1,070±20はHP-1採取の炭なので、こちらがこの住居の正しい年代値と思われる。	252~259

表Ⅲ-11 時期別遺構一覧(3)

遺構名	区分	推定時期	発掘区	検出層位	重複・近接等	備考 形状・付属遺構・出土遺物	年代測定結果 (yrBP δ ¹³ C 補正值)	掲載ページ
Ⅲ H-2	擦文文化期の遺構	擦文文化期後期	b・c 25~27	I	なし	くぼみとして検出。平面は約5.8×5.2mの隅丸方形で、カマド、地床炉、焼土、柱穴、掘上土がみられる。柱穴は4本の主柱穴と壁際の小柱穴がある。遺物は少量だが、覆土下部から炭化材、床直から礫集中、擦文土器が出土。床面からイヌ骨や哺乳類の骨。カマド1焼土からイヌ?の基節骨、ニシン科の腹椎など、HF-1からサケ科の歯が出土した。	2件提出。930±20、900±20。	259~265
Ⅲ H-3		擦文文化期後期	b・c 22~24	I	なし	くぼみとして検出。全体の約1/4調査。平面は一辺が8mを超える隅丸方形と推定される。カマド2か所、焼土、柱穴、掘上土がみられる。柱穴は大型と小型がある。遺物は少量だが、カマドそばから擦文土器が出土。カマド1・2から出土した骨片について分析を行った結果、イヌ?、ヒクマヤニシン科、カレイ科等の魚骨と同定された。	2件提出。930±20、960±20。	265~270 ・272
Ⅲ S-7		擦文文化期後期?	c・d 19・20	Ⅲ上	なし	Ⅲ H-4に近い位置、拳大の円~亜角礫。	未分析。	271・272
Ⅲ F-16		擦文文化期後期	h16	Ⅲ H-11 覆土	Ⅲ H-11	Ⅲ H-11の覆土上位。その上に掘り上げ土状の土がある。	未分析。	158・160
Ⅲ H-9	時期を特定できない遺構	縄文時代後期前葉以降~トビニタイ式期以前	e・f 10~12	Ⅲ	Ⅲ H-14・15	浅い隅丸方形、炭化材多出、焼土複数。上層に楕円・亜角礫の集中4か所。全面礫出土。トビニタイ式のほか下田ノ沢式・北筒式あり。	2件提出。2件とも3,470±20。縄文時代後期中葉の年代値。上部は、トビニタイ式期の遺構と考えられるが、試料の炭自体は北筒V式の時期であった。	207~211
Ⅲ P-18		縄文時代~続縄文時代	h・il3・14	Ⅲ~Ⅳ	なし	礫数点。	未分析。	232・233
Ⅲ P-19		続縄文時代~擦文文化期	f24	Ⅲ	なし	小型、遺物なし。	未分析。	232・234
Ⅲ P-21		縄文時代中期後半から続縄文時代	g14・15	Ⅳ	なし	西半欠片。	未分析。	232~234
Ⅲ P-28		縄文時代前期~後期前葉	g12	Ⅳ	Ⅲ H-15	小型円形、Ⅲ H-15より新しい。	未分析。	220・ 222・223
Ⅲ S-3		縄文時代中期末の北筒式期以降	g20	Ⅲ上	Ⅲ P-12	Ⅲ P-12の東に近接。円礫~亜角礫、50cm四方程度。	未分析。	235・236
Ⅲ S-6		縄文時代中期末の北筒式期以降	f15	Ⅲ	なし	円礫~亜角礫のまとまり。	未分析。	235・236
Ⅲ S-10		縄文時代前期または後期前葉	e12	Ⅲ	Ⅲ H-14	Ⅲ H-14北東に隣接、押型土器あり。	未分析。	222・223
Ⅲ S-11		縄文時代中期末の北筒式期以降	e19	Ⅲ	Ⅲ H-12	Ⅲ H-12北東に隣接。	未分析。	235・236
Ⅲ F-1		続縄文時代下田ノ沢式期~擦文文化期	g14	Ⅲ	Ⅲ H-6	Ⅲ H-6のくぼみ上の焼土。	未分析。	235・237
Ⅲ F-3		縄文時代中期末の北筒式期以降	f18	Ⅲ	Ⅲ P-16	下田ノ沢式期の土坑の開口部に近接。	未分析。	235・237 ・239
Ⅲ F-4		縄文時代~擦文文化期	e24	Ⅲ	なし	周辺から遺物出土せず時期不明。	未分析。	238・239
Ⅲ F-5		続縄文時代下田ノ沢式期~擦文文化期	g14	Ⅲ	Ⅲ H-6	Ⅲ H-6のくぼみ上の焼土。	未分析。	237・239
Ⅲ F-6		縄文時代前期以降	g15	Ⅲ	なし	小焼土。	未分析。	238・239
Ⅲ F-7		縄文時代前期以降	f17	Ⅲ	Ⅲ P-16	Ⅲ P-16に近接する。	未分析。	239・240
Ⅲ F-8		縄文時代前期以降	f17	Ⅲ	なし	時期は検出面から推考。	未分析。	239~241
Ⅲ F-9		縄文時代前期以降	f31	Ⅲ	なし	周辺から遺物出土せず時期不明。	未分析。	240・241
Ⅲ F-10		縄文時代前期以降	e13	Ⅲ	なし	複数の小焼土を一括。水道管の擾乱で寸断。	未分析。	241・242
Ⅲ F-11		縄文時代前期以降	e13	Ⅲ	なし	複数の小焼土を一括。	未分析。	241・242
Ⅲ F-12		縄文時代前期以降	g12	Ⅲ	Ⅲ H-6	斑状の小焼土。Ⅲ H-6の開口部西側に近接。他の場所で焚いた焼土の可能性が考えられる。	未分析。	241・243
Ⅲ F-13	縄文時代前期以降	h12	Ⅲ	なし	斑状の焼土。他で焚かれた可能性。	未分析。	241・243	
Ⅲ F-14	縄文時代中期末の北筒式期以降	d14	Ⅲ	Ⅲ H-13	斑状の焼土。他で焚かれた可能性。	未分析。	242・243	
Ⅲ F-15	縄文時代~続縄文時代	d19・20	Ⅲ	なし	複数の焼土、Ⅲ FC-1隣接。	未分析。	238・244	
Ⅲ FC-1	縄文時代~続縄文時代	d20	Ⅲ	なし	Ⅲ F-15隣接、黒曜石フレイク・チップ。	未分析。	238・243 ・244	
炭窯1	近代の遺構	近代	j・k7・8	I	-	焚口・炭焼土残存、周辺に柱穴。	未分析。	310~314
炭窯2		近代	j・k6・7	I	-	焚口・煙道・炭・焼土ほか残存。	未分析。	310・311 ・315・316 ・318
I P-1		近代	j7・8・j8	Ⅳ	-	炭窯1関連土坑。	未分析。	312・320
I P-2		近代	i7・j7・8	Ⅳ	-	炭窯1関連土坑。	未分析。	312・320
I P-3		近代	j7・8・j8	Ⅳ	-	炭窯1関連土坑。	未分析。	312・320
I P-4		近代	j7・8・j8	Ⅳ	-	炭窯1関連土坑。	未分析。	312・320
I P-5		近代	j7・8・j8	Ⅳ	-	炭窯1関連土坑。	未分析。	312・320
I P-6		近代	i・j6・7	Ⅳ	-	炭窯2関連土坑。	未分析。	312・320
I P-7		近代	i6・7	Ⅳ	-	炭窯2関連土坑。	未分析。	312・320
I P-8		近代	i6・7	Ⅳ	-	炭窯2関連土坑。	未分析。	312・320
I P-9		近代	k7	Ⅶ	-	炭窯1関連土坑。	未分析。	317・320
I P-10		近代	k8	Ⅶ	-	炭窯1関連土坑。	未分析。	317・320
I P-11		近代	k6・7	Ⅶ	-	炭窯2関連土坑。	未分析。	317・320
I P-12		近代	k7	Ⅶ	-	炭窯2関連土坑。	未分析。	317・320
建物跡1	近代	j・k8・9	Ⅶ	-	「炭焼き小屋」、柱穴・土坑多数。	未分析。	318~320	
I P-100	近現代	d24	Ⅳ	-	馬埋葬、蹄鉄出土、ほか遺物無。	未分析。	321・322	

IV章 遺構と遺物

1 V層 縄文時代早期後半の遺構と遺物

(1) 概要

縄文時代早期後半の遺構はV層で検出したものである。西側の台地上（特に縁辺部）から緩斜面部にかけてと、調査区南西端にかかる低位平坦部において分布している。住居跡3軒（VH-1～3）、土坑19基（VP-1～19）、集石1か所、焼土3か所（VF-1～3）を確認した。覆土内から東釧路Ⅱ式が出土したもの（VH-2、VP-1・2・8・9・15・16・19）が多い。

VH-1は床面中央に大きな砥石があり、その横で柱穴跡を1か所検出した。VH-2は彫器が床面を中心にまとまって出土している。VH-3は炭化材を検出したが、遺物がほとんど出土しなかった。VH-2と3では柱穴を確認していない。

土坑は、平面形が円形のもの、楕円形のもの、隅丸方形のものなど様々ある。VP-1～7は調査区南西端の標高4～5mの低位面で近接して検出した。VP-2から東釧路Ⅱ式の小片が多数出土し、VP-4から東釧路Ⅲ式の底部片が出土したほか、遺物はほとんど出土していないが、規模や形状が近似しているものが多いことから、東釧路Ⅱ～Ⅲ式期と考えられる。VP-3に関しては、あるいは沢が削った自然地形かもしれない。VP-8～18は標高10m付近の西側台地上において検出した土坑である。VP-8は覆土中より土器片がまとまって出土したほか、たたき石、有溝砥石、石鏃、スクレイパー、石核等が出土した。出土遺物の内容から墓である可能性も考えられる。VS-1は被熱礫の集石。よく焼けて赤化している。同時期の類例として、隣接する温根沼3遺跡からも同様の集石が確認されている（道埋文 2017）。

（影浦）

(2) 遺構

VH-1（図IV-1・2、表Ⅲ-9・IV-1、図版2、3-1・2）

位置 i9・i10・j9・j10区 平面形態 楕円形

規模 5.80×4.62/5.01×3.96/0.75m

確認・調査 調査区西側の緩斜面上、i9区の包含層を掘り下げたところ、摩周テフラの拡がりが見られた。緩斜面上位のⅢH-8の調査の後、テフラを除去し、楕円形のくぼみを確認した。十字状のトレンチ調査後に黒色土を掘り下げ、Ⅶ層と思われる黄褐色土を一旦検出した。しかし検出面が波状で色調が一部やや暗色であることから、再びトレンチ調査を行い黄褐色土を掘り下げたところ、しまりの強いⅦ層黄褐色土の平坦面および壁面を検出したため、竪穴住居跡と判断した。また周辺を精査したところ、南側～西側で掘り上げ土を検出した。

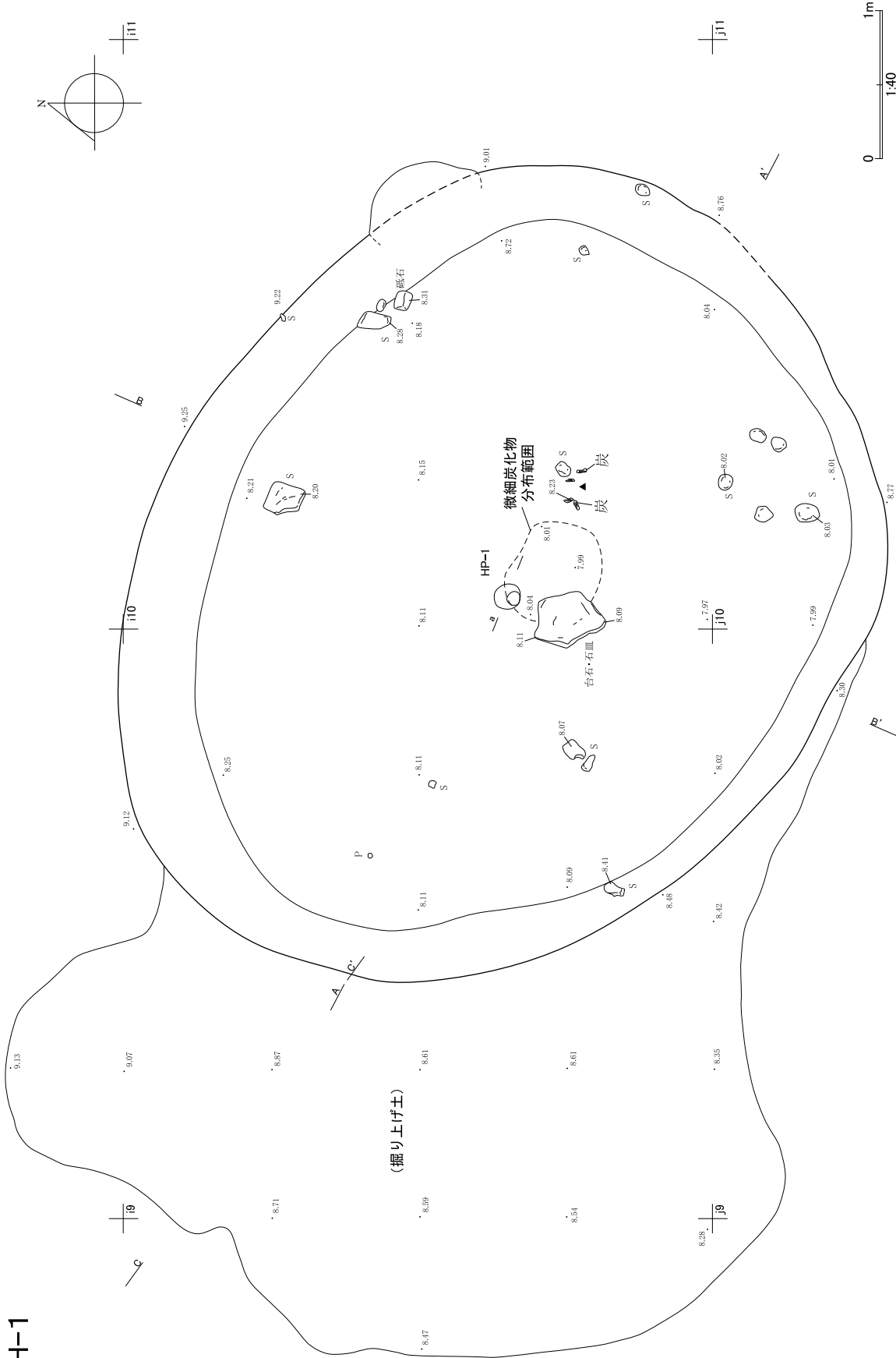
遺物の取り上げ後、炉や柱穴の検出に努めたが、柱穴1基を検出するにとどまった。

覆土 上位（1・4層）は黒褐色でV層に相当し、薄層だが壁際は厚みがある。下位（2・3・5～11層）はⅦ層黄褐色土を基調とした土壌が10～50cm堆積する。掘り上げ土はⅦ層の土壌を主体とし、最大厚は15cmを測る。黄褐色～褐色を呈して破碎礫をやや多く含んでいる。

床面・壁 床面は地形に沿って傾斜するⅦ層上位～下位を掘り込み、平坦である。壁は急に立ち上がり、緩斜面上方の北東壁は最大75cmの高さがあり、下方の南西壁は20cmほどである。北東側の壁面下部には、Ⅶ層中の自然礫層がみられる。

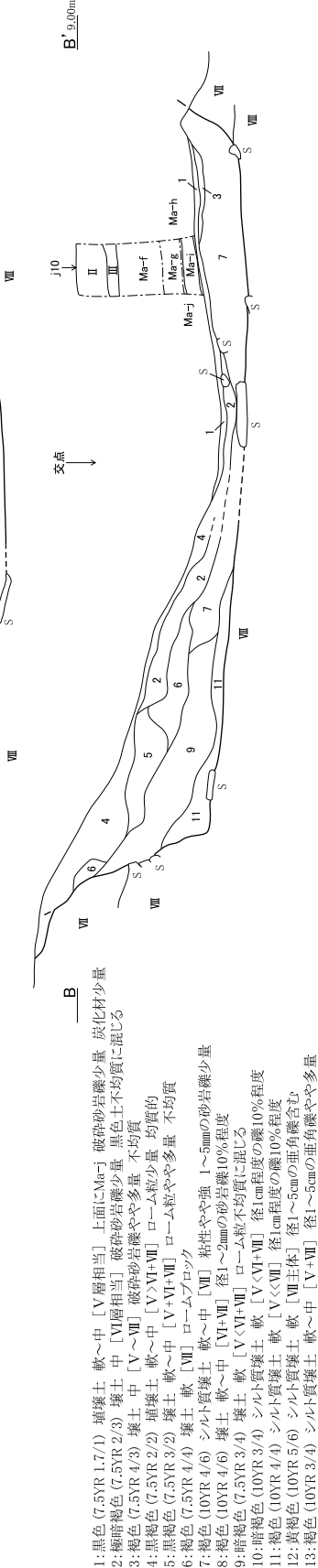
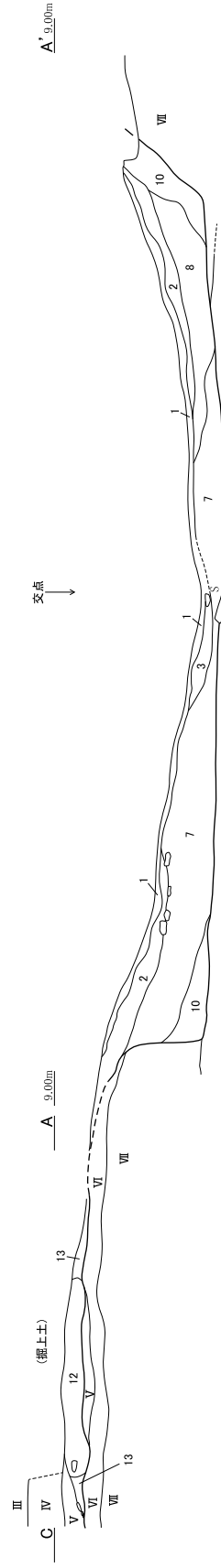
付属遺構 柱穴1基（HP-1）を検出した。HP-1は床面のほぼ中央にあり、径17cm・深さ48cm

VH-1



図Ⅳ-1 VH-1 平面

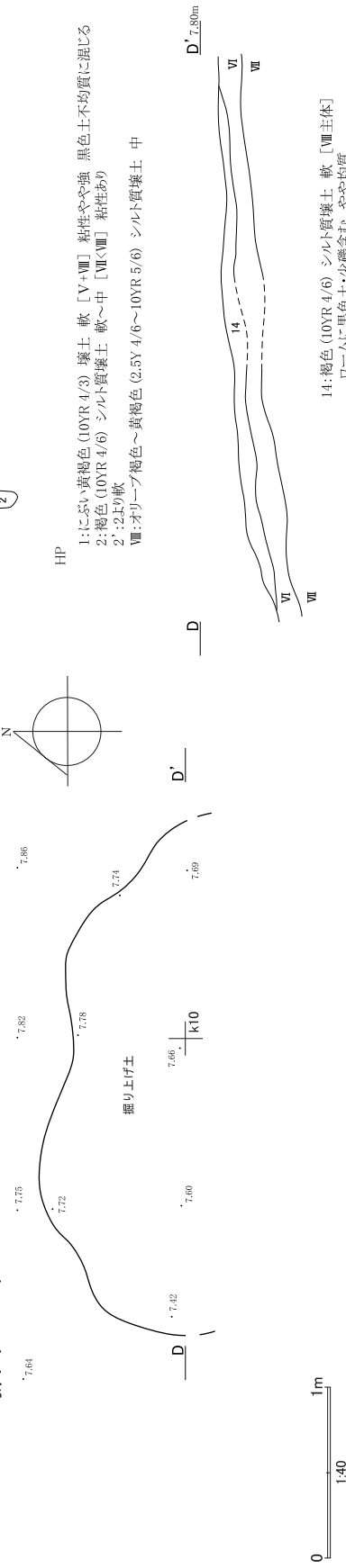
VH-1



- 1: 黒色 (7.5YR 1.7/1) 埴埴土 軟〜中 [V層相当] 上面にMo-j 破砕砂岩礫少量 炭化材少量
- 2: 極暗褐色 (7.5YR 2/3) 埴土 中 [VI層相当] 破砕砂岩礫少量 黒色土不均質に混じる
- 3: 褐色 (7.5YR 4/3) 埴土 中 [V〜VII] 破砕砂岩礫や多量 不均質
- 4: 黒褐色 (7.5YR 2/2) 埴埴土 軟〜中 [V+VI+VII] ローム粒少量 均質的
- 5: 黒褐色 (7.5YR 3/2) 埴土 軟〜中 [V+VI+VII] ローム粒やや多量 不均質
- 6: 褐色 (7.5YR 4/4) 埴土 軟 [VII] ロームブロック
- 7: 褐色 (10YR 4/6) シルト質埴土 軟〜中 [VII] 粘性やや強 1〜5mmの砂岩礫少量
- 8: 褐色 (10YR 4/6) 埴土 軟 [VI+VII] 径1〜2mmの砂岩礫10%程度
- 9: 暗褐色 (7.5YR 3/4) 埴土 軟 [V<VI+VII] ローム粒不均質に混じる
- 10: 暗褐色 (10YR 3/4) シルト質埴土 軟 [V<VI+VII] 径1cm程度の礫10%程度
- 11: 褐色 (10YR 4/4) シルト質埴土 軟 [V<<VII] 径1cm程度の礫10%程度
- 12: 黄褐色 (10YR 5/6) シルト質埴土 軟 [VII主体] 径1〜5cmの珪角礫含む
- 13: 褐色 (10YR 3/4) シルト質埴土 軟〜中 [V+VII] 径1〜5cmの珪角礫やや多量

- VI: 暗褐色 (10YR 3/3〜3/4) 埴土 軟〜中 潮濕 木根跡多数
- VII: 黄褐色 (10YR 5/8) シルト質埴土 軟 粘性やや強 均質
- VIII: 褐色 (10YR 4/6) シルト質埴土 軟〜中 径1〜10cmの礫多量含む範囲あり 鉄分集積 (7.5YR 4/6あり)

VH-1掘り上げ土



- HP
- HP-1
- 1: にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 埴土 軟 [V+VIII] 粘性やや強 黒色土不均質に混じる
- 2: 褐色 (10YR 4/6) シルト質埴土 軟〜中 [VII<VIII] 粘性あり
- 2': 2より軟
- VIII: オリーブ褐色〜黄褐色 (2.5Y 4/6〜10YR 5/6) シルト質埴土 中

14: 褐色 (10YR 4/6) シルト質埴土 軟 [VIII主体]
ロームに黒色土・少礫含む やや均質

図IV-2 VH-1断面

と大型で支柱穴とみられる。

遺物出土状況 覆土上位では、中央東側で炭化材片を少量検出したほか、I群b類土器2点、楔形石器1点、たたき石1点が出土した。覆土下位では、南側の床面に近い位置でこぶし大のやや扁平な円礫が5点みられたほか、石核1点、たたき石3点、すり石3点、砥石3点、台石・石皿2点が出土した。また床面中央で大型扁平の台石1点が出土し、周辺には微細な炭化物が分布していた。ほかに砥石3点が床面から出土している。

時期 検出面および出土遺物から縄文時代早期後半とみられる。(阿部)

VH-2 (図IV-3、表III-9・IV-1、図版3-3~5)

位置 d17・18区 **平面形態** 楕円形?

規模 (5.10)×(2.86)／(4.56)×(2.51)／(0.30)m

確認・調査 d17・18区でIV層を掘り下げたところ、V層上面が浅くくぼむ形状となった。遺構の可能性を考え、調査区壁沿いと18ラインに沿った2か所にトレンチを設定し、掘り下げた結果、床面と壁の立ち上がりが確認されたため、竪穴住居跡と判断した。調査区外の北側にも範囲が及んでいるため、調査範囲は住居跡全体の約1/2である。また、南東側はⅢP-27と重複しており、壁の一部が壊されている。上位にはⅢH-5の掘り上げ土が堆積する。最初に18ラインのトレンチ沿いにベルトを設定して、覆土を掘り下げた。覆土の遺物は適宜取り上げ、床面直上及び床面の遺物は約2cmの厚さから出土したものについて地点計測をして取り上げた。床面は覆土が褐色～暗褐色のため判然としなかったが、遺物出土状況を確認しながら検出した。床面まで掘り下げた後、覆土断面の撮影及び図化を行った。床面を精査したところ、調査区壁際の床面中央で褐色土の範囲が確認され、焼土と判断した。また、ピット等は確認できなかった。

覆土 覆土は9層(1~9)に分けた。自然堆積と考えられる。土層の色調は褐色～暗褐色を呈し、Ⅶ層が主体でV層が混ざる土壌が多い。堆積過程は、まず、床面北西側に褐色土層(7)、壁際に暗褐色土層(6・8・9)が堆積し、次にそれらの間を褐色、暗褐色土層(4・5)が埋め、さらにその上位をV層が覆っている。また、南側の壁際には褐色～暗褐色土層(1~3)が厚く堆積している。

床面・壁 床面は、ほぼ平坦でⅦ層中に構築されている。壁は湾曲しながら緩やかに立ち上がる。

付属遺構 焼土1か所(HF-1)のみで、ピット等は確認されなかった。HF-1は調査区際の床面ほぼ中央に位置し、北側は調査区外に広がっている。厚さは5cmで、トレンチ掘り下げ時に上部を削平している。焼土の色調が褐色で床面との区別がやや不明瞭だが、炭化物を微量確認したことや、床面における位置から炉跡と判断した。

遺物出土状況 床面直上及び床面から東釧路Ⅱ式土器(Ib)、彫器、石斧、たたき石、砥石等が出土し、これらはこの遺構に伴うと考えられる。彫器は20点を数えた。遺物の分布は中央付近、HF-1南側が密である。南西側では細かい炭化物のまとまりを確認した。

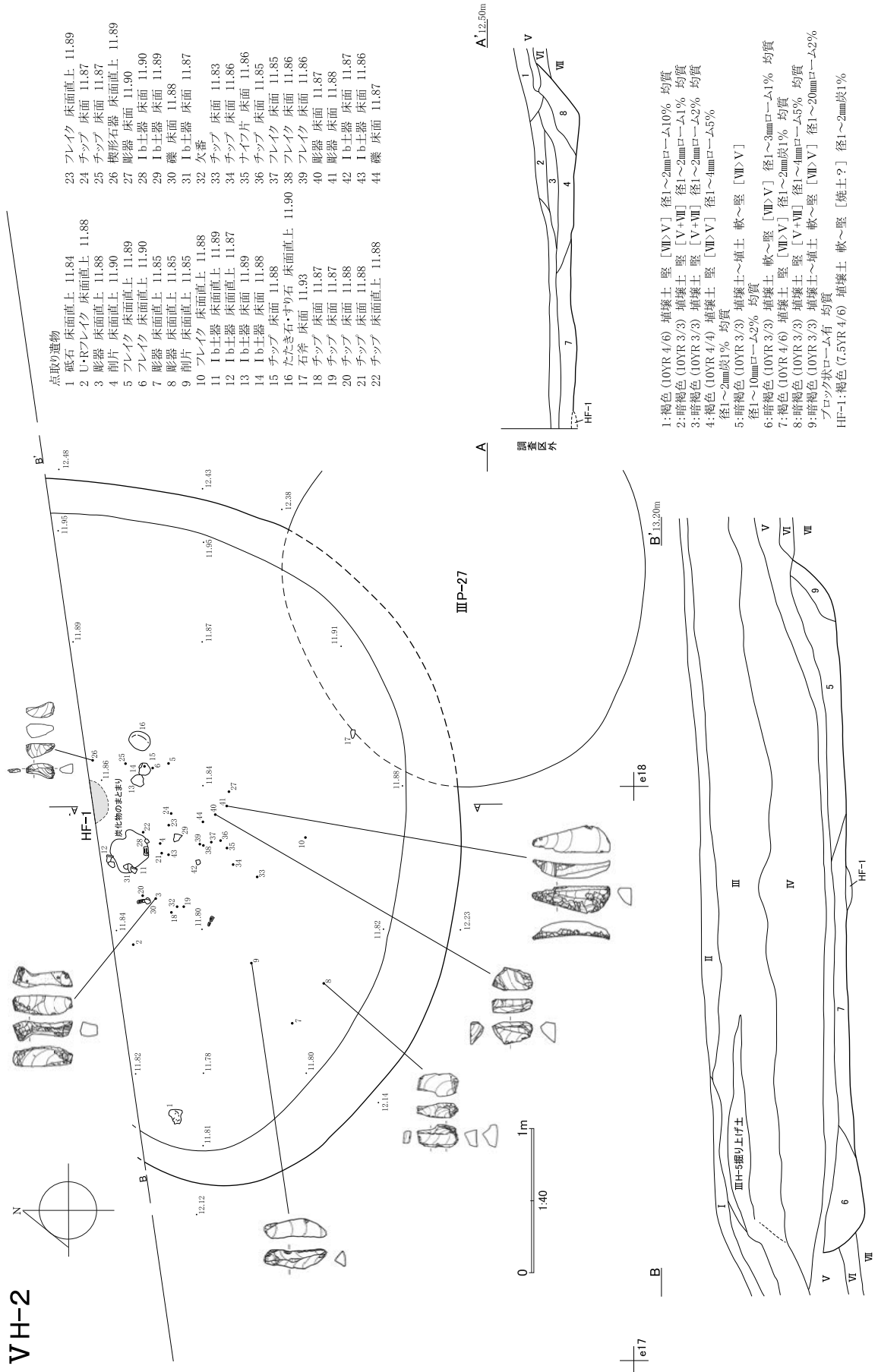
時期 検出層位、出土遺物などから縄文時代早期後半東釧路Ⅱ式期である。放射性炭素年代測定は行っていない。(広田)

VH-3 (図IV-4、表III-9・IV-1、図版4)

位置 g11・h11区 **平面形態** 隅丸方形

規模 3.31×3.22／2.81×2.56／0.30m

確認・調査 調査区西部の台地縁辺部に位置する。ⅢH-15の調査後、同範囲および周辺のMaテフラを除去したところ、V層上面がくぼむ範囲を確認した。十字のトレンチ調査後掘り下げ、床面および

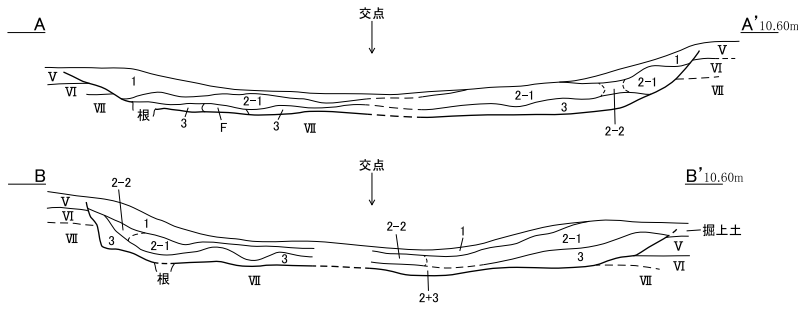
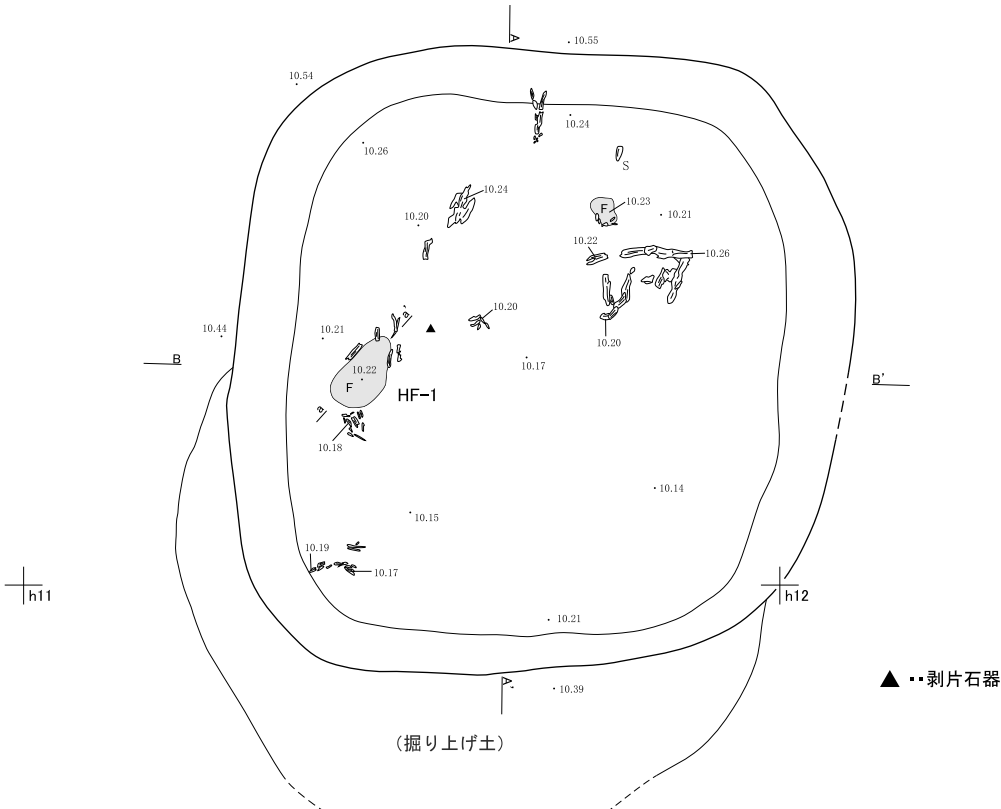
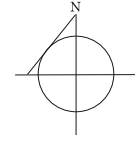


図IV-3 VH-2

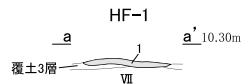
VH-3

g11

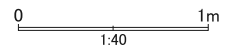
g12



- 1: 黒褐色 (10YR 2/2) 壤土 軟～中 [V] 上位にMa-j
- 2-1: 褐色 (10YR 4/6) 壤土 軟 [VII主体] ローム主体 黒色土やや不均質に含む
- 2-2: 暗褐色 (10YR 3/3) 壤土 軟 [V<VII] 黒色土・ローム不均質に混じる
- 3: 黒褐色 (10YR 2/3) 壤土 軟 [V+VI<VII] 炭化材片含む 小ブロック状ロームやや多く含む



1: 赤褐色 (5YR 4/8) 壤土 軟 [焼土] 黒色土混じる



図Ⅳ-4 VH-3

壁の立ち上がりを検出し、竪穴住居跡とした。また竪穴周辺を精査したところ、南側～南西側に薄く広がる掘り上げ土を検出した。遺物の取り上げ後、床面の精査を行った。

覆土 上位（1層）はV層相当の黒色土、中位（2層）は褐色～暗褐色でⅦ層ロームを主体とし、黒色土が不均質に混じる。下位（3層）は黒色土・褐色土が不均質に堆積し、炭化材片を含む。

床面・壁 床面はⅦ層ロームを掘り込み、おおむね平坦である。壁は西側がやや急に立ち上がるものの、全体的に緩やかに立ち上がる。標高の高い北側は、壁がやや高い。

付属遺構 覆土下位で焼土1か所（HF-1）を検出した。赤褐色を呈し強く被熱しているとみられる。周囲から炭化材片が複数出土した。

遺物出土状況 覆土下位で、形状を保った炭化材を複数検出した。その一つはコナラ節と同定された（V章3節参照）。また覆土中からスクレイパー1点、フレイク4点、礫9点（うち1点被熱）が出土した。

時期 検出面および周辺出土遺物から縄文時代早期後半とみられる。なお、上記の炭化材を対象とした年代測定では、 $6,810 \pm 30 \text{yrBP}$ （ $\delta^{13}\text{C}$ 補正值）の数値を得た（V章1節参照）。（阿部）

VP-1（図Ⅳ-5・6、表Ⅲ-9・Ⅳ-1、図版5-1・2・6）

位置 k5・k6区 **平面形態** 円形

規模 2.02×1.96/2.12×1.66/0.44m

確認・調査 無名沢に近接した低位部においてⅦ層上面で検出した。摩周テフラがひろがっており、遺構の存在を想定したものである。南東端が一部調査区外に出る。なお、低位部を全体調査したところ、V層が堆積しているところと堆積していないところのあることが確認された。斜面下の地形であるため、自然の営為で流出したことが考えられる。本遺構のくぼみに厚く堆積していた摩周テフラは、あるいは斜面上に降灰したものが流れ込んだ二次堆積の可能性もある。遺構の性格は不明。

覆土 4層に分層した。下部の覆土3・4はⅦ層が不均一に混ざる。上部の覆土1・2には摩周パミスが不均一に混ざる。

底面・壁 Ⅶ層を坑底面とする。坑底部は皿状に浅くくぼむ。壁は急角度で立ち上がる。南北の壁の坑底付近では、若干オーバーハングしている。

遺物出土状況 覆土下から縄文時代早期後半東釧路Ⅱ式の破片が8点出土した。

時期 検出層位と出土遺物、周辺に分布する土坑から縄文時代早期後半とみられる。（影浦）

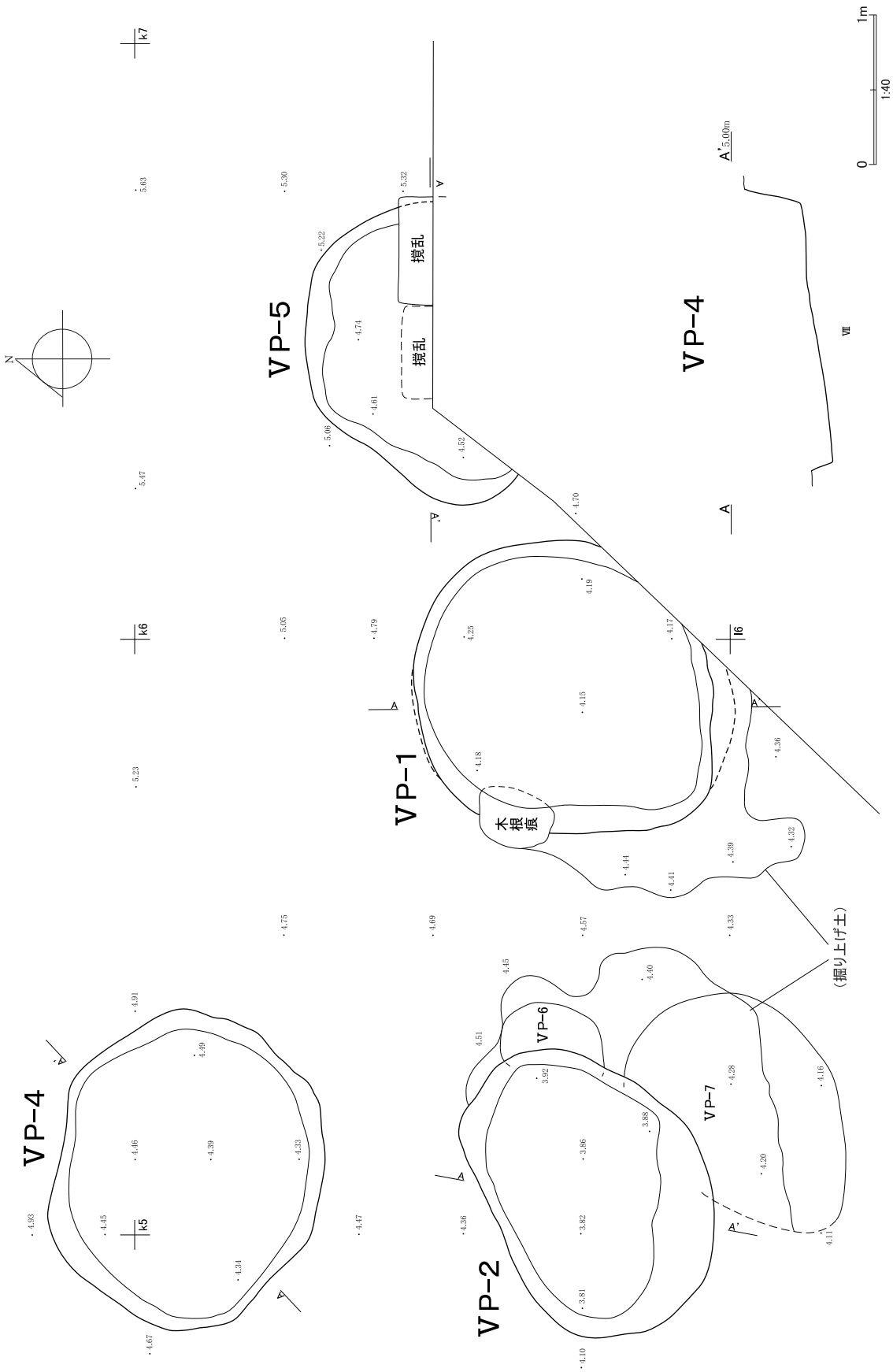
VP-2（図Ⅳ-5・6、表Ⅲ-9・Ⅳ-1、図版5-3・4・6）

位置 k4・k5区 **平面形態** 不整楕円形

規模 2.04×1.42/1.74×1.32/0.52m

確認・調査 無名沢に近接した低位部においてⅦ層上面で検出した。摩周テフラの堆積がひろがっており、遺構を想定していたものである。周辺を清掃したところ、掘り上げ土の薄い堆積が、不定形の広がりとして確認された。掘り上げ土の下に重複する二つの土坑（VP-6・7）がある。遺構の性格は不明。

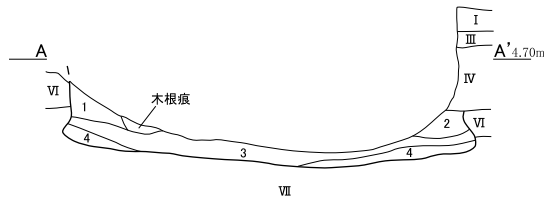
覆土 5層に分層した。覆土4・5はⅦ層が不均一に混ざる。覆土1・3には摩周パミスが不均一に混ざる。内容的に、埋戻した土の可能性もあるが、堆積状況についてみると、覆土1～3は斜面上からの流れ込みのようにも見える。人為堆積か自然堆積かの別は判然としない。この堆積状況はVP-1と共通する。なお、セクションポイントのA'はk6グリッド杭に近接していたことから、柱状に土層を残していたが、V層の堆積は確認されていない。低位部周辺みおけるⅣ層の摩周テフラについ



図IV-5 VP-1・2・4・5

VP-1・2・5

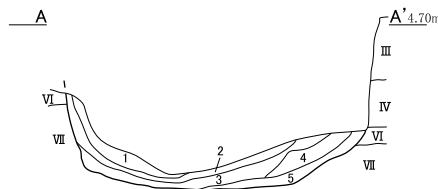
VP-1



VP-1

- 1: 暗灰色 (N3/)V層 埴壤土 堅 粘性有 Ma 明黄褐色 (2.5Y 7/6)30~40%不均一混
- 2: 黄褐色 (2.5Y 5/4)VII層 壤土 軟 粘性有 Ma-j? 灰白色 (10Y 7/1)7%ブロック状不均一混
- 3: にぶい黄褐色 (10YR 6/4)VI~VII層 壤土 軟 粘性有 Ma 明黄褐色 (10YR 7/6)粒状15%不均一混 黒色 (10YR 2/1)土5%不均一混
- 4: にぶい黄褐色 (10YR 6/4)VI~VII層 壤土 堅 粘性有 Ma 明黄褐色 (10YR 7/6)VII層30~40%不均一混

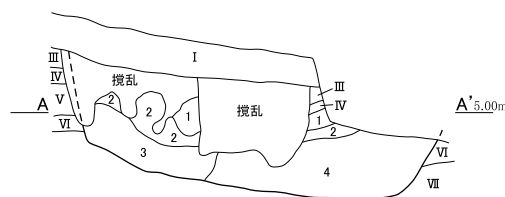
VP-2



VP-2

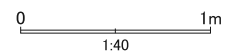
- 1: 黒褐色+青灰色 (2.5Y 3/1+5BG 6/1) 埴壤土 軟 粘性有 Ma-j不均一混
- 2: 黄橙色 (10YR 7/8)VII層 壤土 軟 粘性有 黒褐色 (10YR 3/1)土V層15%不均一混
- 3: 黒色 (2.5Y 2/1) 壤土 軟 粘性有 Ma 赤橙色 (10YR 7/8)20~30%不均一混
- 4: 黄橙色 (10YR 7/8)VII層 壤土 軟 粘性有 Ma 黒褐色 (10YR 3/1)土25%不均一混
- 5: 黒色 (2.5Y 2/1) 壤土 軟 粘性有 Ma 明黄褐色 (2.5Y 7/6)VII層40~50%斑状不均一混

VP-5



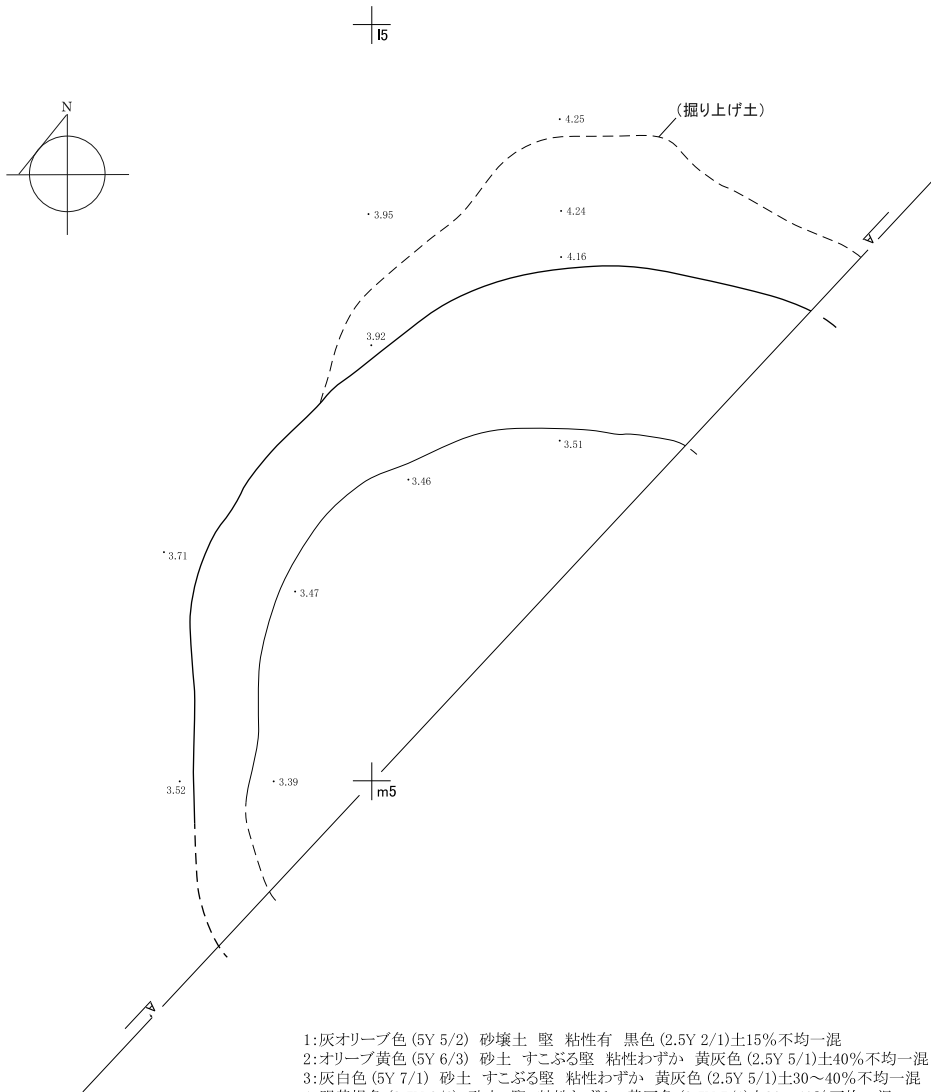
VP-5

- 1: 黒色~黒褐色 (10YR 2/1~10YR 3/1) 埴壤土 堅 粘性有
- 2: 灰黄褐色 (10YR 4/2) 黄橙色 (10YR 7/8)土VII層20~40%不均一混
- 3: 黄橙色 (10YR 7/8)VII層 埴壤土 軟 粘性有
- 4: 褐灰色~灰黄褐色 (10YR 4/1~4/2)VI~VII層 埴土 軟 粘性有

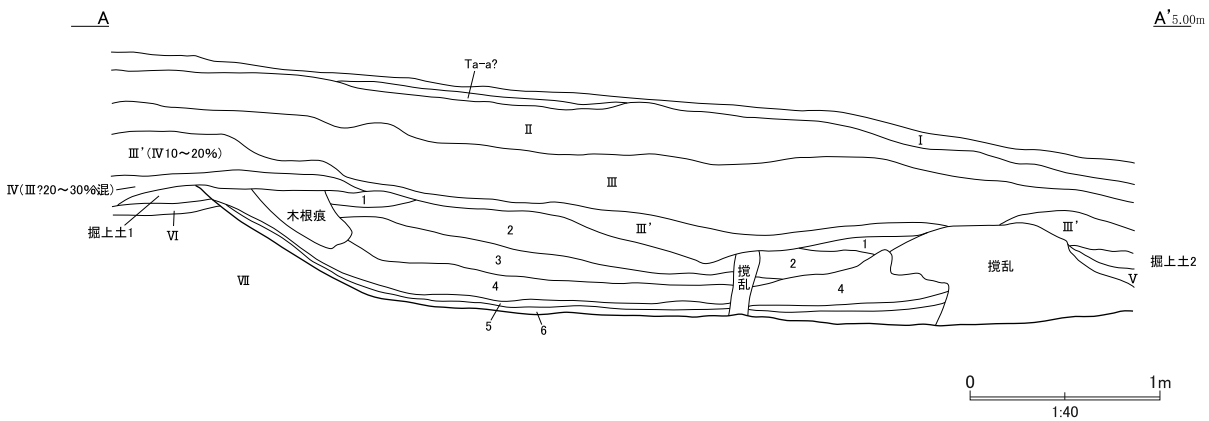


図IV-6 VP-1・2・5断面

VP-3



- 1: 灰オリーブ色 (5Y 5/2) 砂壤土 堅 粘性有 黒色 (2.5Y 2/1)土15%不均一混
- 2: オリーブ黄色 (5Y 6/3) 砂土 すこぶる堅 粘性わずか 黄灰色 (2.5Y 5/1)土40%不均一混
- 3: 灰白色 (5Y 7/1) 砂土 すこぶる堅 粘性わずか 黄灰色 (2.5Y 5/1)土30~40%不均一混
- 4: 明黄褐色 (2.5Y 6/6) 砂土 堅 粘性わずか 黄灰色 (2.5Y 5/1)土30~40%不均一混
- 5: 灰白色 (5Y 7/1) 砂土 堅 粘性わずか 黄灰色 (2.5Y 5/1)土30~40%不均一混
- 6: 橙色 (7.5YR 6/8) 砂土 堅 粘性わずか 黄灰色 (2.5Y 5/1)土30~40%不均一混
- 掘上土1: オリーブ褐色 (2.5Y 4/4) 埴壤土 堅 粘性有 明黄褐色 (10YR 7/6)VII層斑状40~50%混
- 掘上土2: 黒褐色 (10YR 3/2) 埴壤土 堅 粘性有 明黄褐色 (10YR 7/6)VII層斑状25%混



図IV-7 VP-3

ては、斜面上に降灰したものが流れ込んだ、二次堆積の可能性もある。

底面・壁 VII層を坑底面とする。底は皿状にくぼむ。斜面側の壁は急角度であるが、沢側は非常に緩やかであり、坑底部との境は判然としない。オープンカット的な構造が考えられる。

遺物出土状況 覆土中から縄文時代早期後半東釧路Ⅱ式の微細破片が1,439点出土した。同一個体のものとみられるが、全体的に破片が非常に細かく、まったく接合には至らなかった。

時期 出土遺物および周辺に分布する土坑から縄文時代早期後半とみられる。(影浦)

VP-3 (図Ⅳ-7、表Ⅲ-9・Ⅳ-1、図版5-5・6)

位置 14・15・m4区 **平面形態** ー

規模 (4.60)×ー/(3.20)×ー/0.75m

確認・調査 無名沢に近接した低位部において摩周テフラの厚い堆積があったことから、遺構の存在を想定した。テフラ除去後、全体が大きくくぼんでいたため、調査区境界を覆土確認面として調査を進めた。Ⅵ層以下は湧水が激しく、調査は難航した。沢側での壁の上りは確認できていないため、古い流路による浸食地形の可能性も考えられる。ただ、北側に掘り上げ土状の薄い土の広がりがあること、壁の立ち上がりが想定されるところに風倒木痕の可能性が高い大きな攪乱があり、あるいは攪乱によって沢側の壁が破壊された可能性もあることから、遺構と判断したものである。性格は不明。なお、低位部全体を調査したところ、Ⅴ層が堆積しているところと堆積していないところを確認できた。斜面下の地形であるため、自然の営為で流出したことも考えられる。本遺構のくぼみに厚く堆積していた摩周テフラについても、斜面上に降灰したものが流れ込んだ二次堆積の可能性は考えられる。

覆土 6層に分層した。いずれもグライ化している。覆土3～6はⅣ層の摩周テフラ。遺構にせよ浸食地形にせよくぼみがあった状態に、摩周テフラが厚く堆積したわけであるが、降灰による直接的な堆積か、斜面上から流れ込んだ再堆積によるものかは、グライ化や湧水のため判然としない。

底面・壁 VII層を坑底面とする。坑底面の形状は、常に泥水が湧出する状態であったため、把握しきれていない。壁はゆるやかに立ち上がる。

遺物出土状況 本遺構に伴うと判断できる遺物は出土していない。

時期 検出層位および周辺に分布する土坑から縄文時代早期後半とみられる。(影浦)

VP-4 (図Ⅳ-5、表Ⅲ-9・Ⅳ-1、図版5-7)

位置 j4・j5・k5・k6区 **平面形態** 不整円形

規模 2.00?×1.88/1.74?×1.72/0.38?m

確認・調査 VII層上面で検出したが、炭窯遺構に関連する現代の攪乱穴と認識して、覆土を掘りぬいた。しかし、掘り上げた穴の形状は、近接して分布する縄文時代早期の土坑に共通するものであったため、認識を改めた。遺構の性格は不明。

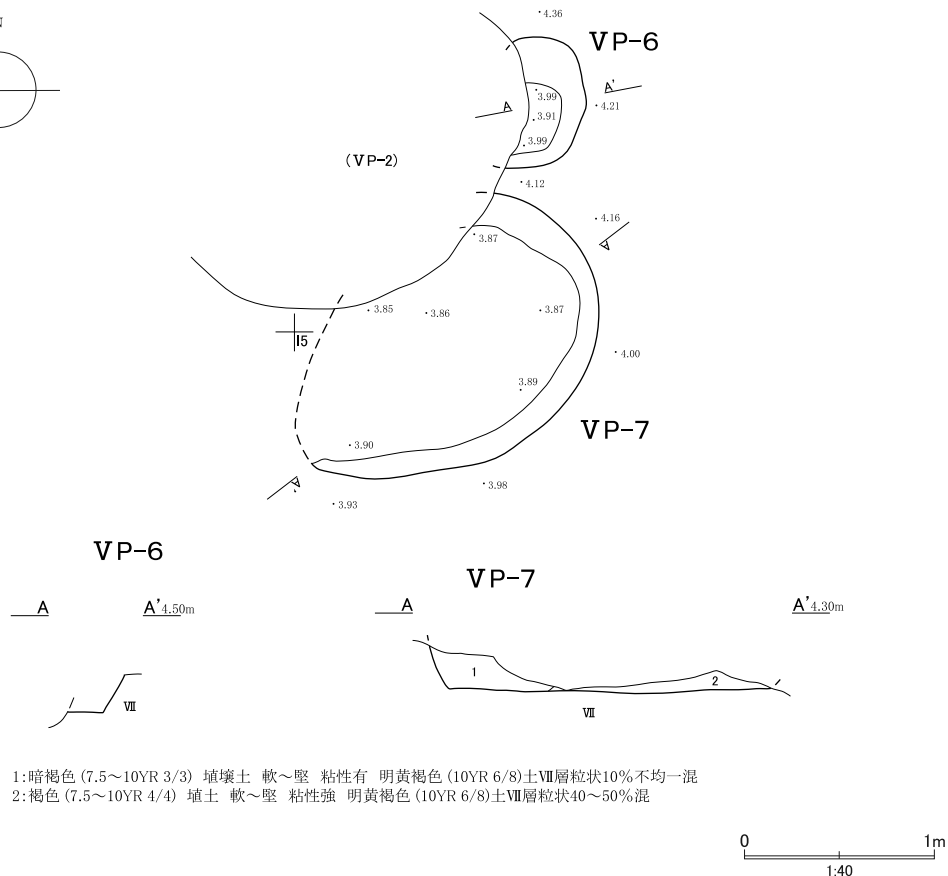
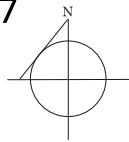
覆土 現代の攪乱穴という認識で掘りぬいたため、存在しない。

底面・壁 VII層を坑底面とする。東側は平坦であるが、途中で屈折し西側へ緩やかに傾斜する。

遺物出土状況 本遺構に伴うと判断できる遺物は出土していない。攪乱と認識して除去した覆土の残りから、縄文時代早期後半東釧路Ⅲ式の底部片8点、頁岩のフレイク2点、黒曜石のチップ1点が出土した。

時期 検出層位および出土遺物、周辺に分布する土坑から縄文時代早期後半とみられる。(影浦)

VP-6・7



1:暗褐色(7.5~10YR 3/3) 埴壤土 軟~堅 粘性有 明黄褐色(10YR 6/8)土VII層粒状10%不均一混
 2:褐色(7.5~10YR 4/4) 埴土 軟~堅 粘性強 明黄褐色(10YR 6/8)土VII層粒状40~50%混

図IV-8 VP-6・7

VP-5 (図IV-5・6、表III-9・IV-1、図版5-8)

位置 k6区 平面形態 不整円形?

規模 1.98×—/1.80×—/0.54m

確認・調査 k6区においてV層を調査中、調査区境界にかかって暗褐色土のひろがり半円形に現れたため、壁沿いにトレンチを掘削して確認した。南東側の一部は調査区外である。遺構の性格は不明。

覆土 4層に分層した。覆土4はVI~VII層、覆土3はVII層で主に構成されており、ほとんど他の土壌の夾雑がない。覆土1・2は摩周パミスが不規則に混ざる。竖穴の上部、坑口部には一部攪乱層が入っている。

底面・壁 VII層中を底面とする。底面は東から西へ緩やかに傾斜する。壁は急角度で立ち上がる。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

時期 検出層位および周辺に分布する土坑から縄文時代早期後半とみられる。(影浦)

VP-6 (図IV-8、表III-9・IV-1、図版6-1)

位置 k5区 平面形態 円形?

規模 0.68×—/0.36×—/(0.20)m

確認・調査 VP-2を完掘した際に、壁面に現れたもの。遺構の性格は不明。

覆土 掘り過ぎで欠失したが、覆土の上にVP-2の掘り上げ土が被覆していた。したがって、掘り込みの深さは0.20m程度と想定される。本遺構の埋没後に、VP-2が構築したと考えられる。

底面・壁 底面は平坦。壁は急角度に立ち上がる。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

時期 検出層位および周辺に分布する土坑から縄文時代早期後半と考えられる。 (影浦)

VP-7 (図IV-8、表III-9・IV-1、図版6-2)

位置 k5・l5区 **平面形態** 楕円形?

規模 1.78×—/1.60×—/(0.20)m

確認・調査 VP-2を完掘した際、その壁面に重複して現れたもの。遺構の性格は不明。

覆土 2層に分層した。掘り過ぎで大半を欠失したが、上部にVP-2の掘り上げ土が載っていた。したがって、掘り込みの深さはほぼ0.20m程度である。埋没後に、VP-2が構築されている。

底面・壁 底面は平坦。壁は急角度に立ち上がる。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

時期 検出層位および周辺に分布する土坑から縄文時代早期後半と考えられる。 (影浦)

VP-8 (図IV-9、表III-9・IV-1、図版6-3~6)

位置 f・g8区 **平面形態**：楕円形

規模 2.05×1.66/1.50×1.20/0.32m **長軸方向** N-25°E

確認・調査 調査区西側の標高約9.7mのVI層上面で、半円形の黒色土を確認した。遺構範囲の北側は表土層掘削前の調査区に及んでいた。このため、掘削前の壁面際を土層観察面として設定し半截した。結果、主に覆土上層から多量の遺物が出土した。北側の表土層を重機で掘削後に完掘し、残りの調査を行った。

覆土 黒褐色土や黒色土にVI層がブロック状に混ざった互層で、すべて埋戻しと考えられる。

底面・壁 底面はVII層中で多少凸凹があり、南西側に傾斜している。壁面は緩やかに立ち上がる。

遺物出土状況 覆土上層から遺物が集中的に出土した。東釧路Ⅱ式の土器片集中(1,408点中1,387点は同一個体小片)、たたき石10点、石核5点、彫器2点、ほか石鏃、石錐、スクレイパー、U・Rフレイク、削片、有溝砥石、板状の砥石片が各1点出土した。有溝砥石は片面に複数の溝があるもの。

(笠原)

同一個体の土器小片1,387点は意図的に粉砕した可能性も考えられる。

(影浦)

時期 出土遺物から縄文時代早期後半東釧路Ⅱ式期が考えられる。

(笠原)

VP-9 (図IV-10、表III-9・IV-1、図版6-7・8)

位置 e9・e10区 **平面形態** 楕円形

規模 0.48×0.37/0.30×0.24/0.10m

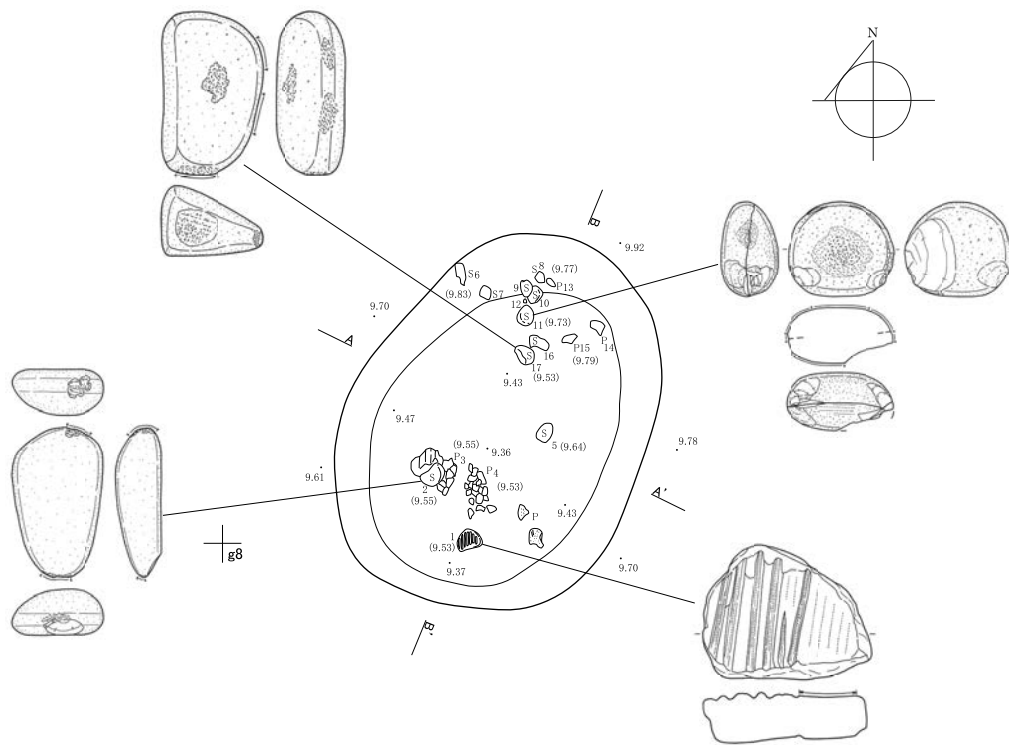
確認・調査 調査区北西部の台地縁辺部に位置する。竪穴住居跡ⅢH-7を調査した際に、壁面のV層中から土器の一部が出土していた。ⅢH-7の調査後にMaテフラを除去しV層を掘り下げたところ、土器片がまとまって出土した。記録後さらに掘り下げ、底面と壁の立ち上がりを確認し、一括土器を含む土坑と判断した。

覆土 黒褐色～暗褐色土で、V層を基調とする。

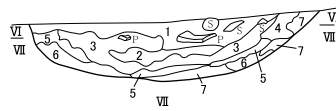
底面・壁 底面はVII層ローム中でやや丸みを帯び、壁は北側がややオーバーハングし南側は緩やかに立ち上がる。

遺物出土状況 覆土上位からI群b類土器241点がまとまって出土した。同一個体の破片が多い。

VP-8

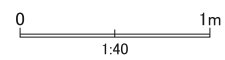
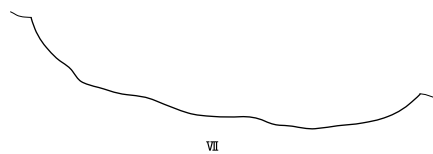


A A' 9.90m



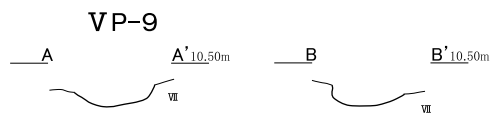
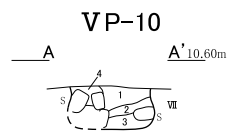
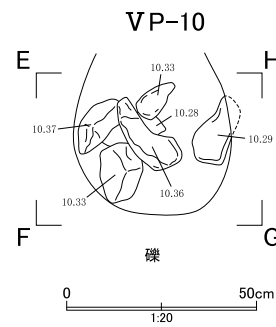
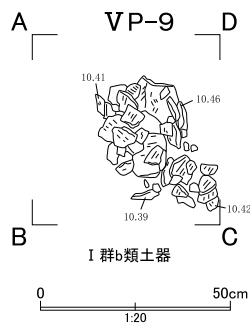
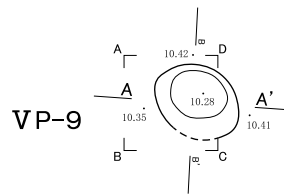
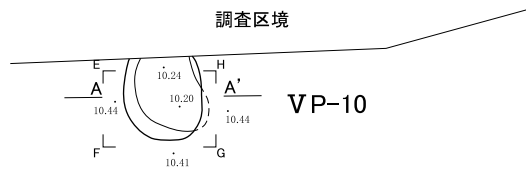
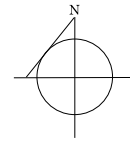
- 1: 黒褐色 (7.5YR 3/2) 軟 粘性弱 [V>VI+VII] 東釧路II式・有溝砥石ほか遺物多数出土
- 2: 褐色 (7.5YR 4/3) 軟 粘性中 [VI>V]
- 3: 黒色 (7.5YR 2/1) 軟 粘性中 [V主体] 東釧路II式出土
- 4: 暗褐色 (7.5YR 3/3) 軟 粘性弱 [VI>VII] ブロック状に混じる
- 5: 灰褐色 (7.5YR 4/2) 軟 粘性弱 [VI>V]
- 6: 黒褐色 (7.5YR 3/1) 軟 粘性中 [V>VI+VII]
- 7: 明褐色 (7.5YR 5/6) 軟 粘性中 [VII>VI]

B B' 10.00m

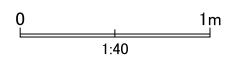


図M-9 VP-8

VP-9・10



- 1: 黒褐色 (7.5YR 2/2) 埴壤土 軟 [V>>VII] ローム粒10%以下
- 2: 暗褐色 (7.5YR 3/4) 埴土 軟 [V<VII] ローム不均質 多量
- 3: 黒褐色 (7.5YR 2/2) 埴壤土 軟 [V主体] ローム少量
- 4: 褐色 (10YR 4/6) 埴土 軟 [V<<VII] 黒色土少量 不均質



図IV-10 VP-9・10

時期 出土遺物から、縄文時代早期後半東釧路Ⅱ式期である。(阿部)

VP-10 (図Ⅳ-10、表Ⅲ-9・Ⅳ-1、図版7-1・2)

位置 e9区 **平面形態** 楕円形

規模 (0.42)×0.40/(0.38)×0.37/0.22m

確認・調査 調査区北西部の台地縁辺部、調査区境界に位置する。Ⅵ層まで掘り下げたところ、半円形の黒色土を検出した。半截すると、複数の垂角礫にあたった。隙間をぬって掘り下げ、Ⅶ層中に底面・壁を確認し、土坑と判断した。精査の結果、5点の垂角礫(たたき石含む)と複数の小礫を包含する袋状土坑であることを確認した。

覆土 上位(1層)はⅤ層黒色土主体の自然堆積土、中位(2・4層)はローム主体、下位(3層)は黒褐色土主体の流入土とみられる。

底面・壁 底面はⅦ層ローム中で確認した。おおむね平坦で、壁はオーバーハングする。

遺物出土状況 上記の礫には、たたき石3点、砥石3点、加工痕ある礫1点が含まれている。

時期 検出面および周辺出土遺物から、縄文時代早期後半とみられる。(阿部)

VP-11 (図Ⅳ-11、表Ⅲ-9・Ⅳ-1、図版7-3・4)

位置 g8・g9区 **平面形態** おおむね楕円形

規模 1.54×(1.54)/(0.59×0.46)/0.42m

確認・調査 調査区北西の台地縁辺部のg8区でⅤ層を掘り下げたところ、隣接するg9区側の壁面にMaテフラ・Ⅴ層の沈みこみがあり、当該区にも及ぶことを確認した。g8・9区の境界ラインで半截して、底面と壁の立ち上がりを検出、土坑と判断した。

覆土 Ⅴ層・Ⅵ層・Ⅶ層各層を主体とするやや不均質な土壌が椀状に堆積していた。いずれも流入土と考えられる。

底面・壁 底面はⅦ層砂質ローム内に達し、丸みがありわずかに平坦部をもつ。壁面はやや緩やかに立ち上がり、中位に段をもち斜め上方に開く。

遺物出土状況 覆土上位に台石・石皿1点がある。覆土中からⅠ群b類土器2点、彫器1点・フレイク・チップ6点、石核1点、礫30点が出土した。

時期 検出面および出土遺物から、縄文時代早期後半とみられる。(阿部)

VP-12 (図Ⅳ-11、表Ⅲ-9・Ⅳ-1、図版7-5・6)

位置 e7・f7区 **平面形態** おおむね円形

規模 1.06×1.00/0.96×0.91/0.06m

確認・調査 調査区北西部の台地縁辺部のⅦ層上面で、やや暗色の黄褐色土のまとまりを検出した。半截したところ、底面と壁の立ち上がりを確認し、土坑とした。覆土の堆積状況から、掘り込み面はⅤ層下位からⅥ層上位と推測される。

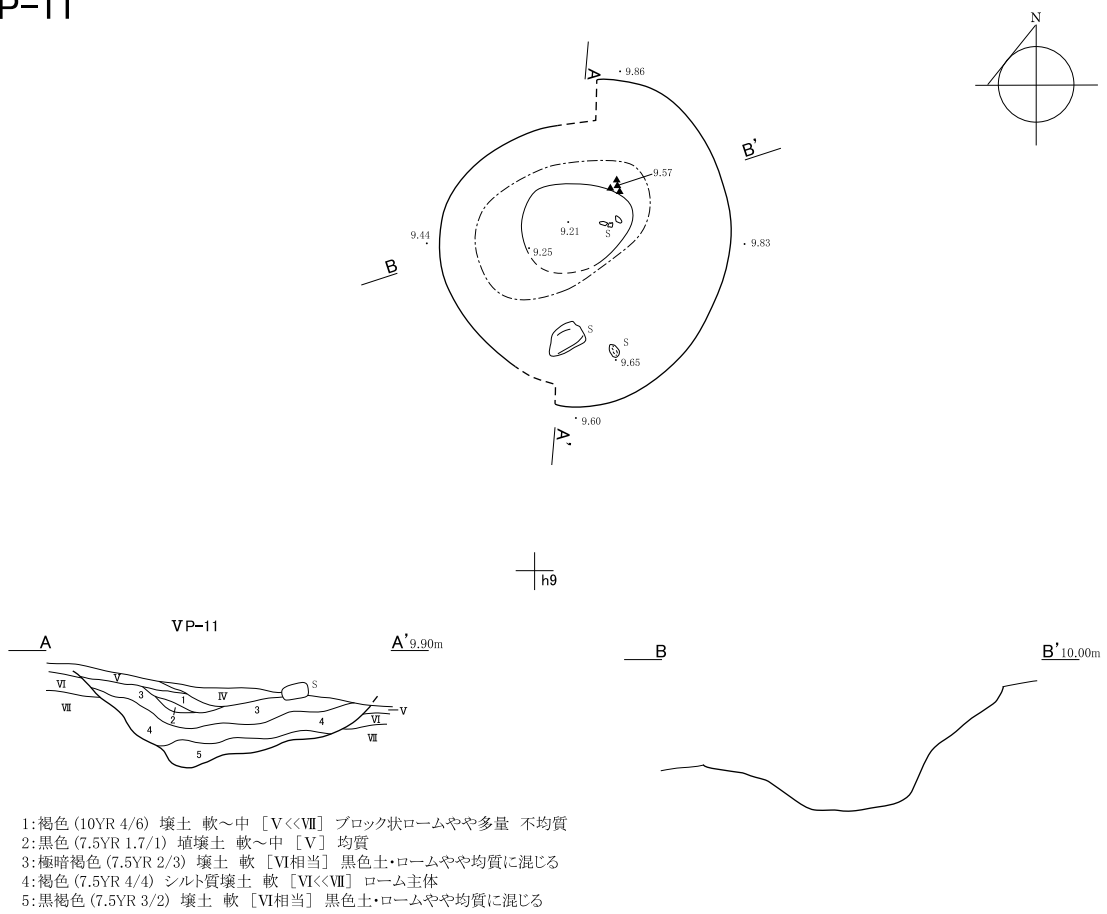
覆土 Ⅵ層を主体とするやや暗色の黄褐色土で、流入土と考えられる。

底面・壁 底面は平坦でⅦ層ローム中にあり、灰白色を呈して脱色(還元)した部分がある。わずかに確認できる壁は、急角度に立ち上がる。

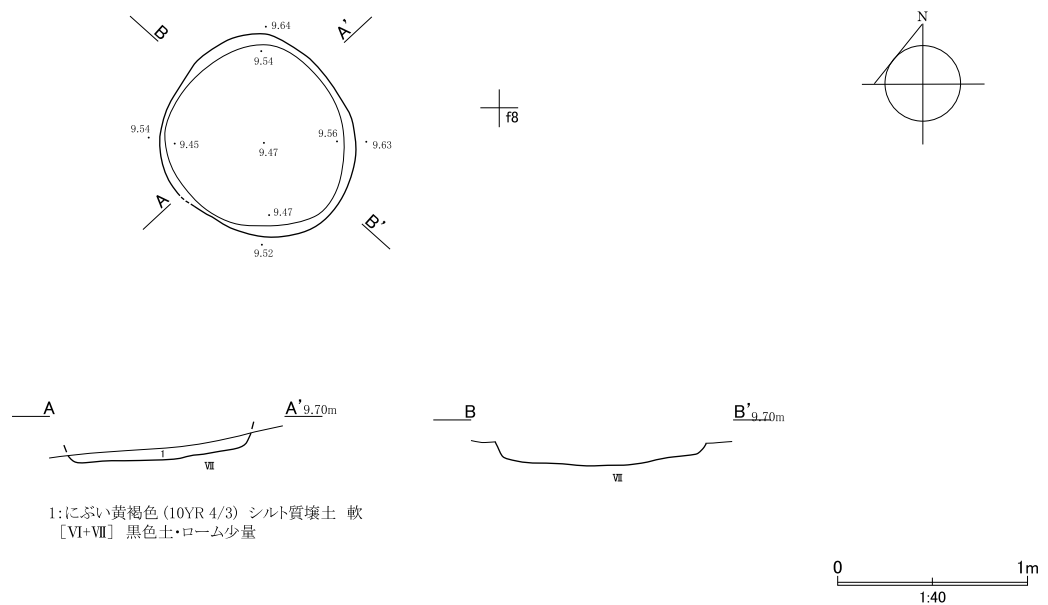
時期 検出面および周辺出土遺物から、縄文時代早期後半とみられる。(阿部)

VP-13 (図Ⅳ-12、表Ⅲ-9・Ⅳ-1、図版7-7・8)

VP-11

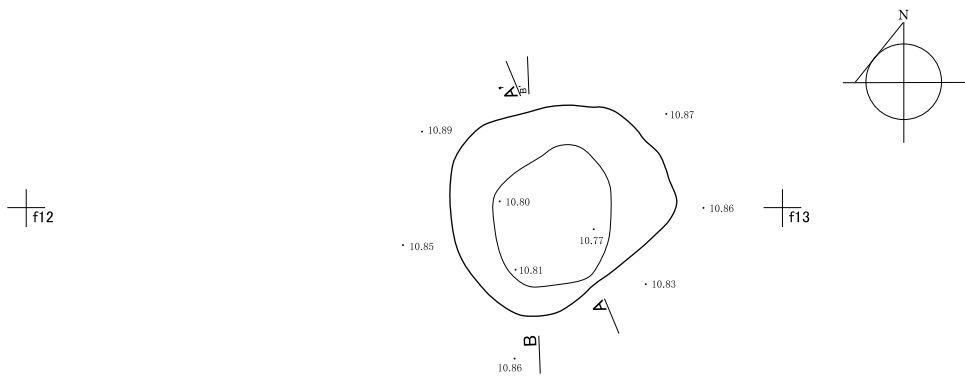


VP-12

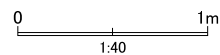


図IV-11 VP-11・12

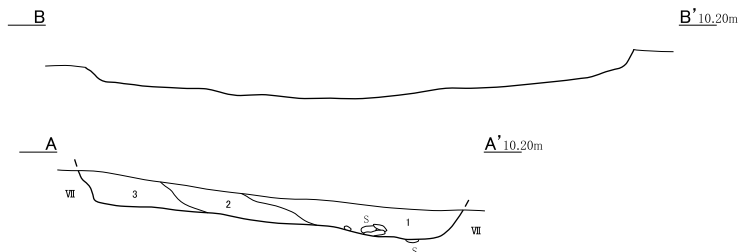
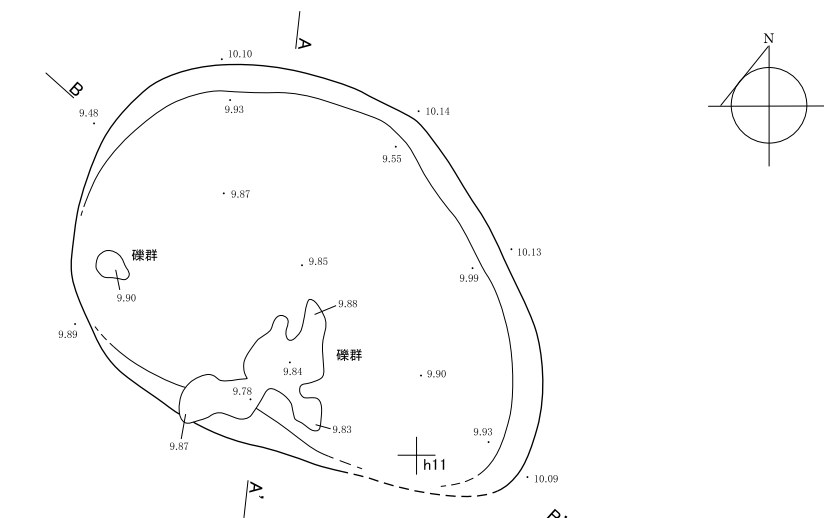
VP-13



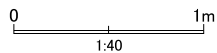
1: 黒褐色～暗褐色 (10YR 2/2～3/3) 埴壤土 軟 粘性有
明黄褐色 (10YR 7/6)土(VII層)10～20%不均一混



VP-18

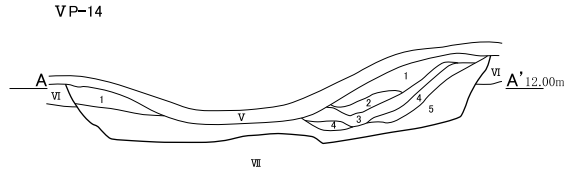
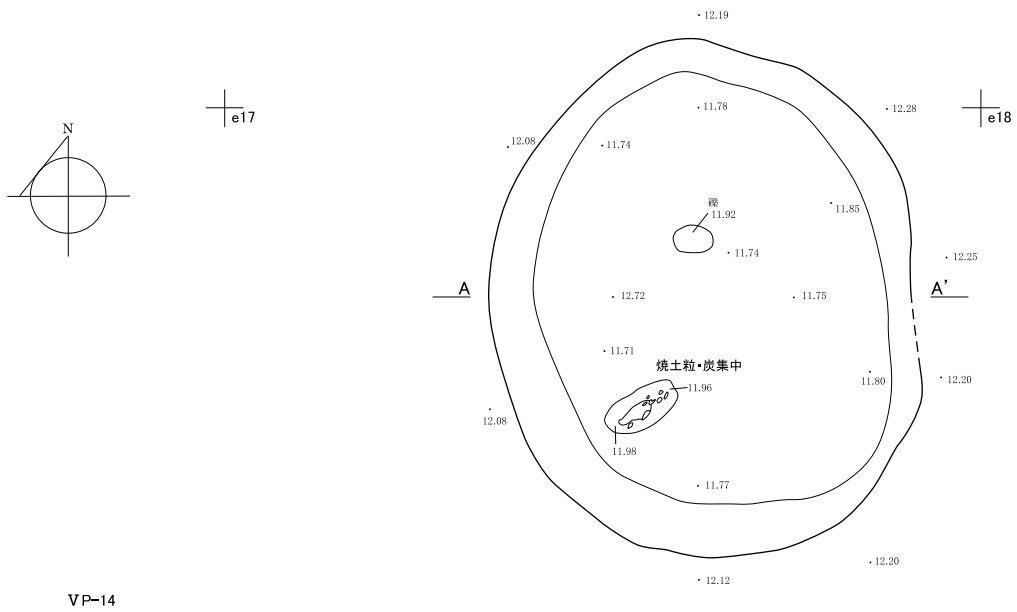


1: 黒色 (10YR 1.7/1) 埴壤土 軟 [V] ローム粒少量 均質的
2: 暗褐色 (10YR 3/3) シルト質壤土 軟～中 [VI主体] ローム・暗褐色土不均質に混じる
3: 褐色 (10YR 4/6) シルト質壤土 軟～中 [VI+VII] 暗褐色土不均質に混じる



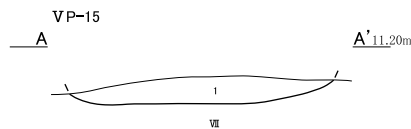
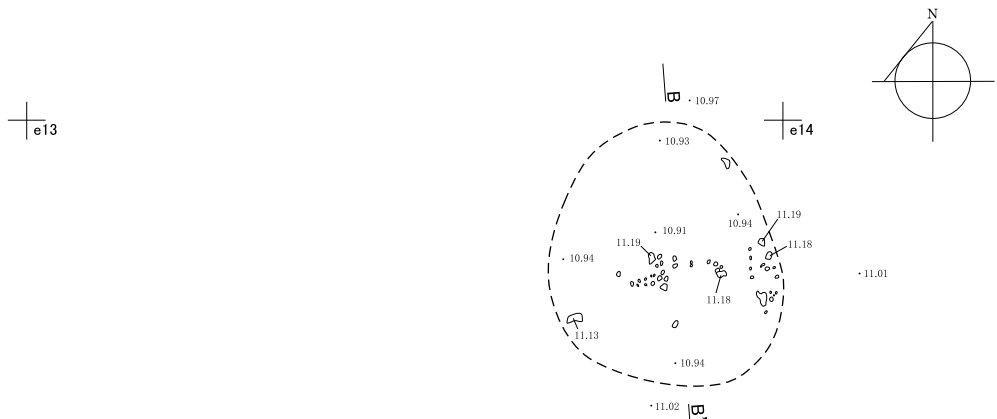
図IV-12 VP-13・18

VP-14

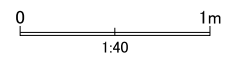


- 1: 黒褐色 (10YR 3/1) 埴土 軟 粘性強 明黄褐色 (10YR 7/6)土(VII層)粒状5%不均一混
- 2: 黒褐色 (10YR 3/1) 1よりやや黒い、埴土 軟 粘性強 明黄褐色 (10YR 7/6)土(VII層)15%均一混
- 3: 黒褐色 (10YR 3/2) 埴土 軟 粘性強 明黄褐色 (10YR 7/6)土(VII層)ブロック状15~20%不均一混
- 4: 明黄褐色 (10YR 7/6) 埴土 堅 粘性強 黒褐色 (10YR 3/2)土30~40%不均一混
- 5: 黒褐色 (10YR 3/2) 埴土 堅 粘性強 明黄褐色 (10YR 7/6)土(VII層)30%不均一混

VP-15



- 1: 黒褐色~灰黄褐色 (10YR 3/2~4/2) 埴壤土 軟 粘性有 黒色 (10YR 2/1)土20~25%不均一混



図IV-13 VP-14・15

位置 e12・f12区 **平面形態** 不整円形

規模 1.21×1.19/0.77×0.61/0.26m

確認・調査 V層を掘り下げ中、VI～VII層上面で確認した。先行してⅢH-14・15等の調査が行われていた関係で、西端にかかる部分はⅢ層以下が掘り下がっていなかった。そこでまず検出面での半割調査を行い、その後、Ⅲ層以下が残っていた西の壁面で土層記録を取り、最後に全体がVII層まで掘り下がった段階で完掘した。性格は不明。

覆土 単層である。V層起源の黒褐色土にVII層起源のロームが10～20%不均一に混じる。

底面・壁 底面は皿状。壁は緩やか。底面と壁面の境界は丸みを帯びて判然としない。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

時期 検出層位から縄文時代早期後半とみられる。 (影浦)

VP-14 (図IV-13、表Ⅲ-9・IV-1、図版8-1・2)

位置 d17・e17区 **平面形態** 楕円形

規模 2.75×2.29/2.30×1.83/0.46m

確認・調査 IV層の摩周テフラが楕円形にひろがっていて、その下のV層上面が大きく沈みこんでいたことから、遺構の存在が想定されていた。遺構の性格は不明。

覆土 5層に分層した。VII層起源のロームが不均一に混じっていることから、埋戻しの可能性が考えられる。

底面・壁 底は皿状を呈するが、中央で少し盛り上がる。壁はやや急角度に開く。

遺物出土状況 坑底の中央で大型のすり石が1点出土した。他、覆土中からスクレイパー、石核、砥石が各1点出土した。西南部の坑底付近で焼土粒と炭のまとまりが検出されている。

時期 検出層位から縄文時代早期後半である。放射性炭素年代測定(AMS測定)に覆土中から採取した試料1点を提出したところ、 $6,790 \pm 30$ ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)であった。同時期の遺構と考えられるVH-3採取炭の分析結果も $6,810 \pm 30\text{yrBP}$ ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)と、ほぼ同様の年代値が出ている。 (影浦)

VP-15 (図IV-13、表Ⅲ-9・IV-1、図版8-3・4)

位置 e13区 **平面形態** 円形?

規模 1.4?×1.2?/0.14m

確認・調査 VI層を掘り下げ中、縄文時代早期後葉の土器の微細片が集中的に出土した。周囲を粗く清掃したところ、円形に現れたため土坑と判断した。しかしながら、検出写真を撮るために、土器片を極力出した状態での清掃をしたところ、思いのほか浅い土坑で、覆土の大半が欠失してしまった。このためセクション写真はない。土層図・平面形は土器片の分布で結んだ推定線である。遺構の性格は不明。

覆土 土器片の下に柱状に残った覆土から、単層と判断される。

底面・壁 大部分が欠失するが、部分的な残存から、壁は緩やかな立ち上がりであったと考えられる。

遺物出土状況 縄文時代早期後半東釧路Ⅱ式の微細土器片が59点、チャートの小礫が2点出土した。

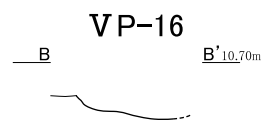
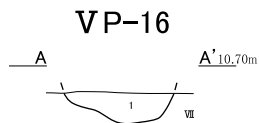
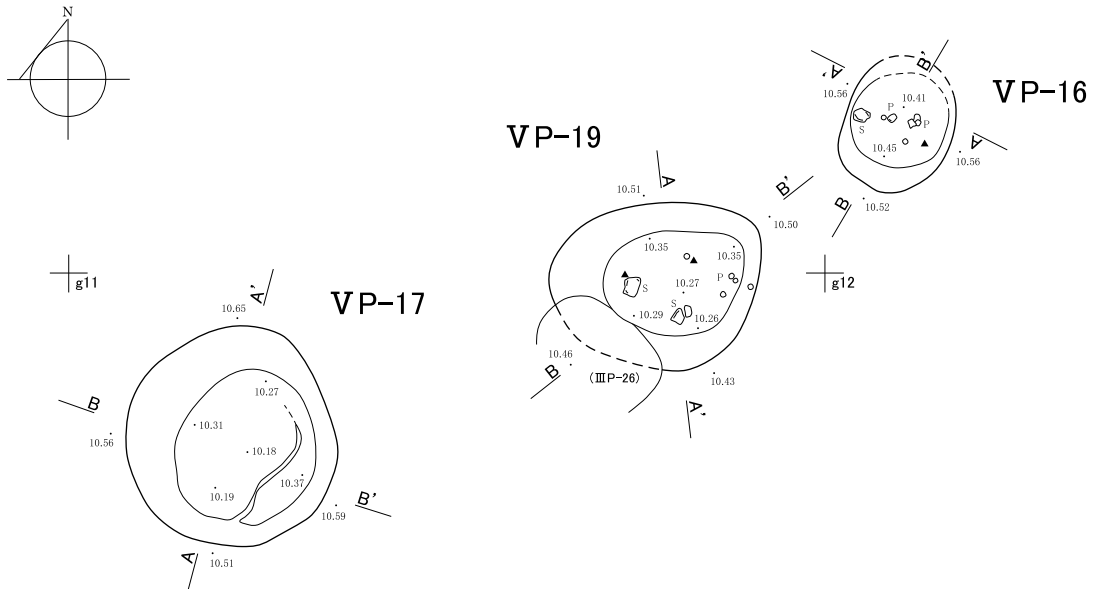
時期 検出層位と遺物から縄文時代早期後半とみられる。 (影浦)

VP-16 (図IV-14、表Ⅲ-9・IV-1、図版8-5・6)

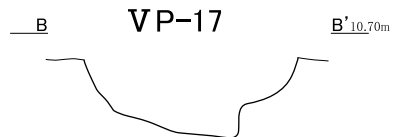
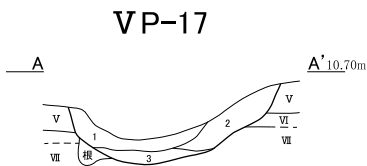
位置 f12区 **平面形態** 楕円形

規模 (0.71)×0.57/(0.50)×0.50/0.14m

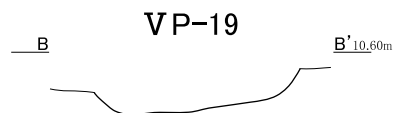
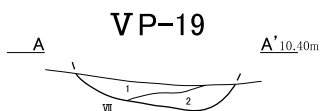
VP-16・17・19



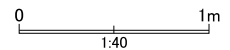
1: 黒褐色 (10YR 2/3) 埴壤土 軟 [V>VII] ロームやや均質に混じる



1: 黒色 (10YR 2/1) 埴壤土 軟～中 [V] 上面にMa-j
 2: 暗褐色 (10YR 3/3) 埴土 軟 [V+VII] ロームやや均質に混じる
 3: 黒褐色+褐色 (10YR 2/2+4/6) 埴土 軟 [V+VII] ブロック状のローム混じる



1: 黒色 (10YR 2/1) 埴壤土 軟～中 [V] ローム粒少量
 2: 黒褐色 (10YR 2/3) 埴土 軟～中 [V+VII] ローム不均質に混じる



図IV-14 VP-16・17・19

確認・調査 調査区北西部で検出した竪穴住居跡ⅢH-15の下に位置する。ⅢH-15の柱穴調査で掘削した壁面に黒色土の沈みこみを確認しており、Ⅶ層上面で平面形も検出した。断面を精査して、底面・壁を確認し土坑と判断した。

覆土 V層黒色土を主体とし、流入土とみられる。

底面・壁 底面は丸みを呈し、やや凹凸がある。壁は緩やかに立ち上がって上部は直立する。

遺物出土状況 覆土からI群b類土器の小片31点、ナイフ1点、被熱礫2点が出土した。土器は覆土の上位に多い傾向がある。

時期 検出面および出土遺物から、縄文時代早期後半とみられる。(阿部)

VP-17 (図IV-14、表Ⅲ-9・IV-1、図版8-7・8)

位置 g11区 **平面形態** おおむね円形

規模 1.16×1.12/0.80×0.72/0.28m

確認・調査 調査区北西部で検出した竪穴住居跡ⅢH-15の下に位置する。Maテフラを除去したところ、V層が深くくぼむ範囲を検出した。半截して底面と壁の立ち上がりと思われる部分を確認し土坑とした。しかし断面の状況から、風倒木の可能性もある。

覆土 上位はMaテフラが深く入り込む。覆土の西側(1・3層)は黒色土を主体とし、東側(2層)はロームが多くなる。

底面・壁 底面はⅦ層ローム中で椀状であり、東側に段を有する。壁はやや湾曲して立ち上がる。

時期 検出面および周辺出土遺物から、縄文時代早期後半とみられる。(阿部)

VP-18 (図IV-12、表Ⅲ-9・IV-1、図版9-1・2)

位置 g10・g11・h10・h11区 **平面形態** 卵形

規模 2.82×1.98/2.55×1.70/0.15m

確認・調査 調査区北西部の竪穴住居跡ⅢH-15の調査後、同範囲および周辺のMaテフラを除去しⅦ層上面まで掘り下げたところ、楕円形を呈する黒色土を検出した。半截して底面と壁の立ち上がりを確認し、土坑とした。

覆土 北東側から南西側に向かって、Ⅶ層ローム主体(3層)、Ⅵ層暗褐色土主体(2層)、V層黒色土主体(1層)と斜めに堆積しており、流入土とみられる。

底面・壁 底面はⅦ層ローム中で、ほぼ平坦であるが地形に沿って北東から南西へわずかに傾斜している。壁はわずかに標高の高い北～東側がやや急に立ち上がり、西～南側が緩やかである。

遺物出土状況 覆土から礫がまとまって多数出土しているが、Ⅶ層中に含まれる自然礫層の一部が含まれている可能性がある。

時期 検出面および周辺出土遺物から、縄文時代早期後半とみられる。(阿部)

VP-19 (図IV-14、表Ⅲ-9・IV-1、図版9-3)

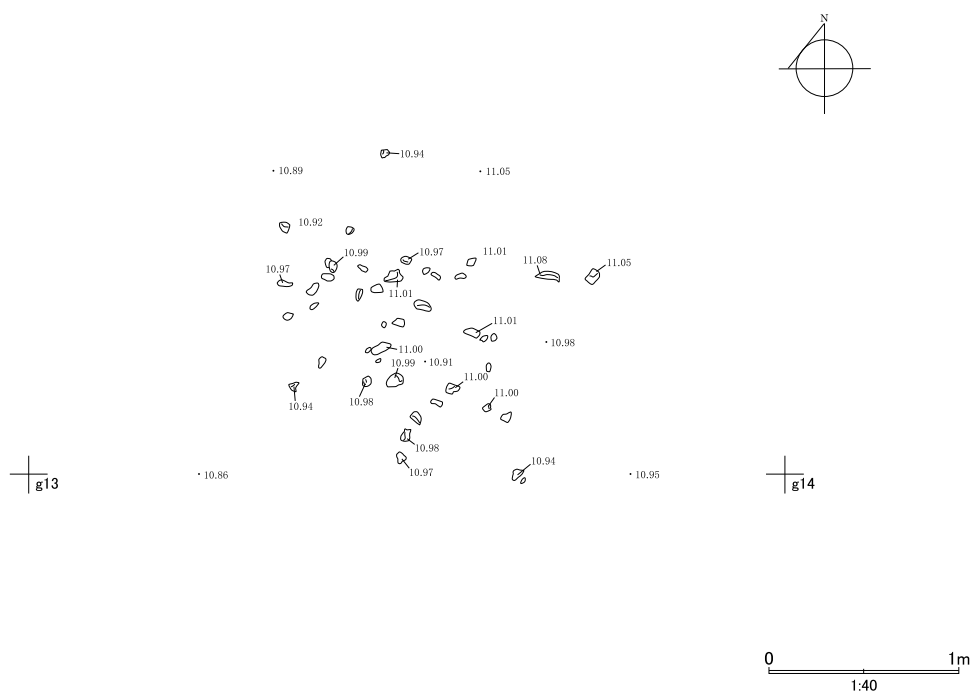
位置 f11区 **平面形態** おおむね楕円形

規模 1.13×0.88/0.74×0.54/0.12m

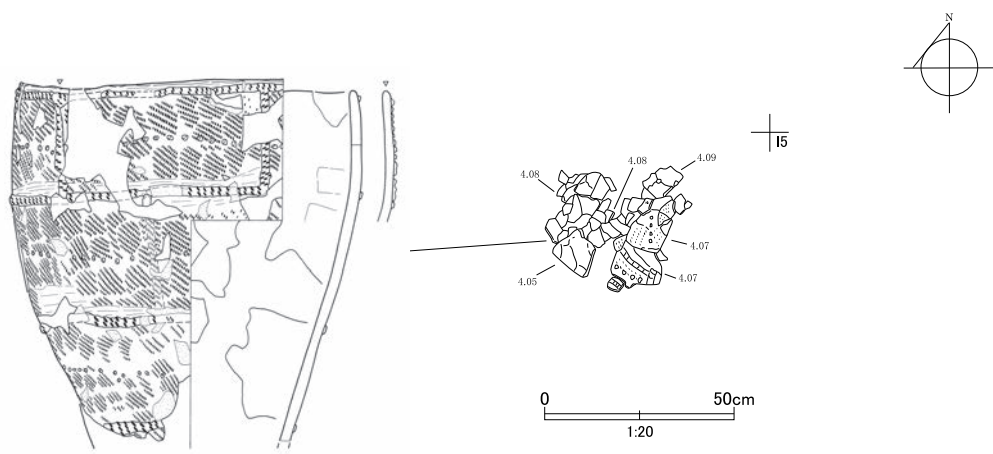
確認・調査 調査区北西部で検出した竪穴住居跡ⅢH-15に重複する土坑ⅢP-26の調査において、坑底面の北東部に黒色土を検出していた。一部ベルトを残しⅦ層上面まで掘り下げたところ、楕円形を呈する黒色土を検出した。半截し底面と壁の立ち上がりを確認し、土坑とした。

覆土 V層黒色土を主体とし、下位はロームをやや多く含む。流入土とみられる。

VS-1

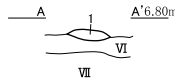
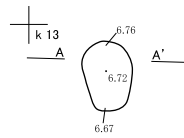


土器集中1

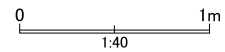


図IV-15 VS-1・土器集中1

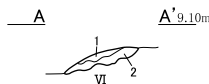
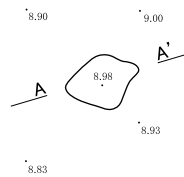
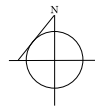
VF-1



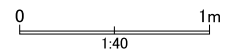
1:明黄褐色 (5YR 5/8) 焼土
 暗褐色 (10YR 3/3) V層土20%不均一混
 壤土 堅 粘着性わずか 骨片・炭未確認



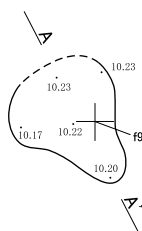
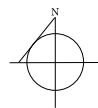
VF-2



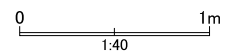
1:赤黒色 (10R 2/1) 軟 粘着性弱 V>赤色焼土 黒曜石フレイクチップ少量含む
 2:赤色 (10R 4/6) 軟 粘着性弱 焼土



VF-3



1:褐色 (7.5YR 4/6) 壤土 軟 [焼土] 下端境界不明瞭 暗褐色土混じり 不均質



図IV-16 VF-1 ~ 3

底面・壁 底面はおおむね平坦だが、北から南にやや傾斜している。壁は東側がやや急に、西側が緩やかに開いて立ち上がる。

遺物出土状況 覆土中から I 群 b 類土器10点、礫80点（うち被熱4点）が出土している。破碎礫・小礫が多い。

時期 III P-26より古い。検出面および周辺出土遺物から、縄文時代早期後半とみられる。（阿部）

V S-1（図IV-15、表III-9・IV-1、図版9-7）

位置 f 13区 **平面形態** 拡散したまとまり

規模 約2.0×1.8m

確認・調査 f 13区のV層を掘り下げ中に確認した。

遺物出土状況 拳大の礫のまとまりで9割近くが被熱している。被熱したたき石1点、被熱礫56点（5.37kg 1個平均95.9g）、礫8点（1.31kg うち1点は959gとやや大きい。これを除くと1個平均50g）。同時期の被熱礫を主体とした集石は隣接する温根沼3遺跡でも確認されている（北埋調報342）。

時期 検出層位と遺物から縄文時代早期後半とみられる。（影浦）

V F-1（図IV-16、表III-9・IV-1、図版9-4）

位置 k 13区 **平面形態** 楕円形

規模 0.36×0.24/0.06m

確認・調査 k 13区を掘削中、VI層の上面で確認した。

被熱層 単層である。骨、炭は未確認。V層起源の暗褐色土が不均一に20%ほど混ざる。

時期 検出層位から縄文時代早期後半とみられる。（影浦）

V F-2（図IV-16、表III-9・IV-1、図版9-5）

位置 f 6区 **平面形態** -

規模 0.45×0.30/0.08m

確認・調査 調査区の西側、標高約9mのVI層上面で赤色の焼土を検出した。

被熱層 赤色焼土はレンズ状に堆積している。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

時期 検出層位や周辺遺構等から、縄文時代早期後半の東釧路式Ⅱ式期が考えられる。（笠原）

V F-3（図IV-16、表III-9・IV-1、図版9-6）

位置 e 8・e 9・f 8・f 9区 **平面形態** 不整楕円形

規模 (0.70)×0.59/0.05m

確認・調査 調査区北西部の台地縁辺部のVII層上面で、やや赤みのある黄褐色土を検出した。トレンチ調査により被熱層を確認し、焼土と判断した。南東1.3mの位置から大型の砂岩礫が出土しており、関連する可能性がある。

被熱層 褐色を呈するが暗褐色混じりで、境界不明瞭である。

時期 検出面および周辺出土遺物から、縄文時代早期後半とみられる。（阿部）

土器集中1（図IV-15、表III-9、図版9-8）

位置 14区 **規模** 約0.4m四方の範囲

確認・調査 調査区の南西部、標高約4mの低位平坦面でV層中において検出した。

遺物出土状況 同一個体の土器が潰れたものである。

時期 検出した土器は縄文時代早期後半のコッタロ式である（図IV-18）。（影浦）

（3）遺構出土の遺物

・土器

VH-2（図IV-17、表IV-10、図版49）

底部付近のみの復元。自縄自巻の原体による。施文方向を斜位、横位、斜位と変えている。内面には条痕文が施文。内底面には、垂直刺突様の深い指頭圧痕が充填的に加えられている。内面の指頭圧は東釧路Ⅱ～コッタロ式に顕著な特徴とされる（遠藤2008）。器壁にも指頭圧による浅い凹凸が観察される。

VP-4（図IV-17、表IV-10、図版49）

薄手の作りで全体的に磨滅が著しい。自縄自巻RL原体による斜行縄文。底縁部には短縄文が縦位に施されている。内面はヘラ状工具による整形。東釧路Ⅲ式。

VP-8（図IV-17・18、表IV-13、図版49）

本遺構で出土した土器片は小片が多く全1,408点を数えるが、すべて覆土上層から出土した東釧路Ⅱ式である。

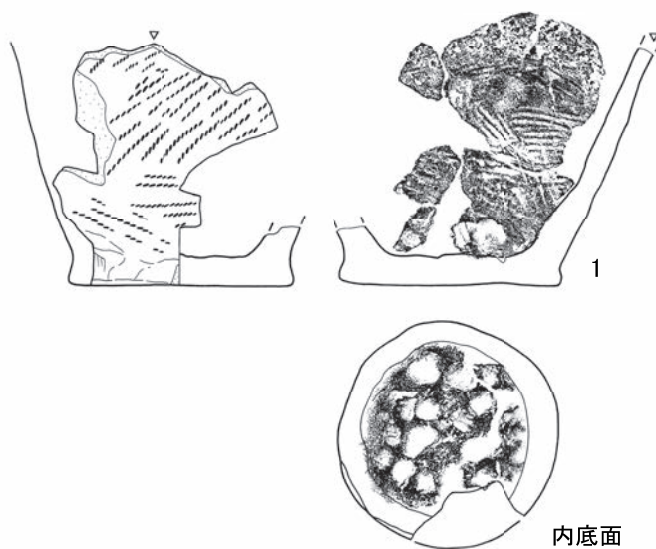
1は縄文と条痕文と撚糸文が交互に施文されたもの。口縁部から底部に向かって順に自縄自巻LR原体による斜行縄文、横走縄文、斜行縄文、横位条痕文、斜位に交差する条痕文、Rの撚糸文による横位施文、斜行縄文、横走縄文の順である。内面の条痕文は横位と斜位を繰り返している。口唇上には径2mmほどの工具による刺突が連続する。刺突は口唇に並行するような浅い角度で突いたもので、1つにつき8mmほどの引き幅がある。厚さは口縁部で6mm、胴下部で9mm。2は周辺包含層から出土した同一個体片。これらは未接合の残片を含め、同一個体片として計83点（ほかに周辺包含層の出土土器片で掲載1・2に接合したものが6点）を数えるが、この他にまったく接合しなかった1,387点の小片が出土している。総重量は818gで、1点平均の重さは0.59gであった。胎土等から同一個体とみなされるが、掲載土器とは別の個体であり、意図的に粉砕した可能性も考えられる。

VP-9（図IV-18、表IV-10・13、図版49）

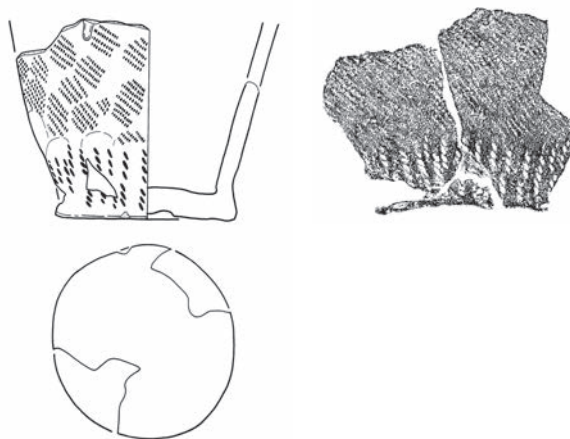
1は自縄自巻原体による施文が横縦交互に施文されたもの。縦位施文が斜行気味になっているところもある。内面の条痕文は横方向を基調としながら、部分的に斜方向にも施文されている。底部に近い下部断面は円形であるが、上部は潰れたような紡錘状の器形。2は2条の撚糸文を横位に施文している。やや斜方向であるが、施文のたびに方向を修正しているので、全体的には横走を保っている。施文は断続的で破線状をなす。8mmの長さで止まっているところもあれば、1.3mmの長さで止まっているところもあり、施文間隔は不均一であるが、上下での長さや切れ目は一致する。胴部は撚糸文の連続的な横位回転施文。一部施文が重なり合っていてあまり判然としない。内面は横方向に条痕を施した後、軽くナデたようである。いずれとも東釧路Ⅱ式。

土器集中1（図IV-18、表IV-10、図版49）

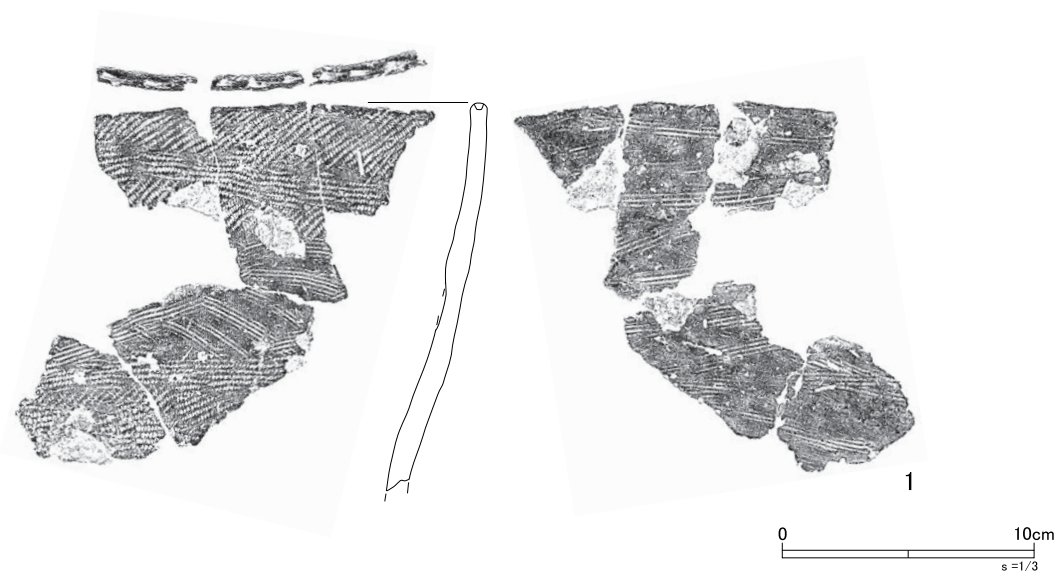
VH-2



VP-4

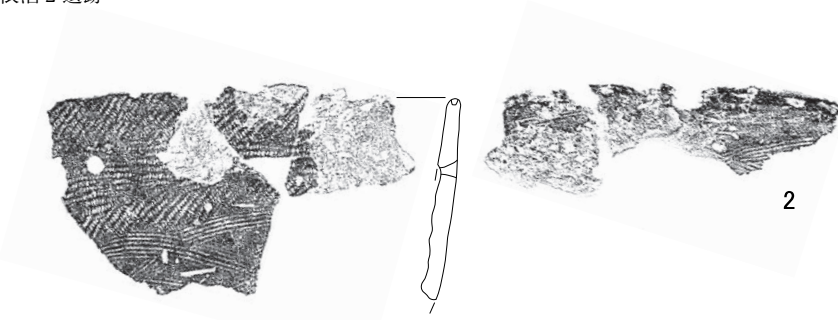


VP-8

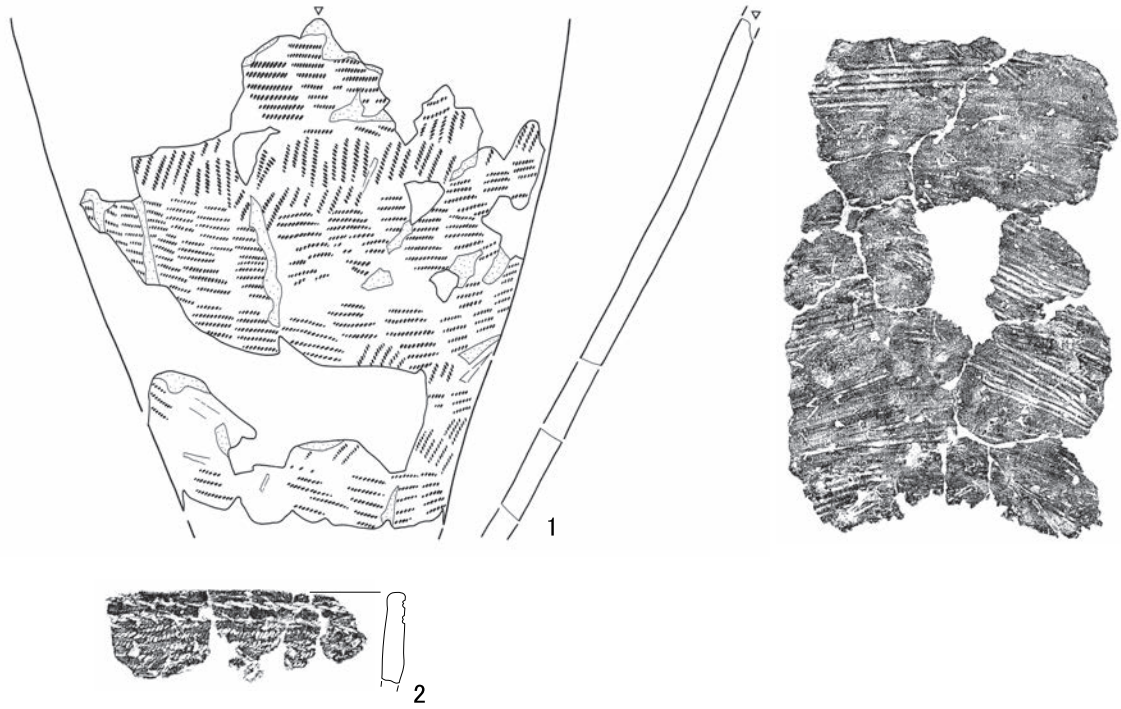


図IV-17 V層遺構出土の土器(1)

VP-8



VP-9



土器集中1



図IV-18 V層遺構出土の土器(2)

地文はR L原体の斜行縄文。幅6mmほどの貼付を横に数条巡らせ、縦にも貼付が施されている。貼付上には太い原体を巻きつけた撚糸文が刻み状に施文され、横位の貼付間には列点が施文されている。一番上の列点が横環するラインが最大径で、口縁はわずかにすぼまる器形。内部はヘラ状工具で調整のあと、ナデ調整をしたとみられる。また、粘土の継ぎが溝状に残る部位もある。コッタロ式。(影浦)

・石器

VH-1 (図IV-19~21、表IV-16、図版50)

1・2は、床面直上で出土した砥石。1は34.3cm×44.3cm。厚さ7.6cm。重量14.8kg。特大の砥石であるため、4分の1サイズで掲載したが、なお収まりきらないため裏面は正面図の下に配置した。両面を使用しているが、正面の方が使い込まれており、皿状にへこみを呈している。下部側縁に敲打整形で播鉢状にした部位があり、底は穴になって貫通しているのが側面で観察される。播鉢状の部位ですり潰し、穴を通じて下に落とす作業が想定されることから元はもっと大きな砥石であったと考えられる。播鉢穴の中心にかかる部位で破碎したものであろう。2も両面を使用している。使用面には平滑な面と溝状にへこむ面とがある。他に敲打痕が部分的に観察される。おそらく台石的な用途も兼ねていたと考えられる。3・4は台石。3は両面の中央に使用痕がある。覆土下出土。4は正面中央に敲打痕がある。擦痕状の傷が集中する。また、両面ともすりによる使用がなされたとみられ平滑である。石皿的な用途も兼ねたと考えられる。床面直上出土。3と4に関しては、両手で持ってたたき石として使用した可能性もある。5はたたき石。扁平礫を素材とし、側縁部を幅1.2cm~1.8cmほどの敲打痕がほぼ全周する。正面中央にもたたきによる使用痕がある。また両面ともすり石としても使用している。

VH-2 (図IV-21、表IV-16、図版51)

1~5は彫器。VH-2からは彫器が20点出土した。彫器に関して温根沼2遺跡では遺構包含層併せて全部で50点を数えるが、その4割に相当する。いずれも側刃型。6・7は削片。8はスクレイパー。縦長の削片を素材とし両側縁に連続的な微細剥離を両面から施して刃部を作出している。片面加工で下側縁にも刃部がある。9は楔形石器。1~9の石材はすべて黒曜石。

10は蛇紋岩製の小型石斧。裏面にすり切り溝を持ち、表裏面が赤みを帯びている。赤色化は被熱によるものとみられる。縄文時代早期の蛇紋岩製の石斧に黒色ないし赤色化したものがあることについて、意図的になされた可能性が指摘(立田 2004)されているが、それによると特に赤化は中型以下の斧に多いという。

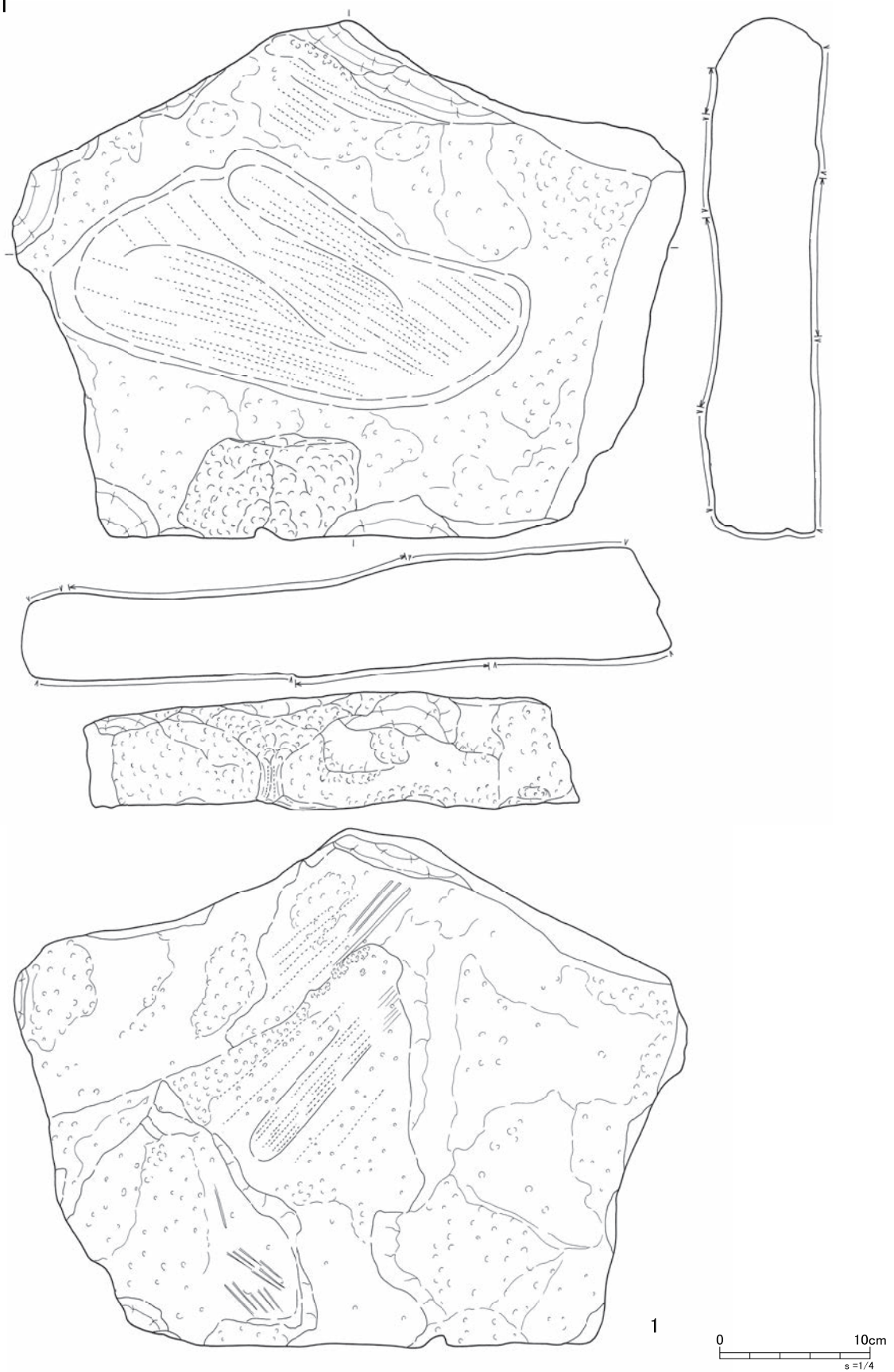
11はたたき石。上下両端と面に使用痕がある。また、すり使用かとみられる擦過傷も観察される。あるいは据え置きで使用した小型の台石・石皿の可能性もある。砂岩製。

3を除き、すべて床面ないし床面直上で出土したものである。

VP-8 (図IV-22・23、表IV-16・17、図版51)

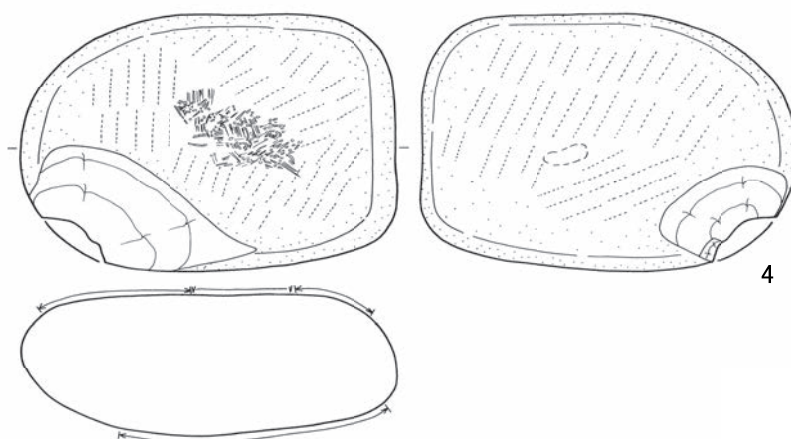
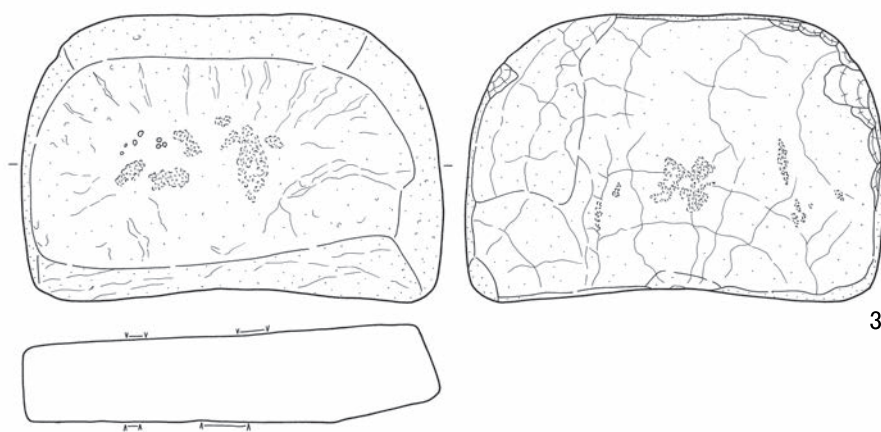
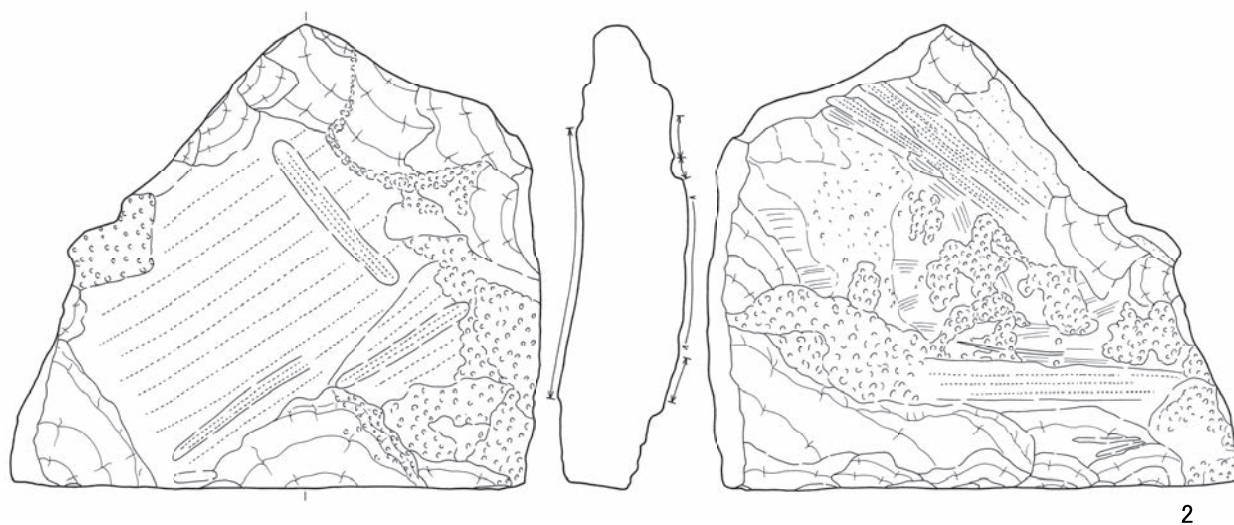
1は石鏃。胴がやや膨らむ木葉形。2は石錐。棒状を呈し片面全面加工。機能部は裏面の縁辺にも微細剥離が加えられている。同様の石錐は隣接する温根沼3遺跡(北埋調報342 2017 図V-19-16・17)にもみられる。1・2とも黒曜石製。3~8はたたき石。3・4は断面が円形。5・6は扁平礫を素材とし、面と周縁を使用したもの。いずれとも両面からの打ち欠きが2か所ある。5は下側縁をすり石としても使用している。7は断面三角形の礫を素材としたもの。8は棒状の扁平礫を素材として長軸両端を使用している。たたき石はすべて覆土上で出土した。3はチャート、4は安山岩、5は

VH-1



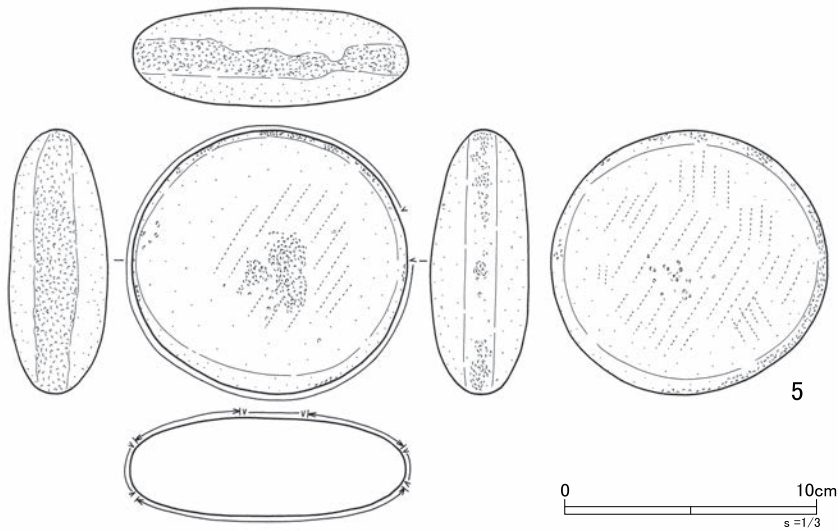
図IV-19 V層遺構出土の石器(1)

VH-1

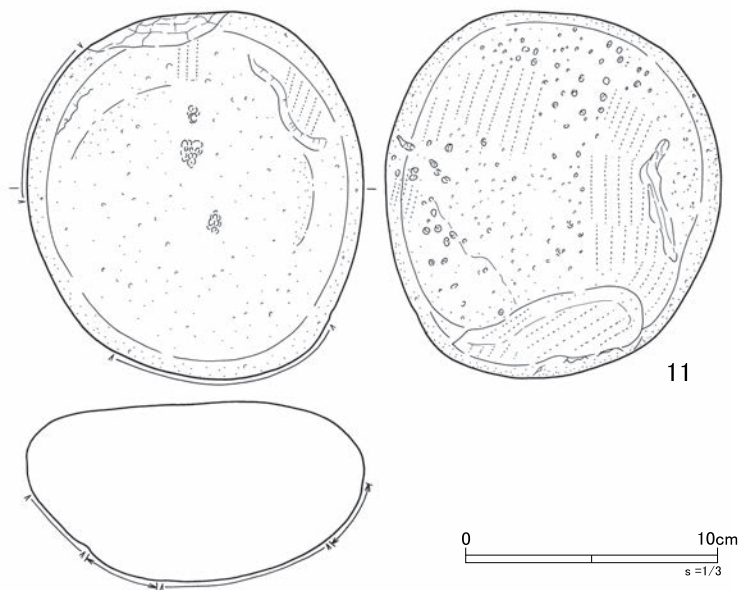
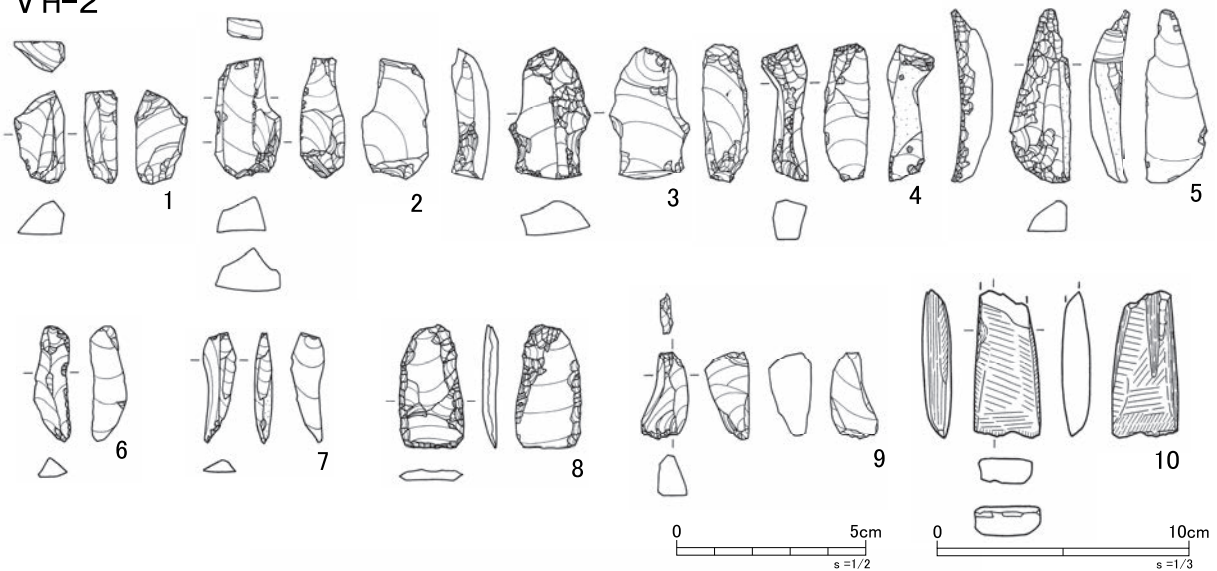


図IV-20 V層遺構出土の石器(2)

VH-1

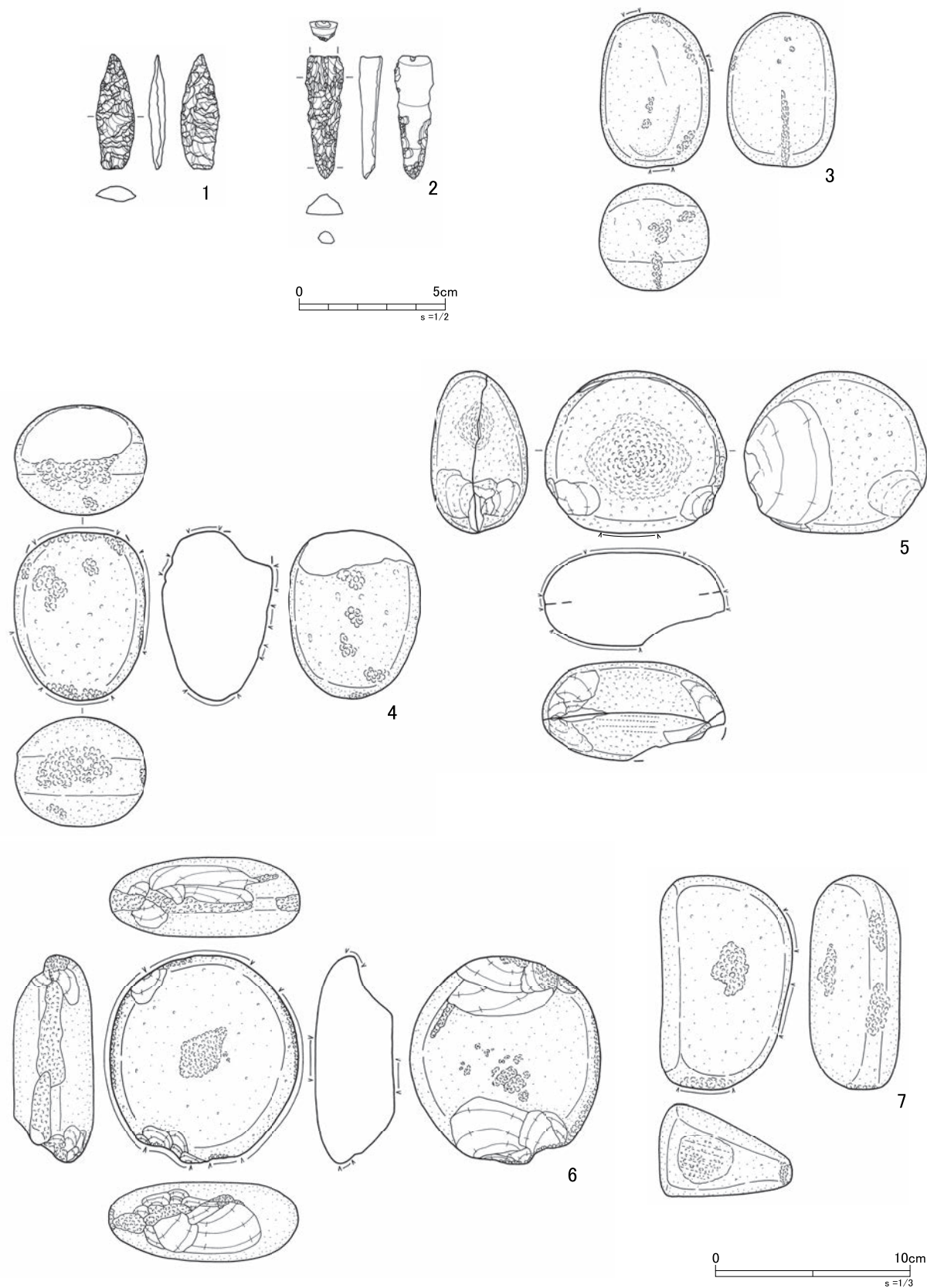


VH-2



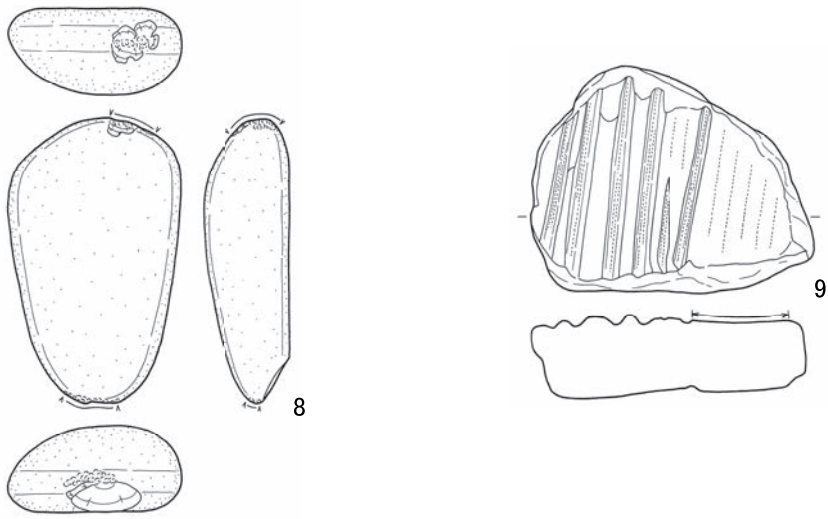
図IV-21 V層遺構出土の石器(3)

VP-8

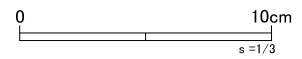
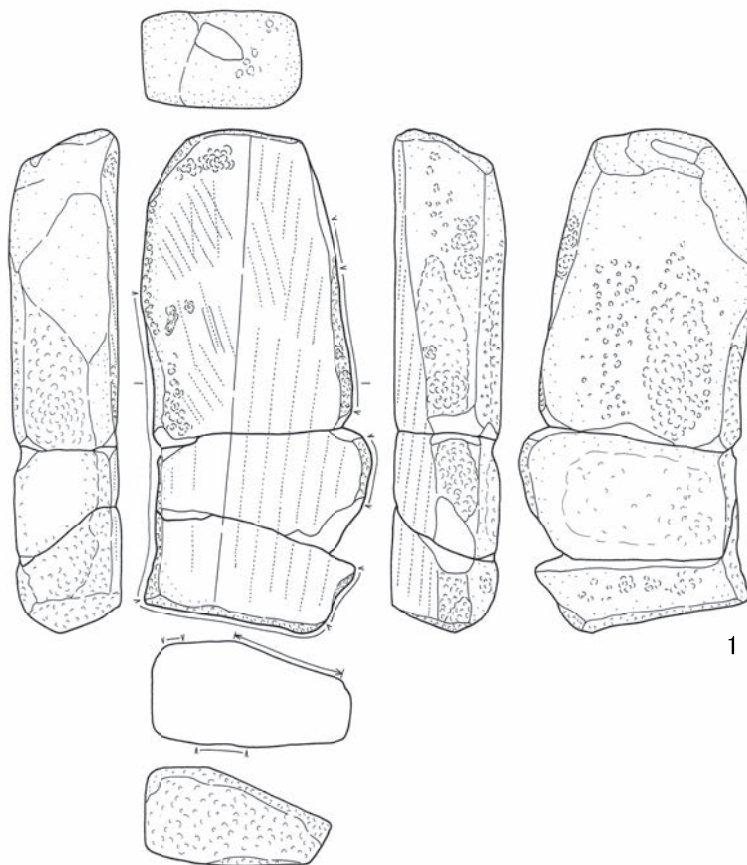


図IV-22 V層遺構出土の石器(4)

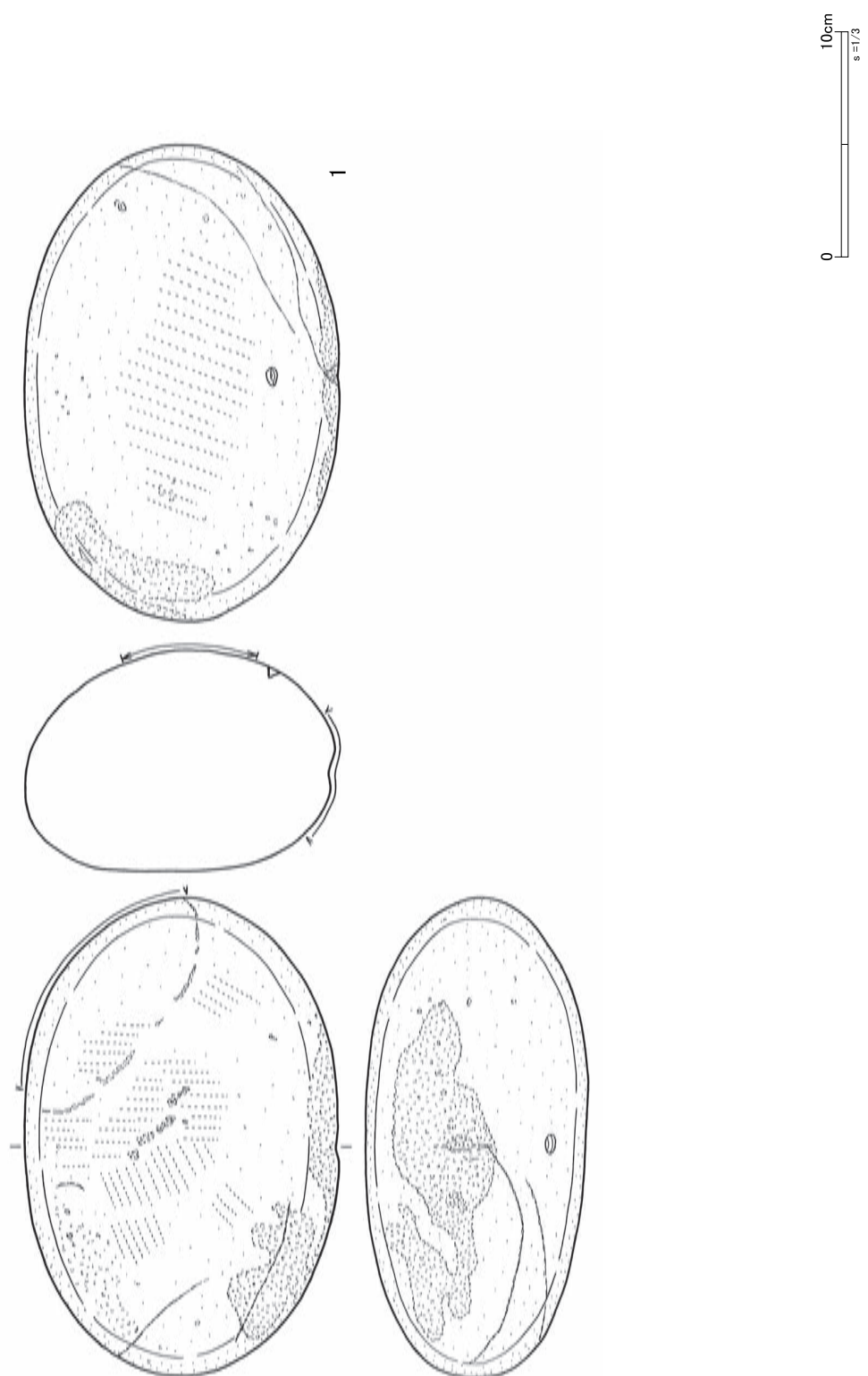
VP-8



VP-10



図IV-23 V層遺構出土の石器（5）



図IV-24 V層遺構出土の石器(6)

VP-14

玄武岩？、6は砂岩、7は粗粒玄武岩、8は泥岩製。9は砥石。片面に6条の溝が数えられる。面的にも使い込まれて平滑である。アルコース砂岩製。本遺跡で出土した有溝砥石にはアルコール砂岩製のものがいくらかある。

VP-10 (図IV-23、表IV-17、図版51)

1は細長い板状砥石で、側縁、下端、裏面に敲打痕が観察される。たたき石ないし台石的な用途にも転用したと考えられる。3点が接合した。

VP-14 (図IV-24、表IV-17、図版51)

1は床面直上から出土したたたき石である。大きさと形状からは台石・石皿とするのが適切かとも思われたが、側縁に敲打による使用痕が集中するため、据え置いての使用は考え難く、たたき石とした。表裏面はすり使用と考えられる平滑な使用痕が観察されるが、面は丸みを帯びている。両手で持って使用した可能性が考えられる。 (影浦)

2 V層・VI層出土の遺物

(1) 土器 (図IV-25、表IV-20、図版52)

V層から1,252点、VI層から21点、計1,273点が出土した。うち1,199点がI群b類、縄文時代早期後半の土器片であった。ほとんどすべてが東釧路Ⅱ式である。出土位置は、当該期の遺構分布エリアとまったく同じである。東側に隣接する温根沼3遺跡において、V層から東釧路Ⅱ式・Ⅲ式相当の遺構遺物がまとまって出土しているが、温根沼3遺跡寄りのグリッド21ライン以東、50m近くにわたって、当該期の土器はほとんど出土していない (図Ⅲ-15)。

1・2は口縁部に絡条体圧痕文で菱形のモチーフを構成した同一個体片。絡条体圧痕文の端部、継ぎ目に刺突が加えられている。胴部地文はRの撚糸文。斜位に横位に回転方向を変えて施文している。内面は条痕文が縦、横、斜めに施されている。残存している範囲で見ると、縦、斜め、横の順で施文している。3は縄線で幾何的なモチーフを連続させる。4～6は同一個体。自縄自巻原体で回転方向を変えて施文。斜行縄文と横走縄文が交互する。裏面の条痕は横方向を基調とするが、部分的にも施文されている。7・8は同一個体。自縄自巻によるRの撚糸文を口縁部から横位、斜位、横位と交互に施文。その上に4巻ないし5巻の撚糸文を右下がりの斜位に施文している。裏面は横方向の条痕文。幅広の条で、やや粗い施文。すべて東釧路Ⅱ式。

(2) 石器等 (図IV-26～30、表IV-22、図版53・54)

V層から683点、VI層35点、VII層2点、計720点が出土した。内訳は剥片石器83点、石核45点、フリイク・チップ478点、礫石器類が114点。以上の他、礫・原石の類が1,889点出土している。

石鏃(1～5)は11点出土した。1は基部側を大きく欠くが、石刃を素材として、裏面は全面に細かい剥離を加えている。石刃鏃の末期資料であるかもしれない。2は五角形気味。片面全面加工。裏面は微細剥離が全周する。3は長身鏃。4・5は上部がやや膨れて鈍状をなすもの。非掲載6点の内訳は、三角形凹基1点、有茎凸基2点、未成品1点、小破片2点である。すべて黒曜石製。

石錐(6・7)は2点出土した。6は周縁加工。厚みのある側を錐部としている。7は棒状。全面加工。長身の石鏃を再利用した可能性がある。いずれとも黒曜石製で被熱している。

両面調整石器は1点出土した。図示はしていない。

ナイフ(8)は1点出土した。有柄で刃部再生を繰り返し、刃部が小さくなったもの。黒曜石製。

彫器(9～21)は27点出土した。9～18は側刃型。19～21は斜刃型。21は彫器片。すべて黒曜石製。

削片(22)は2点が出土した。すべて黒曜石製。

石刃(23・24)は4点が出土した。すべて黒曜石製。

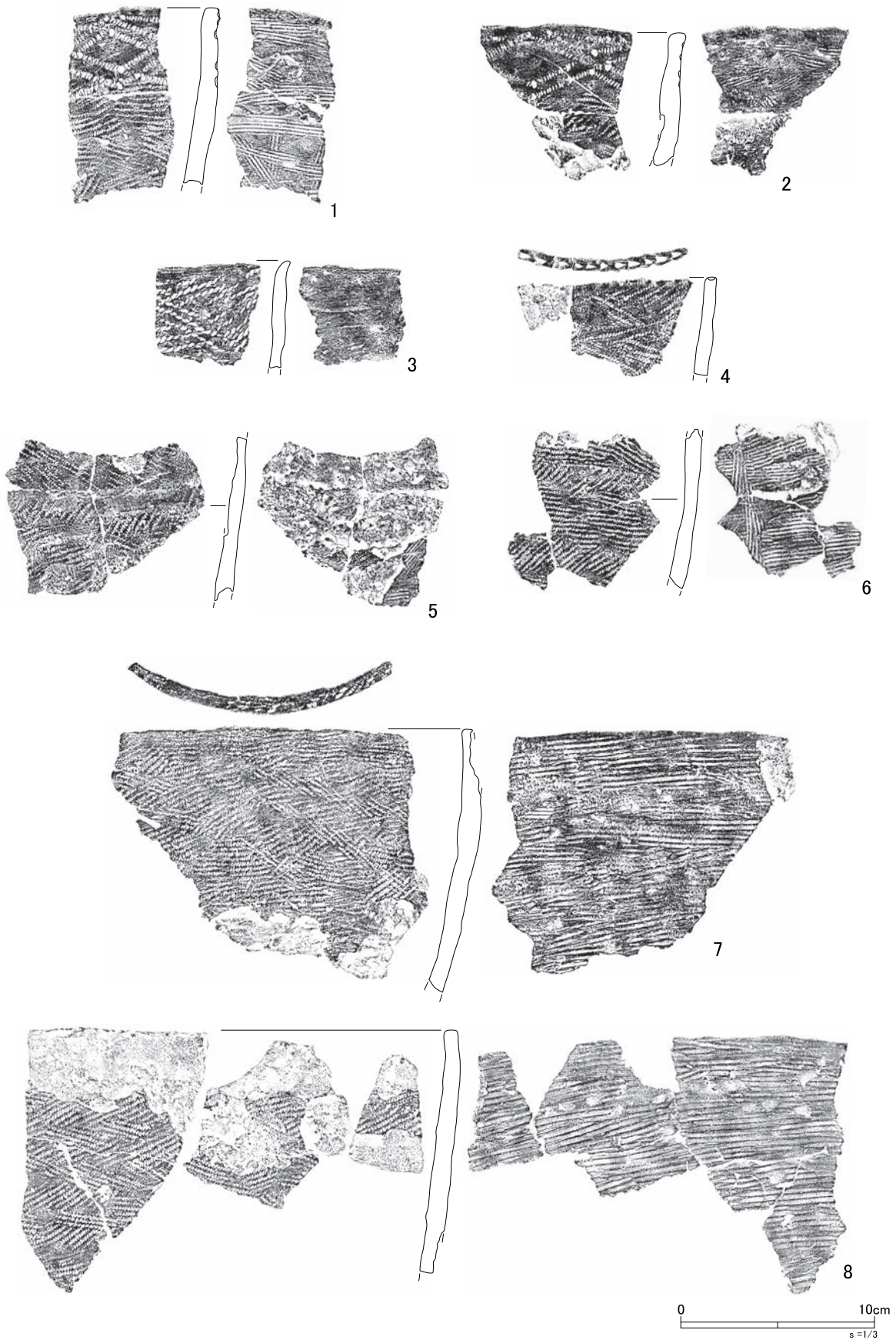
スクレイパー(25～29)は26点出土した。内訳は円形2点、木葉形1点、急角度刃部1点、石刃素材3点、縦型9点、不定形2点、破片7点。25は木葉形。片面周縁加工で上下端は鋭利。26～28は石刃素材のもの。縁辺に微細剥離を連続的に加えて刃部を作出している。29は縦型。片面全面加工。すべて黒曜石製。

楔形石器(30～33)は7点出土した。31は上端に階段状の剥離が多数生じている。すべて黒曜石製。

U・Rフリイクは6点出土した。図示はしていない。

石核(34～36)は45点が出土した。34は粗い剥離で形状を整え、正面で縦長の剥離を行っている。35は上部の単剥離打面の周辺に微細な調整剥離を加えて縦長剥片剥離が連続的に行われたもの。36は打面を変えて多方向から剥離を行っている。すべて黒曜石製。

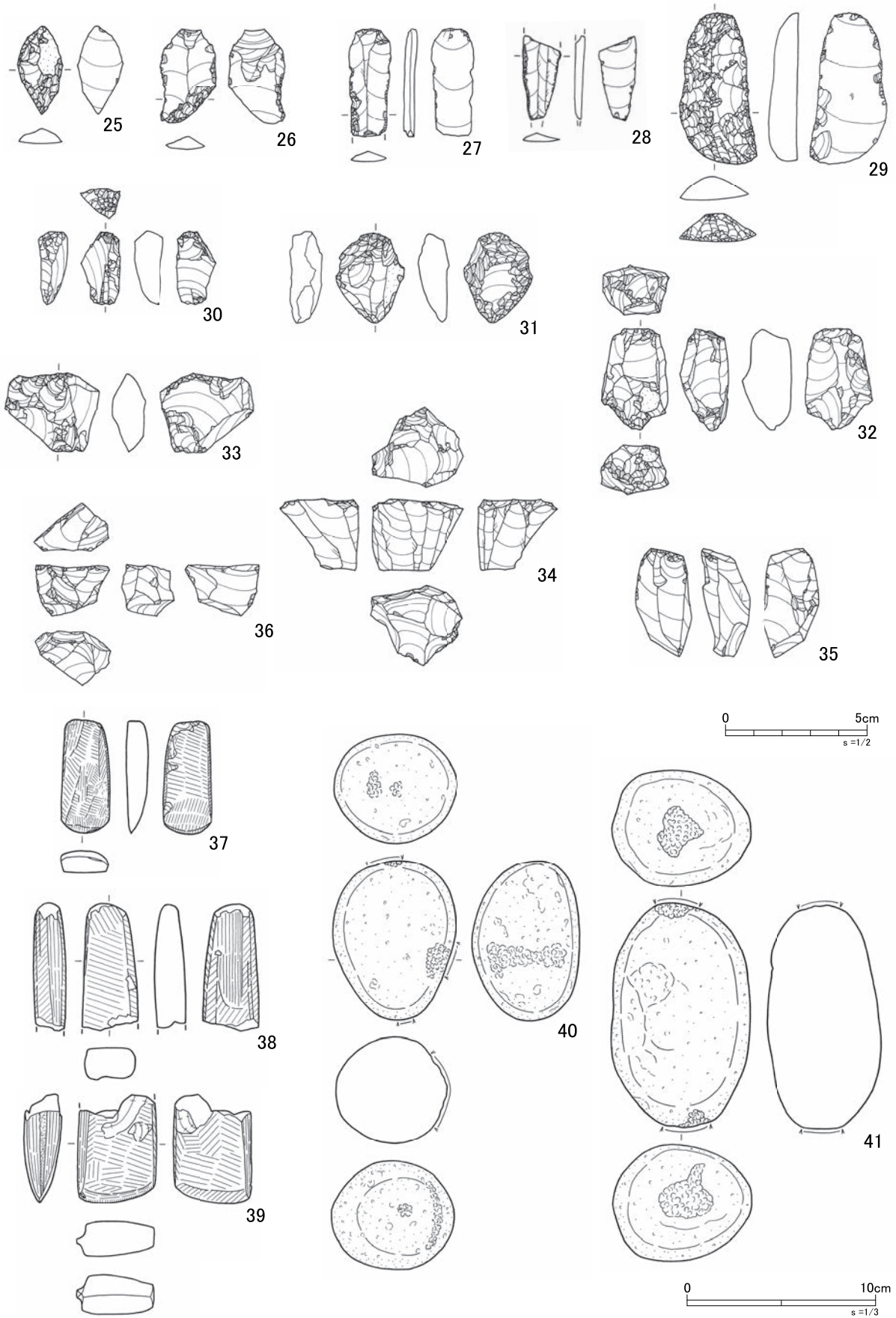
石斧(37～39)は5点出土した。37は小型の短冊形。すり切り溝の痕跡が残る。38は基部片。裏面



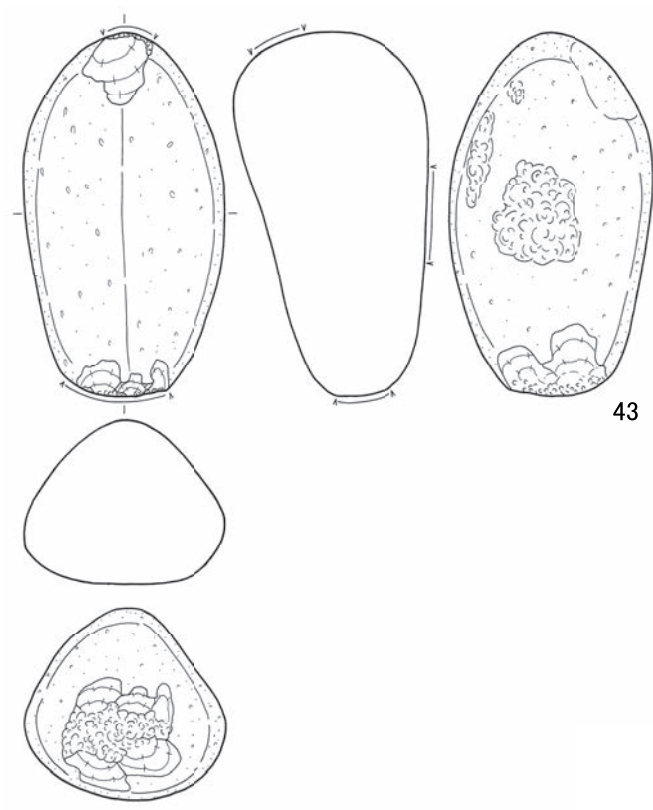
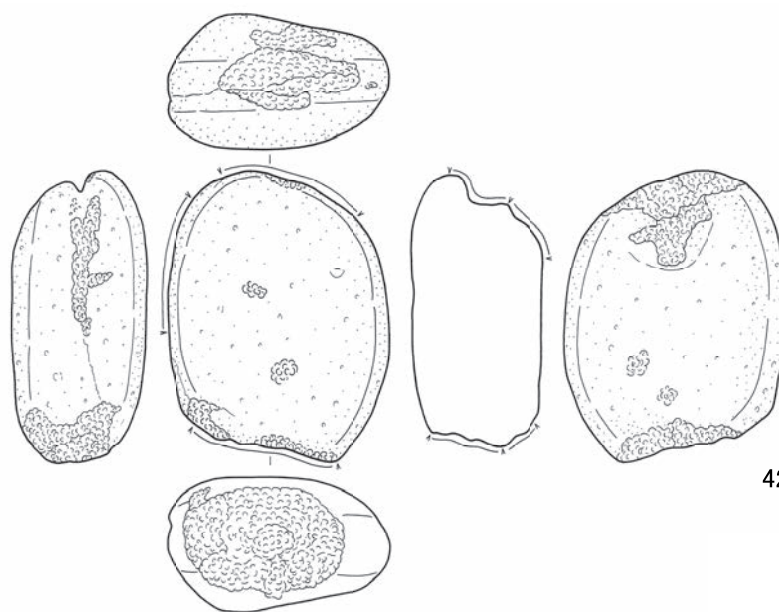
図IV-25 V層包含層出土の土器(1)



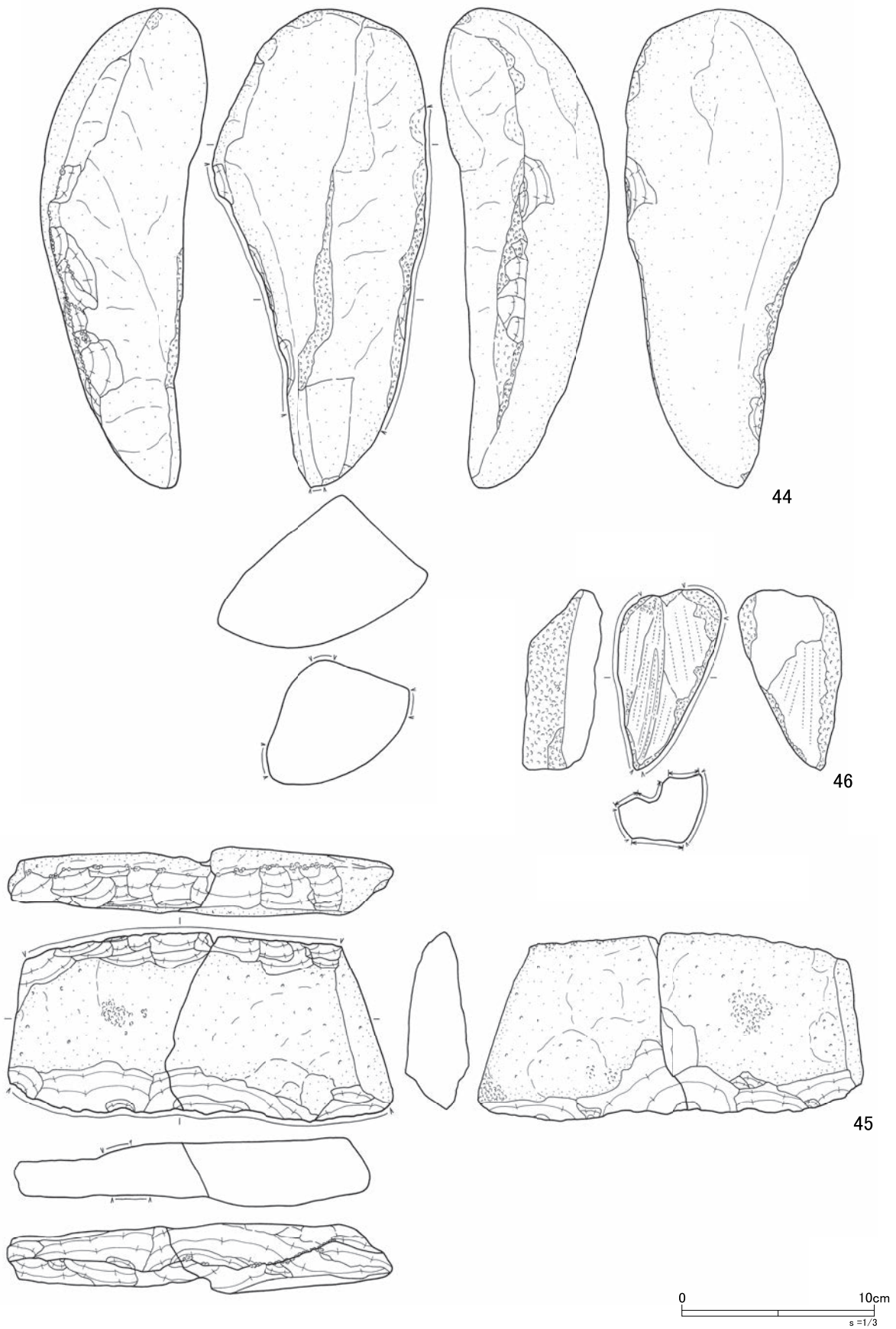
図IV-26 V層包含層出土の石器(1)



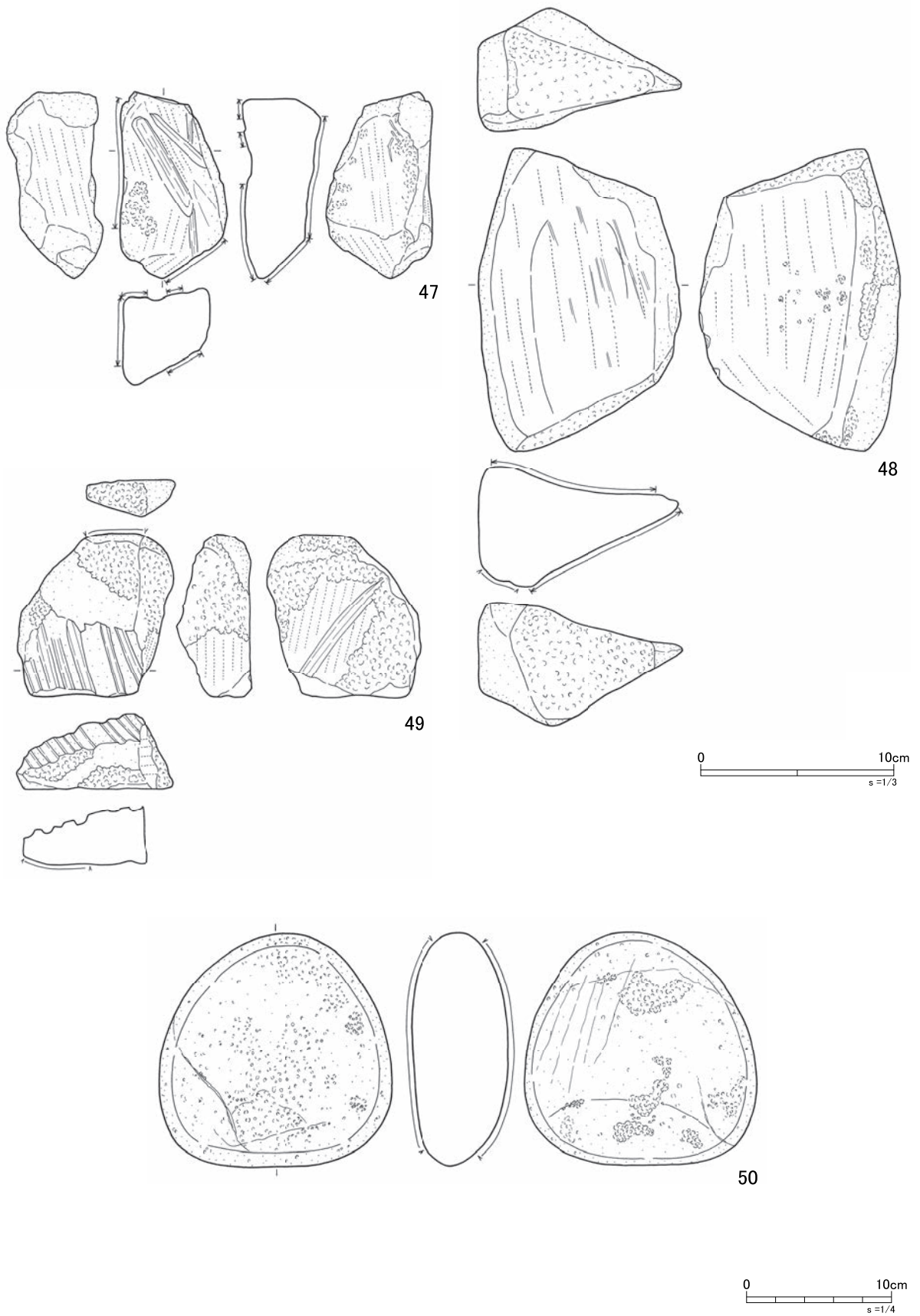
図Ⅳ-27 V層包含層出土の石器(2)



図IV-28 V層包含層出土の石器(3)



図Ⅳ-29 V層包含層出土の石器(4)



図IV-30 V層包含層出土の石器(5)

中央にすり切り溝が走る。下端の割れ口周辺がかすかに茶褐色を呈する。欠損した刃部側が被熱により赤みを帯びているのかもしれない。37・38は蛇紋岩製。39は刃部片。全面がよく研磨され非常に平滑である。左側縁に両面からのすり切り溝がある。裏面は茶褐色を呈する。泥岩製。38は判然としないうが、39については、VH-2出土の蛇紋岩製の石斧同様、二次焼成を受けた可能性が考えられる。非掲載の2点はいずれとも泥岩製の刃部片。

たたき石 (40~45) は全部で54点出土した。40・41は断面が円形。40はよく焼けて赤化している。42は厚みのある扁平礫。上下両端が面的にたたき潰れている。43・44は断面三角形気味の礫を素材とする。43は上下端と面を使用している。端部は加撃により周辺部の礫の表面が剥離している。44は三稜線の角部を主に使用している。45は側縁に両面から粗い打ち欠きを加え、鋭い稜線を作成したもの。面も使用しているが、表裏面とも使用痕がほぼ同じ位置であることから、面を使用する際は、やや幅のある正面右側を握って使用したと考えられる。40~43は粗粒玄武岩、44・45は凝灰質砂岩製。

砥石 (46~49) は破片を含め53点出土した。完形21点、破片32点。すべて砂岩製である。完形は板状が18点（うち2点接合）、角柱状が3点である。有溝砥石は12点を数える。有溝砥石の内訳は板状2点、角柱状2点、破片8点であり、破片9点のうち6点は同一個体とみられるまとまりである。被熱したものは13点。被熱したものの内訳は板状が2点、破片が11点である。46・47は角柱状の有溝砥石。46の両側縁は敲打痕が充填されている。48・49は板状。48は上下端が敲打で平坦に整形されている。正面の使用面には細い条痕が複数観察される。49は有溝。正面に6条、裏面に1条溝がある。敲打痕も観察されるが、整形目的のほか、あるいはたたき石的な用途にも使ったかもしれない。46・48・49はアルコース砂岩製。

台石 (50) は1点が出土した。50は扁平な礫を素材としたもので、両面に敲打痕が斑状に観察される。据え置いての使用が想定されるものを台石としたが、両手で持ってたたき石として使用した可能性も否定できない。砂岩製。
(影浦)

3 Ⅲ層 縄文時代の遺構と遺物

(1) 概要

縄文時代中期末～後期前半の北筒式期の遺構は、竪穴住居跡3軒（ⅢH-7・8・13）、土坑7基（ⅢP-9・13・15・17・23・25・27）、集石7か所（ⅢS-1・2・4・5・8・9）を確認した。西側の台地上縁辺部にまとまる分布傾向である。

竪穴住居跡の平面形は、円形（ⅢH-7）、不整な楕円形（ⅢH-8）があり、他の遺構との重複により形状を把握しきれなかったもの（ⅢH-13）もある。道東部の北筒式期の竪穴住居跡にしばしばみられる、不規則な掘り込みによる床面の激しい凹凸は確認されなかった。

ⅢH-7は、壁際に袋状の付属土坑を3基検出した特徴的な住居跡である。床面中央に炉を持ち、そこを中心にして環状に柱穴を検出して、西側には出入り口とみられる開口部がある。

ⅢS-9はⅢH-13の覆土中において検出した集石であるが、直上において胴部に押し引き施文のある北筒Ⅱ式（トコロ6類）が一個体出土している（図Ⅳ-31・49）。（影浦）

(2) 遺構

ⅢH-13（図Ⅳ-31～33、表Ⅲ-9・Ⅳ-4、図版10-1～6）

位置 d12・d13・d14・d15、e13・e14・e15区 平面形態 不明

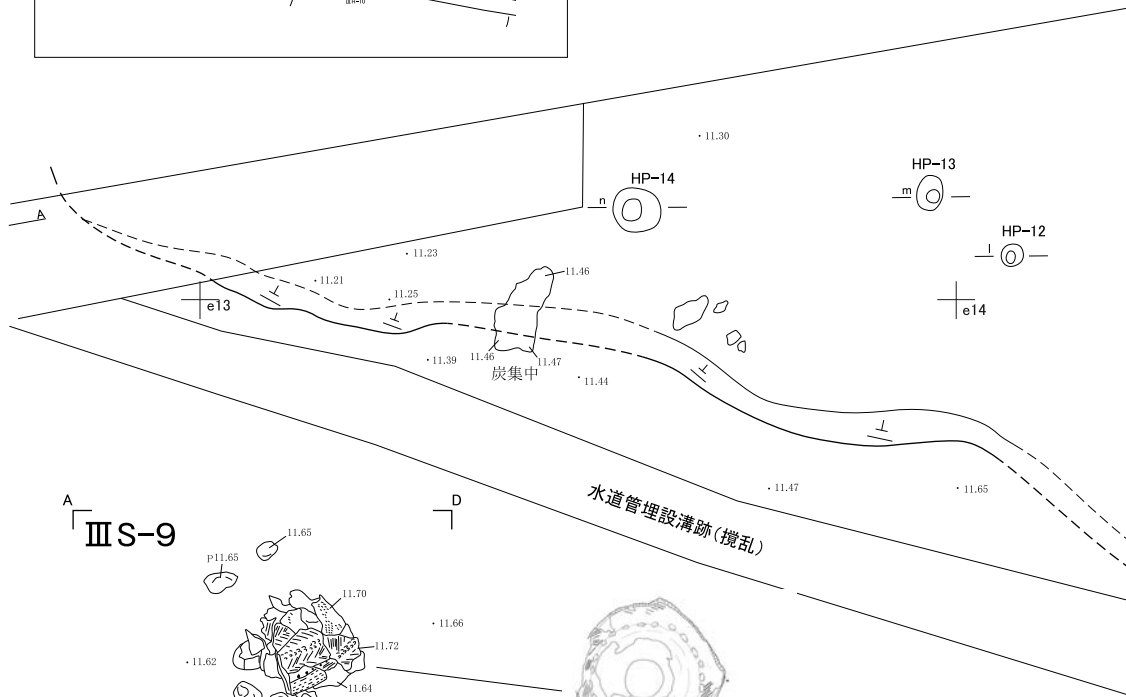
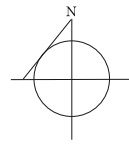
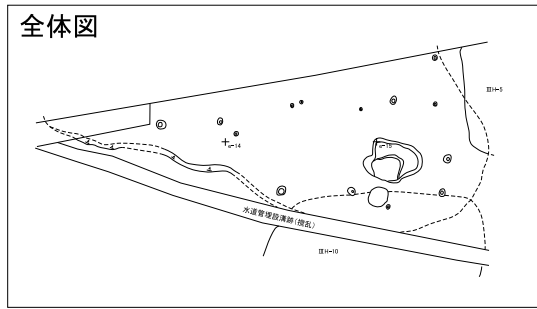
規模 (11.8?)×(5.0?)／—×—／0.33m

確認・調査 ⅢH-5の掘り上げ土を確認する目的で、調査区北境界の14・15区にかかる範囲の壁清掃を行った際に、掘り上げ土の下に別の遺構覆土とみられる土層を確認した。当初はⅢH-5の掘り上げ土とも考えられたが、西側へ長く続いていたため住居跡の覆土の可能性を考えて調査を進めた。調査区北境界の壁面上14ラインより西へ約1.5mで、覆土の立ち上りが見えたため、当初はそこを住居の壁と想定した。しかしながら、平面では壁を見極めることができなかった。さらにその少し西側において浅い土坑状のくぼみがあり、これをⅢP-22として調査していたが、想定される住居跡床面と、この土坑の坑底面の標高とが合致すること。さらには、北筒式期の竪穴住居の床が、しばしば不規則に凹凸を呈することなどを考えて、最終的にはこの土坑が当住居跡の西端部分であると判断した。

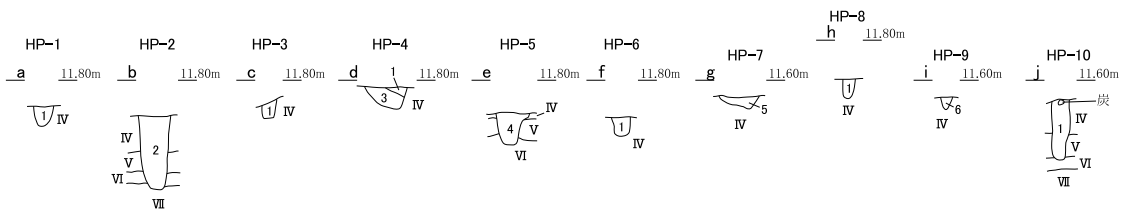
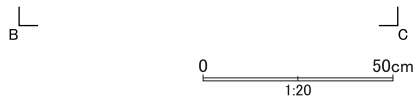
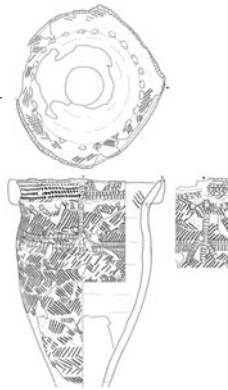
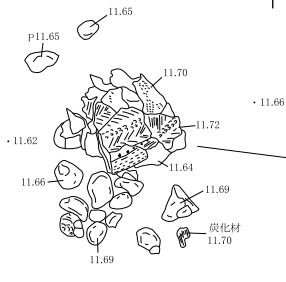
住居の範囲を想定しつつ、南北方向にも2本のベルトを設定しトレンチ調査を行い、同時にd・e13～15区を清掃して面的な範囲確認にも努めた。このとき、南側には近接するⅢH-10の調査が先行しており、両者の重複は想定していたが、ⅢH-10の北側も範囲が判然としなかった。ⅢH-13覆土下で確認したⅢS-9に北筒Ⅱ式（トコロ6類）一個体（図Ⅳ-31、図Ⅳ-49）がともなったこと、そしてⅢH-10が縄文時代の下田ノ沢式期の住居であることが判明していた点から、ⅢH-10のほうが新しいと想定はできたものの、最後までその境界を明確に見出すことはできなかった。15ラインに設定したベルトのⅢ層中に、T a - cとみられる火山灰の堆積がかすかにみられたため、この火山灰が分布している範囲も判断の材料とした。住居と想定される範囲内で柱穴や付属遺構（HP-15）も確認できたことから、住居跡とはしたが、そうであれば相当大型の住居になる。あるいは、かつて住居跡があったところを広範囲かつ不定形に削平し、そこに掘り上げ土等を投棄した場である可能性も否定できない。

覆土 12層に分層した。10～12に関しては15ライン上に設定したベルトにかかった付属土坑（HP-15）の覆土であるが、堆積状況が不自然である。覆土10・12とも土坑の開口部で堆積が止まっていることから、まず、壁の一部がオーバーハングする径50cm程度の穴を掘り、それを覆土12で埋めた後、ひとまわり径の小さい穴をふたたび掘りなおして、覆土11と10を埋めたと考えられる。

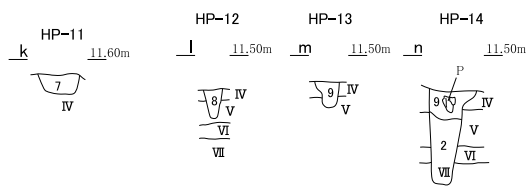
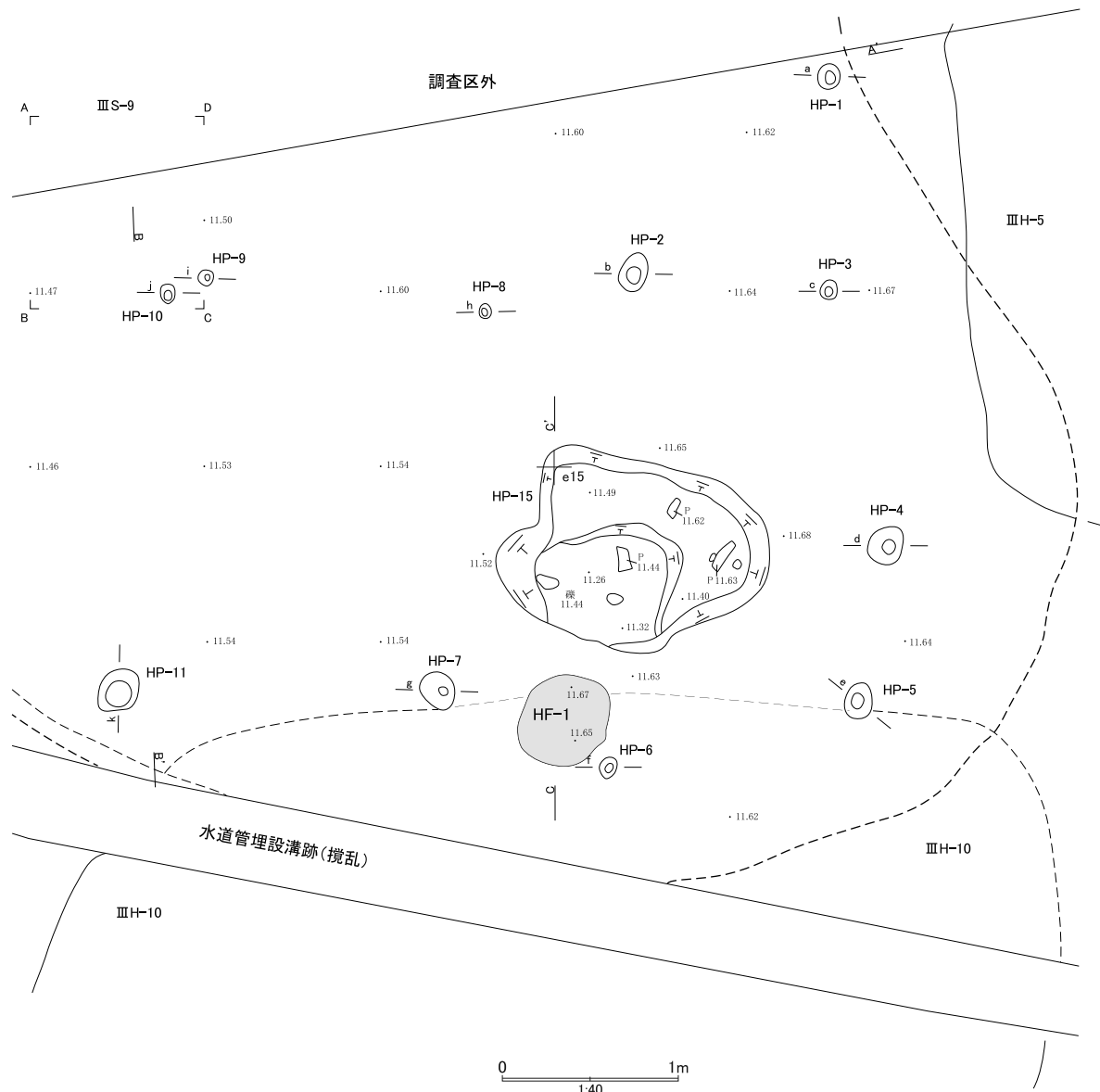
ⅢH-13・ⅢS-9



A ⅢS-9



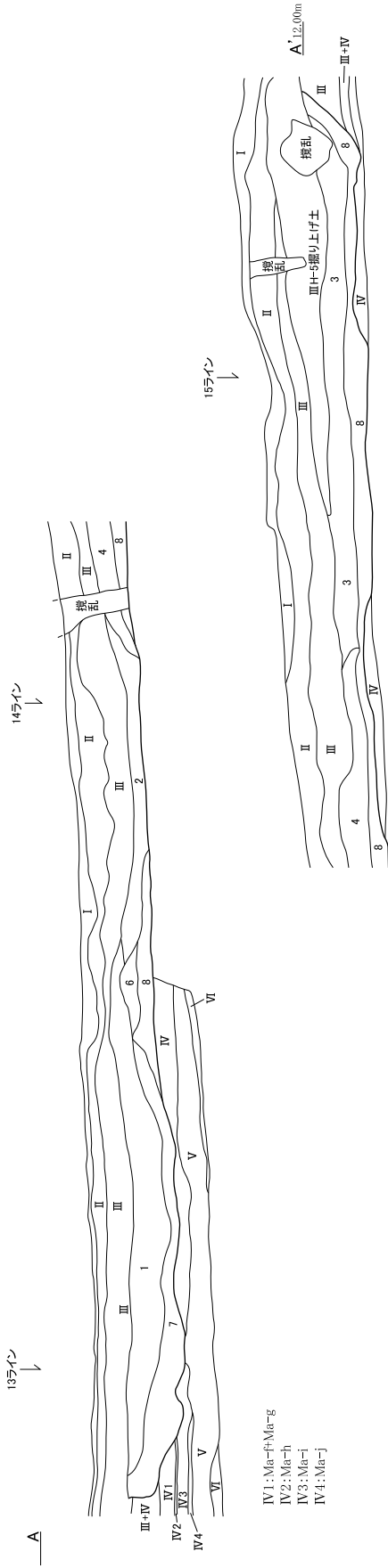
図Ⅳ-31 ⅢH-13・ⅢS-9



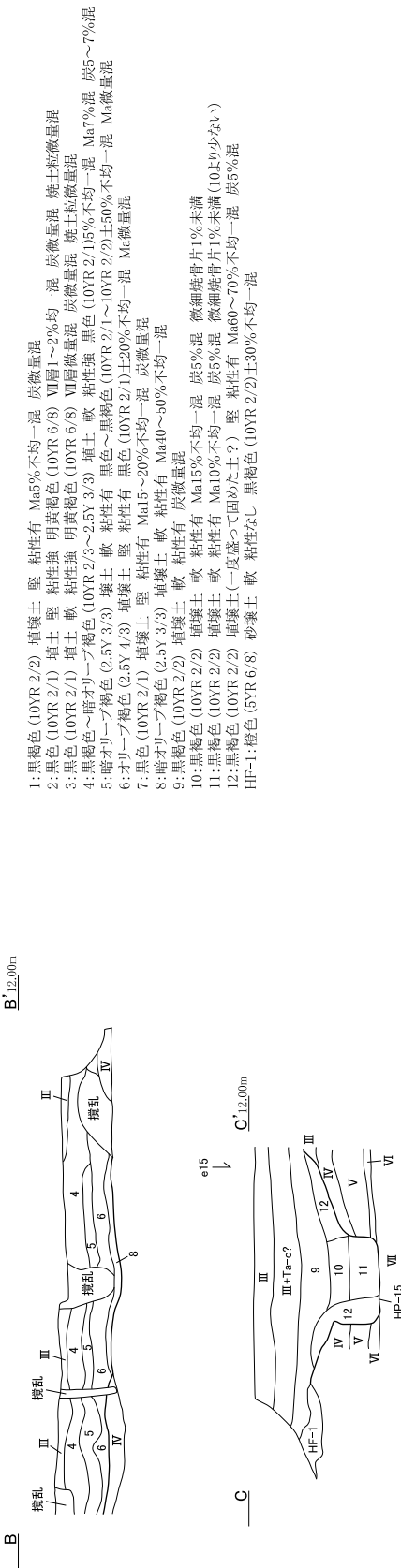
- 1: 黒色 (10YR 2/1) 埴壤土 軟 粘性有 Ma5%不均一混
- 2: 黒色 (10YR 2/1) 埴土 軟 粘性強 Ma25~30%不均一混
- 3: 黒褐色 (10YR 2/2) 埴壤土 軟 粘性有 Ma30%均一混
- 4: 黒褐色 (10YR 3/2) 埴壤土 軟 粘性有 Ma50%均一混(III+IV)
- 5: 黒色 (10YR 2/1) 埴壤土 すこぶる堅 粘性有 Ma40%不均一混
- 6: 黒色 (10YR 2/1) 埴壤土 軟 粘性有 Ma40%均一混
- 7: 黒色 (10YR 2/1) 埴壤土 すこぶる堅 粘性有 Ma10%均一混
- 8: 黒褐色 (10YR 3/1) 埴壤土 鬆~軟 粘性有 Ma40~50%均一混
- 9: 黒色 (10YR 2/1) 埴壤土 すこぶる堅 粘性有 Ma3%均一混

図IV-32 III H-13

ⅢH-13



IV1: Ma-f+Ma-g
 IV2: Ma-h
 IV3: Ma-i
 IV4: Ma-j



1: 黒褐色 (10YR 2/2) 埴壤土 堅 粘性有 Ma5%不均一混 炭微量混
 2: 黒色 (10YR 2/1) 埴土 堅 粘性強 明黄褐色 (10YR 6/8) VII層1~2%均一混 炭微量混 焼土粒微量混
 3: 黒色 (10YR 2/1) 埴土 軟 粘性強 明黄褐色 (10YR 6/8) VII層微量混 炭微量混 焼土粒微量混
 4: 黒褐色~暗オリーブ褐色 (10YR 2/3~2.5Y 3/3) 埴土 軟 粘性強 黒色 (10YR 2/1)5%不均一混 Ma7%混 炭5~7%混
 5: 暗オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 埴土 軟 粘性有 黒色~黒褐色 (10YR 2/1~10YR 2/2)±50%不均一混 Ma微量混
 6: オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 埴壤土 堅 粘性有 Ma15~20%不均一混 炭微量混
 7: 黒色 (10YR 2/1) 埴壤土 堅 粘性有 Ma40~50%不均一混
 8: 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 埴壤土 軟 粘性有 炭微量混
 9: 黒褐色 (10YR 2/2) 埴壤土 軟 粘性有 Ma15%不均一混 炭5%混 微細焼骨片1%未満
 10: 黒褐色 (10YR 2/2) 埴壤土 軟 粘性有 Ma10%不均一混 炭5%混 微細焼骨片1%未満 (10以下少ない)
 11: 黒褐色 (10YR 2/2) 埴壤土 軟 粘性有 Ma60~70%不均一混 炭5%混
 12: 黒褐色 (10YR 2/2) 埴壤土 (一度盛って固めた土?) 堅 粘性有 Ma60~70%不均一混 炭5%混
 HP-1: 橙色 (5YR 6/8) 砂壤土 軟 粘性なし 黒褐色 (10YR 2/2)±30%不均一混

ⅢH-13断面

本体部の覆土1～9は厚さが場所によって不均一である。大部分の掘り込みがIV層（摩周テフラ）に達しているが、層界が平坦でないことから覆土8・9は貼り床の可能性も考えられる。覆土自体の広がりや覆土中の混入物に注意すると、覆土4～7は掘り上げ土等の人為堆積の可能性が疑われる。覆土1～3に関しては、くぼみに堆積した流れ込み土の可能性が考えられる。

床面・壁 掘り込みは大半がIV層（摩周テフラ）に達している。土層観察の所見では平坦ではないので、覆土8・9が貼り床の可能性が考えられる。しかしながら、踏みしめによる土壌の硬化は認められなかった。床は平面では捉えられず、総じて掘り過ぎている。壁はほとんど確認できていない。

付属遺構 III H-13に近接している15ライン沿いのベルト南端部で焼土（HF-1）を確認した。III H-10の中央部で炉を確認していることから、この焼土がIII H-13に伴う可能性が高いと考え、その南をIII H-10と13との境と想定した。同じく15ラインのベルトにかかるところで、覆土の項で前述した付属土坑1基（HP-15）を確認している。柱穴は全部で14基確認した。住居跡全体の規模が把握されていないが、壁際に寄っているように見える。HP-2・12・14が比較的深い。14に関しては深さ50cmに及ぶ。

遺物出土状況 調査区境界部にかかる覆土下において、北筒Ⅱ式土器（トコロ6類）をともなう集石遺構（III S-9）を確認している。しかし、明確に本住居跡にともなうと判断できるような遺物の出土状況は確認されていない。付属土坑（HP-15）からは、北筒式と下田ノ沢式の土器片が各2点、石鏃、スクレイパー、U・Rフレイク、台石片が各1点、それから被熱礫26点等が出土した。

時期 覆土3から採取した炭で放射性炭素年代測定（AMS測定）を行ったところ4,060±20yrBP（ $\delta^{13}\text{C}$ 補正值）という値が出た。覆土3の堆積を住居廃絶後のものと考えても、ほぼ予想通りの値、縄文時代中期末。北筒Ⅱ式（トコロ6類）期である。（影浦）

III S-9（図IV-31、表III-9・IV-5、図版10-7・8）

位置 d14区 **平面形態** 拳大礫の密集

規模 約0.50×約0.40m

確認・調査 III H-13を掘り下げ中に検出した。検出面はIII層下部ないしIII H-13の覆土4直上である。

遺物出土状況 拳大の礫22点（2,556g 1点平均 116.2g）が比較的まとまって出土した。見た目では被熱礫と判断されるものは伴っていない。集石の直上で北筒Ⅱ式（トコロ6類）1個体が潰れた状態で出土した。ほかに砥石2点、U・Rフレイク1点、フレイク2点がある。

時期 出土遺物から縄文時代中期末北筒Ⅱ式（トコロ6類）期と考えられる。（影浦）

III H-7（図IV-34～36、表III-9・IV-3、図版11・12）

位置 e8・e9・e10・f8・f9・f10区 **平面形態** 楕円形

規模 6.12×4.68/4.60×4.08/0.74m

確認・調査 調査区北西部の台地肩部で、III層上面まで掘り下げたところII層がひろがる広い範囲を検出した。その東側では、III層中において北筒Ⅳ～Ⅴ式土器の大型破片がまとまって出土し、長さ40cmを超える大型板状礫などもみられた。十字のトレンチ調査を行った後掘り下げ、底面と壁の立ち上がりを検出し、竪穴住居跡とした。周辺を精査したところ、東側に広がる掘り上げ土を検出した。遺物の取り上げ後、床面の精査を行い、焼土や袋状土坑および多数の柱穴などの付属遺構を検出した。

覆土 竪穴上にはIII層が椀状に厚く堆積している。覆土は4層に分層した。上位（1層）～下位（3層）にかけて流入土と考えられる黒褐色土が堆積し、竪穴中央部ではその間に樽前c火山灰とみられ

るにぶい黄橙色の細かく緻密な火山灰（2層）が最厚10cm以上堆積していた。下位3層はMaテフラを多く含み、その濃淡によりさらに細分される。また北東壁際付近ではブロック状のMaテフラを含む軟質な黒色土（4層）があり、壁面の崩落土などを含むと考えられる。なお断面図で「5層」とした黄褐色ロームは、後述のHP-3に関連する。

掘り上げ土はMaパミスをやや多量に含む暗褐色土で、当遺構の東側に最厚15cm以上で広がる。さらに東側の竪穴住居跡ⅢH-14に関連する可能性もある。

床面・壁 底面はほぼ平坦である。地形の傾斜によって床面の層位が遷移し、北東側ではⅦ層上面に達し、南西側に向かってⅥ層・Ⅴ層・Ⅳ層の面が現れてくる。壁は緩斜面上方の北東側では急に立ち上がり、幅の狭いテラス状の段を有する。下方の南西側ではやや開いて立ち上がり、西部では壁が確認できない範囲がある。なお北部の壁の立ち上がり付近でⅠ群b類土器の一部がみられたが、これはVP-9の覆土中の土器であることをⅢH-7の調査後に確認した。

付属遺構 焼土2か所（HF-1・2）、土坑4基（HP-1～4）、柱穴18基（HP-5～22）を検出した。焼土HF-1は竪穴の中央に位置する地床炉である。浅くくぼんだ床面のⅦ層が被熱し赤変しており、その厚さは8cmを測る。HF-2は西側の床面付近でブロック状に残存する。

土坑のうち3基（HP-1～3）は、竪穴の西～南壁際に位置する袋状土坑で、現代の「^{むろ}室」に相当する貯蔵穴と考えられる。長軸約90cm・短軸約60cm、床面からの深さは30～60cmで、竪穴の壁より外側にもオーバーハングする。覆土は上位が竪穴と同様の暗褐色土、下位はMaパミスやロームが多く混じり壁面の崩落土などを含むとみられる。HP-2の覆土中から北筒Ⅲ式土器片がまとまって出土し、坑底では棒状の小穴を2か所検出した。HP-3の周囲幅約50cmには、最厚10cmほどの黄褐色ロームの土手がめぐる。一方、HP-4は北部壁際に位置する浅い小型円形土坑である。

柱穴のうち14基（HP-5～18）は竪穴周縁部に近い位置でめぐるように配置されている。HP-5・7・13・14はやや太いが、それ以外は径8cm前後のやや細いものが多く、補助的な柱穴が含まれていると考えられる。西側の4基（HP-19～22）は径約20cm・深さ10cm足らずで、検出位置から出入り口構造の一部をなすものと考えられる。

遺物出土状況 総数1,437点が出土した。住居跡東側の壁際から掘り上げ土にかけて炭化材片が多数検出され、ほかにⅢ群b類～Ⅳ群a類土器7点、石槍またはナイフ1点、石錐1点、U・Rフレイク1点、フレイク・チップ8点、たたき石2点、礫66点（破碎礫主体、うち被熱35点）が出土した。

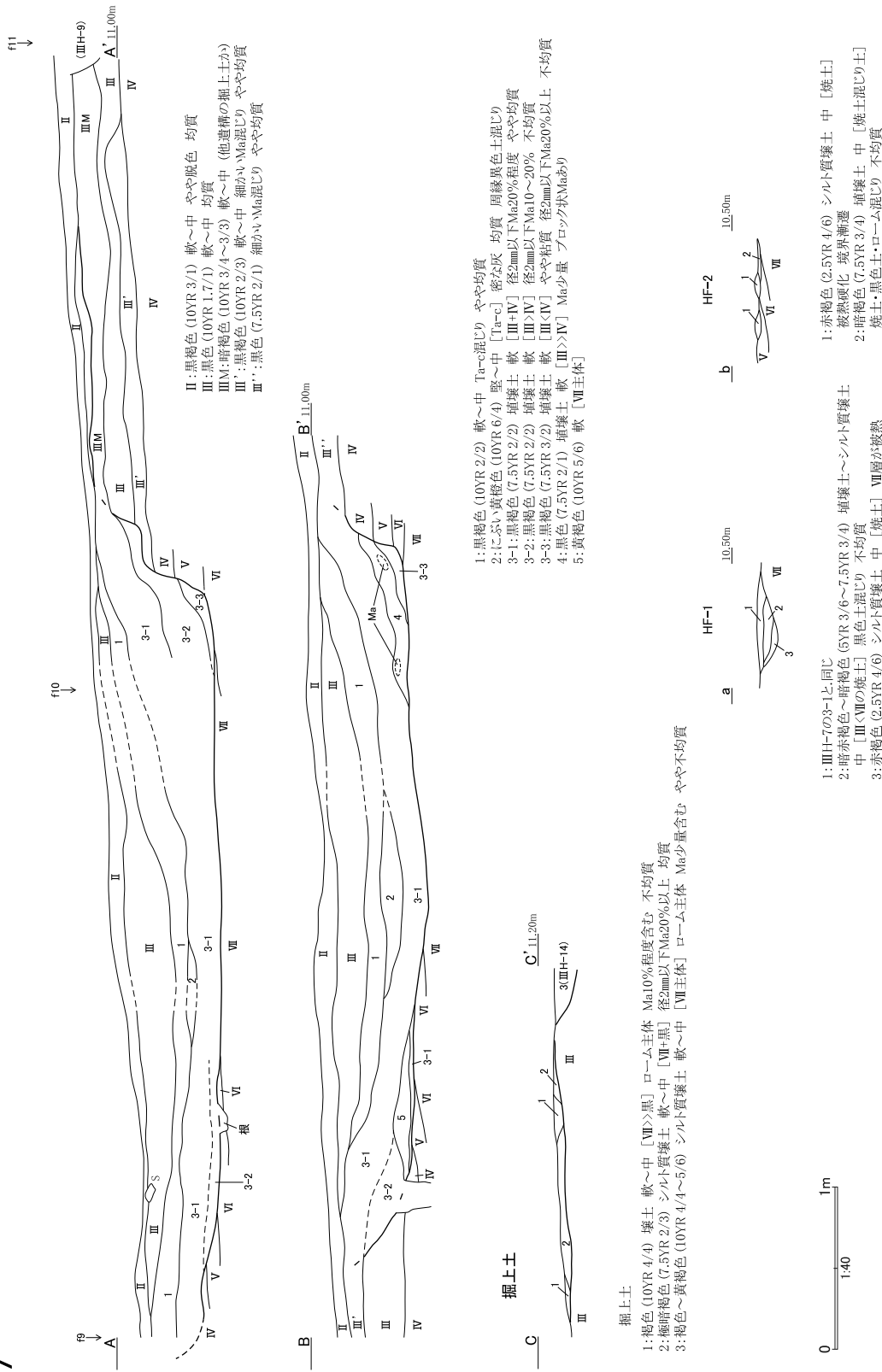
覆土からは北筒式が214点出土（ほかⅥ群土器33点、Ⅰ群b類7点、Ⅶ群土器1点）。石鏃3点、石槍またはナイフ4点、スクレイパー6点、フレイク・チップ211点、石核2点、たたき石18点、すり石3点、石鋸5点、砥石18点、台石・石皿3点、礫603点（破碎礫主体、うち原石1点、被熱425点）が出土した。

中央北側の床面付近で被熱礫30点余りがまとまっており、それに伴って北筒Ⅲ式の大型破片が5点出土した。床面・床面直上ではほかにⅠ群b類2点、Ⅳ群a類31点、たたき石2点、礫少数が出土した。

また付属遺構HP-2の覆土からⅣ群a類土器22点、HP-3の覆土から石核1点、石斧1点、たたき石1点、砥石1点、被熱礫4点、礫1点、HP-12の覆土からチップ1点、礫1点、HP-22の覆土からたたき石1点が出土した。

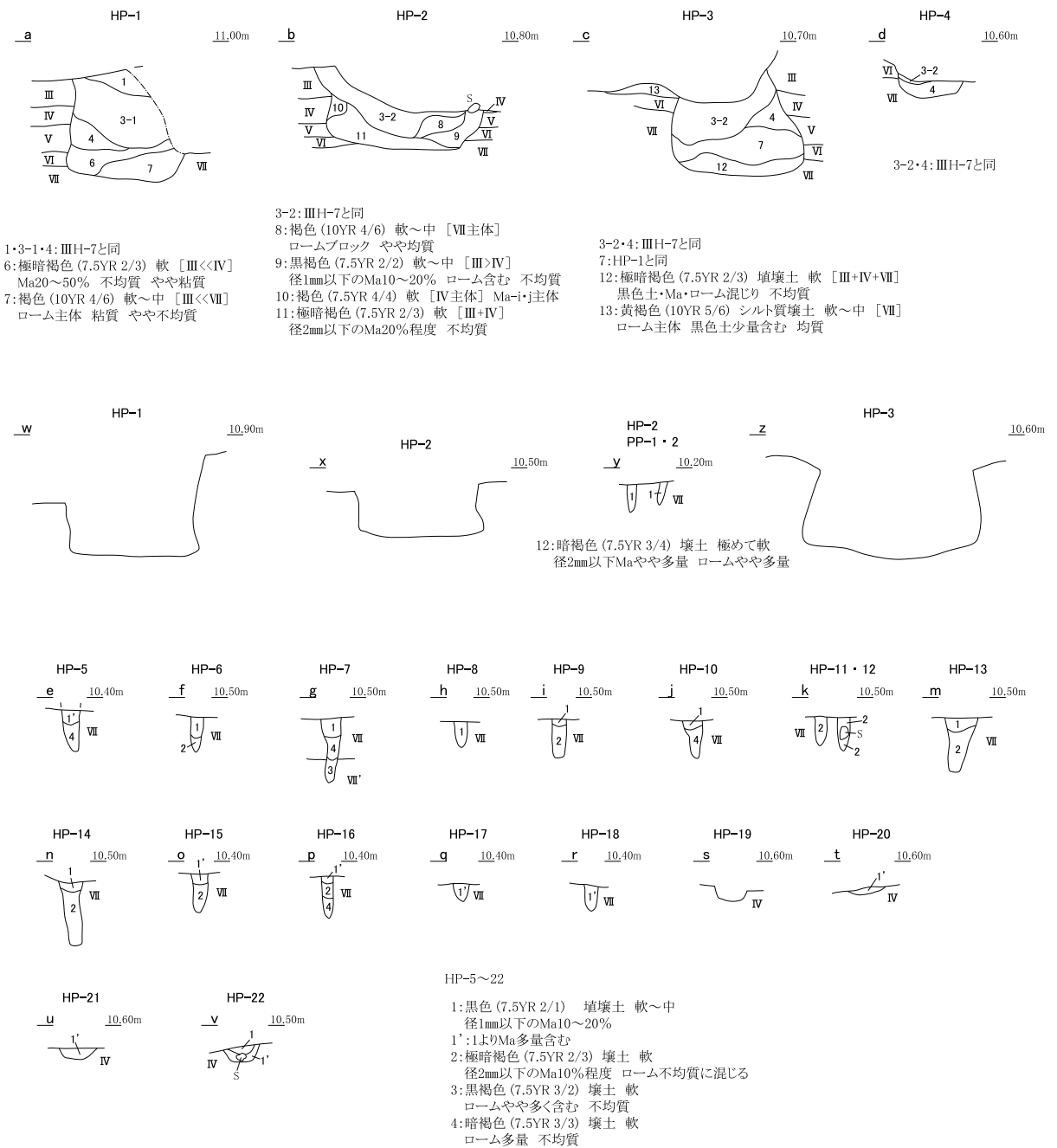
時期 出土遺物から、縄文時代後期前葉とみられる。該期の竪穴住居跡としては、付属遺構の配置も含め整った形状である。なお覆土上位の壁際から出土した炭化材を対象とした年代測定では、 $3,450 \pm 20\text{yrBP}$ ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)の数値を得ており、整合する（V章1節参照）。（阿部）

ⅢH-7

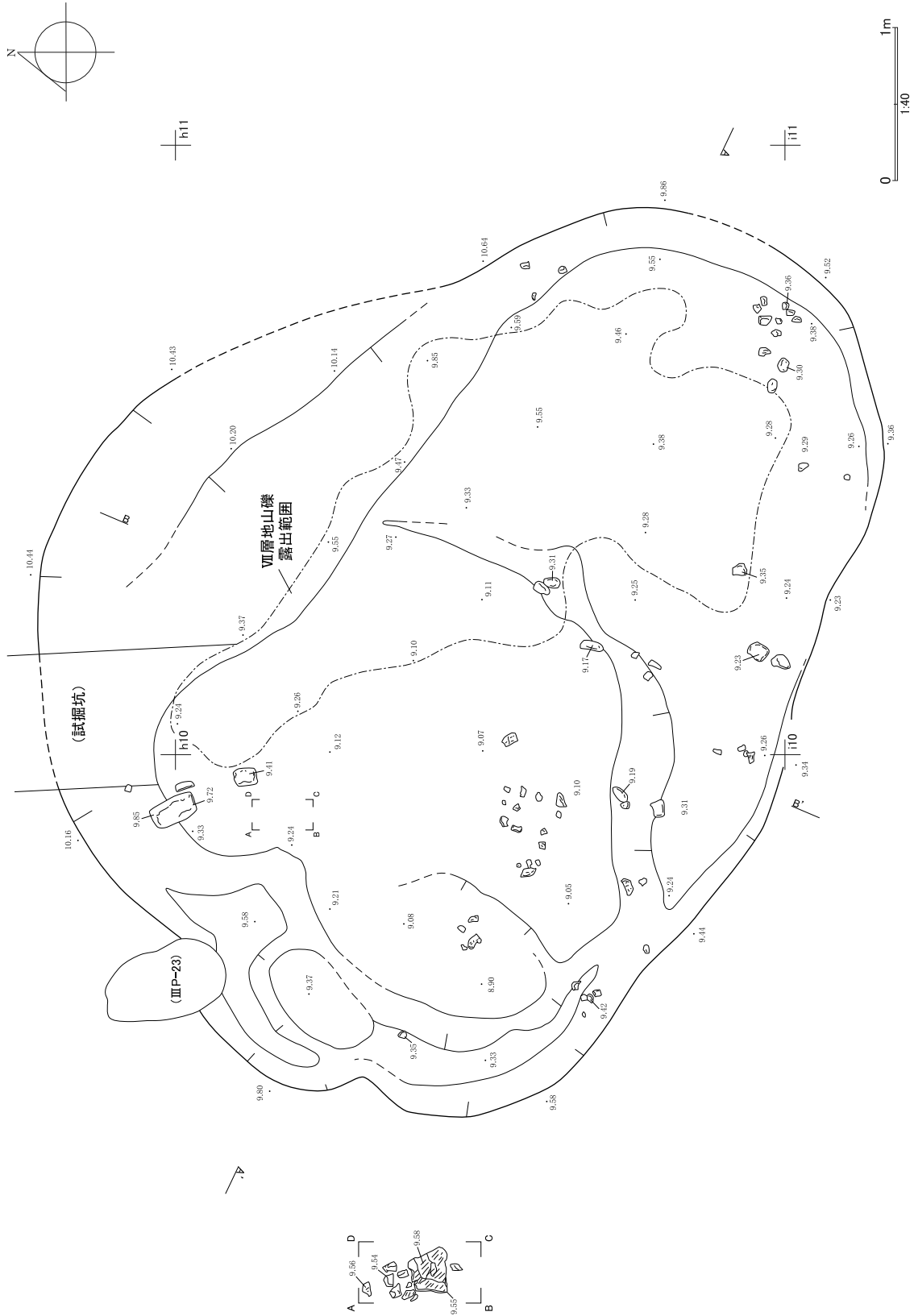


図Ⅳ-35 ⅢH-7 断面 (1)

ⅢH-7

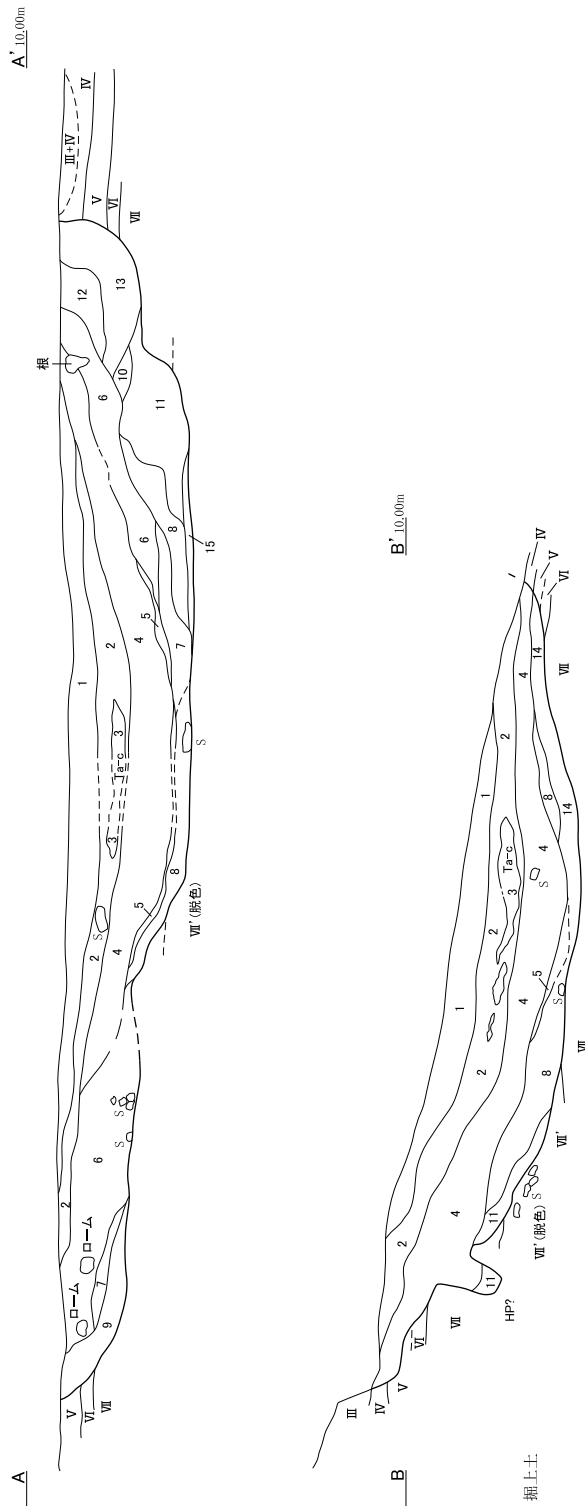


図IV-36 ⅢH-7断面(2)



図IV-37 III H-8

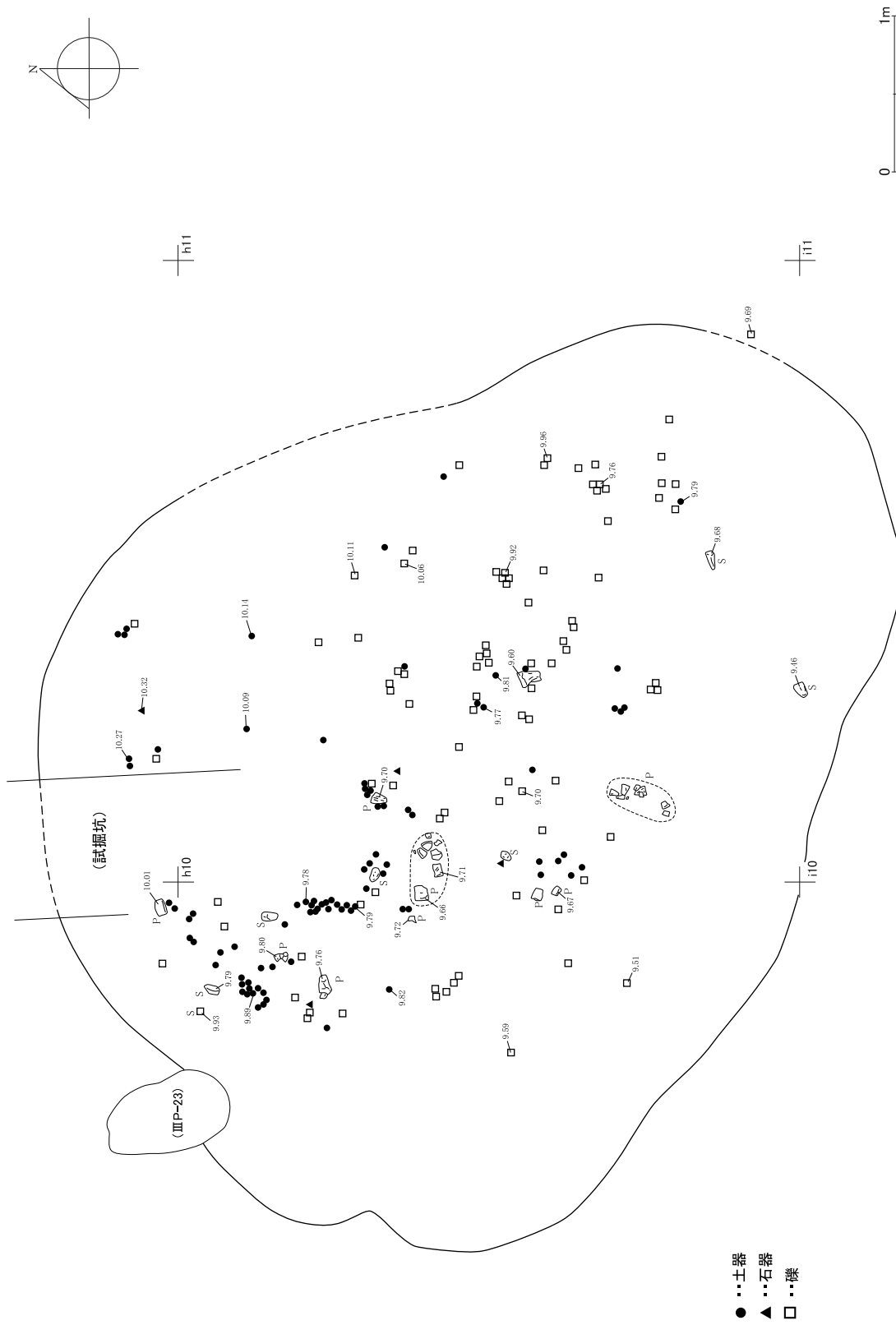
ⅢH-8



- 1: 黒色 (10YR 2/1) 埴壌土 軟〜中 [II<III] 上部II層混じり 均質
- 2: 黒褐色 (10YR 2/2) 埴壌土 軟〜中 [III>Ia-c] 径1mm以下のMa少量
- 3: にぶい黄褐色 (10YR 6/4) 火山灰 中 [Tar-c] 密 周縁部黒色土混じり
- 4: 黒褐色 (7.5YR 2/2) 埴壌土 軟〜中 [III+IV+V] 径2mm以下のMa20%以上
- 5: 褐色 (10YR 4/4) 砂土 軟 [IV主体] Ma+?主体 黒色土少量混じる やや不均質
- 6: と同線だがMaは4より少ない
- 7: 黒色 (7.5YR 2/1) 埴壌土 軟〜中 [黒>IV] 径1mm以下のMa10%程度 やや均質
- 8: 黒色 (7.5YR 2/1) 埴壌土 軟〜中 [黒色土主体] 径1mm以下のMa少量 均質
- 9: 黒褐色 (7.5YR 3/2) 埴壌土 軟〜中 [黒+IV] 径2mm以下のMa20%以上 やや不均質
- 10: 黄褐色 (10YR 5/6) シルト質埴土 軟 [VII主体] ロームブロック やや均質
- 11: 褐色〜極暗褐色 (10YR 4/6〜7.5YR 2/3) 砂壤土 軟 [III〜VII] Ma+ローム多量含み極めて不均質
- 12: 暗褐色 (10YR 3/3) 砂壤土 中 [III<IV] Ma混じり 不均質
- 13: 黒褐色 (10YR 2/3) 埴壌土 軟〜中 [黒>IV+VII] 径2mm以下のMa10〜20% 不均質
- 14: 褐色〜暗褐色 (10YR 4/6〜3/4) 埴壌土 軟 [黒<VI+VII] ローム不均質に混じる
- 15: 褐色 (10YR 4/6) シルト質埴土 軟〜中 [黒<<VII] ローム主体 黒色土やや不均質に混じる

図IV-38 ⅢH-8断面

ⅢH-8



図Ⅳ-39 ⅢH-8遺物出土状況

ⅢH-8 (図Ⅳ-37~39、表Ⅲ-9・Ⅳ-3、図版13)

位置 g9・g10・h9・h10・i10区 平面形態 不整楕円形

規模 6.36×4.98/5.20×3.18/0.64m

確認・調査 調査区西部の台地肩部、h10区杭付近には北筒Ⅲ式土器が出土した試掘調査坑があり、遺構覆土の可能性が高い土壌堆積が断面に確認されていた。h10区付近の包含層調査を行ったところ、Ⅱ層が大きくくぼむ範囲を検出した。試掘坑を精査し、続いて十字のトレンチ調査を行い、複数の段をもった平坦面と壁の立ち上がりの一部を検出した。またトレンチ上位でⅥ群土器が多数出土したため、まず覆土上位全体の調査を行った。その後底面まで掘り下げ、柱穴等の検出に努めた。一定規模の掘りこみがあることから竪穴住居跡と判断した。

覆土 土層断面で15層に分層した。最上位(1層)はⅡ層・Ⅲ層混じりの黒色土で、Ⅵ群b類土器をはじめ遺物が多く出土した。次の2層黒褐色土中に、樽前c火山灰とみられるにぶい黄橙色の細かく緻密な火山灰(3層)が竪穴中央部に最厚10cm堆積していた。中位~下位(4~9層)は黒色土にMaパミスが多量・少量含まれ、Maテフラを主体とする薄層(5層)が間にみられる。いずれも斜面上位側からの流入土と考えられる。壁際~床面付近(10~15層)はMaパミスやⅦ層ロームを不均質に含み、壁面崩落土が多く含まれていると考えられる。

床面・壁 床面は多数の段があり、それぞれ平坦面をもつ。北~東では礫が一面に分布する。壁は、斜面上方の北東側では湾曲して大きく斜め上方に開く。壁面下位にⅦ層中の自然礫層がみられる。長軸端の南東および北西側ではやや急に立ち上がる。斜面下方の南西側は、わずかに立ち上がり確認できる。

付属遺構 北東の壁面で小穴を1か所検出したが、柱穴との判断には至らなかった。

遺物出土状況 覆土上位からは、小型深鉢をはじめⅥ群b類が一部まとまって出土し、191点を数えた。そのほかⅢ群b類~Ⅳ群a類土器10点、Ⅵ群c類2点、石鏃1点、石錐1点、U・Rフレイク2点、フレイク・チップ14点、石斧3点、たたき石11点、砥石4点、礫266点(うち有孔礫1点、パミス11点、被熱60点)が出土した。竪穴のくぼみを利用したと考えられる。

覆土中位でⅢ群b類北筒Ⅱ式土器の胴下半の個体が出土した。覆土中位~下位からはⅢ群b類土器のほか、Ⅵ群7点、ナイフ1点、スクレイパー1点、フレイク2点、石核1点、たたき石8点、砥石1点、台石・石皿1点が出土した。また礫1,050点(うち原石1点、被熱69点)が出土したが、南東側で出土した滑面のある円礫のまとまり以外はⅦ層中の自然礫が多く含まれているとみられる。

時期 遺構の形状や周辺出土遺物から、縄文時代中期末~後期前葉とみられる。なお上述の通り、続縄文時代下田ノ沢式期に竪穴のくぼみを利用した跡が残されている。(阿部)

ⅢP-9 (図Ⅳ-40、表Ⅲ-9・Ⅳ-4、図版14-1・2)

位置 g・h5区 平面形態 楕円形

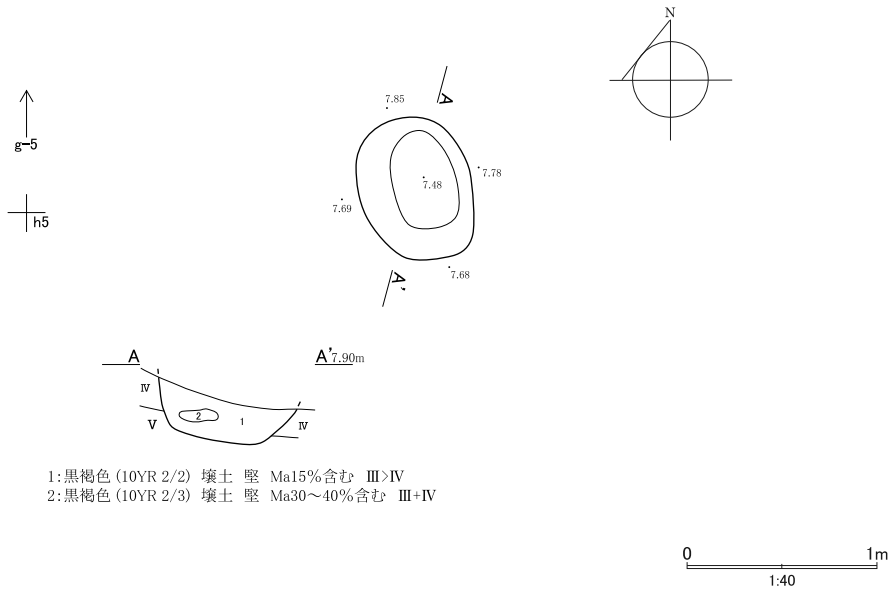
規模 0.78×0.60/0.52×0.34/0.25m

確認・調査 g5区でⅢ層を調査中に大型の礫が出土した。礫を残してⅣ層上面まで掘り下げたところ、礫の直下で楕円形を呈する黒褐色土を確認した。礫を取り上げ、黒褐色土の範囲の長軸方向でトレンチ調査を行い、底面と壁の立ち上がりを確認した。トレンチより西側の覆土を底面まで掘り下げ、土層断面の撮影及び図化を行った後、東側の覆土を掘り下げ完掘した。遺構の性格は不明である。

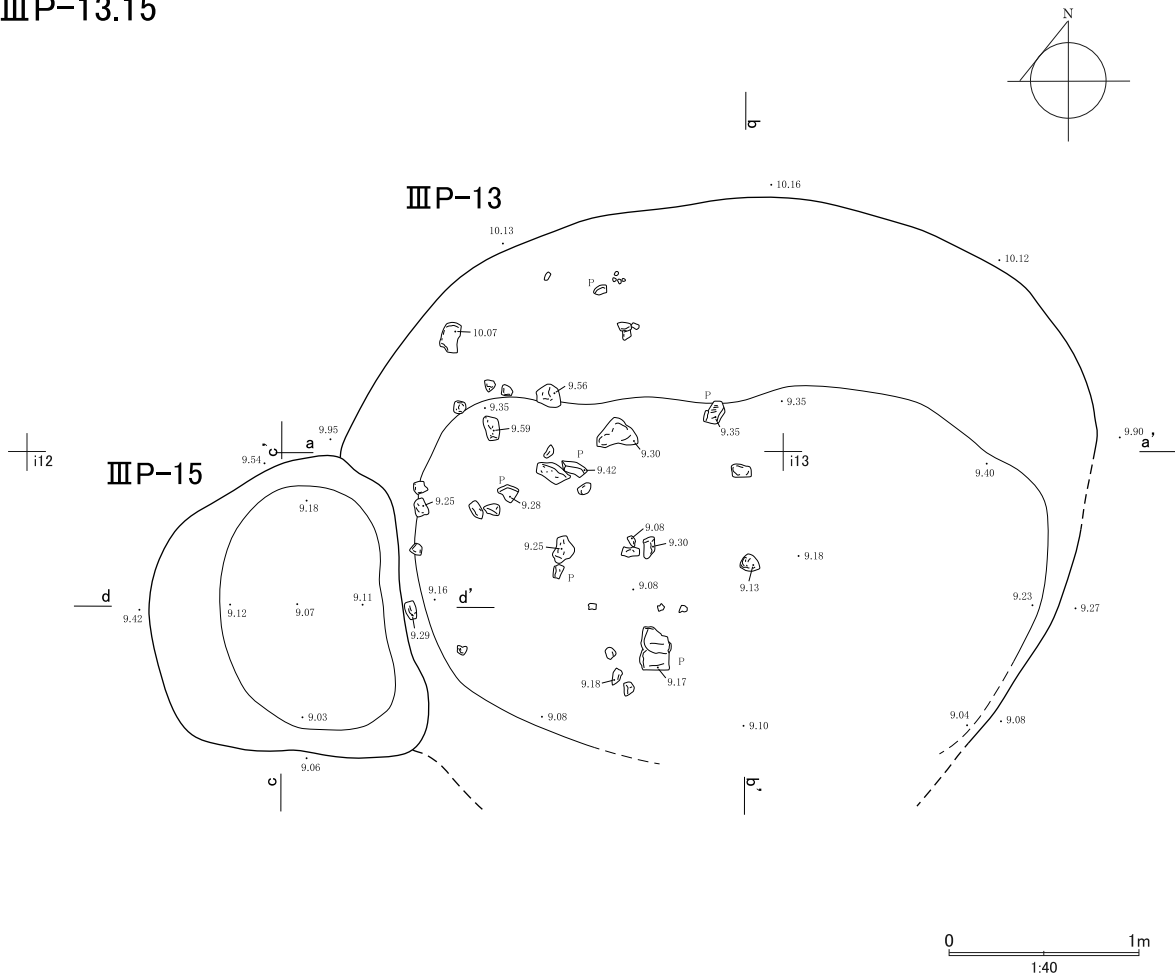
覆土 2層に分けた。いずれも黒色土とⅣ層が混ざる土層である。

底面・壁 底面は北側から南側へ緩やかに傾斜し、Ⅴ層中に構築される。壁の立ち上がりは東側が急角度で、それ以外は緩やかに湾曲する。

ⅢP-9



ⅢP-13.15



Ⅳ-40 ⅢP-9・13・15

遺物出土状況 出土遺物は確認面で検出した大型礫1点のみで、遺構に伴うものかは不明である。

時期 検出層位、周辺包含層出土の遺物から、縄文時代後期前葉の可能性が考えられる。(広田)

ⅢP-13 (図Ⅳ-40・41、表Ⅲ-9・Ⅳ-4、図版14-3~6)

位置 h12・h13・i12・i13区 **平面形態** 楕円形

規模 4.00×(2.94)／3.35×(1.94)／0.70m

確認・調査 台地肩部の斜面上に位置する。i12・13区をⅥ層まで掘り下げたところ、パミス混じりの黒色土のひろがりを検出した。13ライン・iラインを土層確認用の断面として南側を掘り下げたところ、底面と壁の立ち上がりを確認し、大型の土坑と判断した。

覆土 最上位(1層)はⅢ層相当の黒色土で、自然堆積とみられる。上半(2・3層)はMaパミスを多く含み、下半(4層)はパミスを少量含むやや軟質な黒色土である。いずれも標高の高い北側からの流入土と考えられる。壁際~床面付近(5~7層)は、パミスやロームが多くなる。

底面・壁 底面はⅦ層に達しており、東西方向は高低差が少ないが、北から南へ傾斜し中央部が浅くくぼむ。壁は東西方向が急に立ち上がり、西側ではⅢP-15が当遺構を切っている。斜面上方の北側は緩やかに湾曲して立ち上がり、下方の南側は立ち上がりがわずかに確認できる。

遺物出土状況 坑底直上から礫1点が出土した。覆土最下位では、北筒Ⅲ式の口縁部の大型破片が出土した。一方標高の高い北側の覆土上位からは、Ⅵ群b類の小土器片12点が出土した。そのほか、覆土中にⅣ群a類土器9点、石槍またはナイフ1点、楔形石器1点、フレイク・チップ4点、たたき石5点、すり石2点があり、さらに礫・礫片101点(うち被熱59点)が覆土中~下位で出土した。

時期 検出面や出土遺物から、縄文時代後期前葉とみられる。またⅢP-15より当遺構が古い。

(阿部)

ⅢP-15 (図Ⅳ-40・41、表Ⅲ-9・Ⅳ-4、図版14-7・8)

位置 i12・i13区 **平面形態** 不整楕円形

規模 1.58×(1.35)／1.28×0.86／0.46m

確認・調査 前掲のⅢP-13の調査時に、これとは別の土のひろがりを検出した。南北の断面を残し東側を半截し、底面と壁の立ち上がりが確認されたので土坑とした。

覆土 上位は黒褐色土でⅢP-13の3層に、下位は暗褐色土で同6層に近似し、流入土とみられる。壁際~床面付近はⅦ層ロームを主体とする。

底面・壁 底面はⅦ層上位にありおおむね平坦である。壁は斜面上方の北側が急角度、ほかは緩やかに立ち上がる。

遺物出土状況 覆土から礫3点(うち被熱2点)が出土した。

時期 当遺構がⅢP-13を切っており、当遺構の方が新しい。縄文時代後期前葉とみられる。(阿部)

ⅢP-17 (図Ⅳ-42、表Ⅲ-9・Ⅳ-4、図版15-1~4)

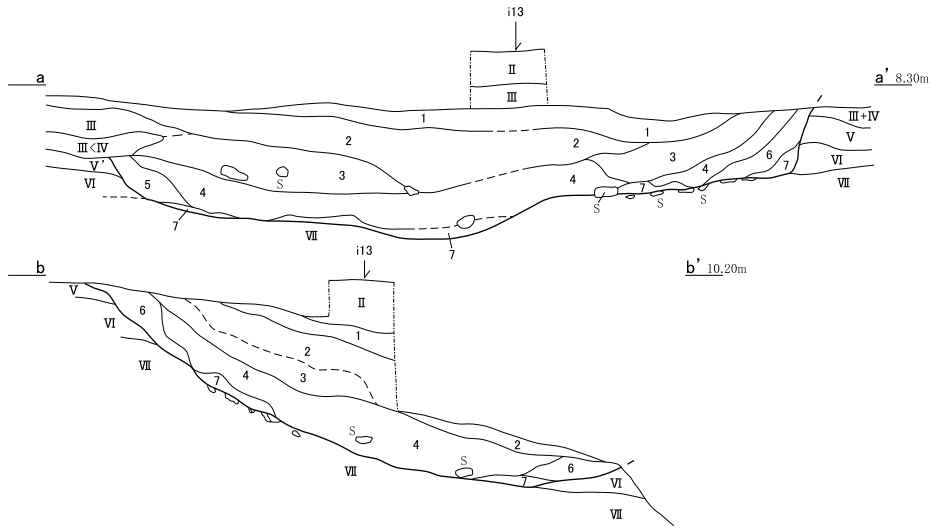
位置 f10・g10区 **平面形態** 不整楕円形

規模 3.06×3.10／2.49×2.85／0.36m

確認・調査 調査区北西部の竪穴住居跡ⅢH-7およびⅢH-9の周辺のⅢ層を精査したところ、Maパミス混じりの黒褐色土のまとまりと焼土を検出した。十字形のトレンチ調査を行った後、土層観察の為のベルトを残して掘り下げ、底面と壁の立ち上がりが確認できたので土坑とした。

覆土 Maパミスを多量に含む黒褐色土(2層)を主体とする。土坑中央部では、最上位(1層)に

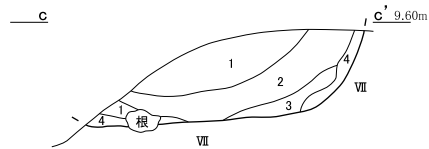
III P-13



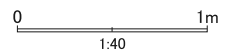
III<IV:暗褐色 (10YR 3/4)

- II: 黒褐色 (10YR 3/2) 軟~中 根多く含む 均質
- 1: 黒色 (10YR 2/1) 軟~中 [III] 均質
- 2: 極暗褐色 (10YR 2/3) 軟~中 [II+III>IV] 径1mm以下のMa10%程度 やや均質
- 3: 黒褐色 (7.5YR 2/2) 軟 [III>IV] 径1mm以下のMa20%程度 やや不均質
- 4: 黒色 (7.5YR 2/1) 軟 [III>>IV] 径1mm以下のMa10%以下
- 5: 黒褐色 (7.5YR 2/2) 軟 [III+IV>VII] 径1mm以下のMa20%程度 やや不均質
- 6: 暗褐色 (10YR 3/3) 軟~中 [III<IV] Ma多量 やや不均質
- 7: 暗褐色 (10YR 3/4) 軟 [III+IV+VII] Ma、ロームやや多量 不均質
- VII: 黄褐色 (10YR 5/6) 軟 やや粘質

III P-15

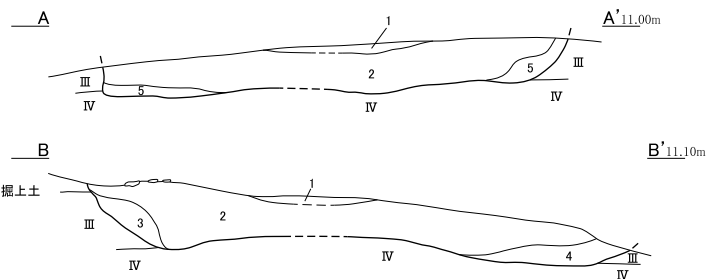
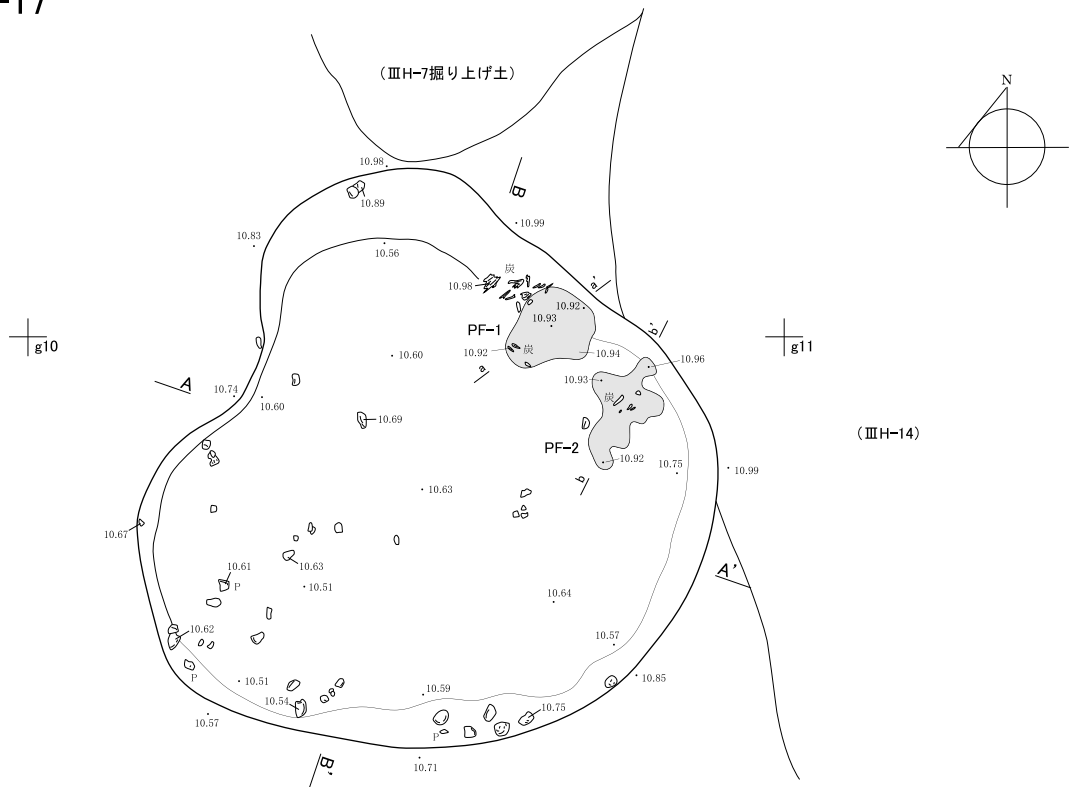


- 1: 黒褐色 (7.5YR 2/2) 軟~中 [III+IV] 径1mm以下のMa10~20%程度 やや均質
- 2: 暗褐色 (7.5YR 3/3) 軟~中 [III<<IV] 径2mm以下のMa20%以上 やや均質
- 3: 極暗褐色 (7.5YR 2/3) 軟 [III>IV] 径1mm以下のMa10%以下 やや均質
- 4: 暗褐色~褐色 (7.5YR 3/3~10YR 4/4) 軟~中 [III+V+VI] Maほとんど含まず 不均質

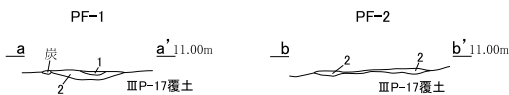


図IV-41 III P-13・15断面

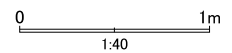
ⅢP-17



- 1: 黒褐色 (10YR 3/2) 埴壤土 軟～中 上位にTa-c含む
- 2: 黒褐色 (10YR 2/3) 埴壤土 中 径2mm以下のMa20%以上均質 細かい炭化物やや多く含む
- 3: 暗褐色 (10YR 3/3) 壤土 軟～中 径1mm以下のMa-f,g20%以上
- 4: 暗褐色 (10YR 3/4) 壤土 軟～中 Ma・ローム主体 やや不均質 炭化物少量
- 5: 黒褐色 (10YR 2/2) 埴壤土 軟～中 細かいMa少量含む

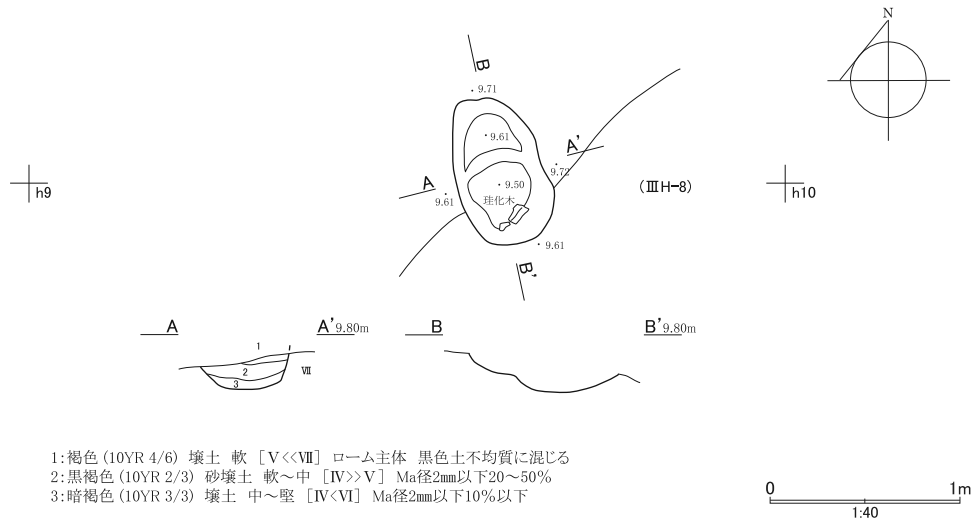


- 1: 極暗赤褐色 (5YR 2/4) 壤土 軟～中 Ma少量 下端境界明瞭
- 2: 暗赤褐色～赤褐色 (5YR 3/6～4/6) 壤土 軟～中 [焼土] Ma少量 下端境界明瞭

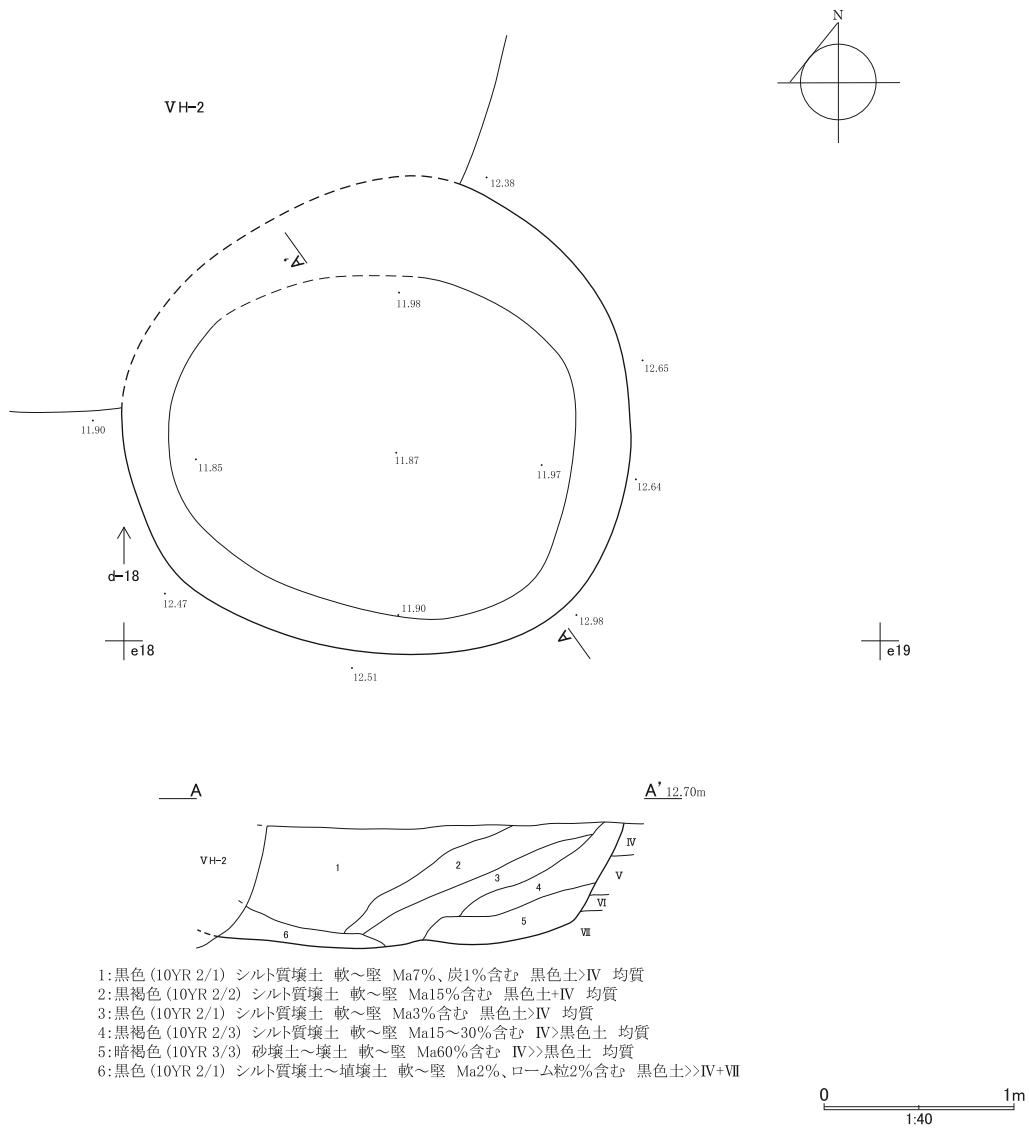


図Ⅳ-42 ⅢP-17

ⅢP-23



ⅢP-27



図Ⅳ-43 ⅢP-23・27

樽前c火山灰を含む黒褐色土が薄く堆積している。壁際や坑底付近（3～5層）ではロームやMaパミスの密度が異なる。

底面・壁 底面はIV層上面で、おおむね平坦である。壁は緩やかに立ち上がる場所が多い。

付属遺構 覆土上位で焼土2か所（PF-1・2）を検出した。PF-1はおおむね楕円形で被熱層の厚さは最大5cm、PF-2は不整形で被熱層の厚さが3cmほどである。いずれも焼土上面および周辺に炭化材片が散在していた。

遺物出土状況 覆土中よりⅢ群b類～Ⅳ群a類土器12点、スクレイパー1点、チップ1点、たたき石1点、砥石2点、礫45点（うち被熱26点）が出土した。北東側から中央にかけては覆土上位、南側は壁際付近からの出土点数が多い。

時期 ⅢH-14を切っており、当遺構が新しい。検出面や出土遺物から、縄文時代後期前葉とみられる。（阿部）

ⅢP-23（図IV-43、表Ⅲ-9・IV-5、図版3-5）

位置 g9・h9区 **平面形態** 不整楕円形

規模 0.78×0.48/0.60×0.32/0.18m

確認・調査 調査区西部の緩斜面上に位置するⅢH-8を調査後、北西側でやや暗い褐色土のまとまりを検出した。半截し、底面と壁の立ち上がりを確認し土坑とした。

覆土 3層に分層した。1層はⅦ層ローム主体、2層はMaパミスを多量含む黒色土、3層はMaパミスがやや少ない暗褐色土で、いずれも流入土と考えられる。

底面・壁 底面はやや椀状で、北側が浅く中央付近に弱い段を有し、南側が深い。壁は短軸方向が急に立ち上がり、長軸方向が緩やかである。

遺物出土状況 覆土中から珪化木1点および礫1点が出土した。

時期 ⅢH-8を切っており、当遺構が新しい。縄文時代中期以降であり、後期前葉と推測される。（阿部）

ⅢP-25（図IV-44、表Ⅲ-9・IV-5、図版15-5・6）

位置 e15～17、f16・17区 **平面形態** 不整楕円形

規模 5.74×4.62/5.00×4.30/0.48m

確認・調査 ⅢH-5の南側掘り上げ土の土層断面を確認した時、下位に別の遺構覆土を確認した為、ⅢH-5の調査終了後に着手した。土層断面はⅢH-5掘り上げ土のトレンチを延長したものと、東西に細長く伸びる攪乱を利用して確認した。既にfラインより南側はIV層上面まで掘り下げていたため、南側はIV層上面で精査を行った。その結果、長径約5.7mの大型で浅い遺構であることが判明した。トレンチ沿いにベルトを設定し、覆土を掘り下げ、底面を検出した。遺物は概ね長さ3cm以下は適宜取り上げ、それより大きなものについては底面確認時まで残し、出土状況の撮影後に取上げた。その後完掘状況の撮影、平面の図化などを行い調査を終了した。形状、規模から堅穴住居跡の可能性もあるが、焼土等を確認できなかったため、土坑と判断した。性格は不明である。

覆土 4層に分けた。黒色土を主体としIV層が混ざる土層で、自然堆積と考えられる。その上位にはⅢH-5の掘り上げ土が厚く堆積している。また、南側はIV層上面で検出したためごく浅い。

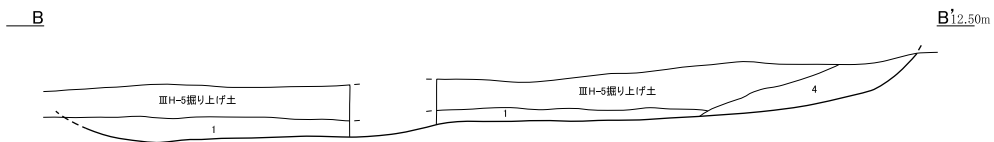
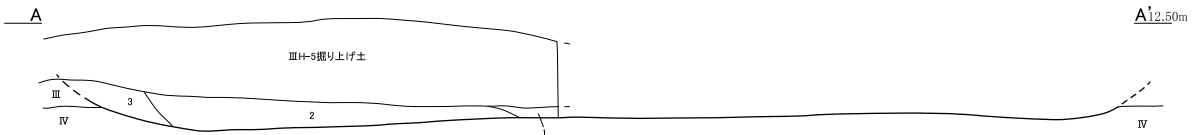
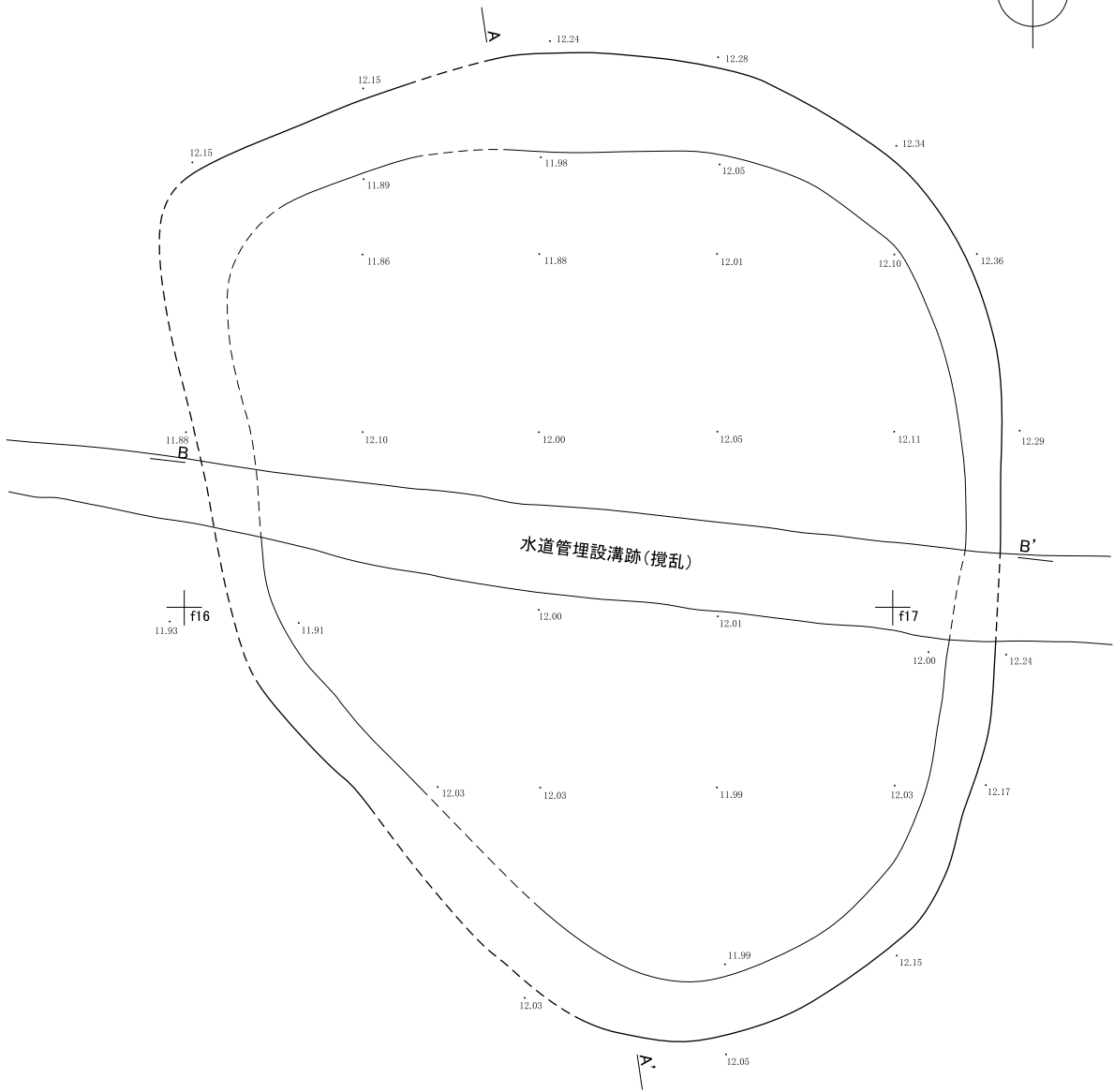
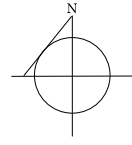
底面・壁 底面はIV層中に構築され、概ね平坦である。壁は底面から連続的に緩やかに湾曲しながら立ち上がる。

遺物出土状況 全て覆土出土である。縄文時代中期後半～後期前葉の土器（Ⅲb～Ⅳa）、石鏃、たた

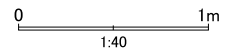
ⅢP-25

e16

e17



- 1: 黒色 (10YR 2/1) シルト質壤土 軟~堅 Ma15%含む 黒色土>Ⅳ 均質
- 2: 黒色 (10YR 2/1) 埴壤土 堅 Ma3%含む 黒色土>>Ⅳ 均質
- 3: 黒色 (10YR 2/1) シルト質壤土 堅 Ma1%含む 黒色土>>Ⅳ 均質
- 4: 黒色 (10YR 2/1) シルト質壤土 軟~堅 Ma5%含む 黒色土>Ⅳ 均質



図Ⅳ-44 ⅢP-25

き石等があり、被熱したものを含め礫が多い。遺構に伴うと判断できる遺物はない。

時期 遺構の重複関係、覆土出土遺物から、縄文時代中期後半～後期前葉の時期と考えられる。

(広田)

ⅢP-27 (図Ⅳ-43、表Ⅲ-9・Ⅳ-5、図版15-7・8)

位置 d・e18区 **平面形態** 楕円形

規模 (2.67)×(2.56)／2.16×1.80／0.66m

確認・調査 V H-2の調査時に、周辺のⅣ層上面で楕円形を呈する黒色土を確認した。V H-2の調査終了後に、中心付近を通るよう長軸方向でトレンチを設定して掘り下げ、底面と壁の立ち上がりを確認し、土坑と判断した。次にトレンチの南西側覆土を底面まで掘り下げ、土層断面の撮影及び図化を行った。その後、北東側の覆土を掘り下げ、完掘状況の撮影、平面図の作成等を行った。新旧関係は、検出層位からV H-2より新しい。性格は不明である。

覆土 6層に分けた。黒色土とⅣ層が混ざる土層で、色調は黒～暗褐色である。自然堆積と考えられる。

底面・壁 底面はⅦ層中に構築され、やや凹凸がみられる。壁の立ち上がりは比較的急角度である。

遺物出土状況 全て覆土出土である。全体的に少量で、縄文時代中期後半～後期前葉の土器(Ⅲb～Ⅳa)、石槍またはナイフ等の石器がある。遺構に伴うと判断できる遺物はない。

時期 覆土出土遺物から、縄文時代中期後半～後期前葉の時期と考えられる。

(広田)

ⅢS-1 (図Ⅳ-45、表Ⅲ-9・Ⅳ-5、図版16-1・2)

位置 h20・i20区 **平面形態** 楕円形の範囲に分布

規模 0.96×0.78m

確認・調査 調査区南東の緩斜面のⅢ層中で検出した。浅いくぼみに破碎礫が集中する範囲(No1)があり、約1m南側で礫7点が集中し(No2)、周辺に板状の礫(No3・4)がある。

遺物出土状況 礫は合計196点、集中範囲では破碎礫を主体に189点を数えた。ほかにたたき石1点がある。

時期 縄文時代中期～続縄文時代のいずれかで、周辺出土遺物から縄文中期～後期前葉の可能性が高いと考えられる。

(阿部)

ⅢS-2 (図Ⅳ-46、表Ⅲ-9・Ⅳ-5、図版16-3・4)

位置 l・m4、l5区 **平面形態** —

規模 (6.00)×(2.35)m

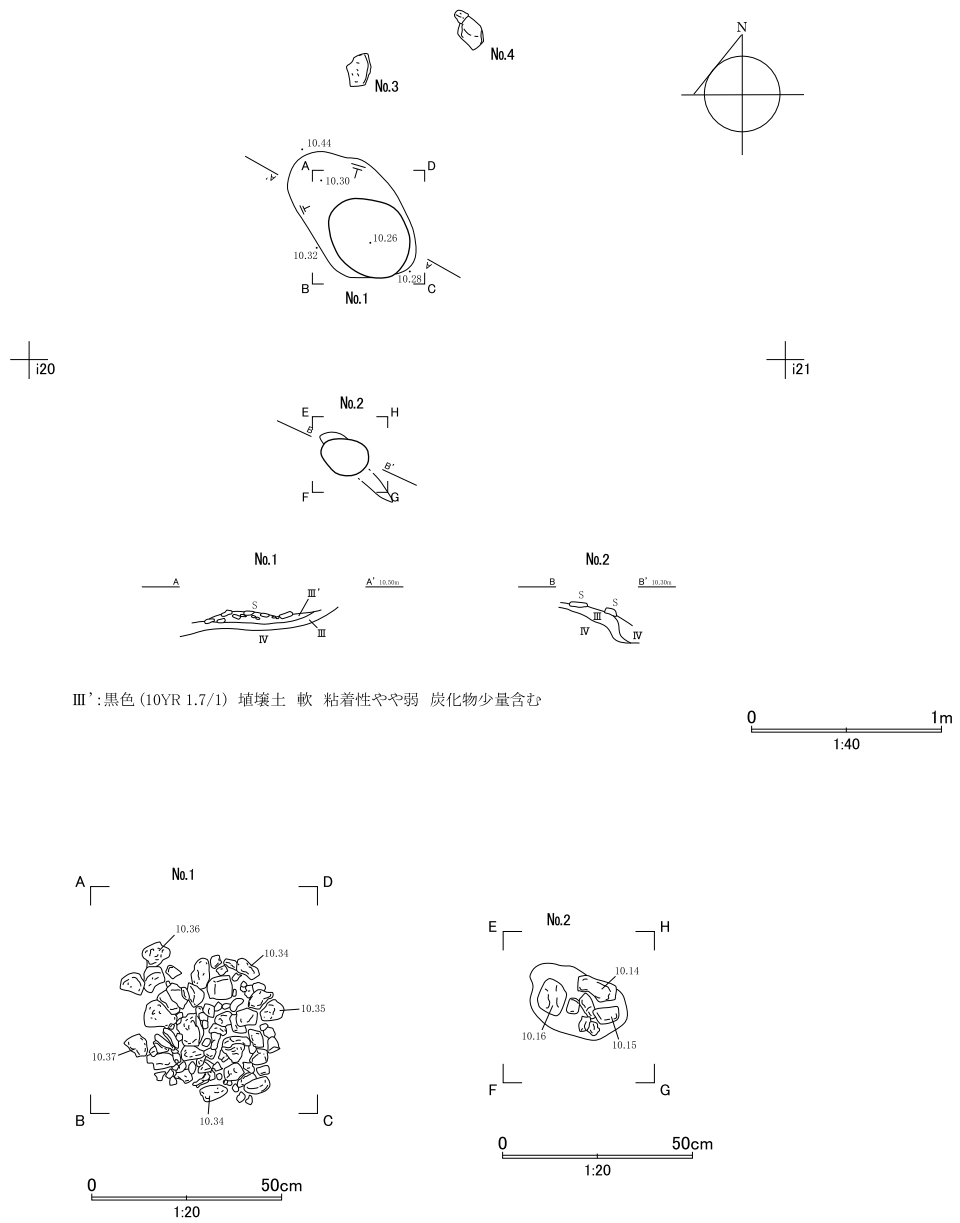
確認・調査 調査区南西端の標高約4.0～4.6mの緩斜面上において、大小様々な円礫や亜角礫等のまとまりを検出した。被熱したとみられる赤色化した礫が多く、フレイク類が縦に突き刺さった状態で密に出土したところもある。南東側の一部が調査区域外に及ぶため正確な範囲は不明である。

遺物出土状況 多量の礫、石器等が出土した。礫は912点(81.226kg 1点平均89g)、被熱礫は968点(65.425kg 1点平均67.6g)、計1,880点を数える。風化や被熱したものがあため、脆く崩れやすいものが多い。ほか、石器類も伴っているが、たたき石10点と砥石24点が比較的多い(表Ⅲ-7)。土器は、Ⅲ群b類土器43点、Ⅳ群a類土器14点、と全61点中57点が北筒式である。

時期 出土した遺物等から、縄文時代中期末～後期前葉の北筒式期が考えられる。

(笠原)

ⅢS-1



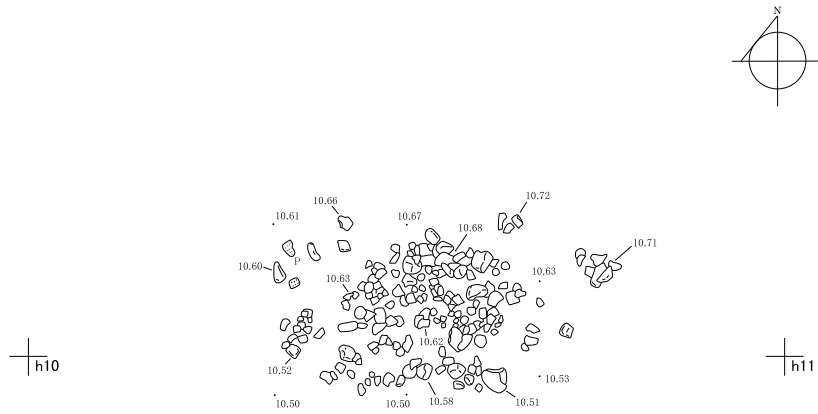
図Ⅳ-45 ⅢS-1

ⅢS-2

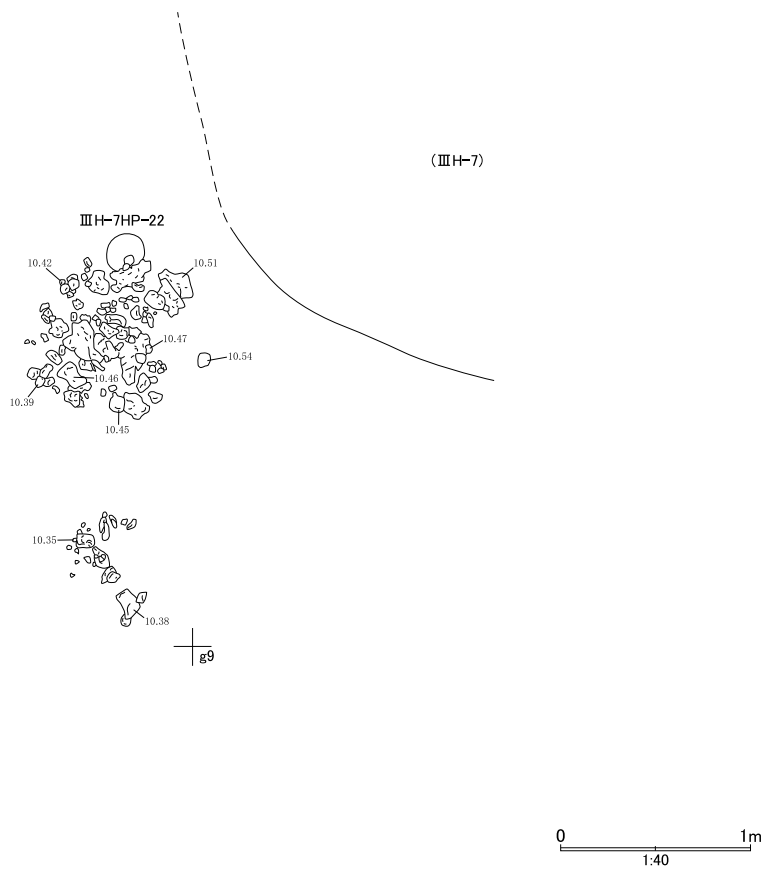


図Ⅳ-46 ⅢS-2

Ⅲ S-4

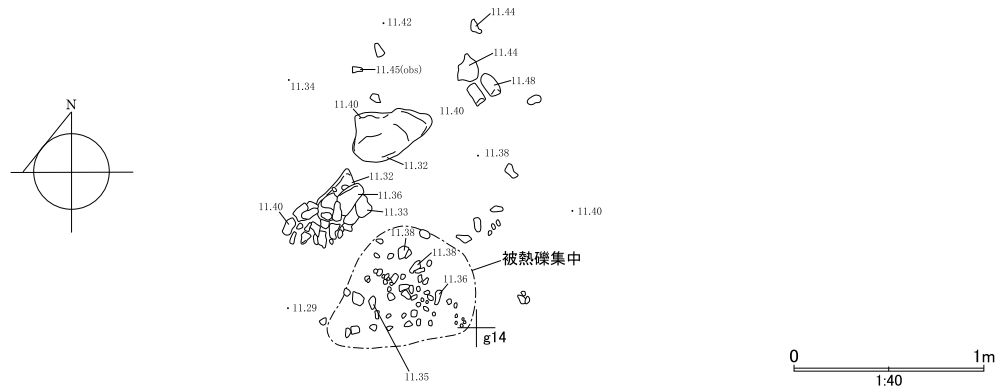


Ⅲ S-5



Ⅳ-47 Ⅲ S-4・5

ⅢS-8



図IV-48 ⅢS-8

ⅢS-4 (図IV-47、表Ⅲ-9・IV-5、図版16-5・6)

位置 g・h10区 平面形態 不整楕円形の範囲に分布

規模 1.84×1.25m

確認・調査 調査区西側平坦面の、標高約10~11mのIV層上面で、礫の集中を検出した。円礫や亜角礫、被熱による破碎礫が多くを占めている。礫442点中429点(約97%)が被熱礫。

遺物出土状況 礫の他に、IV群a類の土器片が2点、たたき石15点、砥石3点も出土した。

時期 周辺から検出した遺構や、出土遺物等から縄文時代後期初頭の北筒Ⅲ式期が考えられる。

(笠原)

ⅢS-5 (図IV-47、表Ⅲ-9・IV-5、図版16-7)

位置 f8区 平面形態 不整楕円形の範囲に分布

規模 0.90×0.76m

確認・調査 竪穴住居跡ⅢH-7の南西側で検出した。被熱・破碎礫が主体である。

遺物出土状況 礫は256点を数えた。うち被熱186点、原石1点である。そのほかⅢ群b類~IV群a類土器1点、フレイク1点、たたき石4点がある。

時期 検出面や位置からⅢH-7に関連があるとみられ、縄文時代後期前葉と判断される。(阿部)

ⅢS-8 (図IV-48、表Ⅲ-9・IV-5、図版16-8)

位置 f13区 平面形態 大小の礫の不規則な拡散

規模 約1.80×約1.4m

確認・調査 Ⅲ層掘り下げ中に検出した。

遺物出土状況 被熱礫145点(5,094g 1点平均35.1g)、礫147点(22,485g 1点平均152.9g 1点7,400gの大型礫を除くと1点平均103.3g)、ほか、すり石1点、砥石4点(いずれとも使用痕が判然としないものを含む)、フレイク5点、スコリア1点、続縄文時代下田ノ沢式の可能性が考えられる土器片3点である。

時期 放射性炭素測定(AMS測定)に採取した炭1点を提出したところ、 ^{14}C 年代は $3,780 \pm 20$ ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)であった。暦年代範囲(2σ)では2288calBC-2137calBC。縄文時代後期前葉の北筒Ⅲ式~Ⅳ式頃である。(影浦)

(3) 遺構出土の遺物

・土器

Ⅲ H-13 (図Ⅳ-49、表Ⅳ-13、図版55)

土器は全部で27点出土した。遺構面積に比して非常に少ない点数である。内訳は北筒式期のものが17点、続縄文時代下田ノ沢式期とみられるものが10点。床面出土のものはなく、覆土下の土器も少ない。覆土中で検出した集石Ⅲ S-9にともなって北筒Ⅱ式(トコロ6類)が1個体出土したことから住居跡の構築時期は縄文時代中期末であろう。覆土上部を中心に北筒式の土器片が散発的に出土している。1は北筒Ⅴ式。地文はR L Rの複節縄文。胎土中に砂を含み、ややザラザラする。刺突文の上にナデで無文化している部位がある。非掲載の北筒式は胴部小片。

Ⅲ S-9 (図Ⅳ-49、表Ⅳ-11、図版55)

集石の直上で1個体が出土したもの。北筒Ⅱ式(トコロ6類)。口縁部に4つ対で山形の小突起があり、波頂部から隆帯が縦に垂下し、隆帯上には縄が縦位に押捺されている。隆帯の下は連続的な押し引き文が垂下、押し引き文は横にも横環して、文様体的な構成を呈する。道央部の古手の北筒Ⅱ式にみられる貼付による文様帯の影響を受けているとみられる。胴部地文は結束羽状縄文。この結束羽状縄文も古手の北筒Ⅱ式にみられるものである。連続の押し引き文は口唇上にも施され、口縁部には刺突列が充填的に4段巡っている。底部を欠くが、底面部を塞いで計量した最大容量は4.8Lである。

Ⅲ H-7 (図Ⅳ-50~52、表Ⅳ-11・13、図版55、56-5・6)

土器は319点が出土した。うち274点が北筒式で、253点は縄文時代後期のもの。床面直上出土の全31点、付属遺構Ⅲ P-2出土の全22点が縄文時代後期の北筒式である。1は北筒Ⅲ式の新段階(羅臼式)。地文はR L Rの複節縄文。ヘラ状工具を横位に引いた無文帯が2条横環する。無文帯にはヘラ状工具の動きを止めて浅く押しつけた跡がある。口縁部に縦位の隆帯があり、隆帯上には縄が押捺されている。胎土中には砂を多く含む。2~5は北筒Ⅴ式。R L斜行縄文を地文とし、口縁部を径の小さい刺突が巡るもの。いずれも器面に対して水平方向の刺突。2は刺突部を無文化している。4・5は口縁部内面にも縄文が施文されているが、内面側で刺突の巡る部位は無文化している。2と4・5は口縁部の開きが弱い。北筒Ⅴ式の中でも古手の資料の可能性もある。

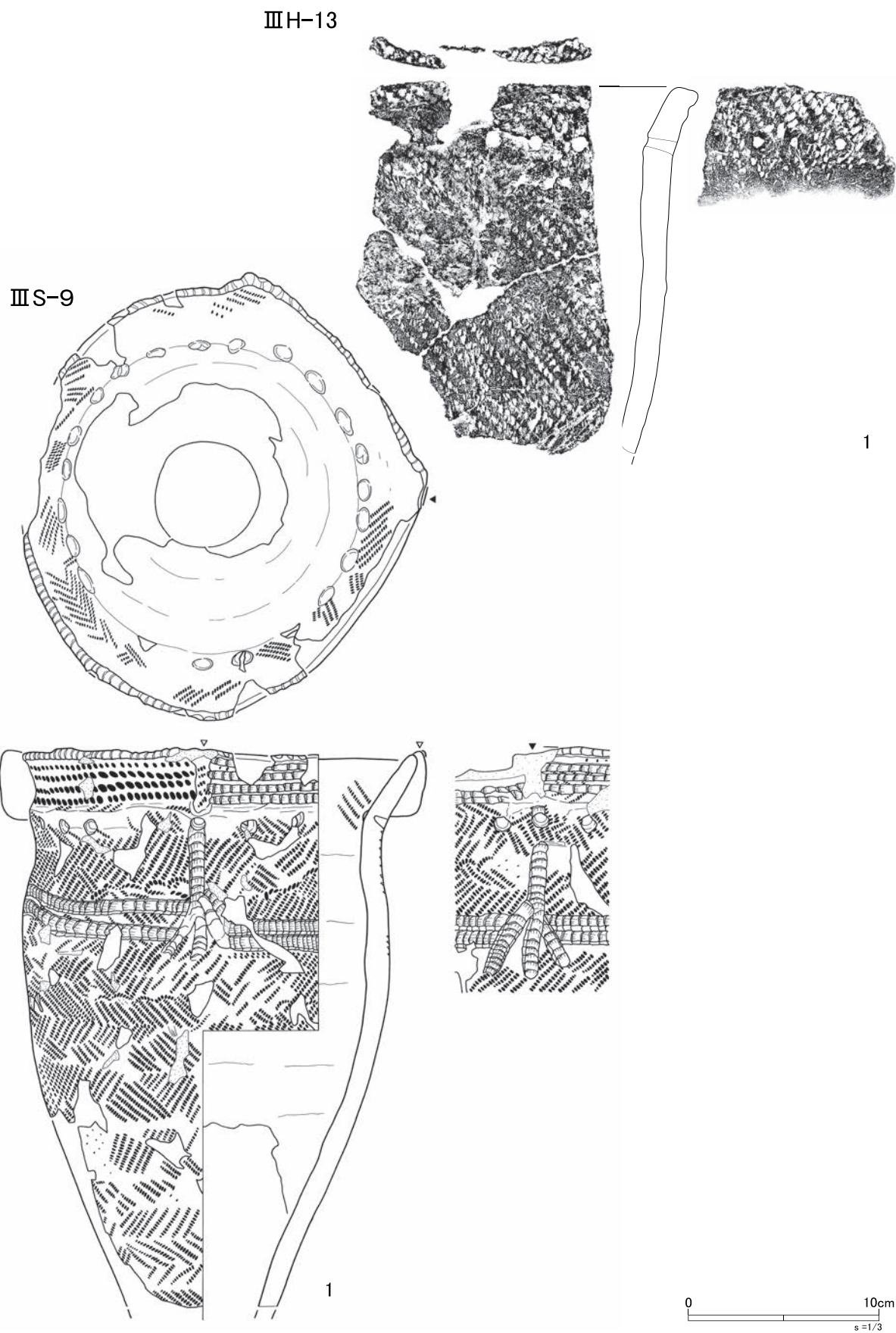
6は耳栓。砂礫をあまり含まない胎土で簡素な作り。酷似した資料が『穂香竪穴群(2)』において包含層から出土している。報告者は均質できめ細かい胎土が北筒式土器の胎土と異なることから、違う時期の可能性を想定しているが、この耳栓は覆土下の出土で、覆土下からは北筒式しか出土していない。あるいは通常の土器のものと別の胎土を使用している可能性も考えられる。

Ⅲ H-8 (図Ⅳ-52・53、表Ⅳ-11・13、図版56)

土器は247点が出土した。うち203点が覆土上、36点が覆土中、8点が覆土出土であり、覆土下や床面で出土したものはない。続縄文時代のⅥ群土器が207点と多いが、うち193点が覆土上からの出土であり、住居廃絶後のものである。

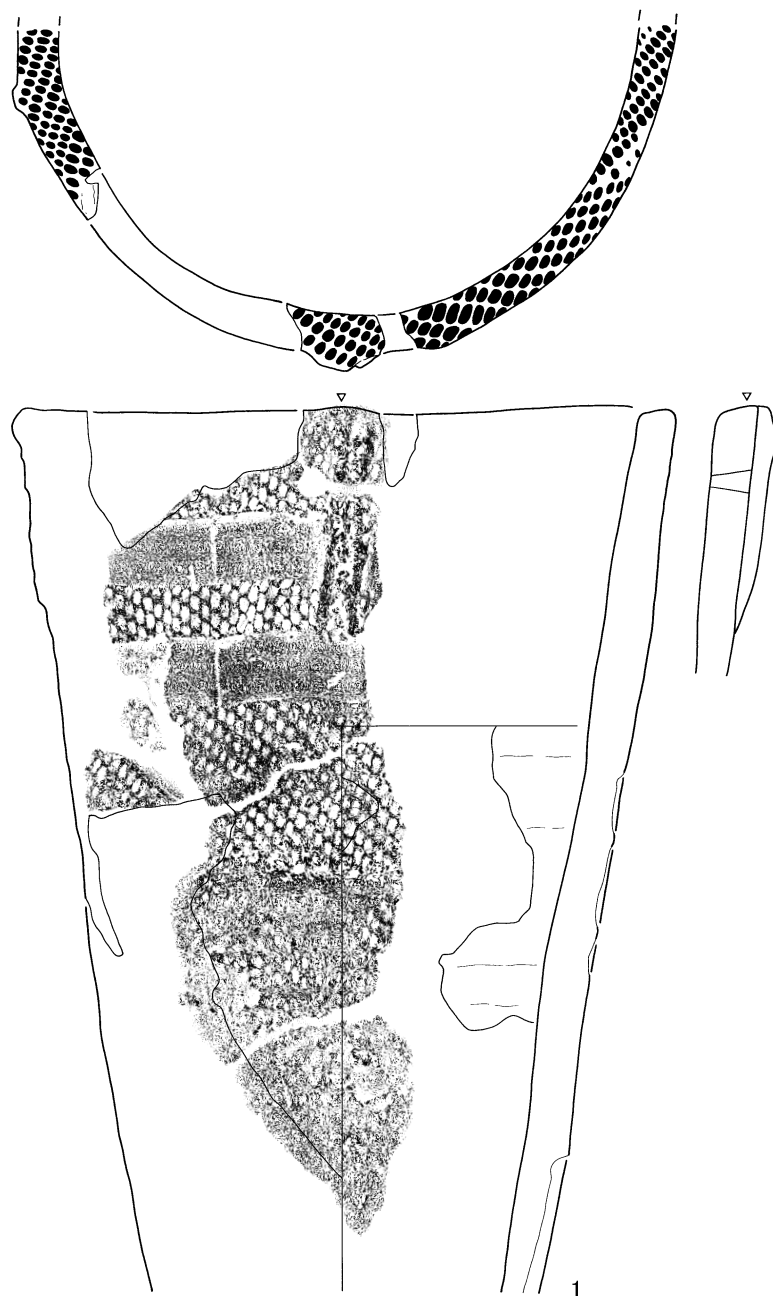
1は北筒Ⅴ式。上げ底である。土器の大きさに対してやや厚めの器壁であるが、口縁部にむけて薄くなる。上げ底の高台部も厚くはない。地文はR L斜行縄文。最大容量は0.9L。

2は山形の小突起がある口縁部片。刺突文が巡るが、深さ1、2mmと非常に浅く、断面図にはよく表れていない。縄線が6条ほど横環するが、施文が弱い上にナデ調整をしており、ほとんど消失しかかっている。下田ノ沢Ⅰ式の特徴的な属性は、口縁部を内側から突いた突瘤文が巡るものであり、外



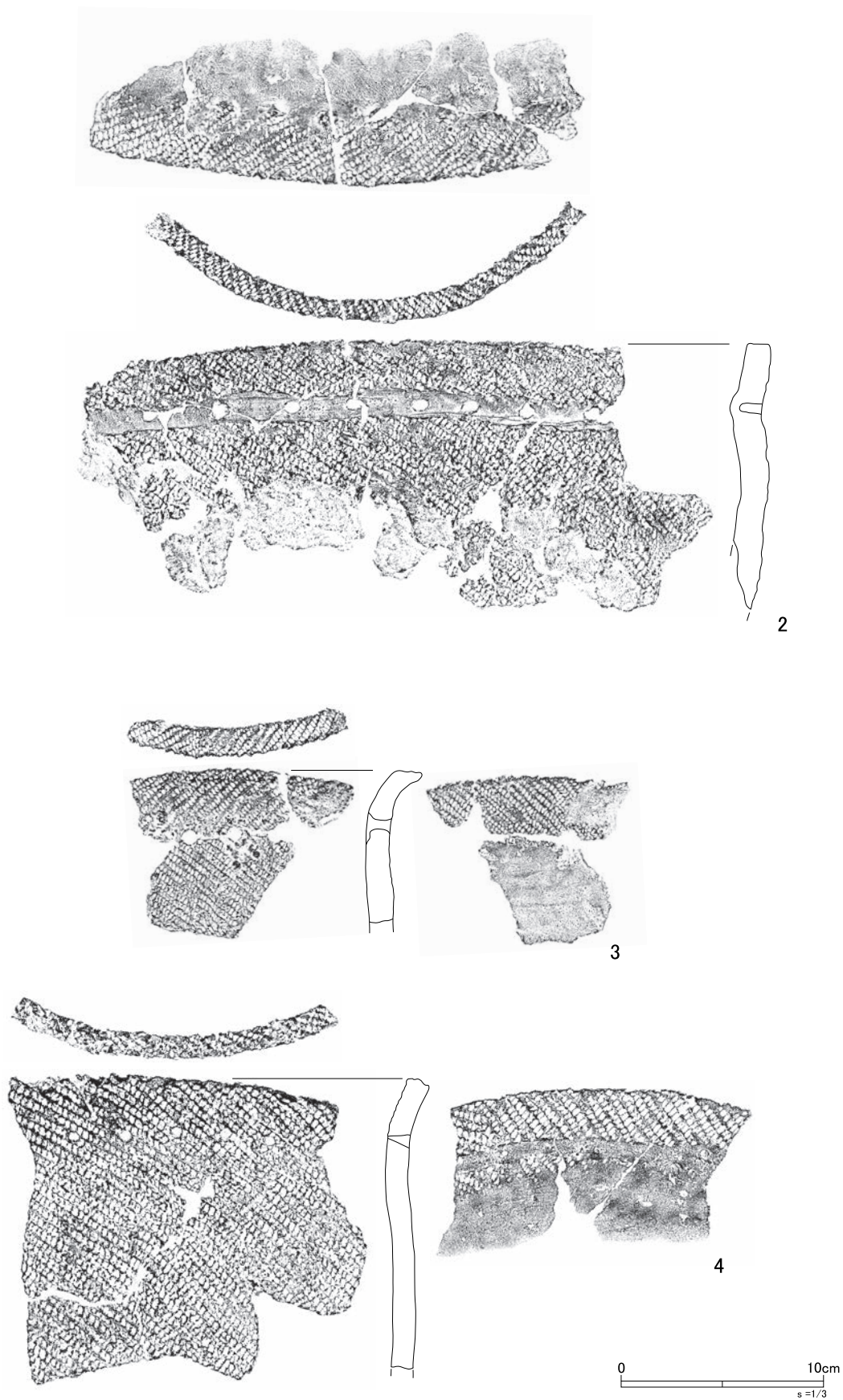
図IV-49 Ⅲ層遺構出土の土器（1）

ⅢH-7



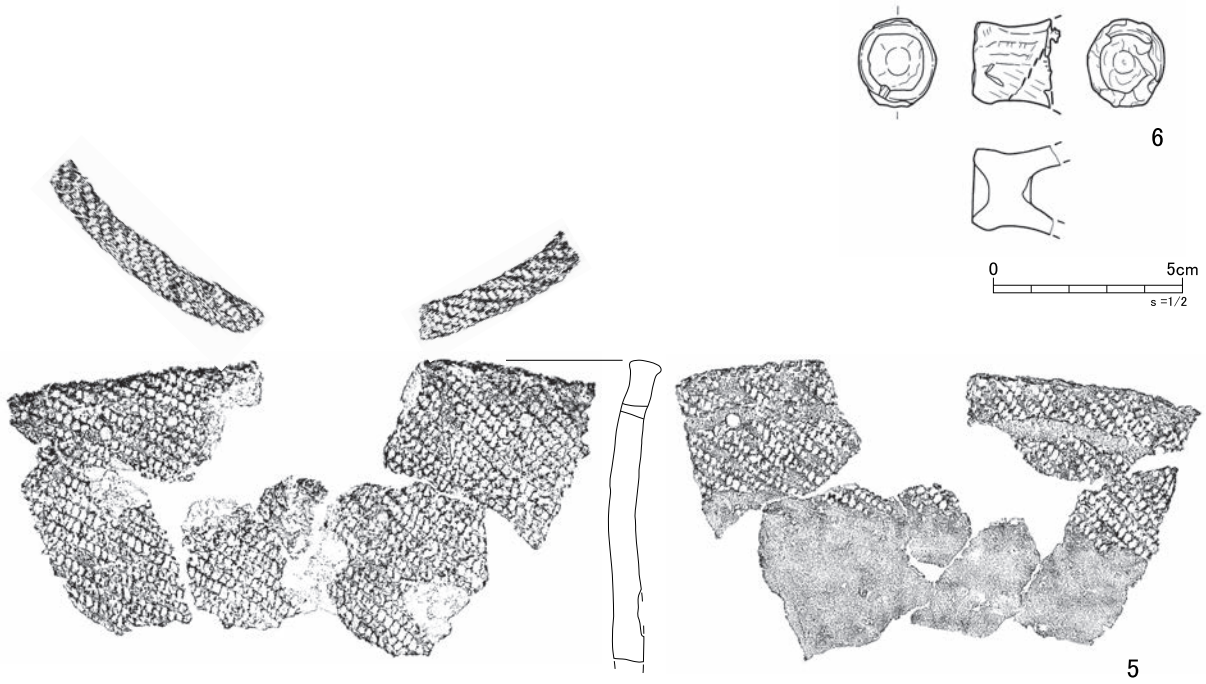
図Ⅳ-50 Ⅲ層遺構出土の土器(2)

ⅢH-7

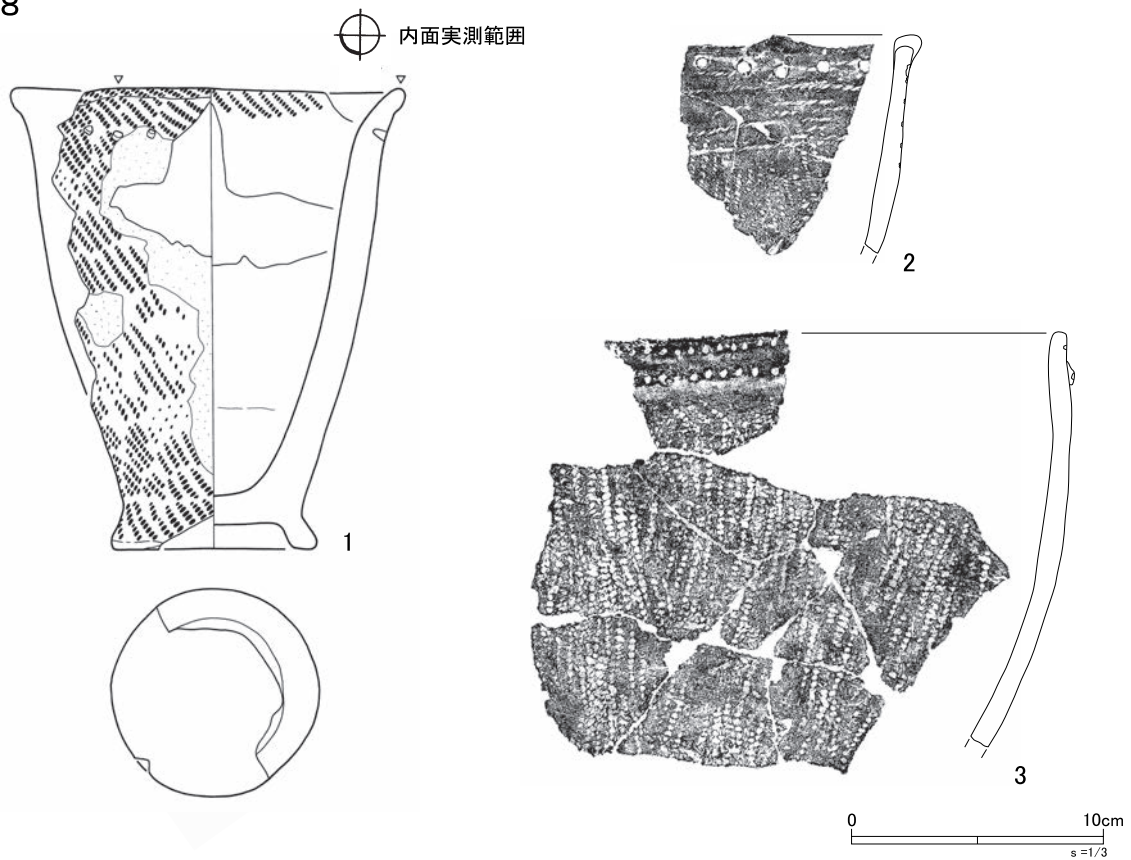


図Ⅳ-51 Ⅲ層遺構出土の土器（3）

ⅢH-7

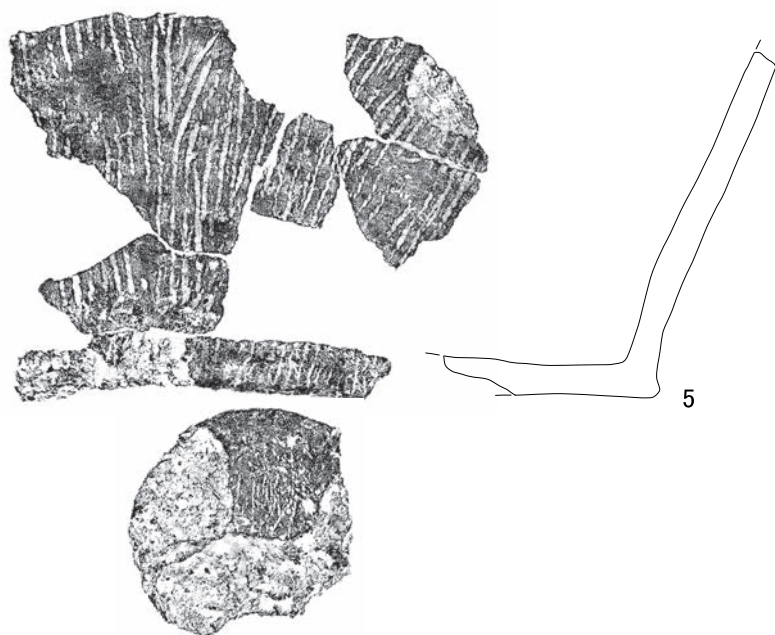
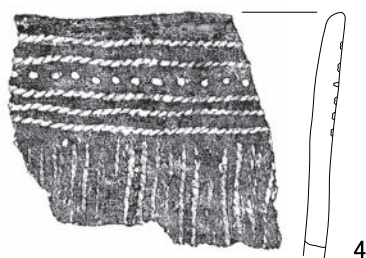


ⅢH-8

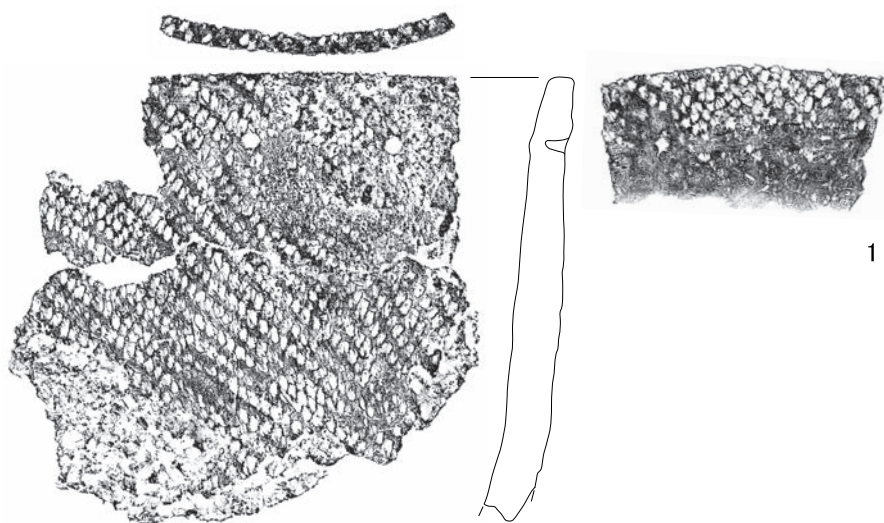


図Ⅳ-52 Ⅲ層遺構出土の土器(4)

ⅢH-8

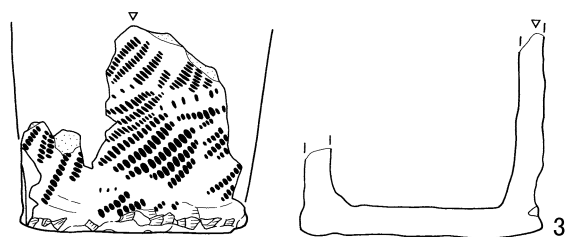
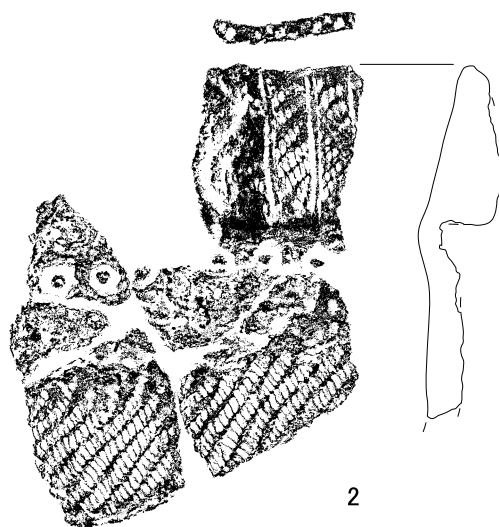
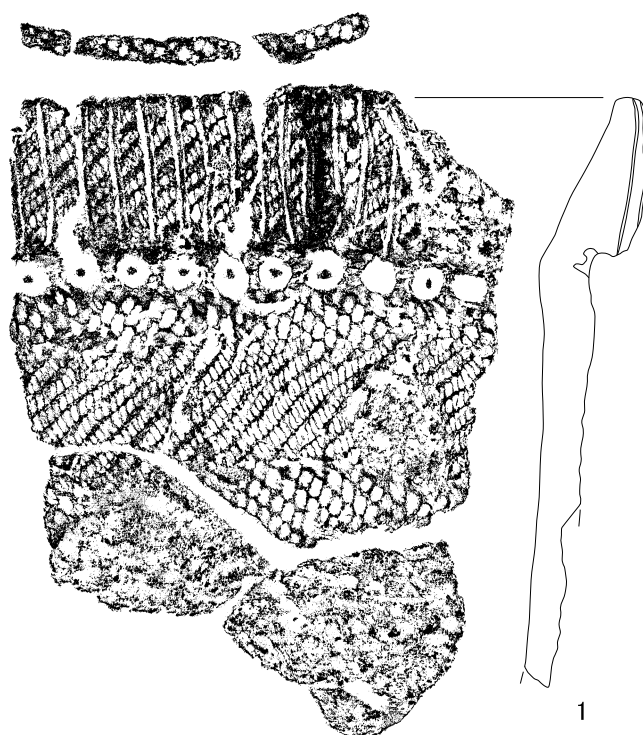


ⅢP-13



図IV-53 Ⅲ層遺構出土の土器(5)

ⅢS-2



図Ⅳ-54 Ⅲ層遺構出土の土器(6)

からの刺突文ではないが、近縁性が窺われることから下田ノ沢Ⅰ式と判断した。3は口縁部が無文地。ごく薄い隆起線が1条横環し、径の細い中空工具による刺突が口唇直下と隆起線上と2条横環する。口唇断面はやや丸みを帯びた角型。4・5は同一個体の口縁部と底部。口縁の無文地に縄線が5条横環し、間に径の細い中空工具による刺突列が1条横環する。地文は撚糸文の縦位施文。底面にも撚糸文の施文が認められるが、胴部地文より細い。異なる原体によるものか、施文後にナデ等で目が狭まったものかは判然としない。底部側面はわずかに外へ張り出す。内面調整は口縁部、底部ともすべて横方向。ヘラ状のもので行っている。3～5も下田ノ沢Ⅰ式であり、2～5は同時期のまとまりかもしれない。

Ⅲ P-13 (図Ⅳ-53、表Ⅳ-13、図版57)

土器は21点出土した。北筒式が9点、続縄文の下田ノ沢式が12点。坑底面および覆土下で出土したものはない。1は北筒Ⅴ式の口縁部片。地文はR L Rの複節斜行縄文。胎土中にパミス状の粒を多く含む。

Ⅲ S-2 (図Ⅳ-54、表Ⅳ-11・13、図版57)

1・2は北筒Ⅱ式(トコロ5類)の同一個体片。口縁部肥厚帯の縦位沈線は径4mmほどの中空植物を半截し工具としたもの。地文はR L Rの複節斜行縄文と、L R斜行縄文の2種を用いた羽状縄文。円形刺突文はやや斜め下方からの突きで、刺突部を境にして口縁部はやや開く。胎土は砂礫を多く含む。3は底部片。器壁は垂直に立ち上がる。底面周縁を粗い刺突が1条巡っている。北筒Ⅱ式。

・石器

Ⅲ H-7 (図Ⅳ-55・56、表Ⅳ-17、図版75)

石器等は297点出土した。床面から出土したものはない。床面直上でたたき石が2点出土している。フレイク・チップ221点を除くと76点。たたき石25点と砥石20点が比較的多い。剥片石器はスクレイパー6点と石槍またはナイフの5点が多い。1はスクレイパー。縦長剥片を素材とし、両側縁に刃部を作出したもの。黒曜石製。2～6はたたき石。2は丸みを帯びた礫を素材として全体的に使用している。アルコース砂岩製。3は割れた礫を素材として両面からの打ち欠きで鋭い縁辺を作出し、その縁辺部を使用したもの。砂岩製。4・5は角礫を素材としたもの。4は各面を使用している。正面中央はたたき痕の周辺が平滑である。すり石ないし小型の石皿的な用途も兼ねていたのであろう。部分的に被熱している。粗粒玄武岩製。5も各面使用しているが、下端の使用が顕著。砂岩製。6はいびつな扁平礫を素材とする。粗粒玄武岩製。7は亜円礫素材のすり石。砂岩製。8～10は石鋸。9は砥石片を使用した可能性がある。8・9は砂岩製、10は泥岩製。

11・12は付属遺構HP-2出土のもの。11は小型の扁平礫を素材とし、主に下端を使用したもの。砂岩製。12は大型の板状砥石。両面を使用している。使用面が重複するが幅はおよそ3.5～4.5cm幅である。敲打痕が各所に観察される。正面側と側面の一部にあることから、おそらく整形的なものではなく、たたき石的な用途や台石的な用途にも使用していたとみられる。砂岩製。

13・14は付属遺構HP-3出土のもの。13は刃部を欠いた短冊形の石斧片。基部上端が敲打で潰れている。砂岩製。14は板状の砥石。砂岩製。

Ⅲ H-8 (図Ⅳ-57、表Ⅳ-17、図版76)

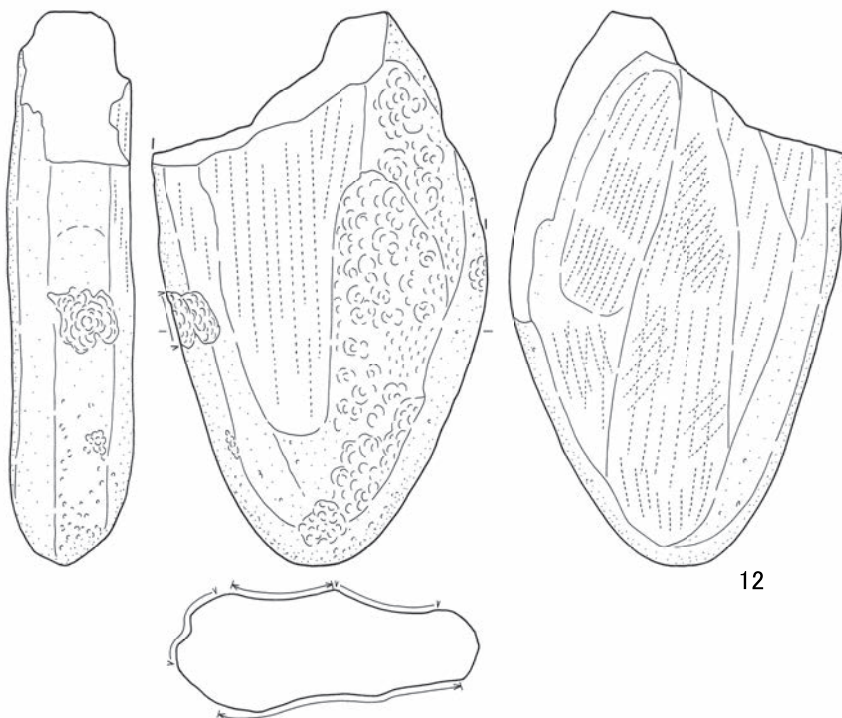
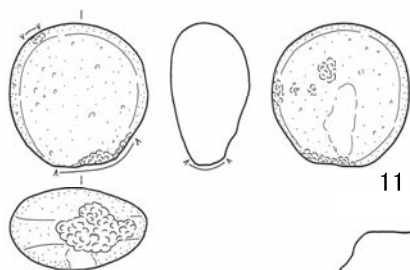
石器等は54点出土した。床面から出土したものはない。36点が覆土上層、15点が覆土中層からの出

ⅢH-7

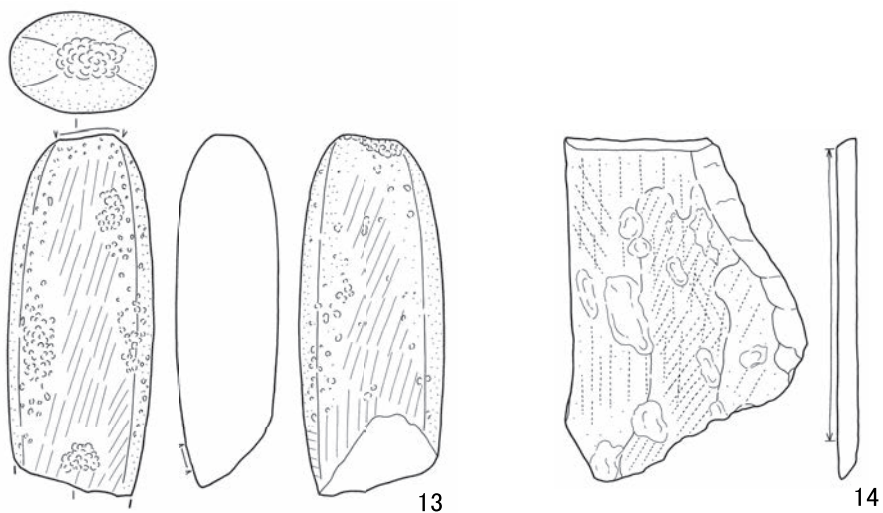


図Ⅳ-55 Ⅲ層遺構出土の石器（1）

ⅢH-7 HP-2

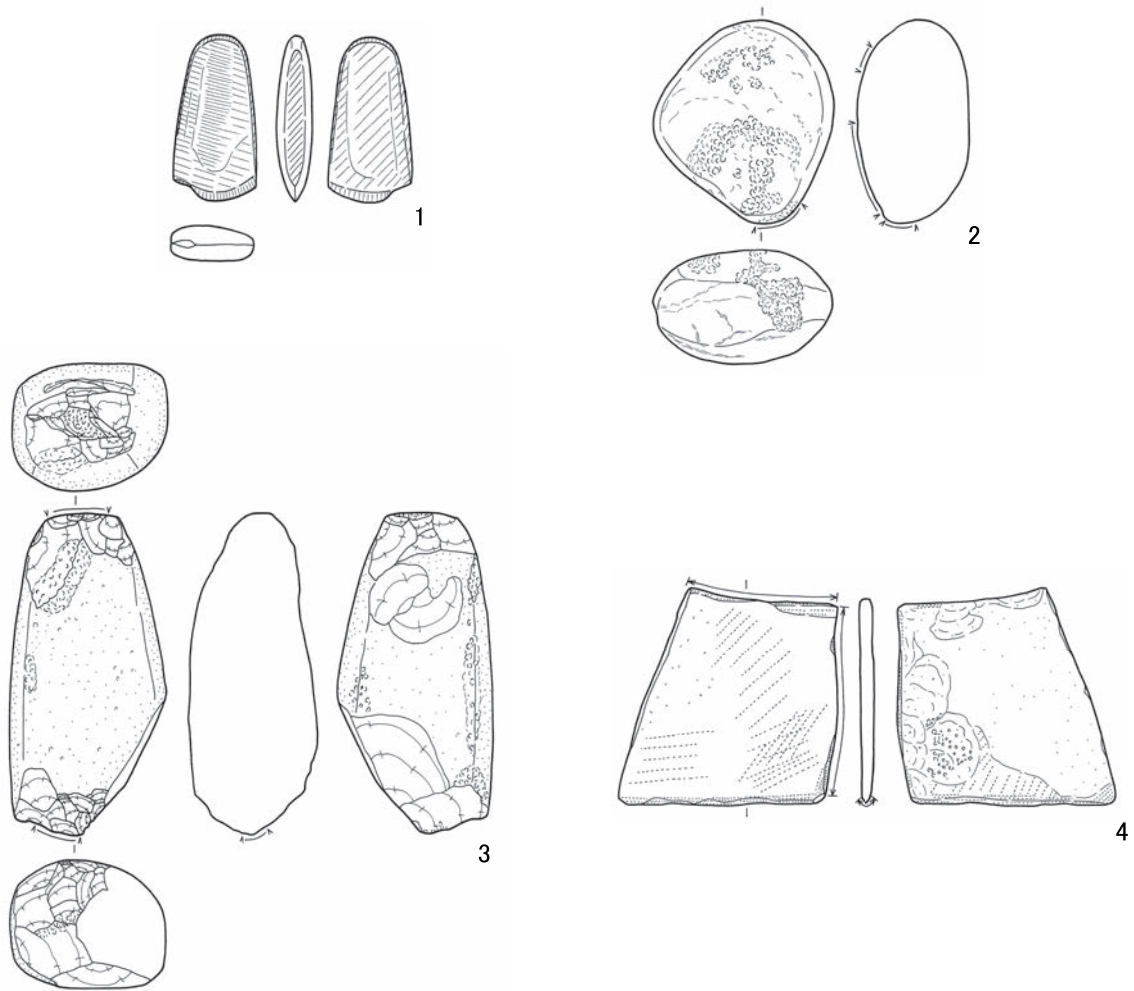


ⅢH-7 HP-3

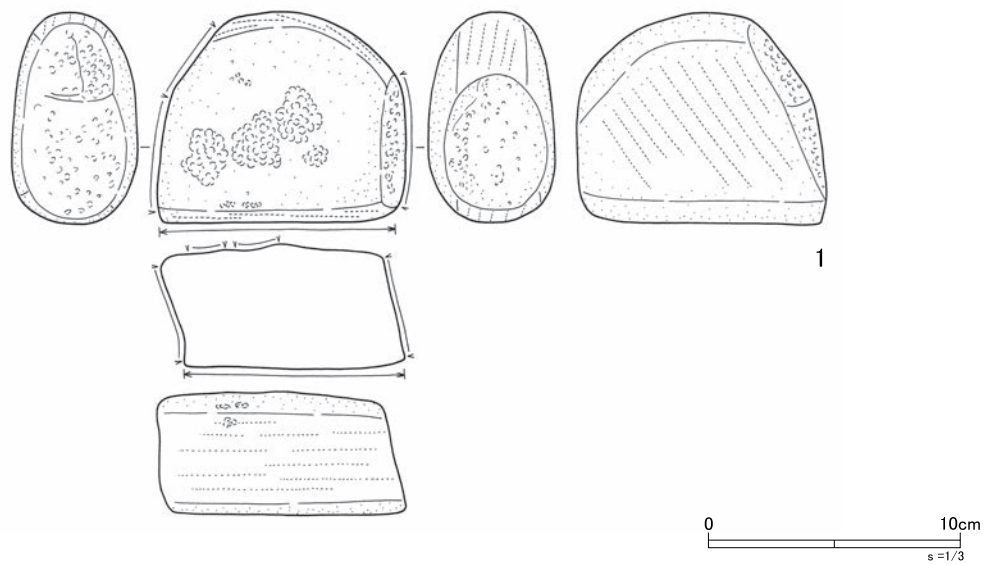


図IV-56 Ⅲ層遺構出土の石器(2)

ⅢH-8

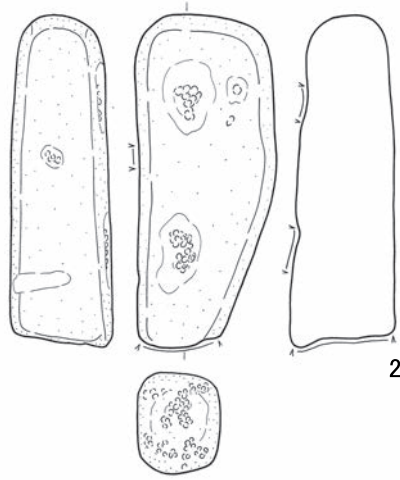


ⅢP-13

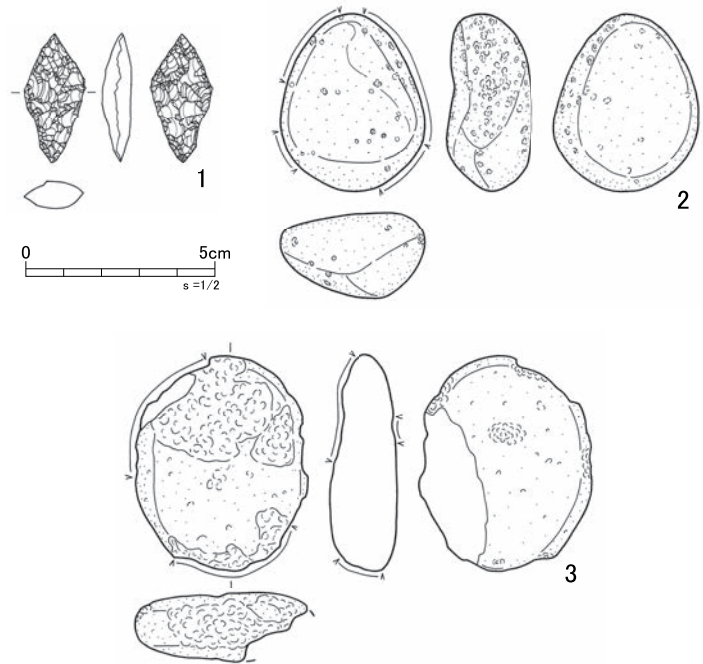


図Ⅳ-57 Ⅲ層遺構出土の石器（3）

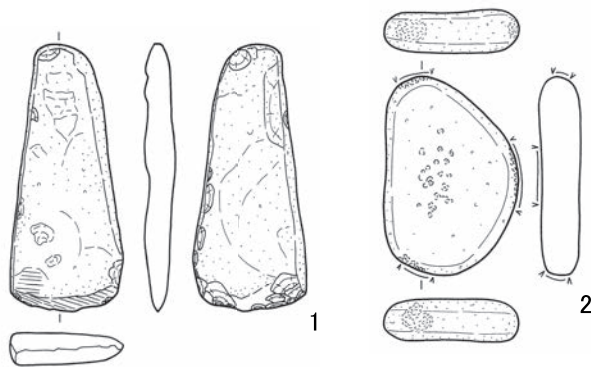
ⅢP-13



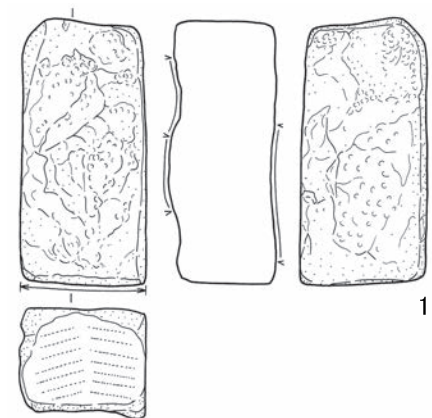
ⅢP-25



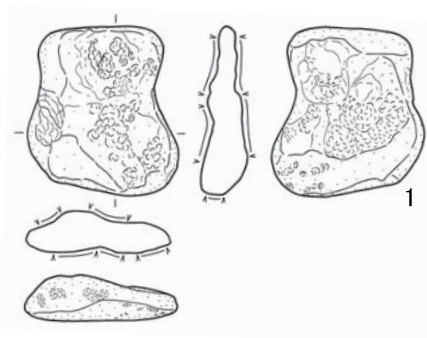
ⅢS-2



ⅢS-3



ⅢS-4



図Ⅳ-58 Ⅲ層遺構出土の石器(4)

土である。フレイク・チップ18点を除くと36点。この中ではたたき石19点と砥石6点が多い。ほか、覆土上層から石斧が3点出土している。遺跡全体を通して石斧は少ないので注目される。剥片石器は石鏃、石錐、ナイフ、スクレイパーが各1点、U・Rフレイク2点が出土している。

1は石斧。刃部の一端をわずかに欠くが、全面が研磨されている。泥岩製。2・3はたたき石。2は扁平礫を素材とし、面と下端部をたたいている。玄武岩製。3は角ばった棒状気味の礫を素材とし、上下両端を使用したもの。上下端とも剥離が著しく、楔として用いた可能性もある。砂岩製。4は砥石。石鋸としても使用している。砂岩製。

Ⅲ P-13 (図Ⅳ-57・58、表Ⅳ-17、図版76)

石器等は13点出土した。坑底面から出土したものはない。フレイク・チップ4点を除くと9点。たたき石が5点と比較的多い。1・2はたたき石。1は角ばった礫を素材としたもの。上下の側面及び裏面をすり石としても使用しているが、たたき石としての使用痕の方が顕著である。2は棒状の亜角礫を素材としたもの。面と下端部を使用。いずれとも砂岩製。

Ⅲ P-25 (図Ⅳ-58、表Ⅳ-17、図版76)

石器等は28点出土した。フレイク・チップ22点を除くと6点。たたき石が3点と比較的多い。1は菱形の石鏃。黒曜石製。2・3は小型の扁平礫を素材としたもの。2は砂岩製、3は安山岩製。

Ⅲ S-2 (図Ⅳ-58、表Ⅳ-17、図版76)

石器等は73点出土した。フレイク・チップ31点を除くと42点。砥石24点とたたき石10点が多い。1は石斧。石斧に近い形状の礫を素材として、刃部のみ研磨して作出したもの。泥岩製。2はたたき石。小型の扁平礫を素材とし、上下端と側縁の張りだした部分を使用している。面も使用しているようだが、使用痕が浅く判然としない。被熱している。砂岩製。

Ⅲ S-3 (図Ⅳ-58、表Ⅳ-17、図版76)

石器等はたたき石が3点出土した。1は角柱状の礫を素材としたもの。面をたたいており、凹凸が顕著である。下面が平滑で、角が丸いことから、^{すりこぎ}播粉木的な用途も兼ねたと考えられる。砂岩製。

Ⅲ S-4 (図Ⅳ-58、表Ⅳ-17、図版76)

石器等は18点出土した。たたき石が15点、砥石が3点である。

1は小型の扁平礫を素材とし、両面を使用したもの。砂岩製。図示した以外のたたき石はすべて破片で被熱している。砥石3点についても被熱したものである。(影浦)

4 Ⅲ層 続縄文時代の遺構と遺物

(1) 概要

続縄文時代の下田ノ沢式期の遺構は住居跡が6軒（ⅢH-1・6・10・11・12・16）、土坑13基（ⅢP-1～3・6～8・10～12・14・16・20・24）、焼土1か所（ⅢF-2）を確認した。調査範囲中央付近の台地上から斜面上位にかけて分布するが、斜面上位のⅢH-16、ⅢP-1・6～8・11・12は下田ノ沢Ⅰ式の遺構、台地上のⅢH-1・6・11・12、ⅢP-16は下田ノ沢Ⅱ式の遺構と、分布が多少異なる。

住居跡の平面形は円形ないし楕円形を基調とする。ⅢH-1は焼失家屋で、一部、垂木材と母屋材が井桁状の組みを保ったまま出土した。ⅢH-1と12は板状礫を列状にめぐらせた炉がある。ⅢH-6・11・12・16は、床面に段差がある。攪乱による削平等で判然としないが、ⅢH-1・6・11・12は南西部が浅く舌状に張り出している可能性がある。ⅢH-6では他に、北西壁と北東壁が外に張り出している（釧路市興津遺跡、第11号住居の類例がある）。ⅢH-11は、床面に付属土坑がある。

土坑には、覆土内に礫や炭化材を伴うものが一定数ある（ⅢP-1・6・7・12・16・24）。うちⅢP-12・16は坑底に段差がある。他に墓の可能性のある土坑もある（ⅢP-2・11・14）。中でもⅢP-14は、東西方向が長軸の楕円形で、西側の坑底部から石鏃、石槍またはナイフ、スクレイパー等黒曜石製石器と、緑色泥岩製の小型石斧がまとまった状態で出土した。そのすぐ横からは、歯の可能性のある微細破片のまとまりも検出している。

ほか、下田ノ沢式期の遺構では小型土器をとまなうものがある。ⅢH-1・6・10では床面、床面直上、覆土下、ⅢP-16では坑口においてそれぞれ出土した。

なお、ⅢP-20に関しては調査工程の連続性から例外的にトビニタイ式期の項目で扱った。（影浦）

(2) 遺構

ⅢH-1（図Ⅳ-59～65、表Ⅲ-10・Ⅳ-1・2、図版17・18）

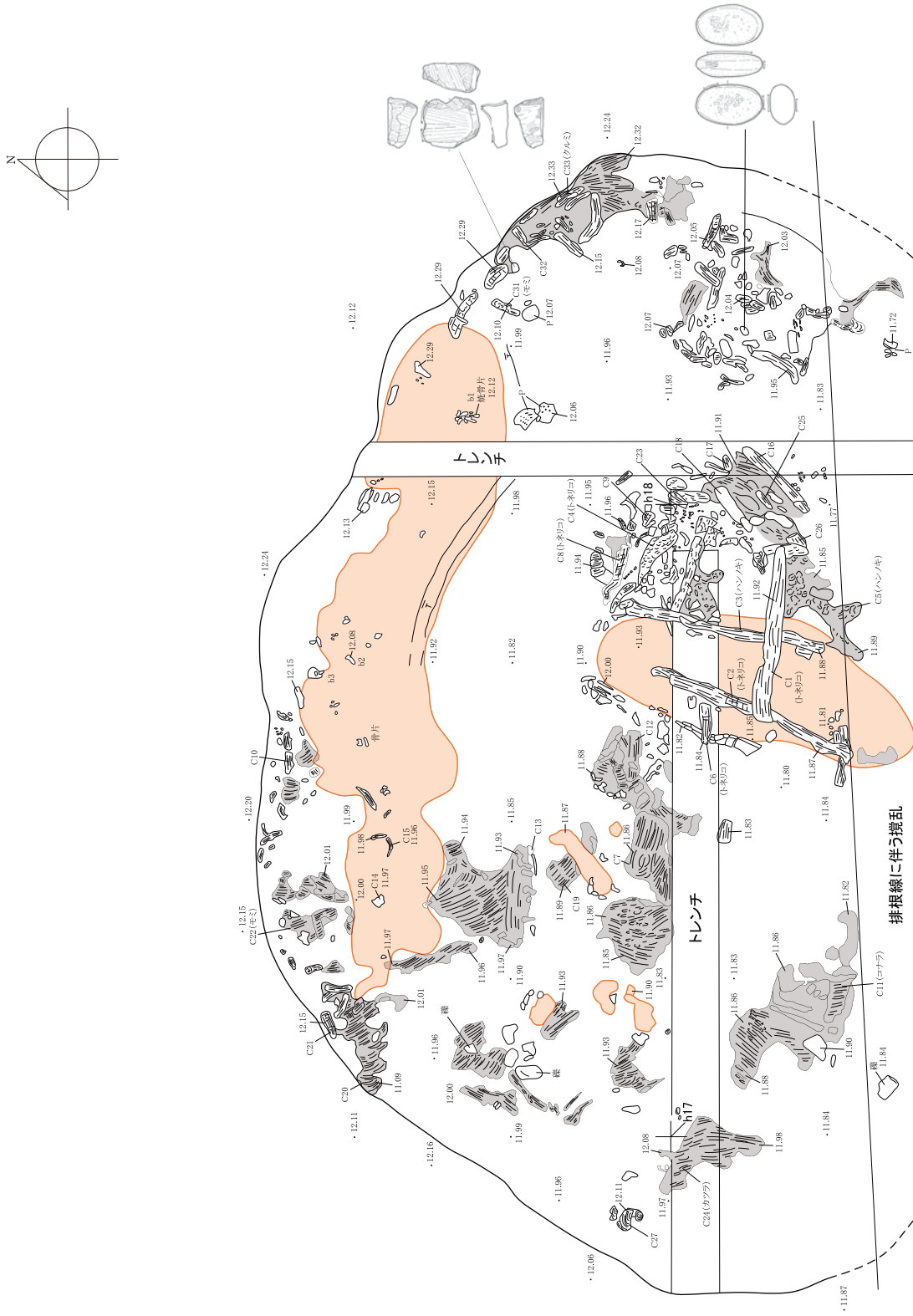
位置 g16・g17・g18、h16・h17・h18、i17区 平面形態 張り出し部を有する楕円形

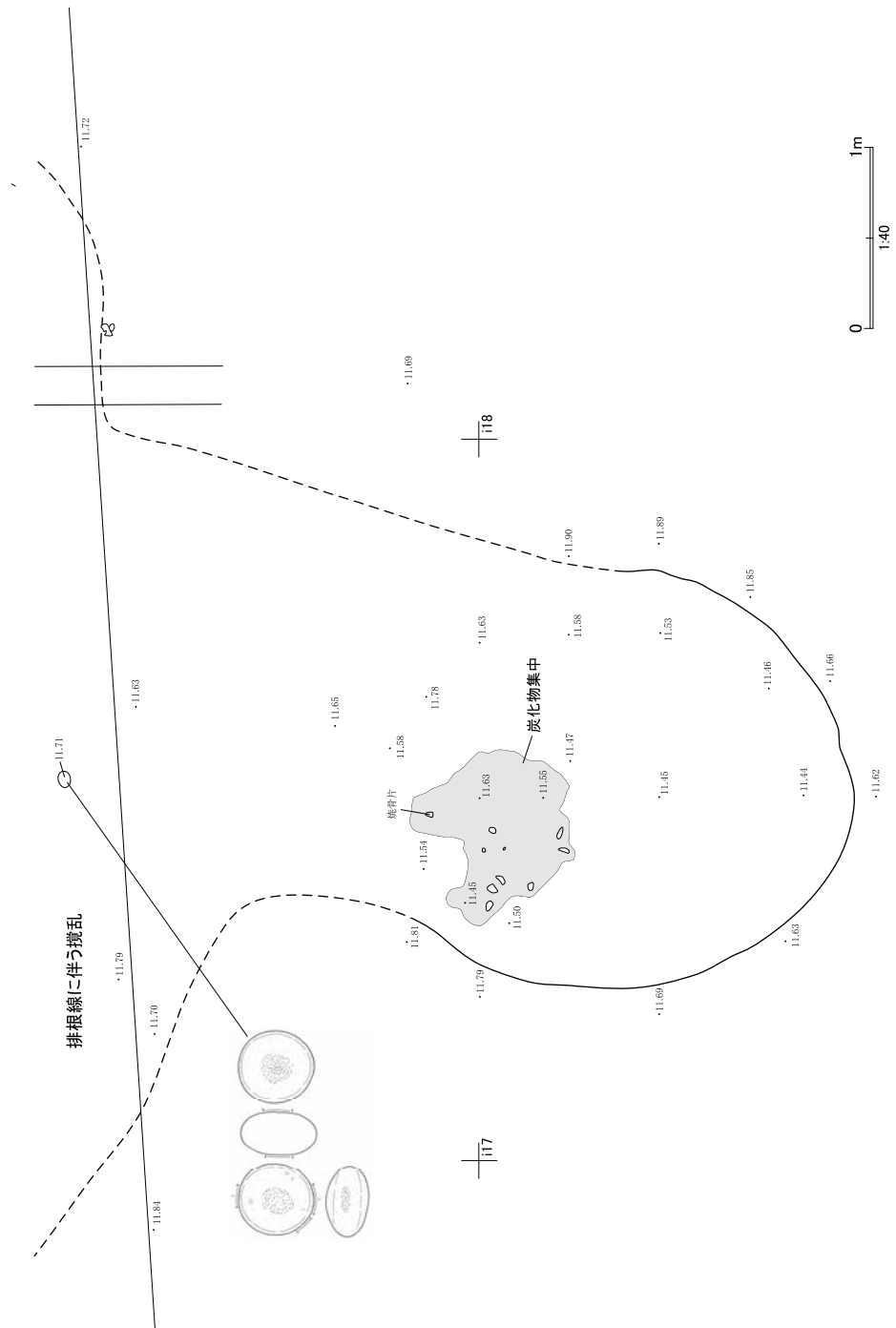
規模 (8.72)×7.20/(8.24)×6.56/0.32m

確認・調査 i17区で円形の土坑（仮ⅢP-5）調査を行った際、北側の範囲が判然としなかったため、全体を5cm程度掘り下げて確認作業を行った。元々、その周辺では炭化物が点々と見えていたが、多量の炭化材が現れたため、h17・18区およびg17・18区に及ぶ範囲で焼失住居の存在を予想した。調査中の土坑についても、覆土中に炭化物が多く含まれていたため、この焼失住居と重複する土坑か、あるいは張り出し部等、焼失住居の一部である可能性が考えられた。しかし、この段階で表土が除去されていたのはhライン以南であったことから、hライン以北の表土を除去後に全体の再確認をすることにして、ひとまず円形の土坑（仮ⅢP-5）として調査した。

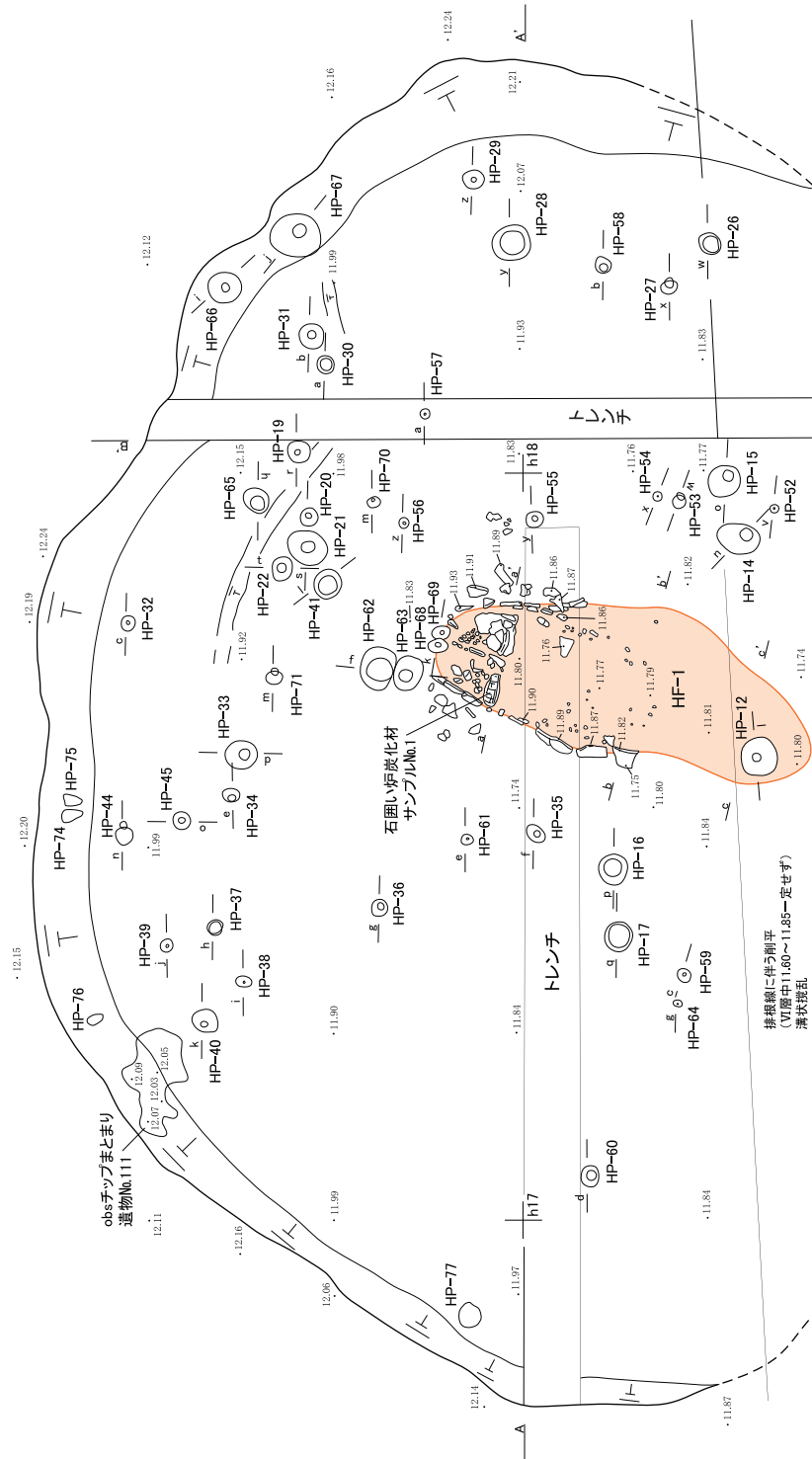
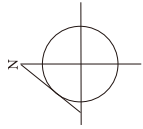
hライン以北の表土を除去後、改めて全体を清掃し、炭化材の分布から住居範囲を想定。東西方向はhライン沿い、南北方向は18ライン沿いに土層観察用のベルトを設定し、それに沿う形でトレンチ掘削を行った。トレンチでは場所によりおびただしい量の炭化材を検出した。土層観察の障害になるものや比較的小さなものは除去したが、大きな材は極力残しながら周囲を掘り下げた。

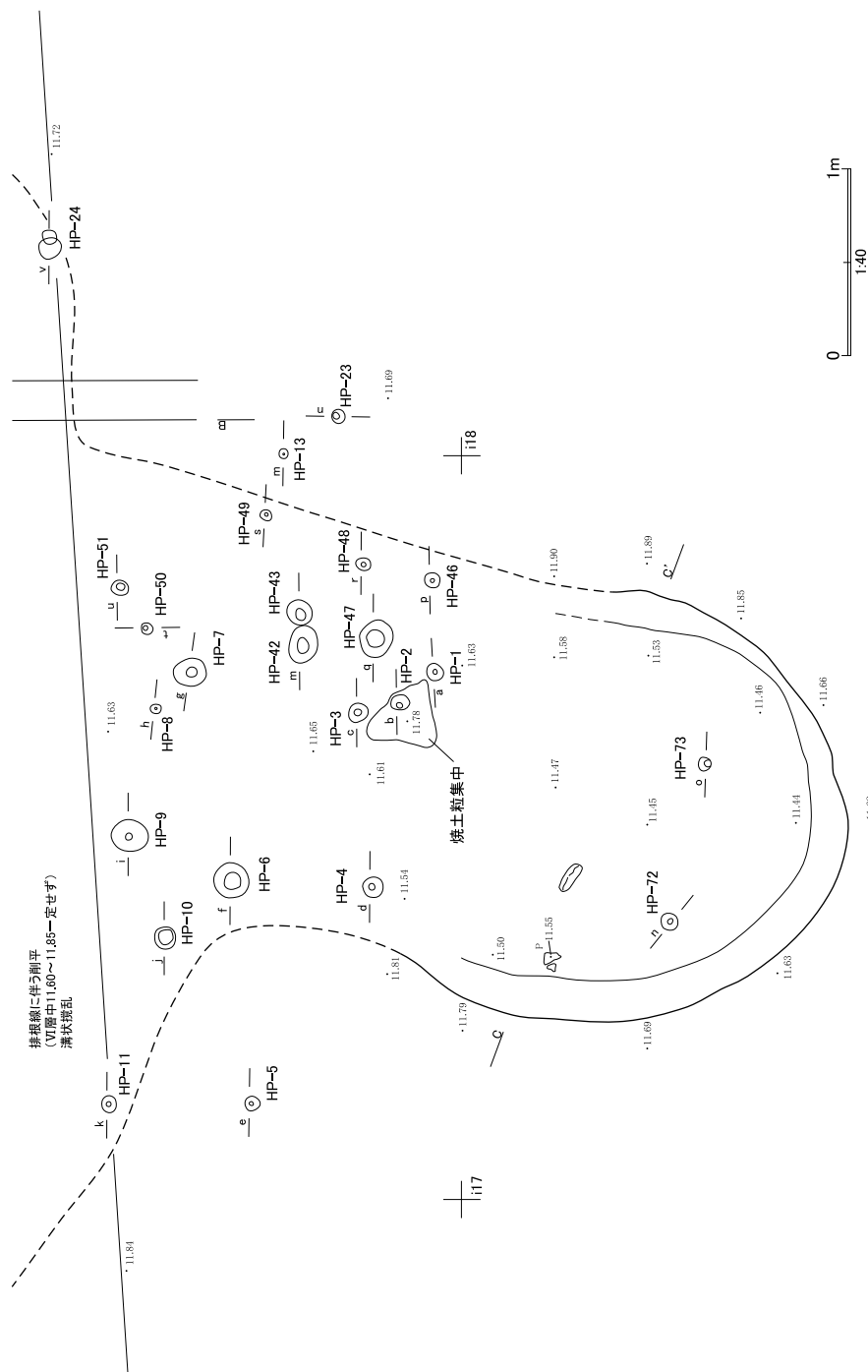
掘削の結果、炭化材の直下がおおむね平坦で、住居の床面であることが確認できたため、トレンチから周囲へと広げるように炭化材及び床面の検出作業を行った。炭化材は、井桁状の組を保ったものがあり、また、炭化して直立状態で遺存した柱根部もいくらか確認できたことから、その大半が屋根材や柱などの住居建材であると判断される。試料12点につき樹種同定を行った。結果は12点中5点が





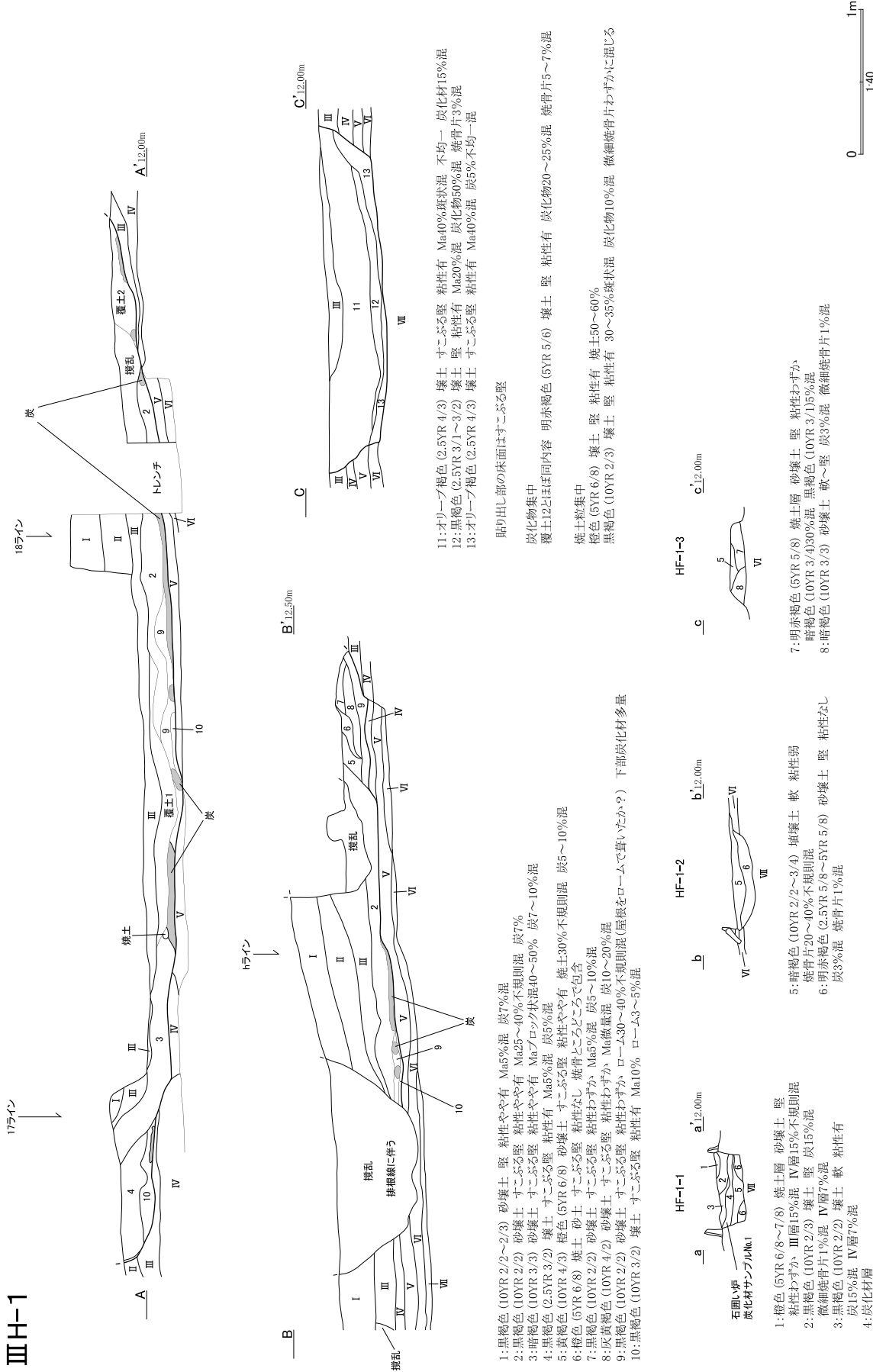
図IV-59・60 ⅢH-1 炭化材検出状況(1)(2)





図IV-61・62 III H-1平面(1)(2)

III H-1



- 1: 黒褐色 (10YR 2/2~2/3) 砂壤土 堅 粘性やや有 Ma5%混 炭7%混
- 2: 黒褐色 (10YR 2/2) 砂壤土 すこぶる堅 粘性やや有 Mk25~40%不規則混 炭7%
- 3: 暗褐色 (10YR 3/3) 砂壤土 すこぶる堅 粘性やや有 Maプロック状混40~50% 炭7~10%混
- 4: 暗褐色 (2.5YR 3/2) 壤土 すこぶる堅 粘性有 Ma5%混 炭5%混
- 5: 黄褐色 (10YR 4/3) 褐色 (5YR 6/8) 砂壤土 すこぶる堅 粘性やや有 焼土30%不規則混 炭5~10%混
- 6: 褐色 (5YR 6/8) 焼土 砂土 すこぶる堅 粘性なし 焼骨ところどころで包含
- 7: 黒褐色 (10YR 2/2) 砂壤土 すこぶる堅 粘性わずか、Ma5%混 炭5~10%混
- 8: 灰黄褐色 (10YR 4/2) 砂壤土 すこぶる堅 粘性わずか、Ma微量混 炭10~20%混
- 9: 黒褐色 (10YR 2/2) 砂壤土 すこぶる堅 粘性わずか、ローム30~40%不規則混(屋根をロームで覆いたか?) 下部炭化材多量
- 10: 黒褐色 (10YR 3/2) 壤土 すこぶる堅 粘性有 Ma10% ローム3~5%混

- 11: オリーブ褐色 (2.5YR 4/3) 壤土 すこぶる堅 粘性有 Ma40%球状混 不均一炭化材15%混
- 12: 黒褐色 (2.5YR 3/1~3/2) 壤土 堅 粘性有 Ma20%混 炭化物50%混 焼骨片3%混
- 13: オリーブ褐色 (2.5YR 4/3) 壤土 すこぶる堅 粘性有 Ma40%混 炭5%不均一混

- 1: 褐色 (5YR 6/8~7/8) 焼土層 砂壤土 堅 粘性わずか、IV層15%混 IV層15%不規則混
- 2: 黒褐色 (10YR 2/3) 壤土 堅 炭15%混
- 3: 黒褐色 (10YR 2/2) 壤土 軟 粘性有 炭15%混
- 4: 炭化材層

- 5: 暗褐色 (10YR 2/2~3/4) 埴壤土 軟 粘性弱 焼骨片20~40%不規則混
- 6: 明赤褐色 (2.5YR 5/8~5YR 5/8) 砂壤土 堅 粘性なし 炭3%混 焼骨片1%混
- 7: 明赤褐色 (5YR 5/8) 焼土層 砂壤土 堅 粘性わずか 暗褐色 (10YR 3/4)30%混 黒褐色 (10YR 3/1)5%混
- 8: 暗褐色 (10YR 3/3) 砂壤土 軟~堅 炭3%混 微細焼骨片1%混

図IV-63 III H-1 断面

トネリコ属、他ハンノキ属とモミ属が各2点、コナラ属、クルミ属、カツラが各1点であった。井桁状に組まれた柱材はハンノキ属とトネリコ属。屋根材の可能性のある板状の炭化材はコナラ属とカツラであった。いずれとも遺跡周辺に自生する樹木を利用したと考えられる。炭化材が全体的に現れた段階で図化と写真撮影を行った。その後、主要な材に関しては、番号を付けて取り上げている。その後、床面測量および、柱穴の検出作業を行った。

覆土 10層に分けた。最下層である覆土10は堅密であるため、部分的な貼り床と考えられる。覆土9は炭とⅦ層起源のブロック状のロームが粗く混ざり合ったもの。屋根材を覆ったⅦ層主体の土壌であると考えられる。覆土5～8は住居北側の壁際およびテラス部にのみ堆積し、いずれも焼土粒や炭、灰を含む。また、大型哺乳類と考えられる焼成動物骨をいくらか包含する。他の場所で焚いた焼土と焼成骨を盛ったものであろう。現地調査後、これらの動物骨について分析に出したところ、同定できたものはすべてヒグマであった。軸椎、中節骨、基節骨、脛骨、四肢骨、寛骨がある（V章5節参照、表V-5-1）。

床面・壁 床面は中央部が平坦で壁に向かって緩やかに立ち上がる。北側半分はテラス状の段を有する。テラス状の段は、幅のあるところで70cm近く。大部分はⅣ層（摩周テフラ）下部が床面である。

張り出し部とした南側部分（旧ⅢP-5）は坑底面が非常に堅かったことから、住居の出入り口施設であった可能性が考えられる。

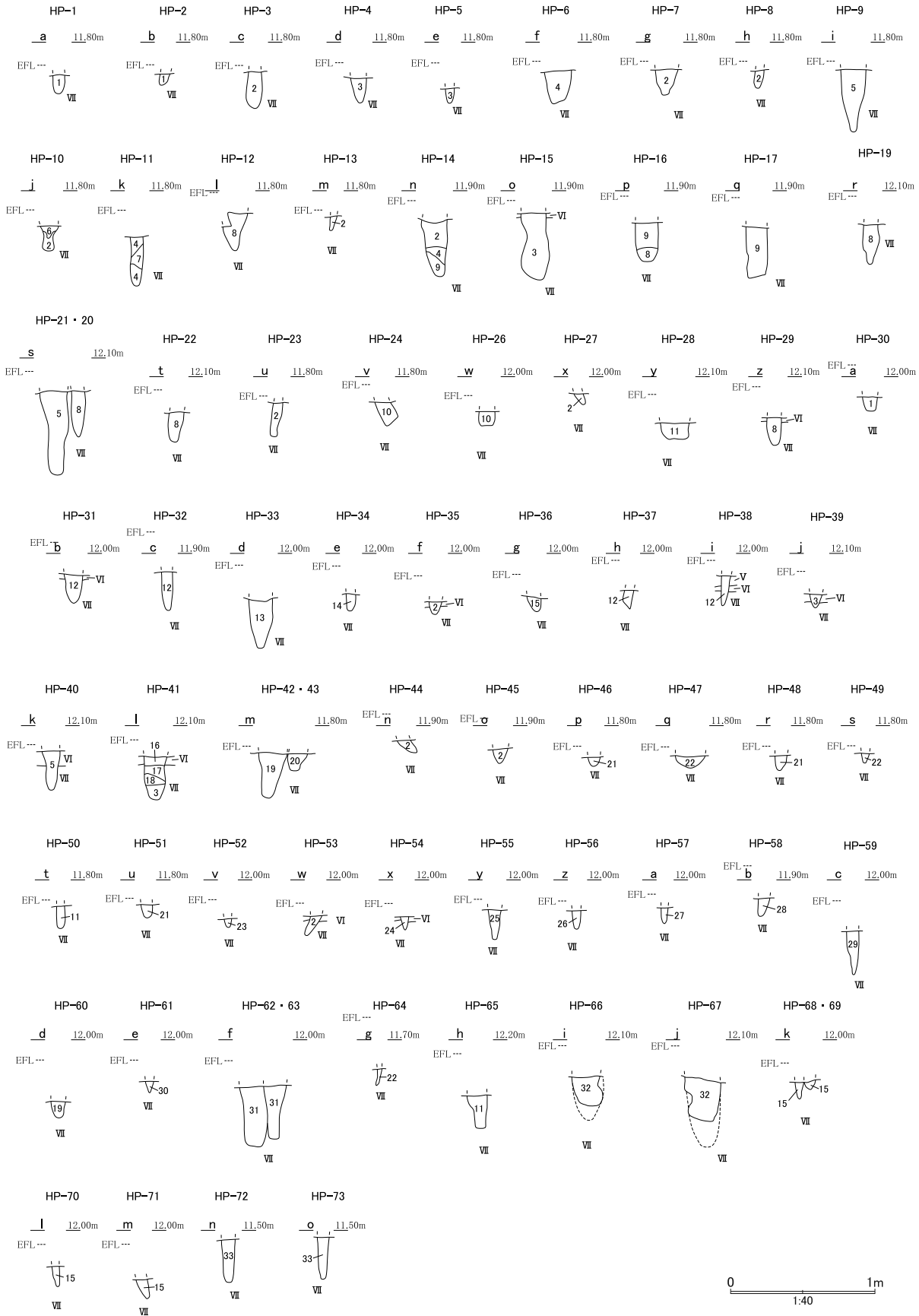
付属遺構 石囲いの炉（HF-1）1か所、焼土堆積1か所、柱穴75基（HP-1～77、18・25欠番）を確認した。炉（HF-1）は南北方向に細長く（2.10m×0.80m）、床面のほぼ中央部で検出した。炉石は薄い板状の泥岩^註を周囲に立てたものである。検出状況で炉石は全周していなかったが、一部が斜めに崩れており、周辺でも同様の礫が散乱して出土したことから、使用時には全周していた可能性がある。炉内は、北側では20cm近く掘り込まれており、南へ向けて徐々に浅くなる。炉内の焼土中には焼けた微細骨片が含まれていた。これらの焼骨は種が特定されなかったが、大型哺乳類との結果が得られている。また、炉の焼土中からも炭化材がいくらか出土している。

柱穴は全部で75基確認したが、居住スペースを考慮すると、これらの全てが同時期に立っていたとは考え難い。補修等で差し替えた柱穴も含まれていると判断される。検出炭化材の量から、調査序盤より相当数の柱穴の存在を予想してはいたが、床面の大部分がⅤ層ないしⅥ層中であったため、判然としなかった。結局、実際の床面より10数cm～20cmほど掘り下がったⅦ層中に至って、その大半を確認した。したがって、柱穴の実際の長さは、セクション図よりも長いものであることについて注意が必要である。床面高が推測できる場所に関しては、セクション図にEFL（estimated floor surface line 推定床面線）を付した。HP-9・14・16・17・21・33・41・42・62・63・67は主柱穴と考えられる。最も深いHP-21については確認面から深さ56cmを測ったが、実際には床面から70cmを超える深さであったろう。HP-7・9・12・14・20・33・66は比較的径が太く、下端が尖るもの。HP-1・2・5・8・11・13・23・27・32・34・38・44・49・50・52～59・61・68・70～73は杭状。うち5・13・23・49は、住居外の付属的な施設のもの可能性がある。HP-24・27・44・53・71は斜位。HP-74～77は炭化した状態で遺存した柱根部。写真を撮り、サンプリングはしたが、状態が悪かったため、断面実測は記録していない。HP-66・67は掘り過ぎで大半を欠失した。HP-10・15は形がいびつ。

遺物出土状況 土器片は下田ノ沢Ⅱ式（Ⅵb）が51点と多い。特に注目されるものとして、床面から出土した小型土器1個体（図Ⅳ-89-5～7・図版18-1）が挙げられる。次いで北大式（Ⅵc）が44点出土しているが、すべて覆土上から出土した同一個体片のまとまりで、大半は小片である。

石器類ではフレイク35点、チップ277点が目につく。覆土上から下にかけて出土しているが、住居廃

根室市 温根沼2 遺跡



图IV-64 III H-1 HP断面

- 1: 黒褐色 (10YR 3/1) 30%
 明黄褐色 (10YR 6/8) 50%均質混(ローム)
 黒色 (10YR 2/1) 10%
 壤土 鬆 粘性有 Ma 10%混
- 2: 黒色 (10YR 2/1)
 明黄褐色 (10YR 6/8) 25~30%不規則混(ローム)
 黒色 (10YR 2/1) 10%
 壤土 すこぶる堅、部分的に鬆 粘性わずか、Ma微量
- 3: 黒褐色~黒色 (10YR 3/1~2/1)
 明黄褐色 (10YR 6/8) 30~40%均質混(ローム)
 壤土~埴壤土 鬆~軟 粘性有
- 4: 明黄褐色 (10YR 6/8) 60%(ローム)
 黒褐色 (10YR 3/1) 20% 不規則混
 黒色 (10YR 2/1) 15% 不規則混
 埴壤土 堅 粘性有 Ma微量
- 5: 黒褐色 (10YR 3/2)
 明黄褐色 (10YR 6/8) 20%均一混(ローム)
 壤土~埴壤土 鬆 粘性有 Ma30%均一混
- 6: 明黄褐色 (10YR 7/6) 100% (IV層) 砂土 鬆 粘性なし
- 7: 明黄褐色 (10YR 6/8) 100% (ローム) 壤土 軟 粘性有
- 8: 黒褐色 (10YR 2/2)
 明黄褐色 (10YR 6/8) 40%均質混(ローム)
 埴土 鬆~軟 粘性有
- 9: 明黄褐色 (10YR 6/8) 50%(ローム)
 黒色 (10YR 2/1) 50% 均質混
 埴壤土 鬆~軟 粘性有
- 10: 黒色 (10YR 2/1)
 Ma40~50% 不均一混
 埴壤土 鬆~軟 粘性有
- 11: 黒色 (10YR 2/1) 40%
 明黄褐色 (10YR 6/8) 40%(ローム)
 埴壤土 軟 粘性有 Ma20% 均質混
- 12: 黒色 (10YR 2/1)
 明黄褐色 (10YR 6/8) 30%(ローム)不均一混
 埴壤土 鬆 粘性有 Ma微量
- 13: 黒色 (10YR 2/1)
 明黄褐色 (10YR 6/8) 20~30%(ローム)均一混
 埴壤土 鬆 粘性有 Ma10%混
- 14: 黒褐色 (10YR 3/1)
 黒色 (10YR 2/1) 10%
 明黄褐色 (10YR 6/8) 30~40%(ローム)斑状混
 埴壤土 堅 粘性有
- 15: 黒色 (10YR 2/1)
 明黄褐色 (10YR 6/8) 3~5%(ローム)
 埴壤土 堅 粘性有
- 16: 明黄褐色 (10YR 6/8) (ローム)
 黒褐色 (10YR 3/1) 5%混 不均一
 砂土~砂壤土 堅 粘性わずか
- 17: 黒褐色 (10YR 3/1)
 明黄褐色 (10YR 6/8) 40%(ローム)不均一
 砂壤土 鬆 粘性わずか
- 18: 明黄褐色 (10YR 6/8) (ローム)
 黒褐色 (10YR 3/1) 5~10%混 均一混
 壤土 鬆 粘性有
- 19: にぶい黄褐色 (10YR 4/3)
 明黄褐色 (10YR 6/8) 40~50%(ローム) 均一混
 埴壤土 軟 粘性有
- 20: 暗褐色 (10YR 3/3)
 明黄褐色 (10YR 6/8) 30%(ローム) 均一混
 黒色 (10YR 2/1) 15~20% 均一混
 埴壤土 軟 粘性有
- 21: 黒褐色 (10YR 3/1)
 明黄褐色 (10YR 6/8) 40~50%(ローム) 均一混
 壤土 すこぶる堅 粘性わずか
- 22: 黒色 (10YR 2/1)
 明黄褐色 (10YR 6/8) 50%(ローム) 粒状不均一
 壤土 軟 粘性有
- 23: 炭化柱根
- 24: 褐色 (10YR 4/4)
 黒色 (10YR 2/1) 25% 不均一混
 明黄褐色 (10YR 5/8) 10%(ローム) 不均一混
 埴壤土 軟 粘性有
- 25: にぶい黄褐色 (10YR 4/3)
 黒色 (10YR 2/1) 20% 不均一混
 明黄褐色 (10YR 6/8) 20%(ローム) 不均一混
 埴壤土 軟 粘性有
- 26: 褐色 (10YR 4/6)
 黒色 (10YR 2/1) 10% 均一混
 明黄褐色 (10YR 6/8) 10%(ローム) 均一混
 壤土 堅 粘性有
- 27: 黒色 (10YR 2/1)
 明黄褐色 (10YR 6/8) 40%(ローム) 不均一混
 壤土 堅 粘性有
- 28: にぶい黄褐色 (10YR 4/3)
 黒色 (10YR 2/1) 5% 不均一混
 明黄褐色 (10YR 6/8) 5%(ローム) 不均一混
 埴壤土 軟 粘性有
- 29: 黒褐色 (10YR 3/1)
 黒色 (10YR 2/1) 20% 不均一混
 明黄褐色 (10YR 6/8) 10%(ローム) 不均一混
 埴壤土 鬆 粘性有
- 30: 灰黄褐色 (10YR 4/2)
 明黄褐色 (10YR 6/8) 15%(ローム) 均一混
 黒色 (10YR 2/1) 5% 均一混
 壤土 すこぶる堅 粘性有
- 31: 暗褐色~にぶい黄褐色 (10YR 3/3~4/3)
 明黄褐色 (10YR 6/8) 20~25%(ローム) 不均一混
 黒色 (10YR 2/1) 20% 不均一混
 壤土 鬆~軟 粘性有
- 32: にぶい黄褐色 (10YR 5/3)
 明黄褐色 (10YR 6/8) 2~3%(ローム)
 埴壤土 軟、部分的に堅 粘性有
- 31: 暗褐色 (10YR 3/3)
 明黄褐色 (10YR 6/8) 7%(ローム)混
 埴壤土 軟~堅 粘性有

絶にともなって家を焼く前に意図的に散布した可能性も考えられる。肉眼観察ではフレイク35点中17点、チップ277点中17点において被熱による発泡、溶解が確認された。ほか、剥片石器では石鏃8点、石錐2点、スクレイパー11点、礫石器ではたたき石9点等が比較的多いが、これらも覆土上から下にかけて出土しているもので、フレイク・チップ同様、住居廃絶後に意図的に入れられた可能性がある。

礫・被熱礫は覆土中も含めると全体で409点、総重量17.239kgが出土した。うち被熱礫は247点(60.4%)、重量は11.385kg(66.0%)である。被熱礫のうち、炉石とみられるものは164点、7.544kgを数える。炉石を除いた礫・被熱礫は245点、9.695kgである。これらの礫については使用痕が確認されていないが、何らかの日常の活動に用いた礫ではあるだろう。

時期 住居の形状、炉の特徴、および床面から出土した小型土器から続縄文時代下田ノ沢Ⅱ式期である。放射性炭素年代測定(AMS測定)に試料3点を抽出したが、 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ 補正值で $2,020\pm 20$ (床上)、 $1,980\pm 20$ (石囲い炉)、 $2,030\pm 20$ (床面直上)と、いずれも予想した年代より100年ほど古い結果となった。暦年代範囲(2 σ)では概ね紀元前1世紀～紀元1世紀の範囲である。住居の張り出し部とした旧ⅢP-5採取試料(ON2-26)の年代測定値も $2,010\pm 20$ とほぼ同じ値である。しかし、測定結果にも記載されているように、1～3世紀頃の暦年較正については、北半球で広範に用いられる較正曲線Intcalと日本産樹木の測定値が系統的に異なるため、実際の年代値より古い年代値になることが考えられるという。

以下、本遺跡の下田ノ沢式期の遺構については同様に古い年代値が出たものが複数ある。

註 遺跡から北へ300mほどで海に出るが、海岸線沿いに砂岩・泥岩の互層を主体とする根室層の露頭した急崖が連なっている。炉石に用いられたような板状の泥岩は、崩落作用によって崖下のところどころで崖錐状の堆積をなし、温根沼地区の海岸に広く散乱、被覆している。(影浦)

ⅢH-6 (図Ⅳ-66～69、表Ⅲ-10・Ⅳ-2・3、図版19)

位置 g13・g14、h13・h14区 **平面形態** 三方に張り出しがある隅丸方形

規模 7.16×7.04/7.02×6.76/0.68m

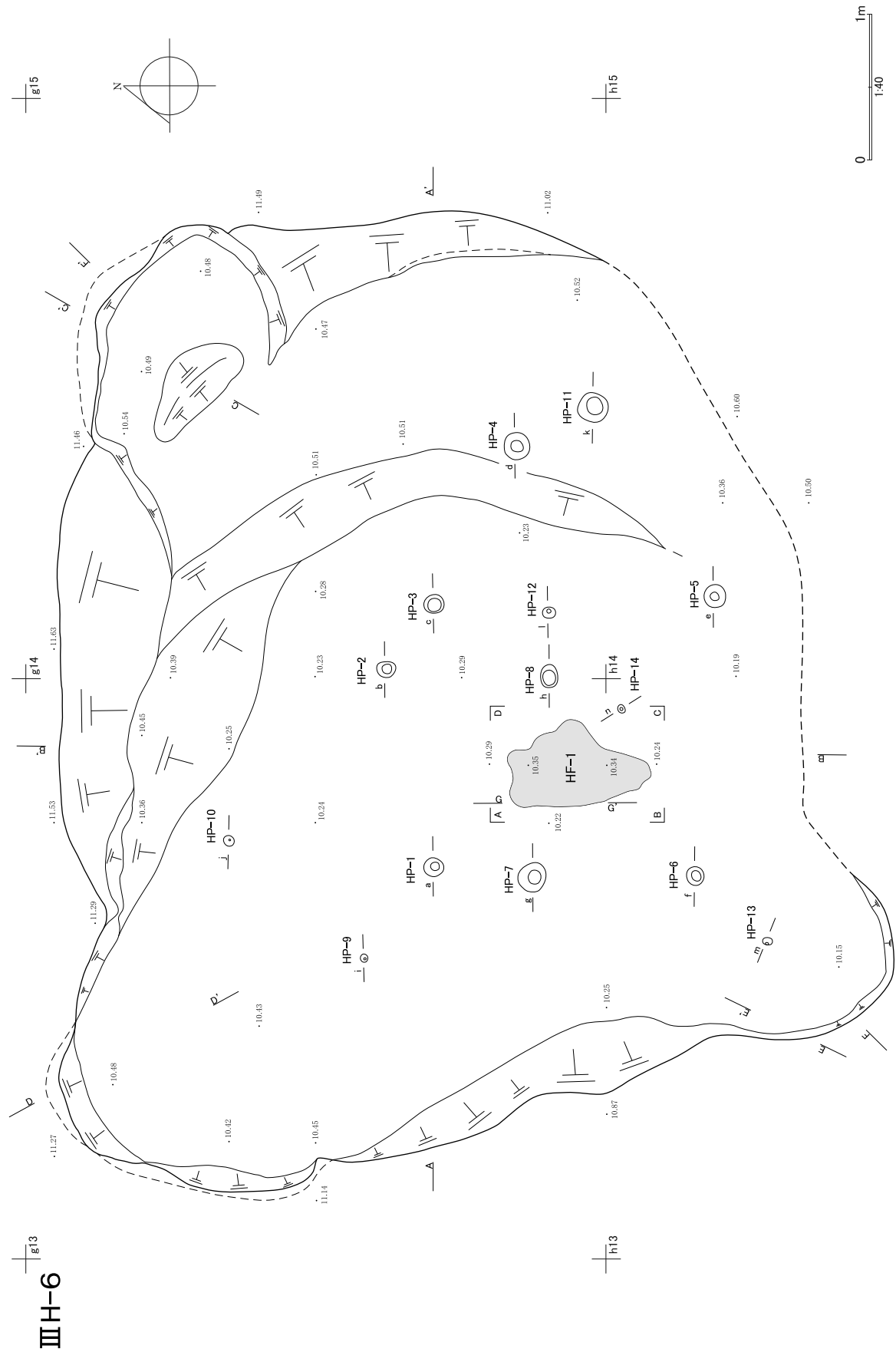
確認・調査 調査開始前から大きなくぼみがあり、住居跡の可能性が想定されていた。表土除去後、くぼみの中心を交差する形で、グリッドラインと並行するようにベルト設定し、トレンチ調査を行った。結果、南側は攪乱が入っていて判然としなかったが、東西と北の三方について壁の立ち上がりを確認できたため、土層観察ベルトを残して掘削した。東側の床が一段高く、テラス状になっている。

床面と壁が全体的に現れた段階で、北西壁と北東壁に大きな暗褐色土のくぼみが確認された。当初は重複した土坑と判断されたが、トレンチで土層確認したところ、いずれもⅢH-6の本体部の覆土と共通する内容であったため、これらの部分については本住居の張り出し部と判断した。南側は排根線の造成にともなう帯状の攪乱が入り込んでいたため床、壁ともに判然としないところが多かったが、南西部において床面の堅さが続く広がりがあり、トレンチを入れたところ、かろうじて覆土の続きが確認できたため、その範囲を一応張り出し部とした。

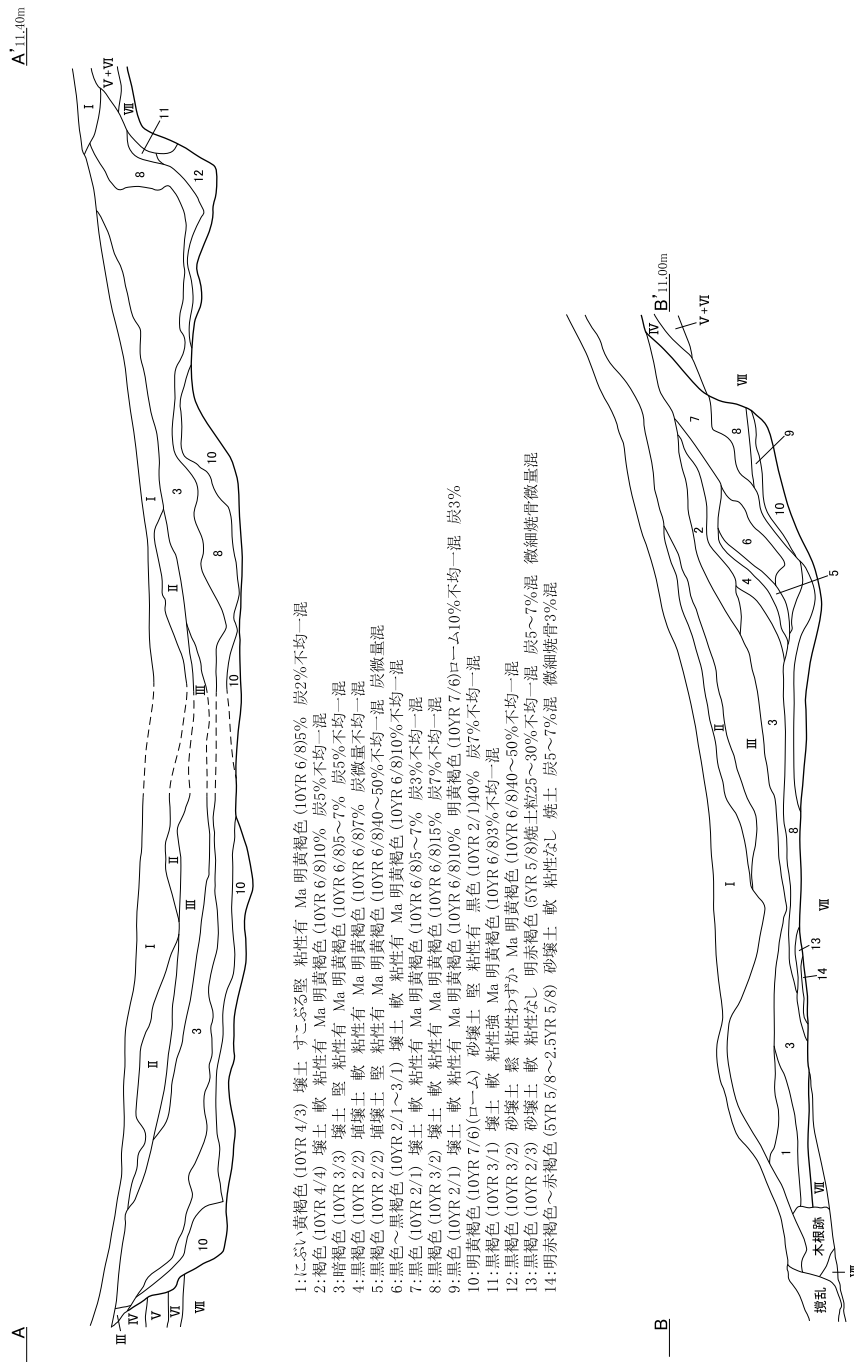
覆土 14層に分けた。13と14は炉の焼土層である。11・12は壁際の崩落土、8～10は屋根を葺いていた土の可能性が考えられる。

張り出し部の覆土は本体部分とは別にそれぞれ覆土1から数字を振って分層した。北東の張り出し部の覆土1は本体の覆土8に相当する。北西の張り出し部の覆土2は本体の覆土4に相当するものであろう。

床面・壁 床は東側が一段高くテラス状を呈する。テラス部分は幅があるところで1.2m前後を測る。



図IV-66 ⅢH-6平面

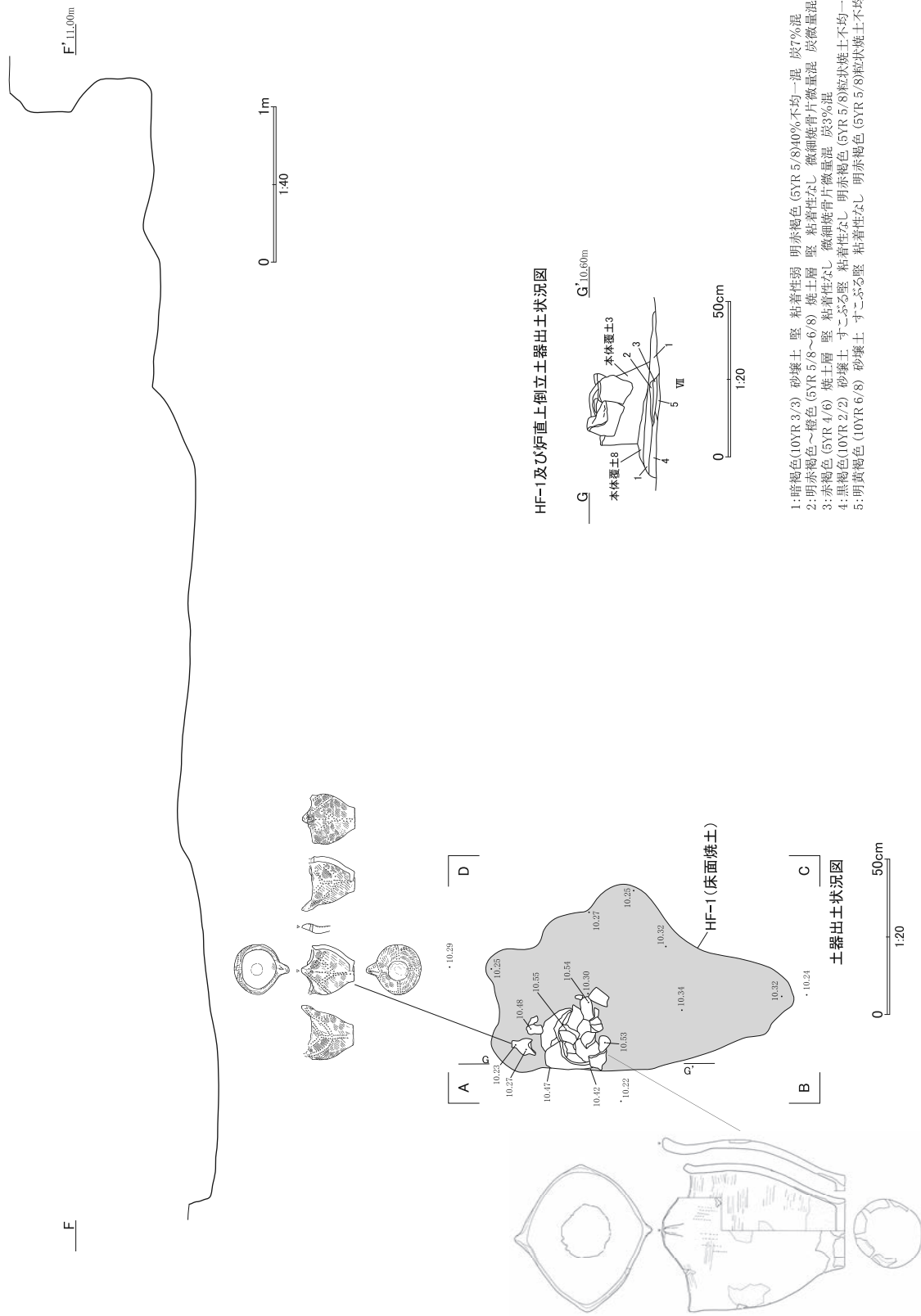


ⅢH-67 ⅢH-6断面(1)

III H-6



図IV-68 III H-6 断面 (2)



図IV-69 ⅢH-6 土器出土状況

- 1:暗褐色(10YR 3/3) 砂壤土 堅 粘着性弱 明赤褐色(5YR 5/8)40%不均一混 炭7%混
 2:明赤褐色~橙色(5YR 5/8~6/8) 焼土層 堅 粘着性なし 微細焼骨片微量混 炭微量混
 3:赤褐色(5YR 4/6) 焼土層 堅 粘着性なし 微細焼骨片微量混 炭3%混
 4:黒褐色(10YR 2/2) 砂壤土 すこぶる堅 粘着性なし 明赤褐色(5YR 5/8)粒状焼土不均一3%混
 5:明黄褐色(10YR 6/8) 砂壤土 すこぶる堅 粘着性なし 明赤褐色(5YR 5/8)粒状焼土不均一3%混

南西の張り出し部が最も低い。この張り出し部の床は堅くしまっており、出入り口施設の可能性が考えられる。

北側の壁は緩やかに立ち上がった後、直立気味。北西部と北東部の張り出し部は、一部、オーバーハングしている。北東部の張り出しに関しては、床面の一部を土手状に掘り残した高まりがある。

付属遺構 中央よりやや南寄りの床面において焼土の広がり（HF-1）を検出した。住居の炉と考えられる。石囲いの痕跡はない。

柱穴は全部で14基を確認した。HP-1・3～6・8は主柱穴とみられる。HP-9・10・12～14の5基は杭状。

遺物出土状況 炉（HF-1）直上において下半部を欠いた無文土器が倒立状態で出土した。また炉の西側に近接した床面からは小型土器がほぼ完形で出土している。土器はいずれとも下田ノ沢Ⅱ式。出土土器片も全212点中198点が下田ノ沢式であった。

覆土中層として取り上げた遺物に、石器類の多いことが注意される（石鏃3点、石槍またはナイフ2点、石錐1点、両面調整石器1点、スクレイパー4点、楔形石器1点、フレイク・チップ41点、石核1点、石斧3点、たたき石8点）。全体で礫が122点、被熱礫が103点出土している。付属遺構出土の21点を除くと、覆土下層55点、中層46点、上部53点と、各50点前後である。

時期 検出層位と住居構造の諸特徴、床面において出土した土器から続縄文時代下田ノ沢Ⅱ式期と考えられる。放射性炭素年代測定（AMS測定）に炉から採取した試料1点を抽出したが、¹⁴C年代は2,310±20yrBP（ $\delta^{13}\text{C}$ 補正值）、暦年代範囲（ 2σ ）では406calBC-361calBCという結果が出ており予想年代より4世紀ほども古い結果となった。（影浦）

ⅢH-10（図IV-70～72、表Ⅲ-10・IV-3、図版20）

位置 e14・e15、f14・f15区 **平面形態** 不整円形

規模 (6.94)×5.70／(6.10)×5.10／0.34m

確認・調査 f14・f15区のⅢ層を均一に深さ5cm単位で2度掘り下げたところ、fラインの土層面において、f15杭を中心に左右の土層が傾斜しており、皿状に沈み込んでいることが確認できた。f14・f15区全体を清掃したところ、半円状の平面形が現れたため、15ライン及び直交するfラインにベルト設定をし、調査を進めた。

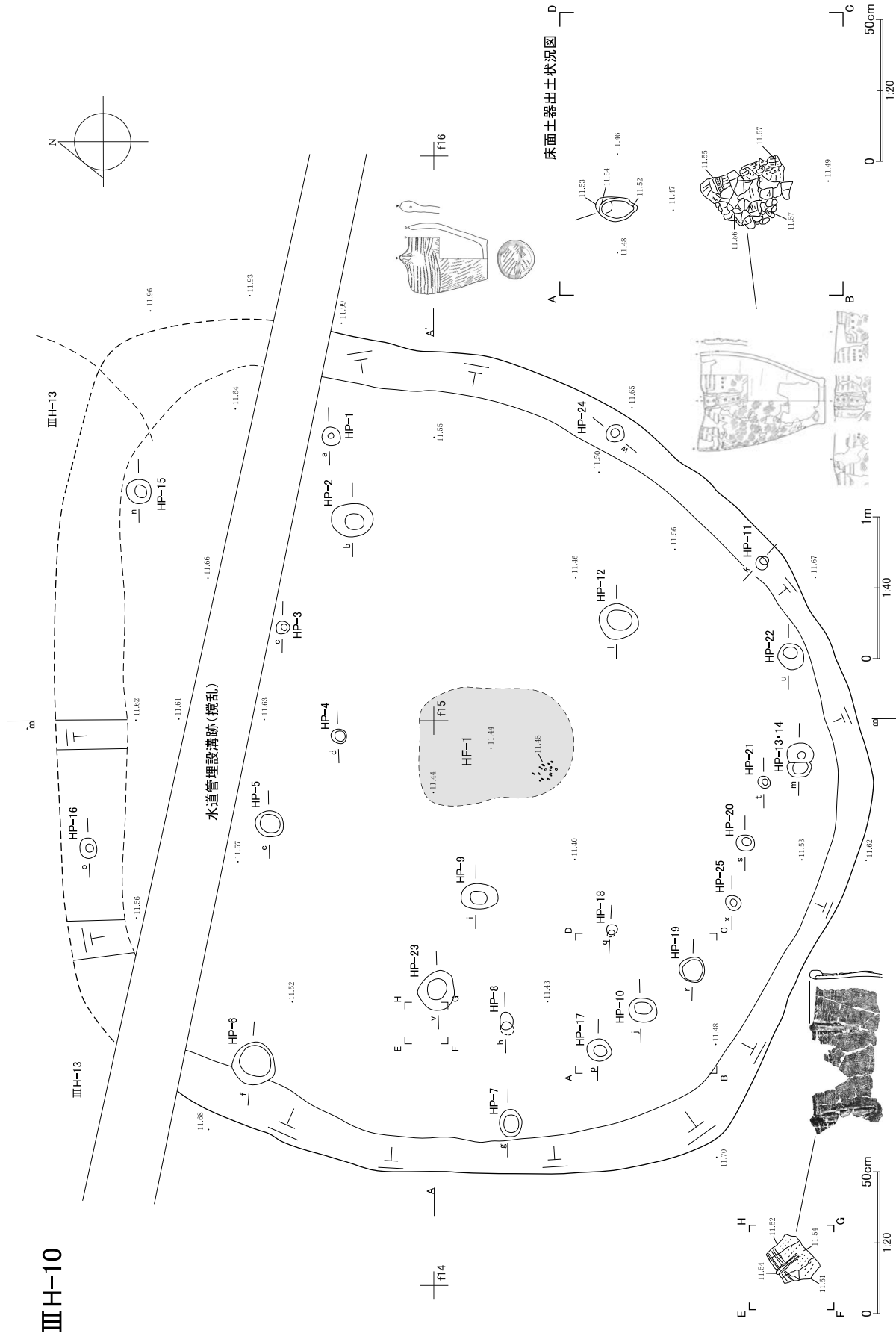
北側のe14・e15区を掘り下げたが、平面形が判然としなかったため、住居内を斜めに貫いている水道管理設にとまなう溝状攪乱を掘りぬいて、範囲確認を行った。しかし、攪乱部の南壁では堅穴のくぼみが現れたものの、北壁は不明瞭であった。このとき、本住居跡に近接する北側のグリッドを広範囲に掘り下げており、判然としないながら別の住居跡（ⅢH-13）が重複している可能性が考えられていたため、北側に関しては、ⅢH-13の土層堆積を踏まえて推定線で結んだ。

覆土 8層に分けた。8は炉の焼土層である。1～7は流れ込み状の堆積であるが、2～7に関してはⅣ層の摩周テフラが不均一に混ざっているので、あるいは人為的に埋められたものかもしれない。覆土1に関しては自然の流入土とみられる。

床面・壁 床は浅い皿状を呈している。壁の立ち上がりは緩やかである。床の大部分がⅣ層（摩周テフラ）である。

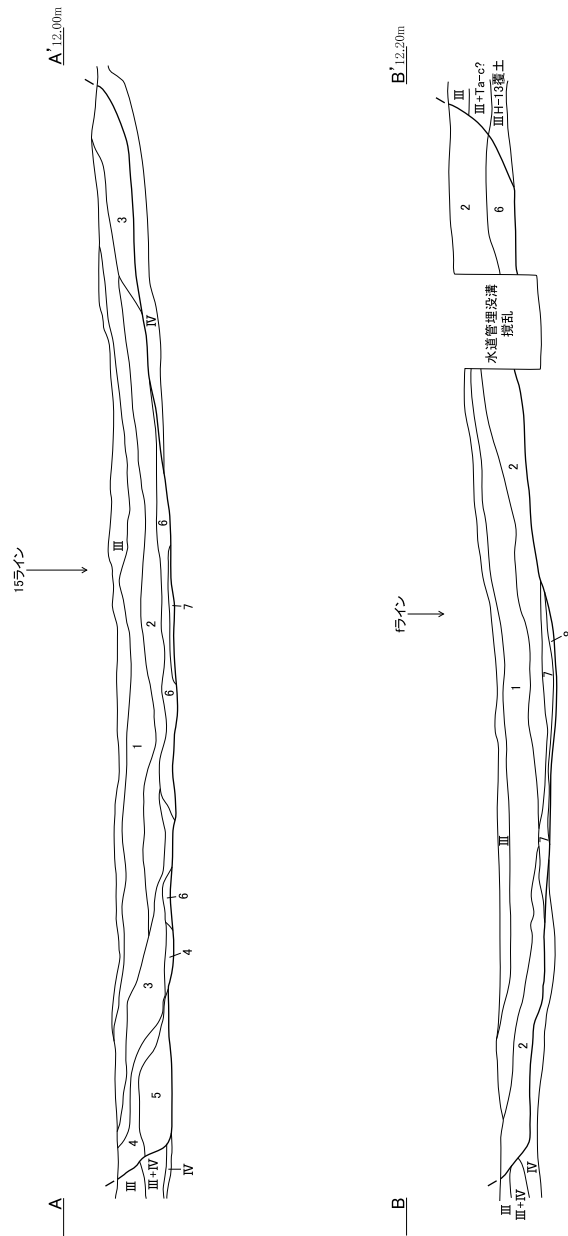
付属遺構 床面中央部において炉とみられる焼土（HF-1）を検出した。石囲いの痕跡はない。

柱穴は全部で25基確認した。HP-1・9・10・12・14・17・22・23が主柱穴とみられる。うち9・12・23は直線的に並ぶ。HP-11・18・24は杭状。HP-7・17・10・19・25・20・21・13・14・22は壁際に密に並んでいる。

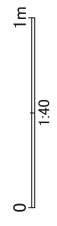


図IV-70 III H-10平面

ⅢH-10



- 1: 黒色 (10YR 2/1) 硬塊土 軟 粘性有 Ma 明褐色 (7.5YR 5/8) 3%不均一混 炭5%混
- 2: 黒色 (10YR 2/1) 硬塊土 軟 粘性有 Ma 明褐色 (7.5YR 5/8) 20%不均一混 炭5%混
- 3: 暗褐色 (10YR 3/3) 硬塊土 堅 粘性有 Ma 明褐色 (10YR 6/6) 15%不均一混 炭3%混
- 4: 暗褐色 (10YR 3/3) 硬塊土 堅 粘性有 Ma 明褐色 (10YR 6/6) 50%不均一混 炭1%混
- 5: 暗褐色 (10YR 3/3) 硬塊土 堅 粘性有 Ma 明褐色 (10YR 6/6) 30%不均一混 炭3%混
- 6: 暗褐色 (10YR 3/3) 硬塊土 堅 粘性有 Ma 明褐色 (10YR 6/6) 3%不均一混 炭3%混
- 7: 褐色 (7.5YR 4/6) 砂土 堅 粘性なし Ma 暗褐色 (10YR 3/3) 40%不均一混 炭5%混
- 8: 暗赤褐色 (5YR 3/6) 砂土 堅 粘性なし Ma 暗褐色 (10YR 3/3) 20%不均一混 炭10~15%混 HF-1



図Ⅳ-71 ⅢH-10断面

ⅢH-10



1: 黒褐色 (10YR 2/2) 埴壤土 軟 粘着性有 Ma 明褐色 (10YR 6/6)15%不均一混
 2: 明黄褐色 (10YR 6/6) 砂壤土 軟 粘着性有 黒色 (10YR 2/1)30%不均一混
 3: 1土層に同様に 埴壤土 軟 粘着性有 Ma 明褐色 (10YR 6/6)3%不均一混
 4: 黒色 (10YR 2/1) 砂壤土 軟 粘着性有 Ma 明褐色 (10YR 6/6)10%不均一混
 5: 黒色 (10YR 2/1) 埴壤土 軟 粘着性有 Ma 明褐色 (10YR 6/6)10%不均一混
 6: 黒褐色 (10YR 3/1) 埴土 軟 粘着性有 Ma 明褐色 (10YR 6/6)30~40%不均一混
 7: 黒色 (10YR 2/1) 埴壤土 鬆~軟 粘着性有 Ma 明褐色 (10YR 6/6)25~30%不均一混
 8: 黒褐色 (10YR 3/1) 埴土 鬆~軟 粘着性有 Ma 明褐色 (10YR 6/6)微量混
 9: 黒褐色 (10YR 3/2) 砂壤土 堅 粘着性有 Ma 明褐色 (10YR 6/6)10~50%均一混
 10: 黒色 (10YR 2/1) 埴壤土 鬆~軟 粘着性有 Ma 明褐色 (10YR 6/6)7%明黄褐色 (10YR 7/6)(M)10~15%不均一混
 11: 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 埴壤土 堅 粘着性有 Ma 明褐色 (10YR 6/6)50%不均一混
 12: 黒色 (10YR 2/1) 埴壤土 堅 粘着性有 Ma 明褐色 (10YR 6/6)5~7%不均一混
 13: 黒色 (10YR 2/1) 埴土 軟 粘着性有 Ma 明褐色 (10YR 6/6)3%不均一混
 14: 黒褐色 (10YR 3/1) 埴壤土 鬆~軟 粘着性有 Ma 明褐色 (10YR 6/6)5~7%不均一混 明黄褐色 (10YR 7/6)(M)5~7%不均一混
 15: 黒褐色 (10YR 2/2) 埴壤土 軟 粘着性有 Ma 明褐色 (10YR 6/6)3%不均一混

図Ⅳ-72 ⅢH-10HP断面

遺物出土状況 床面において下田ノ沢式の小型土器が2個体出土した。下田ノ沢Ⅰ式とⅡ式の過渡的な資料とみられる。土器片の点数も全266点中254点と下田ノ沢式が多い。

時期 床面の出土遺物から統縄文時代下田ノ沢式期と考えられる。放射性炭素年代測定(AMS)に炉から採取した試料1点を抽出したが、 ^{14}C 年代は $2,160 \pm 20\text{yrBP}$ ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)、暦年代範囲(2 σ)では355calBC-289calBC、233calBC-111calBCと、予想年代より3世紀ほど古い結果となった。

(影浦)

ⅢH-11 (図Ⅳ-73・74、表Ⅲ-10・Ⅳ-3、図版21)

位置 g15・g16、h15・h16区 **平面形態** 不整楕円形

規模 (4.42)×3.04/(4.24)×2.74/0.63m

確認・調査 g15区のⅤ層・Ⅵ層を掘り下げ中、南東角に輪郭が現れた。グリッド単位の掘削により生じたg16区との段差で土層確認したところ、壁の立ち上がりが現れたため、住居跡を想定してg16区、h15区、h16区を清掃。南北に長くややいびつな平面形を検出した。

平面形の東側はスムーズなラインではなく、ガタガタした折れ線状である。また、hラインの南半分については既にⅦ層まで掘削が済んでいたため、南端部分の壁は欠失している。全体的に西側半分の残りが悪かったことから、住居範囲の中心より少し東側にずらして、グリッドラインに対して斜方向にセクションラインを設定、西側を半截する形で掘削を進めた。

なお、西半分を掘削中、覆土上部で焼土を確認した。この焼土については、住居跡覆土上部のくぼみを利用したもので、住居との直接的な関連性はないと考えられたため、ⅢF-16とした。調査済の土坑ⅢP-11が南東部に近接するが、直前で壁が回り込んでいるため、重複はしていない。

覆土 本体部は14層に分けた。14は貼り床の可能性が考えられる。13は掘り上げ土。10~12は流入土とみられる。1~9はレンズ状の堆積の重なり合いが多く、Ⅳ層(摩周パミス)の不均一な混在が多い。人為的に埋められた可能性が考えられる。

付属土坑(HP-9)は8層に分層した。2~8は人為的な埋め戻しと判断される。1は炉の被熱層。

床面・壁 壁は直立気味に立ち上がる。北側は一部テラス状をなす。床面はⅦ層上部であり、標高11.3m前後で比較的平坦。南側が一段下がっている。南側の壁は残っていなかったが、一段下がった部分の床面(Ⅶ層上面)が堅いことから、その広がり住居の範囲として推定線で結んだ。床面が堅くしまっていることや、南側の無名沢へと続く傾斜面に近接した台地の先端部であることから、南西部が出入り口であったと考えられる。

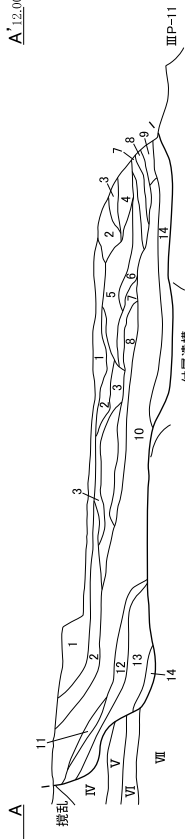
付属遺構 床面中央で炉とみられる焼土(HF-1)を確認した。焼土を中心に、付属土坑とみられる黒褐色の丸いひろがりも現れたため、東側を半截してみたところ、深さ20~30cmほどの播鉢状の土坑であった(HP-9)。理由は定かでないが、一度播鉢状の土坑を掘った後、これを埋め、その上に炉を設けた可能性が調査段階では考えられた。しかし、時期の項で後述しているように、採取した炭化物の年代測定値は擦文文化期後期のものであったため、焼土に関しては後代の可能性もある。

柱穴は全部で8基確認した。径、深さとも小規模なものが多い。HP-1・5・6は杭状で1・5は先端が尖る。

遺物出土状況 遺物は大半が覆土中から出土したもので、土器片はすべて下田ノ沢Ⅱ式である。しかし、この住居に伴ったと判断できる遺物はない。石器等の出土は全体的に少ないが、スクレイパーが7点出土していることが目につく(覆土・覆土1・2・10出土)。南側の覆土中層において若干の炭のまとまりがあった。樹種同定に試料1点を出したところ、結果はニレ材であった。

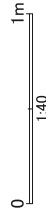
ⅢH-11・ⅢF-16

A' 12.00m

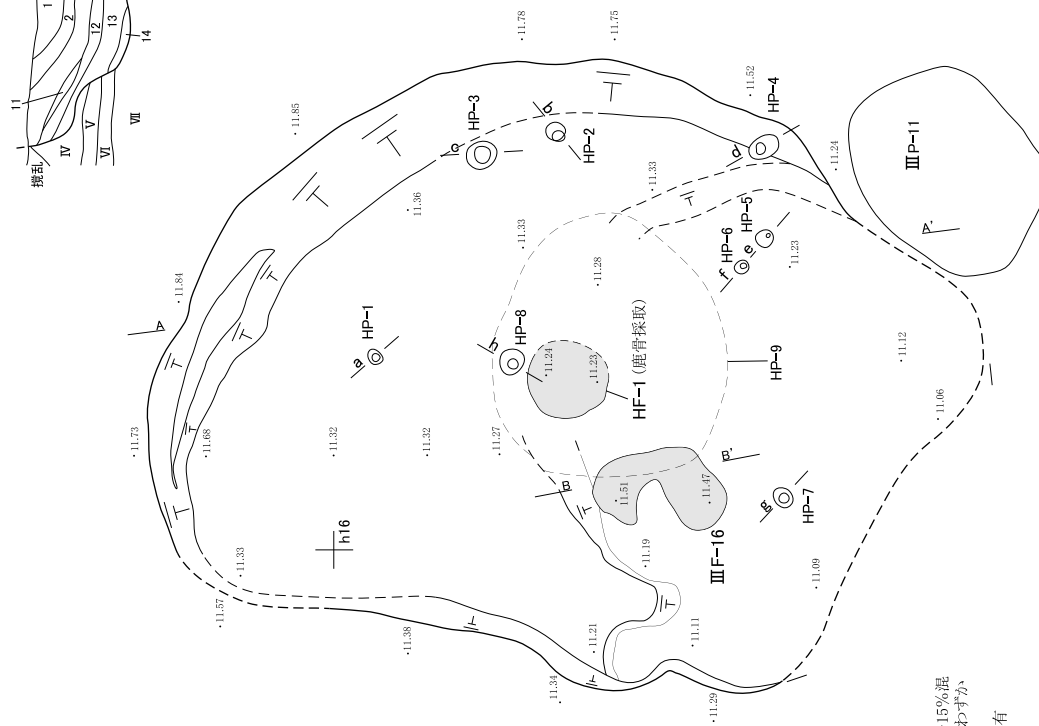


- 1: 暗褐色～暗オリーブ褐色 (10YR 3/3～2.5 Y 3/3) 砂壤土 すこぶる堅 粘性弱
Ma 淡黄色 (2.5Y 8/4) 粒度粗め 50%均一混 炭3%不均一混
- 2: 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 砂壤土 鬆 粘性わずか
Ma 淡黄色 (2.5Y 8/4) 粒度粗め 50～80%不均一混 炭3～5%混
- 3: 黒褐色 (10YR 2/2) 砂壤土 鬆～堅 粘性わずか
Ma 淡黄色 (2.5Y 8/4) 粒度細かい、15%不均一混 炭3～5%混
- 4: 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 砂壤土 すこぶる堅 粘性わずか
ブロック状Ma 明黄色 (2.5Y 6/6) 粒径2～4cm 40%不均一混 炭5%混
- 5: 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 砂壤土 鬆～すこぶる堅 粘性わずか
Ma 淡黄色 (2.5Y 8/4) 粒度細かい、70%均質混 炭細かい2～3%混
- 6: 黒褐色 (10YR 2/2) 壤土 (部分的に軟) 粘性有
Ma 淡黄色 (2.5Y 8/4) 粒度細かい、7～10%均質混 炭細かい2～3%混
- 7: 黒褐色 (10YR 3/1～2.5 Y 3/1) 砂壤土 堅(部分的に軟) 不均一 粘性弱
Ma 淡黄色 (2.5Y 8/4) 粒度粗い、50～70%不均一混 炭5%混
- 8: 黒褐色 (10YR 3/1～2.5 Y 3/1) 砂壤土 堅 粘性有
Ma 淡黄色 (2.5Y 8/4) 粒度細かい、15～20%不均一混 炭細かい2～3%混
- 9: 黒褐色 (10YR 3/1～2.5 Y 3/1) 砂壤土 堅 粘性有
Ma 淡黄色 (2.5Y 8/4) 粒度細かい、40%不均一混 炭細かい2%混
- 10: 黒褐色 (10YR 3/1～2.5 Y 3/1) 壤土 やや軟 粘性有
Ma 明黄色 (2.5Y 6/6) Ⅷ層 ブロック状粒径1～8cm5%不均一混 炭5%混
- 11: 黒褐色 (10YR 3/1～2.5 Y 3/1) 砂壤土 堅 粘性有
Ma 黄褐色 (10YR 7/6) 粒度細かい、40%不均一混 炭不均一3%混
- 12: 黒褐色 (10YR 3/1～2.5 Y 3/1) 砂壤土 堅 粘性有
Ma 淡黄色 (2.5Y 8/4) 粒度細かい、10%不均一混 炭細かい2～3%混
- 13: 黒褐色 (10YR 3/1～2.5 Y 3/1) 砂壤土 堅 粘性有
Ma 黄褐色 (10YR 7/6) 粒度細かい、70～80%均一混 炭細かい2～3%混
- 14: 黒色 (10YR 2/1) 堆積土 軟 粘性有
Ma 黄褐色 (10YR 7/6) 粒度非常に細かい、10%均一混 炭7%混

1～9は掘り上げ土 ⅢH-1の掘り上げ土とみられる 人為堆積
10～12は自然堆積 流入土か
13は崩落土?



A



h16

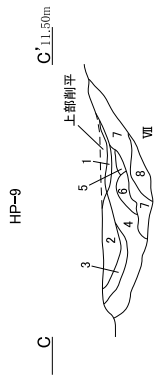
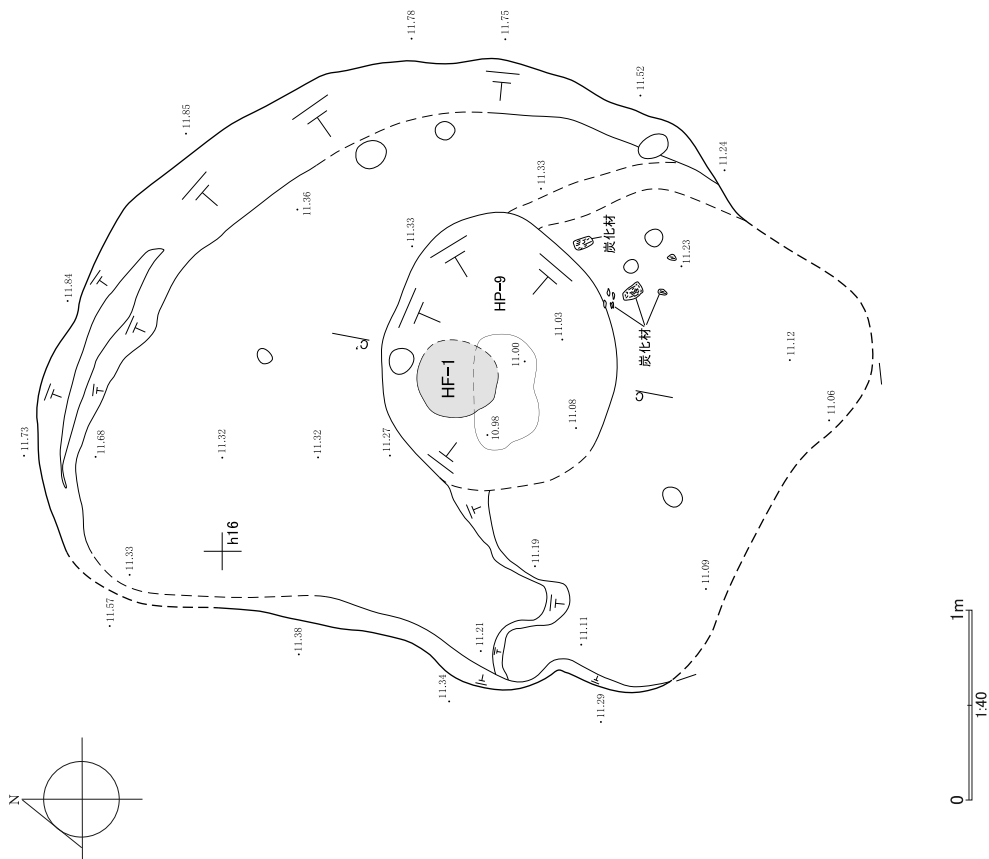
ⅢF-16



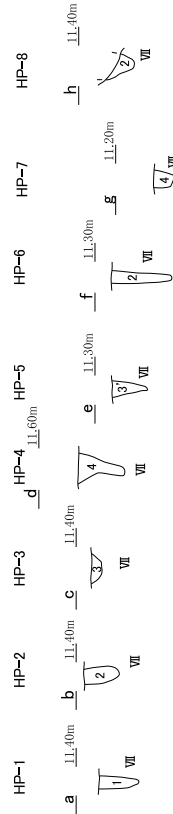
- 1: 黒褐色 (10YR 3/1) 砂壤土 堅 粘性弱
Ma 浅黄褐色 (7.5YR 8/6) 壤土 50%不均一混 炭10～15%混
- 2: 浅黄褐色～黄褐色 (7.5YR 8/6～7.5YR 7/8) 堅 粘性わずか
里色 (10YR 2/1) 土20%不均一混 炭10%混
本体覆土15: 黒褐色 (10YR 3/2) 壤土 すこぶる堅 粘性有
Ma 淡黄色 (2.5Y 8/4) 不均一25%混 炭10%混

図Ⅳ-73 ⅢH-11・ⅢF-16平面

ⅢH-11



- 1: 橙色 (5YR 7/8) 壤土 堅 粘性なし 微細焼骨片3% 炭5% HF-1
- 2: 黒褐色 (2.5Y 3/1) 砂礫土 堅 粘性有 Ma細か \times 2 \sim 3%不均一混
- 3: 黒褐色 (2.5Y 3/1) 砂礫土 堅 粘性有 Ma細か \times 15 \sim 20%不均一混
- 4: 黒褐色 (10YR 2/2) 壤土 堅 粘性有 Ma細か \times 3%不均一混
- 5: 明黄褐色 (10YR 6/8) VII主体 壤土 軟 粘性有 黒褐色 (10YR 3/1) 10%不均一混
- 6: 黒褐色 (10YR 2/2) 壤土 軟 粘性有 Ma 明黄褐色 (10YR 6/8) 40 \sim 50%不均一混
- 7: 暗褐色 (10YR 3/3) 壤土 軟 粘性有 Ma 明黄褐色 (10YR 6/8) 10 \sim 15%不均一混
- 8: 明黄褐色 (10YR 7/6) VII層 20%粒状不均一混
- Ma: 黒色 (10YR 2/1) 埴壤土 軟 粘性強 Ma 明黄褐色 (10YR 6/8) 2 \sim 3%不均一混



- 1: 黒褐色 (10YR 3/1) 埴壤土 鬆 \sim 軟 粘性有 Ma 明黄褐色 (10YR 6/8) VII層 粒状50 \sim 60%不均一混
- 2: 黒色 \sim 黒褐色 (10YR 2/1 \sim 10YR 3/1) 埴壤土 鬆 \sim 軟 粘性有 Ma 明黄褐色 (10YR 6/8) VII層 粒状30 \sim 40%不均一混
- 3: 黒褐色 (10YR 3/1) 埴壤土 鬆 \sim 軟 粘性有 Ma 明黄褐色 (10YR 6/8) VII層 粒状10%不均一混 炭1 \sim 2%混
- 3': 黒褐色 (10YR 3/1) 埴壤土 鬆 \sim 軟 粘性有 Ma 明黄褐色 (10YR 6/8) VII層 粒状25%混
- 4: 黒褐色 (10YR 3/1) 埴壤土 寸 \sim 寸 \sim 之堅 粘性有 Ma 明黄褐色 (10YR 6/8) VII層 粒状15%不均一混 炭3%混

図IV-74 ⅢH-11炭化材検出状況・断面

時期 検出層位と住居構造の諸特徴、覆土中の出土土器片から、下田ノ沢Ⅱ式の時期と考えられる。ただ、放射性炭素年代測定（AMS測定）に炉とみられる焼土中から採取した試料1点を抽出したところ、¹⁴C年代は850±10（ $\delta^{13}\text{C}$ 補正值）、暦年代範囲（ 2σ ）では1156calAD-1247calADと12世紀後半から13世紀前半を示して予想年代より1,000年ほど新しい結果となった。この年代は、本遺跡における擦文文化期（後期）の年代とほぼ合致する。擦文文化期の人が凹みとして残っていた住居跡を、掘り出して再使用したことも考えられる。その場合、段差や中央土坑は掘り返さず平坦な床面とし、付属土坑H P-9の覆土上で火を焚いたとするならば、粗い掘り方と中央土坑の覆土の上に炉を設けていることと炭素年代値についての説明は成り立つ。（影浦）

Ⅲ F-16（図Ⅳ-73、表Ⅲ-11・Ⅳ-5、図版21-2）

位置 h16区 **平面形態** 不定形

規模 0.66×0.46/0.07m

確認・調査 Ⅲ H-11の調査中に覆土10の上面で確認した。

被熱層 2層に分けたが、ごくうすい堆積である。炭が1～15%不均一に混じる。焼成骨片は確認していない。

時期 もしⅢ H-11の覆土が、擦文文化期に一度掘り返されて再使用されたのであれば、そのちに堆積した覆土上の焼土であるので、擦文文化期後期以降の可能性が考えられる。（影浦）

Ⅲ H-12（図Ⅳ-75～77、表Ⅲ-10・Ⅳ-3・4、図版22）

位置（竪穴）d18・19、e18・19、f18区 （掘り上げ土）d18・19、e17～19区

平面形態（竪穴）円形？ （掘り上げ土）楕円形？

規模（竪穴）(6.22)×(4.60)/(5.34)×(4.34)/(0.72)m

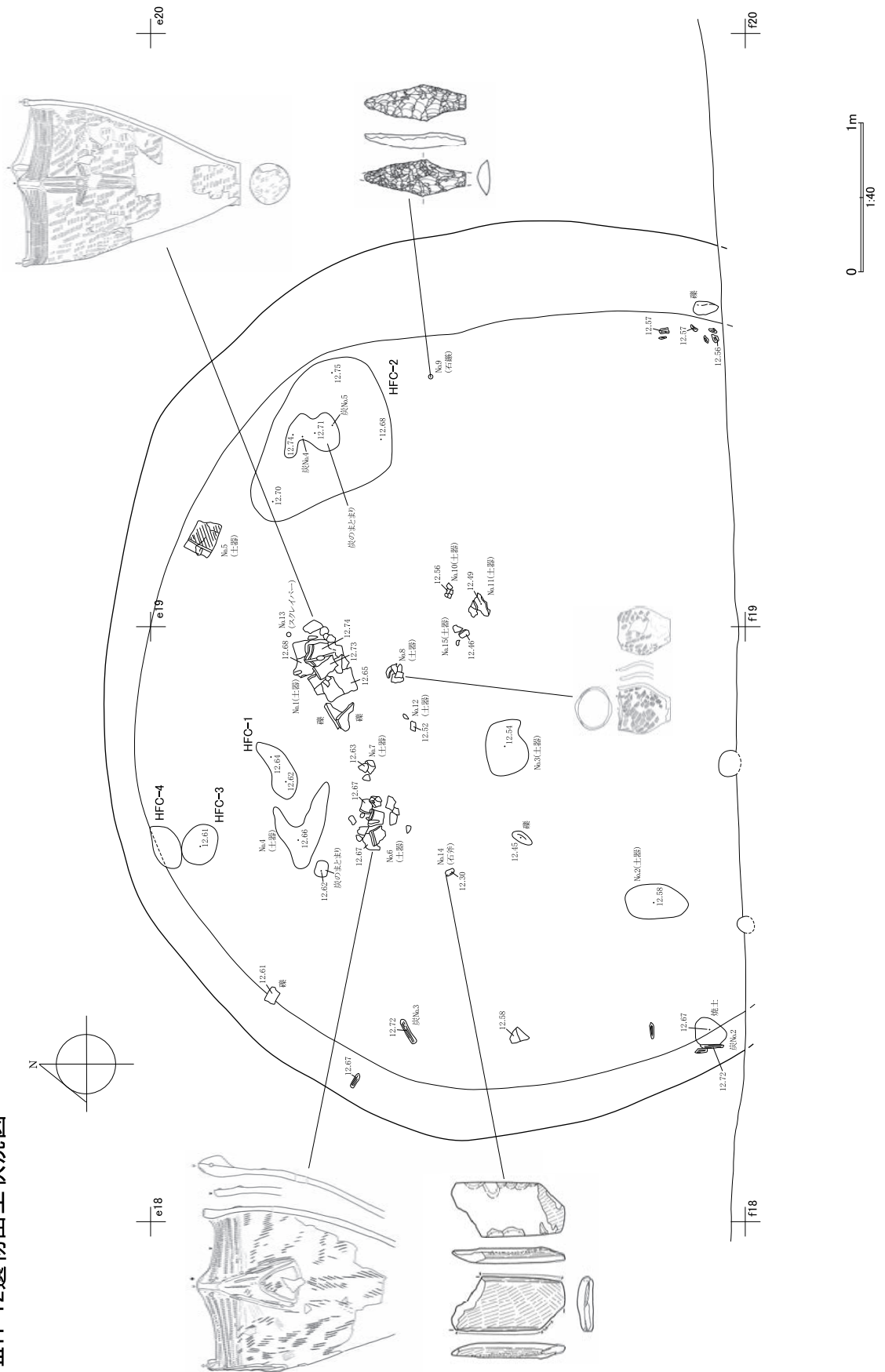
（掘り上げ土）(8.74)×(5.29)/(0.32)m

確認・調査 e18区でⅡ層を掘り下げたところ、Ⅲ層上面が浅くくぼむ形状となった。周辺の調査区でⅢ層上面検出作業及び精査を行い、黒褐色土の浅い円形のくぼみを確認した。くぼみの中心を交差するように十字のトレンチを設定、掘削した結果、土器のまとまりと床面を確認し、竪穴住居跡と判断した。fラインより南側はすでにⅦ層上面まで掘り下がっていたため、南側約1/3の状況は不明である。

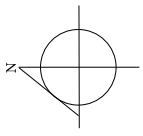
次にトレンチ沿いにベルトを残し、覆土を掘り下げた。覆土出土の遺物は適宜取り上げ、まとまって出土した土器や床面出土の土器・石器は、出土状況の図化・撮影等を行ってから取り上げた。床面まで掘り下げた後、覆土断面の撮影及び図化を行い、ベルトを掘り下げた。壁の立ち上がりが不明瞭なため、必要に応じてサブトレンチを設定し土層を確認したが、北～東側の壁はⅢ層の上位に堆積する人為的な堆積土を掘り込んで構築されていることが判明した。また、床面西側で黒色土のひろがり調査したところ、西側は床面が一段低くなる段構造であることを確認した。

掘り上げ土 竪穴周辺の精査やトレンチで壁の立ち上がりの土層観察の結果、竪穴周辺に掘り上げ土を確認した。北から東側にかけて堆積が厚く、最大32cmを測る。西側は調査前に掘り下げてしまったため、分布範囲が不明である。色調は暗褐色～黒褐色で、黒色土とⅣ層が混ざった土層である。北から東側は掘り上げ土を掘り込んで壁を構築していることを確認した。このことから、竪穴構築時に出た土を主に北から東側に堆積・整地（13～18）し、整地部分を一部掘り込んで壁及び床面を作った可能性が考えられ、掘り上げ土というよりは整地を目的とした盛土の可能性もある。また、北側掘り上げ土下のⅢ層中にⅢ P-27とⅢ S-11が位置する。

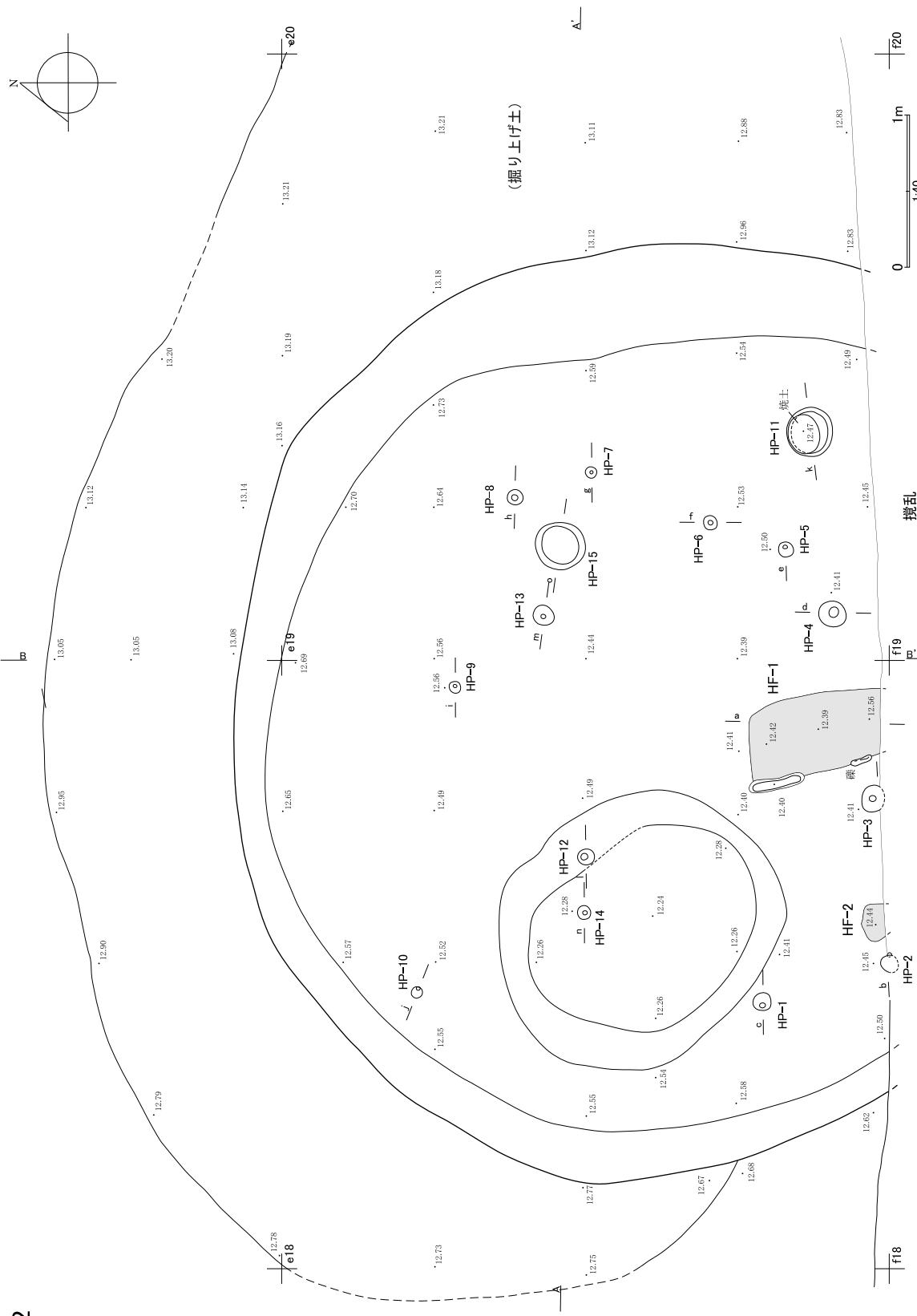
ⅢH-12遺物出土状況図



図IV-75 ⅢH-12遺物出土状況

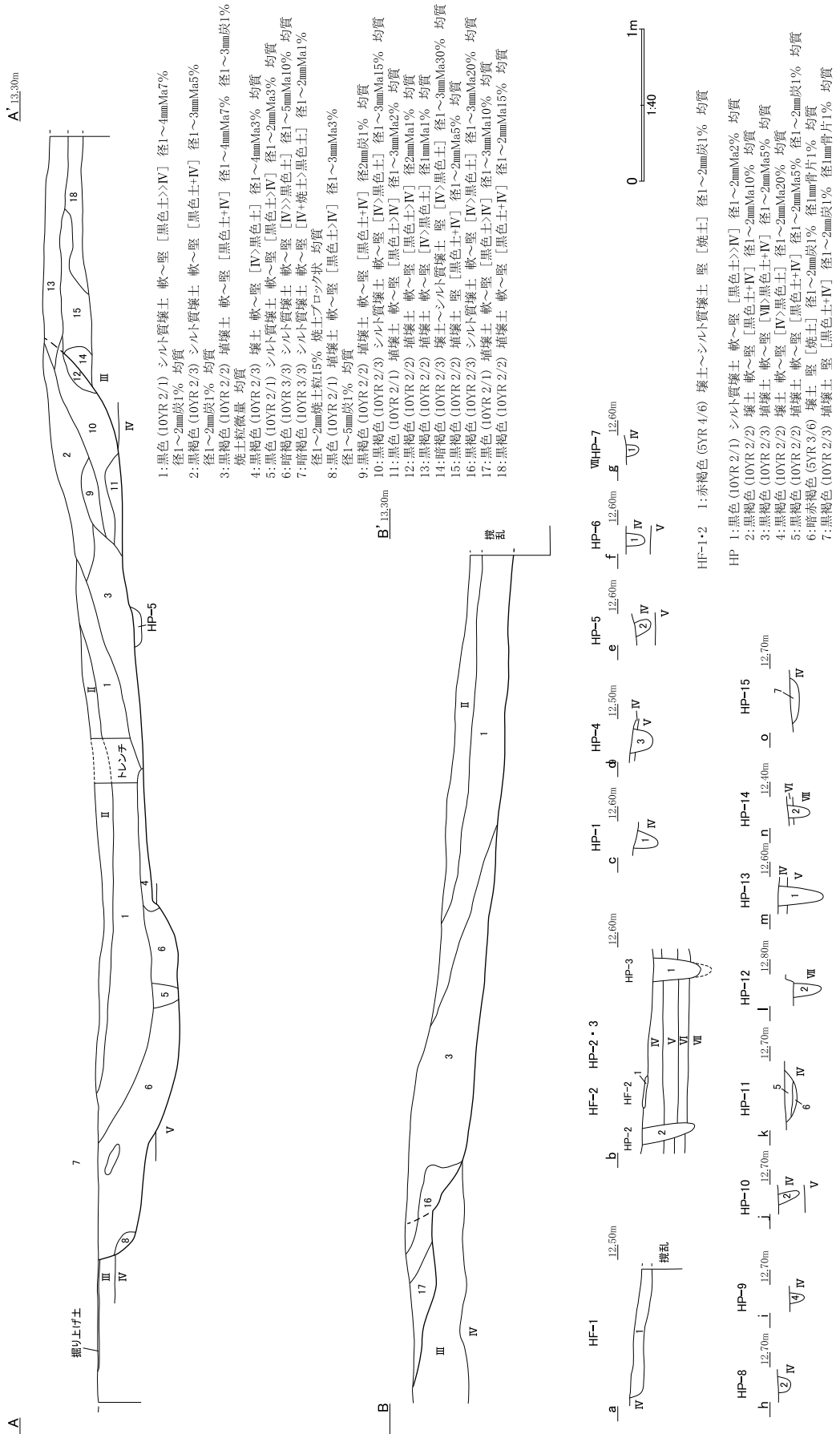


ⅢH-12



図Ⅳ-76 ⅢH-12平面

ⅢH-12



図Ⅳ-77 ⅢH-12断面

覆土 12層（1～12）に分けた。まず、壁際に黒色～黒褐色の土層（2・3・5・6・9～12・16）が広く堆積し、その後床面中央付近に、主に黒色土層（1・4）が厚く堆積する。3・7は焼土粒を、1～3・8・9は炭を含む土層である。

床面・壁 床面はⅣ～Ⅴ層中に構築され、北東側が高く、南西側へ緩やかに傾斜している。また、西側には長さ約2m、幅約1.7mの範囲が、約20cm低くなる段構造がみられる。壁の立ち上がりは全体的に緩やかであるが、西側は比較的急角度である。

付属遺構 焼土2か所（HF-1・2）、ピット15か所（HP-1～15）を確認した。HF-1は床面の中央付近より西側で検出され、南側は削平されている。焼土の厚さは9cmである。平面形は隅丸方形と考えられ西側では一部板状礫が出土している。配置及び形状から炉跡と考えられる。また、北西隅には礫の抜き取り痕と考えられる細長い痕跡を確認したため、使用時は炉の一部もしくは全体を石で囲っていた可能性がある。HF-2はHF-1の西側約1mの場所にあり、付近にHP-2が位置する。南側は削平され、厚さは2cmである。ピットの平面形は円ないし楕円で、規模から長径約30cm（HP-11・15）、約20cm（HP-3・4）、10cm前後（HP-1・2・5～10・12～14）に分かれる。HP-11・15は深さが6～8cmと浅く、HP-11は底面で焼土が確認された。長径20cm以下のピットは、配置の規則性は乏しいが多くは柱穴と考えられる。深さが8～34cmと幅があり、断面形状は下端にかけて細くなり、末端部は丸くなるものが多い。

遺物出土状況 土器は、下田ノ沢Ⅱ式土器（Ⅵb）が多く、覆土から床面にかけて複数の個体が出土した。これらは遺構に伴うものと考えられる。他に床面から北筒Ⅲ式土器が出土しているが混入の可能性が高い。石器では覆土から床面直上にかけて、黒曜石製のフレイク集中（HFC-1～4）を確認した。分布は全て竪穴北側で、HFC-2は細かい炭のまとまりと重なっている。床面直上から出土したHFC-2～4は遺構に伴う可能性が高い。また、覆土から床面にかけて黒曜石製のスクレイパーが多く出土している。

時期 検出層位、住居跡の形状、出土遺物などから続縄文時代下田ノ沢Ⅱ式期と考えられる。床面直上出土の炭1点の放射性炭素年代測定を行ったが、¹⁴C年代は3670±20yrBPで、暦年代範囲（2σ）では4088calAD-3923calADという結果が出ている。推定した年代より古く、縄文時代後期に相当する年代であるため、混入した炭である可能性が高い。（広田）

ⅢH-16（図Ⅳ-78、表Ⅲ-10・Ⅳ-4、図版23-1～4）旧ⅢP-4

位置 h18・h19、i18・i19区 **平面形態** 不整楕円形

規模 3.36×2.48/3.16×2.24/0.59m

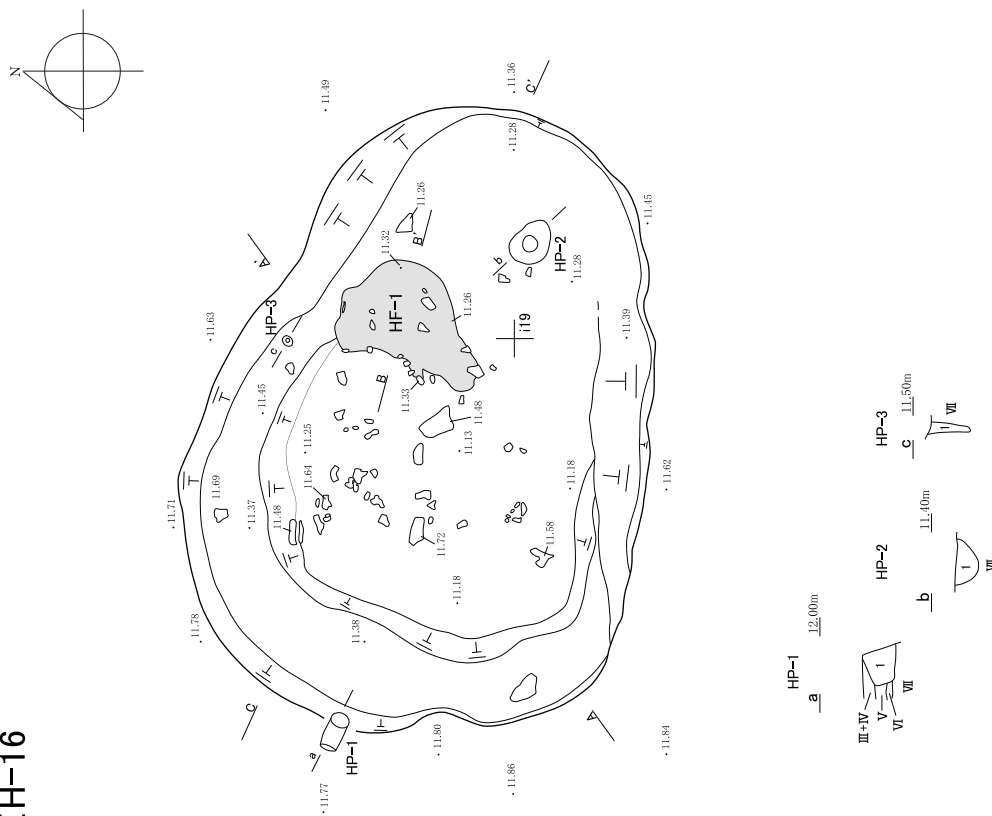
確認・調査 Ⅲ層を掘り下げ中に平面で確認した。規模から土坑（旧ⅢP-4）として調査を行ったが、坑底面から焼土を検出し、柱穴3基を検出したことから、後に住居跡とした。

覆土 6層に分けた。6は崩落土状。3～5は流れ込みによる堆積とみられる。1・2はⅣ層（摩周パミス）が不均一に混在していることから、掘り上げ土等で人為的に埋めた可能性が考えられる。

底面・壁 主にⅣ層上面で確認したが、実際はⅢ層下部から掘り込んだ遺構と考えられる。台地の縁に立地し、段丘の傾斜へと続く緩斜面上にあるためか、自然堆積層は薄く、Ⅶ層が床面になっている。床面はわずかにくぼみを呈し、西側半分はテラス状の段を有する。南西部は壁が低く、斜面に向けて開口したオープンカット状の出入り口構造であったと考えられる。北東部のやや壁寄り焼土の広がり（HF-1）が確認されている。

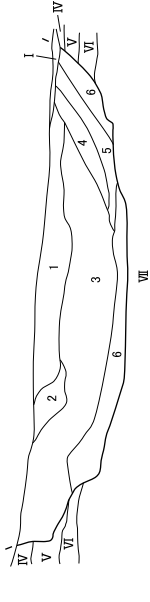
付属遺構 炉（HF-1）を1か所、柱穴を3基検出した。HP-1は壁柱穴で、やや斜位。HP-1・2は長軸上にあり、あるいは組み合わせあった可能性がある。仮にHP-1の上線の角度が実際の

ⅢH-16



1:黒褐色(10YR 3/2~3/3) 壤土 すこぶる堅 粘性有 Ma 明黄褐色(2.5Y 7/6)40%不均一混

A' 12.00m



- 1:黒褐色(10YR 2/3) 壤土 堅 粘性有 Ma 明黄褐色(2.5Y 7/6)30%不均一混 炭10%不均一混
- 2:黒褐色~暗褐色(10YR 2/3~3/3) 壤土 堅 粘性有 Ma 明黄褐色(2.5Y 7/6)40%不均一混 炭7%不均一混
- 3:黒色(10YR 2/1) 壤土 堅 粘性有 Ma 明黄褐色(2.5Y 7/6)20%不均一混 微細炭20~25%混
- 4:黒褐色(10YR 2/3) 壤土 堅 粘性有 Ma 明黄褐色(2.5Y 7/6)10%不均一混 微細炭3%混
- 5:黒色(10YR 2/1) 壤土 堅 粘性有 Ma 明黄褐色(2.5Y 7/6)3%不均一混 微細炭3%混
- 6:2とほぼ同 壤土 軟 粘性有 Ma 明黄褐色(2.5Y 7/6)5% 明黄褐色(10YR 7/6)50% 崩落土様

HF-1

B' 11.50m



- 1:黒赤褐色(5YR 5/8) 純土 すこぶる堅 粘性なし
- にぶい黄褐色(10YR 4/3) VI~VII層 不均一20%
- 黒褐色(10YR 2/3)土 不均一7% 炭20~25%

C' 12.00m



0 1:40 1m

Ⅳ-78 ⅢH-16

柱の傾斜角とすると約25°。直立した柱とみられるHP-2とは直線で2.8m離れており、この傾斜角であれば、HP-2の柱が床から1.4mほどの高さで交差していたことが想定される。HP-3は壁際で検出した。杭状である。

遺物出土状況 確実にこの遺構にともなうと判断できる遺物はない。94点出土した土器片はすべて縄文時代の下田ノ沢I式。石鏃、スクレイパー、石核、石斧が各1点、礫が25点出土している。全体、壁際よりも中央部寄り出土する傾向が窺われたが、覆土の流れ込み作用によって遺物の多くがくぼんでいた中央部分に寄ったものとも考えられる。

また、覆土の上部から下層にかけて点々と炭が出土している（15点349gを回収）。試料1点について樹種同定を行ったところ結果はモミ属であった。

時期 放射性炭素年代測定（AMS測定）に覆土下から採取した試料1点を抽出したが、¹⁴C年代は2,130±20yrBP（ $\delta^{13}\text{C}$ 補正值）、予想年代より200年ほど古い結果となった。暦年代範囲（2 σ ）では343calBC-325calBC、205calBC-88calBC、77calBC-57calBCである。しかし、検出層位および遺構の形状と出土遺物の内容から縄文時代下田ノ沢I式期と考えられる。（影浦）

ⅢP-1（図Ⅳ-79、表Ⅲ-10・Ⅳ-4、図版23-5・6）

位置 i18区 **平面形態** 隅丸四角形

規模 2.50×2.04/2.14×1.67/0.23m

確認・調査 i18区Ⅲ層下部を掘り下げ中に平面で確認した。南東側（斜面地形の下側）を半截して、土層記録を取ったのちに、完掘した。下部の覆土3、4が流入土と見られるため墓ではないと考えられるが、性格は不明。

覆土 4層に分層した。覆土3、4は流入土とみられる。覆土1、2は摩周テフラが不均一に混在しており、人為的な埋め土の可能性が考えられる。覆土の堅密度はすべてすこぶる堅。

底面・壁 坑底面は平坦である。壁はおおむね緩やかに立ち上がるが、南側は直立気味である。

遺物出土状況 確実に伴うと判断できる遺物は出土していない。土坑中央部、覆土2上面において下田ノ沢I式の土器片91点（大半が小片）と、礫44点が散発的に出土した。

時期 放射性炭素年代測定（AMS測定）に覆土2から採取した試料1点を抽出したが、¹⁴C年代2,160±20（ $\delta^{13}\text{C}$ 補正值）と、予想年代より260年ほど古い結果となった。しかし、検出層位、遺構の形状と出土遺物の内容から縄文時代下田ノ沢I式期と考えられる。（影浦）

ⅢP-2（図Ⅳ-80、表Ⅲ-10・Ⅳ-4、図版23-7・8、24-1・2）

位置 h・i15・16区 **平面形態** 楕円形

規模 1.94×1.64/1.88×1.60/0.65m **長軸方向** —

確認・調査 調査区のほぼ中央、丘陵傾斜地の肩部分のⅣ層上面で、楕円形を呈する黒色土を確認した。南側を半截した結果、Ⅳ層（摩周テフラ）を掘り込んだ土坑であった。坑底の東側からは、炭化材や炭化物、骨片（魚類の椎骨等）が混ざった焼土も検出した。

覆土 覆土は埋戻しで、Ⅲ層黒色土を基調として摩周テフラが混じる。焼土は上位に炭化材や炭化物を比較的多く含み、その下位に骨片の混じる赤色焼土がレンズ状に堆積している。

底面・壁 底面はⅣ層中で、坑底面は概ね平坦である。確認できた壁面は、東側がやや急角度に立ち上がり、全体は皿状を呈した形状と思われる。また、南東端の壁際からは柱穴様の円形の痕跡SP-1を検出した。径は約15cm、深さ約20cmである。

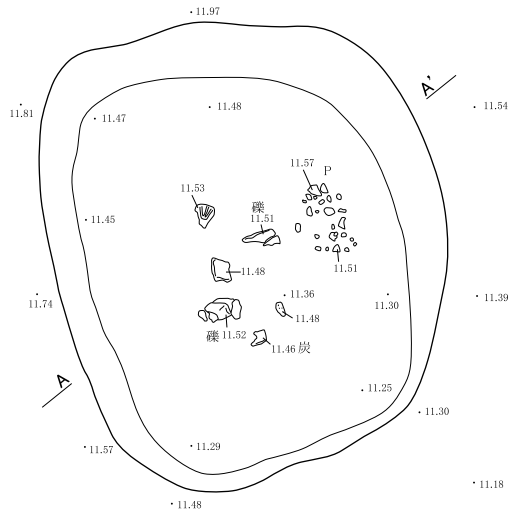
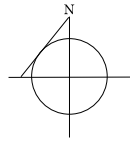
遺物出土状況 覆土中から下田ノ沢I式の土器片が3点、黒曜石や頁岩などのフレイクが19点、砥石が

III P-1

i18

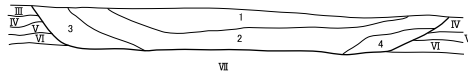
11.82

i19

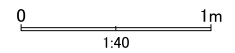


A

A' 12.00m

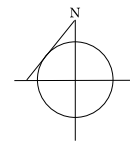


- 1: 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 砂壤土 堅〜すこぶる堅 粘着性弱
Ma 明黄褐色 (2.5Y 7/6)25%不均一混
- 2: 黒色 (10YR 2/1) 砂壤土 すこぶる堅 粘着性弱
Ma 明黄褐色 (2.5Y 7/6)30%不均一混
- 3: 黒褐色 (10YR 2/2) 砂壤土 すこぶる堅 粘着性弱
Ma 明黄褐色 (2.5Y 7/6)7%不均一混
- 4: 黒色 (10YR 2/1) 砂壤土 すこぶる堅 粘着性弱
Ma 明黄褐色 (2.5Y 7/6)20〜25%不均一混

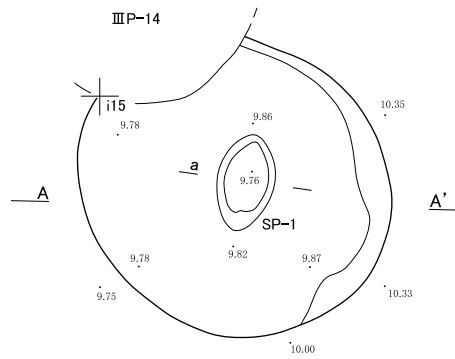


III P-3

III P-14



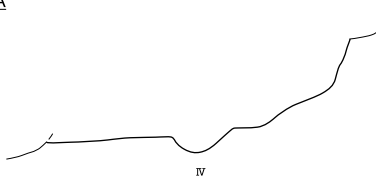
i16



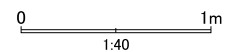
A

A' 10.50m

SP-1
a 9.90m

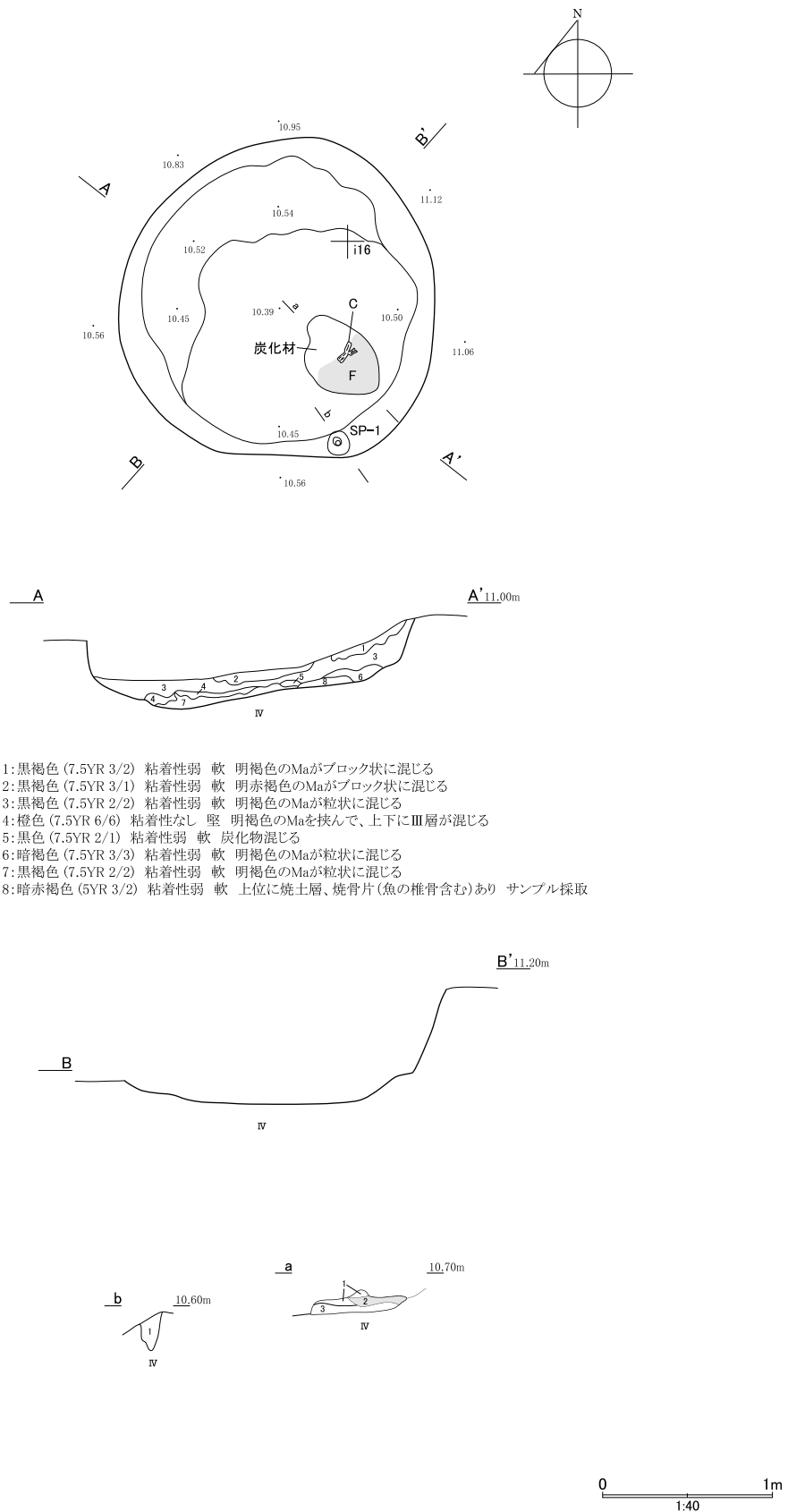


- 1: 黒褐色 (7.5YR 3/2) 軟 粘着性弱 明褐色のMaが粒状に混じる
- 2: 黒褐色 (7.5YR 2/2) 軟 粘着性弱 明赤褐色のMaが僅かに混じる



図IV-79 III P-1・3

ⅢP-2



図Ⅳ-80 ⅢP-2

2点（接合）、礫が33点出土した。また、炭化材や炭化物、焼土層から骨片等も出土した。坑底から採取した炭化材0.5gについて、放射性炭素年代測定を委託した（V章1節参照）。

時期 放射性炭素年代測定の結果、 $2,170 \pm 20 \text{yrBP}$ ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值) という年代値が得られた。予想年代よりも古い、遺構の形状や、周辺で検出している遺構、包含層から出土した遺物等からみて、続縄文時代下田ノ沢式期が考えられる。（笠原）

ⅢP-3（図IV-79、表Ⅲ-10・IV-4、図版24-3・4）

位置 h・i 14・15区 **平面形態** 楕円形？

規模 (1.65)×(1.40)／(1.55)×(1.40)／(0.55m) **長軸方向** —

確認・調査 丘陵傾斜地の肩部分で検出したⅢP-2の西側で、iラインに一部かかる半円形の黒色土を確認した。南西側は、平面形の輪郭が判然とせず風倒木痕とみられる攪乱の影響が考えられた。表土層掘削前のiラインを土層観察用の断面として半截した。掘り下げた結果、IV層（摩周テフラ）を掘り込んだ土坑であると判断した。さらに底面からは、楕円形を呈した小ピットSP-1も検出した。SP-1は北北東から南南西方向に長い楕円形。長軸は約50cm、短軸約28cm、深さが約10cmである。

覆土 覆土は埋戻しと考えられる。Ⅲ層黒色土が主体で、下層では摩周テフラが混じる。SP-1の覆土は黒褐色土に摩周テフラがブロック状に混じる。

底面・壁 底面はIV層中で、残存する床面は概ね平坦である。南西側は、風倒木痕による攪乱を受け、残っていない。また、iラインから北側は、その後の調査でⅢP-14の掘削によって失われていることが判明した。残存する壁面は、東側でやや急角度に立ち上がる。ⅢP-2同様の皿状を呈した土坑とみられる。

遺物出土状況 覆土中から礫が1点、SP-1から礫が3点出土した。

時期 周辺から検出した遺構や出土遺物等から、続縄文時代下田ノ沢式期が考えられる。（笠原）

ⅢP-6（図IV-81、表Ⅲ-10・IV-4、図版24-5・6）

位置 i 19区 **平面形態** 楕円形

規模 2.64×1.62／2.40×1.20／0.44m

確認・調査 i 19区のⅢ層下部を掘り下げ中に平面で確認した。長軸で半截し、土層観察したところ、二つの遺構の重複であることが判明した。そこで新しい方の土坑に対してⅢP-6、古い方の土坑に対してⅢP-7と遺構名を冠して、調査を進めた。覆土が自然堆積とみられることから墓ではないと考えられるが、性格は不明である。

覆土 2層に分層した。地形の傾斜に沿った流れ込み土とみられる。

底面・壁 坑底面は平坦。傾斜地形の立地であり、標高が高い方の壁は直立気味に立ち上がる。反対に標高が低い方の壁はごく緩やかでかつ低い。

遺物出土状況 本遺構に伴うと判断される遺物の出土状況は認められない。覆土中の南西壁際において、礫、炭等がややまとまって出た。たたき石2点、メノウの原石3点も出土している。

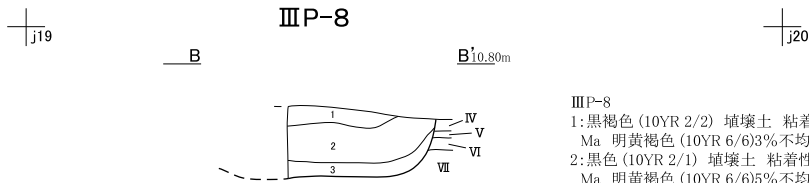
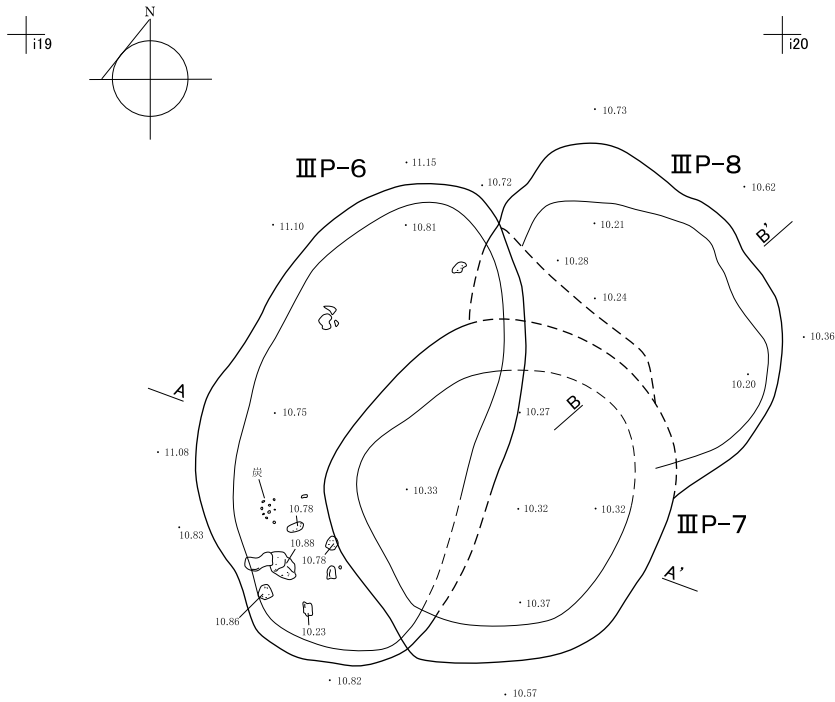
時期 検出層位および他の遺構との共通点から、続縄文時代下田ノ沢I式期の可能性が考えられる。（影浦）

ⅢP-7（図IV-81、表Ⅲ-10・IV-4、図版24-5・7）

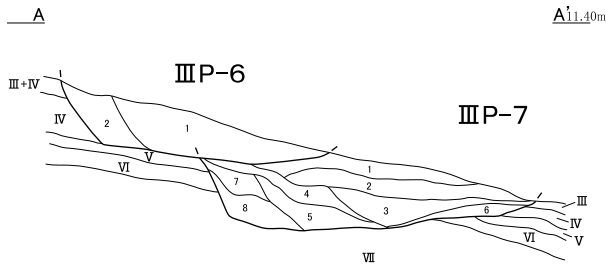
位置 i 19区 **平面形態** 円形

規模 —×1.70／—×1.38／0.41m

ⅢP-6・7・8

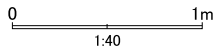


- ⅢP-8
- 1: 黒褐色 (10YR 2/2) 埴壤土 粘着性有 すこぶる堅
 - Ma 明黄褐色 (10YR 6/6)3%不均一混
 - 2: 黒色 (10YR 2/1) 埴壤土 粘着性有 堅
 - Ma 明黄褐色 (10YR 6/6)5%不均一混 炭5%混
 - 3: 黒褐色 (10YR 2/2) 埴壤土 粘着性有 軟
 - Ma 明黄褐色 (10YR 6/6)20%不均一混
 - 明黄褐色 (2.5YR 5/6)焼土粒3%不均一混 炭3%不均一混



- ⅢP-6
- 1: 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 砂壤土 粘着性弱 堅
 - Ma 明黄褐色 (10YR 6/6)3%不均一混 黒褐色 (10YR 3/1)土 40~50%不均一混 炭化物微量混
 - 2: 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 砂土 粘着性有 堅
 - Ma 明黄褐色 (10YR 6/6)3%不均一混 黒色 (10YR 2/1)土 40~50%不均一混 鬆~軟

- ⅢP-7
- 1: 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 砂壤土 堅 粘着性有
 - Ma 明黄褐色 (10YR 6/6)20~30%不均一混 炭3%混
 - 2: 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 砂壤土 堅 粘着性有
 - Ma 明黄褐色 (10YR 6/6)15%不均一混 炭5%混
 - 3: オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 砂壤土 軟 粘着性有
 - Ma 明黄褐色 (10YR 6/6)15%不均一混 炭3%混
 - 4: 黒褐色~暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/2~3/3) 砂壤土 軟 粘着性有
 - Ma 明黄褐色 (10YR 6/6)7%不均一混 炭10%混
 - 5: オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 砂壤土 軟 粘着性有
 - Ma 明黄褐色 (10YR 6/6)25%混 炭3%混
 - 6: にぶい黄褐色~明黄褐色 (2.5Y 6/4~6/6) 砂土 鬆 粘着性なし
 - 黒色 (2.5Y 2/1)土10~15%不均一混 炭3%混
 - 7: 黒褐色 (2.5Y 3/2) 砂壤土 軟 粘着性有
 - Ma 明黄褐色 (10YR 6/6~2.5Y 6/6)15%不均一混 炭3%混
 - 8: オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 砂壤土 軟 粘着性有
 - Ma 明黄褐色 (10YR 6/6)25%不均一混 炭3%混



Ⅳ-81 ⅢP-6・7・8

確認・調査 i 19区のⅢ層下部を掘り下げ中に平面で確認した。長軸で半割し、土層観察したところ、二つの遺構の重複であることが判明した。古い方の土坑に対してⅢP-7と遺構名を冠して、調査を進めたが、完掘に向けて北側半分を掘り下げ中、壁の立ち上がりを見失った。トレンチを入れたところ、別の土坑ⅢP-8の重複を確認した。おそらく、ⅢP-8が古いと考えられるが、境界部をほとんど掘り下げてしまっていたため、新旧関係については推測の域を出ない。覆土が自然堆積とみられるため墓ではないと考えられるが、性格は不明。

覆土 8層に分層した。4～8は初期の壁の崩落土や流れ込み土と考えられる。斜面の上にあたる西の壁際は三角堆積をなしている。流れ込み土によって中窪状態になったところに、覆土3、2、1が流れ込んでいる。Ⅲ層の掘り下げによって坑口部を若干削平しているが、ⅢP-6が掘削される段階では、ほぼ埋没していたと考えられる。斜面部に立地するため、埋没速度は比較的速かったのであろう。

底面・壁 坑底面は皿状にへこむ。傾斜地形の立地であり、標高が高い方の壁は直立気味に立ち上がる。反対に、標高が低い方の壁は緩やかである。西側の上部はⅢP-6により失っている。

遺物出土状況 本遺構に伴うと判断される遺物の出土状況は認められない。覆土中から続縄文時代下田ノ沢I式の破片が22点（一部接合 図IV-97）、縄文時代後期前葉、北筒V式の破片が2点、礫23点が出土している。また、覆土上部において頁岩とメノウの石核が各1点出土している。

時期 検出層位および他の遺構との共通点から、続縄文時代下田ノ沢I式期の可能性が考えられる。（影浦）

ⅢP-8（図IV-81、表Ⅲ-10・IV-4、図版24-8）

位置 i 19区 **平面形態** 不整形円形？

規模 1.84×—/1.56×—/0.38m

確認・調査 ⅢP-7を調査中に確認した。重複関係を把握するためトレンチを入れたが、すでに掘り下がっていて、確認できなかった。状況的にⅢP-7より古い可能性が考えられる。一部はⅢP-6とも重複する。遺構の性格は不明。

覆土 3層に分層した。流れ込み状の堆積に映るが、覆土3は焼土粒3%と炭3%が含まれ、覆土2では炭5%が含まれる。あるいは人為的に埋め戻したものかもしれない。

底面・壁 底は平坦。壁は直立気味に立ち上がる。底と壁の境は丸みを帯び、判然としない。

遺物出土状況 本遺構に確実に伴うと判断される遺物の出土状況は認められない。覆土中から出土した土器片14点はすべて下田ノ沢I式。

時期 検出層位および覆土中の出土土器片、重複するⅢP-6・7との関連から、続縄文時代下田ノ沢I式期の可能性が考えられる。（影浦）

ⅢP-10（図IV-82、表Ⅲ-10・IV-4、図版25-1・2）

位置 i 10区 **平面形態** 楕円形

規模 1.06×0.94/0.79×0.66/0.34m

確認・調査 i 10区のⅣ層上面で、楕円形の黒色土のまとまりを確認した。長軸方向でトレンチ調査を行い、底面と壁の立ち上がりを確認した。トレンチより西側の覆土を底面まで掘り下げ、土層断面の撮影及び図化を行った後、東側の覆土を掘り下げ完掘した。遺構の性格は不明である。

覆土 4層に分けた。黒色土とⅦ層が多く、Ⅳ層が少量混ざる黒褐色土層が主体である。中位にはⅦ層主体の褐色土層（2）もみられる。自然堆積と考えられる。

底面・壁 底面はV層からVI層にかけて構築され、北東側が高く、南西側に向かって緩やかに傾斜する。壁は底面から湾曲しながら立ち上がる。

遺物出土状況 覆土から下田ノ沢Ⅱ式土器（Ⅵb）が出土している。石器等は出土していない。

時期 検出層位、出土遺物から、続縄文時代下田ノ沢Ⅱ式期と考えられる。（広田）

ⅢP-11（図Ⅳ-82、表Ⅲ-10・Ⅳ-4、図版25-3・4）

位置 h16区 **平面形態** 楕円形

規模 2.33×1.78/1.80×1.35/（0.15m） **長軸方向** N-45°E

確認・調査 ⅢP-2の調査後に、周辺の精査を行っていたところ、丘陵傾斜地の肩部分のⅣ層上面で、楕円形の黒色土のひろがりを確認した。土坑を想定し、北東から南西の長軸方向で半截した結果、Ⅳ層（摩周テフラ）を掘り込んだ土坑であることを確認した。

覆土 検出面が坑底面に近かったことから、観察できた覆土は層厚15cm程度である。黒褐色土や黒色土、極暗褐色土主体で、粒状の摩周テフラが混じる。覆土4層は特に軟質である。

底面・壁 底面はⅣ層中で、概ね平坦である。壁面からの立ち上がりはわずかし確認できない。

遺物出土状況 南東側坑底直上の覆土中から、口縁部から胴部にかけての下田ノ沢Ⅰ式の土器片が出土した（図Ⅳ-82・98-1、図版25-4）。

時期 出土した遺物から、続縄文時代下田ノ沢Ⅰ式期と考えられる。（笠原）

ⅢP-12（図Ⅳ-83・84、表Ⅲ-10・Ⅳ-4、図版25-5～8）

位置 g19・g20、h19・h20区 **平面形態** 不整形円形？

規模 3.94×3.86/3.02×2.32/1.04m

確認・調査 台地上の表土を除去し、Ⅲ層上面を清掃中に平面で確認した。先行してhライン付近より南側（斜面側）をⅦ層上面まで調査し、遺構の存在に気がつかないまま掘り下げていたため、南側1.5mほどは覆土下部での確認となった。ただし、hラインも5～10cm単位の深さで掘り下げて行き、その都度、遺構確認の清掃を繰り返していたため、あるいは傾斜地形にかかる南側については元から壁が低い構造であったのかもしれない。排根線の造成に伴うと考えられる攪乱で上部が欠失している可能性もある。

覆土を掘り下げていったところ下部において、礫、被熱礫を主とした遺物がまとまって出土した。また焼土の小さなまとまりも確認できた。半截したところ、焼土粒の集中であり、その場で焚いたと判断されるものではなかった（セクション図は記録していない）。規模と坑底部の段差から住居跡の可能性も考えられたが、炉とみなされる焼土や、柱穴が確認されなかったこと、坑底面の段差から、土坑と判断した。遺構の性格は不明だが、遺物出土状況の項で記載するように覆土の上下で遺物の出土傾向が異なる。廃棄用土坑の可能性も考えられる。なお、覆土下部から採取した炭化物試料1点について樹種同定を行ったところ結果はニレ属であった。

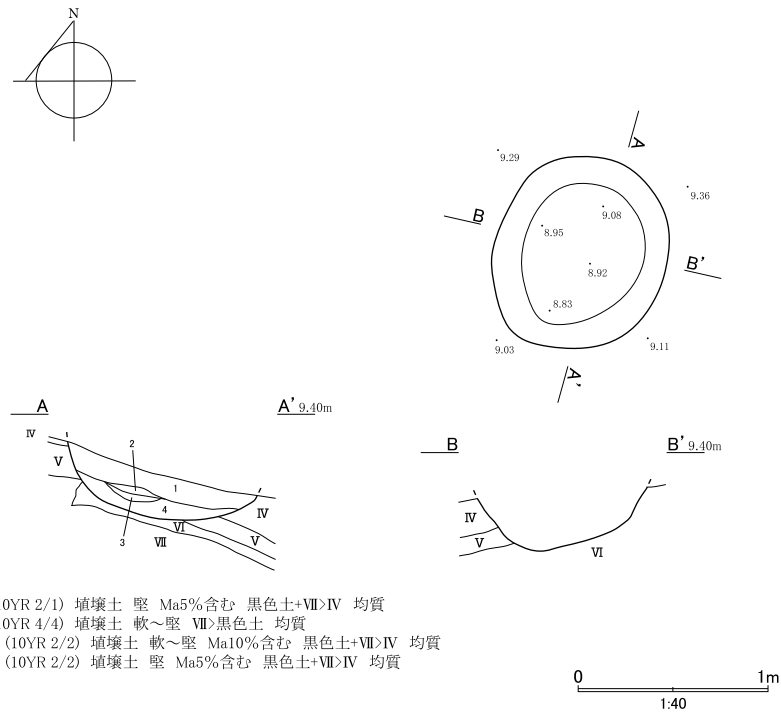
覆土 24層に分けた。個々の覆土内の堆積状況や、摩周パミスの混ざり具合からすると、覆土9以下は比較的細かい単位の堆積、1～8は大きな単位の堆積というように、覆土の上下で違いがある。上下の覆土で出土遺物の内容に偏差もあることから、すべて人為的な埋土と考えられる。

底面・壁 掘り込みはⅢ層からⅦ層中に及ぶ。坑底面には凹凸が目立つ。南東部は一段低くなっている。西側の壁は緩やかだが、他は直立気味である。床と壁の境は丸みを帯びて不明瞭なところが多い。

遺物出土状況 堆積状況の違いと同様、出土遺物の内容においても覆土上層と中・下層とで違いがあるように看取される。覆土下層では礫197点（13.245kg）、被熱礫222点（14.661kg）、たたき石7点（う

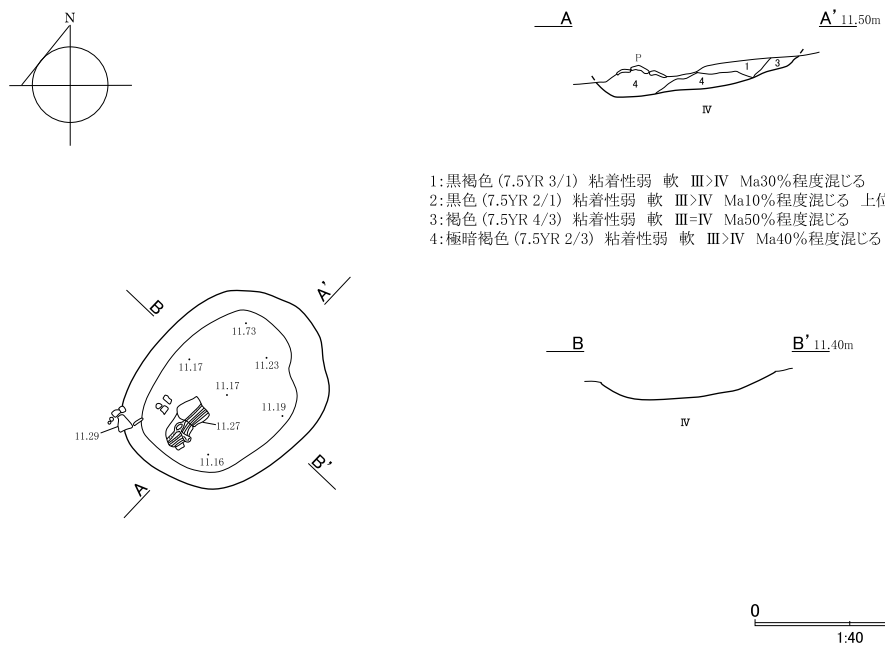
III P-10

111



111

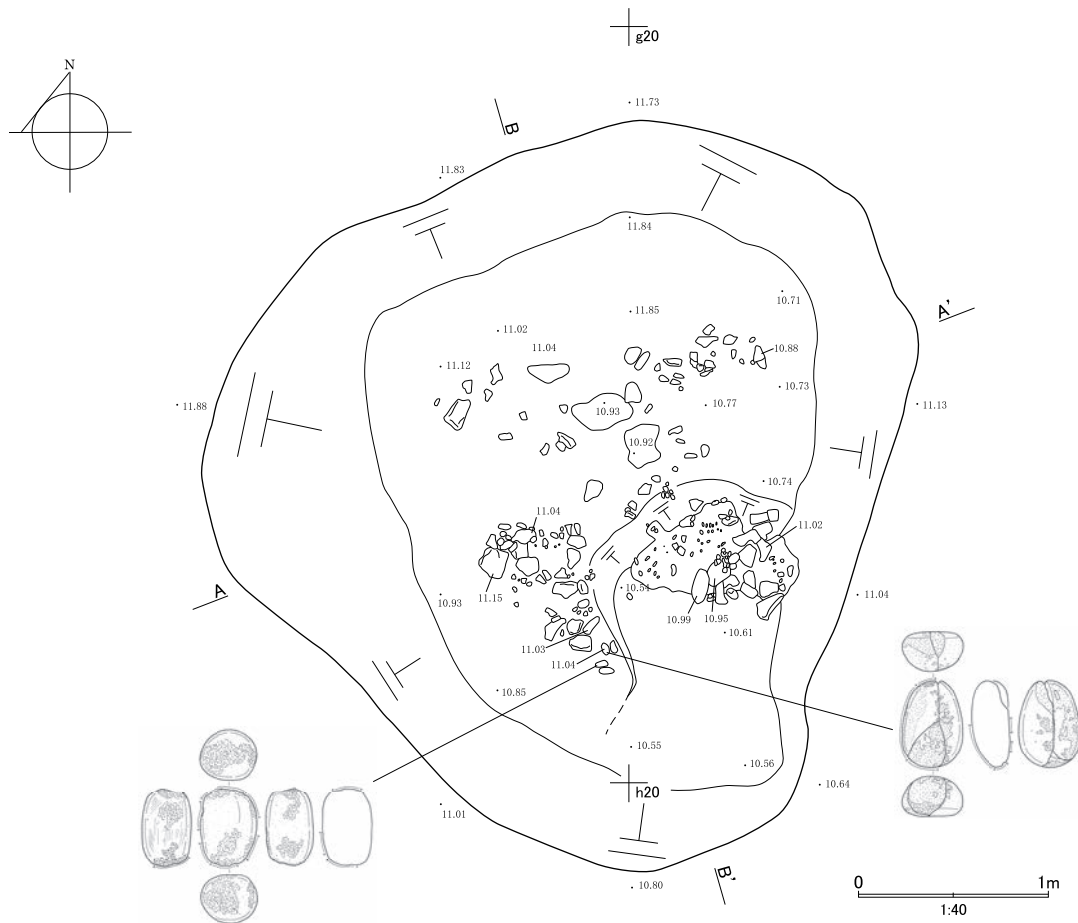
III P-11



116

図IV-82 III P-10・11

ⅢP-12



図Ⅳ-83 ⅢP-12平面・遺物出土状況

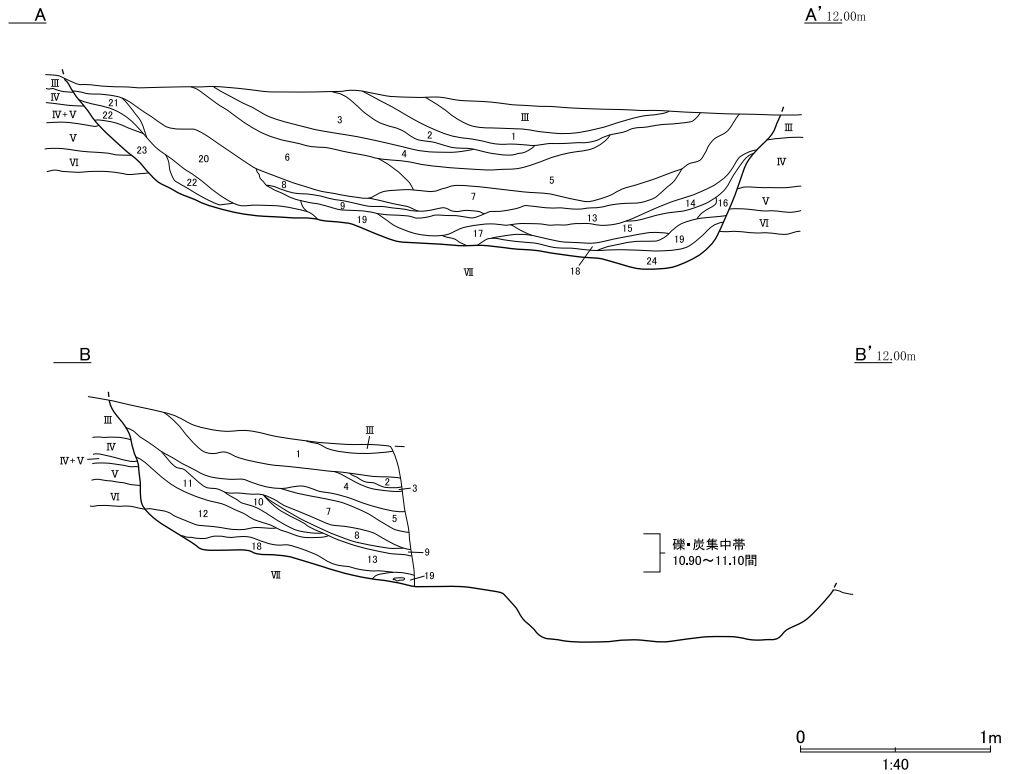
ち1点は石斧片転用)、ほかスクレイパー、石核、チップ、砥石、台石(使用痕がやや判然としない)が各1点、炭70g(回収重量)が出土している。覆土中層でもスクレイパー、石核、チップが各1点出土した。一方、覆土上層からの出土遺物を見ると、土器片が216点(うち下田ノ沢I式211点 一部接合、図Ⅳ-98-1)、ナイフ1点、スクレイパー4点、U・Rフレイク1点、石核1点、フレイク6点、チップ22点、たたき石8点(使用痕が判然としないものを含む)、砥石3点、礫52点(3.381kg)、被熱礫15点(0.807kg)、炭1g(回収重量)である。覆土下部では礫・被熱礫の出土が目立ち、覆土上部では土器片や剥片類が多い(たたき石は上下で違いが認められない)傾向がある。

また、覆土上部からは上記のほかに魚骨のまとまりを回収した。同定を委託したところカレイ科の第1椎骨、腹椎、尾椎などで、焼けていないものであった。こうした出土遺物に差異が窺われることの成因としては凍上作用の影響も考えられるが、覆土の堆積状況からすると人為的な埋め戻しの可能性がある。なお、遺物出土状況図(図Ⅳ-83)は、覆土9以下のものである。

時期 放射性炭素年代測定(AMS測定)に覆土下から採取した試料1点を抽出したが、 ^{14}C 年代は $3,450 \pm 20$ ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)と、予想年代より2,500年ほど古い結果となった。しかし、検出層位と遺構の形状、出土遺物の内容から縄文時代下田ノ沢I式期と考えられる。年代値が古く出た理由としては、本土坑を人為的に埋めた際、縄文時代後期北筒V式期頃の古い炭が混入した可能性が考えられる。

(影浦)

ⅢP-12



- 1: 黒褐色 (10YR 3/2) 砂壤土 堅 粘着性有 Ma 明黄褐色 (2.5Y 7/6)微量混
- 2: 黒褐色 (10YR 2/2~3/2) 砂壤土 堅 粘着性有 Ma 明黄褐色 (2.5Y 7/6)微量混
- 3: 黒褐色 (10YR 3/2) 砂壤土 軟 粘着性有 Ma 明黄褐色 (2.5Y 7/6)微量混 炭3%混
- 4: 黒褐色 (10YR 3/1) 砂壤土 軟 粘着性有 Ma 明黄褐色 (2.5Y 7/6)微量混 炭1%混
- 5: 暗褐色 (10YR 3/3) 砂壤土 すこぶる堅 粘着性有 Ma 明黄褐色 (2.5Y 7/6)微量混 炭1%混
- 6: 黒褐色 (10YR 3/2) 砂壤土 軟 粘着性有 Ma 明黄褐色 (2.5Y 7/6)微量混
- 7: 黒色 (10YR 2/1) 砂壤土 軟 粘着性有 Ma 明黄褐色 (2.5Y 7/6)微量混
- 8: 黒色 (10YR 1.7/1) 砂壤土 軟 粘着性有 Ma 明黄褐色 (2.5Y 7/6)微量混
- 9: 黒色 (10YR 1.7/1) 砂壤土 鬆~軟 粘着性有 Ma 明黄褐色 (2.5Y 7/6)50%不均一混
- 10: 黒色 (10YR 2/1) 砂壤土 鬆~堅不均一 粘着性有 Ma 明黄褐色 (2.5Y 7/6)60%不均一混
- 11: 黒色 (10YR 2/1) 砂壤土 軟 粘着性有 Ma 明黄褐色 (2.5Y 7/6)10%不均一混
- 12: 黒色 (10YR 2/1) 砂壤土 軟 粘着性有 Ma 明黄褐色 (2.5Y 7/6)20%不均一混
- 13: 黒色~黒褐色 (10YR 2/1~3/1) 砂壤土 堅 粘着性有 Ma 明黄褐色 (2.5Y 7/6)7%不均一混 炭3%混
- 14: 黒色 (10YR 2/1) 壤土 堅 粘着性有 Ma 明黄褐色 (2.5Y 7/6)15%不均一混
- 15: 黒褐色 (10YR 3/1) 壤土 鬆~軟 粘着性なし Ma 明黄褐色 (2.5Y 7/6)50%不均一混 炭3~5%混
- 16: 黄褐色~明黄褐色 (10YR 7/8~2.5Y 7/6) 砂土 鬆 粘着性なし 黒色 (10YR 2/1)土5%不均一混
- 17: 黒褐色 (10YR 3/1) 砂壤土 堅 粘着性弱 褐色 (7.5YR 4/6)焼土粒40%不均一混 Ma微量混 炭7~10%混 微細焼骨片1%混
- 18: 明黄褐色 (10YR 7/6) 砂壤土 堅 粘着性有 黒色 (10YR 2/1)土20%不均一混 Ma微量混 焼土粒5~7%混 炭3%混
- 19: 黒色 (10YR 2/1) 砂壤土 堅 粘着性有 Ma 黄褐色 (10YR 7/8)40~50%不均一混 明黄褐色 (10YR 7/6)Ⅶ層5%混 焼土粒5%混 炭3%混
- 20: 黒色 (10YR 2/1) 砂壤土 堅 粘着性有 Ma 黄褐色 (10YR 7/8)20%不均一混 明褐色 (7.5YR 5/6)焼土粒3%混 炭1%混
- 21: 黒褐色 (10YR 3/2) 砂壤土 すこぶる堅 粘着性弱 Ma 明黄褐色 (2.5Y 7/6)10%不均一混
- 22: 黒色 (10YR 2/1) 壤土 軟 粘着性有 Ma 明黄褐色 (2.5Y 7/6)10%不均一混
- 23: 褐色 (10YR 4/4) 砂壤土 堅 粘着性有 暗褐色 (10YR 3/3)土30%不均一混 Ma 明黄褐色 (2.5Y 7/6)5%不均一混
- 24: 黒色 (10YR 2/1) 壤土 軟 粘着性有 Ma 黄褐色 (10YR 7/8)20~30%不均一混 炭2%混

図Ⅳ-84 ⅢP-12断面

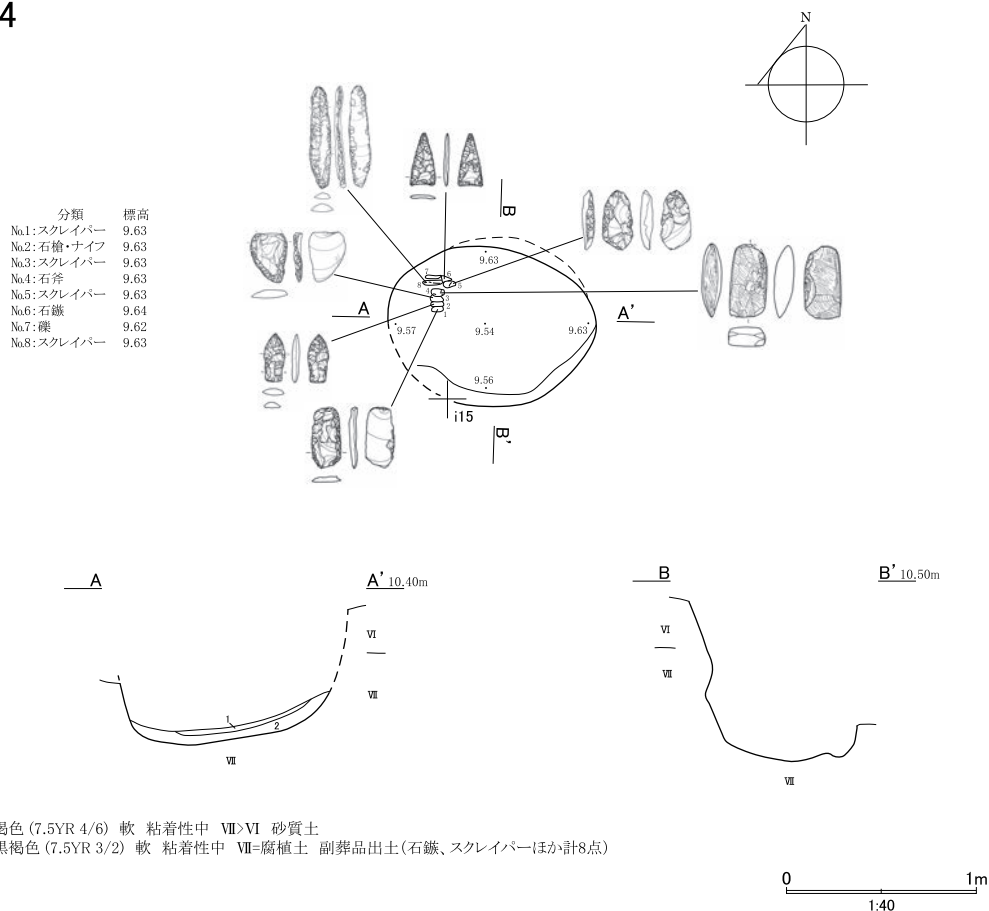
ⅢP-14 (図Ⅳ-85、表Ⅲ-10・Ⅳ-4、図版26-1~4)

位置 h15区 平面形態 楕円形

規模 1.10×1.00/0.84×0.84/0.68m 長軸方向 N-62°W

確認・調査 ⅢP-3の調査後に、iライン以北の表土層の掘削を、重機を使用して行った。その後、iラインより北側に一部が及んでいたⅢP-3の未調査部分の調査に着手した。その際に、ⅢP-3の床面を更に掘り込んだ別の遺構が存在することが判明した。全体の範囲を確認後、土層観察用の断面を設定して、掘り下げを行ったところ、坑底直上の西側から、黒曜石製の剥片石器や、小型の石斧が一列に並んだ状態で出土した。また、歯のエナメル質とみられる微細剥片の分布も確認した。これらの出土物の内容と土坑の規模・形状から、ⅢP-3の北側を一部掘削した底面がⅧ層に達する

ⅢP-14



1:褐色(7.5YR 4/6) 軟 粘着性中 VI>VI 砂質土
 2:黒褐色(7.5YR 3/2) 軟 粘着性中 VII=腐植土 副葬品出土(石鏃、スクレイパーほか計8点)

図Ⅳ-85 ⅢP-14

土壌であると判断された。出土遺物を残して坑底面の検出に努め、順次出土遺物の計測・記録を行いながら取上げを行い、完掘した。

覆土 覆土は埋戻しで、褐色土や黒褐色土、摩周テフラやⅦ・Ⅷ層等が混じる互層である。

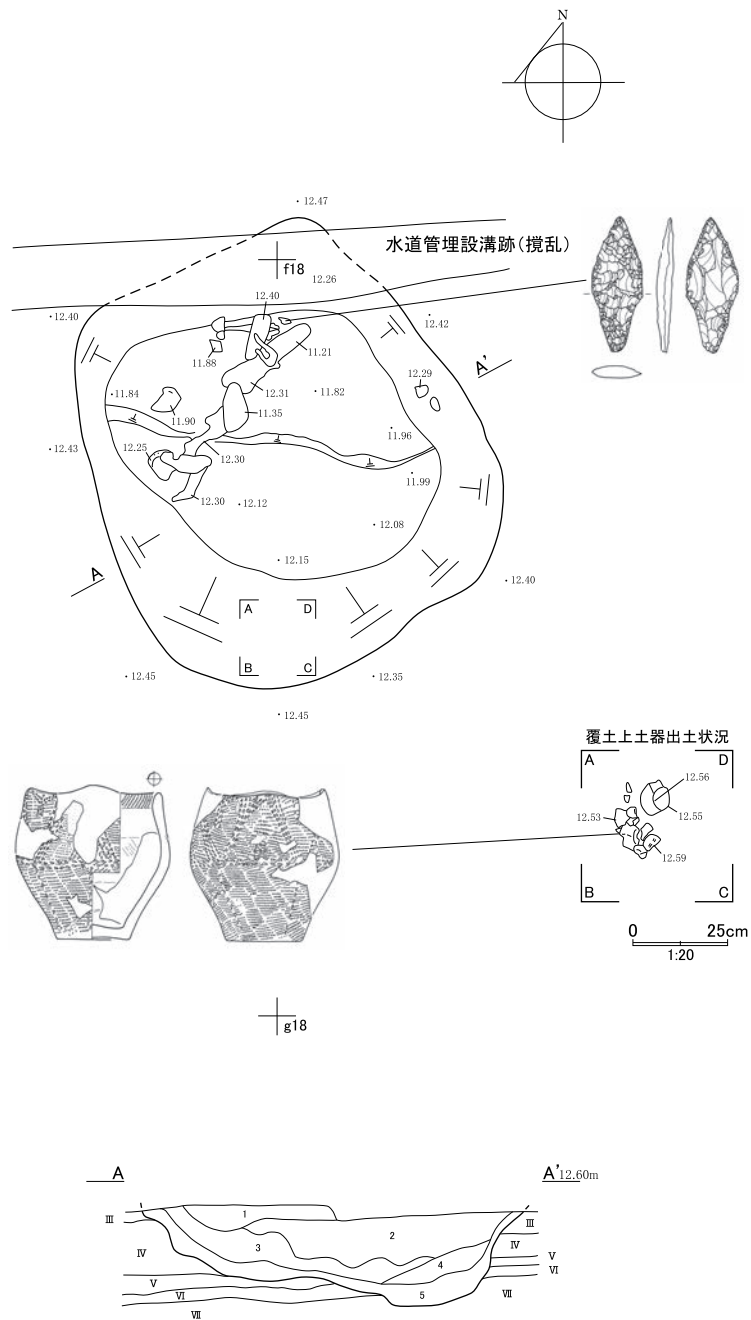
底面・壁 底面はⅧ層中で、壁面は、残っている北側において、ややオーバーハングしながら垂直に立ち上がっている。

遺物出土状況 坑底直上の西側から、石鏃2点、スクレイパー4点が近接して出土した。スクレイパーの1つ(図Ⅳ-107-6)は、長さ11.5cmを測る。剥片石器はすべて黒曜石製。産地同定の分析を6点委託したところ、石鏃1点(図Ⅳ-106-1 試料番号11)とスクレイパー3点は置戸(図Ⅳ-106-4・図Ⅳ-107-5・6 試料番号15・14・16)、石鏃1点は留刃薬(図Ⅳ-106-2 試料番号12)、スクレイパー1点は上土幌(図Ⅳ-106-3 試料番号13)という結果であった。ほか緑色泥岩製の小型石斧も1点出土した。これらの石器は南北方向に並んで検出した。また、西側坑底付近の覆土中、径10cm程度の半円状の範囲において、歯のエナメル質とみられる灰白色の微細剥片の分布も確認された(図版79)。採取したこれらの剥片は乾燥状態で総量0.3gである。

時期 周辺で検出した遺構や出土遺物の内容から、続縄文時代下田ノ沢式期が考えられる。

(笠原)

III P-16



- 1: 黒色～黒褐色 (10YR 2/1～2/2) 壤土 すこぶる堅 粘着性有 Ma 明黄褐色 (10YR 7/6)3%均質混 炭15～20%混
- 2: 暗褐色 (10YR 3/3) 壤土 すこぶる堅 粘着性有 Ma 明黄褐色 (10YR 7/6)15%均質混 炭10～15%不均一混
- 3: 暗褐色 (10YR 3/3) 覆土よりわずかに明るい 壤土 すこぶる堅 粘着性有 Ma 明黄褐色 (10YR 7/6)20～25%不均質混 部分ブロック状 炭微量混
- 4: 黒色～黒褐色 (10YR 2/1～2/2) 埴壤土 堅 粘着性强 Ma 明黄褐色 (10YR 7/6)2～3%不均質混
- 5: 黒色～黒褐色 (10YR 2/1～2/2) 埴壤土 堅 粘着性强 Ma 明黄褐色 (10YR 7/6)15%不均質混

図IV-86 III P-16

ⅢP-16 (図Ⅳ-86、表Ⅲ-10・Ⅳ-4、図版26-5~7)

位置 e17・e18、f17・f18区 平面形態 隅丸四角形

規模 2.22×2.04/1.52×1.32/0.54m

確認・調査 f18区Ⅲ層を掘り上げ中に、平面で確認した。

覆土 5層に分けた。覆土の上下で摩周パミスの混入具合が異なる。下部の覆土3~5は、摩周パミスの混入が不均質。上部の覆土1・2は摩周パミスの混入が均質。土層は自然埋没状に観察されたが、遺物の出土状況からすると、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

底面・壁 坑底は段差を持ち、北側が低い。壁は西側が緩やかな立ち上がりで、東側は直立気味。坑底面と壁の境は丸みを持ち、ほとんど不明瞭である。

遺物出土状況 土坑と認識する前に、Ⅲ層を調査中、下田ノ沢Ⅱ式の小型土器が出土した。覆土最上部、坑口部の遺物と考えられる。この土器を含み、覆土上部では下田ノ沢式の土器片が32点出土した。他、石鏃が1点、たたき石(使用痕がやや判然としない)1点、礫12点、被熱礫2点が出土している。一方、覆土中・下層では、礫22点、被熱礫4点が出土した。土器は覆土中で北筒式が3点、覆土下で下田ノ沢Ⅱ式が2点出土している。礫類が覆土の下層に多く、土器片が覆土の上部にまとまる。ほか、覆土中層から上層にかけて炭化材の塊が出土した。覆土3の上面とみられる。樹種同定の結果、ニレ属であった。

時期 放射性炭素年代測定(AMS測定)に覆土上から採取した試料(樹種同定結果ニレ属)1点を抽出したが、 $2,130 \pm 20$ ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)と、予想年代より200年ほど古い結果となった。しかし、検出層位と遺構の形状、出土遺物の内容から続縄文時代下田ノ沢Ⅱ式期と考えられる。(影浦)

ⅢP-24 (図Ⅳ-87、表Ⅲ-10・Ⅳ-5、図版26-8)

位置 f15・f16区 平面形態 不整円形

規模 2.32×2.26/2.02×1.80/0.17m

確認・調査 ⅢH-10の範囲確認で周辺清掃をした際に、Ⅲ層下部で平面形を確認した。トレンチを入れたところ、すぐ坑底面に達した。おそらく坑底部付近の確認で、実際の掘り込み面はもう少し上が想定される。性格不明。

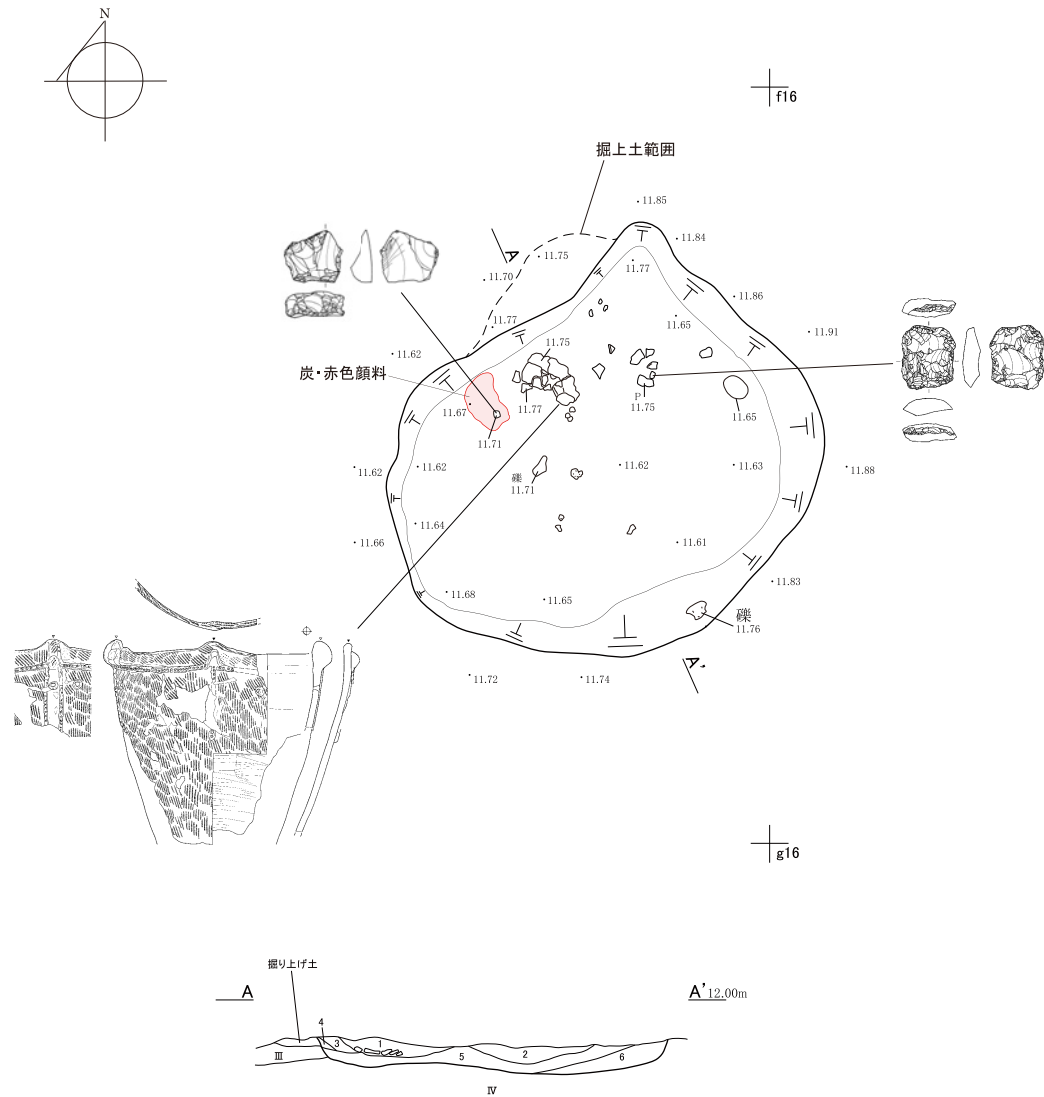
覆土 6層に分層した。いずれもⅣ層起源の摩周パミスが一定量混ざる。セクション面で観察する限り、パミスの混入は均一的である。自然堆積的にも映るが、覆土中の遺物出土状況からすると、人為的に埋め戻したものであろう。

底面・壁 Ⅳ層を坑底面とする。坑底はゆるやかに起伏し、壁はゆるやかに立ち上がる。坑底部と壁の境界は丸みを帯びて判然としない。

遺物出土状況 覆土5の直上で、下田ノ沢式の小型土器が潰れた状態で出土した。出土土器片の大半は同一個体の下田ノ沢Ⅰ式であった(図Ⅳ-99-1)。ほかに覆土中層からは、石鏃1点、石錐1点、ナイフ1点、スクレイパー5点、楔形石器1点、被熱した砥石1点、フレイク2点、チップ17点、礫30点、被熱礫29点が出土している。

時期 放射性炭素年代測定(AMS測定)に覆土から採取した試料1点を抽出したが、 ^{14}C 年代は $2,110 \pm 20$ ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)と、予想した年代より200年ほど古い結果となった。暦年代範囲(2σ)は199calBC-55calBCで、紀元前2世紀~1世紀前葉である。しかし、検出層位と出土遺物の内容から続縄文時代下田ノ沢Ⅰ式期と考えられる。(影浦)

III P-24

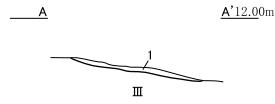
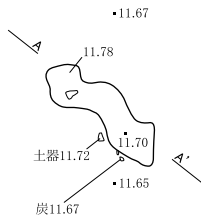
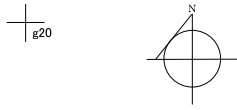


- 1: 黒色 (10YR 2/1) 埴壤土 軟 粘着性有 Ma 赤褐色 (5YR 4/6)Ma-g主体 5%不均一混 炭1~2%不均一混
 - 2: 黒色 (10YR 2/1) 砂壤土 堅 粘着性有 Ma 黄橙色 (10YR 5/8)40%均一混 炭3%混
 - 3: 黒色 (10YR 2/1) 壤土 軟 粘着性有 Ma 赤褐色 (5YR 4/6)30%均一混 Ma 黄橙色 (10YR 5/8)20%均一混
 - 4: 黄橙色 (10YR 5/8)Ma主体 砂土 鬆 粘着性なし
 - 5: 黒色 (10YR 2/1) 埴壤土 すこぶる堅 粘着性有 Ma 赤褐色 (5YR 4/6)40%均一混 Ma 黄橙色 (10YR 5/8)15%均一混 赤色 (10YR 4/8)顔料微量混
 - 6: 黒色 (10YR 2/1) 埴壤土 軟 粘着性有 Ma 赤褐色 (5YR 4/6)10%均一混 Ma 黄橙色 (10YR 5/8)15%均一混
- 掘り上げ土:黄橙色 (10YR 5/8) 砂壤土 堅 粘着性有 黒色~黒褐色 (10YR 2/1~3/1)40%不均一混

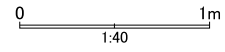
0 1m
1:40

図IV-87 III P-24

ⅢF-2

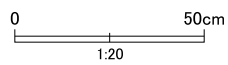
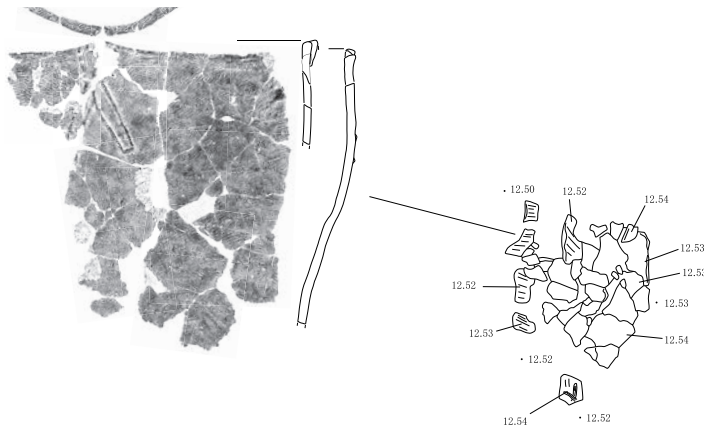
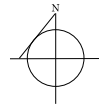


1: 黒褐色 (10YR 3/2)
 橙色 (7.5YR 6/8) 砂壤土 軟 粘着性弱 焼土40%不均一混 炭3%混



土器集中2

f19



図Ⅳ-88 ⅢF-2・土器集中2

ⅢF-2 (図IV-88、表Ⅲ-10・IV-5)

位置 g19区 平面形態 不定形

規模 0.74×0.22/0.44m

確認・調査 Ⅲ層中で検出した。

被熱層 薄い単層である。Ⅲ層中にブロック状の焼土が40%ほど混ざっているもの。炭が3%ほど不均一に混じる。焼骨片は未確認。他の場所で焚いた焼土を帯状に散布した異地性のもと考えられる。

時期 炭化材の年代測定を委託したところ、¹⁴C年代は1,450±20yrBP (δ¹³C補正值)であった。暦年代範囲(2σ)は574calAD-648calADで、紀元6世紀後半～7世紀前半である。本遺跡からわずかながら北大式が出土しているため、可能性としてはその頃が考えられるが、仮にそうだとした場合も北大式の年代よりは新しい年代値である。(影浦)

土器集中2 (図IV-88、表Ⅲ-10)

位置 f19区 規模 0.30m四方の範囲

確認・調査 f19区のⅢ層調査中に確認した。下田ノ沢I式の1個体である。ⅢH-12の床面で出土した破片数点と接合したが、個体復元には至っていない(図IV-100-1)。(影浦)

(3) 遺構出土の遺物

・土器

ⅢH-1 (図IV-89、表IV-13、図版58)

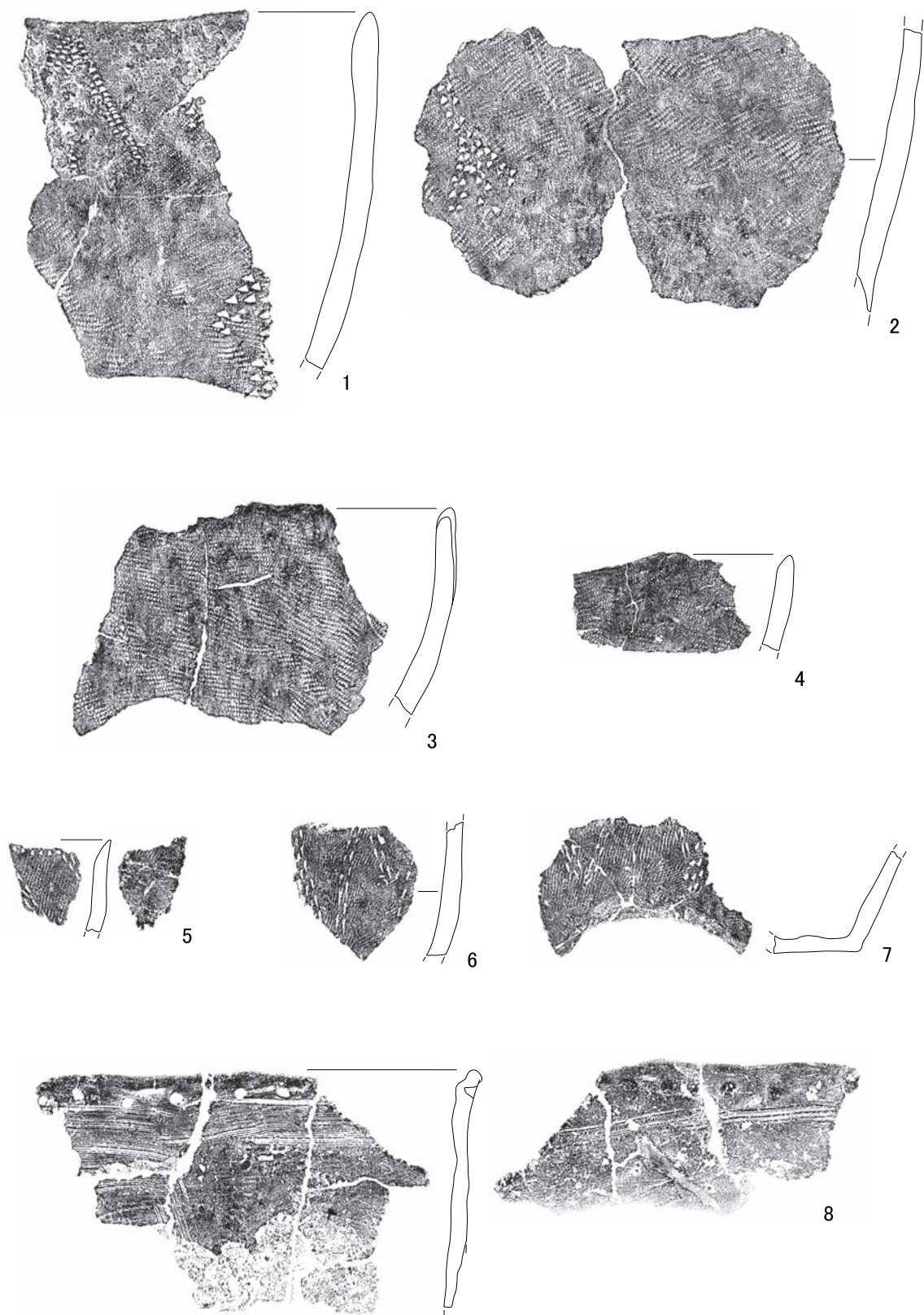
土器は114点が出土した。内訳は下田ノ沢Ⅱ式が51点、下田ノ沢式と考えられるもの12点、北大式(Ⅵ群c類)44点、擦文土器7点である。北大式の44点は覆土上層から出土した同一個体片で、大半が細片。くぼみ状態の竪穴に入ったものであろう。1～7は下田ノ沢Ⅱ式。1・2は同一個体。先端三角形の工具による刺突文が施されている。2列単位で斜位に連続的に施され、末端は放射状に開く。地文はLR縄文。斜行を基調とするが、横走気味になっている部位もある。床面出土。3は地文が横走するLR縄文。口縁部が内傾する。4は周辺包含層で出土したもので3の同一個体とみられるもの。1・2、3・4ともにわずかに隆起する波状口縁。4は波頂部がわずかに肥厚する。5～7は床面で出土した小型の同一個体土器。先端の細い工具により2本単位で連続刺突を加えている。地文は非常に細かい捩りのLR斜行縄文。内底部中央がわずかに隆起する。8は北大式。口縁を径5～6mmの刺突文が巡り、内外に幅7mmのヘラ状工具による条痕が施されている。条痕は口縁部付近では横位であるが、胴部では斜位にも施されている。口唇断面は丸みを帯びる。

ⅢH-6 (図IV-90～92、表IV-11・13・14、図版59、60-7)

土器は212点が出土した。内訳は下田ノ沢Ⅱ式196点、下田ノ沢式の可能性が考えられるもの2点、北筒式13点、擦文土器1点である。覆土3および床面で出土したものはすべて下田ノ沢Ⅱ式である。

1は炉の直上の覆土内において倒立状態で出土した無文土器。ほぼ完形であるが底はほとんどない。緩やかな波状口縁で、大きな波頂部と小さな波頂部が2つずつあり、それぞれで対になっている。短軸方向で対向する突起が大きく、長軸方向で対向する突起が小さい。大きな波頂部は肥厚し、外に突き出る。肥厚した波頂部の上面観は角が丸みを帯びた三角形である。土器の形状は口縁部が楕円形、底部付近は円形。底部は垂直に立ち上がり、胴部は膨らむ。頸部が屈曲して口縁部が開くが、大ぶりな波頂部のほうはより大きく開いている。底部を欠くが、底面部に蓋をして計量した最大容量は4.75Lである。器表面はナデ調整がなされている。表面の調整方向は胴部上半が横方向、胴部下半は縦方

ⅢH-1



図Ⅳ-89 Ⅲ層遺構出土の土器（7）

向。内面はすべて横方向。口縁部は内外面とも鈍い光沢がある。

2は炉のすぐ西側の床面直上において、ほぼ完形で出土した小型土器。2対の突起を持ち、突起部に穿孔がなされているが、1つは穿孔部を境に欠損している。欠損した突起部は見つからなかった。意図的に廃棄されたものかもしれない。欠損部にかかる穿孔部を中心に同心円状に光沢のある炭が付着している。上面観、口縁部は楕円気味、底部付近は円形。下半部は垂直に立ち上がり、胴が膨らみ、わずかに屈曲しつつ口縁が内傾する器形。連続的な刺突文により幾何的な文様を構成する。刺突は突起下の穿孔部から垂下するところだけが1列で、他は2列である。地文は非常に細かい原体によるLR斜行縄文。

3～5は突起状の波頂部があり、刺突で文様を構成する中小型の土器。いずれとも1同様に波頂部が肥厚して突き出し、波頂部の上面観は角が丸みを帯びた三角形を呈している。3は波頂部下に斜めに穿孔が加えられている。刺突は先端三角形の工具によるもので、波頂部下、底部まで垂下するのは1列であるが、斜位に施されているものは2列。地文は非常に細かいLR斜行縄文。口縁部内面にも施文されている。4・5は同一個体。肥厚した波頂部内を横位に孔が穿たれている。刺突は2列単位と3列単位が斜位に施されている。4では波頂部上と、口唇内面にも縁取るように1列単位の刺突が施されている。この刺突は5には見られないので、全周していない。地文は非常に撚りが細い縄を巻いた撚糸文。刺突列に沿って斜位に縦位に施され、美しい装飾効果を生み出している。口縁部内面にも施文されている。3および4・5は覆土上層からの出土であるが、形状や文様など諸特徴の共通性から1・2と同時期の下田ノ沢Ⅱ式と考えられる。同様のものは他で出土しておらず、覆土上層にセットで入れた可能性も考えられる。

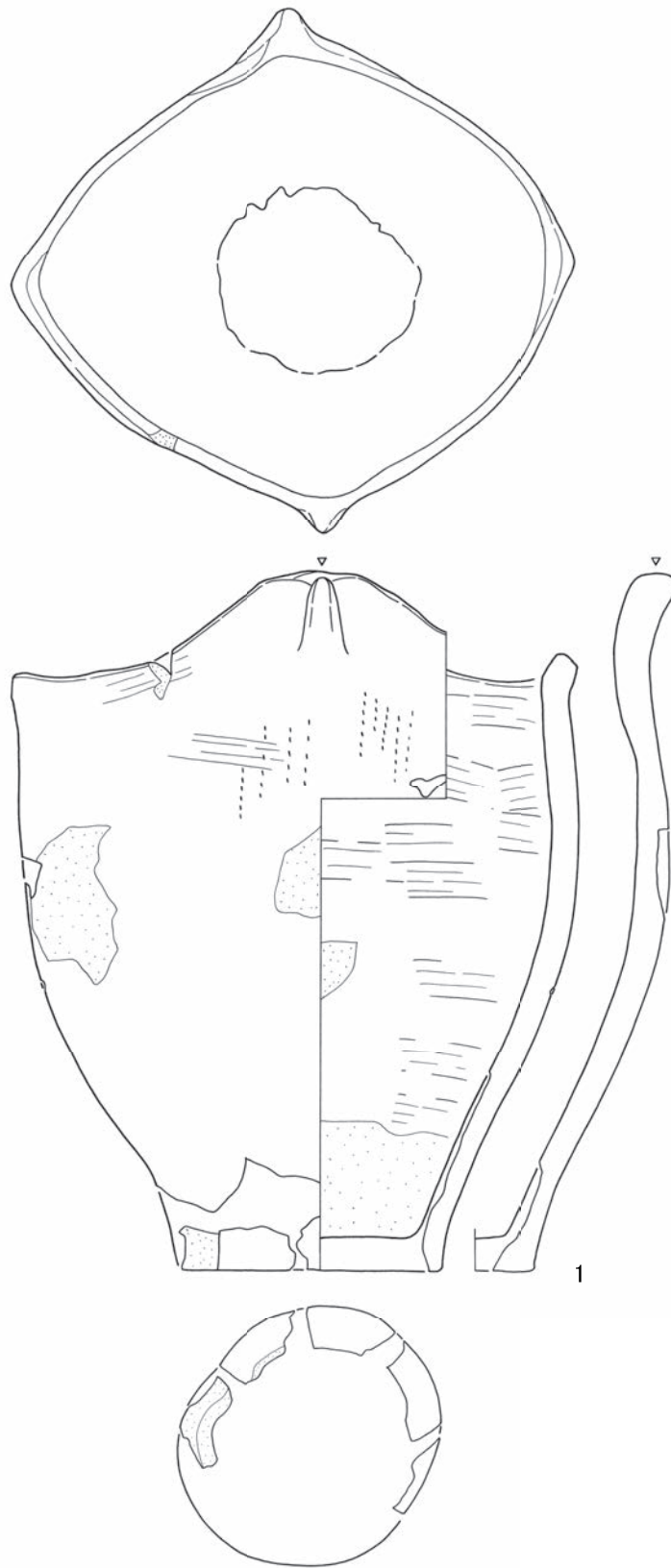
6・7は北筒Ⅲ式の新しい段階（羅臼式）。砂を多く含んだ重い胎土で、地文はRLR複節斜行縄文。縦位の隆帯上に縄が押捺され、末端で逆Y字状に開いている。7はⅢH-6覆土下出土の破片とⅢH-14覆土上出土の破片と、ⅢP-13覆土出土の破片が接合したものの。

ⅢH-10（図Ⅳ-93・94、表Ⅳ-11・14、図版60-1・2、61）

土器は266点が出土した。内訳は下田ノ沢式216点、下田ノ沢式の可能性が考えられるもの38点、その他12点である。

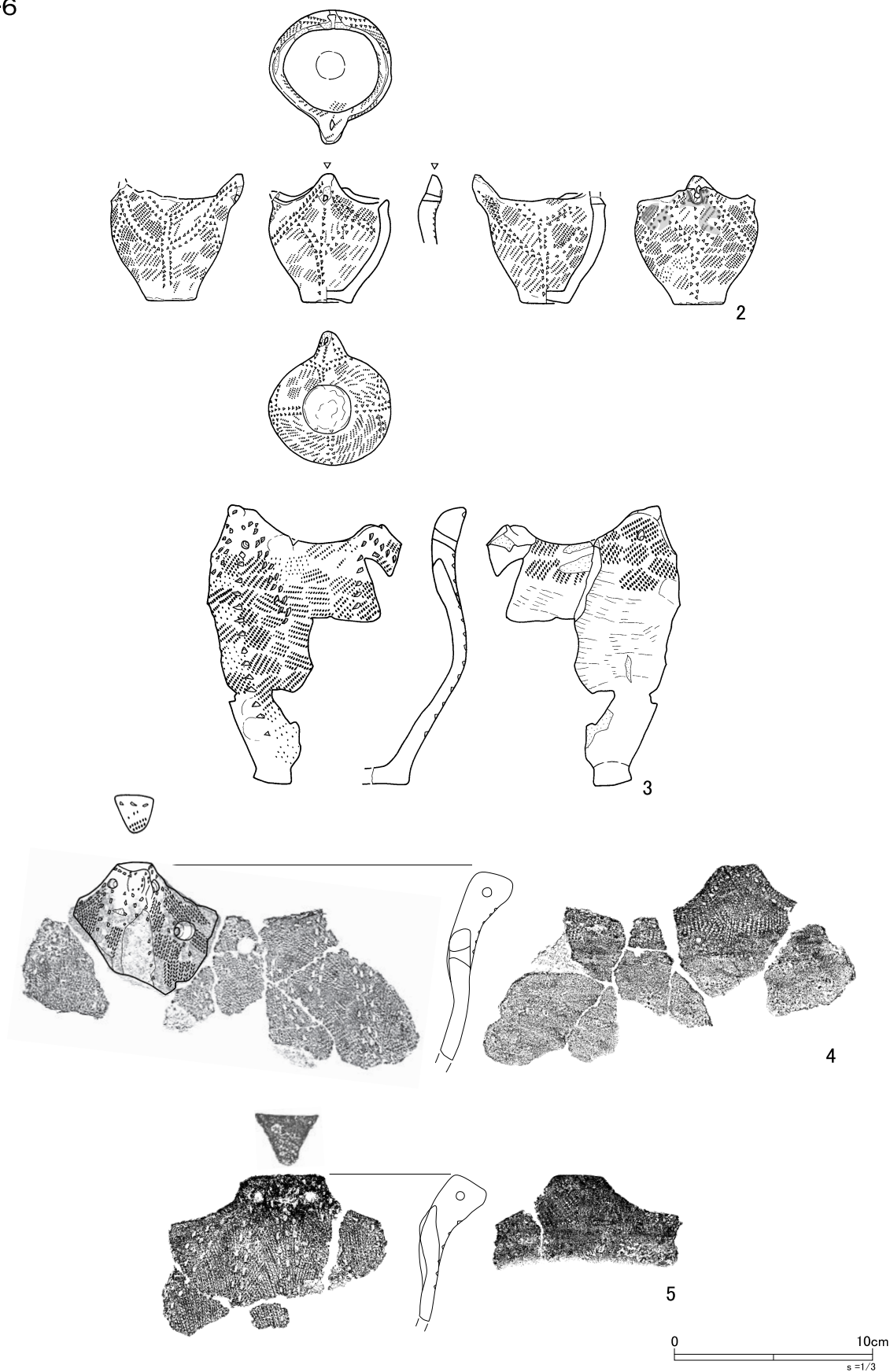
1～3は下田ノ沢式。1は覆土下層において1個体が潰れた状態で出土したもの。胴がやや膨らみ、口縁部が内傾する器形。最大容量は3.6L。口縁部に細い隆起線による四角い区画が対であり、区画内には刺突が縦位に施されている。口縁部は極めて細い撚りの絡条体圧痕文が4段施されているが、部分的に3段のところ絡条体圧痕文が一部だけ縄線文に置き換わっているところなど変則的な施文である。絡条体圧痕文の下は無文地に刺突列が横環する。この刺突列も2段のところと1段のところとがあり変則的である。地文は非常に細かい撚糸文。無節Rと思われるが、施文後に表面をナデており、撚りが潰れているので全体判然としない。縦に斜めに重なり合って施文されている。口縁部の絡条体圧痕文と同一原体で幅は2cm程度である。外底面にも施文した可能性があるが、磨滅して痕跡が認められる程度である。また、胴部のごく一部に斜行縄文を施文したとみられる部位もある。2は覆土下で出土した小型土器。2対の突起があったとみられるが、反対側は胴部上半が大きく欠けている。欠損部の破片は見つからなかった。胴が膨らみ、口縁部がやや内傾する器形。肥厚した突起部に横位の貫通孔が加えられている。口縁部は2本組の縄線文が複数段巡る。地文はRL縄文。突起を境に左右の炭垂れ痕が顕著。底面に達し、底面で半円を描いている。このことから使用時には若干、正面側に傾斜していたとみられる。3は口縁に瘤状に肥厚した小突起を持ち、その下に長楕円に区画した隆起線が垂下する。区画内は無文。口縁部には無文地に縄線文が5条横環し、地文は撚糸文。諸特徴から1

ⅢH-6



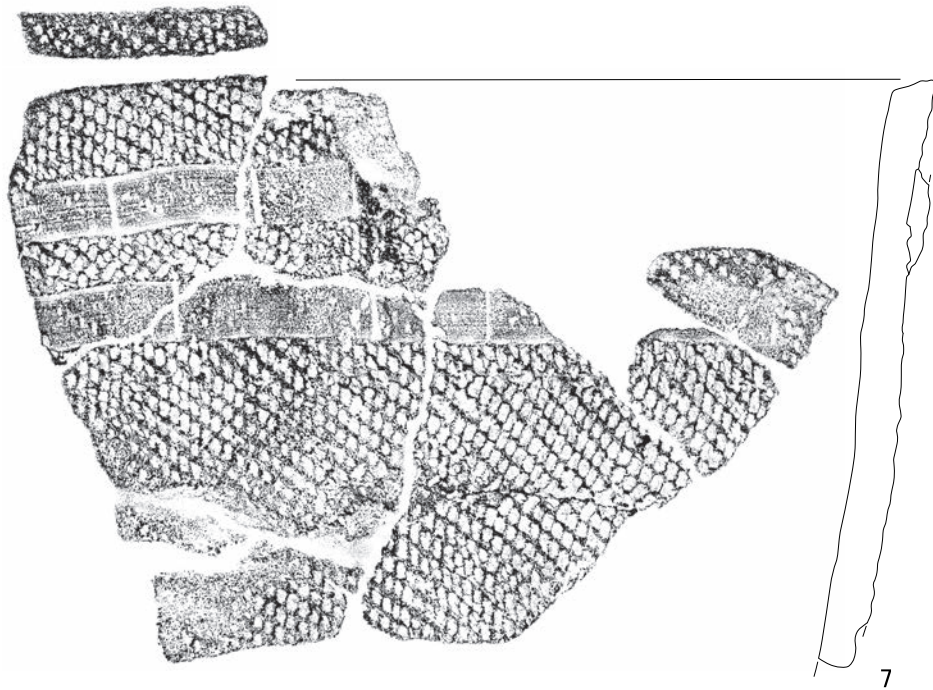
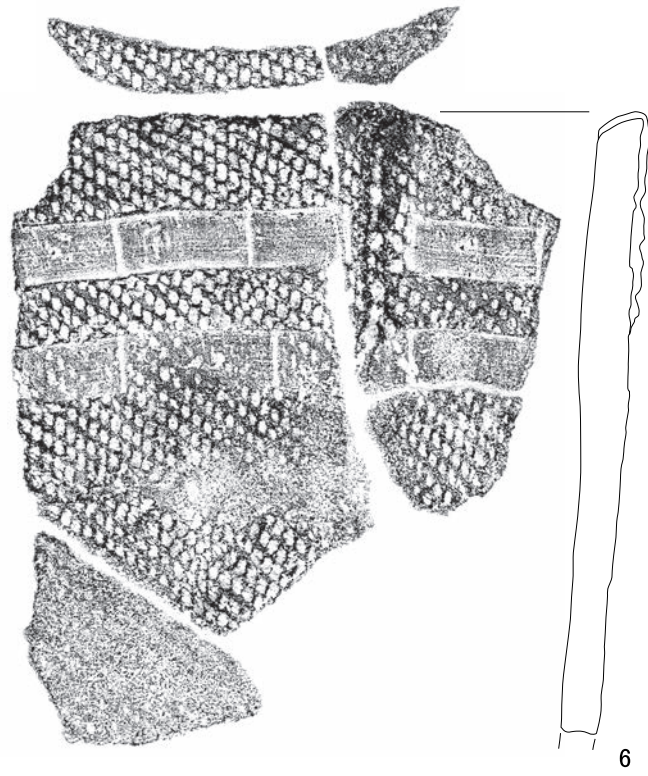
図Ⅳ-90 Ⅲ層遺構出土の土器（8）

ⅢH-6



図Ⅳ-91 Ⅲ層遺構出土の土器(9)

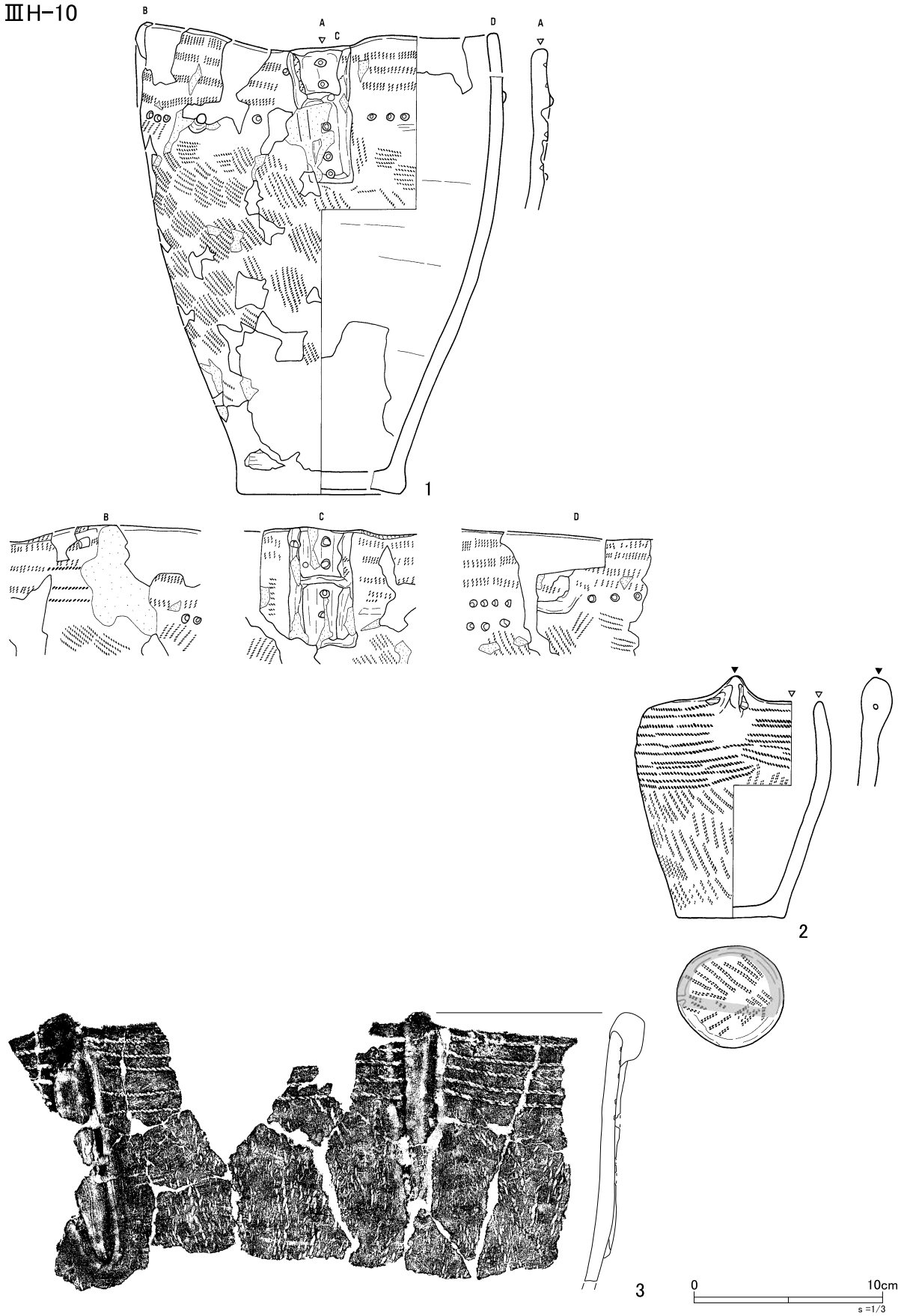
ⅢH-6



0 10cm
s=1/3

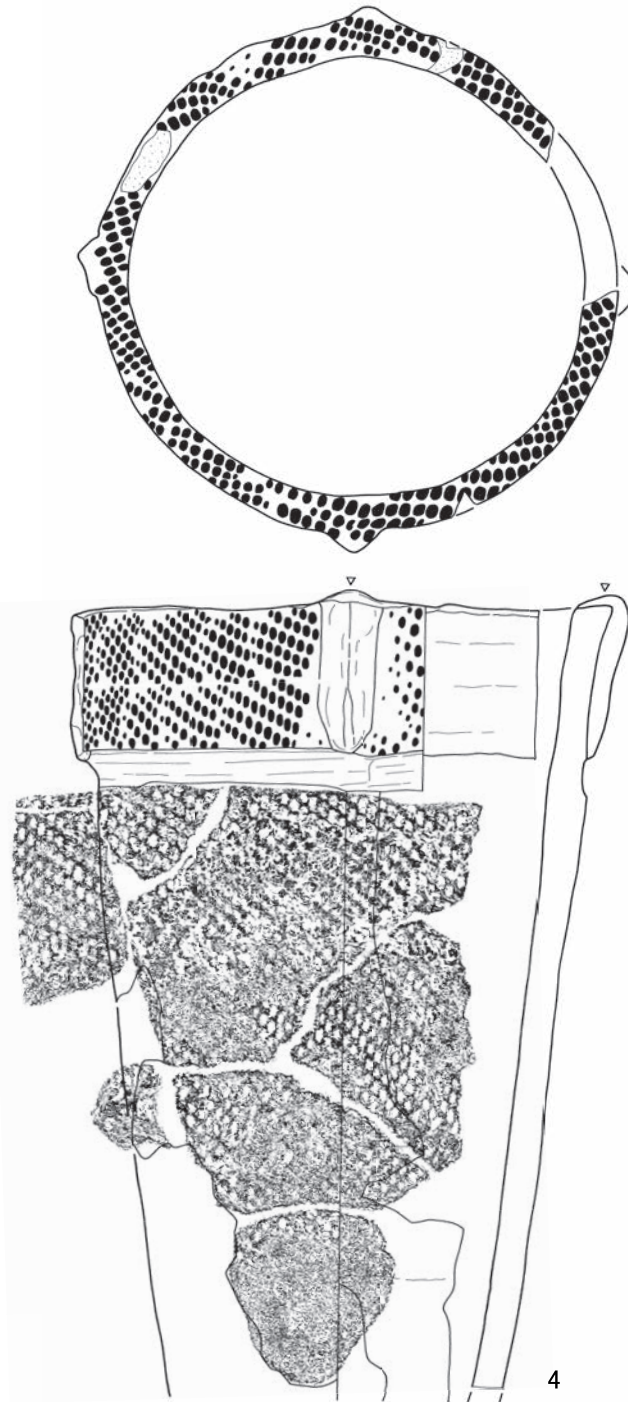
図Ⅳ-92 Ⅲ層遺構出土の土器 (10)

ⅢH-10



図IV-93 Ⅲ層遺構出土の土器 (11)

ⅢH-10



図Ⅳ-94 Ⅲ層遺構出土の土器 (12)

は下田ノ沢Ⅰ式とⅡ式の過渡的資料。2は下田ノ沢Ⅱ式。3は下田ノ沢Ⅰ式と考えられる（Ⅵ章2参照）。

4は北筒Ⅲ式の新段階（羅臼式）。縦位に垂下する隆帯が対で4本ある。隆帯の部分は無文。頸部をヘラ状工具で引いた無文帯が1条横環する。地文はRLR複節斜行縄文。底部付近を欠くが現存部の最大容量で5.1Lある。

ⅢH-12（図Ⅳ-95～97、表Ⅳ-11、図版62、63-4）

土器は886点が出土した。内訳は下田ノ沢Ⅱ式801点、下田ノ沢式の可能性が考えられるもの44点、その他41点である。床面出土は41点。下田ノ沢Ⅱ式が30点、北筒式が11点。床面の北筒式は覆土に混ざったものが、床面に接して埋没したものか、何らかの要因で掘り出された北筒式の破片が住居の廃絶時に遺棄されたものであろう。床面直上から下田ノ沢Ⅱ式の破片が138点出土している。

1は床面直上で1個体が潰れた状態で出土した大型土器。口径に対して底径が小さく非常にアンバランスな器形。底部は接合していないが、同一個体片と判断されたので、底部へ向けてのすぼまりから大きさを想定し、間を補填剤バイサムで繋ぎ推定で復元した。その最大容量は19L。口縁部は2種2対の突起がある。山形の突起部は表面内面とも縦位に肥厚、内面の肥厚部に縄を押捺しているところもある。台形状に弱く突き出た突起は左右の角が肥厚して、垂直方向の刺突が加えられている。突起間は薄く細い隆起線が3条横環し、2本単位の縄線文が複数巡る。突起下にも同様の隆起線と2本組の縄線が、間に刺突を充填した環状のモチーフを挟み込んで垂下する。環状部から左右に文様帯が短く上向きに突き出ている。地文はLR縄文が横走する。自縄自巻、あるいは拵糸文かもしれない。底面にも施文されている。

2も2種2対の突起がある。山形の突起は肥厚し、前面に突き出している。肥厚部に横位の貫通孔がある。小さく突き出たほうの突起はわずかに肥厚した上部が皿状の凹みを呈する。口縁部を薄く細い隆起線が2本横環し、2本組の縄線が5条巡っている。隆起線の端部ないし屈曲部には径の細い刺突が加えられている。突起下は隆起線が末広がりに施され、その内側に隆起線の三角形の区画が入り込んでいる。地文は条間が開いたRL原体の縄文。よく焼きしまった胎土である。下半部を欠く。

3は小型の土器。胴部上半は楕円形で底部は円形、底部が垂直に立ち上がり、胴部が膨らみ、頸部がわずかに屈曲して口縁部が内傾する器形。大小対の波状突起があるが、短軸方向で対向している大きい方の突起は両方とも欠けている。突起を意図的に欠いて廃棄した可能性もある。器形的には、ⅢH-6で出土した倒立土器（図Ⅳ-69・90）と同じものであろう。地文は非常に細いLR斜行縄文。雲母を混和した胎土で、光にかざすとこまかい雲母片が反射する。容量は0.6L。

4は下半部だけの復元。地文は条間が開いたRL原体の斜行縄文。胴部下半は垂直に立ち上がり、胴部の上膨らむ。先端に刺突が加えられた微隆起線の末端がかかっている。

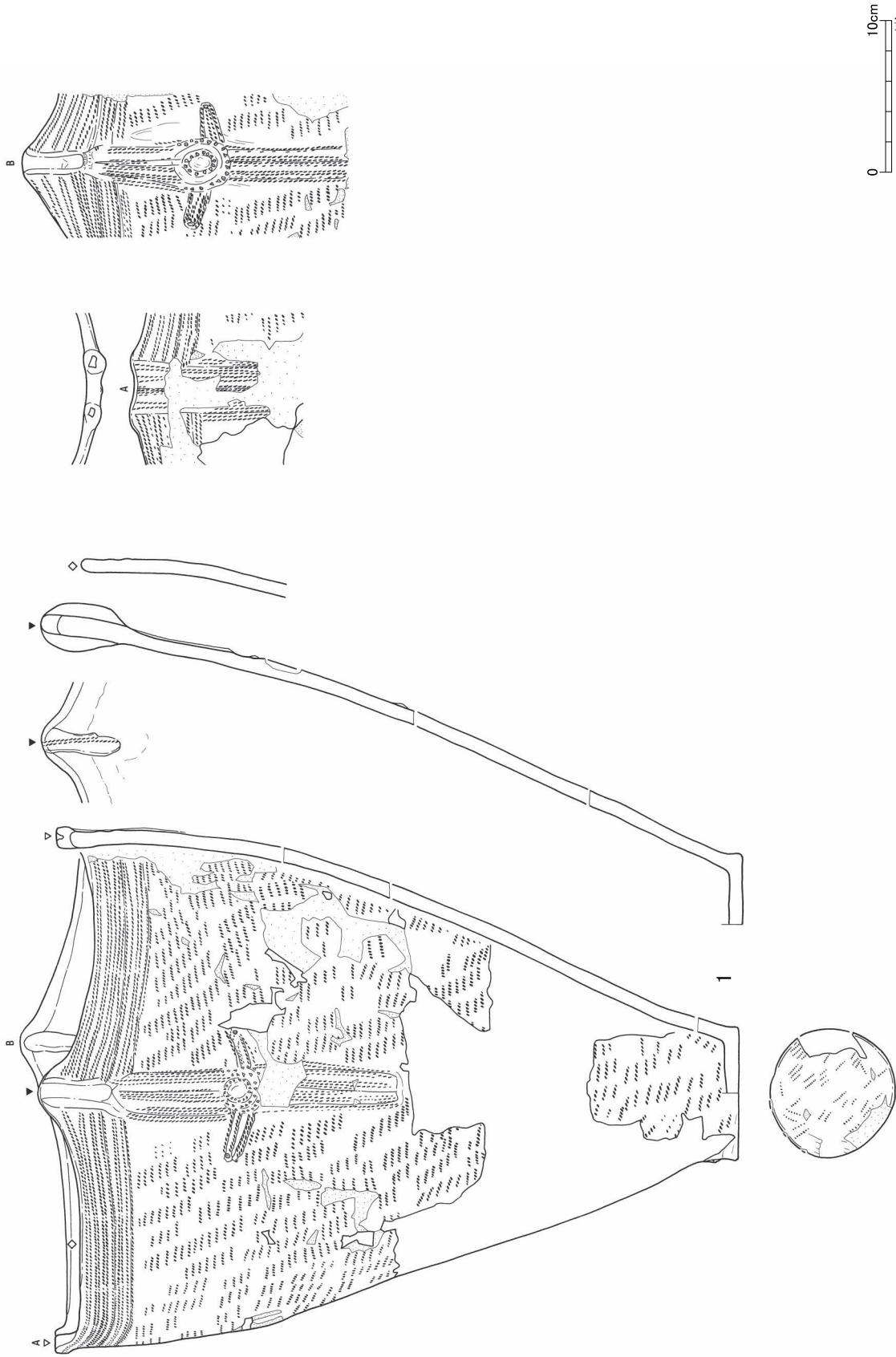
掲載した土器はいずれとも下田ノ沢Ⅱ式。

ⅢP-1（図Ⅳ-97、表Ⅳ-14、図版63-1・2）

1はⅢP-24で出土した土器片と接合した。2は包含層から出土した同一個体片。胴が膨らみ口縁部が内傾する器形。口縁は細い捩りの縄線文が細い隆起線を挟んで上下に複数横環する。隆起線は3本組で垂下して下部で閉じる区画を構成する。上部を欠くが、おそらく突起の下であろう。細い隆起線上には刻みが充填されている。下田ノ沢Ⅰ式。

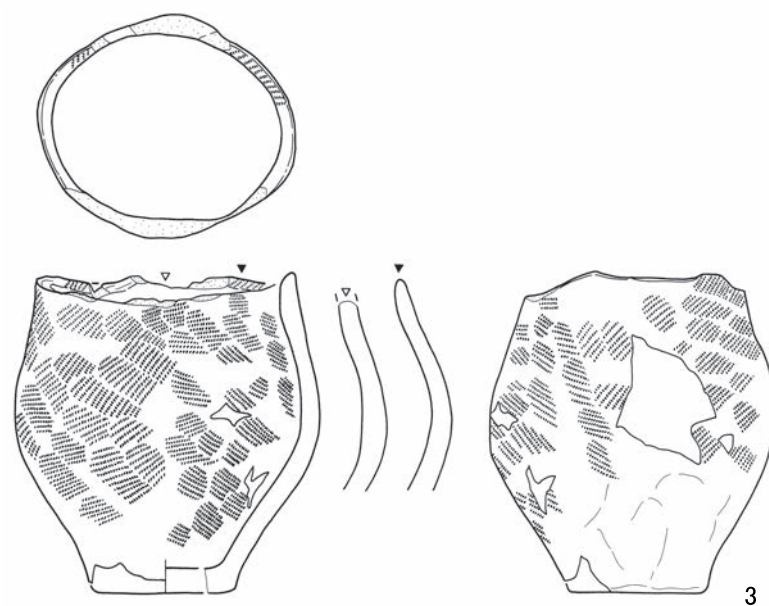
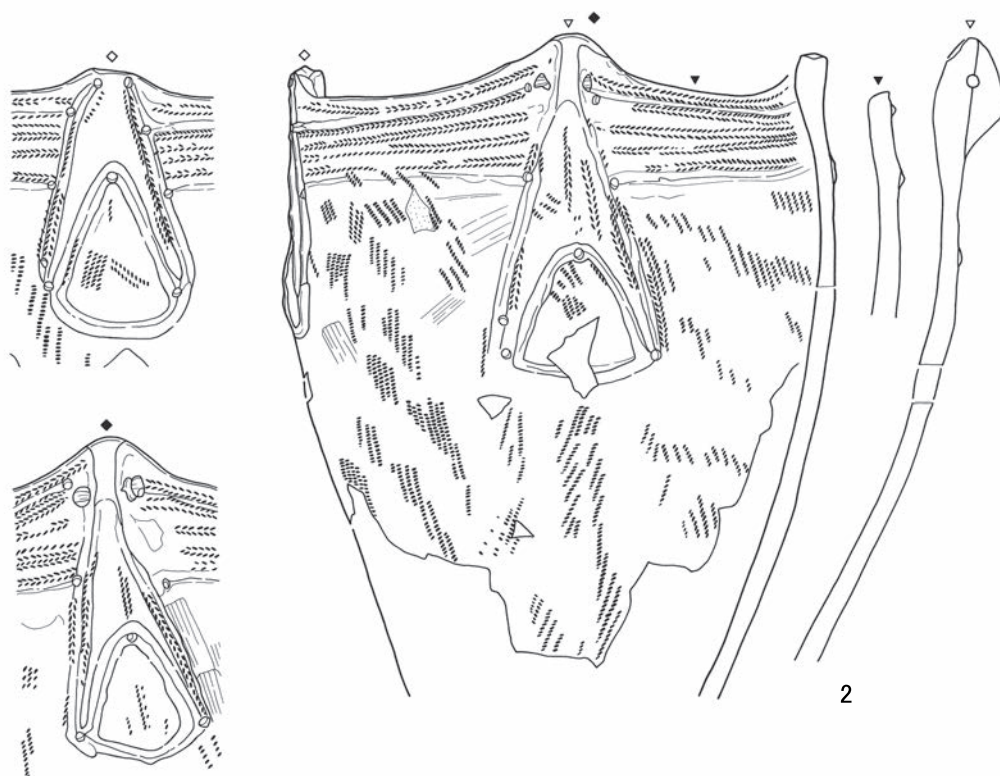
ⅢP-7（図Ⅳ-97、表Ⅳ-14、図版64）

ⅢH-12



図Ⅳ-95 Ⅲ層遺構出土の土器 (13)

ⅢH-12



図Ⅳ-96 Ⅲ層遺構出土の土器 (14)

1は口縁部の無文地に縄線文が4条横環する。地文は条間が開いたLR原体の縄文。下田ノ沢I式。

ⅢP-8 (図IV-97、表IV-14、図版64)

1は無文地に縄線文が複数横環する。縄線は2本組のもの1本のもの混在する。胴部は撚糸文の縦位回転施文。胴部が膨らみ口縁部が内傾する器形。下田ノ沢I式。

ⅢP-11 (図IV-98、表IV-14、図版64)

1は瘤状に隆起した小突起がある。突起の頂部には垂直方向の刺突が加えられている。突起から細い隆起線が垂下、下部で分岐して横に長い紡錘形をなし、左右両端から再び単線化して横環する。隆起線上には刺突が充填されている。口縁部は無文地に細い撚りの縄線が複数巡る。縄線は突起をはさんで左側が5条、右側が6条。6条中央の縄線間にも刺突が充填されている。口唇は縄線を刻み状に深く施文したところと、2本組の縄線を密に浅く施文したところと、両者が二重施文されているところがある。胴部は無文。下田ノ沢I式。

ⅢP-12 (図IV-98、表IV-14、図版64)

1は肥厚してわずかに突き出た突起がある。小突起の頂部に垂直方向の刺突が加えられ、細い隆起線が垂下、隆起線上には中空の工具による刺突が加えられている。内面からは突瘤が加えられているが、表面にはほとんど表れていない。地文は撚糸文を斜位、あるいは横位に施文。下田ノ沢I式。

ⅢP-16 (図IV-98・99、表IV-11・14、図版64)

1は坑口部で出土した小型土器。容量は0.5L。4つの波頂部がある緩やかな波状口縁。波頂部付近はわずかに肥厚する。胴部上半の断面は楕円気味、胴部下半～底面の断面は円形の器形。胴部中央が張り出して、2本組の刺突が横環する。上部は複数組の刺突が斜位に施され三角形が連続する構成で、間を3本組の刺突が短く縦方向に施されている。斜行する刺突は3本のもの途中で2本加わって5本になるもの、4本のもの様々に刺突の本数を変えている。口縁部は2本組の刺突が波状のラインを縁取りしている。一方下半部は1本単位の刺突が6本垂下する。確認できる範囲で6本中4本は、上部の斜位の刺突の交点を起点とする。数字に対する意識性が窺われる施文。地文は精緻に撚った原体によるLR縄文の横走。口縁部内面にも施文されている。2は覆土中で出土した口縁部片。2本単位の縄線が複数巡り、斜めの細い隆起線が「く」の字に施文され、屈曲部と端部には刺突が加えられている。1・2とも下田ノ沢II式。

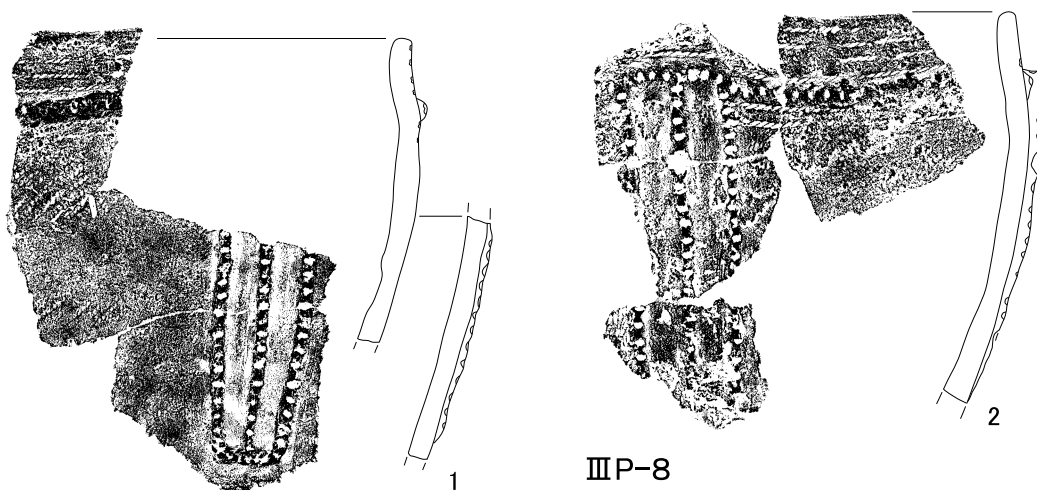
ⅢP-24 (図IV-99、表IV-11・14、図版64)

1は2種2対の突起がある土器。大ぶりの突起は瘤状に大きく隆起して前に突き出し、細い2本の隆起線が垂下する。瘤状の隆起部は左右がわずかにへこむ。当初、横方向の貫通孔があると思われたが、指で軽くへこませただけで、貫通はしていなかった。小さい方の突起は、やや小さく突き出して、細い1本の隆起線が垂下する。細い隆起線は上には刺突が充填され、口縁も横環する。地文はRL原体を斜位回転施文した縦走縄文。口唇上にも施文されている。胴部が膨らみわずかに内傾する器形。内面はヘラ状工具による横方向の調整。2は隆起して前方に突き出した口縁部片。横方向に貫通孔が穿たれ吊耳状を呈する。その下部は横方向に肥厚した突き出しがあり、縁辺に縄が押捺されている(縄の押捺は口唇上にも施されている)。この突き出し状の肥厚は上部が受け皿状に凹みを呈する。3は下田ノ沢式の底部片。外底面に7～9mm間隔で縄線を施文している。部分であるが縦横に施文されてい

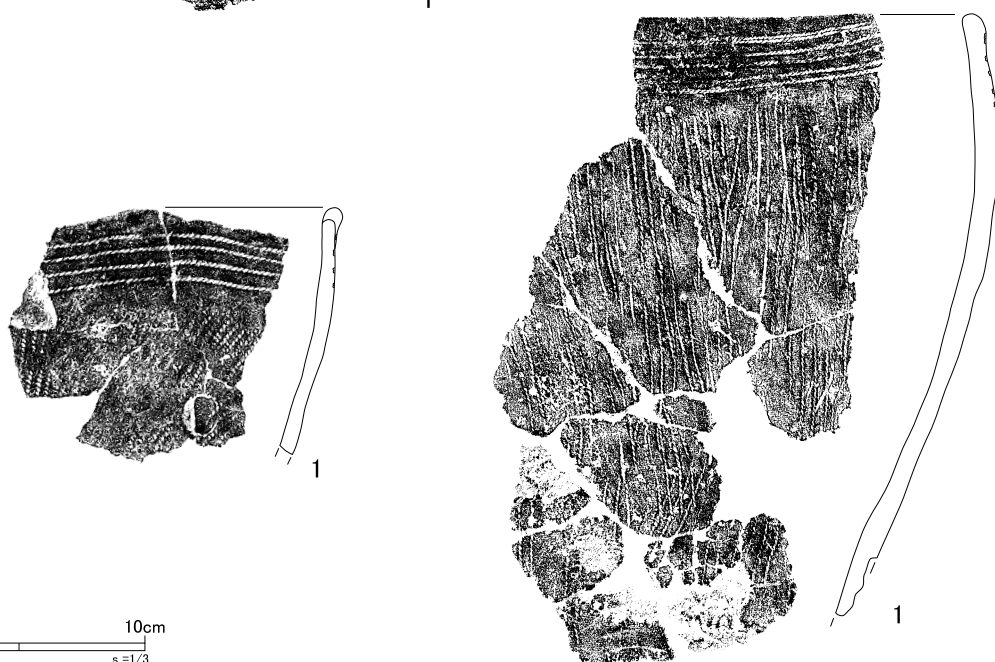
ⅢH-12



ⅢP-1

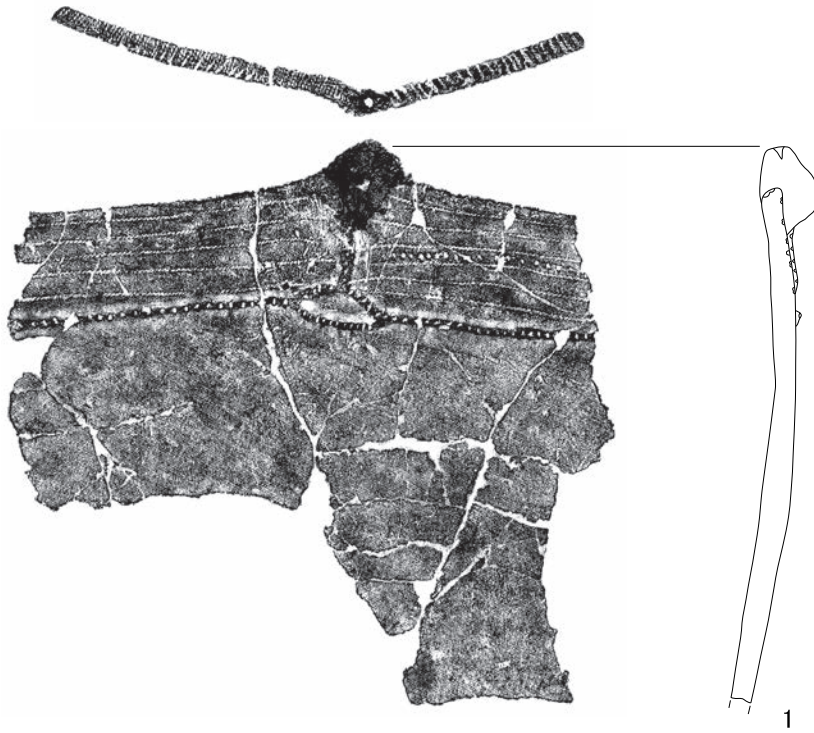


ⅢP-7

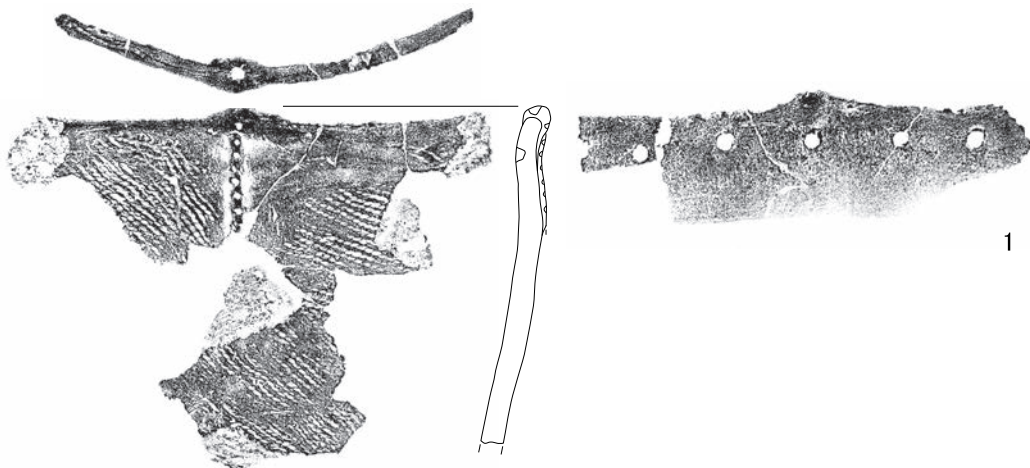


図Ⅳ-97 Ⅲ層遺構出土の土器 (15)

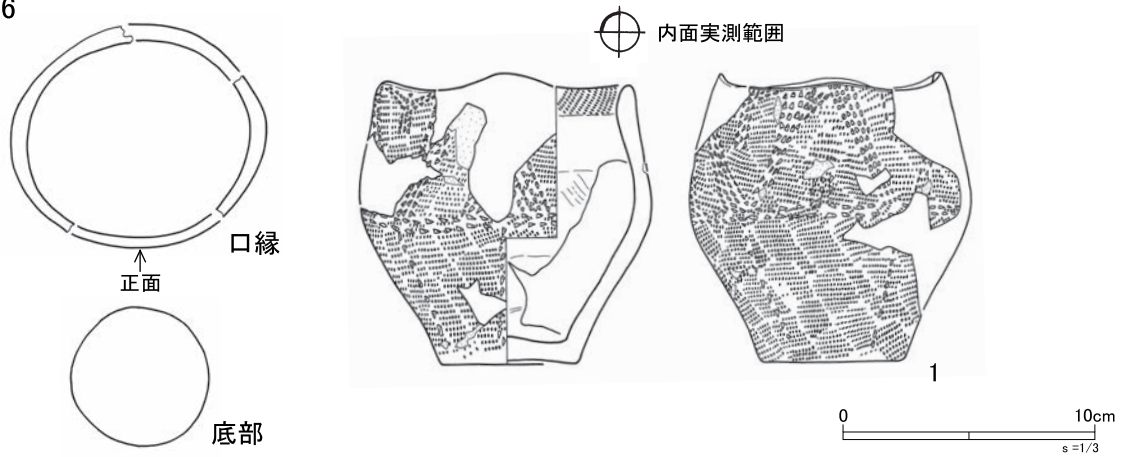
ⅢP-11



ⅢP-12

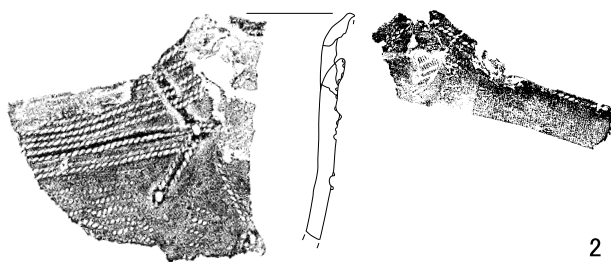


ⅢP-16

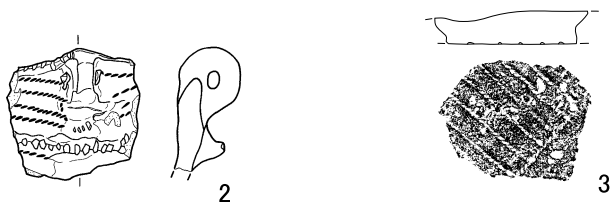
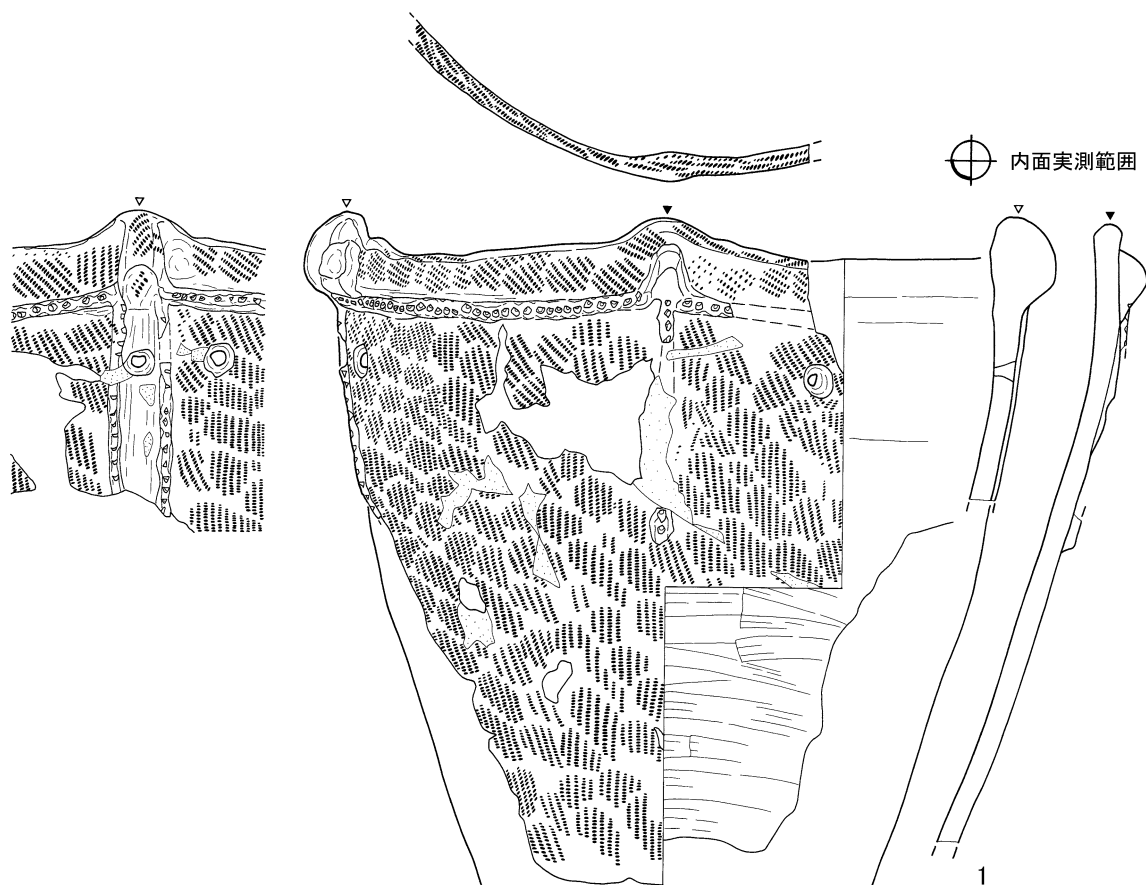


図Ⅳ-98 Ⅲ層遺構出土の土器 (16)

ⅢP-16

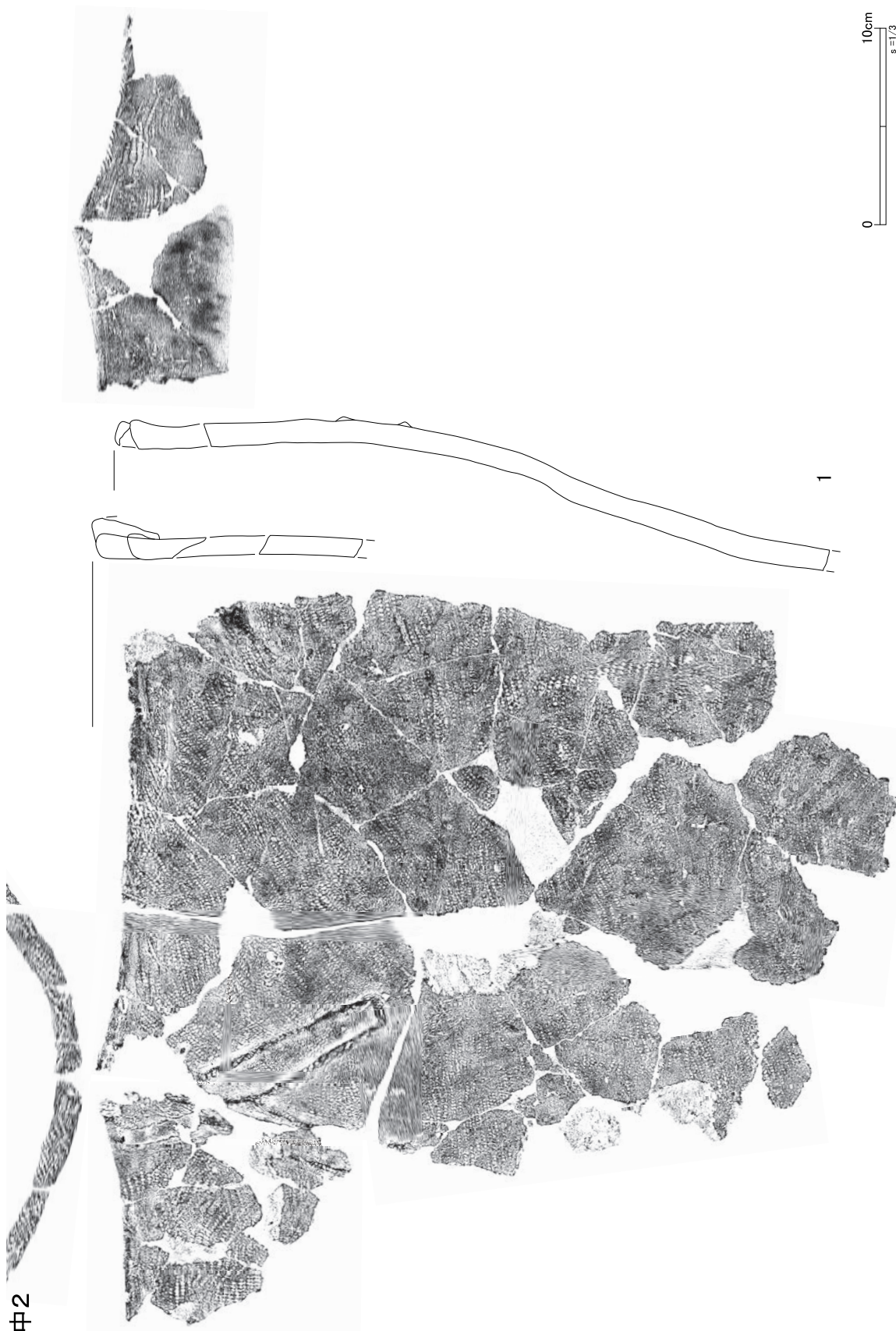


ⅢP-24



0 10cm
s=1/3

図Ⅳ-99 Ⅲ層遺構出土の土器 (17)



図IV-100 Ⅲ層遺構出土の土器 (18)

る。類例は羅白町^{しゅんかる こたん}ボン春 菟古丹川北岸遺跡（羅白町教委 1988）において多くみられる。

1は下田ノ沢Ⅰ式。2は下田ノ沢Ⅱ式と考えられる。

土器集中2（図Ⅳ-100、表Ⅳ-14、図版65）

一個体のまとまりとして記録したが、復元には至らなかった。緩やかな波状口縁で、波頂部下には細い隆起線による細長い区画を斜方向に交差させている。地文はLR縄文。施文方向はランダムで、重なり合っている。口唇上および口縁部内面にも施文されている。下田ノ沢Ⅰ式。

・石器

ⅢH-1（図Ⅳ-101、表Ⅳ-17、図版77）

石器等は348点出土した。フレイク・チップ312点を除くと36点である。石鏃8点、スクレイパー11点、たたき石9点、砥石3点等が出土している。1～5は三角形の石鏃。1は平基。2～4は弱凹基。5は凹基。先端部を欠く。6・7は石錐。7は石槍またはナイフの破片等を転用した可能性が考えられる。両側縁の磨滅が顕著。8は両面調整石器。9～14はスクレイパー。小型の剥片を素材とし、周縁に二次加工を施して刃部を作出したもの。刃部は半周程度のものと同周するものがある。掲載した剥片石器はすべて黒曜石製。15～17はたたき石。扁平礫を素材とし、周縁部と面を使用している。いずれも床面で出土した。15・17は泥岩製。16は粗粒玄武岩製。18は石鋸。砥石片を転用した可能性がある。砂岩製。19は砥石。裏面を除いて、使い込まれており、使用面が重なり合っている。砂岩製。

ⅢH-6（図Ⅳ-102、表Ⅳ-17、図版77）

石器等は120点出土した。フレイク・チップ73点を除くと47点である。床面で出土したものはなく、確実にこの住居跡に伴うと判断できるものはない。たたき石16点、スクレイパー11点が比較的多い。1～3は石鏃。1・2は三角形。3は木葉形あるいは有茎凸基。横に膨らむ形状で、下部を欠損する。4・5は石錐。4は菱形の石鏃を転用したもの。5は縦長の不定形剥片を素材とする。6はスクレイパー。小型で刃部がほぼ全周する。7は楔形石器。掲載した剥片石器はすべて黒曜石製。8は厚みのある小型の石斧。全面が研磨されている。緑色泥岩製。9はたたき石。厚みのある礫を素材とし、下端を使用している。側縁に使用面があり、すり石としても転用していたとみられる。安山岩製。

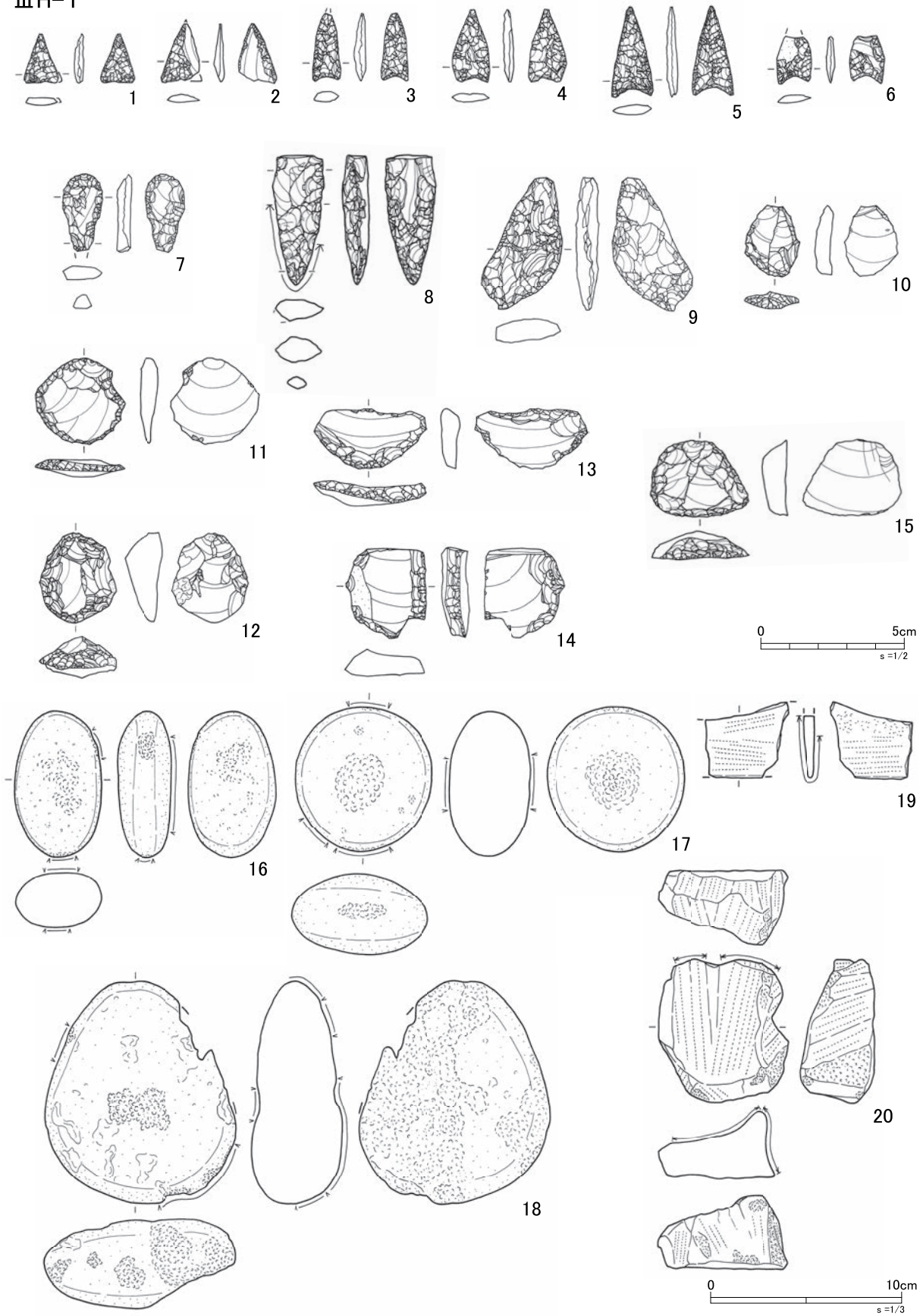
ⅢH-10（図Ⅳ-102、表Ⅳ-17、図版77）

石器等は56点出土した。フレイク・チップ31点を除くと25点である。床面から出土したものはなく、確実にこの住居跡に伴うと判断できるものはない。スクレイパーが13点と比較的多い。ほか石鏃、石槍またはナイフ、たたき石、砥石が各2点出土、石錐、ナイフ、U・Rフレイク、石斧が1点ずつ出土している。1・2は石槍またはナイフ、1は幅広の長い柄がある。2は大型の菱形。3は石錐。三角形の剥片を素材とし、使用部の縁辺に微細な剥離で刃部を作出している。掲載した剥片石器はすべて黒曜石製。2に関しては縄文時代中期末～後期前葉の北筒式にともなうものであろう。4は板状の砥石。両面を使用しており、方向の異なる使用面が重なり合っている。砂岩製。

ⅢH-11（図Ⅳ-103、表Ⅳ-17、図版78）

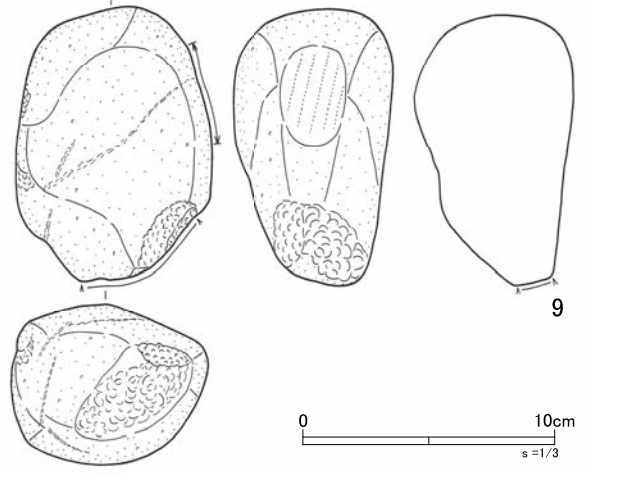
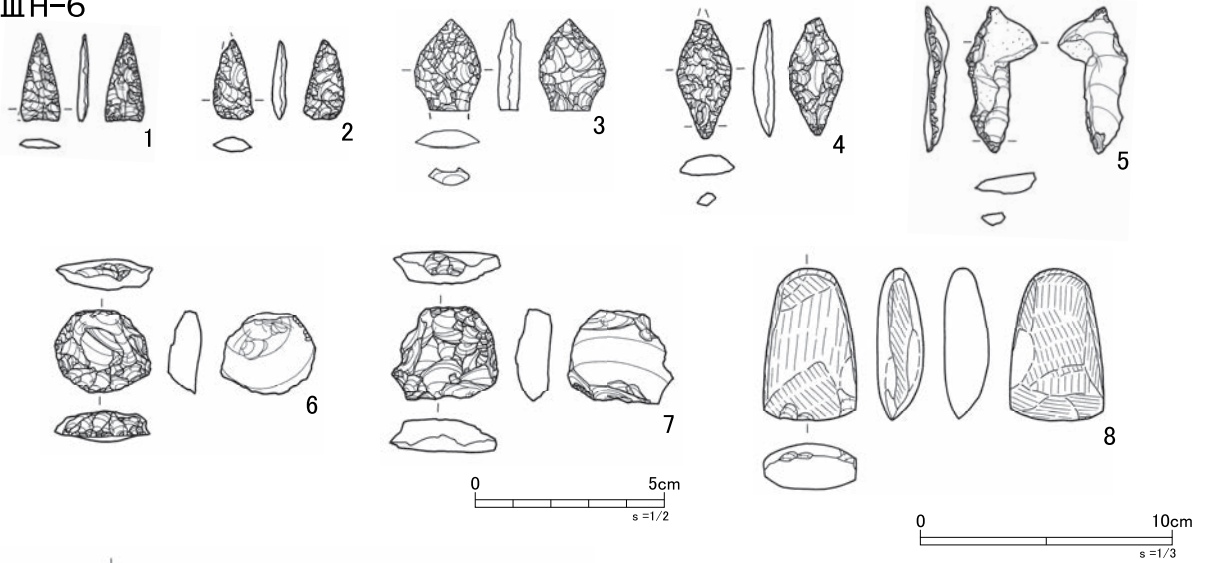
石器等は27点出土した。フレイク・チップ16点を除くと11点である。床面から出土したものはなく、確実にこの住居跡に伴うと判断できるものはない。スクレイパー7点が比較的多い。1はたたき石。面と側縁を使用している。裏面は割れ面。覆土10層からの出土。砂岩製。

ⅢH-1

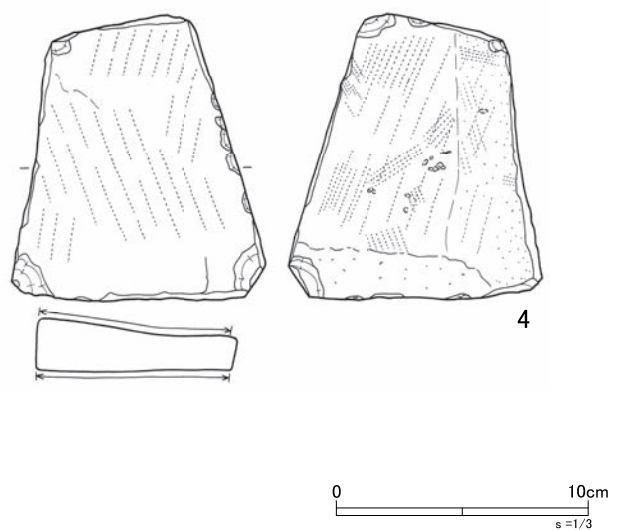
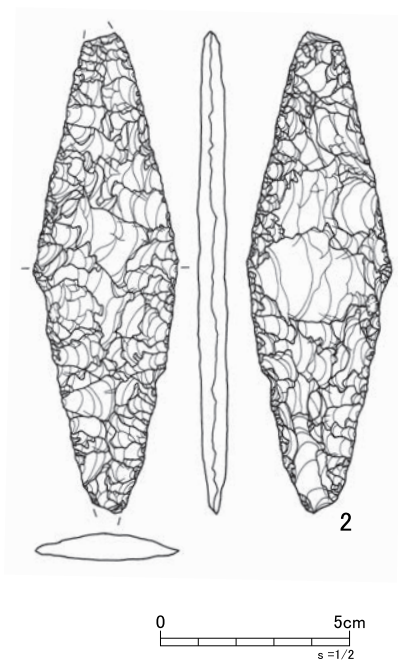
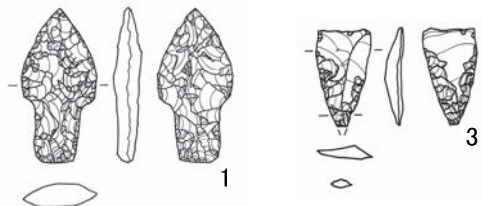


図Ⅳ-101 Ⅲ層遺構出土の石器（5）

ⅢH-6



ⅢH-10



図IV-102 Ⅲ層遺構出土の石器(6)

Ⅲ H-12 (図Ⅳ-103・104、表Ⅳ-17・18、図版78)

石器等は1,359点出土した。フレイク・チップ1,267点を除くと92点である。Ⅲ H-12はフレイク集中が4カ所(HFC-1~4)あり、1,267点中1,129点はフレイク集中のものである。それ以外のもので床面および床面直上から出土した石器は182点を数える。92点の石器の内訳は、スクレイパー41点、石槍またはナイフ14点、たたき石7点、石鏃6点、石斧5点が比較的多い。石槍またはナイフ14点のうち6点は床面直上のフレイク集中HFC-2から出土したものである。また、石鏃および石槍またはナイフの形状は、いずれとも菱形あるいはかえしの不明瞭な有茎凸基である。羅臼町ポン春苧古丹川北岸遺跡等でまとまった類例があり、下田ノ沢式に伴うものとみられる。

1・2は菱形の石鏃。3・4は石槍またはナイフ。2と3は床面での出土遺物。5・6は石鏃。5は細長く平たい剥片を素材とし、縁辺に微細な剥離を加え、下端を使用している。6は剥片の両端を二次調整で鋭利に作出し、使用している。7はつまみ付きナイフ。片側周縁加工で刃部を作出している。つまみの抉りと左側縁が内湾する。8はナイフ。右側縁が直線気味で、左側縁がやや外に膨らむ。頁岩製。9~16はスクレイパー。いずれも小型の剥片を素材とし刃部を作出したもの。刃部は全周するものとしなないものがあり、正面側に原石面を残すもの(13・15)もある。また薄手の剥片を素材としたもの(9~11)と、厚手の剥片を素材として急角度の刃部のもの(13~16)とがある。10は床面、16は床面直上で出土したもの。掲載した剥片石器は8のナイフを除き、すべて黒曜石製。17・18は石斧。いずれも短冊形で緑色泥岩製。17は全面研磨。18の裏側は平坦な素材面が残る。18は床面直上の出土。19は板状の砥石。床面直上からの出土。砂岩製。

20はHP-8から出土した石槍またはナイフ。菱形気味の形状。黒曜石製。21~29はHFC-2の出土品。21~27は石槍またはナイフ片。いずれも折損した破損品で、接合を試みたがつかなかった。菱形のものが破損したものとみられる。28は両面調整石器。29はスクレイパー。片面全面加工。厚手の剥片を素材とし、刃部は部分的に急角度である。

Ⅲ H-12出土石器については、続縄文時代下田ノ沢式期の可能性があるものを抽出して掲載したが、つまみ部を含めノッチ状の刃部があるつまみ付きナイフ(7)は、北筒式期の所産と考えられる。

Ⅲ H-16 (図Ⅳ-105、表Ⅳ-18、図版79)

石器等は17点出土した。フレイク・チップ13点を除くと4点である。1は石鏃。幅広の基部を持ち、側縁が外に軽く膨らむ中広形。黒曜石製。2は石斧。全面研磨がなされている。基部の両側縁には敲打痕がある。安山岩製。

Ⅲ P-2 (図Ⅳ-105、表Ⅳ-18、図版79)

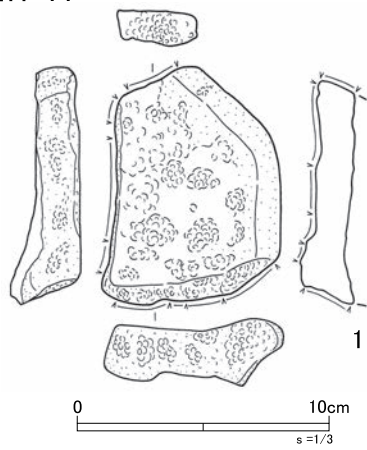
石器等は21点出土した。フレイク・チップ19点、砥石2点。1は板状の砥石。表裏面を使用しており、使いこまれて皿状に凹んでいる。使用面に敲打痕があり、台石的な用途も兼ねている可能性がある。2点が接合した。砂岩製。

Ⅲ P-6 (図Ⅳ-105、表Ⅳ-18、図版79)

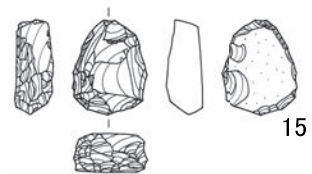
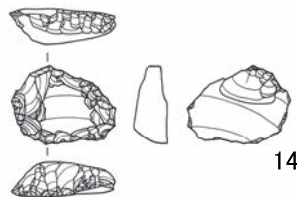
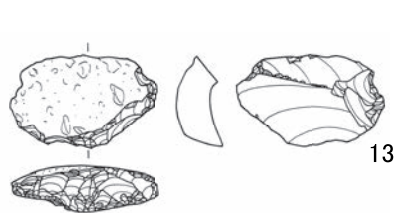
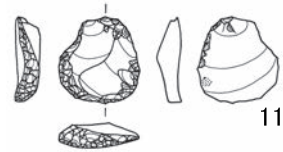
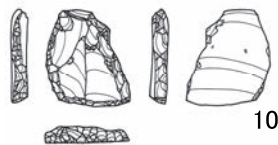
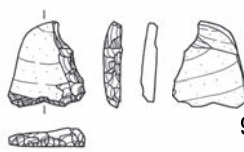
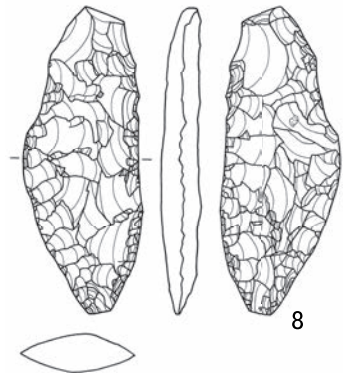
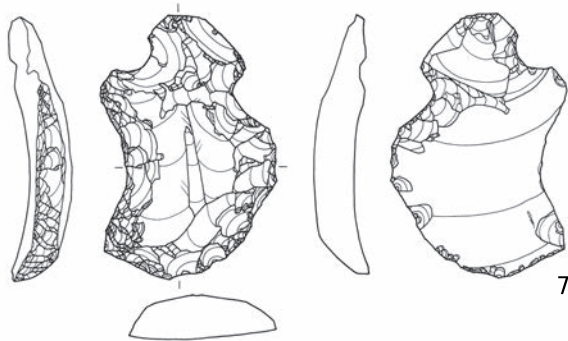
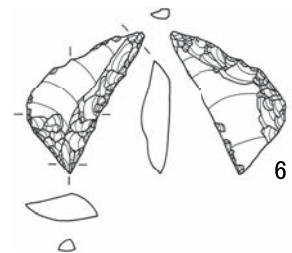
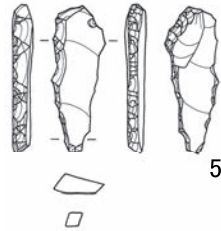
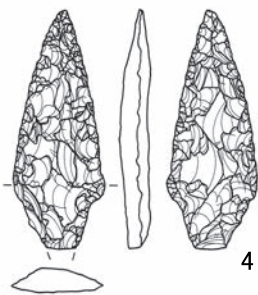
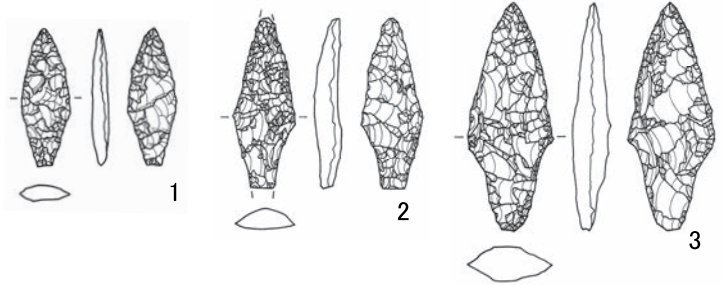
石器等は10点出土した。うち8点はフレイク・チップ。2点はたたき石。1・2はたたき石。いずれも拳大の礫を素材とする。1は下端を使用している。2は周縁と面を使用している。1は玄武岩製、2は粗粒玄武岩製。

Ⅲ P-12 (図Ⅳ-105・106、表Ⅳ-18、図版79)

ⅢH-11



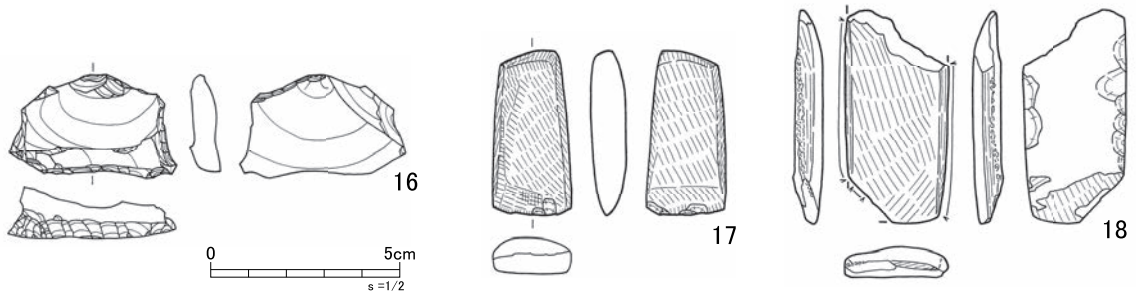
ⅢH-12



0 5cm
s=1/2

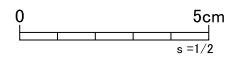
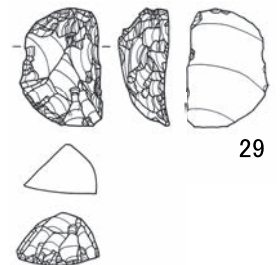
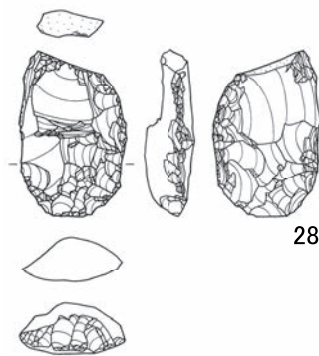
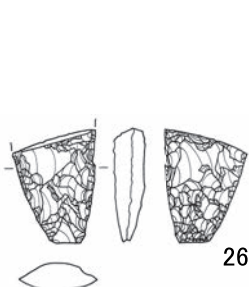
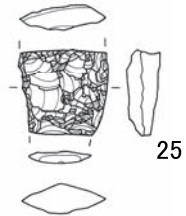
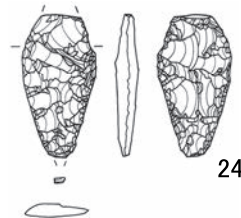
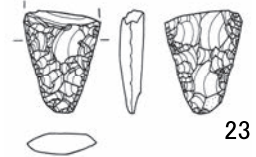
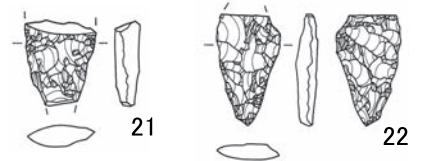
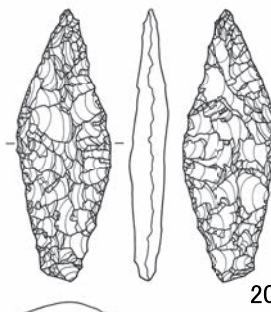
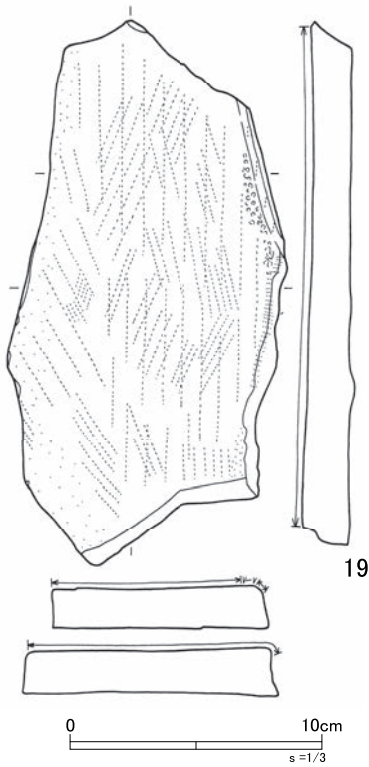
図IV-103 Ⅲ層遺構出土の石器(7)

ⅢH-12



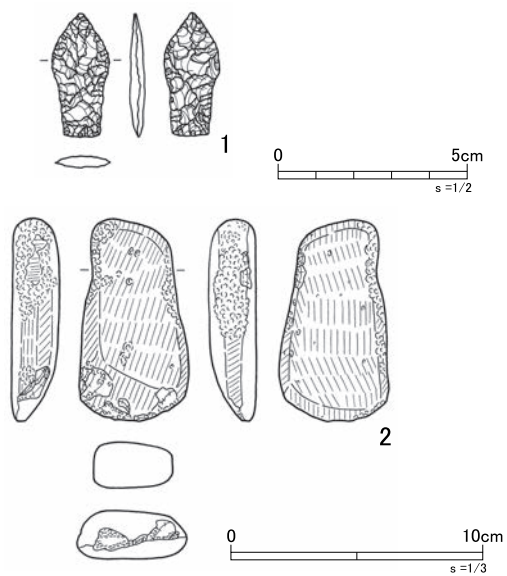
ⅢH-12 HFC-2

ⅢH-12 HP-8

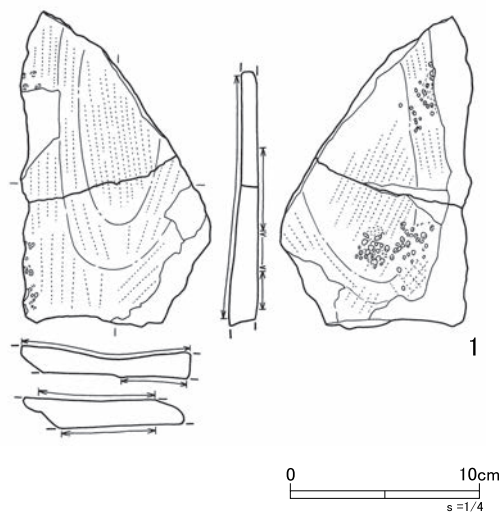


図Ⅳ-104 Ⅲ層遺構出土の石器(8)

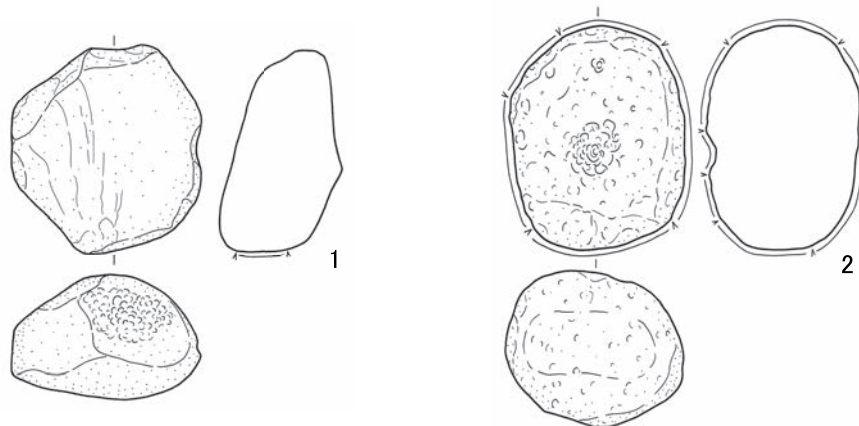
ⅢH-16



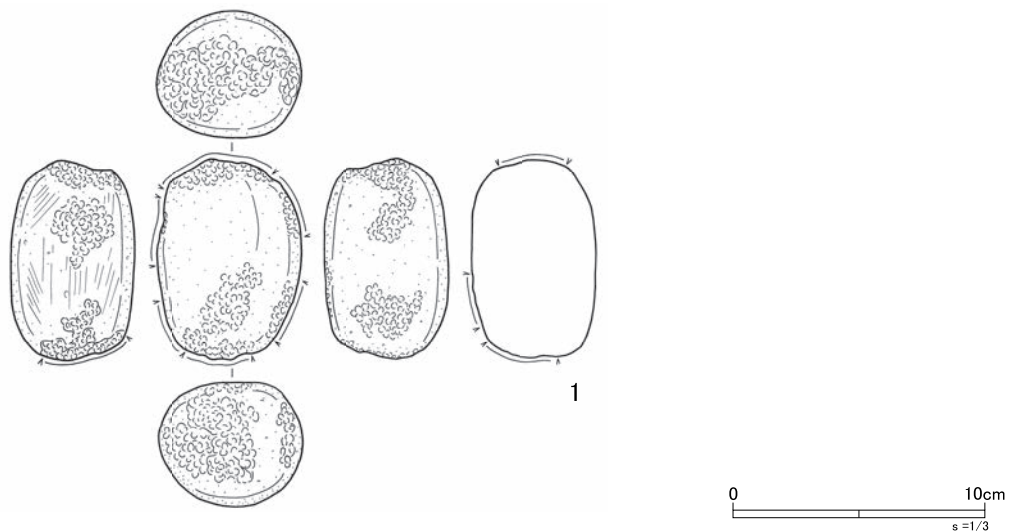
ⅢP-2



ⅢP-6

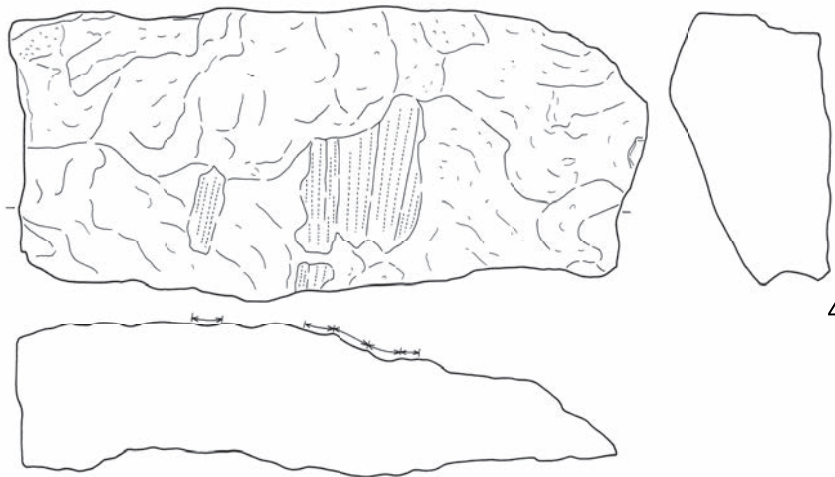
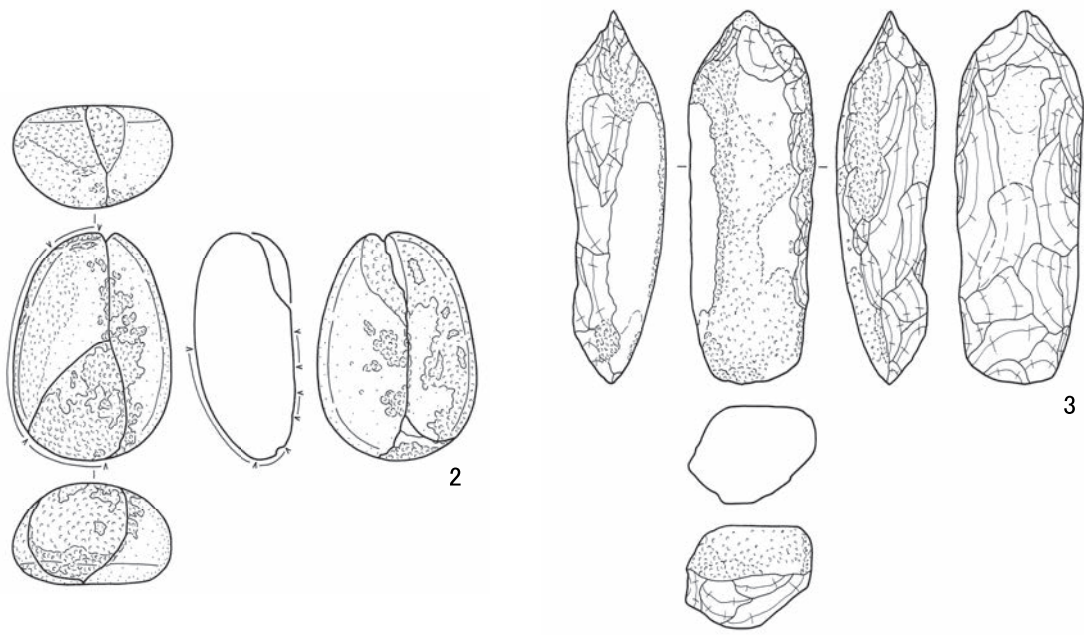


ⅢP-12



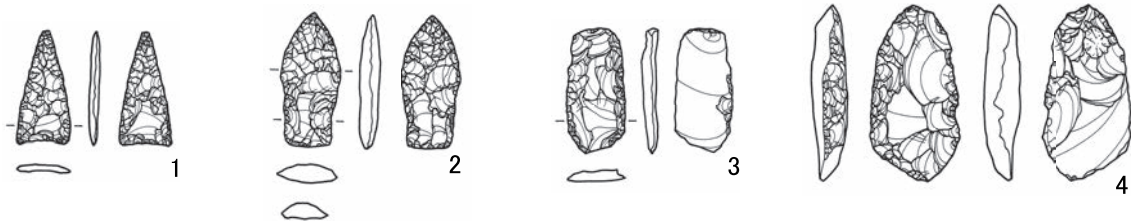
図Ⅳ-105 Ⅲ層遺構出土の石器(9)

ⅢP-12



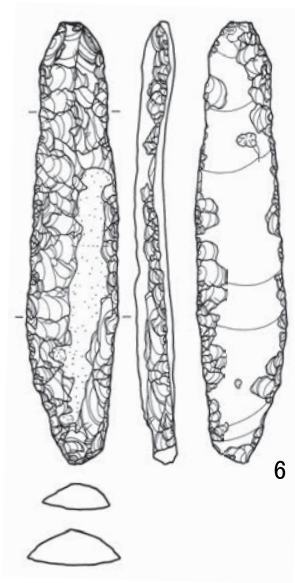
0 10cm
s=1/3

ⅢP-14

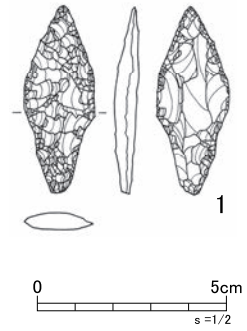
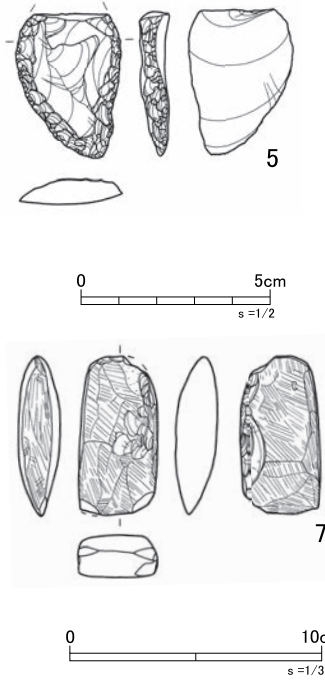


図Ⅳ-106 Ⅲ層遺構出土の石器 (10)

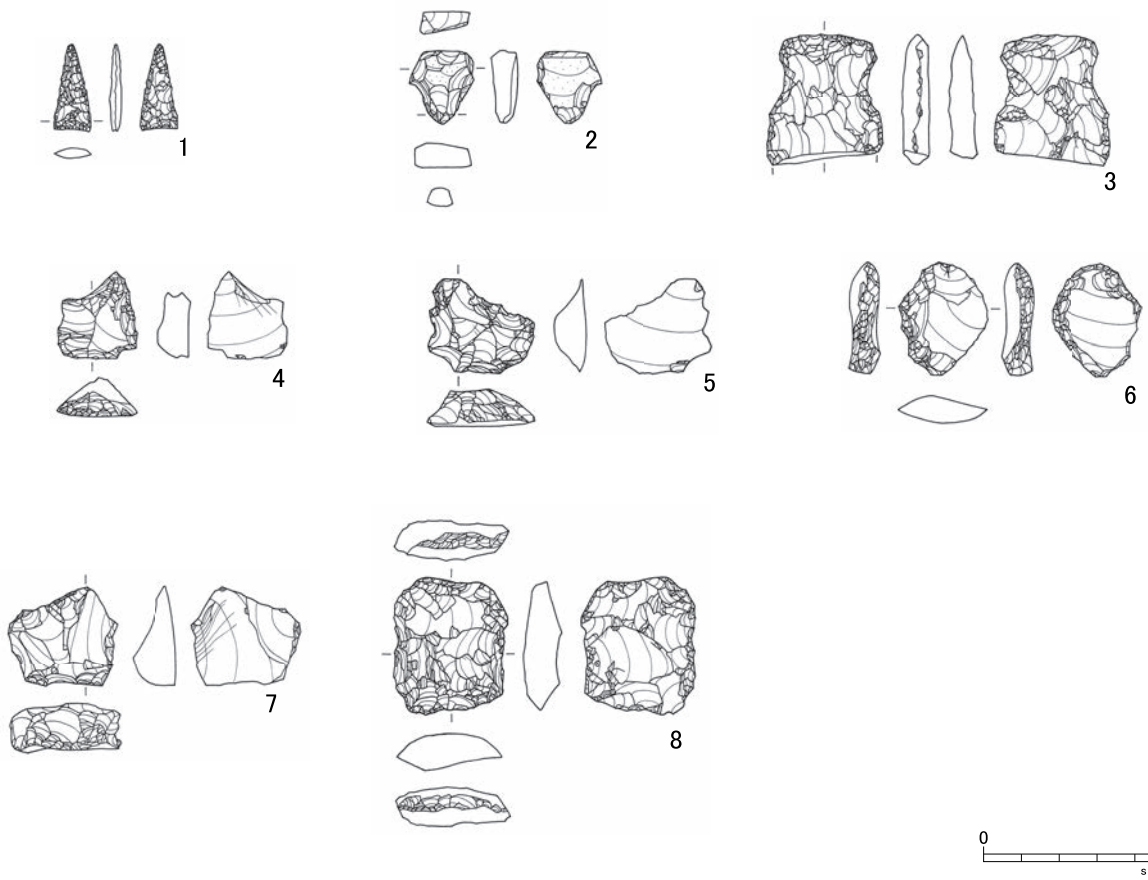
ⅢP-14



ⅢP-16



ⅢP-24



図Ⅳ-107 Ⅲ層遺構出土の石器 (11)

石器等は61点出土した。うち30点はフレイク・チップ。石器31点の内訳では、たたき石15点が比較的多い。スクレイパー6点、砥石4点と続く。剥片石器類とフレイク・チップは覆土上層で出土する割合が高い。1～3はたたき石。1・2は上下両端と面を使用している。2は3つに割れていたものを接合した。3は石斧を再加工したものとみられる。縁辺を両面から打ち欠いて、鋭い稜線を作出し、そこをたたいている。1・3は粗粒玄武岩製、2は泥岩製。4は砥石。板状の砂岩を素材とし、正面中央にだけ溝状の使用面が複数条残る。表面が全体的に剥離して、一部にだけ使用面が残ったものとみられる。

Ⅲ P-14 (図Ⅳ-106・107、表Ⅳ-18、図版79)

石器等は7点出土した。いずれも床面直上でまとまって出土したもので副葬品と考えられるもの。1・2は石鏃。1は三角形。2は幅広の基部を持ち、側縁が外に軽く膨らむ中広形。3～6はスクレイパー。いずれも長軸の側縁を刃部とする。6は細長い剥片を素材とする。1～6は黒曜石製。産地分析を委託した結果、1は置戸所山(試料番号11)、2は留辺蘂(試料番号12)、3は上土幌(試料番号13)、4～6は置戸所山(試料番号15・14・16)と産地が3か所に分かれた。7は厚みのある小型石斧。全面が研磨されている。緑色泥岩製。

Ⅲ P-16 (図Ⅳ-107、表Ⅳ-18、図版80)

石器等は24点出土した。うち18点はフレイク・チップ。1は石鏃。菱形。黒曜石製。

Ⅲ P-24 (図Ⅳ-107、表Ⅳ-18、図版80)

石器等は29点出土した。うち19点はフレイク・チップ。石器10点の内訳では、剥片石器が9点を占め、5点がスクレイパーである。1は三角形の石鏃。2は石錐。縁辺が摩耗して丸みを帯びている。3は有柄のナイフ。刃部を欠損する。4～7はスクレイパー。いずれも小型の剥片を素材とし、周縁に刃部を作出したもの。6は表裏面で半周ずつ刃部が作出され全周する。7は下端部が厚みを持ち、急角度の刃部である。8は楔形石器。四角形を呈し、上下、左右で使用している。すべて黒曜石製。

(影浦)

5 Ⅲ層 重複する遺構と遺物

(1) 概要

台地上の西側縁辺部、グリッド e～h の10～12区において、時期の異なる竪穴住居跡が重複して検出した。台地の先端部が複数時期に渡って選好されたと考えられる。重複エリアで住居跡の調査と連動して検出した土坑や焼土もまとめて取り扱う。原則として、時系列に古い遺構から新しい遺構へとという序列で報告書を構成しているが、ここでは例外的に調査の順番、すなわち上部で検出した新しい住居跡から古い住居跡という序列で構成した。V層の遺構であるためここに組み込まなかったが、下部からは縄文時代早期後半の竪穴住居跡 V H - 3 も検出した。(影浦)

(2) 遺構

Ⅲ H - 9 (図Ⅳ-108～110、表Ⅲ-10・Ⅳ-3、図版27、28、29-1・2)

位置 e10・e11・e12・f10・f11・f12・g11区 平面形態 おおむね方形

規模 (5.62)×5.24/(5.05)×4.70/0.22m

確認・調査 調査区西部の台地上、f11区付近をⅢ層上面まで掘り下げ、Ⅱ層が落ち込む広い範囲を検出した。さらに広域に少し掘り下げ、隅丸形状の黒色土とその周囲にMaパミスを多く含む土壌を検出した。十字設定でトレンチ調査を行ったところ、まもなく多数の礫が濃密に出土した。礫を避けてトレンチを東方・南方へ延長し土層確認すると、複数の大型遺構が重複していることがわかった(後述のⅢ H - 14・15)。そこでまず黒色土(覆土1層)の上位を掘り下げたところ、多数の礫集中ほか遺物が一面に出土した。出土状況を記録後、さらに覆土を掘り下げ、底面と焼土・炭化材の集中場所、壁の立ちあがりを検出し、竪穴状の遺構を確認した。上位の礫集中等は、竪穴のくぼみを隅丸形状に整えて利用した、いわゆる「上層遺構」にあたると思われる。

覆土 大部分がⅢ層相当の黒色土(1層)である。西側～南側の壁際には、Ma-f火山灰を多量に含んだ黄褐色土(2層)が堆積する。

床面・壁 底面はほぼ平坦で、北側ではⅢ層中にとどまることが確認されたが、大部分が下位の竪穴住居跡Ⅲ H - 14の覆土となっている。壁はやや急に立ち上がる。

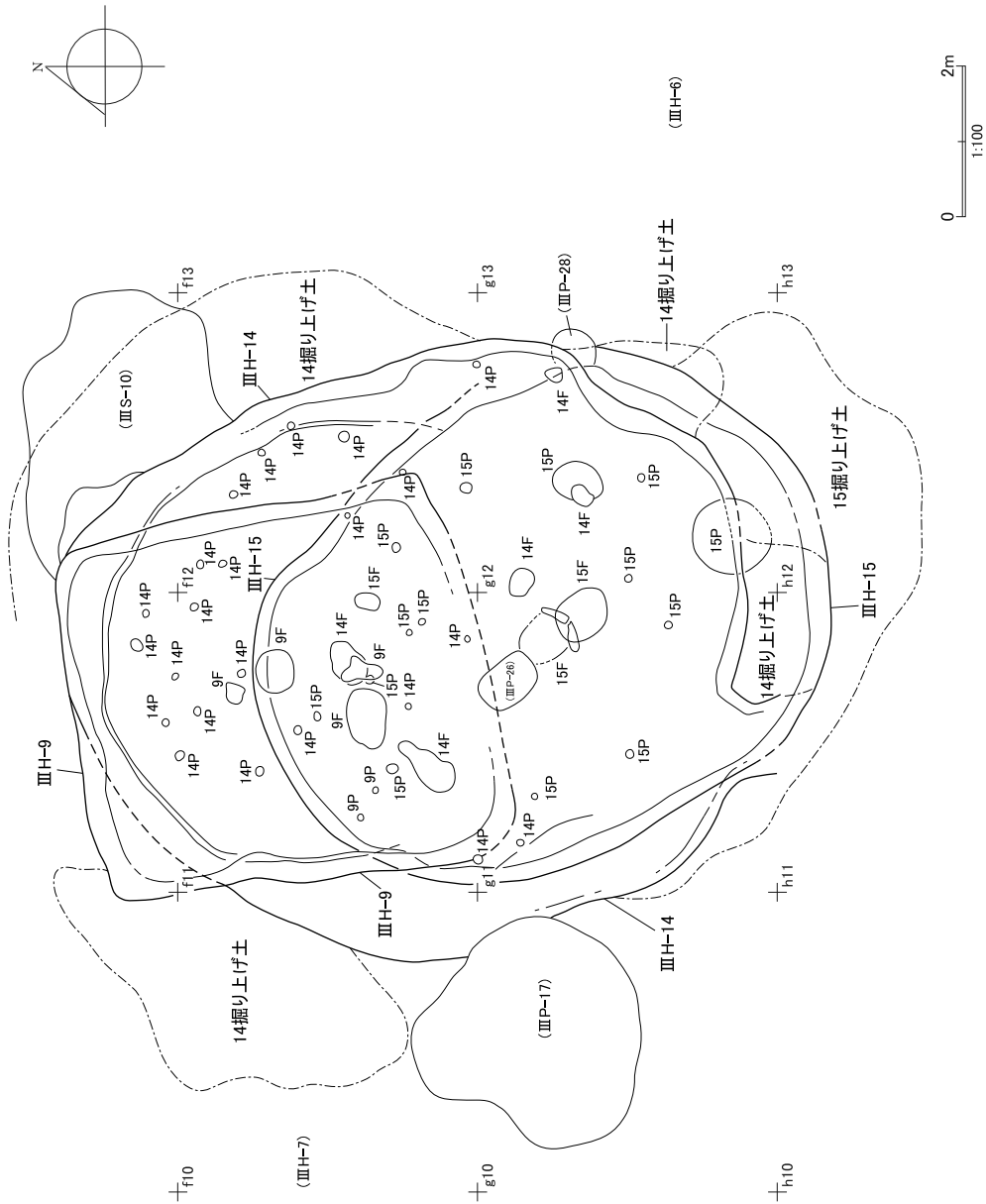
付属遺構 覆土1層上位で礫集中4か所(H S - 1～4)、覆土1層下位で炭化材集中4か所(H F C - 1～4)、床面とした平坦面で焼土4か所(H F - 1・2)・柱穴状小土坑2基(H P - 1・2)を検出した。

礫集中は、それぞれ竪穴の壁寄りの位置で検出した。長楕円体のいわゆる「棒状礫」を主体とする礫が50～80cmほどの範囲にそれぞれ密集する。炭化材集中H C - 1・2は竪穴西側の壁寄り、覆土1層～2層上面で検出した。枝材等が多くみられる。H C - 3は礫集中H S - 4の直下で検出した。板状の材が多く観察される。H C - 4は竪穴南東隅で内側に傾斜して出土した。

焼土H F - 1は、長軸約80cmの楕円形の範囲が強く被熱している。H F - 2・3は小型でやや不整形である。H F - 4は竪穴中央に位置する約60cmの円形の地床炉で、椀状のくぼみ内に約10cmの厚い被熱層がある。H P - 1・2は竪穴の西側で検出した、何らかの杭穴と考えられるものである。

遺物出土状況 「上層遺構」に相当する覆土1層上位で、いわゆる「棒状礫」を主体に礫が多数出土した。H S - 1で礫236点、H S - 2で礫204点(うち被熱2点)に伴ってⅧ群土器2点のほかⅥ群b類土器1点、たたき石4点が出土した。H S - 3で礫133点(うち被熱3点)とともにⅧ群土器3点、ほかにⅢ群b類～Ⅳ群a類土器2点、U・Rフレイク1点、フレイク・チップ3点が出土した。H S - 4は礫49点(うち被熱2点)とともにⅧ群土器1点、たたき石1点が出土した。なおH C - 1・2・

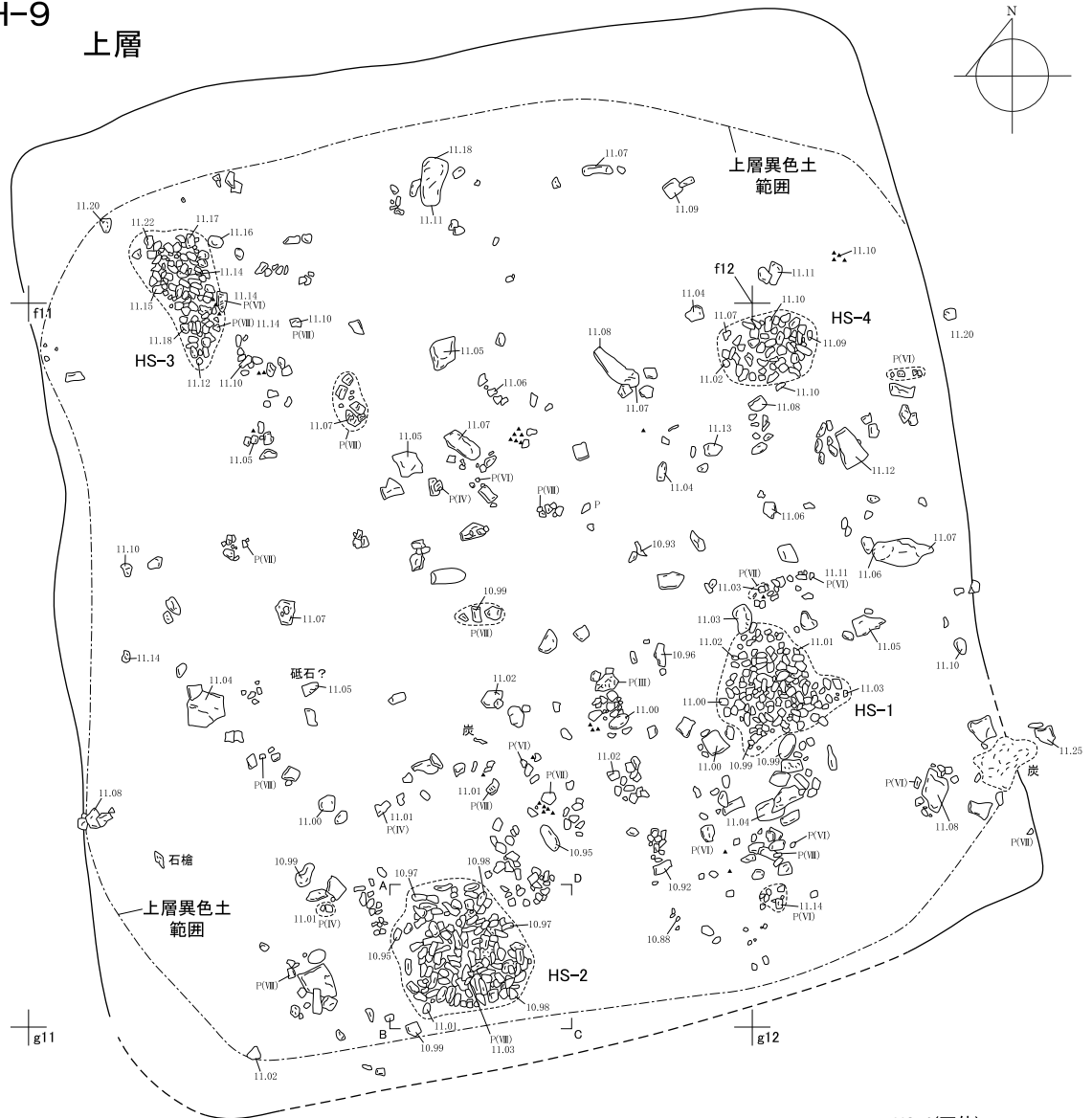
ⅢH-9・14・15



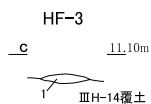
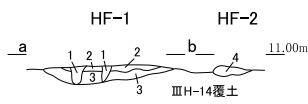
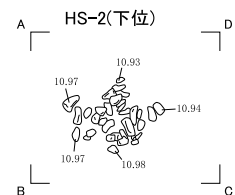
図Ⅳ-108 ⅢH-9・14・15平面

ⅢH-9

上層



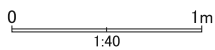
▲...剥片石器



1:HF-2の4と同

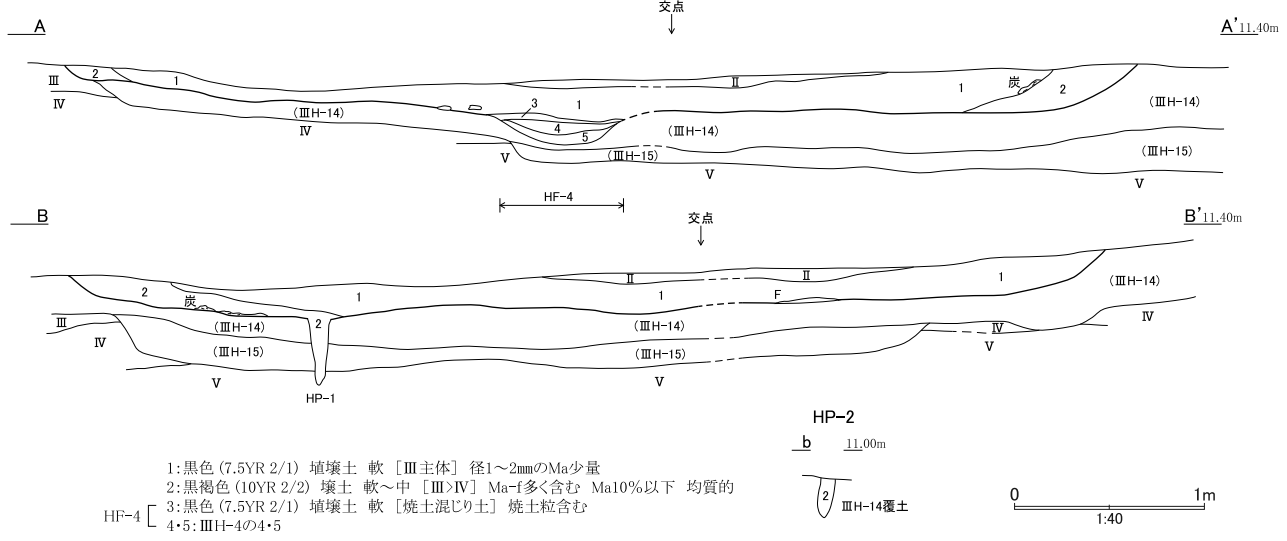
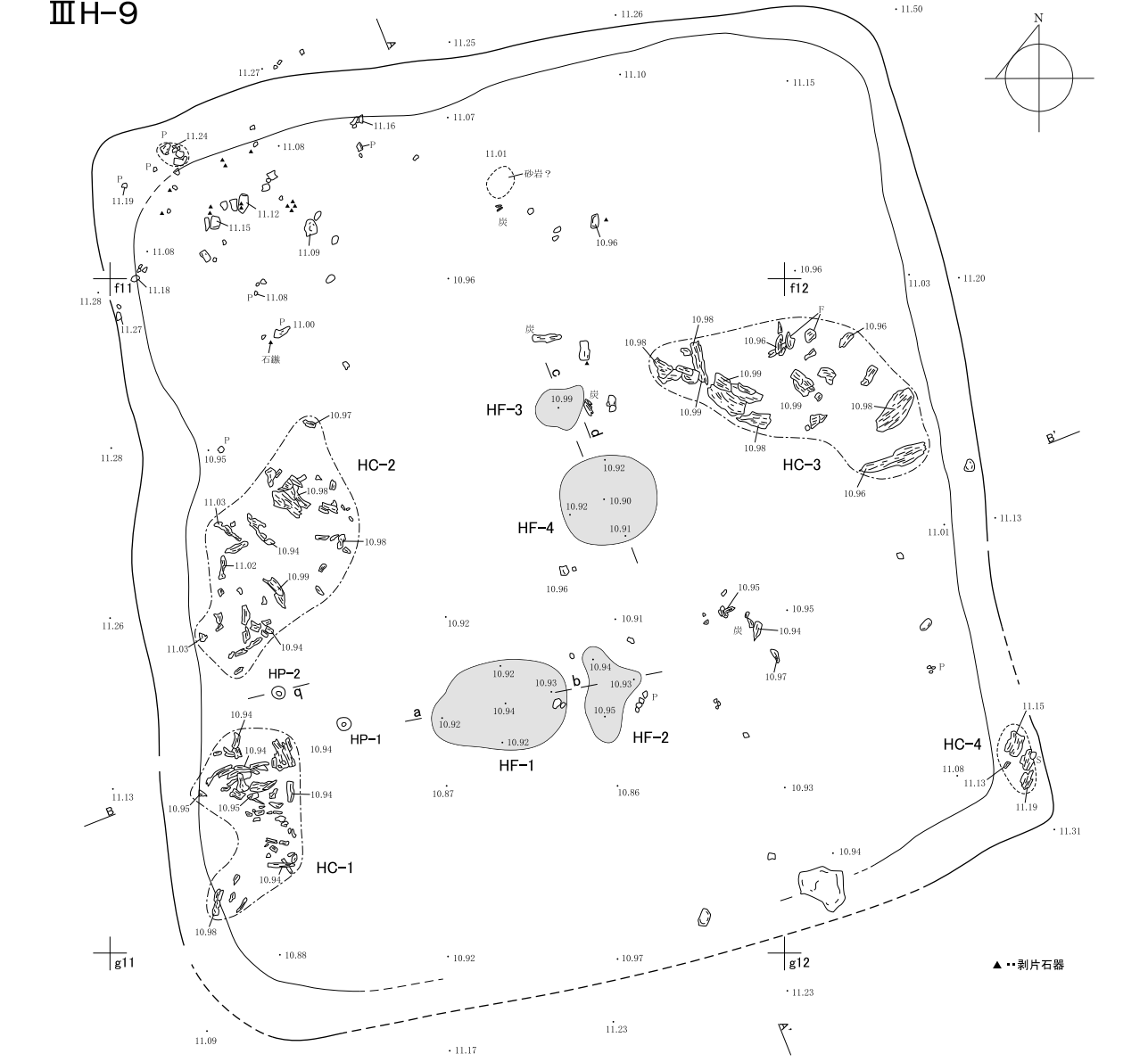
- HF-1 [1:極暗褐色(7.5YR 2/3) 埴壤土 軟(根)
 2:極暗赤褐色(5YR 2/3) 埴壤土 軟 [黒色土混じり焼土] 炭化物少量含む やや不均質
 3:赤褐色(5YR 4/6) 埴土 軟~中 [焼土] 下端境界明瞭
 HF-2 4:暗赤褐色(5YR 3/6) 埴土 軟~中 [焼土] 炭化物少量含む 下端境界明瞭

- 4:極暗赤褐色(5YR 2/3) 埴土 軟 [黒色土混じり焼土] 微細骨片少量 径1mm以下のMa10%程度 不均質
 5:赤褐色(5YR 4/8) 埴土 軟 [焼土] 径1mm以下のMa10%以下 均質 下端境界明瞭



図Ⅳ-109 ⅢH-9 平面

ⅢH-9



- 1: 黒色 (7.5YR 2/1) 埴壤土 軟 [Ⅲ主体] 径1~2mmのMa少量
- 2: 黒褐色 (10YR 2/2) 埴壤土 軟~中 [Ⅲ>Ⅳ] Ma-f多く含む Ma10%以下 均質的
- 3: 黒色 (7.5YR 2/1) 埴壤土 軟 [埴土混じり土] 焼土粒含む
- 4・5: ⅢH-4の4・5

図Ⅳ-110 ⅢH-9 遺物出土状況・断面

3の炭化材樹種同定では、カツラ・コナラ節・ニレ属が同定されている（V章3節参照）。

それ以外の覆土1層上位からは、礫266点、被熱礫44点とこれに伴うとみられるⅧ群トビニタイ式土器21点が出土したほか、Ⅲ群b類～Ⅳ群a類土器10点、Ⅵ群b類土器59点、Ⅶ群土器5点、石鏃2点、石槍またはナイフ1点、ナイフ1点、スクレイパー8点、楔形石器1点、U・Rフレイク2点、フレイク・チップ41点、石核3点、たたき石14点、砥石7点が出土した。

覆土2層からは、Ⅰ群b類土器1点、Ⅲ群b類土器29点、Ⅵ群土器2点、石鏃1点、石槍またはナイフ1点、フレイク・チップ26点、石核1点、たたき石1点、砥石4点、礫71点（うち被熱13点）が出土している。これらは下位の堅穴住居跡ⅢH-14の覆土の遺物や、周囲からの流入土とともに混入した遺物である可能性が高い。

時期 堅穴本体および杭穴・焼土・炭化材集中といった付属遺構の構築時期は、特定することができなかった。堅穴のくぼみを再整備したと考えられる「上層遺構」は、伴う土器からトビニタイ式期とみられる。

なお覆土下位の炭化材集中を対象とした年代測定では、HC-2・3ともに $3,470 \pm 20 \text{yrBP}$ ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)の数値を得ており（V章1節参照）、炭化材は下位の堅穴住居跡ⅢH-14の覆土上の遺物である可能性が強まった。（阿部）

ⅢH-14（図Ⅳ-108・111～114、表Ⅲ-9・Ⅳ-4、図版29・30）

位置 e11・e12・f10・f11・f12・g10・g11・g12区

平面形態 おおむね楕円形

規模 9.83×7.58/8.28×7.50/0.42m

確認・調査 ⅢH-9の調査後に土層断面を精査し、北側ではⅣ層、中央～南側では自然堆積とみられる黒色土（ⅢH-15の1-1層）を確認し、これらの上面まで掘り下げた。平坦面と壁の立ち上がりを検出し、堅穴住居跡とした。当初南側の壁面はgライン付近（覆土1層の範囲）とみていたが、壁面と覆土の境界が不明瞭であった。外方向のトレンチ調査を2本（C-C'・D-D'）追加したところ、2m以上先に立ち上がりを確認し、この範囲を掘り下げ、径9mを超える大型の堅穴住居跡となった。遺物の取り上げ後、床面の精査を行い付属遺構を検出した。

覆土 7層に分層し、掘り上げ土を8層とした。1層は堅穴北～中央部の大半を占め、Maパミス均質的に含む黒褐色土で、流入土と考えられる。2・3層は1層下位の一部や堅穴の西側～南側に堆積する、Ma-f火山灰またはロームが目立つ褐色土である。4層は堅穴の南側に分布し、1層と同様だがややしまりが強い。5～7層は南側の壁際付近に分布し、間に砂の薄層がみられる。7層はMa-f火山灰を主体とする。

掘り上げ土は、北側ではMaパミス均質的に含み、南東側の一部（8層）ではMa-f火山灰を多量含む暗褐色土が分布する。

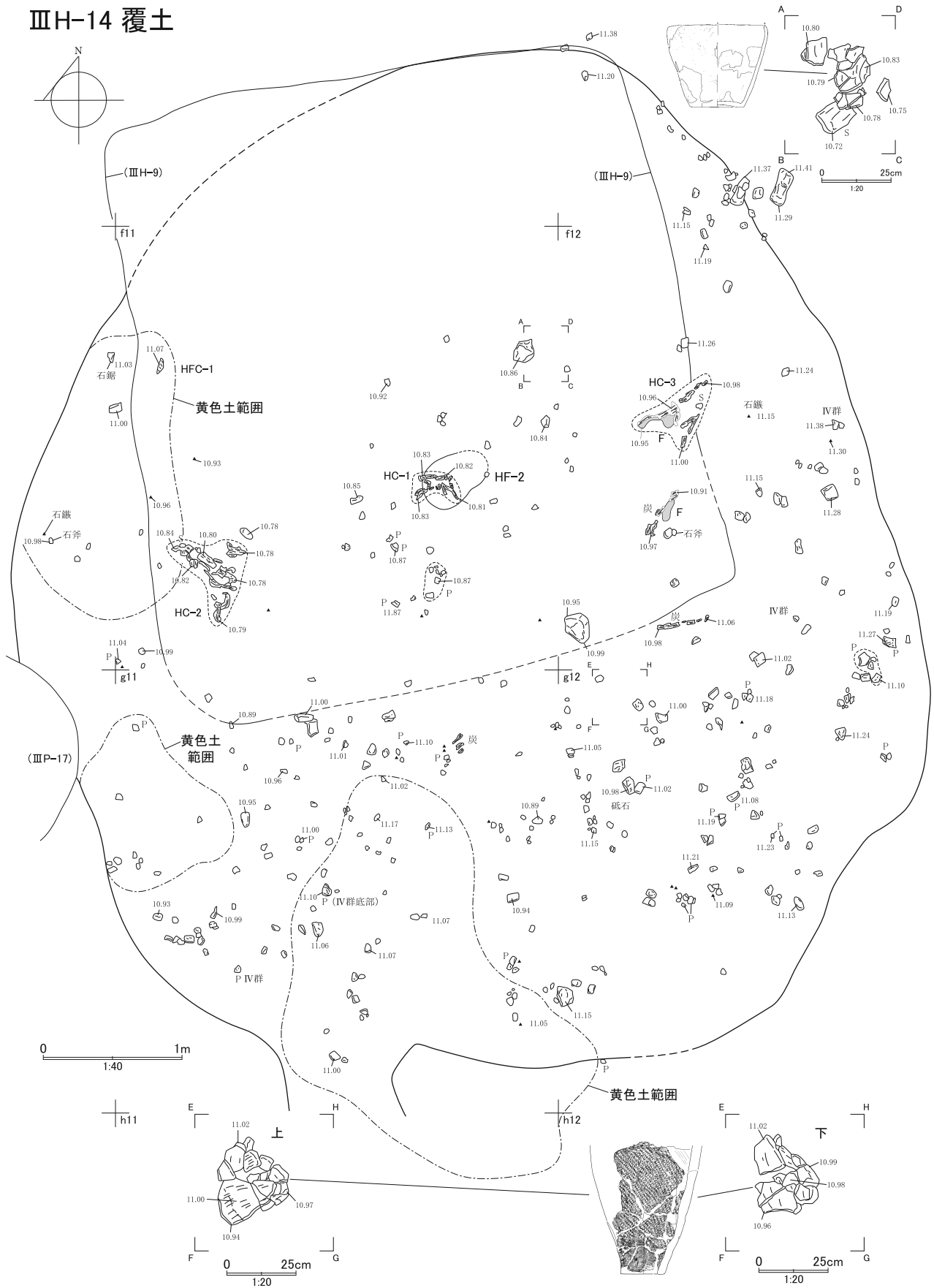
床面・壁 床面は、北側ではⅣ層、中央～南側ではⅢH-15の覆土上面にあたる。おおむね平坦であるが、中央部に向かってわずかに下がる。壁は北～西側が緩やかに立ち上がり、東～南側がやや急に立ち上がる。

付属遺構 焼土5か所（HF-1～5）、土坑1基（HP-1）、柱穴22基（HP-2～23）、フレイク・チップ集中1か所（HFC-1）、炭化材集中3か所（HFC-1～3）を検出した。

焼土HF-1は複数の燃焼か所の集合とみられる。HF-2は堅穴中央の北寄りに位置する地床炉。赤褐色を呈し強く被熱しているとみられる。HF-3・4・5は小型のもの。

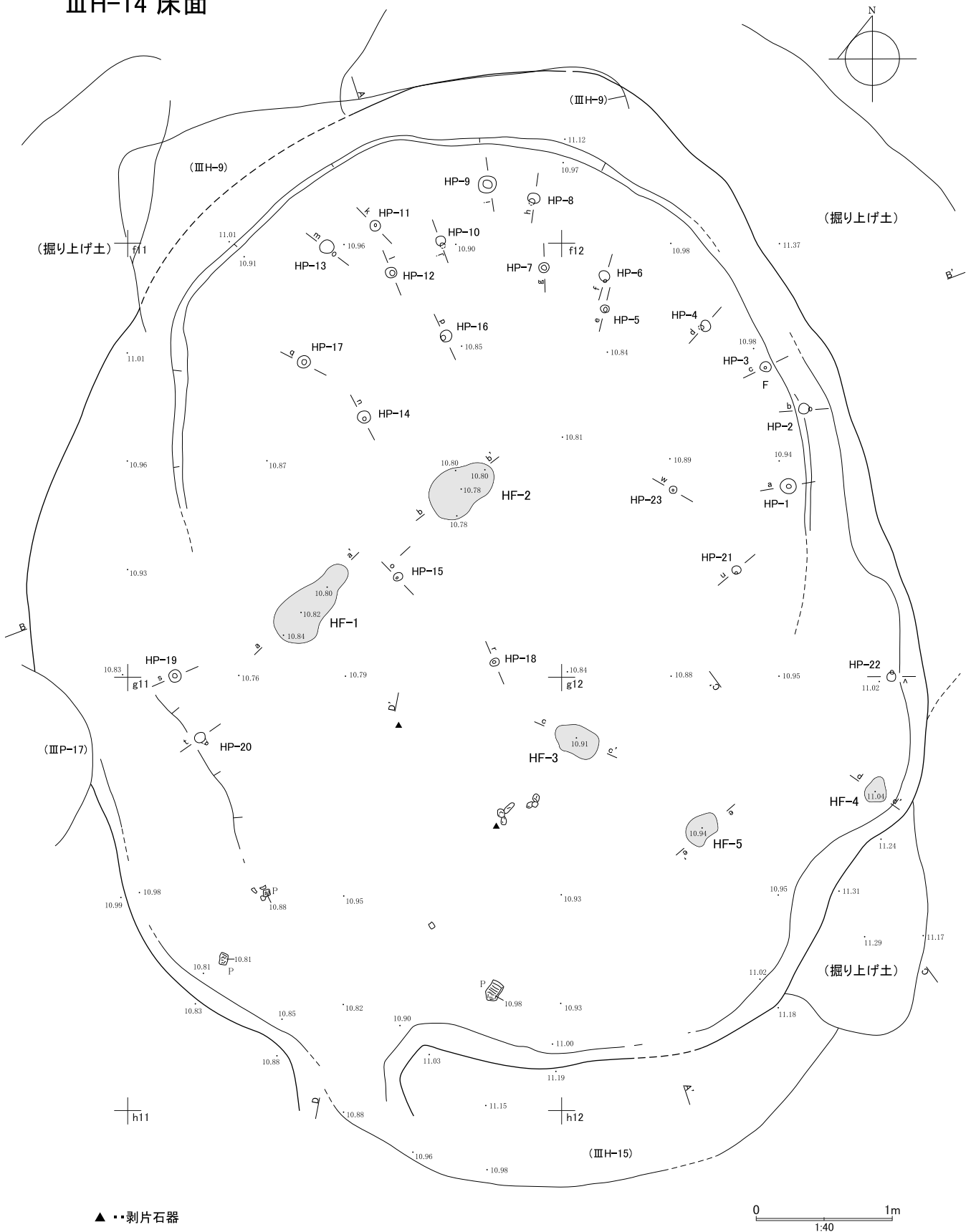
柱穴の大部分はⅣ層を床面とする北側で検出した。HP-1～4・6・8・9・11・13・17は、径10cm前後・深さは15～50cmと差があるが、壁際付近に沿って弧状に巡る。深さ30cm以上の柱穴にはH

ⅢH-14 覆土



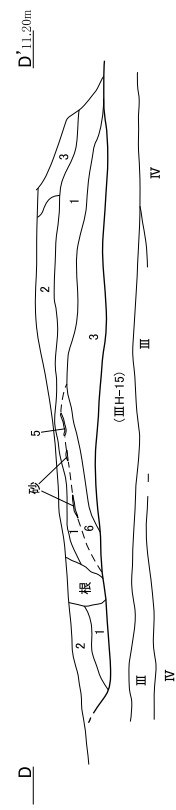
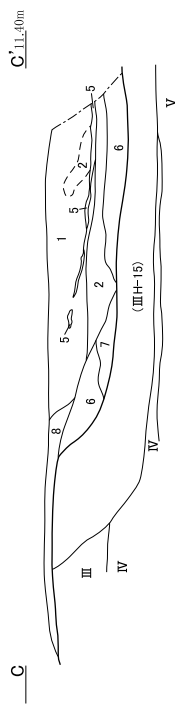
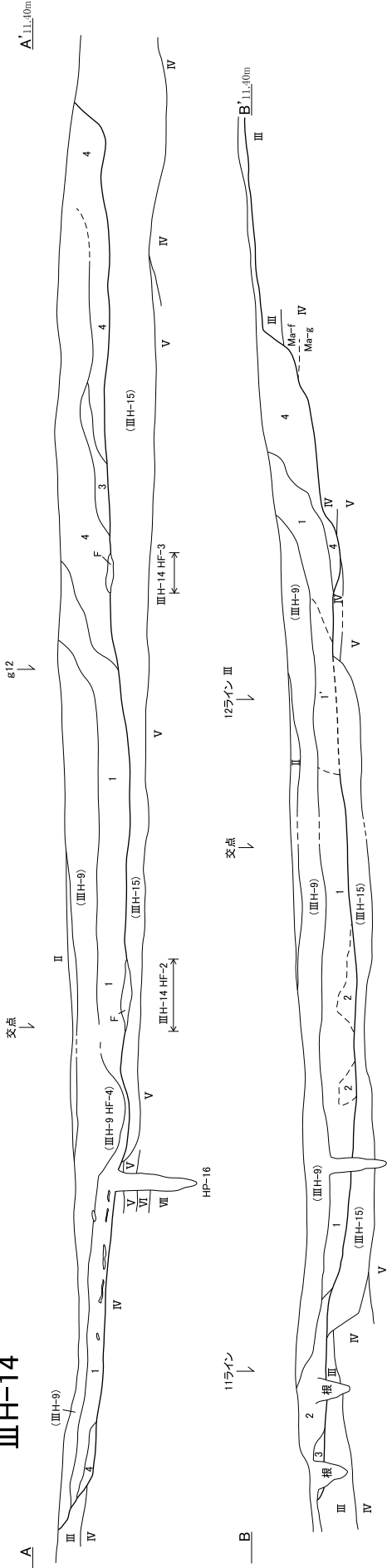
图Ⅳ-111 ⅢH-14覆土遺物出土狀況

ⅢH-14 床面



図IV-112 ⅢH-14平面(床面)

III-H-14

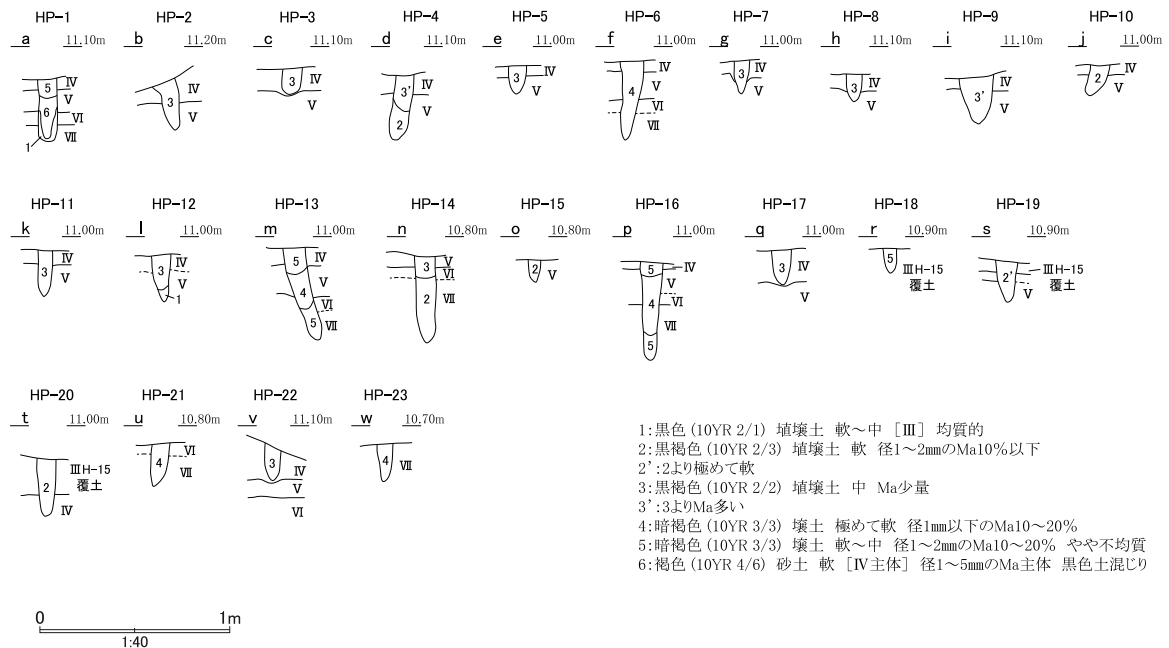


- 1: 黒褐色 (10YR 2/3) 壤土 軟 [III>IV] 径1~2mmのMa10~20% 均質的
 1: 1より黒い
 2: 暗褐色 (10YR 3/3~3/4) 壤土 軟~中 [III+IV+VII] 径1~2mmのMa10%程度 ロームや不均質に混じる
 3: 暗褐色 (10YR 5/6~4/6) シルト質壤土 軟 [VII主体] Ma10%程度 黒色土混じり やや不均質
 4: 黒褐色 (10YR 2/3) 壤土 軟~中 [III+IV] 径1~2mmのMa20%以上 やや不均質
 5: 黒色 (10YR 1.7/1) 壤土 軟 [III・砂] 径1mm程度の砂層(薄層)含む
 6: 黒色 (10YR 2/1) 壤土 軟 [III主体] Ma少量
 7: 暗褐色 (10YR 4/6~3/4) シルト質壤土 [III<IV] Ma+主体 黒色土不均質に混じる
 8: 暗褐色 (10YR 2/3~3/4) 壤土 軟~中 径1mm以下のMa20%以上 (Ma+多量)
- (掘り上げ土)

- HF-1** a' 11.00m ⅢH-15礫土
 1: 褐色 (7.5YR 4/6) 壤土 軟 [焼土]
 やや硬質 境界やや不明瞭 径1~2mmのMa10~20%
 2: 黒褐色 (7.5YR 3/2) 硬壤土 軟~中 [焼土混じり土]
 径1mm程度のMa10%程度
- HF-2** b 11.00m ⅢH-15礫土
 1: 赤褐色 (5YR 4/8) 壤土 軟 [焼土]
 径1mm以下のMa10%以下 均質 下端境界不明瞭
- HF-3** c 11.00m ⅢH-15礫土
 1: 暗赤褐色 (5YR 3/6) 壤土 軟 [焼土]
 やや黒色土混じる 下端境界不明瞭
- HF-4** d' 11.10m ⅢH-15礫土
 1: 赤褐色 (5YR 4/8) 壤土 軟~中 [焼土]
 均質的 下端境界不明瞭
- HF-5** e 11.00m ⅢH-15礫土
 1: 極暗赤褐色 (5YR 2/4) 壤土 軟 [焼土]
 暗褐色土混じり やや不均質 境界不明瞭

図IV-113 ⅢH-14断面

ⅢH-14



図IV-114 ⅢH-14HP断面

P-1・4・6・13・14・16・20がある。一方、竪穴中央～南側で検出した柱穴は、総じて小型で浅い。

フレイク・チップ集中は、竪穴東側の黄色土(覆土3層)中に15cmほどの範囲で検出した。炭化材集中は、竪穴中央北寄りの覆土から検出した。うちHC-1は地床炉HF-2の上にある。

遺物出土状況 覆土下位から、Ⅵ群b類とⅣ群b類の半個体土器がそれぞれつぶれた状態で出土した。覆土中のHC-1からは、フレイク・チップ49点を回収した。また炭化材集中HC-1・2・3からは、それぞれ形状を保った材が出土した。HC-1・2・3の炭化材樹種同定では、ヤナギ属・ウルシ属・トネリコ属・カツラが同定されている(V章3節参照)。

覆土からほかにⅡ群土器1点、Ⅲ群b類～Ⅳ群a類土器43点、Ⅳ群a類28点、Ⅵ群土器34点、石鏃2点、石槍またはナイフ7点、つまみ付きナイフ1点、スクレイパー8点、楔形石器1点、U・Rフレイク1点、フレイク・チップ23点、石核1点、石斧3点、たたき石10点、砥石10点、礫類339点(うち原石2点、被熱160点)が出土した。礫は板状礫片や破碎礫を主体に、広い範囲から出土した。さらに掘り上げ土からはⅣ群a類土器3点、Ⅵ群b類土器5点、スクレイパー2点、フレイク1点、砥石3点、礫199点(うち被熱46点)が出土した。

床面直上からⅣ群a類土器1点、Ⅵ群43点、U・Rフレイク1点、フレイク2点、たたき石2点、礫23点(うち被熱13点)が出土した。

時期 検出層位や出土遺物から、縄文時代後期前葉とみられる。なお炭化材集中を対象とした年代測定では、HC-1で $3,500 \pm 20$ yrBP、HC-3で $3,450 \pm 20$ yrBP($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)の数値を得た(V章1節参照)。(阿部)

ⅢH-15 (図IV-108・115～118、表Ⅲ-9・Ⅳ-4、図版31・32)

位置 f11・f12・g11・g12・h11・h12区 平面形態 楕円形

規模 7.94×6.45/7.49×5.88/0.55m

確認・調査 ⅢH-14の調査後、土層断面を再精査した。東西方向は竪穴中央を通るよう新たにトレンチ調査を行った。覆土を順次掘り下げ、底面と壁の立ち上がりを検出し、8m規模の大型の竪穴住居跡となった。周辺を精査したところ、緩斜面下方の南側に広がる掘り上げ土を検出した。遺物の取り上げ後、床面の精査を行い、焼土や多数の柱穴などの付属遺構を検出した。

覆土 中位の黄褐色土（2層）を境に大きく3層に分層し、さらに細分した。1-1層はⅢH-14の直下、ⅢH-15の中央部に堆積し、Maパミスを少々含む黒色土で自然堆積土とみられる。一方、1-2～4層はMaパミスを多量含む埋土である。2層は竪穴中央部～東側に分布し、Ma-fとみられるにぶい黄橙色の火山灰を主体とし黒色土が混じる。3層はMaパミスをやや多く含む軟質の黒褐色～暗褐色土で、竪穴のほぼ全体に分布する。

掘り上げ土（4層）はMaパミスを多量含み、南側の斜面下方に流れ込んでいる。

床面・壁 床面はおおむね平坦である。地形の傾斜によって床面の層位が遷移し、北～中央部ではV層中に達し、南側ではIV層・Ⅲ層中の面が現れている。壁はやや緩やかに立ち上がる。

付属遺構 焼土3か所（HF-1～3）、土坑2基（HP-1・2）、柱穴12基（HP-3～14）を検出した。焼土のうちHF-1は竪穴北側の覆土2層中のブロック状の焼土。被熱層は厚さ5cmほどで赤褐色を呈する。HF-2は竪穴中央の覆土2層で検出した石組炉。炉石は角柱状の砂岩礫を多角形に配したと思われるが、残存する東～南側でも石材の脆さから崩壊が進んでいる。炉内外には砂質土壌が撒布され、被熱層は最大厚4cmで比較的弱く赤変している。HF-3は床面中央部からやや南東寄りにある地床炉。被熱層は最大厚8cmで、砂質土壌がやや弱く赤変している。

HP-1は、竪穴南東長軸端部に位置する径約1mの浅い皿状の円形土坑である。HP-2は小型の浅い楕円形土坑である。

柱穴のうちHP-3～8・11は径10cm前後・深さ20～30cmほどで、環状に配され主体をなすものである。一方HP-9・10・12・13は小型でやや浅く、補助的なものと考えられる。HP-14は例外的に深い。

遺物出土状況 覆土1層からの礫の出土点数が多く、187点（うち被熱84点）を数えた。ほかにⅥ群土器2点、石錐1点、両面調整石器1点、スクレイパー2点、フレイク・チップ9点、たたき石4点、砥石14点がある。覆土2層からは、竪穴中央東寄りでベンガラとみられる赤色顔料のまとまりを2か所検出した。最大厚5cmを測る。また竪穴北側などから、形状を保った炭化材が複数出土した。サンプル3点で、ウルシ属1点・コナラ節1点・不明1点と同定された（V章3節参照）。そのほか石斧1点、砥石3点、礫34点（うち被熱26点）が出土した。覆土3層からはⅡ群土器14点をはじめ、石鏃1点、砥石7点、礫56点（うち被熱20点）が出土した。礫は板状のものが多数ある。

付属遺構HP-1の覆土からⅡ群土器8点、フレイク2点、たたき石1点、礫14点（うち被熱1点）が出土した。またHP-2の覆土からⅢ群b類～Ⅳ群a類1点と被熱礫2点が出土した。

時期 検出面や出土土器から、竪穴の構築時期は縄文時代前期後半とみられる。なお覆土2層から出土した炭化材を対象とした年代測定では、4,500±30yrBP・4,420±30yrBP（ $\delta^{13}\text{C}$ 補正值）の数値を得ており（V章1節参照）、覆土上での活動期の目安となる。（阿部）

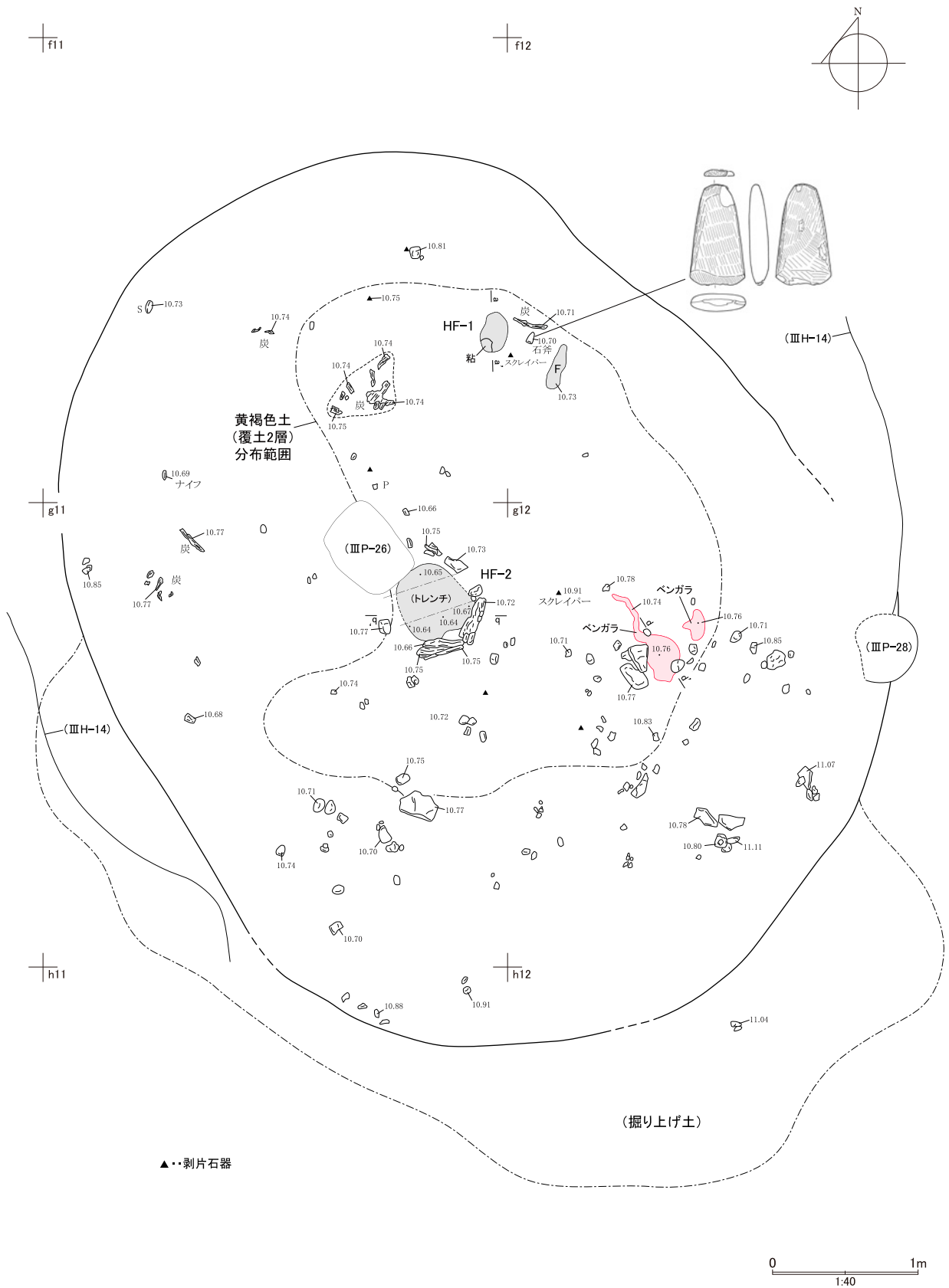
ⅢP-26（図Ⅳ-119、表Ⅲ-9・Ⅳ-5、図版33-1・2）

位置 g11区 **平面形態** おおむね隅丸方形

規模 0.81×0.48/0.59×0.41/0.16m

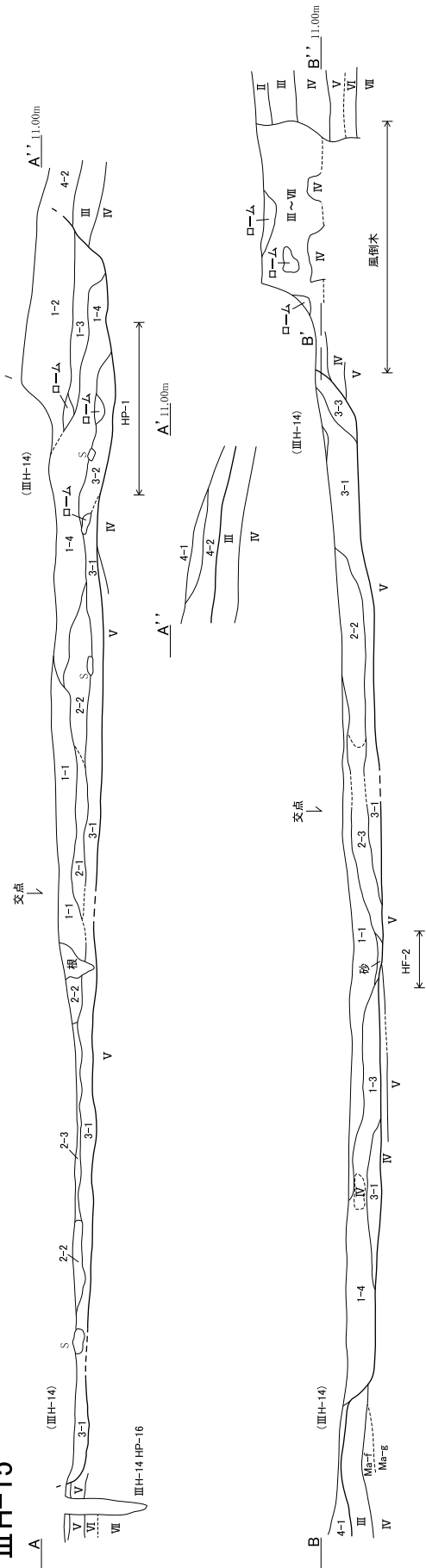
確認・調査 ⅢH-15の調査中、床面の地床炉HF-2に隣接して、楕円形の黒褐色土のまとまりを

ⅢH-15 覆土上位～中位

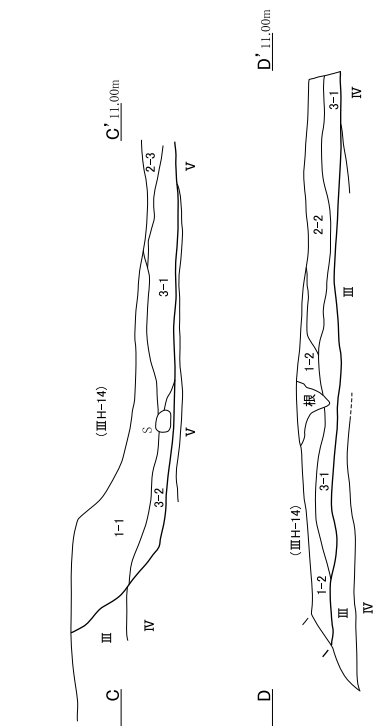


図Ⅳ-115 ⅢH-15覆土上位～中位遺物出土状況

ⅢH-15



- 1-1: 黒色 (10YR 2/1) 埴壌土 軟〜中 Mia10%以下
- 1-2: 褐色 (10YR 4/6) 砂壌土 軟 径1〜2mmのMa主体 黒色土不均質を含む
- 1-3: 黒褐色 (10YR 2/3) 埴土 軟 径1〜2mmのMa20〜50%
- 1-4: 暗褐色 (10YR 3/4) 砂壌土 軟 Ma中暗褐色土主体 炭土粒・炭化木片含む
- 2-1: 暗褐色〜極暗褐色 (7.5YR 3/4〜2/3) 埴土 軟 シルト質埴土 軟〜中 細かきMa主体 径1〜2mmのMa含む
- 2-2: こぶい、黄褐色〜褐色 (10YR 5/4〜4/4) シルト質埴土 軟〜中 細かきMa含む
- 2-3: 暗褐色 (10YR 3/3) 埴土 軟〜中 Ma中暗褐色土 径1〜2mmのMa含む
- 3-1: 黒褐色 (10YR 2/2) 埴土 中 [M]:黒色土>IV] 径1〜2mmのMa10〜20% 均質的
- 3-2: 3-1より軟
- 3-3: 暗褐色 (10YR 3/3) 埴土 軟 ローム・Ma・黒色土が不均質に混じる
- 4-1: 1-3に近似
- 4-2: 1-2に近似



- HF-1 ⅢH-14 HP-16 覆土3層
- HF-2 ⅢH-14 HP-16 覆土3層
- HF-3 ⅢH-14 HP-16 覆土3層
- ⅢH-15 覆土3層

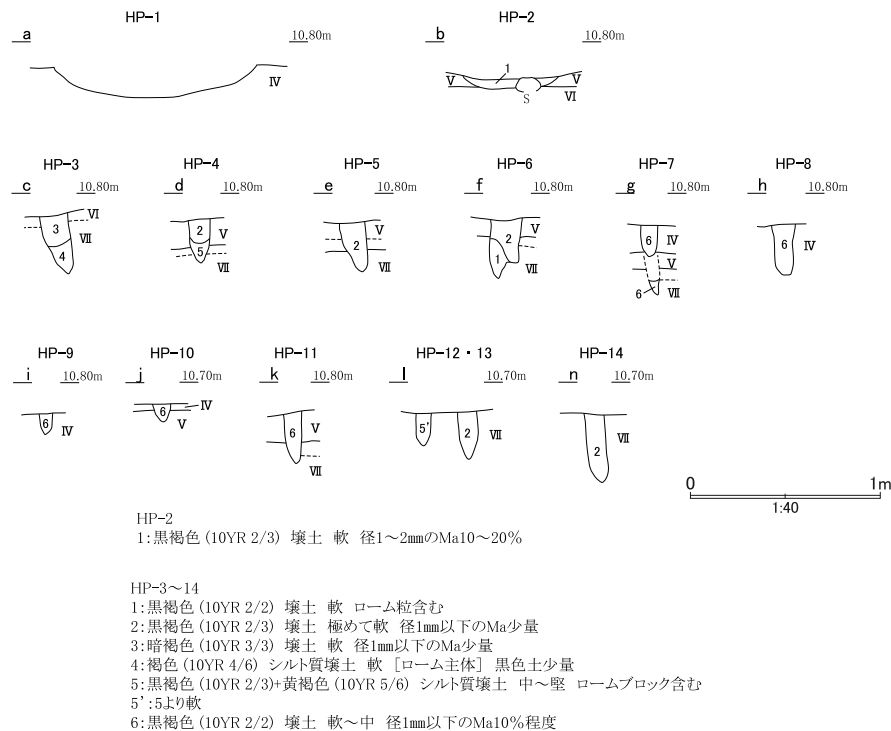
- 1: 赤褐色 (5YR 4/8) 砂壌土 軟〜中 [雑土]
- 2: 灰黄褐色 (10YR 5/2) シルト質埴土 軟 [灰混じり土]
- 3: 暗赤褐色 (5YR 3/6) シルト質埴土 軟 [雑土]
- 4: 黒色 (7.5YR 2/1) 埴壌土 軟 砂少量含む

- 1: 黒色 (10YR 2/1) 埴壌土 軟〜中 砂少量含む
- 2: 灰黄褐色〜暗褐色 (10YR 4/2〜3/3) 極必軟 [砂層] 暗褐色土混じり
- 3: 暗赤褐色 (5YR 3/6) シルト質埴土 軟〜中 [雑土]
- 4: 黒色 (7.5YR 2/1) 埴壌土 軟 砂少量含む

- 1: 暗赤褐色 (5YR 3/6) 埴質砂土 [雑土]
- 径1〜2mmのMa主体 砂多量 境界不明瞭
- 2: 暗赤褐色 (10YR 3/6) シルト (雑土混じり) 軟
- [ベンガラ層] 黒色土・黄色土や不均質に混じる

図Ⅳ-117 ⅢH-15断面

ⅢH-15



図IV-118 ⅢH-15HP断面

検出した。トレンチ調査を行ったところ、石器が出土し赤色土壌が検出された。半截し底面と壁の立ち上がりを検出し、土坑とした。掘り込み面は、ⅢH-15の覆土2層とみられる。

坑底にはベンガラとみられる赤色顔料が撒布され、坑底中央付近から完形の石槍などが出土したことから、副葬品を伴う土坑墓と判断した。

覆土 4層に分層した。1層は黒色土主体で、流入土またはやや均質な埋め戻し土と考えられる。2層はⅦ層ロームを主体に黒褐色土が不均質に混じり、埋め戻し土とみられる。3層は坑底付近の薄層で、しまりの弱い粘質の黒褐色土である。そして坑底(4)に赤色顔料の薄層がある。

底面・壁 底面はⅥ層に達し、北東側はVP-19の覆土の黒色土を切っている。おおむね平坦で隅丸方形をなし、壁はやや急に立ち上がる。

遺物出土状況 坑底から石槍またはナイフ3点、チップ1点、覆土から礫4点が出土した。石槍またはナイフ(IV-119-1・2)は坑底中央付近で2点(1と2上)が並び、1点(2下)は少し離れた位置で出土した。(阿部)

1は有茎凸基ないし木葉形。2は木葉形。2点が接合したもの。いずれも黒曜石製。(影浦)

時期 ⅢH-15より新しくⅢH-14より古い。縄文時代前期~中期である。なお坑底で採取した炭化木片を対象とした年代測定では、 $4,520 \pm 30 \text{yrBP}$ ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值) という数値を得ており、ⅢH-15の覆土2層の試料と近似する。(V章1節参照)。(阿部)

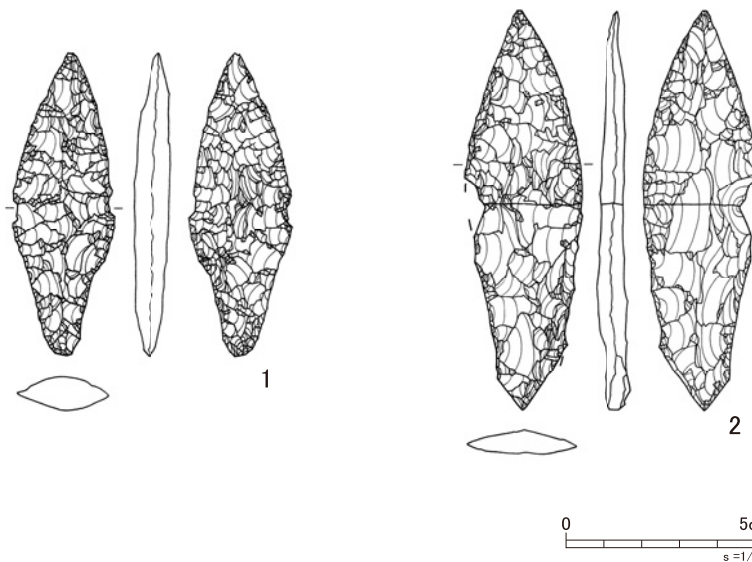
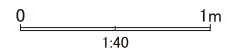
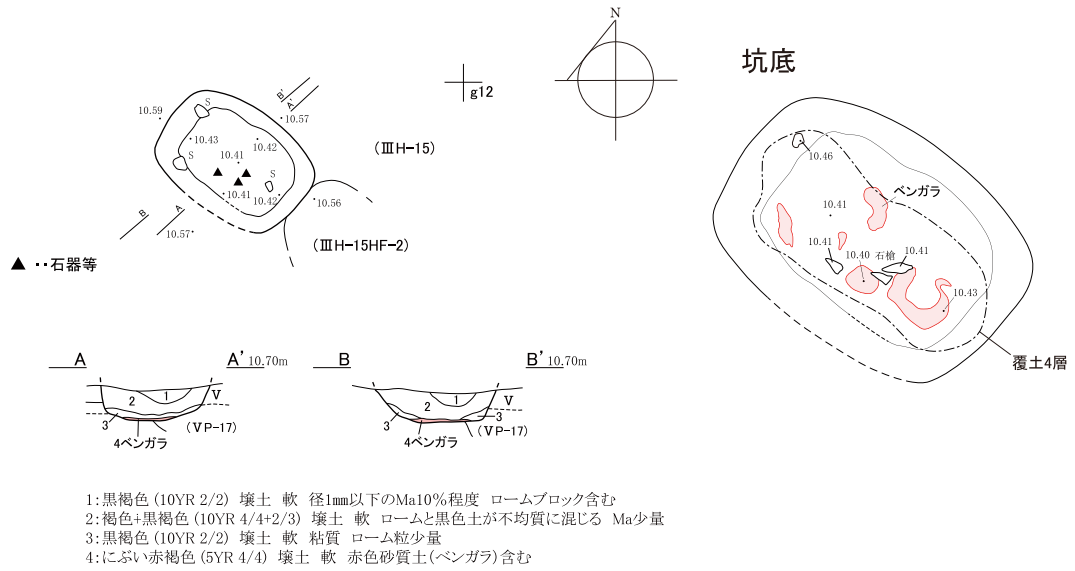
ⅢP-28 (図IV-120、表Ⅲ-11・IV-5、図版33-4)

位置 g12区 **平面形態** 円形

規模 (0.50) × 0.59 / (0.43) × 0.39 / 0.28m

確認・調査 ⅢH-15の調査中、東部の壁面付近で黒色土のまとまりを検出した。住居跡側を半截し、

ⅢP-26



図Ⅳ-119 ⅢP-26・出土石槍またはナイフ

底面と壁の立ち上がりを確認し、土坑とした。

覆土 Ⅲ層黒色土主体だが、Ⅳ層Maパミスをやや多く含む。流入土と考えられる。

底面・壁 底面は中央部がⅤ層に達している。丸みをもちやや凹凸がある。壁はⅣ層でもろい。底面からやや急に立ち上がる。

遺物出土状況 覆土から小礫3点が出土した。

時期 ⅢH-15を切っており、当遺構が新しい。またⅢH-14の構築面よりは古い。よって縄文時代前期～後期前葉の範囲にある。(阿部)

ⅢS-10 (図Ⅳ-120、表Ⅲ-11・Ⅳ-5、図版33-3)

位置 e12・f12区 **平面形態** 不整形の範囲に分布

規模 3.82×2.56m

確認・調査 調査区北西部、竪穴住居跡ⅢH-14の北東側のⅢ層中で検出した。

遺物出土状況 礫は512点を数えた。うち被熱319点、原石2点である。被熱・破碎礫が主体で、亜角礫などを含め濃淡をもって分布する。そのほかⅡ群土器5点、Ⅵ群土器1点、スクレイパー・楔形石器・たたき石各1点、チップ3点、砥石6点がある。

時期 検出面や位置からⅢH-14またはⅢH-15に関連があるとみられ、縄文時代前期または後期前葉と推測される。(阿部)

(3) 遺構出土の遺物

・土器

ⅢH-9 (図Ⅳ-121、表Ⅳ-14、図版66)

土器は138点が出土した。内訳は北筒式が42点、下田ノ沢式が63点、トビニタイ式が27点、その他6点である。北筒式は覆土2、下田ノ沢式とトビニタイ式は上位の覆土1に多い傾向がある。トビニタイ式は付属の集石HS-2・3に伴って若干の破片が出土している。1・2はⅢ群b類、北筒Ⅱ式(トコロ6類)。口縁部が断面三角形に肥厚して外側に突き出る器形。刺突が2条巡る。体部はRL斜行縄文。原体の幅は3cm程度である。3はⅣ群a類、北筒Ⅴ式。地文はLR斜行縄文。

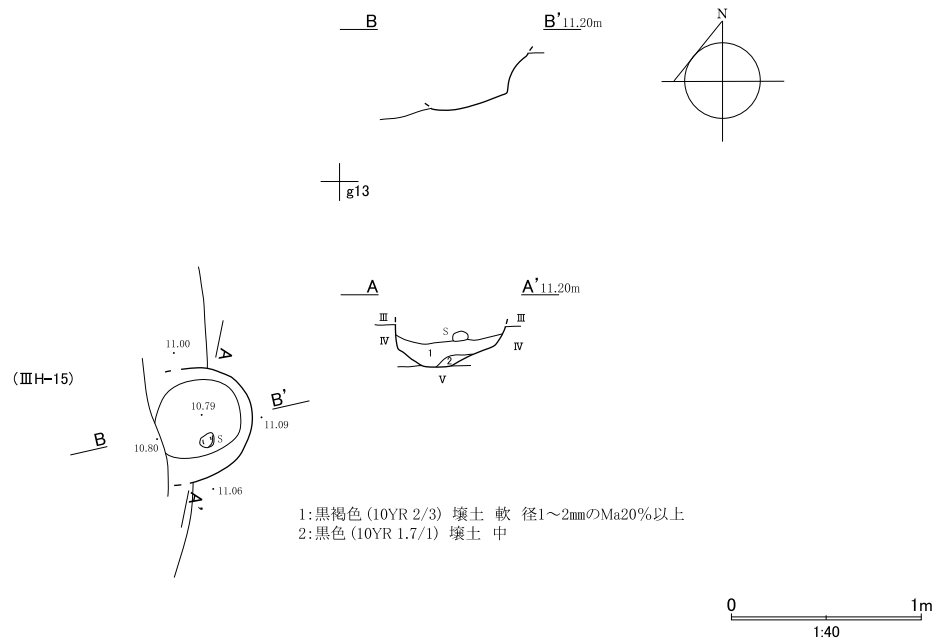
下部の覆土2においてまとまって出土したことと、それなりの大きさの破片であったことから掲載土器として北筒式を抽出したのであるが、ⅢH-9の下から検出した竪穴住居跡ⅢH-14において下田ノ沢式がまとまって出土している状況からすると、ⅢH-9が北筒式期の住居であることは考え難い。トビニタイ式27点は同一個体片と考えられるまとまりで、27点中24点が断片的な胴部片。3点が接合した口縁部片である。

ⅢH-14 (図Ⅳ-121、表Ⅳ-11・14、図版66・67)

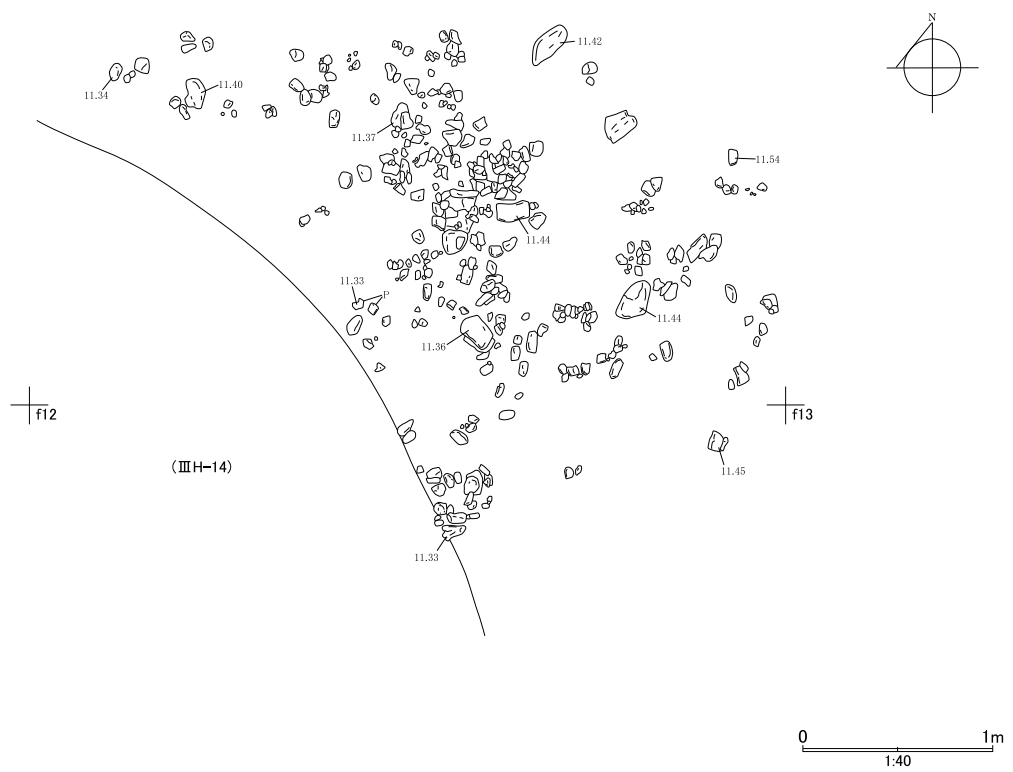
土器は159点が出土した。内訳は北筒式が75点、下田ノ沢式が82点、その他2点である。下田ノ沢式の82点中43点は床面直上からの出土。

1は下田ノ沢式の復元個体。鈍い光沢を呈する無文土器で器表面にナデ調整を施している。胴部下半は直線的に開き、胴部上半が膨らんで口縁部は内傾する。容量は3.95L。底部はやや上げ底になっている。ⅢH-4出土の下田ノ沢式にも上げ底の例がある(図Ⅳ-159-8)。この器形的特徴から下田ノ沢式と判断した。2・3は同一個体。胴部上半がやや膨らんで、口縁部が内傾する器形。口縁部は突瘤文が巡るが、ごく浅いもので、拓本には出ているが視覚的にはわずかにしか表われていない。口縁部は無文地に縄線文が2条、横方向に施文されている。胴部は撚糸文。無節Rを7巻した幅2cm

ⅢP-28

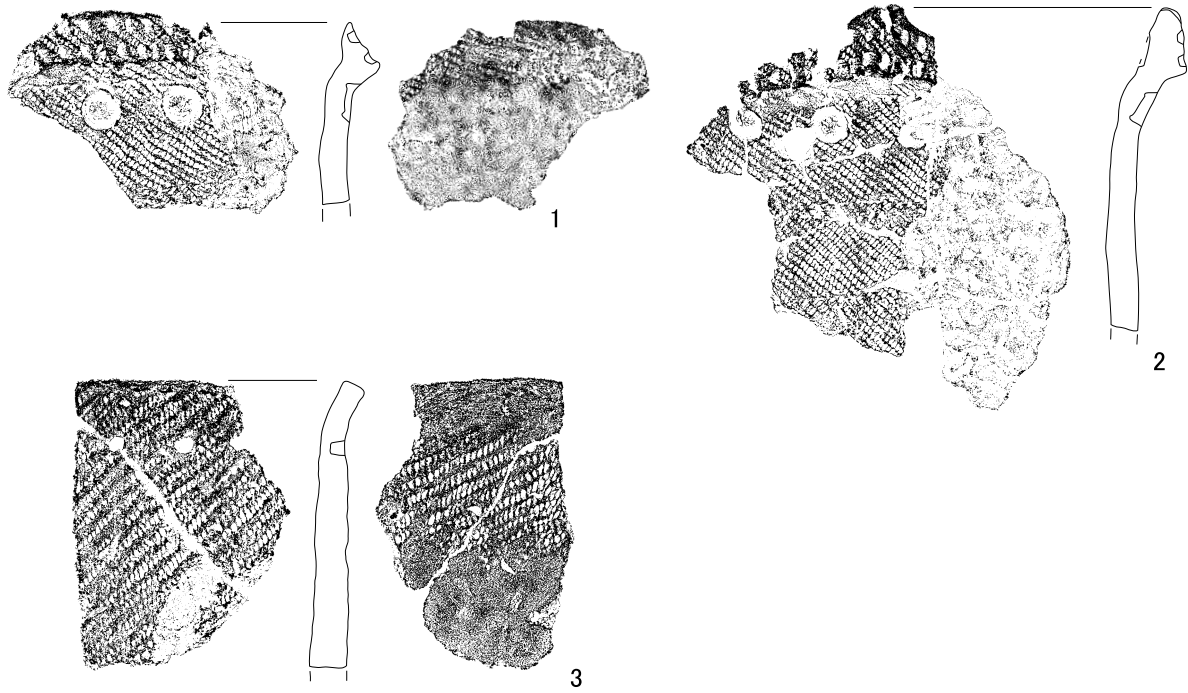


ⅢS-10

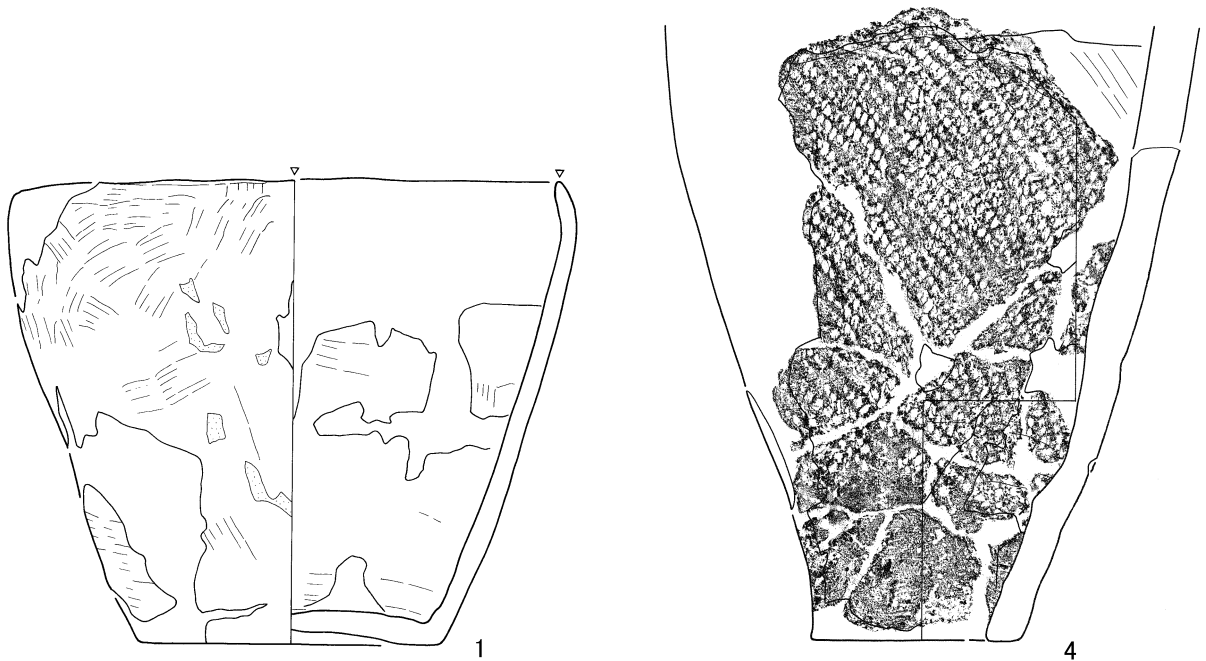


図IV-120 ⅢP-28・ⅢS-10

ⅢH-9



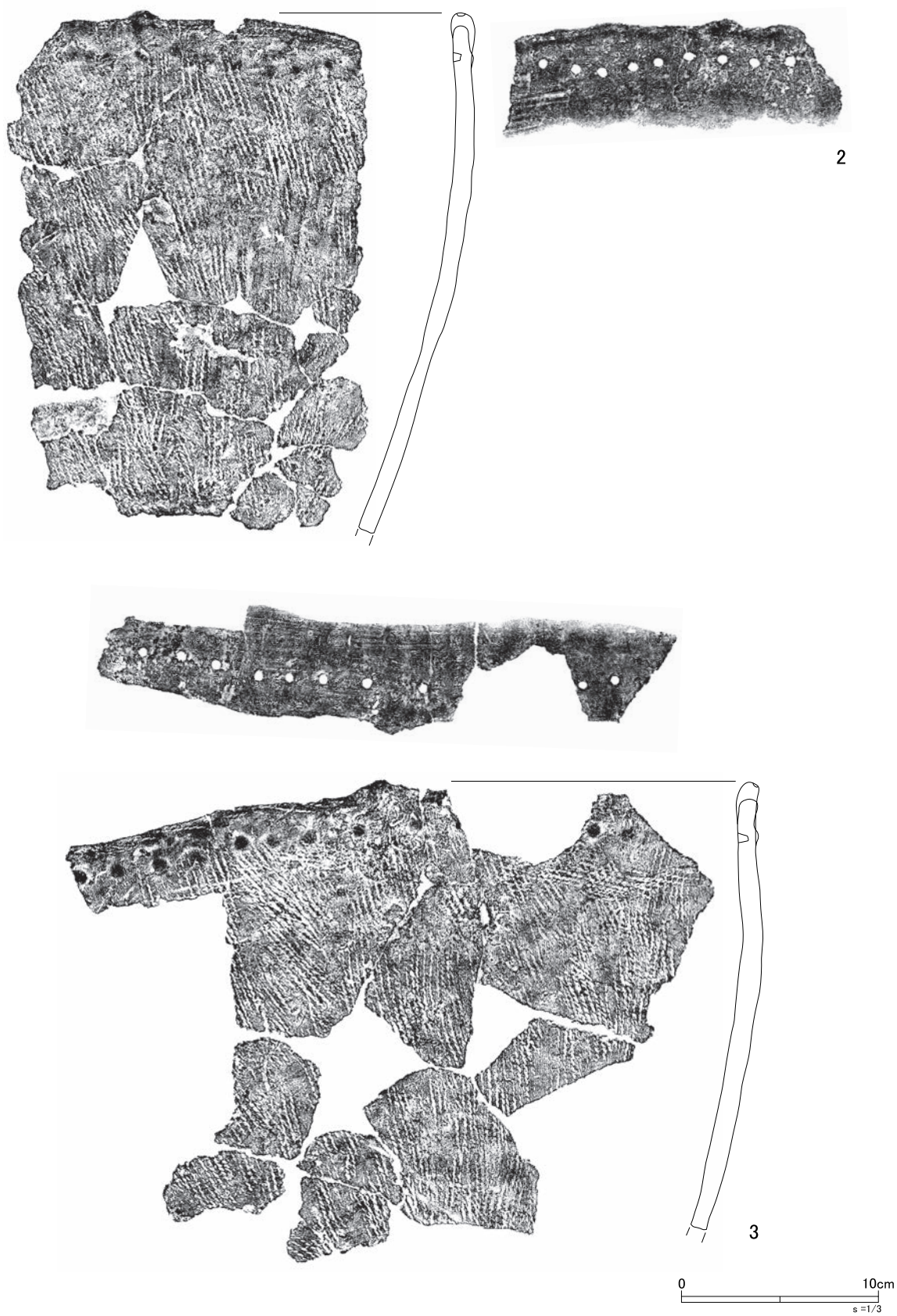
ⅢH-14



0 10cm
s=1/3

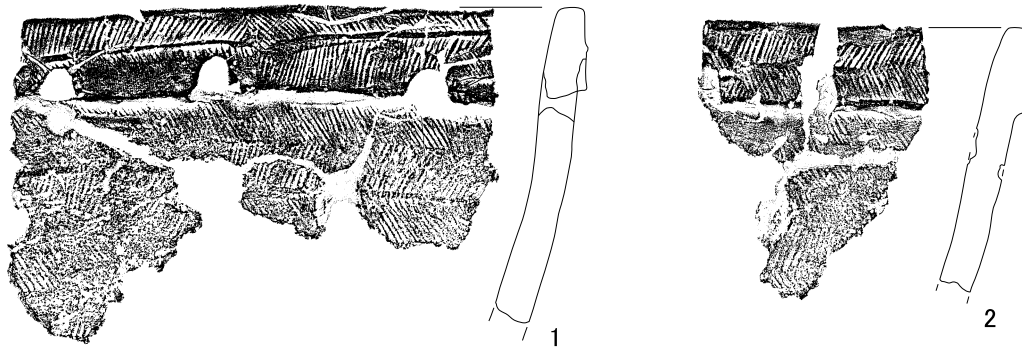
図Ⅳ-121 Ⅲ層遺構出土の土器 (19)

ⅢH-14

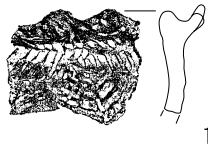


図Ⅳ-122 Ⅲ層遺構出土の土器 (20)

ⅢH-15



ⅢS-10



図Ⅳ-123 Ⅲ層遺構出土の土器 (21)

の原体で、胴部上半では左上から右下へやや斜めの角度、胴部下半では縦位、右上から左下へとくだるものがランダムに施文され、ところどころ横方向に1条単位の細い縄線が付せられたり、撚糸文自体が横方向に施文されている部位もみられる。内面は幅2.2cmのヘラ状工具による調整痕が残る。残存している部位ではすべて横方向。下田ノ沢Ⅰ式。4は胴部上半を欠くが上の割れ口（断面）が焼けている。したがって、上部欠失後もこの状態でなお使用したとみられる。地文はRLR複節、胎土中に繊維を含む。北筒式（Ⅲb～Ⅳa）。

ⅢH-15（図Ⅳ-122、表Ⅳ-14、図版67）

土器は25点が出土した。内訳は縄文時代前期の温根沼式が22点、その他3点である。1・2は温根沼式の同一個体口縁部片。口縁部に薄い肥厚帯が巡り、ところどころに半円状の切り込みが入る。地文は横位回転施文の矢羽状押型文。繊維を多く含んだ厚手の胎土で、器表面のところどころに繊維痕が観察される。内面は平滑。全体的に細かい亀裂が多く、割れ口の周囲が剥落しているため、接合線が溝状になる。また胴部表面には砂状の黒い鉱物が無数に観察される。この鉱物は輝石である。当初、胎土中に混和させたものと考えられたが、よく観察すると、口縁部肥厚帯と内面ではほとんど観察されない。また割れ口にも見られなかった。他の部位で輝石が完全にゼロということではないが、明らかな差異がある。このことから、あるいは土器を成型後に胴部表面に輝石を多く含む化粧土を塗布した可能性も考えられる。なお、周辺海岸を踏査したところ、少なくとも温根沼の海岸域から根室市街地の西浜町までの海岸は、輝石が主体の黒い砂浜であった（特に幌茂尻地区 Ⅱ章1（2）P.7～9参照）。おそらく周辺海岸で採取した輝石の砂を用いたものであろう。

ⅢS-10（図Ⅳ-123、表Ⅳ-14、図版67）

土器は6点が出土した。うち5点は押型文が施文されたⅡ群の小片。集石に確実にともなうかどうか

かは判別し難い。1は押型文土器の口縁部片。膨らみを持ち口縁がやや内傾する器形。口縁部がつまみ出し状に外へ突き出して波状をなし、間が溝状になっている。地文は矢羽状の押型文。器壁は薄手で胎土中の繊維も少ない。Ⅱ群とはしたが、温根沼式ではないかもしれない。

・石器

ⅢH-9 (図IV-124~126、表IV-18、図版80・81)

石器等は130点が出土した。フレイク・チップ70点を除くと60点である。たたき石20点と砥石17点が比較的多い。剥片石器ではスクレイパー8点が多い。半分以上が覆土1から出土したものである。1は有柄のナイフ。両面全面加工。刃部再生加工が繰り返され、下端は鋭角をなす。黒曜石製。2~7はたたき石。2は扁平礫を素材とし面を使用している。側縁と裏面はすり石としても使用している。3・4はやや長い礫を素材としたもの。長軸の下端に打ち欠きを加えて鋭い稜線を作出し使用している。3は上端、4は面にも使用痕があり、搔いたような擦過傷がみられる。5は亜角礫を素材として、面と側縁を使用したもの。下側面はすり用途の使用痕。6・7は扁平な亜円礫を素材としたもの。6は側縁と面に使用痕が散漫に観察される。7は長軸の両端に使用痕がある。あるいは楔用途に用いたものかもしれない。8・9は砥石。いずれとも全面的に使いこまれており、使用面が皿状のへこみを呈している。2~8は砂岩製。9はノッカマップ層において産するアルコース砂岩製。

10~14は、付属の集石遺構HSから出土したたたき石を全点掲載したもの。10~13がHS-2、14はHS-4から出土した。いずれとも掌に収まる小礫を素材とし、面、側縁、端部を使用している。11は断面三角形の礫を素材とし、長軸三縁辺の中央に、たたき痕によるへこみが観察される。すべて砂岩製。

ⅢH-14 (図IV-127、表IV-18、図版81)

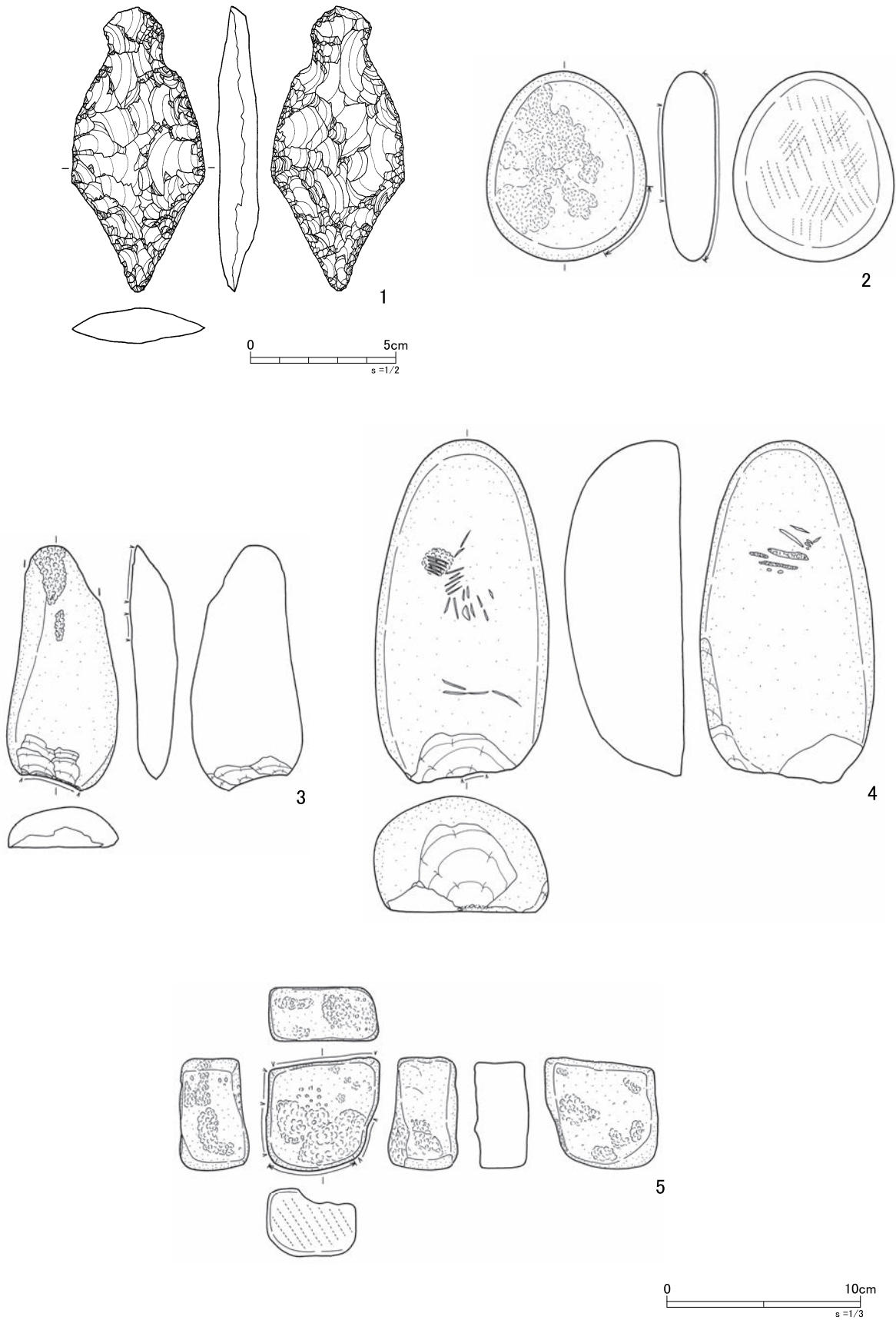
石器等は127点が出土した。フレイク・チップ75点を除いた石器は52点である。砥石13点、たたき石12点、スクレイパー10点、石槍またはナイフ7点が比較的多い。大半が覆土の出土物であるが、たたき石2点は床面直上で出土したものである。またフレイク・チップ75点のうち49点は付属のフレイク集中HFC-1として取り上げられたものである。1・2は床面直上から出土したたたき石。1はやや細長い礫を素材としたもの。被熱しており、使用痕は特に右側面に集中する。2は亜角礫を素材とし、主に面を使用したもの。すり石としても使用している。いずれとも砂岩製。

ⅢH-15 (図IV-127、表IV-18、図版81)

石器等は49点が出土した。フレイク・チップ12点を除くと37点である。砥石25点が比較的多い。たたき石5点がそれに次ぐ。剥片石器は石鏃1点、石錐1点、両面調整石器1点、スクレイパー2点が出土した。層位別では覆土1からの出土がもっとも多く、31点を数える(フレイク・チップ9点込み)。

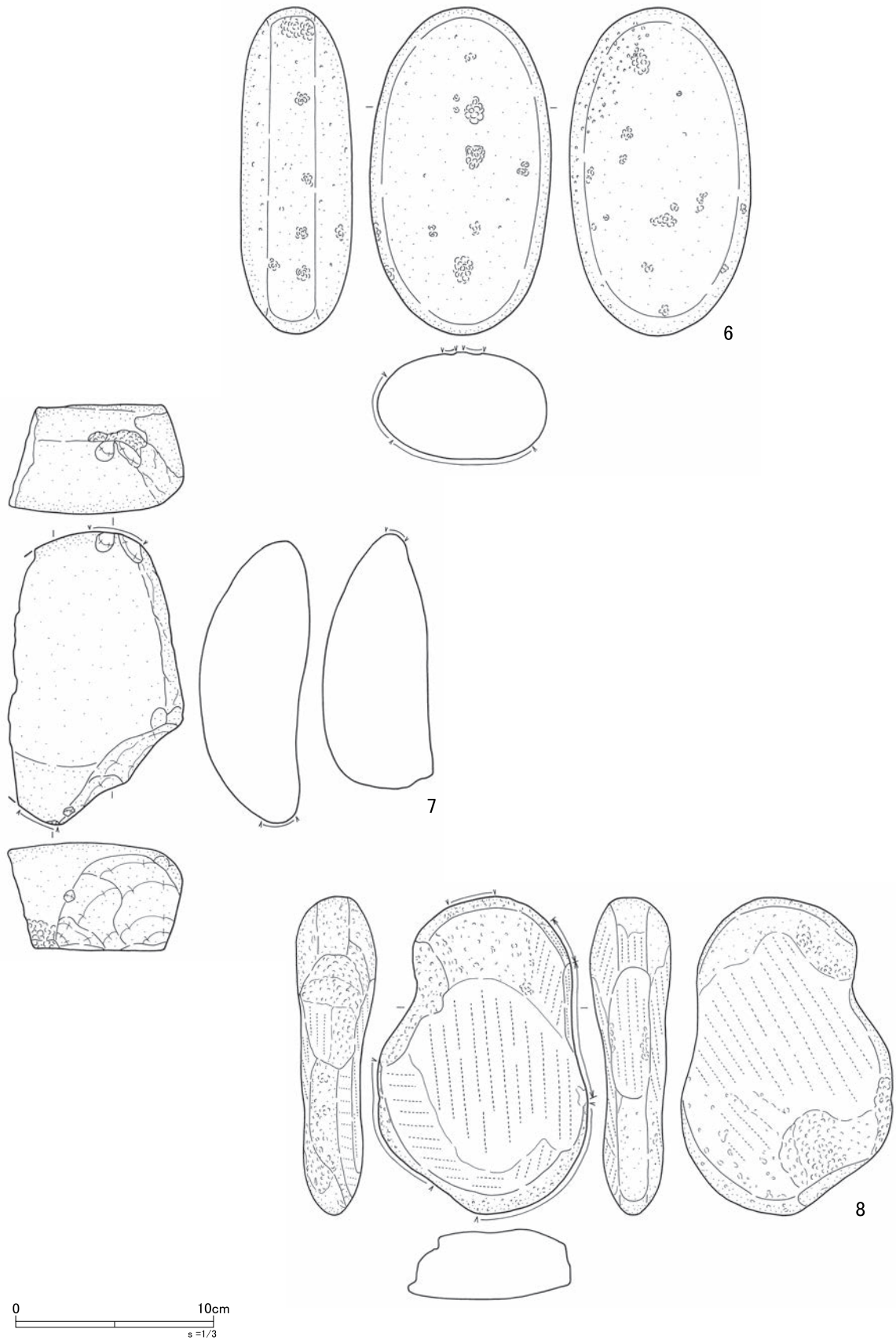
1は石錐。片面全面加工。2・3はスクレイパー。2は横長剥片を素材とし、長軸の両側縁に刃部を作出する。3は表面側が盛り上がり急角度の刃部が巡る。裏面は粗い剥離で平坦。形状や刃部のあり方から両面調整石器とはせず、スクレイパーに分類した。1・3は黒曜石製、2は頁岩製。4は石斧。全面が研磨整形されている。片岩製。5は砥石。裏面は割れ面である。砂岩製。(影浦)

ⅢH-9



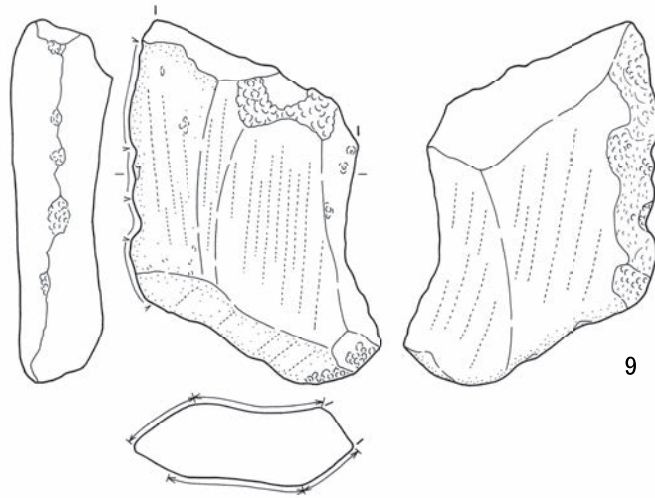
図Ⅳ-124 Ⅲ層遺構出土の石器 (12)

ⅢH-9



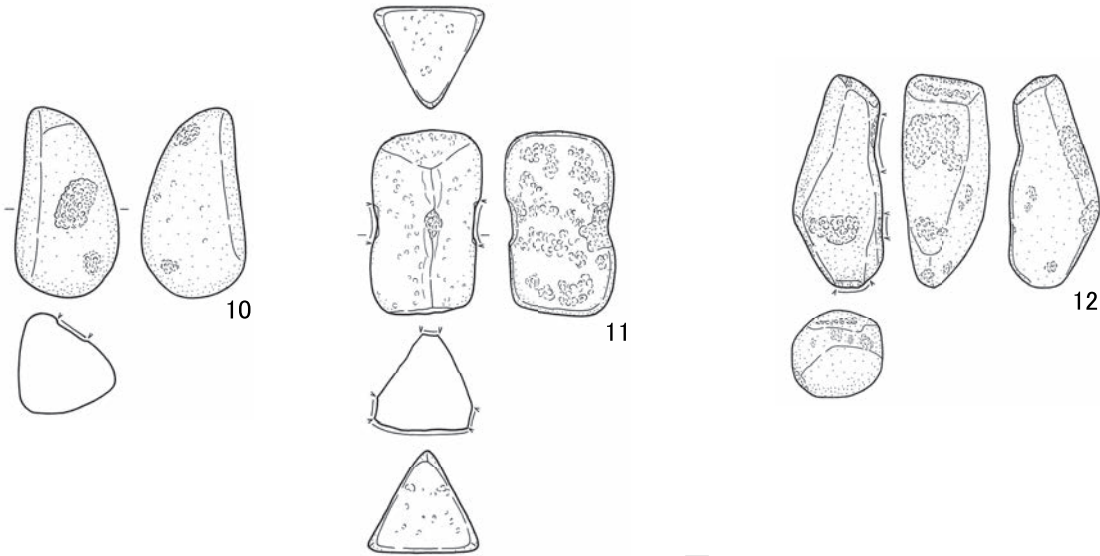
図IV-125 Ⅲ層遺構出土の石器 (13)

ⅢH-9



9

ⅢH-9 HS-2

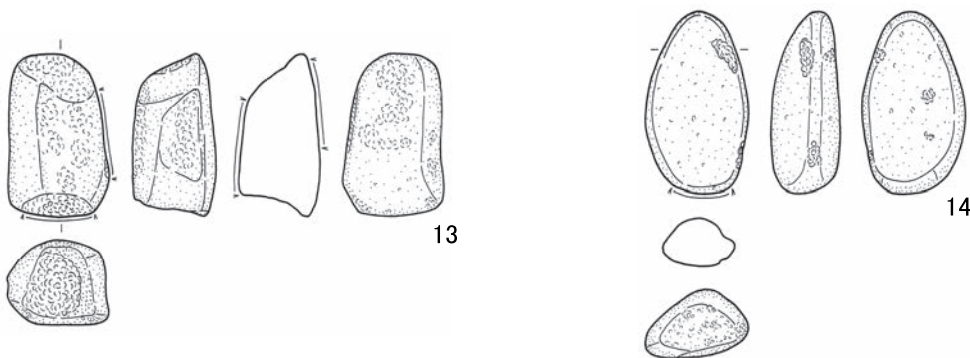


10

11

12

ⅢH-9 HS-4



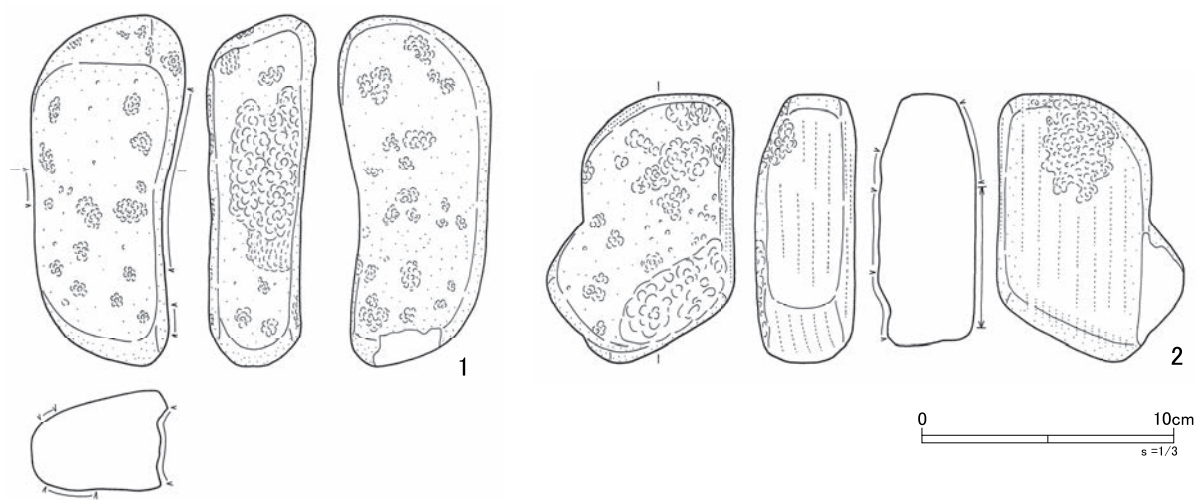
13

14

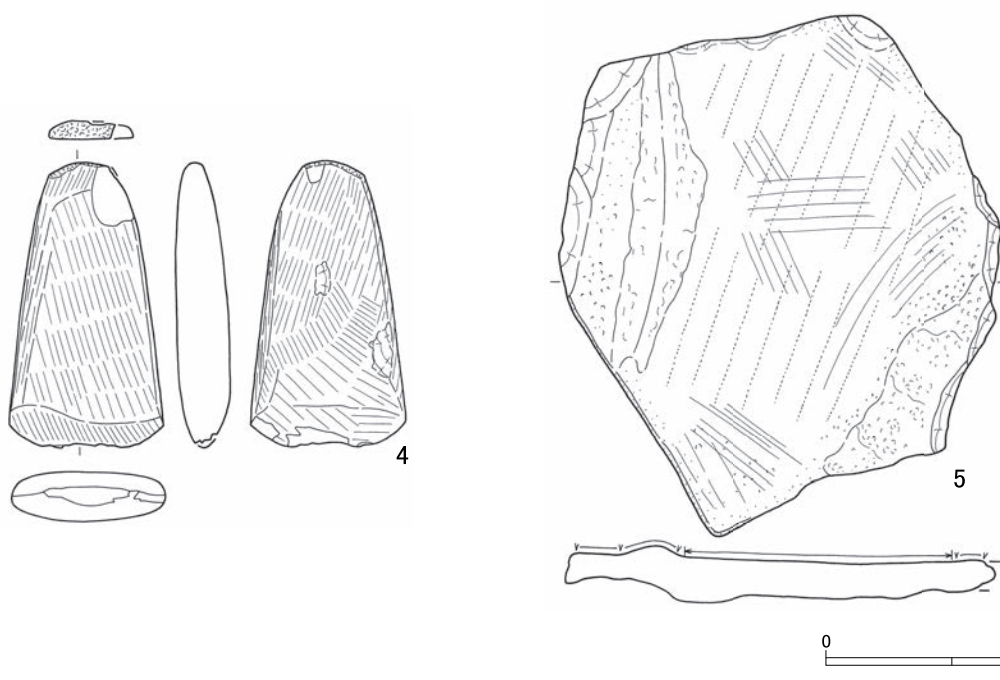
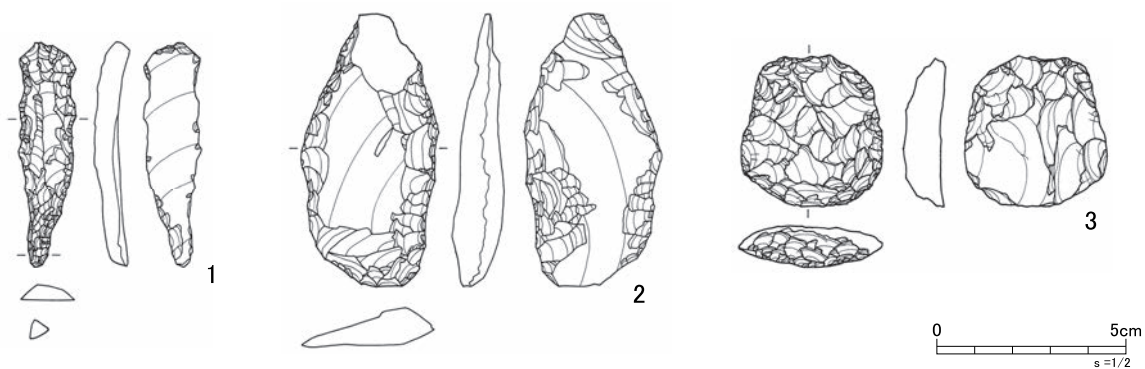


図Ⅳ-126 Ⅲ層遺構出土の石器 (14)

ⅢH-14



ⅢH-15



図IV-127 Ⅲ層遺構出土の石器 (15)

6 Ⅲ層 時期を特定できない遺構と遺物

(1) 概要

時期を特定できない遺構をまとめた。出土遺物がないあるいは乏しい土坑や集石、焼土の類である。
(影浦)

(2) 遺構

ⅢP-18 (図Ⅳ-128、表Ⅲ-11・Ⅳ-4、図版33-5)

位置 h13・h14、i13・14区 平面形態 不整楕円形

規模 1.91×1.35/1.41×0.92/0.61m

確認・調査 ⅢH-6の調査時に、張り出し部の有無を確認するため、14ライン沿いに南側へ向けてiラインまで長さ2mほどのトレンチを入れたところ、別の土坑とみられる痕跡があった。h13区、h14区のⅢ層を掘り下げて清掃すると、平面形も確認された。南北方向のトレンチでは壁の立ち上がりが判然としなかったため、南側を半割し、東西方向で壁を確認した。遺構の性格は不明。

覆土 9層に分層した。覆土7~9は、どれもⅦ層起源のロームや、Ⅳ層起源の摩周パミスが不均一に混在している。崩落土と思われる。上部の覆土1~6は、ロームやパミスの混在自体が少ないので、流れ込み土と考えられる。しかし、覆土2はⅢH-6の掘り上げ土等、人為堆積の嵌入であるかもしれない。

底面・壁 坑底面はⅦ層中に達し、皿状にへこむ。南北方向に段差があり、西側が低い構造である。壁は急角度で直立気味に立ち上がる。坑底部と壁の境界は丸みを帯び、判然としないところが多い。

遺物出土状況 本遺構に伴うと判断される遺物の出土状況は認められない。

時期 検出層位と遺構の形状から続縄文時代下田ノ沢Ⅱ式の時期の可能性が考えられるが、不明。
(影浦)

ⅢP-19 (図Ⅳ-129、表Ⅲ-11・Ⅳ-4、図版33-6)

位置 f24区 平面形態 楕円形

規模 0.63×0.50/0.30×0.28/0.34m

確認・調査 f24区のⅣ層上面で、楕円形の暗褐色土のまとまりを確認した。遺構の可能性を考え、西側約1/2を掘り下げたところ、底面と壁の立ち上がりを確認した。土層断面の撮影及び図化を行った後、東側を掘り下げ完掘した。遺構の性格は不明である。

覆土 1層のみである。黒色土とⅣ層が混ざった土層で、暗褐色を呈する。自然堆積と考えられる。

底面・壁 底面はⅥ層上位に構築され、ほぼ平坦である。壁はやや湾曲しながら急角度に立ち上がる。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

時期 検出層位、周辺包含層出土遺物から、続縄文時代~擦文文化期の可能性がある。(広田)

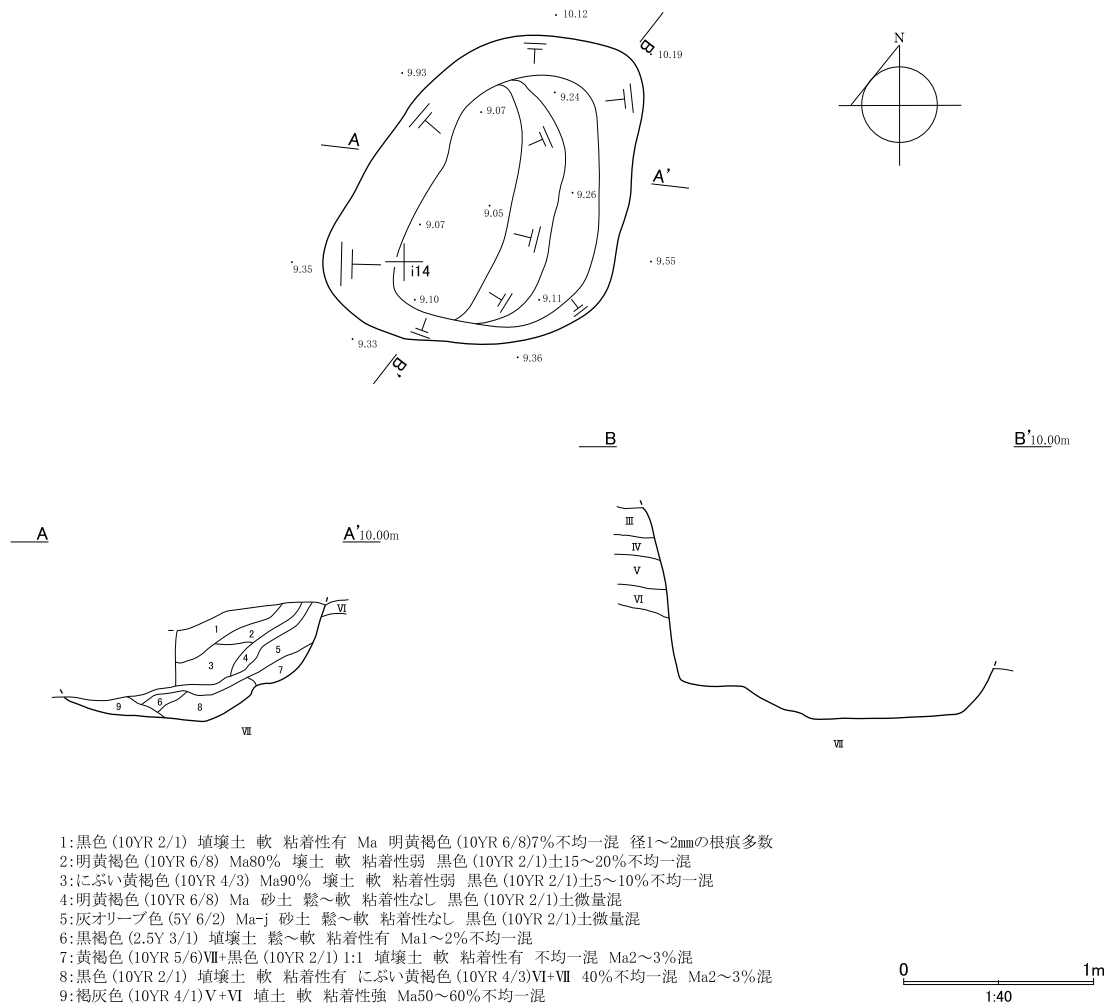
ⅢP-21 (図Ⅳ-129、表Ⅲ-11・Ⅳ-4、図版33-7)

位置 g14・g15区 平面形態 不整円形?

規模 2.16×—/1.80×—/0.40m

確認・調査 ⅢH-6を調査後、周囲の包含層をⅦ層まで下げたところ、g14区においてg15区との境界断面で確認した。ⅢH-6の調査時に掘削した東西トレンチの東端が本土坑に大きく入っているが、土坑の存在に気づいていなかったため、西側半分を欠失した。遺構の性格は不明。

ⅢP-18



- 1: 黒色 (10YR 2/1) 埴壤土 軟 粘着性有 Ma 明黄褐色 (10YR 6/8) 7% 不均一混 径1~2mmの根痕多数
 2: 明黄褐色 (10YR 6/8) Ma80% 壤土 軟 粘着性弱 黒色 (10YR 2/1) 土15~20% 不均一混
 3: にぶい黄褐色 (10YR 4/3) Ma90% 壤土 軟 粘着性弱 黒色 (10YR 2/1) 土5~10% 不均一混
 4: 明黄褐色 (10YR 6/8) Ma 砂土 鬆~軟 粘着性なし 黒色 (10YR 2/1) 土微量混
 5: 灰オリーブ色 (5Y 6/2) Ma-j 砂土 鬆~軟 粘着性なし 黒色 (10YR 2/1) 土微量混
 6: 黒褐色 (2.5Y 3/1) 埴壤土 鬆~軟 粘着性有 Ma1~2% 不均一混
 7: 黄褐色 (10YR 5/6) VII+黒色 (10YR 2/1) 1:1 埴壤土 軟 粘着性有 不均一混 Ma2~3% 混
 8: 黒色 (10YR 2/1) 埴壤土 軟 粘着性有 にぶい黄褐色 (10YR 4/3) VI+VII 40% 不均一混 Ma2~3% 混
 9: 褐灰色 (10YR 4/1) V+VI 埴土 軟 粘着性强 Ma50~60% 不均一混

図Ⅳ-128 ⅢP-18

覆土 5層に分層した。覆土2~5にはIV層起源の摩周パミスが一定量混在している。覆土3~5はすこぶる堅、覆土1と2は堅。覆土3~5は人為的に埋めた可能性がある。覆土1・2は自然に埋没したものであろう。

底面・壁 坑底面はVI層中で、やや南側に傾斜する。壁は下部が緩やか、上部は急角度。

遺物出土状況 本遺構に伴うと判断される遺物の出土状況は認められない。覆土中から礫20点、被熱礫8点が出土した。土器片は縄文時代後期前葉の北筒Ⅲ式が1点出土したのみである。

時期 検出層位と本遺跡における出土土器の内容からから、縄文時代後期前葉の北筒式か、続縄文時代の下田ノ沢Ⅱ式の時期の可能性が考えられる。(影浦)

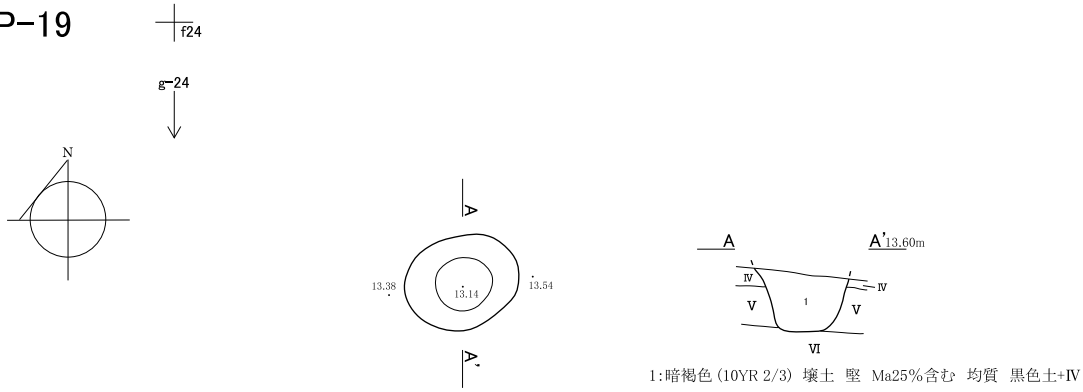
ⅢS-3 (図Ⅳ-130、表Ⅲ-11・Ⅳ-5、図版33-8)

位置 g20区 **平面形態** 円形に分布

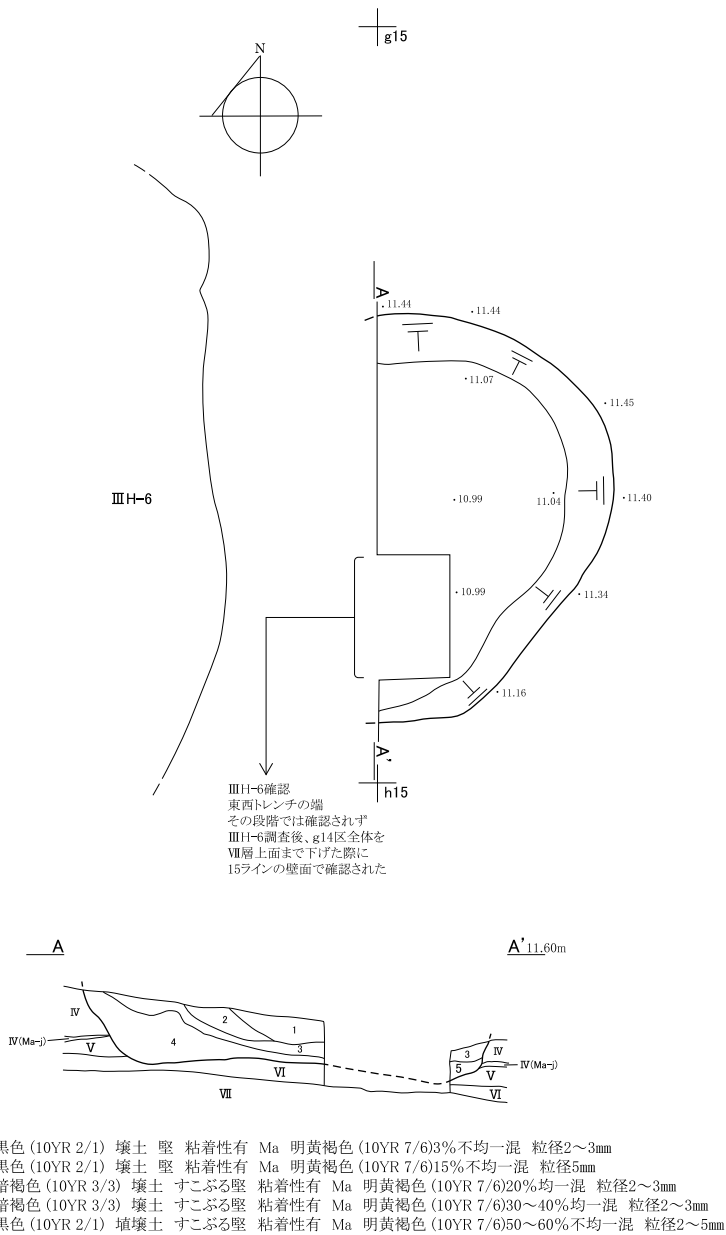
規模 約0.8×約0.7m

確認・調査 Ⅲ層調査中に検出した。

ⅢP-19



ⅢP-21



図Ⅳ-129 ⅢP-19・21

遺物出土状況 礫58点 (10,699 g 1個平均184.5 g)。礫の内訳は粗粒玄武岩20点 (9,335 g 1個平均466.75)、砂岩38点 (1,364 g 1個平均35.9 g) で、石質ごとの重量に差がある。被熱礫は粗粒玄武岩が2点 (641 g 1個平均320.5 g)。ほか砂岩製のたたき石が3点出土している。

時期 検出層位から、縄文時代中期末の北筒式期以降。 (影浦)

ⅢS-6 (図IV-130、表Ⅲ-11・IV-5、図版34-1)

位置 f15区

規模 約0.60×約0.4m

確認・調査 Ⅲ層掘り下げ中に検出した。

遺物出土状況 拳大以下の小礫がまとまっている。焼成礫25点 (1,133 g 1点平均45.3 g)、礫5点 (459 g 1点平均91.8 g) である。

時期 検出層位から、縄文時代中期末の北筒式期以降。 (影浦)

ⅢS-11 (図IV-130、表Ⅲ-11・IV-5、図版34-2)

位置 d19・e19区 **平面形態** 楕円形

規模 約1.50×約1.20m

確認・調査 Ⅲ層掘り下げ中に検出した。密集性の高い集石である。

遺物出土状況 被熱礫755点 (49,902 g 1点平均66.1 g)、礫87点 (1,435 g 1点平均16.5 g)、他にたたき石5点 (うち4点は使用痕が判然としないもの)、砥石1点である。

時期 検出層位から、縄文時代中期末の北筒式期以降ではあるが、集石そのもののまとまり具合、密集性は、トビニタイ式の住居跡で検出したものに似ている。 (影浦)

ⅢF-1 (図IV-131、表Ⅲ-11・IV-5、図版34-3)

位置 g14区 **平面形態** 不定形

規模 0.86×0.68/0.04m

確認・調査 ⅢH-6の竪穴のくぼみに流れ込んだⅢ層中で検出した。

被熱層 薄い単層である。Ⅲ層起源の黒～黒褐色土が30～40%ほど不均一に混じる。炭は10%程度が混ざる。焼骨片は未確認。

遺物出土状況 縄文時代後期前葉の北筒Ⅲ式の磨滅した底部片が出土したが、流入したものであろう。

時期 続縄文時代下田ノ沢Ⅱ式の住居ⅢH-6が大部分埋没した後の時期である。続縄文時代の後北C₂-D式期、あるいはトビニタイ式中間型期や擦文文化期後期の可能性も考えられる。 (影浦)

ⅢF-3 (図IV-131、表Ⅲ-11・IV-5、図版34-4)

位置 f18区 **平面形態** 円形

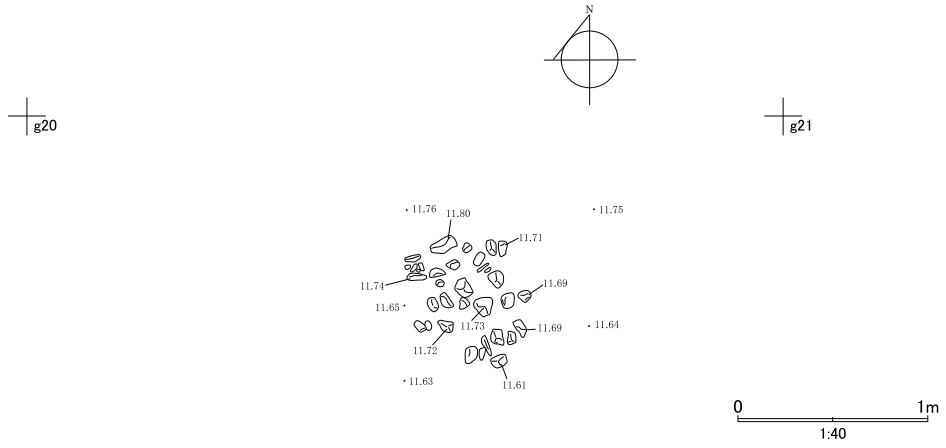
規模 0.26×0.25/0.06m

確認・調査 Ⅲ層中で検出した。

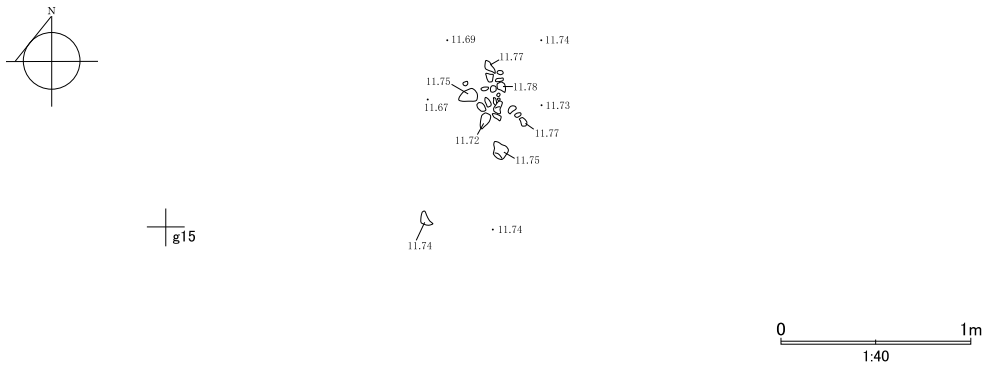
被熱層 単層である。Ⅲ層起源の黒～黒褐色土が20%ほど不均一に混じる。炭は5%程度が混ざる。焼骨片は未確認。

時期 出土層位から縄文時代中期末から後期前葉の北筒式期以降の可能性が高い。 (影浦)

ⅢS-3



ⅢS-6

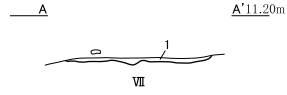
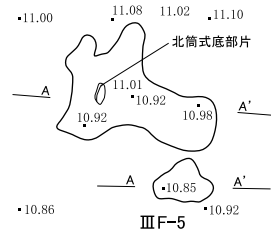
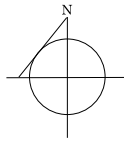


ⅢS-11

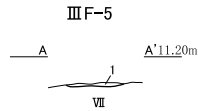


Ⅳ-130 ⅢS-3・6・11

ⅢF-1・5



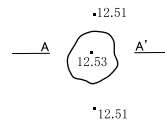
1: 橙色 (7.5YR 6/8) 焼土
 黒色～黒褐色 (10YR 2/1～2/2) 土30～40%不均一混 炭10%混
 明黄褐色 (10YR 7/6) 砂壤土 軟 粘着性弱 Ma2～3%混



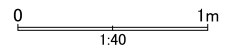
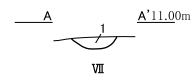
1: 明赤褐色 (5YR 5/8) 焼土
 黒褐色 (10YR 2/2) 砂壤土 軟 粘着性弱 土20%不均一混



ⅢF-3



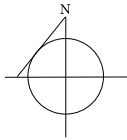
1: 明赤褐色 (5YR 5/8) 焼土
 黒色～黒褐色 (10YR 2/1～2/2) 砂壤土 堅 粘着性弱 土20%不均一混
 炭5%混 骨片未確認



図IV-131 ⅢF-1・3・5

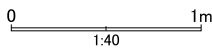
ⅢF-4

e24



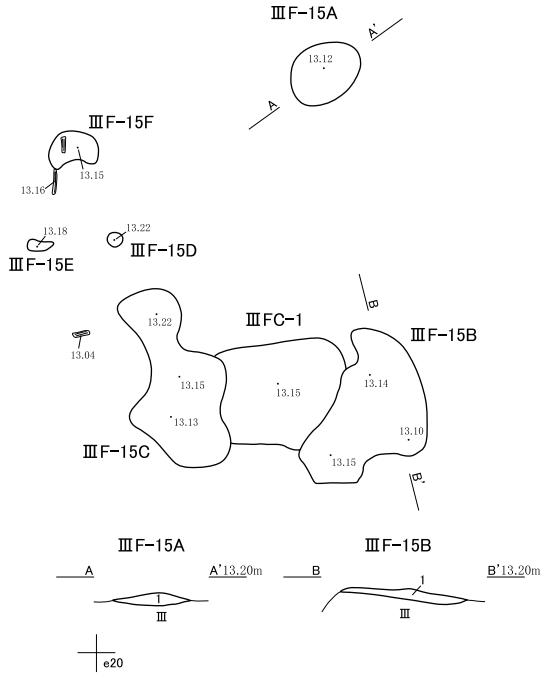
1: 橙色 (5YR 6/8) シルト質壤土 堅 焼土
 2: にぶい褐色 (7.5YR 5/4) シルト質壤土 堅 焼土 炭1%含む

f24



ⅢF-15 ⅢFC-1

d20

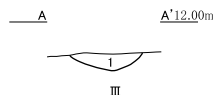
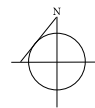


ⅢF-15A 1: 褐色 (7.5YR 4/6) 埴壤土 焼土 均質
 ⅢF-15B 1: 赤褐色 (5YR 3/6) シルト質壤土 焼土>Ⅲ 均質 焼土ブロック状

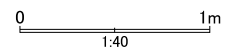
e20

ⅢF-6

g16



1: 明赤褐色 (7.5YR 5/8) 焼土
 黒色～黒褐色 (10YR 2/1～2/2) 砂壤土 堅 粘性性弱 土40%不均一混 炭5%不均一混
 焼骨片未確認



図Ⅳ-132 ⅢF-4・6・15、ⅢFC-1

ⅢF-4 (図Ⅳ-132、表Ⅲ-11・Ⅳ-5、図版34-5)

位置 e24区 平面形態 不整長楕円形

規模 A:0.71×0.31/0.11m B:0.10×0.06m

確認・調査 Ⅲ層中で確認した。大型と小型の2か所(A・B)があるが、小型(B)はごく薄いため土層断面を記録していない。

被熱層 Aは2層からなり、上位(1)は橙色、下位(2)はにぶい褐色で細かい炭をわずかに確認した。

時期 出土層位から縄文時代～擦文文化期である。(広田)

ⅢF-5 (図Ⅳ-131、表Ⅲ-11・Ⅳ-5、図版34-6)

位置 g14区 平面形態 不定形

規模 0.32×0.22/0.03m

確認・調査 ⅢH-6の竪穴のくぼみに流れ込んだⅢ層中で、ⅢF-1に近接して検出した。近接している上に、薄い単層であるため、当初は一連の焼土の可能性も考えられたが、検出面の高さが10cmほど異なる上、焼土自体の色調や混在物等の特徴が異なるため、別の焼土と判断した。

被熱層 薄い単層である。ⅢF-1より赤みが強い色調。Ⅲ層起源の黒褐色土が20%ほど不均一に混じる。炭や焼骨片は確認されなかった。

時期 続縄文時代下田ノ沢Ⅱ式の住居ⅢH-6が大部分埋没した後の時期である。続縄文時代の後北C₂-D式の時期、あるいはトビニタイ式中間型期や擦文文化期後期の可能性が考えられる。(影浦)

ⅢF-6 (図Ⅳ-132、表Ⅲ-11・Ⅳ-5、図版34-7)

位置 g15区 平面形態 不定形

規模 0.54×0.34/0.09m

確認・調査 Ⅲ層中で検出した。

被熱層 単層である。Ⅲ層起源の黒～黒褐色土が40%ほど不均一に混じる。炭は5%程度が混ざる。焼骨片は未確認。

時期 出土層位から縄文時代前期以降。(影浦)

ⅢF-7 (図Ⅳ-133、表Ⅲ-11・Ⅳ-5、図版34-8)

位置 f17区 平面形態 長楕円形

規模 0.89×0.46/0.10m

確認・調査 Ⅲ層中で検出した。

被熱層 単層である。Ⅲ層起源の黒褐色土が30%ほど不均一に混じる。炭・焼骨片は未確認。

時期 出土層位から縄文時代前期以降。(影浦)

ⅢF-8 (図Ⅳ-133、表Ⅲ-11・Ⅳ-5、図版35-1)

位置 f17区 平面形態 不定形

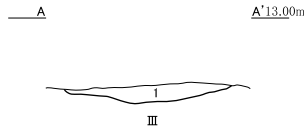
規模 0.48×0.32/0.10m

確認・調査 Ⅲ層中で検出した。

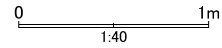
被熱層 単層である。Ⅲ層起源の黒褐色土が40%ほど不均一に混じる。炭は5～7%程度混ざる。

時期 出土層位から縄文時代前期以降。(影浦)

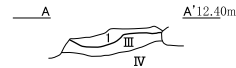
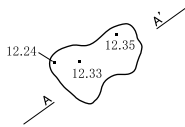
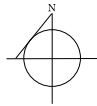
ⅢF-7



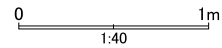
1: 明赤褐色 (5YR 5/8) 焼土
 黒褐色 (10YR 2/2) 砂壤土 堅 粘着性弱 土30%不均一混



ⅢF-8

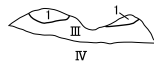


1: 橙色 (5YR 6/8) 焼土40%
 橙色 (2.5YR 6/8) 焼土10~15%
 赤色 (10YR 5/8) 焼土5%
 黒褐色 (10YR 2/3) 土40%
 軟 粘着性わずか 炭5~7% 不均一混

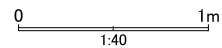
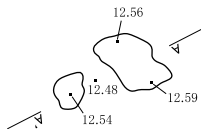


ⅢF-9

A A' 18.00m



1: 明赤褐色 (5YR 5/8) 焼土
 黒褐色 (10YR 2/2~2/3) 砂壤土 軟 粘着性わずか
 焼骨片未確認 炭3~5% 土25~30%不均一混



Ⅳ-133 ⅢF-7・8・9

ⅢF-9 (図Ⅳ-133、表Ⅲ-11・Ⅳ-5、図版35-2)

位置 f30区 平面形態 不定形

規模 (0.54?)×(0.54?)／0.08m

確認・調査 Ⅲ層中で検出した。周囲が掘り下がっていたため、島状に残った状態での記録となった。

被熱層 単層である。Ⅲ層起源の黒褐色土が25~30%ほど不均一に混じる。炭は3~5%程度混ざる。

時期 出土層位から縄文時代前期以降。 (影浦)

ⅢF-10 (図Ⅳ-134、表Ⅲ-11・Ⅳ-5、図版35-3)

位置 e13区 平面形態 不整な帯状

規模 (1.27?)×(0.33?)／0.05m

確認・調査 Ⅲ層掘り下げ中に、焼土の塊が帯状に表れた。内容、諸特徴が酷似しているため、近接して検出したⅢF-11と一連である可能性も考えられる。

被熱層 単層である。炭が7~10%ほど不均一に混じる。焼骨片は未確認。Ⅲ層中にブロック状の焼土が30%ほど混ざっているもの。他の場所で焚いた焼土を帯状に散布したものと判断した。

時期 出土層位から縄文時代前期以降。 (影浦)

ⅢF-11 (図Ⅳ-134、表Ⅲ-11・Ⅳ-5、図版35-4)

位置 e13区 平面形態 散布状

規模 1m四方程度の範囲。

確認・調査 Ⅲ層掘り下げ中に、焼土の塊が散点的に表れた。内容、諸特徴が酷似しているため、近接して検出したⅢF-10と一連のもの可能性はある。

被熱層 単層である。炭が7~10%ほど不均一に混じる。焼骨片は未確認。Ⅲ層中にブロック状の焼土が30%ほど混ざっているもの。他の場所で焚いた焼土を散布したように映る。

時期 出土層位から縄文時代前期以降。 (影浦)

ⅢF-12 (図Ⅳ-135、表Ⅲ-11・Ⅳ-5、図版35-5)

位置 g12区 平面形態 不整円形

規模 0.39×0.30／0.08m

確認・調査 Ⅲ層を掘り下げ中に確認した。

被熱層 単層である。炭を微量含む。Ⅲ層起源の黒褐色土が不均一に30~40%ほど混ざる。すこぶる堅い。

時期 出土層位から縄文時代前期以降。 (影浦)

ⅢF-13 (図Ⅳ-135、表Ⅲ-11・Ⅳ-5、図版35-6)

位置 g13区 平面形態 不定形

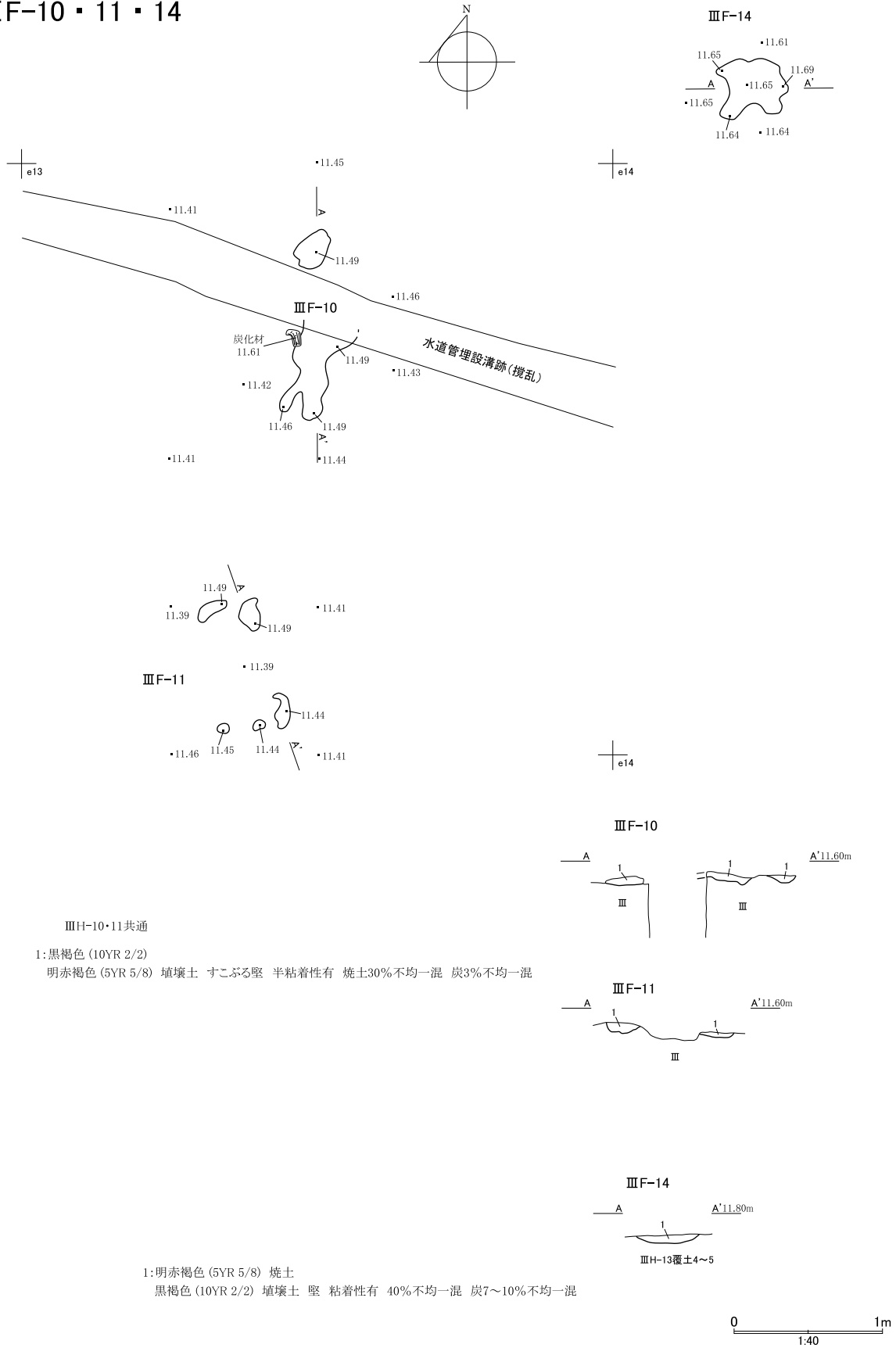
規模 0.72×0.44／0.08m

確認・調査 Ⅲ層を掘り下げ中に確認した。

被熱層 単層である。炭を微量含む。Ⅲ層起源の黒褐色土が不均一に50%ほど混ざる。すこぶる堅い。

時期 出土層位から縄文時代前期以降。 (影浦)

ⅢF-10・11・14



ⅢH-10・11共通

1: 黒褐色 (10YR 2/2)

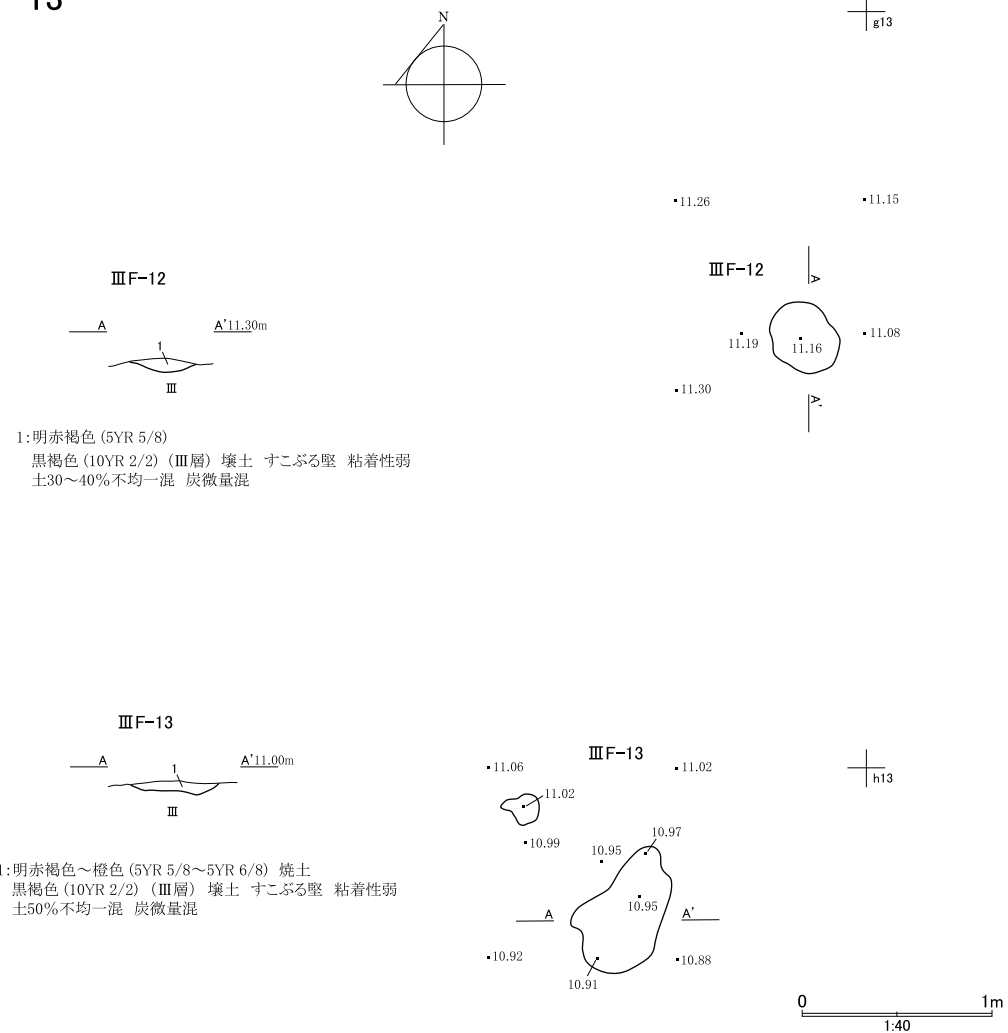
明赤褐色 (5YR 5/8) 埴壤土 すこぶる堅 半粘着性有 焼土30%不均一混 炭3%不均一混

1: 明赤褐色 (5YR 5/8) 焼土

黒褐色 (10YR 2/2) 埴壤土 堅 粘着性有 40%不均一混 炭7~10%不均一混

ⅢF-10・11・14

ⅢF-12・13



図Ⅳ-135 ⅢF-12・13

ⅢF-14 (図Ⅳ-134、表Ⅲ-11・Ⅳ-5、図版35-7)

位置 d14区 平面形態 不定形

規模 0.51×0.50/0.05m

確認・調査 ⅢH-13の範囲確認中、覆土中で検出した。

被熱層 単層である。炭が7~10%ほど不均一に混じる。黒褐色土が不均一に40%ほど混ざる。

時期 ⅢH-13の覆土中であることから、縄文時代中期末から後期前葉の北筒式期以降が考えられる。(影浦)

ⅢF-15 (図Ⅳ-132、表Ⅲ-11・Ⅳ-5、図版35-8)

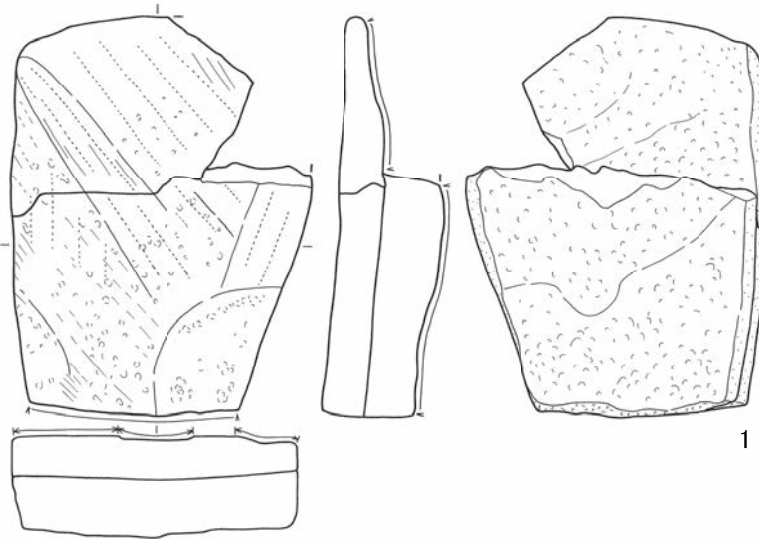
位置 A~D: d20区 E: d19区 F: d19・20区

平面形態 A: 楕円形 B・C・E: 不整形 D: 円形 F: 不整楕円形

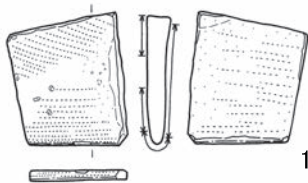
規模 A: 0.40×0.31/0.07m B: 0.87×0.64/0.06m C: 1.00×0.58m D: 0.08×0.08m
 E: 0.14×0.06m F: 0.26×0.20m

確認・調査 ⅢH-4掘り上げ土下のⅢ層中で確認した。6か所(A~F)あるが、大型(A~C)と小型(D~F)に分かれる。C~Fはごく薄いため土層断面は記録していない。また、BとCの間

ⅢS-10



ⅢF-15B



図Ⅳ-136 Ⅲ層遺構出土の石器 (16)

にⅢFC-1が位置する。遺物はBから石鋸、被熱礫、礫が少量出土している。

被熱層 Aの焼土は褐色で、厚さは7cmである。B～Fは赤褐色で、焼土にⅢ層が混ざる土層である。焼土はブロック状のものが多。

時期 出土層位から縄文時代～続縄文時代である。 (広田)

ⅢFC-1 (図Ⅳ-132、表Ⅲ-11・Ⅳ-5、図版35-8)

位置 d20区 **平面形態** 楕円形?

規模 0.70×0.59m

確認・調査 ⅢF-15の検出作業中に、ⅢF-15B・Cの間で黒曜石製のフレイク・チップの集中を確認した。遺物の取り上げは手取りの他に、土壌ごと取り上げて水洗選別による回収も行った。

遺物出土状況 フレイクが68点、チップが3,138点出土した。他にスクレイパー、被熱礫、礫が出土している。土器は出土していない。

時期 出土層位から縄文時代～続縄文時代である。 (広田)

(3) 遺構出土の遺物

・石器

Ⅲ S-10 (図IV-136、表IV-18、図版82)

1は砥石。崩壊した砥石を接合したものであるが、割れ面を叩いている。使用面にも敲打痕が観察されるので、台石的な用途を兼ねていた可能性もある。砂岩製。

Ⅲ F-5 B (図IV-136、表IV-18、図版82)

1は石鋸。砥石片を転用したものとみられる。砂岩製。

(影浦)

7 Ⅲ層 トビニタイ式期を含む擦文文化期の遺構と遺物

(1) 概要

トビニタイ式期を含む擦文文化期の遺構は台地上の平坦部中央に分布する。いずれも隅丸方形の竪穴住居跡でトビニタイ式期は西側に2軒(ⅢH-4・5)、擦文文化期の住居跡は東側に2軒(ⅢH-2・3)がある。ⅢH-3と5は住居跡の大部分が調査範囲外であり、部分発掘である。それぞれの住居跡は重複しない。調査区外の台地上に当該期の四角い竪穴住居跡がくぼみとして残っており視認できるが、それらについても重複はしていないようである。トビニタイ式期の竪穴住居跡は床面直上および覆土下部において礫の出土量が多く、一部集石を構成するところもある。一方、擦文文化期の竪穴住居跡は、いずれとも南東の側壁においてカマドが検出されている。ⅢH-4の竪穴中に重複していた続縄文時代と考えられる土坑(ⅢP-20)も、調査工程の一連性を考慮して、ここで掲載する。(影浦)

(2) 遺構

・トビニタイ式期

ⅢH-4 (図IV-137~141・156、表Ⅲ-10・IV-2、図版36、37-1~5)

位置 (竪穴) d20~22、e20~22区 (掘り上げ土) c20~22、d19~22、e19~22、f20~22区

平面形態 (竪穴) 隅丸方形 (掘り上げ土) 不整形

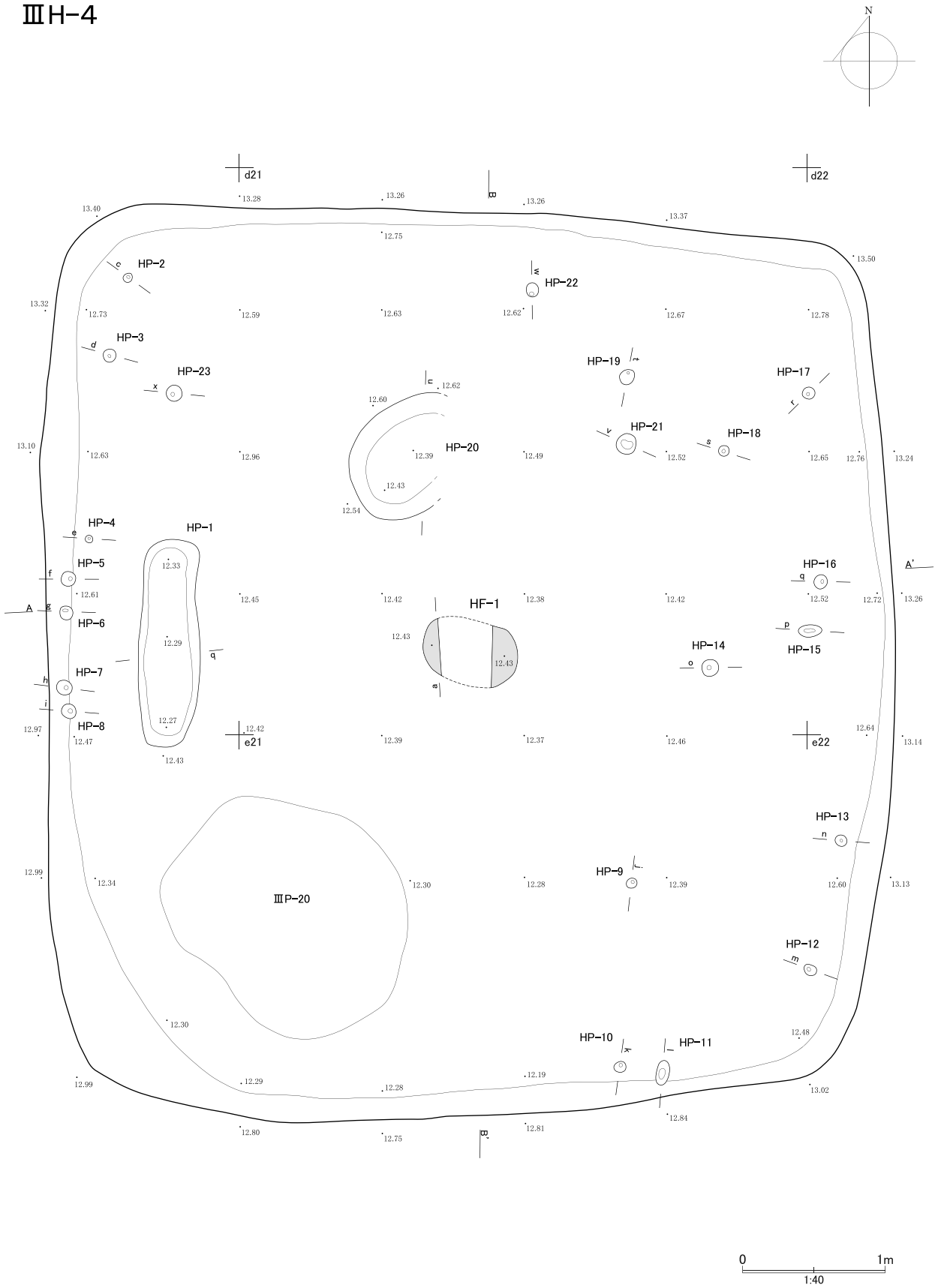
規模 (竪穴) 6.52×6.04/6.14×5.77/0.53m (掘り上げ土) (12.08)×(11.96)/0.42m

確認・調査 調査開始前から方形の竪穴としてくぼみで確認できていた遺構である。最初に人力で表土を除去し、次に十字形のトレンチを設定し掘り下げた。トレンチは方形のくぼみの中心付近を通り、辺にはほぼ平行するようにした。その結果、床面と壁の立ち上がりを確認し、竪穴住居跡と判断した。その後、トレンチに沿って土層観察用のベルトを設定し覆土を掘り下げた。遺物は小型のものについては適宜取り上げ、大型のものについては出土状況の図化等を行った後に取り上げた。床面まで掘り下げた後、覆土の土層断面の撮影及び図化を行い、ベルトを掘り下げた。その後、床面で確認した焼土やピットの調査を行った。また、床面南西側では、本遺構と重複する土坑(ⅢP-20)を確認した。ⅢP-20の時期は覆土中からⅥ群土器が出土しているため、続縄文時代と考えられ、本遺構が新しいと推測される。

掘り上げ土 竪穴周辺の表土を除去した時、表土直下に黒褐色土の分布がみられたため、竪穴住居跡構築時の掘り上げ土と判断した。北側は調査区外へ広がり、北東側はⅢH-3の掘り上げ土と重複し、部分的に不明瞭である。南側は攪乱が広くみられる。ⅢH-3との間にトレンチを設定し土層断面を観察したところ、ⅢH-4の掘り上げ土の上位にⅢH-3の掘り上げ土が堆積していたため、ⅢH-4はⅢH-3より古い遺構と判断した。土層の厚さは最大約40cmを測り、竪穴西側の堆積が厚い傾向がみられる。土層は、黒色土とⅣ層、Ⅶ層が混ざり、色調は暗褐色~黒褐色、黒色を呈する。また、西側の掘り上げ土では焼土を含む土層(4・5)を確認した。西側掘り上げ土下のⅢ層中にはⅢF-15とⅢFC-1が位置する。

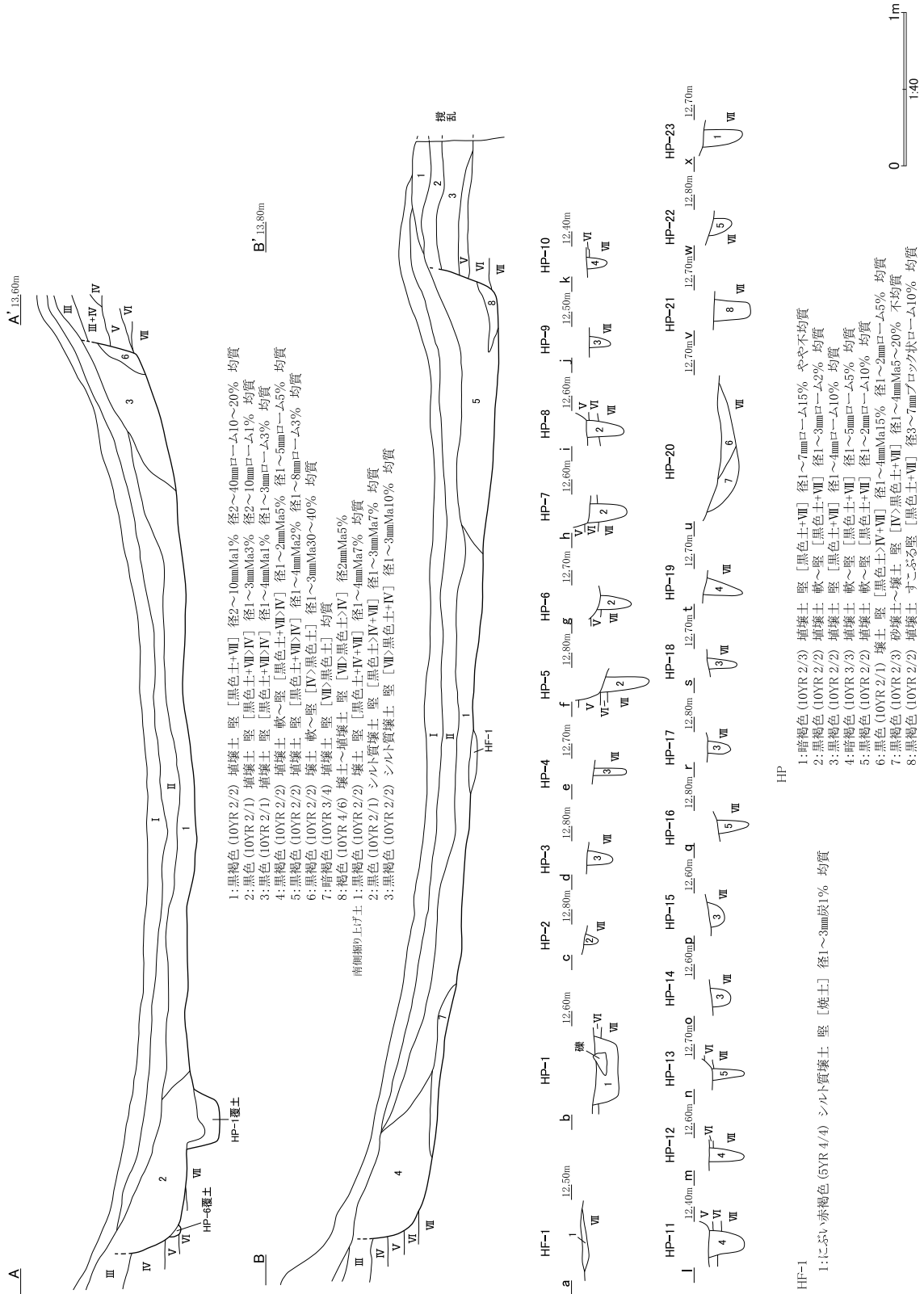
覆土 竪穴が埋まりきっていないため、中央付近に比べ、壁側は厚く堆積している。上位にはⅠ・Ⅱ層が堆積し、その下位を8層(1~8)に分けた。堆積順序はまず、壁付近に暗褐色~褐色の色調で黒色土、Ⅳ層、Ⅶ層の土が混ざった土層(6~8)が少量堆積し、次に黒色土とⅦ層主体でⅣ層が少量混ざる黒色~黒褐色土層(2~5)が壁際に厚く堆積し、最後に中央から壁近くまで黒褐色土(1)

ⅢH-4

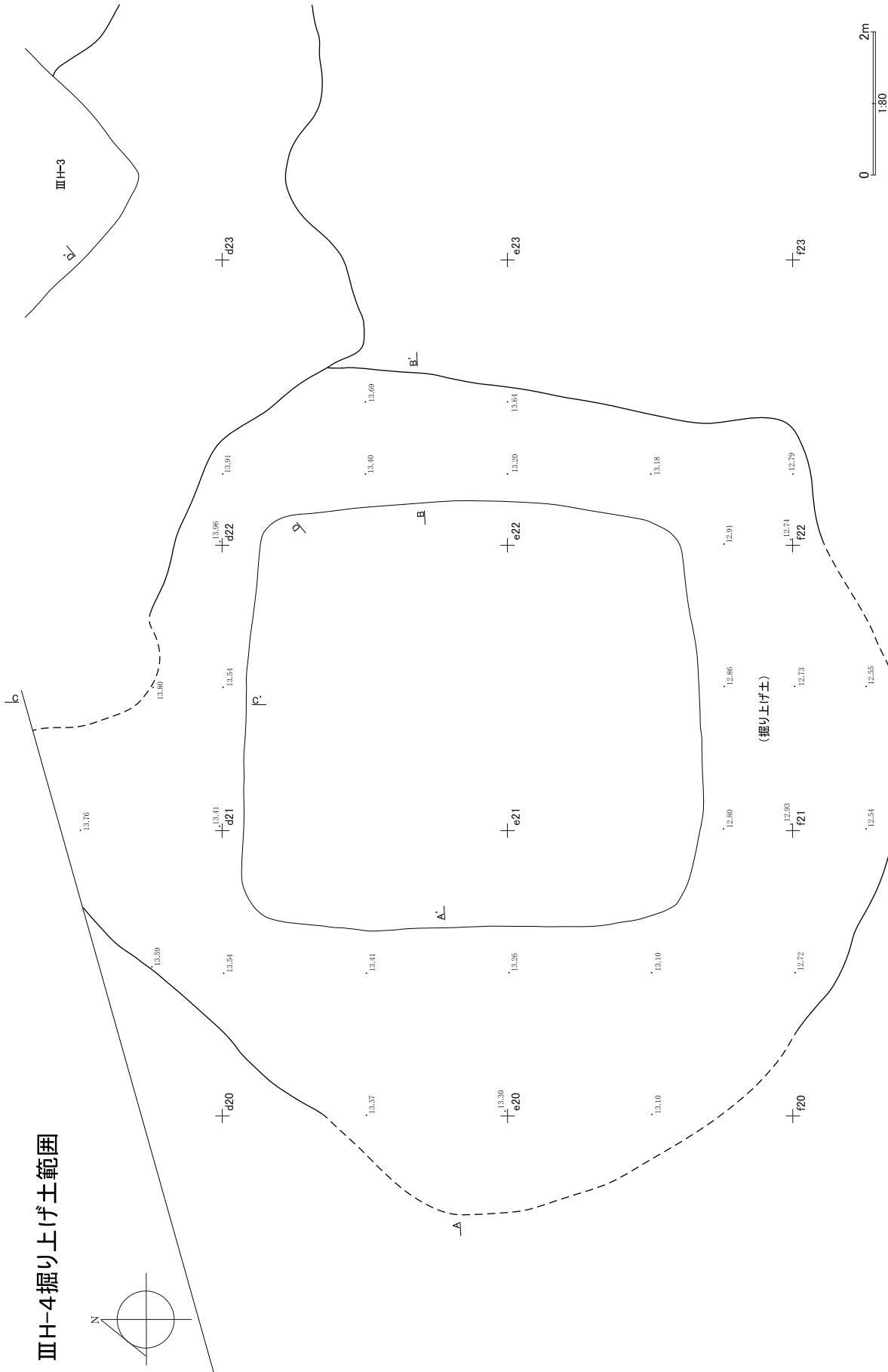


図Ⅳ-138 ⅢH-4 平面

ⅢH-4断面



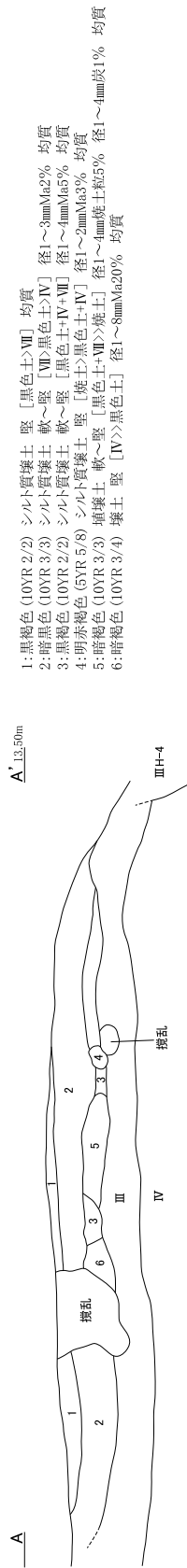
図Ⅳ-139 ⅢH-4断面



図IV-140 IIIH-4 掘り上げ土範囲

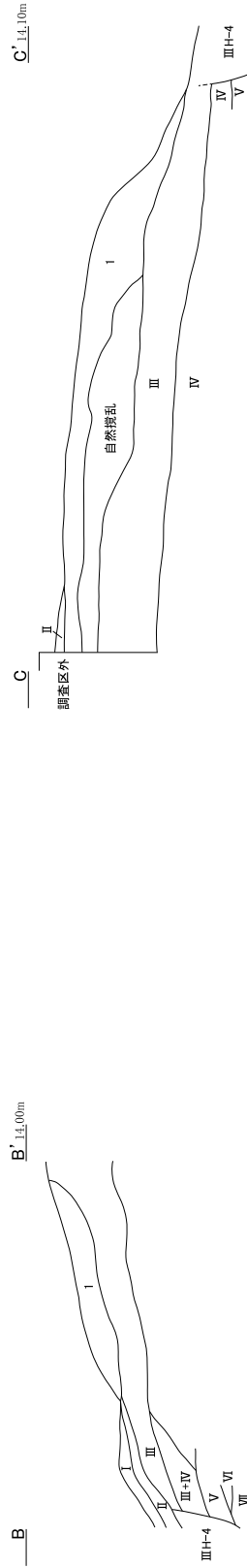
IIIH-4掘り上げ土範囲

ⅢH-4西側掘り上げ土



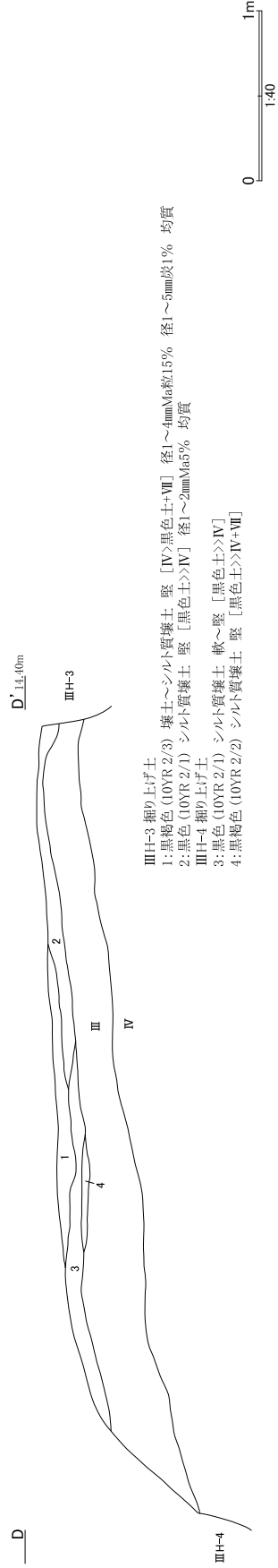
- 1: 黒褐色 (10YR 2/2) シルト質礫土 堅 [黒色土>Ⅶ] 均質
- 2: 暗黒色 (10YR 3/3) シルト質礫土 軟~堅 [Ⅶ>黒色土>Ⅳ] 径1~3mmMa2% 均質
- 3: 黒褐色 (10YR 2/2) シルト質礫土 軟~堅 [黒色土+Ⅳ+Ⅶ] 径1~4mmMa5% 均質
- 4: 明赤褐色 (5YR 5/8) シルト質礫土 堅 [礫土>黒色土+Ⅳ] 径1~2mmMa3% 均質
- 5: 暗褐色 (10YR 3/3) 礫土 軟~堅 [黒色土+Ⅶ>礫土] 径1~4mm礫土粒5% 均質
- 6: 暗褐色 (10YR 3/4) 礫土 堅 [Ⅳ>黒色土] 径1~5mmMa20% 均質

ⅢH-4東側掘り上げ土

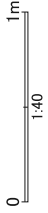


- 1: 黒褐色 (10YR 2/2) シルト質礫土 軟~堅 [黒色土+Ⅶ>Ⅳ] 径1~4mmMa5~15% 径5mm炭1% 均質

ⅢH-3・4間セクション



- ⅢH-3 掘り上げ土
- 1: 黒褐色 (10YR 2/3) 礫土~シルト質礫土 堅 [Ⅳ>黒色土+Ⅶ] 径1~4mmMa粒15% 径1~5mm炭1% 均質
- 2: 黒色 (10YR 2/1) シルト質礫土 堅 [黒色土>>Ⅳ] 径1~2mmMa5% 均質
- ⅢH-4 掘り上げ土
- 3: 黒色 (10YR 2/1) シルト質礫土 軟~堅 [黒色土>>>Ⅳ]
- 4: 黒褐色 (10YR 2/2) シルト質礫土 堅 [黒色土>>Ⅳ+Ⅶ]



図Ⅳ-141 ⅢH-4掘り上げ土断面

が広く堆積する。

床面・壁 床面は、東から北側にかけてやや高くなっている。また、概ねⅦ層中に構築されているが、西～南側はⅥ層中の構築である。壁は全体的に急角度だが、南西隅はやや緩やかである。

付属遺構 焼土1か所（HF-1）、ピット23か所（HP-1～23）を確認した。焼土は床面ほぼ中央に位置し、調査の初期段階のトレンチで中央部分を削平されている。焼土は平面形が楕円形、厚さは5cmで炭化物が微量認められた。位置及び形状から炉跡と考えられる。ピットは大型（HP-1・20）と小型（HP-2～19・21～23）に分かれる。HP-1は平面が細長い長楕円形状で、長径1.46m、短径0.44mを測る。HP-20は東側を部分的にトレンチで削平されている。現状では長径約1m、短径約0.7m、深さ約20cmである。共に性格は不明である。小型のピットは概ね柱穴と推定され、配置は壁際（HP-2～8・10～13・15～17、22）と、やや内側（HP-9・14・18・19・21・23）に分かれる。平面形は円ないし楕円で、HP-11・15の様に長楕円形もある。断面形状は下端が細くなり、尖り気味のものが主体である。規模は径10cm前後、深さ約10～25cmである。

遺物出土状況 覆土中から大型～小型の礫が多く出土した。床面直上では北西側で集石（HS-1）が確認され、本遺構に伴うものと考えられる。礫石器が多く、内訳は泥岩製すり石1点、粗粒玄武岩製のたたき石？3点、砂岩製のたたき石5点と粗粒玄武岩と砂岩製の礫15点（1,243g 1点平均82.9g）である。遺構に伴う土器は出土していない。また、覆土中から棒状鉄製品が2点（1個体）出土し、取り上げ後保存処理及び分析を行った（V章7節参照）。

時期 住居の形状、柱穴の配置などからトビニタイ式期と考えられる。HF-1出土の炭1点について放射性炭素年代測定を行い、¹⁴C年代は1140±20yrBPで、暦年代範囲（2σ）では778calAD-790calAD、827calAD-841calAD、864calAD-983calADという結果が出ており、概ね8世紀後葉～10世紀後葉の年代となる。（広田）

ⅢP-20（図IV-157、表Ⅲ-10・IV-4、図版37-6）

位置 e20・21区 **平面形態** 不整楕円形

規模 1.80×1.56/1.52×0.30/0.24m

確認・調査 ⅢH-4の床面精査時に、南西隅付近で黒褐色土の楕円形のまとまりを確認した。まとまりの中心を通るように長軸方向でトレンチ調査を行い、底面と壁の立ち上がりを確認したため遺構と判断した。トレンチの南西側の覆土を掘り下げ、土層断面の撮影及び図化を行った後に東側の覆土を掘り下げた。遺物は適宜取り上げた。当初はⅢH-4の付属遺構と考えていたが、覆土中から下田ノ沢Ⅱ式土器が出土した点、形状等が周辺の続縄文時代の土坑と類似することから、ⅢH-4に重複する土坑と判断した。本遺構はⅢH-4より古く、上部を壊されている。遺構の性格は不明である。

覆土 8層に分けた。黒色土、Ⅳ層とⅦ層が混ざった土層で、主に黒褐色を呈する。細かい土層が多く人為的な堆積の可能性もあるが、不明である。

底面・壁 底面はⅦ層中に構築され、小さい凹凸がみられる。壁は底面から連続的に緩やかに湾曲しながら立ち上がる。

遺物出土状況 下田ノ沢Ⅱ式土器（Ⅵb）、スクレイパー、たたき石などが覆土から出土したが、遺構に伴うものかは不明である。床面からは被熱した礫2点が出土している。

時期 遺構の重複関係、覆土出土遺物から、続縄文時代下田ノ沢式期と考えられる。（広田）

ⅢH-5（図IV-142～146、表Ⅲ-10・IV-2、図版38・39）

位置（竪穴）d15～17、e15・16区（掘り上げ土）d14～18、e14～18、f15～17区

平面形態 (竪穴) 隅丸方形? (掘り上げ土) 不整円形?

規模 (竪穴) (6.73)×(3.07)／(6.31)×(2.90)／(0.64) m

(掘り上げ土) (13.92)×(8.56)／(0.48) m

確認・調査 調査開始前から方形の竪穴としてくぼみで確認できていた遺構である。くぼみは調査区外にかけて広がり、今回の調査範囲は全体の約1/2である。最初に人力で表土を除去し、次に調査区壁沿いとそれにほぼ直交し中心付近を通る位置にトレンチを設定し、掘り下げた。床面と壁の立ち上がりが確認されたので、竪穴住居跡と判断した。次にバルトを1本設定し、覆土を掘り下げた。覆土から床面にかけて全体的に礫が多く出土したため、出土状況の撮影、図化を行った。覆土下位から炭化材が少量出土し、1点(C23)について樹種同定を行ったが、小片で炭化灰状であり、広葉樹とのみ同定された。遺物取り上げ後に床面を精査し、確認したピットの調査を行った。また、調査終了後に周辺をⅦ層まで掘り下げたところ、壁際及び壁で小形のピット(HP-27~34)を確認したため、それらについても調査を行った。

掘り上げ土 竪穴周辺の表土を除去した時、表土直下に黒褐色土の分布がみられたため、竪穴住居跡構築時の掘り上げ土と判断した。竪穴部分北側が調査区外に広がるため、確認できたのは南側約半分である。東側は掘り上げ土の色調が黒色~黒褐色で、Ⅲ層との区別が困難なため範囲が不明瞭である。南側は現代の水道管等の攪乱で一部壊されている。土層は南側が厚く最大約50cmを測る。色調は黒色~黒褐色で部分的に暗褐色もみられる。Ⅳ層、Ⅶ層が混ざるものが多い。掘り上げ土の下からは、縄文時代の遺構であるⅢH-13、ⅢP-25、ⅤH-2や、続縄文時代のⅢH-10が確認された。

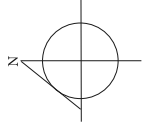
覆土 竪穴が埋まりきっていないため、中央付近がやや浅く、壁側は厚い堆積状況である。上位にはⅠ・Ⅱ層が堆積し、その下位を12層(1~12)に分けた。堆積順序はまず床面中央付近にⅦ層主体の暗褐色土(12)が、そして壁際に黒色~黒褐色土(5~11)が堆積する。次に竪穴内から外側にかけて黒色土主体の層(1~4)がみられ、これらは竪穴外にも広がり、掘り上げ土を形成する。

床面・壁 床面は概ね平坦で、壁際がやや高くなる。ほぼⅦ層中に構築されるが、東側は一部Ⅵ層中である。また、中央付近は黒褐色のやや汚れた土層が薄く堆積している。壁は比較的急角度だが、西側は比較的緩やかである。

付属遺構 ピット34か所(HP-1~34)を確認した。全体的に小型で、径15cm程度(HP-2・16・17)、径12cm程度(HP-3・5・14・15・19・21・34)、径10cm以下(HP-1・4・8~13・18・20・22~33)に分かれる。深さは15~30cm程度が多く、全体的に深い傾向がみられる。断面形状は下端が細くなり、尖るものもある。配置は壁付近と、壁から約1m内側があり、前者が多い。壁付近の中には壁柱穴(HP-18・24~26・28~32・34)もみられ、内側に傾くものが主体である。これらの多くは上部構造を支える柱穴と考えられる。

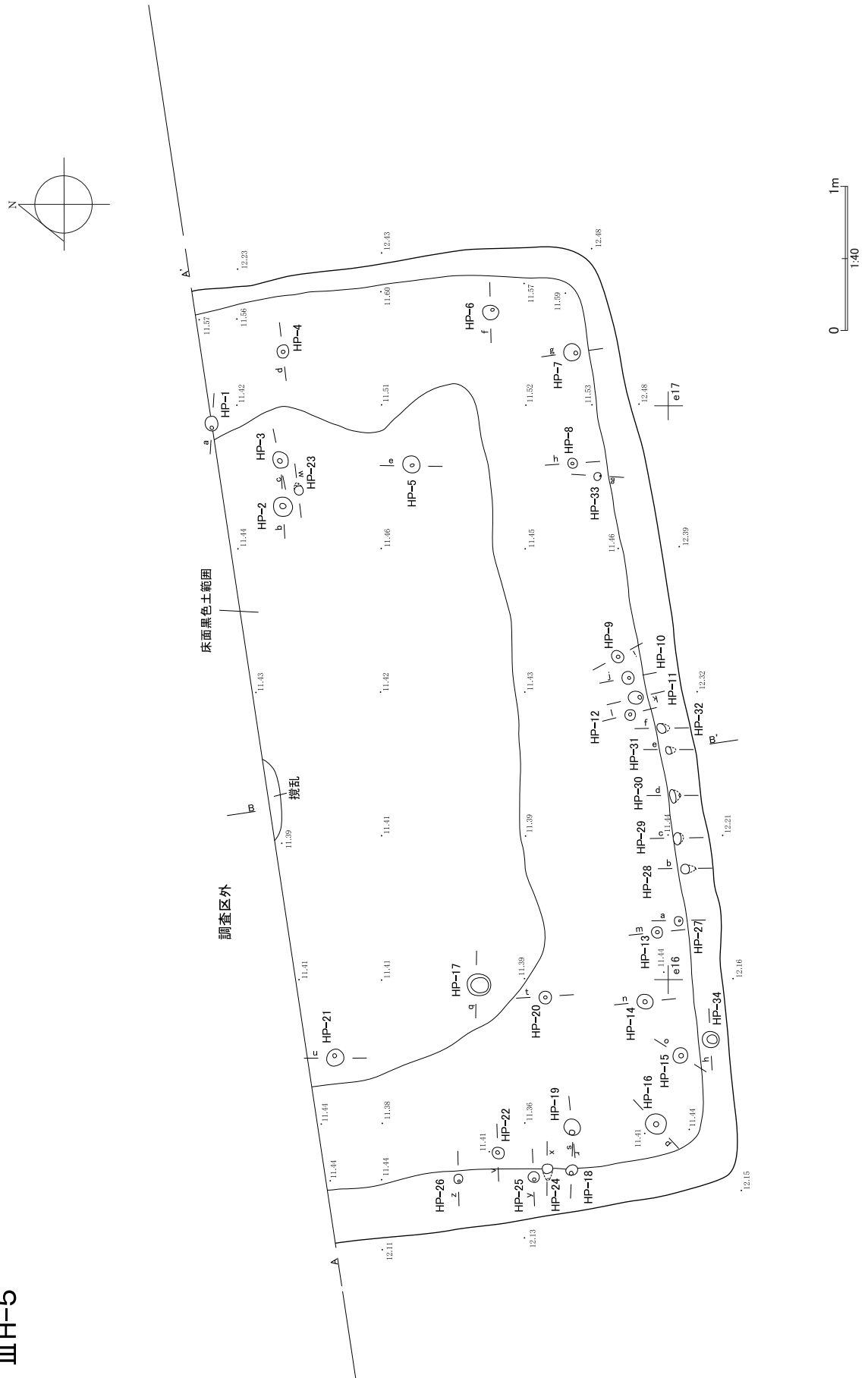
遺物出土状況 出土点数は約2,000点で、その中では礫がほぼ半分を占める。礫は覆土中位~床面にかけて出土し、床面直上では集石が3か所(HS-1~3)検出された。いずれも長径5~10cm程度の礫が主体で、範囲内では濃密に分布しており、この遺構に伴うものと考えられる。HS-1は砂岩と泥岩製の被熱礫各1点(153g 1点平均76.5g)、粗粒玄武岩、泥岩、砂岩製の礫109点(6,994g 1点平均64.2g)が出土している。HS-2は砂岩、泥岩、粗粒玄武岩製の礫148点(10,866g 1点平均73.4g)の他に、砂岩製のたたき石2点、砂岩製のたたき石? 1点、砂岩製の台石片? 17点、パミス4点が出土している。HS-3は砂岩、泥岩、粗粒玄武岩、安山岩製の礫20点(8,211g 1点平均410.6g)、続縄文時代下田ノ沢式土器1点が出土している。集石以外の礫は長径10~30cm程度の大型の礫が多く、分布は竪穴全体にみられる。また、床面からトビニタイ式中間型(Ⅷ群)が1個体出土しており、この遺構に伴う遺物と考えられる。

ⅢH-5遺物出土状況



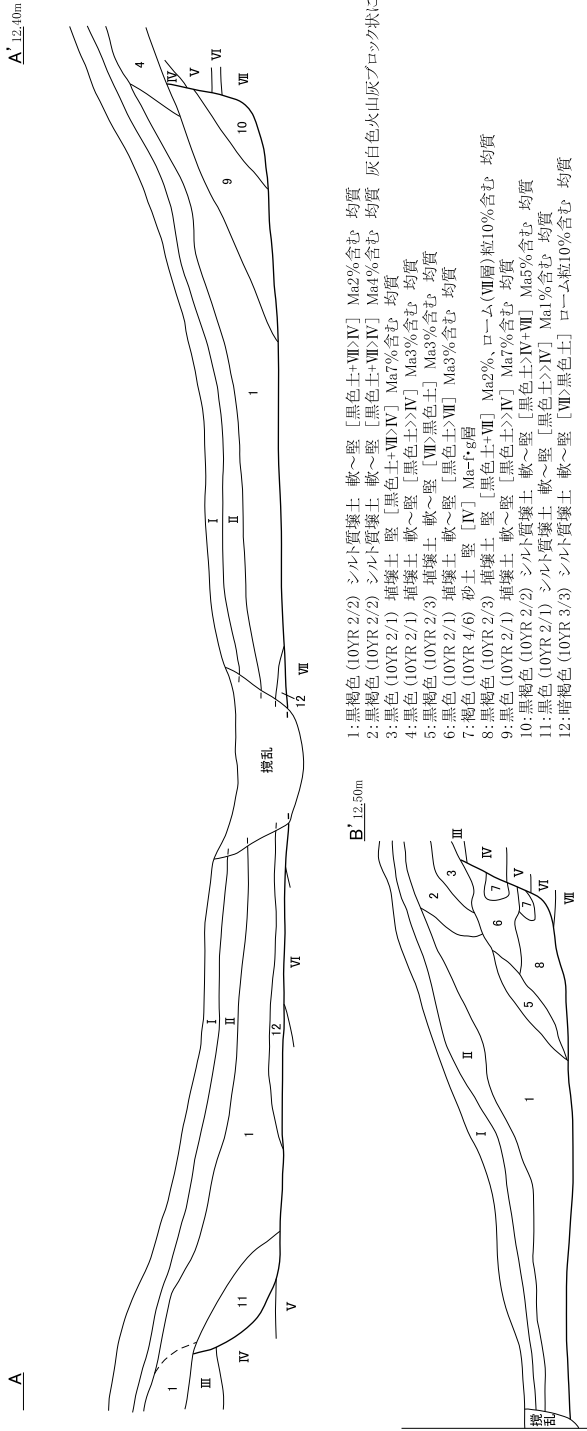
図Ⅳ-142 ⅢH-5遺物出土状況

ⅢH-5

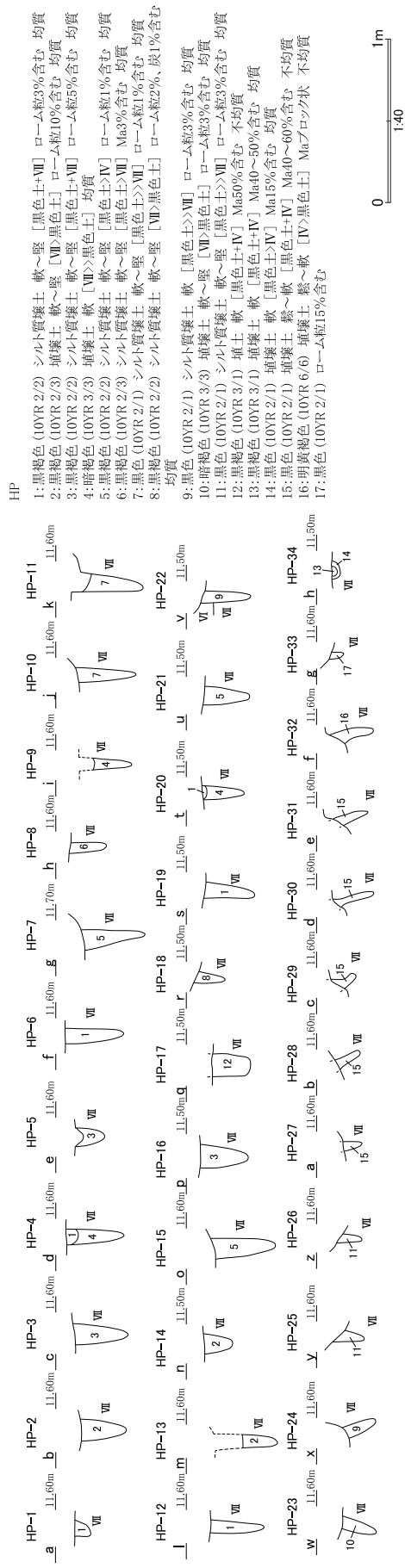


図Ⅳ-143 ⅢH-5平面

ⅢH-5

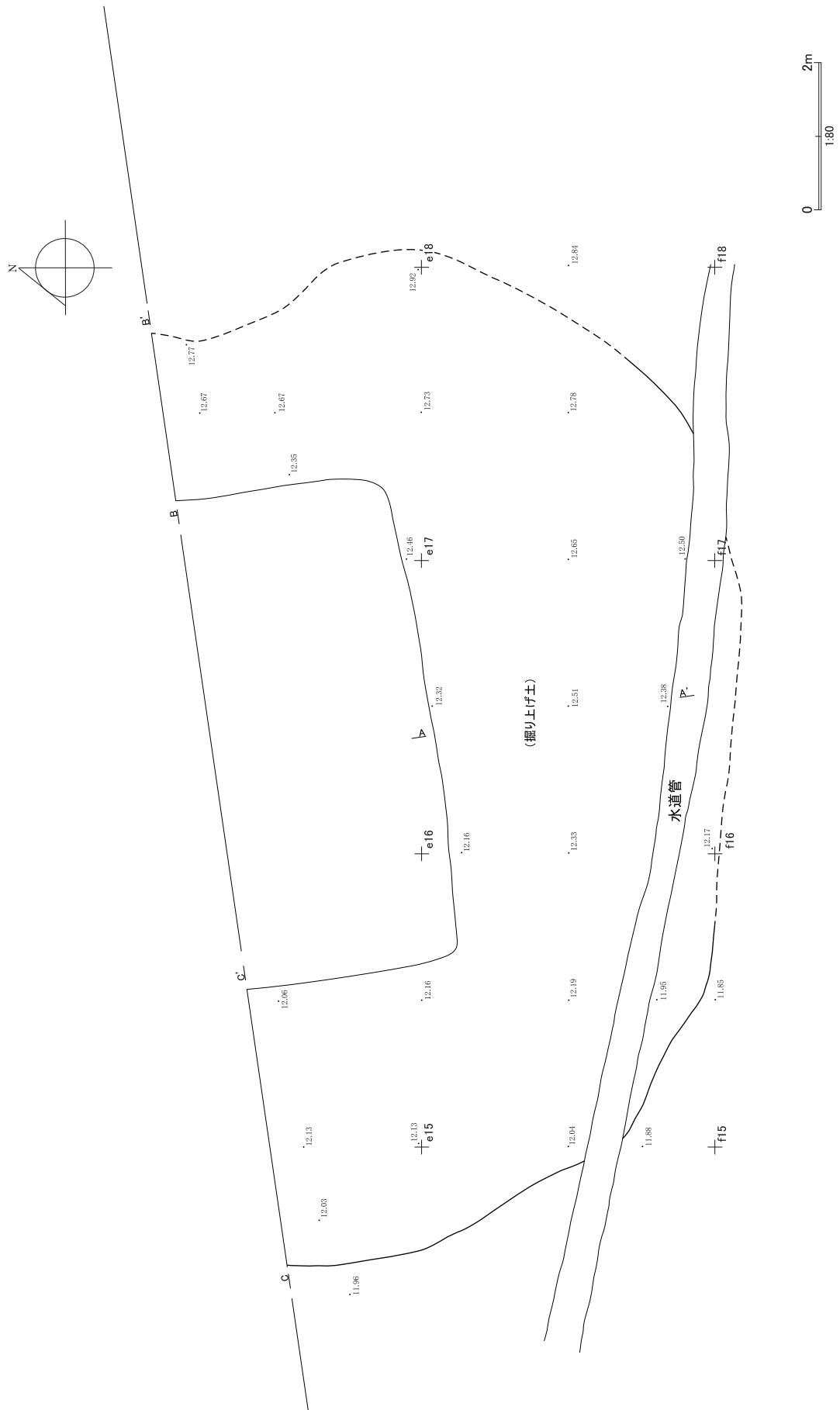


- 1:黒褐色(10YR 2/2) シルト質壤土 軟～堅 [黒色土+VII>IV] Ma2%含む 均質
- 2:黒褐色(10YR 2/2) シルト質壤土 軟～堅 [黒色土+VII>IV] Ma4%含む 均質
- 3:黒色(10YR 2/1) 埴壤土 堅 [黒色土+VII>IV] Ma7%含む 均質
- 4:黒色(10YR 2/1) 埴壤土 軟～堅 [VII>黒色土] Ma3%含む 均質
- 5:黒褐色(10YR 2/3) 埴壤土 軟～堅 [VII>黒色土] Ma3%含む 均質
- 6:黒色(10YR 2/1) 埴壤土 軟～堅 [黒色土+VII] Ma3%含む 均質
- 7:褐色(10YR 4/6) 砂土 堅 [IV] Ma+Fe+石膏
- 8:黒褐色(10YR 2/3) 埴壤土 堅 [黒色土+VII] Ma2%、ローム(Ⅶ層)粒10%含む 均質
- 9:黒色(10YR 2/1) 埴壤土 軟～堅 [黒色土>>IV] Ma7%含む 均質
- 10:黒褐色(10YR 2/2) シルト質壤土 軟～堅 [黒色土+IV+VII] Ma5%含む 均質
- 11:黒色(10YR 2/1) シルト質壤土 軟～堅 [黒色土>>IV] Ma1%含む 均質
- 12:暗褐色(10YR 3/3) シルト質壤土 軟～堅 [VII>黒色土] ローム粒10%含む 均質



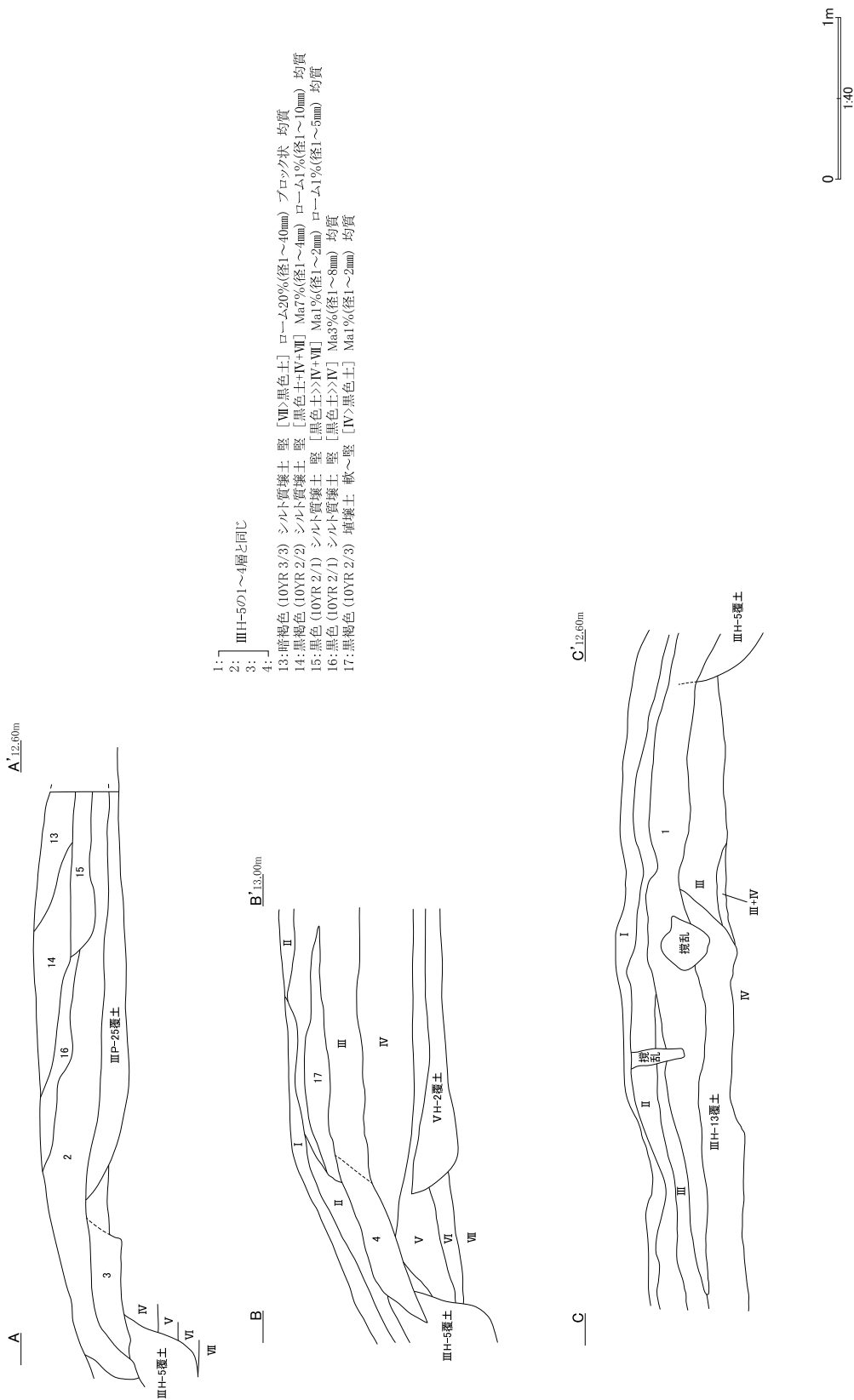
図Ⅳ-144 ⅢH-5 断面

ⅢH-5 掘り上げ土範囲



図Ⅳ-145 ⅢH-5掘り上げ土範囲

ⅢH-5掘り上げ土断面



図Ⅳ-146 ⅢH-5掘り上げ土断面

時期 床面出土の土器から、トビニタイ式期と判断される。覆土出土の炭化材2点（ON2-9, 10）について放射性炭素年代測定を行ったところ、¹⁴C年代が940±20yrBPと1,070±20で、暦年代範囲（2σ）では1029calAD-1154calADと897calAD-925calAD、943calAD-1019calADという結果で、2点の時期がややずれている。（広田）

・擦文文化期後期

ⅢH-2（図IV-147~151、表Ⅲ-11・IV-2、図版40・41）

位置（竪穴）b26・27、c25~27、d26・27区

（掘り上げ土）a25~27、b25~28、c25~27、d26・27区

平面形態（竪穴）隅丸方形（掘り上げ土）不整楕円形

規模（竪穴）5.96×5.24/5.48×4.81/0.87m（掘り上げ土）13.00×(11.36)/0.21m

確認・調査 調査開始前から方形の竪穴としてくぼみで確認できていた遺構である。東側の一部が現代の土地造成時の土手で部分的に埋められていた。最初に人力で表土を除去し、次に十字形のトレンチを設定し掘り下げた。トレンチは方形のくぼみの中心付近を通り、辺にはほぼ平行するようにした。その結果、床面と壁の立ち上がりを確認し、竪穴住居跡と判断した。その後、トレンチに沿ってベルトを設定し覆土を掘り下げた。遺物は、覆土出土は適宜取り上げ、床面付近から出土したものは出土状況の図化等を行った後に取り上げた。また、覆土下位から床面にかけて炭化材が出土し、大型のもの10点（C13~22）について、樹種同定を行った。その結果クルミ属4点、サクラ属2点、トネリコ属・ニレ属・ハンノキ属・エゴノキ属が各1点と同定された。出土状況や形状からは住居跡の建築材と考えられ、多種類の材を使用していたとみられる。床面まで掘り下げた後、覆土の土層断面の撮影及び図化を行い、ベルトを掘り下げた。また、南東側壁の中央付近からはカマド構築材と考えられる灰白色の粘土や大型の礫を確認し、カマドの調査を行った。また、床面で焼土や柱穴などのピットを確認したため、それらの調査も行った。

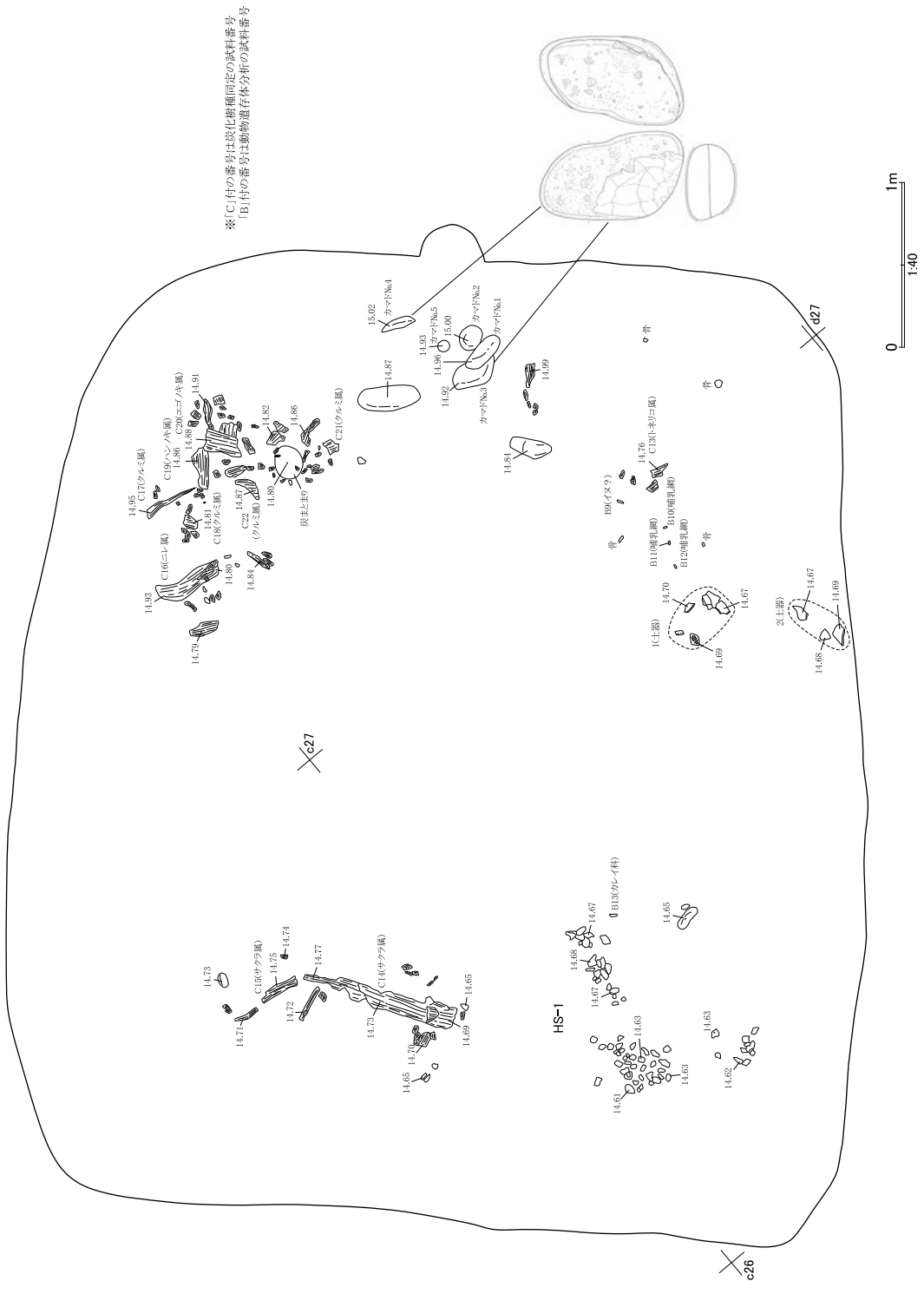
掘り上げ土 竪穴周辺の表土を除去した時、表土直下に黒褐色土の分布がみられたため、竪穴住居構築時の掘り上げ土と判断した。東側端は現代の溝状攪乱で壊され、北側は調査区外へ広がっている。また、西側はⅢH-3の掘り上げ土と重複しているが、新旧関係は不明である。厚さは最大約20cmだが、ごく薄く堆積がほとんどみられない部分もある。土層は、黒色土とⅣ層、Ⅶ層が混ざったもので、色調は黒褐色~黒色が多い。

覆土 竪穴が埋まりきっていないため、中央付近はごく浅く、壁側は厚い堆積状況である。上位にはⅠ・Ⅱ層が堆積し、その下位を13層（1~13）に分けた。堆積順序は、まず壁際に黒色土とⅣ層、Ⅶ層からなる土層（3~13）が堆積し、その後黒褐色土層（1・2）が広がる。9は黒色土とⅣ層、Ⅶ層が互層状に堆積し、12はⅣ層、13はⅦ層がブロック状に混ざっている。

床面・壁 床面はⅦ層中に構築され、概ね平坦だが、西側が少し低くなっている。壁は全体的に急角度だが、北東、南西側は比較的緩やかである。

付属遺構 カマド1か所（カマド1）、焼土3か所（HF-1・2A・2B）、ピット10か所（HP-1~10）を確認した。カマド1は南東側壁のほぼ中央に構築されている。カマド1では粘土、焼土、大型の礫が確認され、焼土の下からは浅いピット状の掘り込みがみられた。また壁上部から竪穴外にかけて、上から掘り込まれた短い煙道が作られている。焼土の内1か所（HF-1）は床面ほぼ中央に位置するため炉跡と考えられる。カマド焼土と炉跡焼土（HF-1）からは微細な骨片が出土している。HF-2A・Bは、柱穴と考えられるHP-3が近接し、用途は不明である。ピットは支柱穴の4か所（HP-1~4）と、壁際の補助的な柱穴（HP-6~10）と、浅いピット（HP-5）の

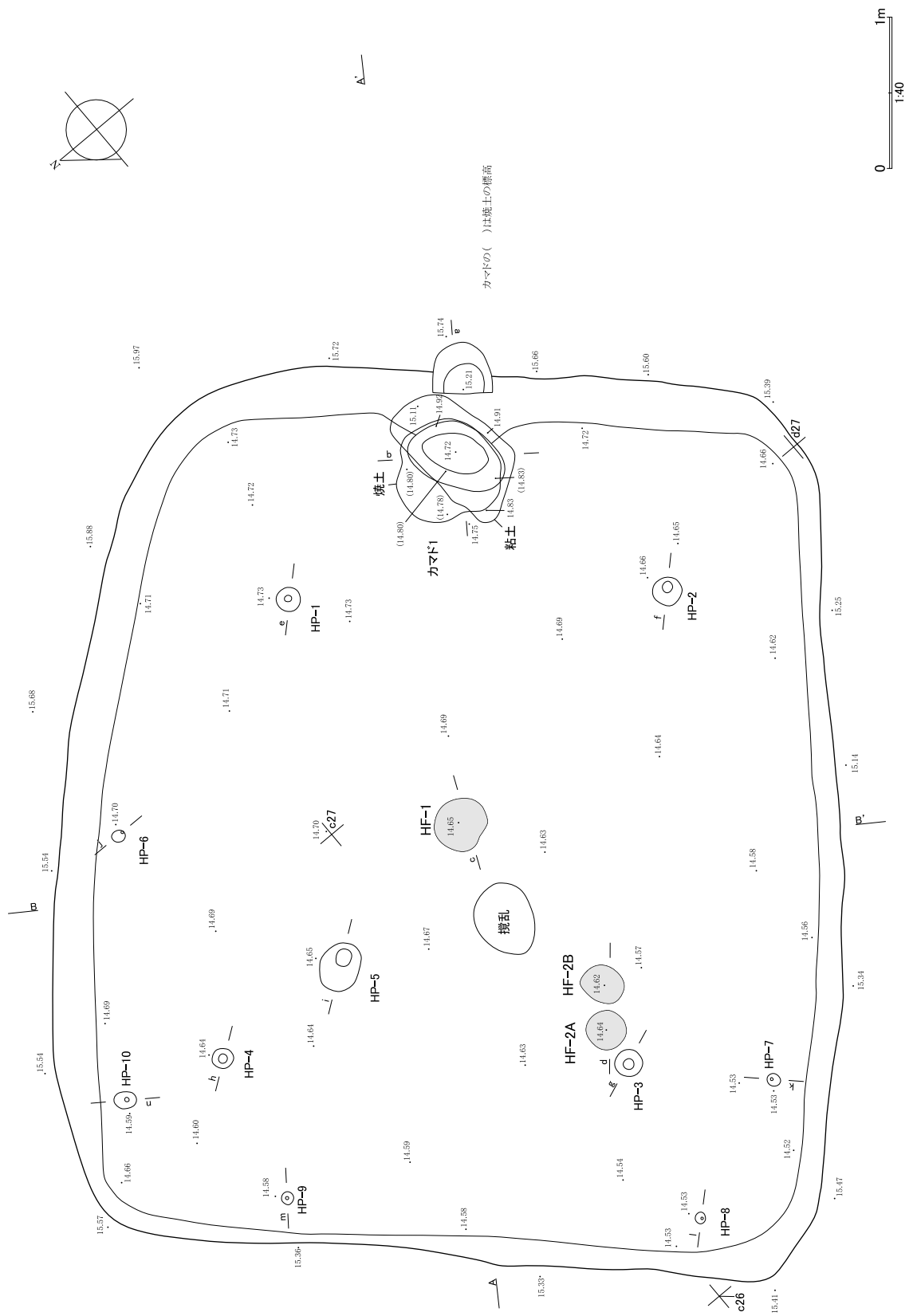
ⅢH-2
床面・床面直上遺物出土状況



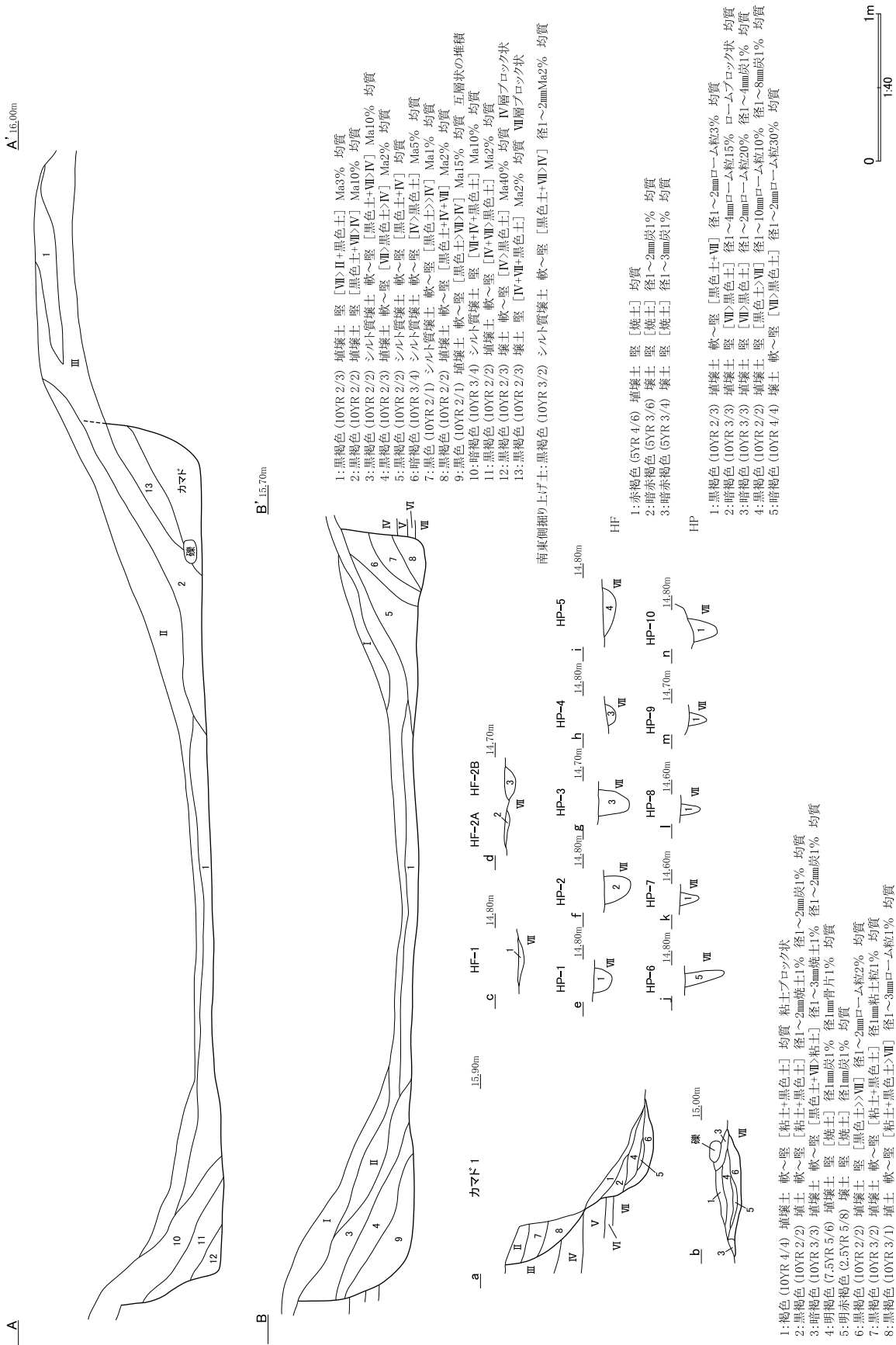
※「C」付の番号は炭化餅種同定の試料番号
「B」付の番号は動物遺存体分析の試料番号

図Ⅳ-147 ⅢH-2 床面・床面直上遺物出土状況

ⅢH-2

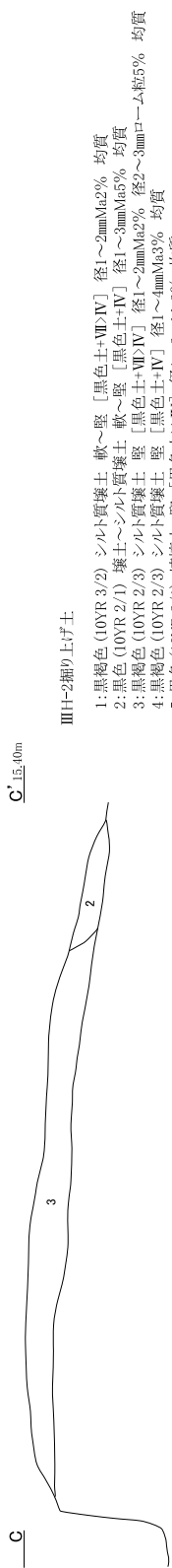


図Ⅳ-148 ⅢH-2平面



図IV-149 IIIH-2断面

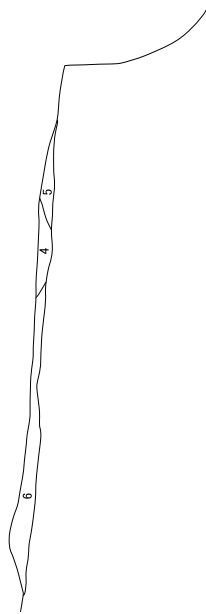
ⅢH-2



ⅢH-2掘り上げ土

- 1: 黒褐色 (10YR 3/2) シルト質礫土 軟～堅 [黒色土>Ⅶ>Ⅳ] 径1～2mmMa2% 均質
- 2: 黒褐色 (10YR 2/1) 礫土～シルト質礫土 軟～堅 [黒色土>Ⅳ] 径1～3mmMa5% 均質
- 3: 黒褐色 (10YR 2/3) シルト質礫土 堅 [黒色土>Ⅶ>Ⅳ] 径1～2mmMa2% 径2～3mmロー△粒5% 均質
- 4: 黒褐色 (10YR 2/3) シルト質礫土 堅 [黒色土>Ⅳ] 径1～4mmMa3% 均質
- 5: 黒色 (10YR 2/1) 堆礫土 堅 [黒色土>>Ⅳ] 径1～2mmMa2% 均質
- 6: 黒褐色 (10YR 2/2) シルト質礫土 堅 [黒色土>Ⅳ] 径1～2mmMa5% 均質
- 7: 黒褐色 (10YR 2/2) シルト質礫土 軟～堅 [黒色土>Ⅳ] 均質
- 8: 黒色 (10YR 2/1) シルト質礫土 軟～堅 [黒色土>Ⅳ] 均質
- 9: 黒褐色 (10YR 2/2) 礫土 軟～堅 [黒色土>Ⅳ] 径1～3mm岩1% 均質
- 10: 暗褐色 (10YR 3/3) シルト質礫土 軟～堅 [Ⅳ>>黒色土] 径1～2mmMa20% 均質

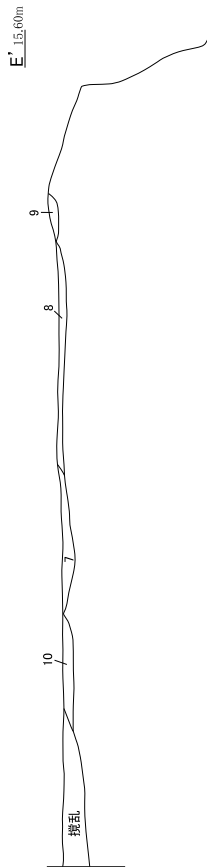
D' 15.90m



ⅢH-2・3掘り上げ土

- 1: 黒色 (10YR 2/1) シルト質礫土 軟～堅 [黒色土>>Ⅶ] 径1～2mmロー△粒1% 均質
- 2: 黒褐色 (10YR 2/3) シルト質礫土 軟～堅 [黒色土>Ⅶ>Ⅳ] 径1～2mmMa2% 径1～4mmロー△粒10% 均質
- 3: 暗褐色 (10YR 3/4) 堆礫土 軟～堅 [Ⅶ>黒色土>Ⅳ] 径1～2mmMa1% 径1～3mmロー△粒5% 均質
- 4: 黒色 (10YR 2/1) シルト質礫土 軟～堅 [黒色土>>Ⅳ] 径1mmMa2% 均質
- 5: 黒褐色 (10YR 2/2) シルト質礫土 軟～堅 [黒色土>Ⅳ] 径1～3mmMa20% 均質

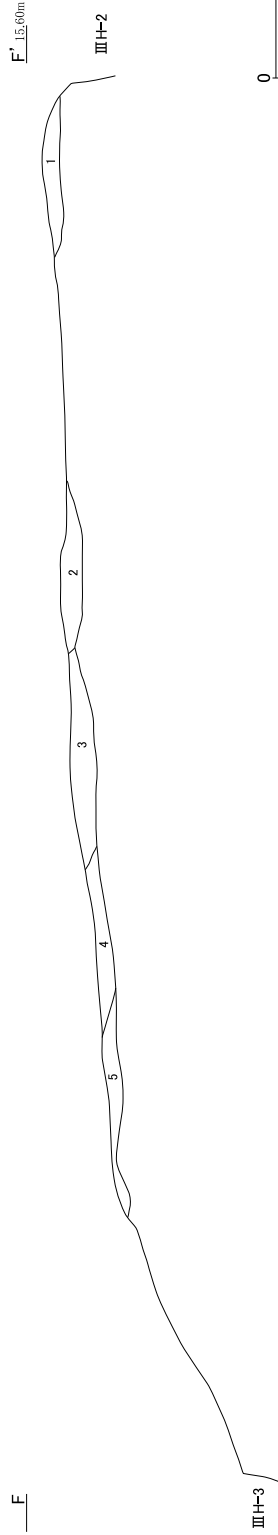
E



E' 15.60m

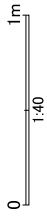
ⅢH-2・3間掘り上げ土断面

E



E' 15.60m

ⅢH-3



図Ⅳ-151 ⅢH-2、2・3間掘り上げ土断面

3種類に分かれる。主柱穴は径が14~20cm程度で、深さは8~22cmである。壁際の柱穴は径が約10cmとやや小型である。深さは12~27cmで、断面形は下端が細くなり、尖るものもみられる。

遺物出土状況 全体的に少量で、その中では礫が多い。床面西側で集石を1か所(HS-1)確認した。砂岩製の礫10点(1980g 1点平均198g)からなる。分布は北西側の大きな集中1か所と、東、西側の小さな集中2か所に分かれ、礫は長軸4~10cmのものが主体である。南側の床面直上から擦文土器(VII群)が出土しており、集石と共にこの遺構に伴うものと考えられる。また、土器に近接して床面から骨片が少量出土し、その内4点について分析した結果、1点はイヌ科(*Canis lupus familiaris*)らしき焼けた基節骨と同定された。カマド1の焼土や炉跡焼土(HF-1)出土の微細骨片については、カマド1焼土はカレイ科腹椎1点、サケ科の歯1点、ニシン科腹椎6点等。炉跡焼土は哺乳綱2点と同定された(V章5節参照)。

時期 住居の平面形やカマド等の付属遺構や、床面直上出土の擦文土器から、擦文文化期後期である。床面直上出土の炭化材2点の放射性炭素年代測定を行い、¹⁴C年代は930±20と900±20yrBPで、暦年代範囲(2σ)では1035calAD-1160calADと1042calAD-1105calAD、1117calAD-1206calADという結果が出ており、おおむね11世紀中葉~12世紀の年代となる。(広田)

ⅢH-3 (図IV-152~156、表Ⅲ-11・IV-2、図版42、43-1~7)

位置 (竪穴) b22~24、c22~24区 (掘り上げ土) b24・25、c21~25、d22~24区

平面形態 (竪穴) 隅丸方形? (掘り上げ土) 不整形

規模 (竪穴) (7.44)×(4.29)／(6.74)×(3.40)／(1.01)m

(掘り上げ土) (14.52)×(10.36)／(0.24)m

確認・調査 調査開始前から方形の竪穴としてくぼみで確認できていた遺構である。くぼみの大部分が調査区外に広がり、調査範囲内には約4分の1程度が入っていた。くぼみ内は凹凸がみられ、近現代に一部掘削された可能性がある。

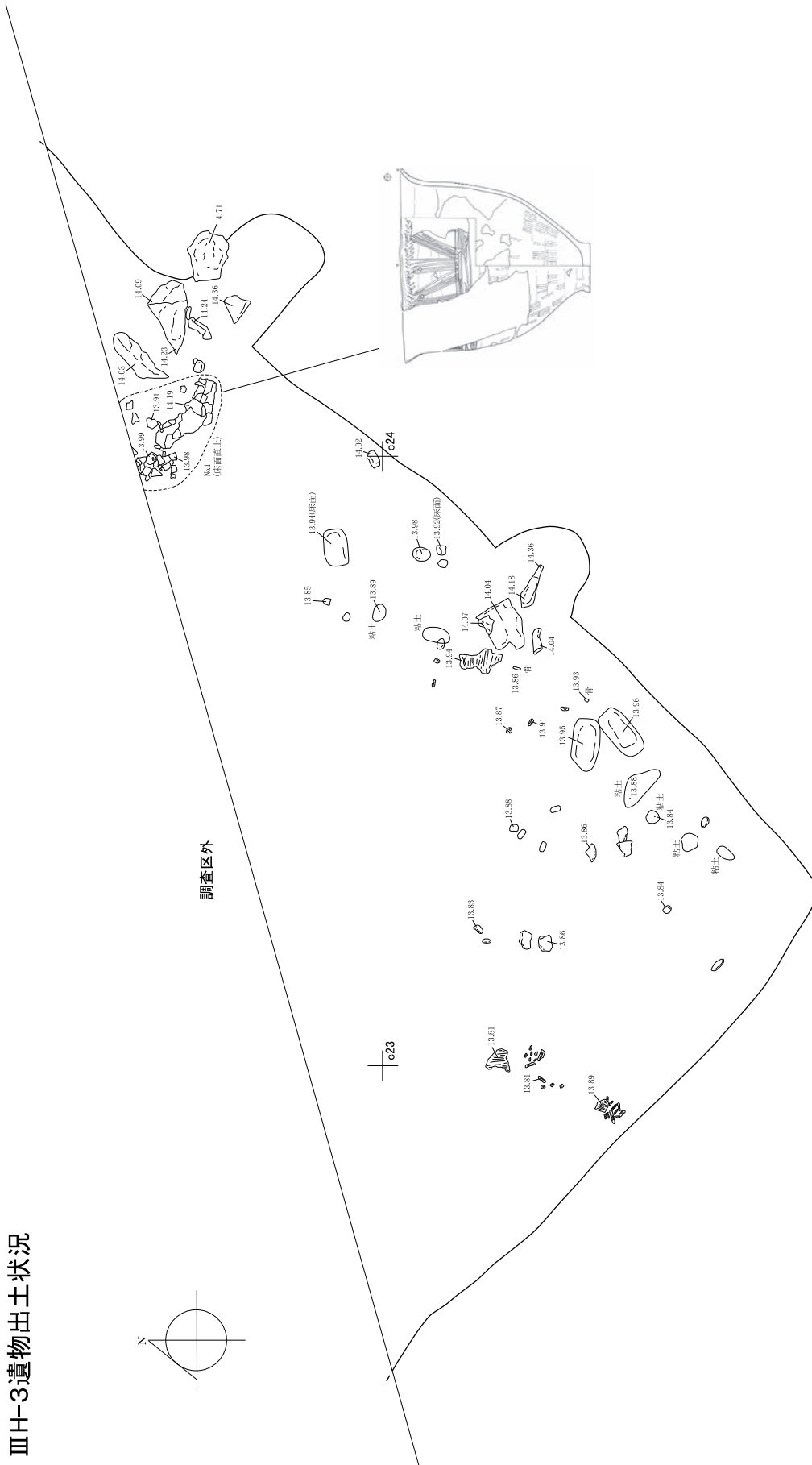
最初に人力で表土を除去し、次にトレンチを調査区壁沿いと中心付近を通る2か所に設定し、掘り下げた。その結果、床面と壁の立ち上がりを確認したため、竪穴住居跡と判断し調査した。土層観察用のベルトを設定した後に、覆土を掘り下げ、床面を検出した。覆土出土の遺物は適宜取り上げ、床面直上と床面から出土した遺物は出土状況の図化等を行った。また、覆土下位から床面にかけて炭化材が少量出土したが、樹種同定は行っていない。

床面まで掘り下げた結果、南東側の壁の大部分と南西側の壁の一部を確認した。南東側の壁には灰白色の粘土及び大型の礫のまとまりが2か所みられ、これらをカマドと判断し、個別に調査を行った。他に床面で焼土及び柱穴などのピットを確認したため、それらの調査も行った。

掘り上げ土 竪穴周辺の表土を除去した時、表土直下に黒褐色土の分布がみられたため、竪穴住居跡構築時の掘り上げ土と判断した。竪穴を取り巻くように分布しているが、南東側では不明瞭な部分がある。東側はⅢH-2、南西側はⅢH-4の掘り上げ土と重複している。各遺構との間にトレンチを設定し土層断面を観察した結果、ⅢH-2との新旧関係は不明で、ⅢH-3の掘り上げ土はⅢH-4の掘り上げ土の上位に堆積していたため、ⅢH-3はⅢH-4より新しいと判断した。土層は黒色~黒褐色の色調が多く、Ⅲ層ないしV層の黒色土とIV層、VII層が混ざっている。

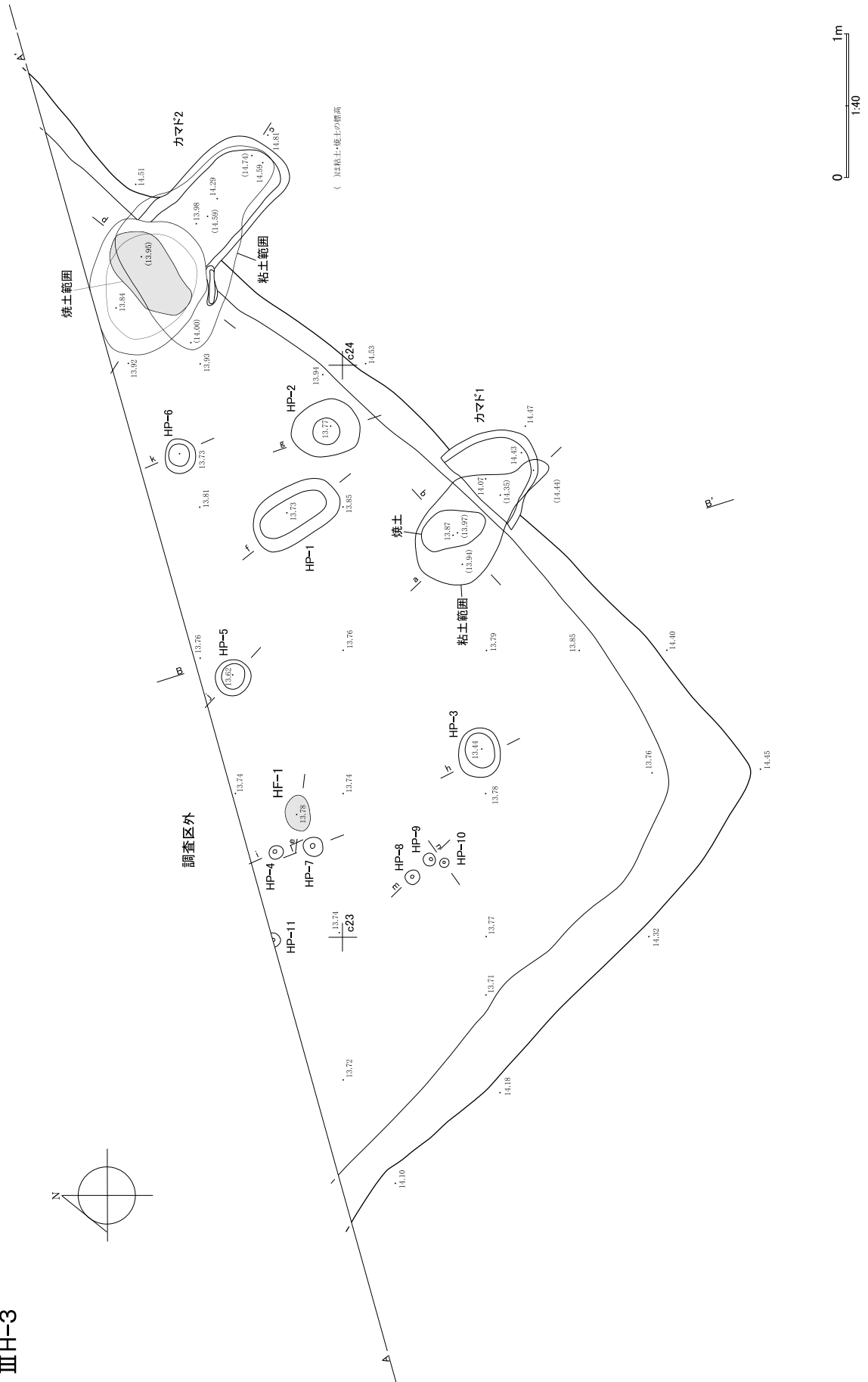
覆土 竪穴が埋まりきっていないため、中央付近は浅く、壁側は厚い堆積状況である。上位にはI・II層が堆積し、その下位を8層(1~8)に分けた。9は南西側の掘り上げ土、10はHP-11の覆土である。堆積順序はまず、壁際に黒色土、IV層、VII層が混ざった土層(3~7)が、中央付近では暗褐色土層(8)が堆積し、その後中央付近に広く暗褐~黒褐色の覆土が堆積する(1・2)。

ⅢH-3遺物出土状況



図Ⅳ-152 ⅢH-3遺物出土状況

ⅢH-3



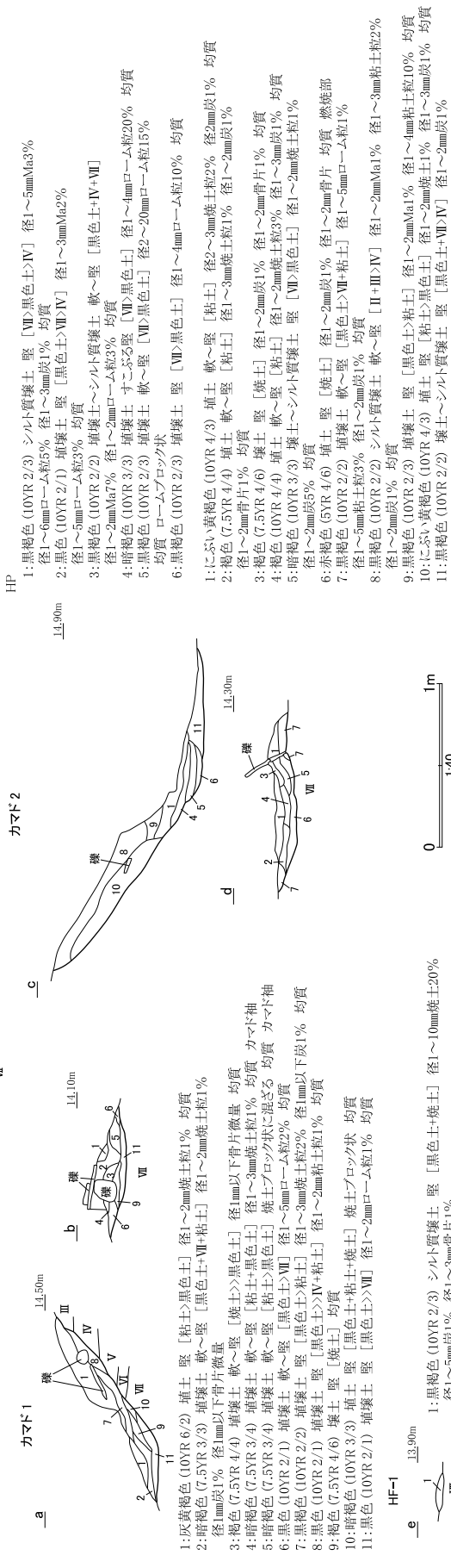
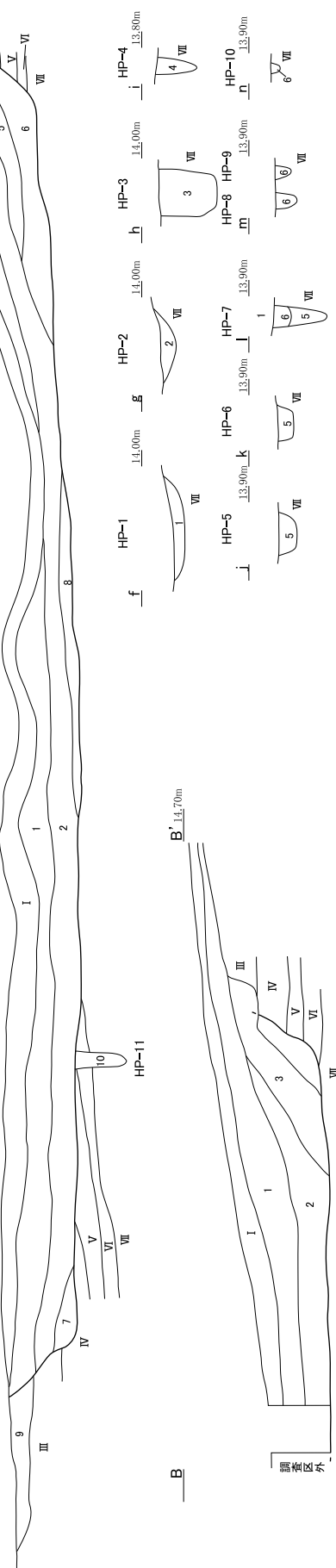
図IV-153 ⅢH-3平面

ⅢH-3断面

A' 15.70m

根室市 温根沼2遺跡

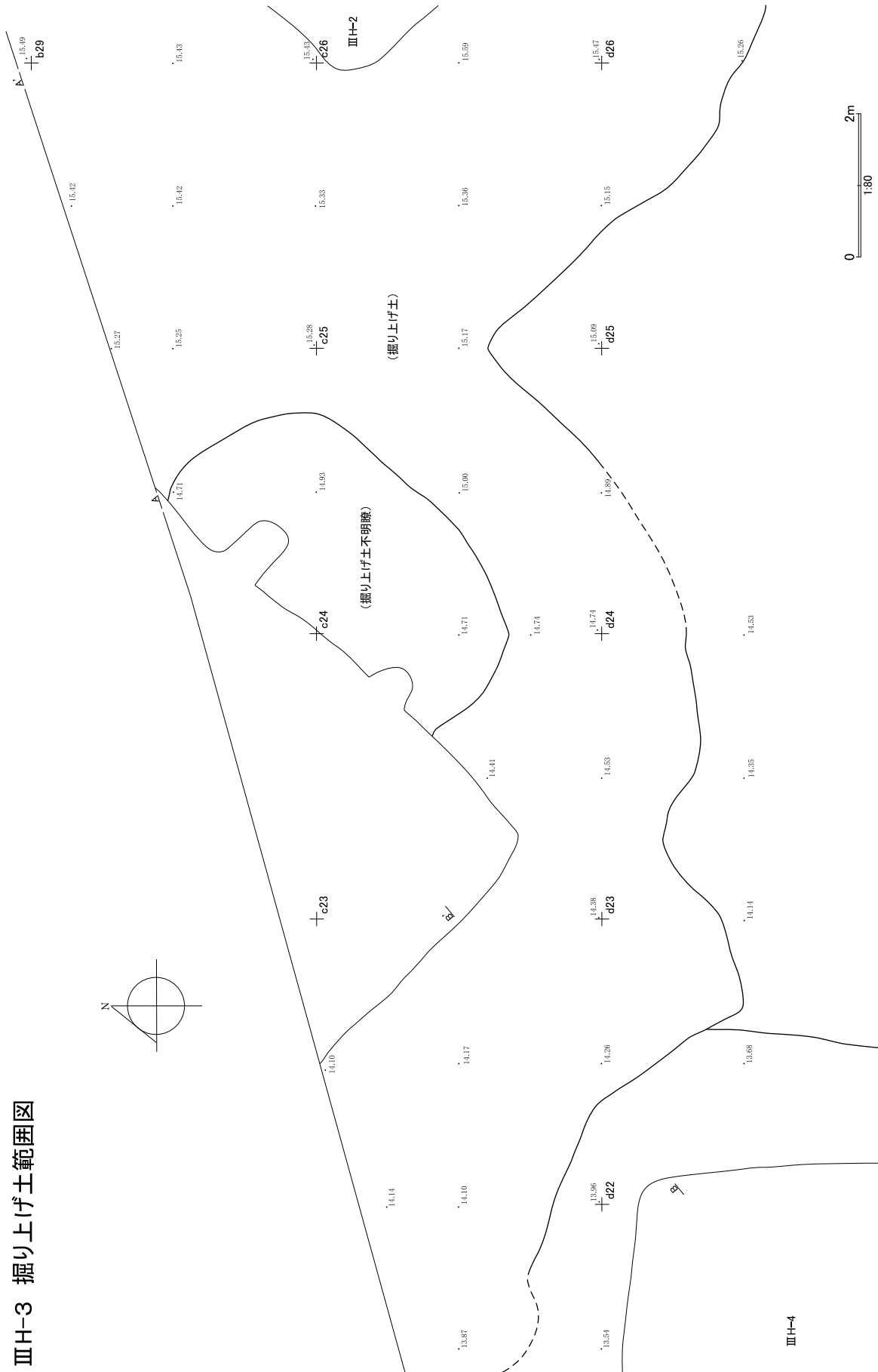
- 1: 黒褐色 (10YR 2/3) 埴土 軟～堅 [II>黒色土+IV] 径2～7mm炭3% 径3mm炭微量 径2～4mm白色火山灰1% 均質
- 2: 黒褐色 (10YR 2/3) 埴土 軟～堅 [II+黒色土>IV] 径2～7mm炭7% 径1～10mm炭微量 均質
- 3: 黒褐色 (10YR 2/3) 埴土 軟～堅 [VI>黒色土>IV] 径2～3mm炭5% 径1～3mm炭2% 均質
- 4: 黒色 (10YR 2/1) 埴土 軟～堅 [黒色土>IV] 径1～3mm炭2% 均質
- 5: 暗褐色 (10YR 4/6) 埴土 軟～堅 [VII>>黒色土] 径1～3mm炭2% 均質
- 6: 暗褐色 (10YR 3/3) 埴土 軟～堅 [VII>>黒色土] 径1～2mm炭2% 均質
- 7: 黒色 (10YR 2/1) 埴土 堅 [黒色土>>IV+VII] 径1～3mm炭2% 均質
- 8: 暗褐色 (10YR 3/4) 埴土 堅 [VII>黒色土] 径1～3mm炭2% 均質
- 9: 暗褐色 (10YR 2/3) シルト質埴土 堅 [黒色土+IV] 径1～4mm炭25% 均質
- 10: 暗褐色 (10YR 3/3) 埴土 軟～堅 [VII>黒色土] 径1～3mm炭15% 均質 HP-11



- HP-1: 黒褐色 (10YR 2/3) シルト質埴土 堅 [VII>黒色土>IV] 径1～5mm炭3% 径1～6mm炭5% 径1～3mm炭1% 均質
- HP-2: 黒色 (10YR 2/1) 埴土 軟～堅 [黒色土>VII>IV] 径1～3mm炭2% 均質
- HP-3: 黒褐色 (10YR 2/2) 埴土 軟～堅 [黒色土>VII>IV] 径1～3mm炭2% 均質
- HP-4: 黒褐色 (10YR 2/2) 埴土 軟～堅 [黒色土>VII>IV] 径1～3mm炭2% 均質
- HP-5: 黒褐色 (10YR 2/2) 埴土 軟～堅 [黒色土>VII>IV] 径1～3mm炭2% 均質
- HP-6: 黒褐色 (10YR 2/2) 埴土 軟～堅 [黒色土>VII>IV] 径1～3mm炭2% 均質
- HP-7: 黒褐色 (10YR 2/2) 埴土 軟～堅 [黒色土>VII>IV] 径1～3mm炭2% 均質
- HP-8: 黒褐色 (10YR 2/2) 埴土 軟～堅 [黒色土>VII>IV] 径1～3mm炭2% 均質
- HP-9: 黒褐色 (10YR 2/2) 埴土 軟～堅 [黒色土>VII>IV] 径1～3mm炭2% 均質
- HP-10: 黒褐色 (10YR 2/2) 埴土 軟～堅 [黒色土>VII>IV] 径1～3mm炭2% 均質
- HP-11: 黒褐色 (10YR 2/3) シルト質埴土 堅 [VII>黒色土>IV] 径1～4mm炭25% 均質

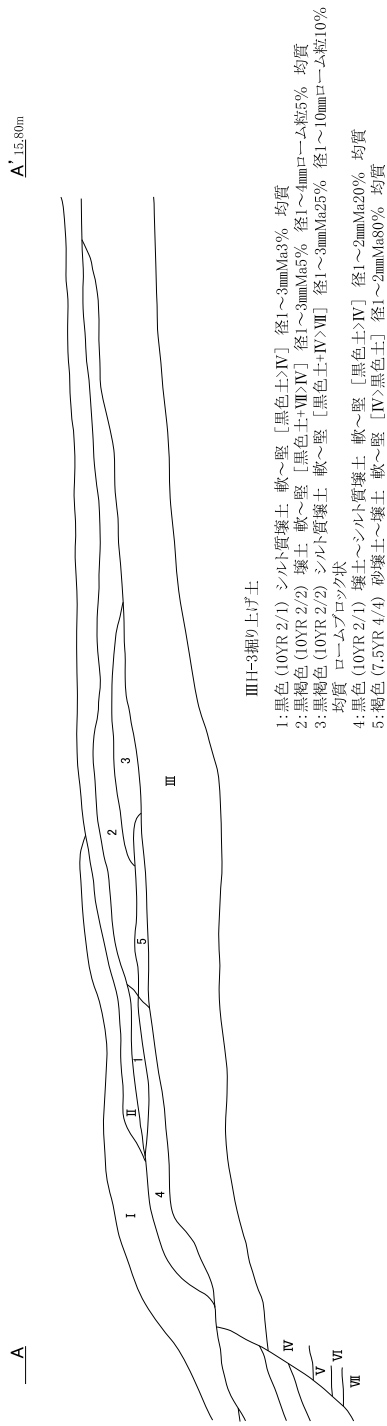
図Ⅳ-154 ⅢH-3断面

ⅢH-3 掘り上げ土範囲図

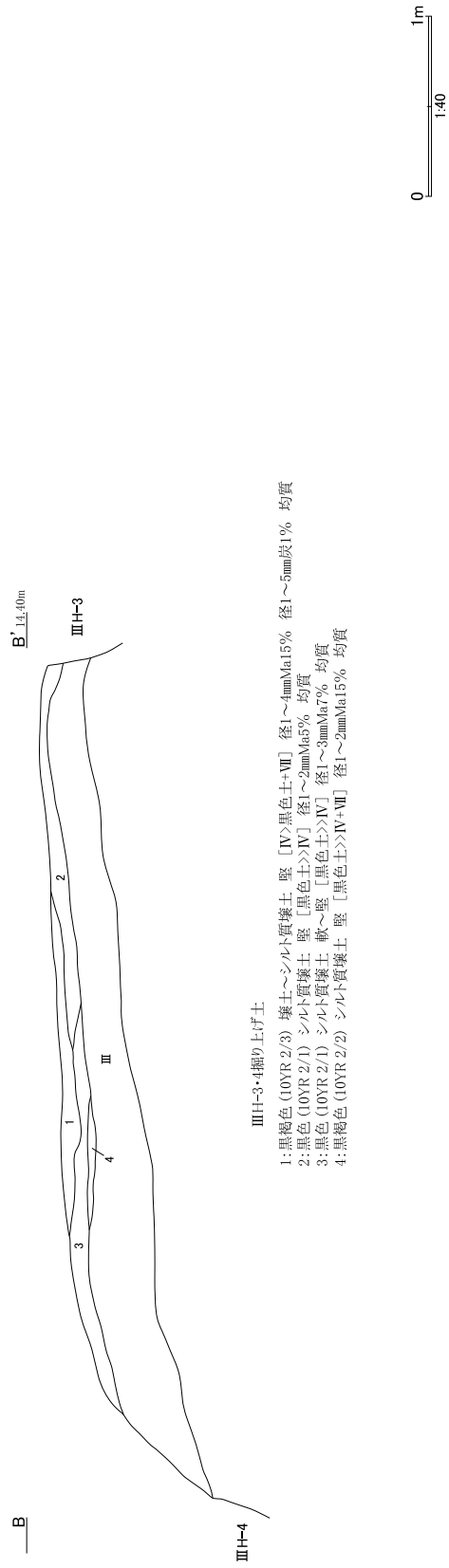


図IV-155 ⅢH-3 掘り上げ土範囲図

ⅢH-3 東側掘り上げ土断面

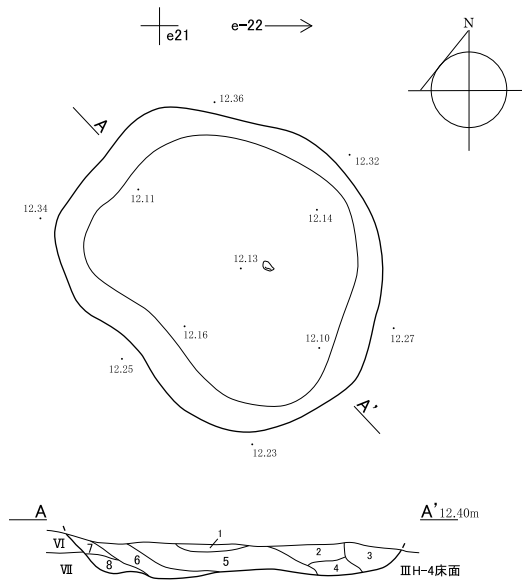


ⅢH-3・4間掘り上げ土断面

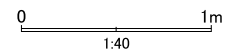


図IV-156 ⅢH-3、3・4間掘り上げ土断面

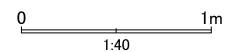
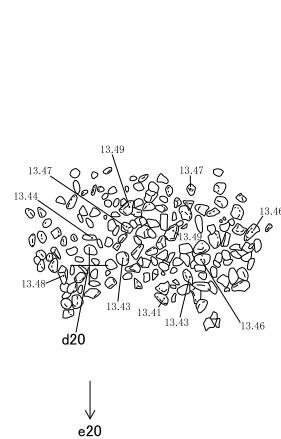
ⅢP-20



- 1:黒褐色 (10YR 2/2) シルト質壤土 堅 Ma7%含む 黒色土+Ⅶ>>Ⅳ 均質
- 2:黒褐色 (10YR 2/3) 壤土 堅 Ma15%含む 黒色土+Ⅳ 均質
- 3:黒褐色 (10YR 2/3) シルト質壤土 堅 Ma5%含む 黒色土+Ⅳ>Ⅶ 均質
- 4:暗褐色 (10YR 3/3) 砂壤土～壤土 堅 Ma20%含む Ⅳ>黒色土>Ⅶ 均質
- 5:黒色 (10YR 2/1) 埴壤土 堅 Ma1%含む 黒色土>>Ⅳ 均質
- 6:黒褐色 (10YR 2/3) シルト質壤土 堅 Ma7%含む 黒色土+Ⅳ>Ⅶ 均質
- 7:黒褐色 (10YR 2/3) 壤土 堅 Ma15%含む Ⅳ>黒色土 均質
- 8:黒褐色 (10YR 2/3) シルト質壤土 堅 Ma1%含む Ⅶ>黒色土>Ⅳ 均質



ⅢS-7



図Ⅳ-157 ⅢP-20・ⅢS-7

床面・壁 床面は概ね平坦だが、東側がやや高くなっている。また、緩やかな斜面に立地しているため、床面は東側がⅦ層中に、西側がⅣ～Ⅶ層にかけて構築されている。壁は全体的に急角度だが、南～南西にかけてはやや緩やかである。

付属遺構 カマド2か所（カマド1・2）、焼土1か所（HF-1）、ピット11基（HP-1～11）を確認した。カマド1・2は南東側壁に位置し、どちらも粘土、板状の礫で構築され、焼土もみられる。南東側のカマド1の周辺からは骨片が少量出土している。また、カマド2では燃焼部の下に浅いピット状の掘り込みがみられる。煙道は共に傾斜し、壁から竪穴外側にかけて上からの掘り込みにより作られるが、煙道の長さはカマド1が約50cm、カマド2が約100cmと長さが異なる。焼土（HF-1）は床面西側で確認し、柱穴と考えられるピット（HP-4・7）が近接している。ピットは形状と配置から、比較的大型の2基（HP-1・2）、支柱穴と推測される3基（HP-3・5・6）、補助的な柱穴等と推測される小型6基（HP-4・7～11）に分けられる。大型のHP-1・2は平面が楕円形で浅い形状である。用途不明だが、2か所のカマドの間に位置するため、カマドに関連する可能性がある。HP-3・5・6は径が30cm前後で深さは11～36cmと幅がある。HP-4・7～11は径が10cm前後で、深さは5～26cmと幅があり、断面形は下端が細くなるものが多い。

遺物出土状況 全体的に少量で、その中ではカマドやその周辺から出土した礫が多い。また、カマド2の北西側の床面直上から擦文土器（Ⅶ群）1個体がややまとまって出土しており、この遺構に伴うものと考えられる。カマドから出土した骨片について同定を行った結果、カマド1焼土からシカ？の中手骨あるいは中足骨？（試料番号38a）、カマド2からヒグマ？の中手骨あるいは中足骨（試料番号54）が出土した。ほかカマド1・2ともニシン科とカレイ科の椎骨等が出土している（Ⅴ章5節参照）。

時期 住居の平面形やカマド等の付属遺構、床面直上出土の擦文土器から、擦文文化期後期である。カマド上面と床面直上から出土した炭化材各1点の放射性炭素年代測定を行い、¹⁴C年代は930±20と960±20yrBPで、暦年代範囲（2σ）では1035calAD-1158calADと1020calAD-1056calAD、1076calAD-1154calADという結果が出ており、おおむね11世紀中葉～12世紀中葉の年代となる。（広田）

ⅢS-7（図Ⅳ-157、表Ⅲ-11・Ⅳ-5、図版43-8）

位置 c19・20、d19・20区 **平面形態** 不整楕円形

規模 1.23×0.90m

確認・調査 Ⅲ層上位を掘り下げ中に検出した。南西側にⅢH-4が位置する。

遺物出土状況 被熱礫37点（7,850g 1点平均212.1g）、礫203点（31,494g 1点平均155.1g）、たたき石3点、フレイク1点、縄文時代北筒Ⅲ式土器が2点である。

時期 検出層位から擦文文化期後期の可能性がある。（広田）

（3）遺構出土の遺物

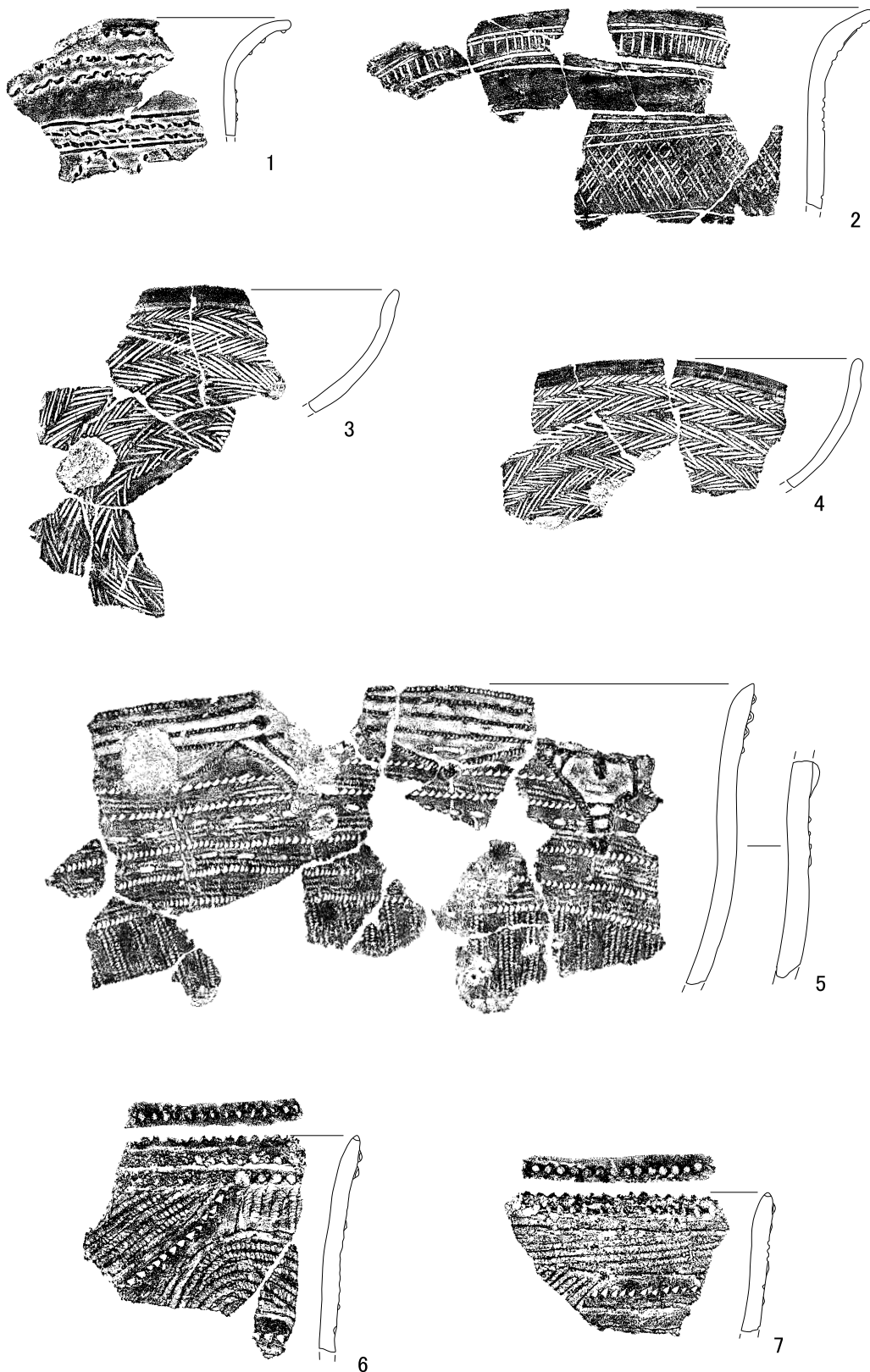
・土器

ⅢH-4（図Ⅳ-158・159、表Ⅳ-12・14・15、図版68・69）

土器は272点出土したが、149点が縄文時代の下田ノ沢式期、23点が後北A式、44点が後北C₂-D式、その他56点。各時期の土器片が混在しており、明らかにこの住居にともなうと判断できるものはない。埋め戻し等により混入したものであろう。

1はトビニタイ中間型（Ⅱ型式）の大きく開いた口縁部片。口縁部を巡る細い擬縄貼付文の単位文様数は3列。その下部に平行する貼付文に2本の波状の貼付文が挟まれた文様が横環、さらにその下部に大ぶりの波状の貼付が巡っている。2も口縁部が大きく開く器形。無文地に沈線で文様を描いて

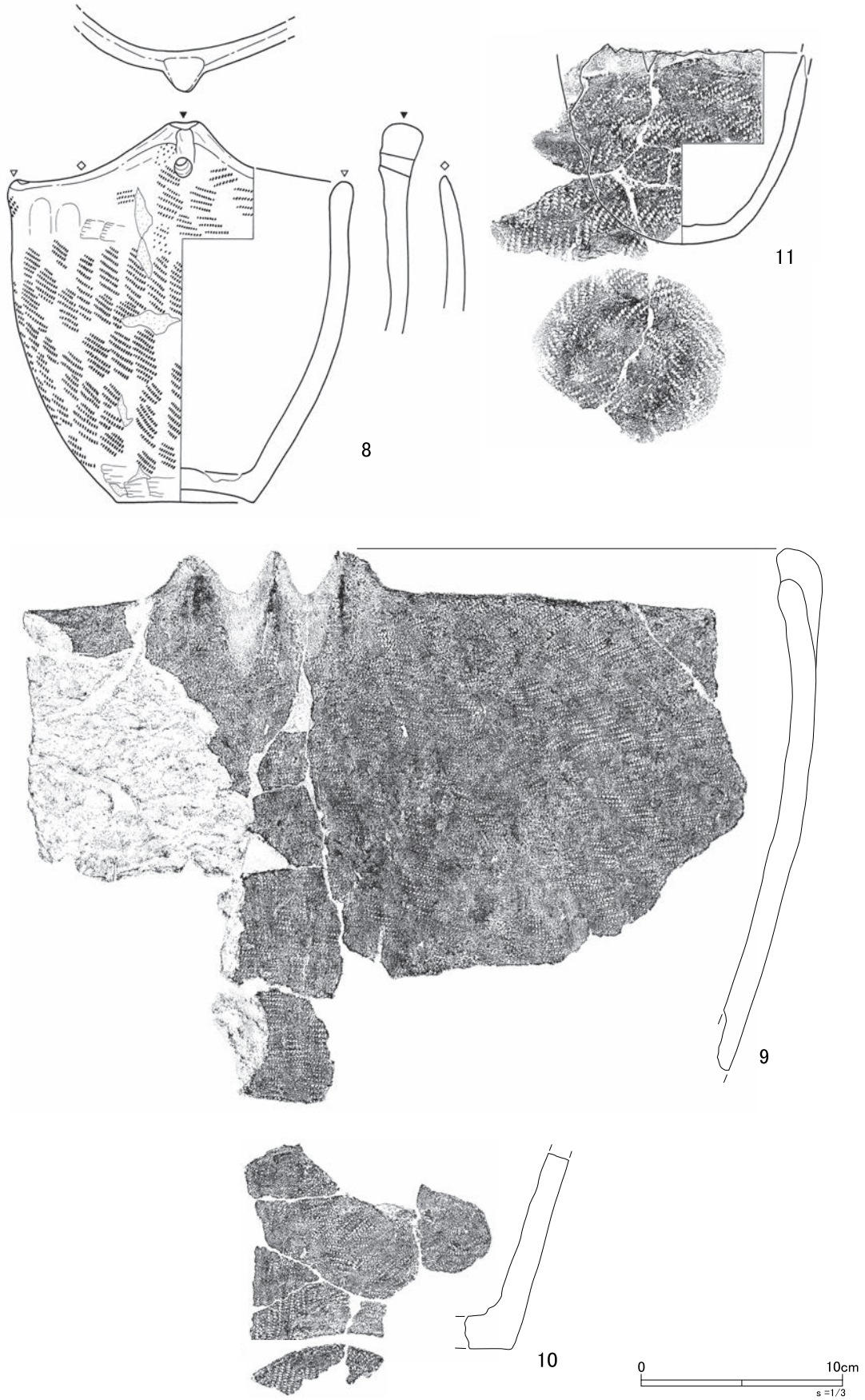
ⅢH-4



0 10cm
s=1/3

図IV-158 Ⅲ層遺構出土の土器 (22)

ⅢH-4



図Ⅳ-159 Ⅲ層遺構出土の土器 (23)

いる。口縁は2本単位で横環する沈線間に縦位の沈線が施文され、胴部は4本単位の沈線が横環し、その間を斜位の沈線が交差する。擦文土器とした。3・4は同一個体とみられる小型の鉢。鋸歯状の連続沈線が横位に巡る。4はⅢH-3の覆土上から出土した。口縁部無文地と内面はミガキ調整が施されている。

5は後北A式。口縁部を隆起線が4条横環し、ところどころで斜位の隆起線による小区画が垂下する。頸部は半円状の刺突列を横位に5条巡らせその間を3本単位の帯縄文が巡る。胴部は縦位の帯縄文。胎土中にチャート質の透明な砂粒を多く含む。6・7は後北C₂-D式の同一個体口縁部片。口縁部を平行隆起線が2条横環、胴部は微隆起線、帯縄文、先端が三角形の工具による連続刺突文で円形文や弧線文を構成している。口唇上、隆起線上には刻みが施されている。

8は下田ノ沢Ⅱ式。容量は1.8L。大小2種2対の突起を有する。大きい方の突起は台形状に突き出て肥厚し、穿孔されている。肥厚した突起の上面観は丸みを帯びた三角形。突起部以外の口唇断面は切り出し状である。9・10は同一個体とみられる。胴部上半が膨らみ、口縁部が内傾する器形。器壁は肉厚。肥厚して指状に突き出した3本の突起を有する。口唇断面は丸みを帯びた内削ぎの切り出し状。内面はヘラ状工具により横方向に粗く削られている。砂をやや多めに含んだ胎土で、全体ザラザラする。撚りの細かい原体を斜位回転施文しており、地文は全体横走するが、底部(10)付近は縦走している。また、底面にも施文されている。『興津遺跡Ⅲ』(釧路市埋蔵文化財調査センター 1979)の突瘤が施された資料に同様の突起がみられる。地文や肉厚な器壁は下田ノ沢Ⅱ式の特徴を示すが、下田ノ沢Ⅰ式の可能性も排除できない。

11は丸底の土器。上半部を欠くが、割れ口の直下に細い縄線がわずかに観察される。縄文時代晩期(V群)、幣舞式に近い資料かと思われる。

ⅢH-5 (図Ⅳ-160~162、表Ⅳ-12・15、図版70~72)

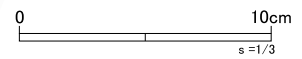
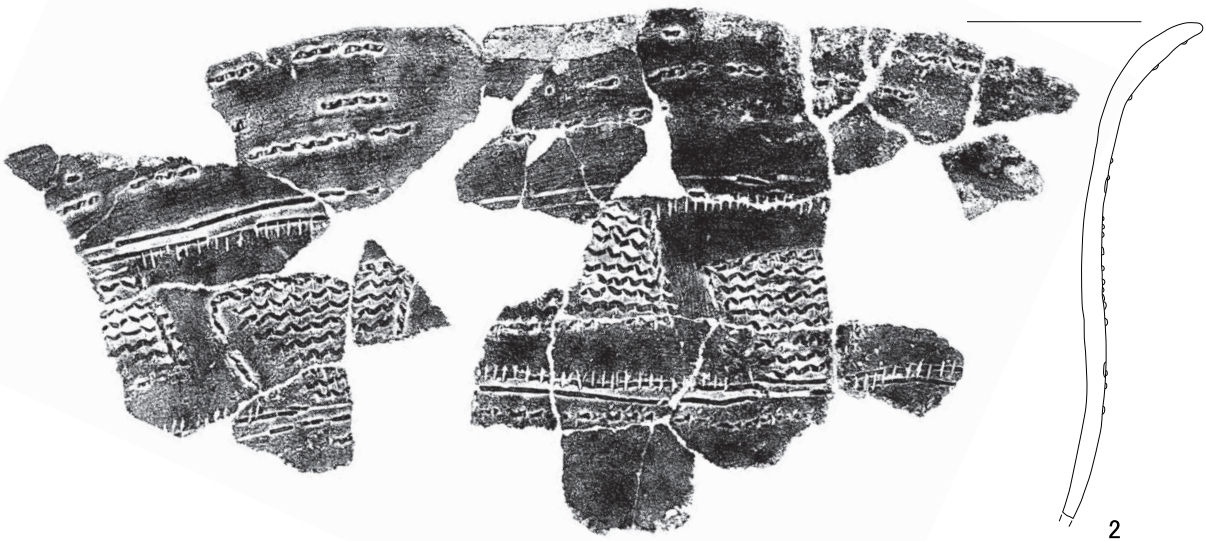
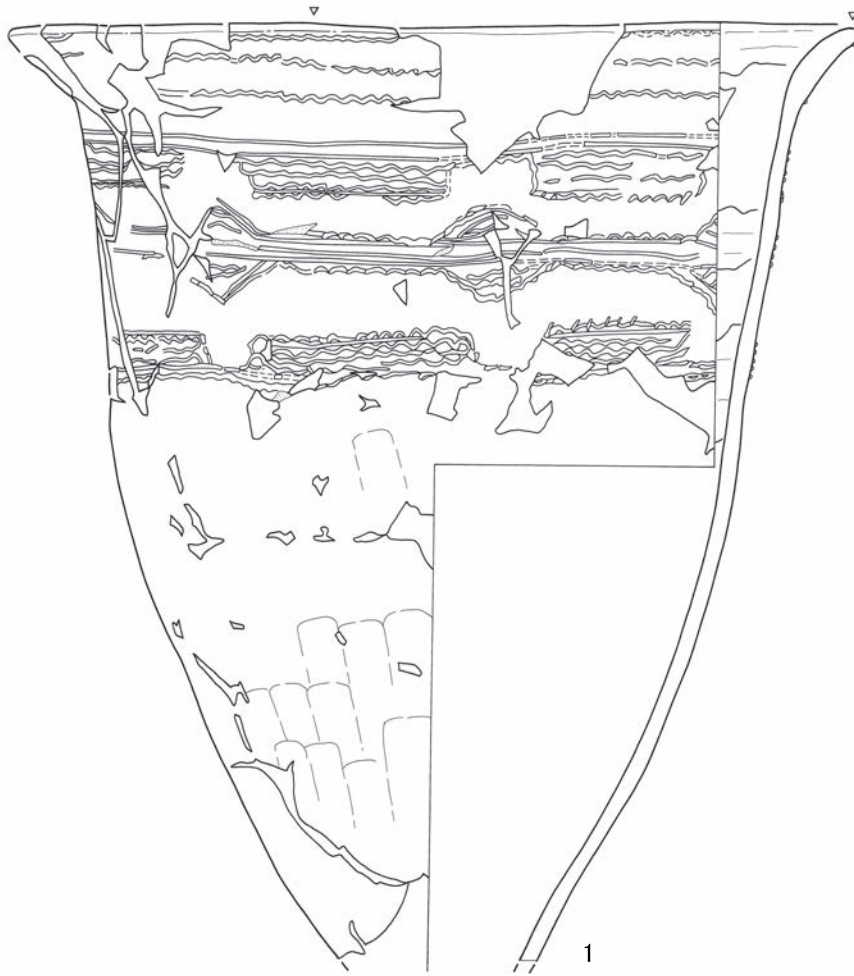
土器は647点出土したが、うち474点がⅧ群としたトビニタイ式中間型(Ⅱ型式)。474点中364点が床面から出土した。

1はトビニタイ式中間型(Ⅱ型式)の深鉢。底部から直線的に開き、胴部は垂直、口縁で屈曲して大きく開く器形。底部を欠くが、底面部に蓋をして計量した最大容量は13.4Lである。口縁部を巡る細い擬縄貼付文の単位文様数は3列。胴部上半を複数の平行する貼付文と波状の貼付文からなる文様が3段帯状に横環する。文様帯は上下の方形区画文と中央の菱文が連続して巡る。2は2本組の平行隆起線文の間に波状文で充填した方形区画文が上下で交互に連続する。2本の平行する貼付文の上には細い刻線が連続的に直交して施文されている。3・4も同様のモチーフのものと思われる。2本単位の平行貼付文が横環し、その上に連続的な刻みが加えられている。いずれともトビニタイ中間型(Ⅱ型式)。

5は擦文土器の高坏の高台部の破片。

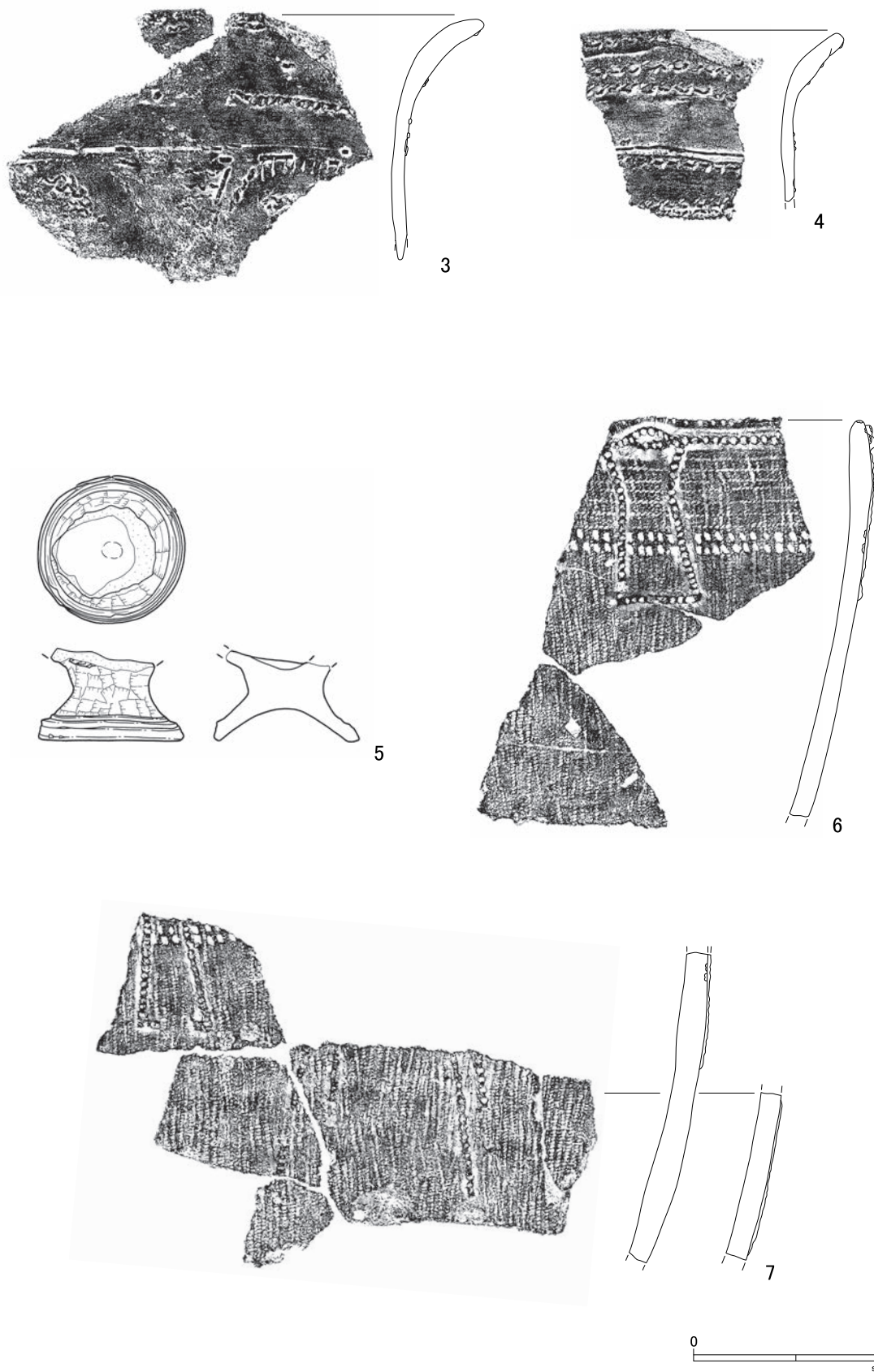
6~11は下田ノ沢式。6・7と8・9は同一個体。6・7は宇津内Ⅱa式の影響が窺われる資料。口縁直下を縄線文が1条横環し、平行して細い隆起線も横環する。隆起線が縦の四角い区画を呈する部位がある。隆起線上には縄が刻み状に押捺されている。口縁には細い縄線が7条横環し、その下には縄の押捺が2段巡る。地文は撚糸文。施文の順番は、まず縄線を横環させ、その下に2段の縄圧痕、それらの上に撚糸文を縦方向に施文、隆起線を施して、その上に縄の押捺を加えている。7では隆起線が2本斜位に付された部位もある。胴が膨らみ口縁に向け内傾する器形。口唇断面は丸みを帯びる。胎土中に多量の雲母を混和しており、光にかざすとこまかく反射する。8・9は縦につまみ出したような突起がある。突起は横方向に穿孔されている。口縁部の無文地に刺突列と縄線が横環し、その下

ⅢH-5



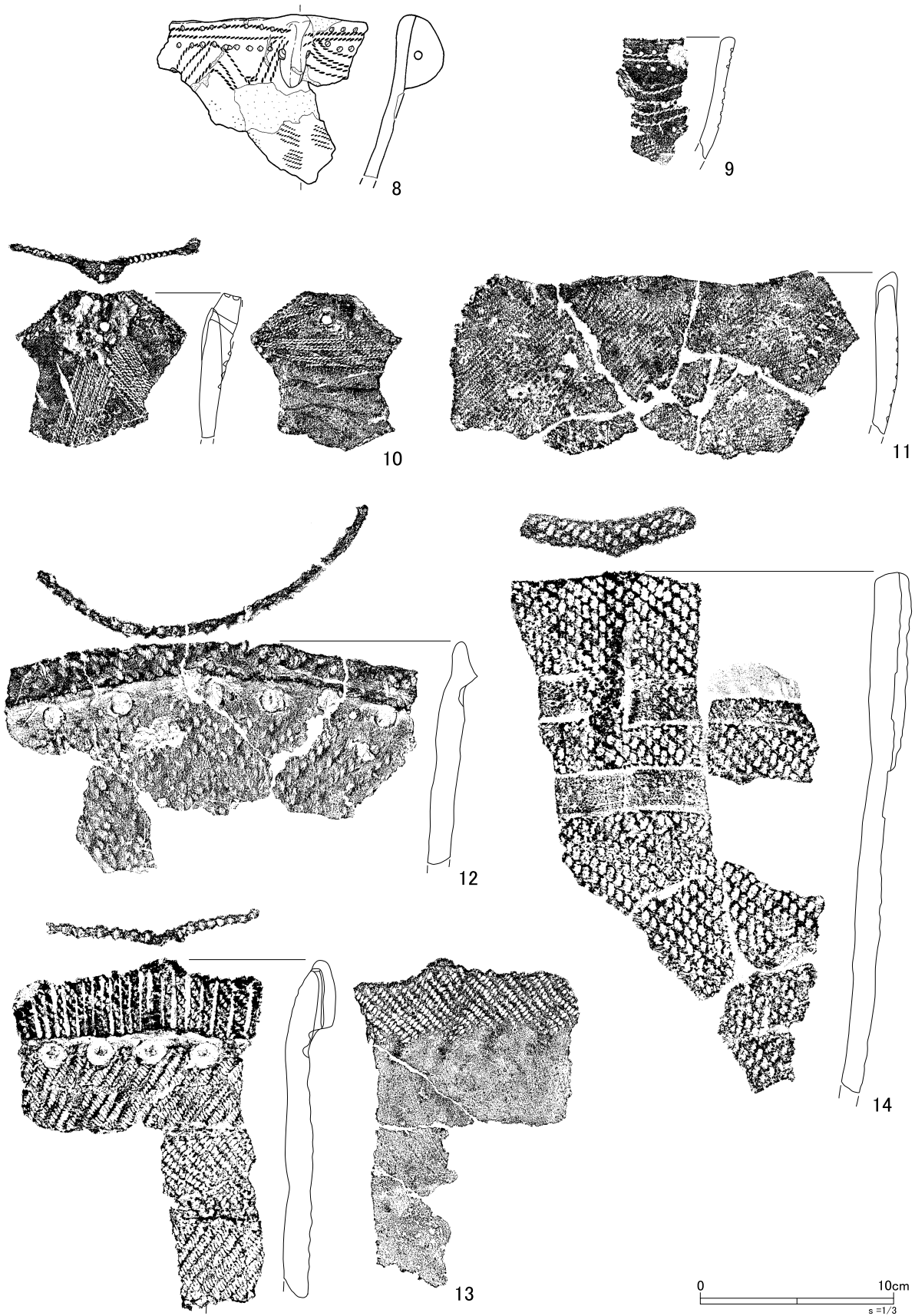
図Ⅳ-160 Ⅲ層遺構出土の土器 (24)

ⅢH-5



図Ⅳ-161 Ⅲ層遺構出土の土器 (25)

ⅢH-5



図Ⅳ-162 Ⅲ層遺構出土の土器 (26)

を3～4本の縄線が波状に巡る。10は突起片。肥厚した突起上部は三角形を呈し、縦位に刺突が2つ加えられている。突起中央に貫通孔が穿たれ、そこを中心に縦横に刺突列、2本単位で矢羽状をなす撚糸文が左右と斜めに施文されている。この撚糸文は内面では横方向に施文されている。11はゆるやかに波状をなす口縁。斜位に爪形状の刺突列が加えられている部位がある。口唇断面は先端が丸みを帯びる切り出し状。

12は北筒Ⅱ式（トコロ6類）。口縁部肥厚帯は断面三角形を呈する。円形刺突文はごく浅く^{すりばち}搦鉢状を呈する。やややわらかい植物の茎を工具として、押し当てつつ旋回させて施文したとみられる。内外面とも指頭圧痕の凹凸が顕著。13は北筒Ⅱ式（トコロ5類）。円形刺突文は壁の厚い中空の工具。壁部分の繊維痕が粗い。2種の原体による羽状縄文を地文とする。14は北筒Ⅲ式の新段階（羅臼式）。地文はR L R原体による斜行縄文。ヘラ状の施文具による無文部が横環する。口縁部内面は無文。（影浦）

・石器等

ⅢH-4（図IV-163～166、表IV-18・19、図版82～84）

礫類（562点）を除き、石器等は140点が出土した。フレイク・チップが66点。石器は74点である。たたき石33点、砥石14点、台石・石皿9点（いずれも破片含む）など礫石器が大半を占めている。床面直上としてたたき石5点、台石・石皿2点が出土しているが、床面出土のものはない。

1～7はたたき石。1・2・4は素材の長軸の下端を使用しているもの。7も下端に微弱な敲打痕がある。3～5・7はすり石の用途も兼ねている。1・3は粗粒玄武岩製、2・7は泥岩製、4・6は砂岩製、5は珪化岩？製。8・9は垂鉛礫を素材としたすり石。9は上下の両端に平らにすりへった使用面がある。8は泥岩製。9は砂岩製。10～13は台石。10は角柱状の礫を素材としたたたき石の可能性もあるが、持ちづらい。据え置き足ではさんで固定しての使用を想定し台石とした。11・12は床面直上で出土。14は砥石の可能性も否定できないが、砂岩製ながら目が細かく硬い質感であり台石・石皿とした。（影浦）

15は覆土出土の棒状鉄製品である。2点が接合したもので、長さ5.4cm、幅0.5cm、厚さ0.5cmで、重さは5.6gである。上部を欠失し、断面形は角形である。（広田）

16は付属土坑HP-1から出土した台石。17～25は付属の集石HS-1のたたき石（17～24）とすり石（25）。いずれも掌に収まるサイズの礫を素材とする。たたき石は全体的に使用されているが、長軸の端部を集中的に使用したもの（17～22・24）が多い。素材の大きさや使用痕のあり方などHS-1のたたき石の特徴は、後述のⅢH-5 HS-2で検出したたたき石（図IV-170-19～21）とほぼ同内容である。

25はすり石。17・21・24は粗粒玄武岩製、ほかは砂岩製。（影浦）

ⅢH-5（図IV-166～170、表IV-19、図版84・85）

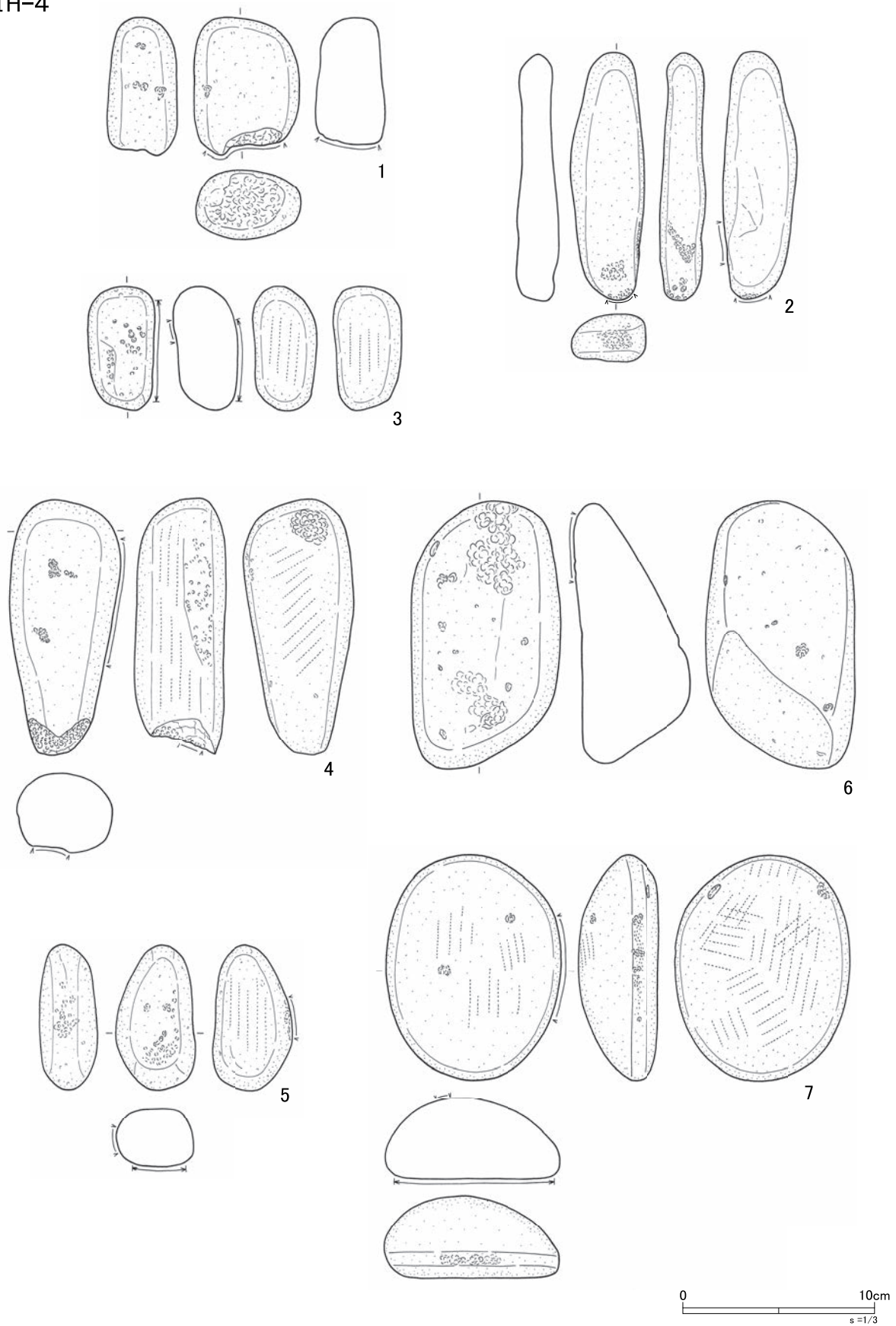
礫類（1,096点）を除き、石器等は276点が出土した。フレイク・チップが198点、石器78点。

たたき石34点、台石・石皿26点（いずれも破片含む）など礫石器が大半を占めている。

1は三角形弱凹基の石鏃。2は菱形あるいは木葉形の石槍またはナイフ。3は両面全面加工の棒状石錐。4は片面全面加工の石錐で被熱している。強度を増すために意図的に被熱した可能性がある（向井 2003）。5はスクレイパー。側辺の剥離が縦ではなく斜めに入ったものでスクレイパーとしたが、彫器の可能性もある。掲載の剥片石器はすべて黒曜石製。いずれもⅢH-5の時期に帰属するものではない。1は下田ノ沢式、2は北筒式、5は縄文時代早期の可能性が考えられる。

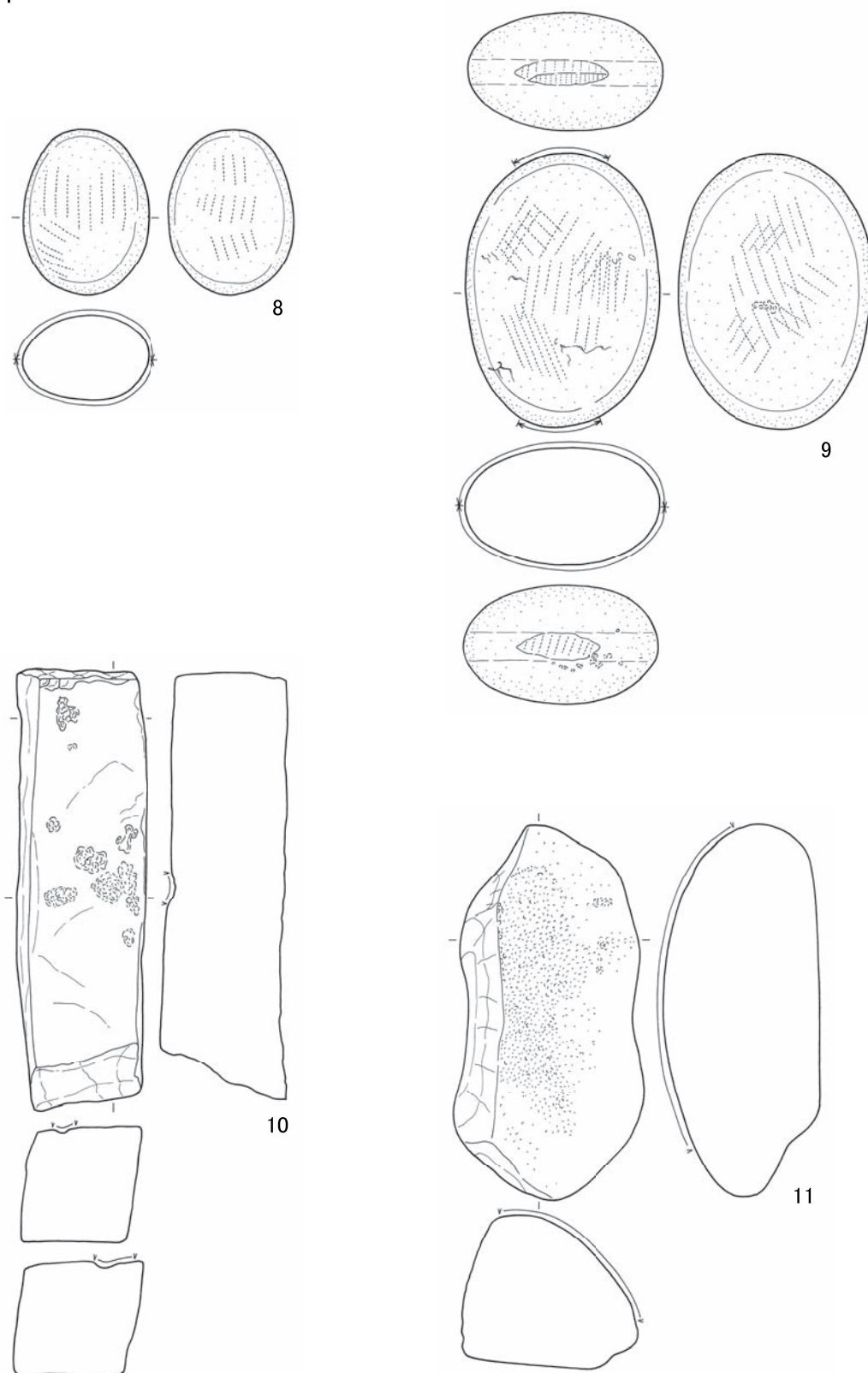
6～11はたたき石。6・7は長軸の両端を主に使用している。9は下端に両面から打ち欠きを加え

ⅢH-4



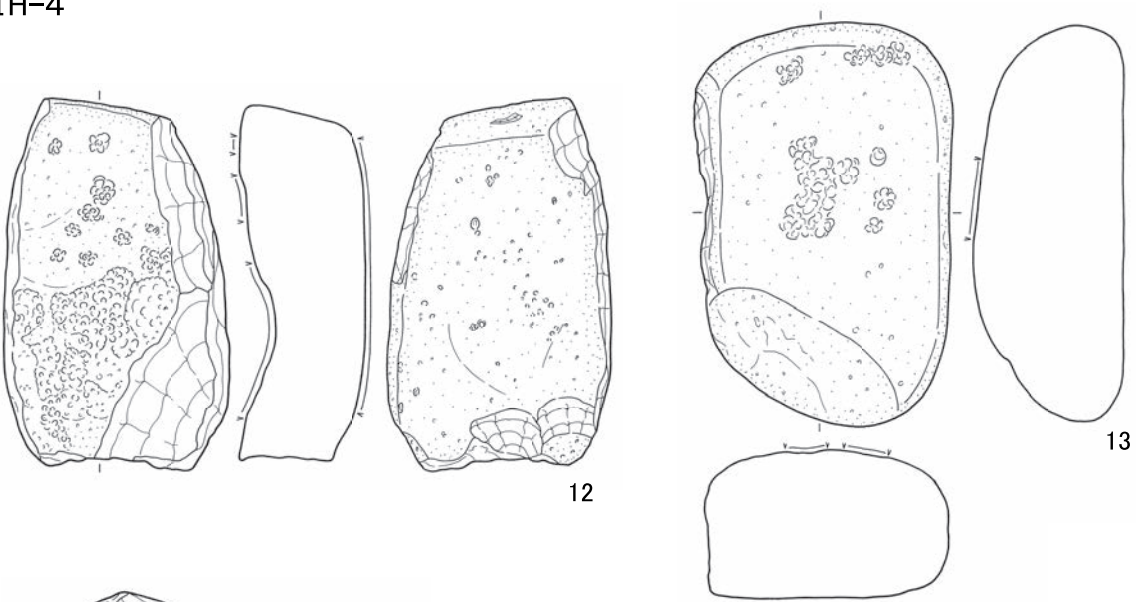
図Ⅳ-163 Ⅲ層遺構出土の石器 (17)

ⅢH-4

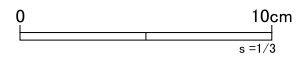
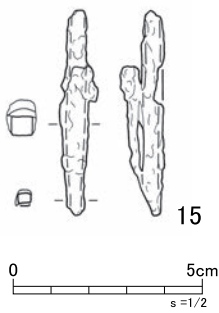
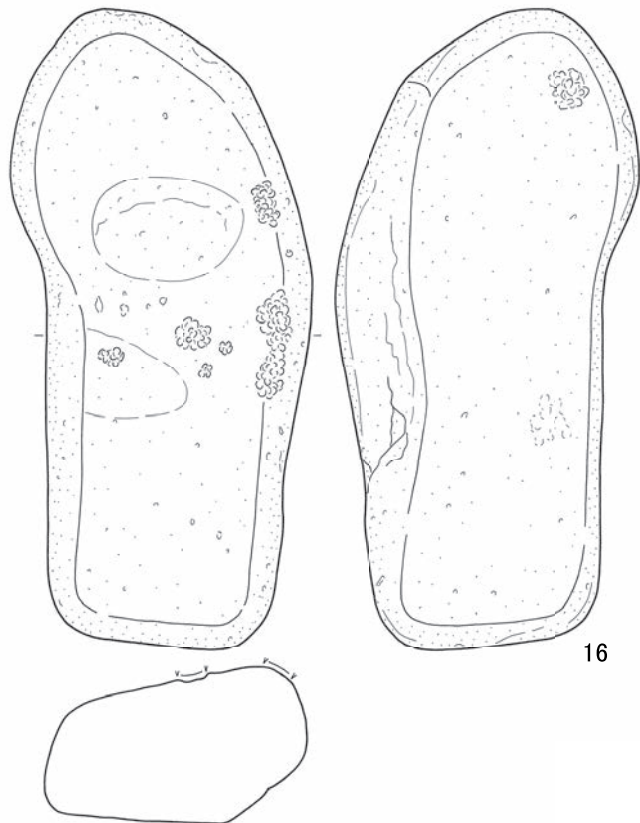


図Ⅳ-164 Ⅲ層遺構出土の石器 (18)

ⅢH-4



ⅢH-4 HP-1

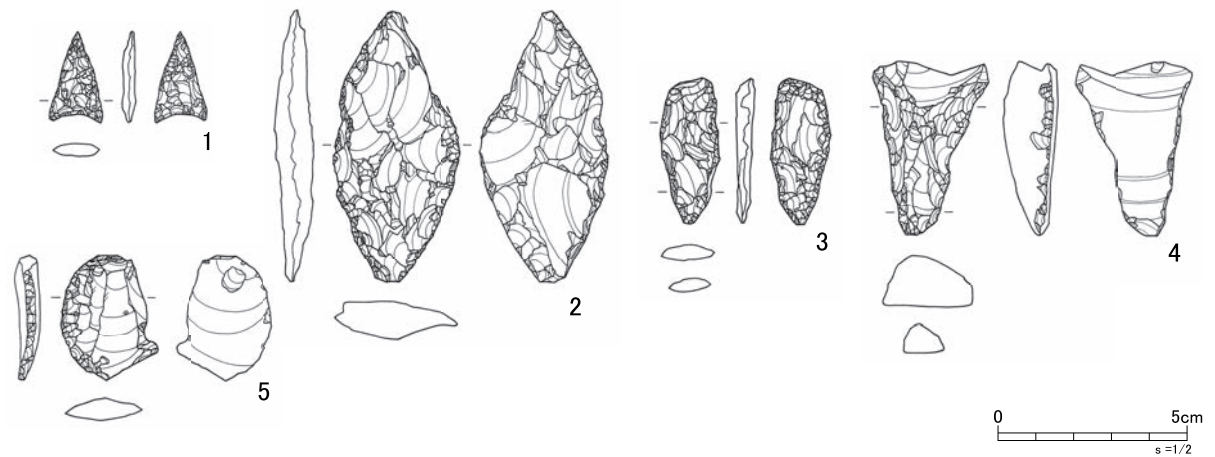


図Ⅳ-165 Ⅲ層遺構出土の石器 (19)・鉄製品

ⅢH-4 HS-1



ⅢH-5



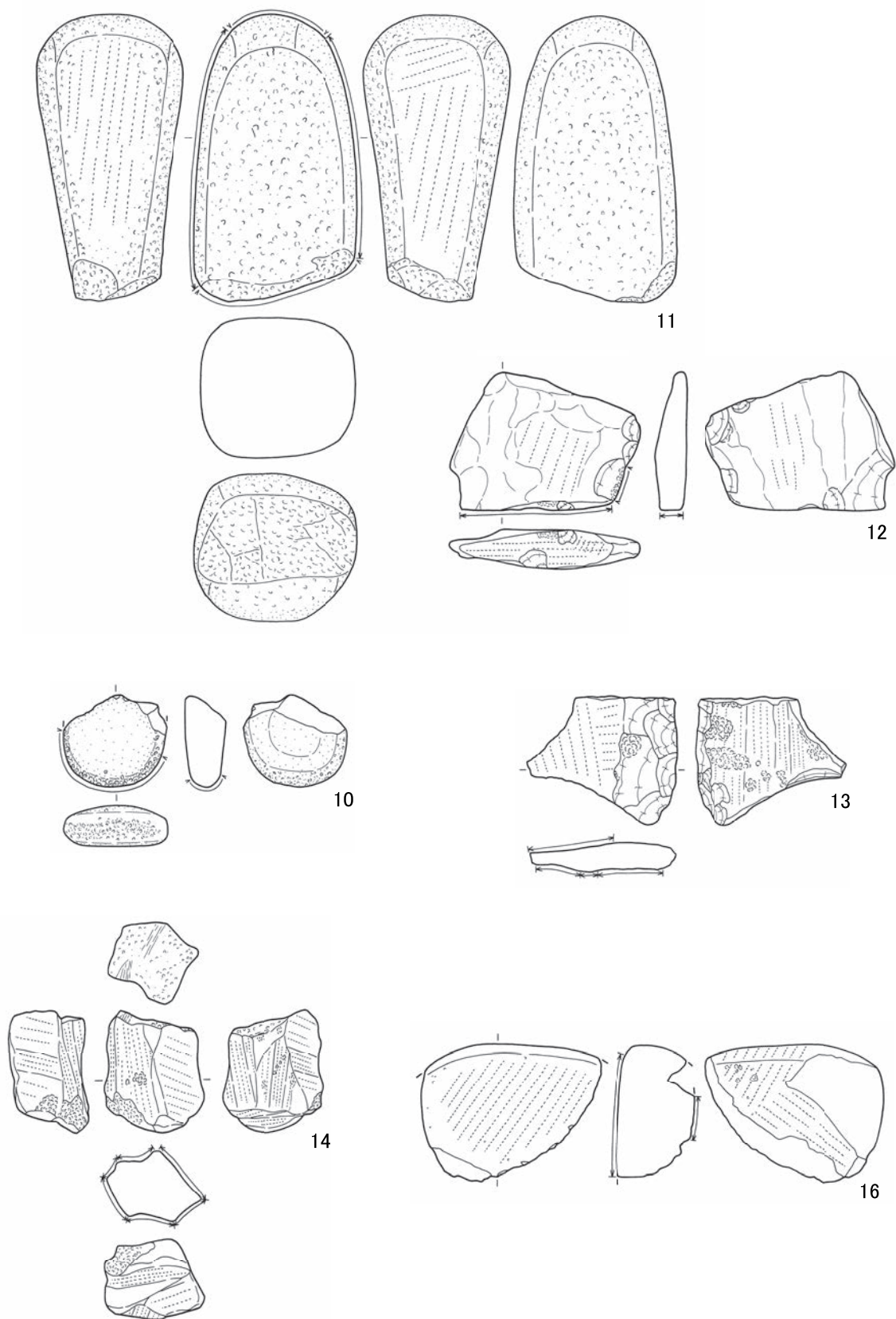
図Ⅳ-166 Ⅲ層遺構出土の石器 (20)

ⅢH-5



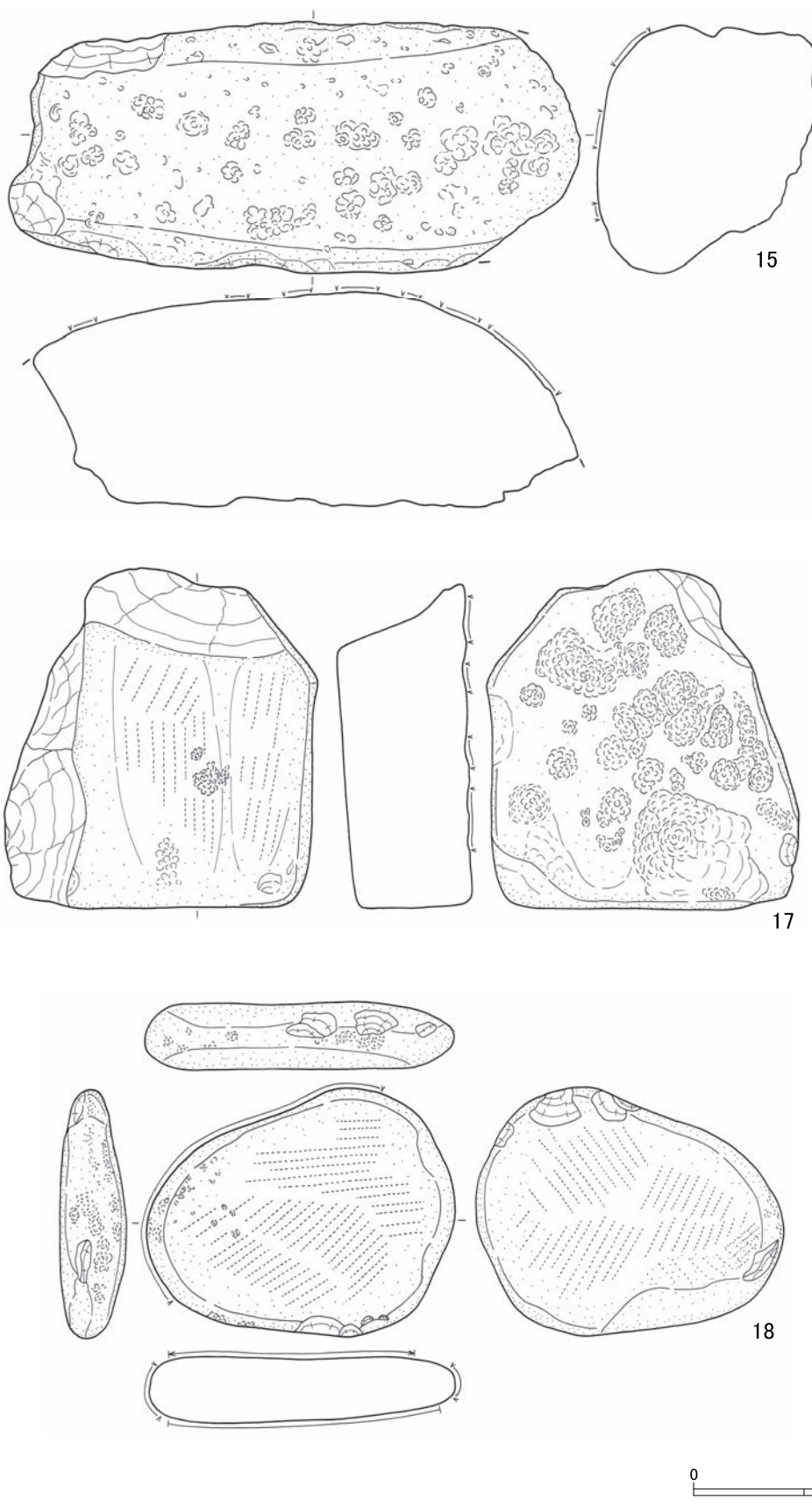
図Ⅳ-167 Ⅲ層遺構出土の石器 (21)

ⅢH-5



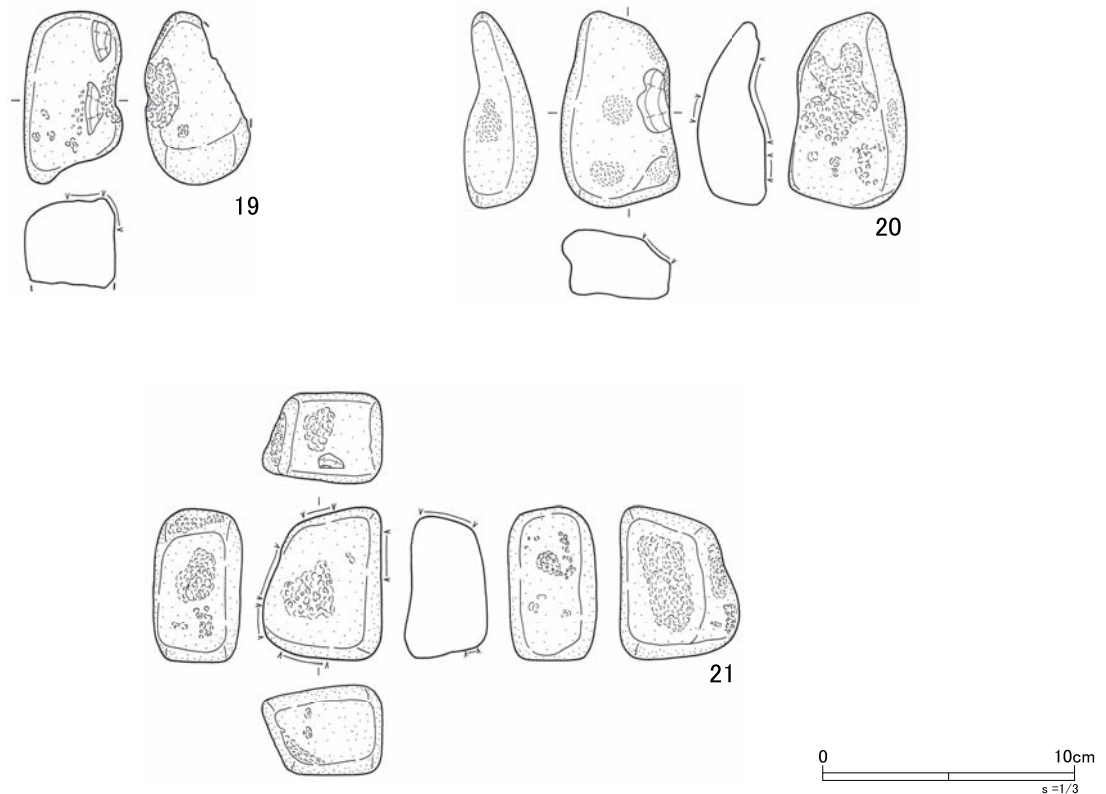
図IV-168 Ⅲ層遺構出土の石器 (22)

ⅢH-5



図Ⅳ-169 Ⅲ層遺構出土の石器 (23)

ⅢH-5 HS-2



図Ⅳ-170 Ⅲ層遺構出土の石器 (24)

て鋭い縁辺を作出し、使用している。上端の割れ口も敲打で潰れているが、整形時のものか使用によるものかは判別できない。**10**は小型の円礫を素材とし、周縁をたたいている。**11**は両面と下面にたたき痕、両側縁にすり面があるもの。たたき石としたが、たたきは整形上のもので、すり石としての用途が主である可能性も考えられる。**12**はすり石。下面をすり面とし、すり痕が周囲に及ばないことから、石鋸ではないと判断した。砥石片を転用している。**6**は粗粒玄武岩製、**7**は花崗岩製、ほかは砂岩製。**13・14**は砥石。**13**は板状。砂岩製。**14**は角柱状で、溝状の使用痕も複数ある。ノッカマップ層で産するアルコース砂岩製。**15**は床面直上で出土した台石片。砂岩製。**16**は床面で出土した石皿片。被熱している。凝灰岩製。**17・18**は台石・石皿。**17**はすり使用による浅いへこみが正面に2か所ある。裏面は敲打によるくぼみが全体にみられる。いずれとも砂岩製。

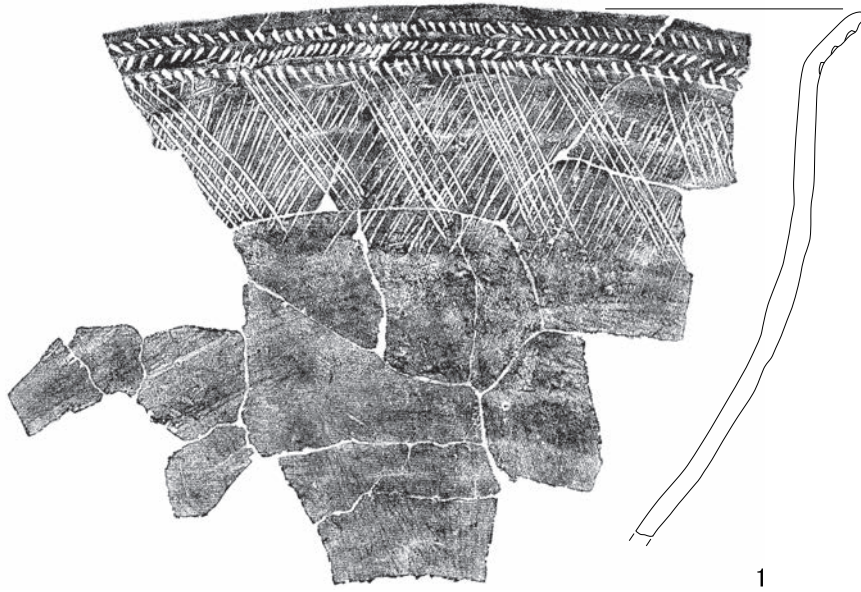
19~21は付属の集石遺構HS-2に含まれていたたたき石。いずれとも掌に収まるサイズの砂岩を素材として選択している。大きさ、使用痕等、特徴がⅢH-4の集石遺構HS-1に含まれていたたたき石(図Ⅳ-166-17~24)と共通している点が注目される。(影浦)

・土器

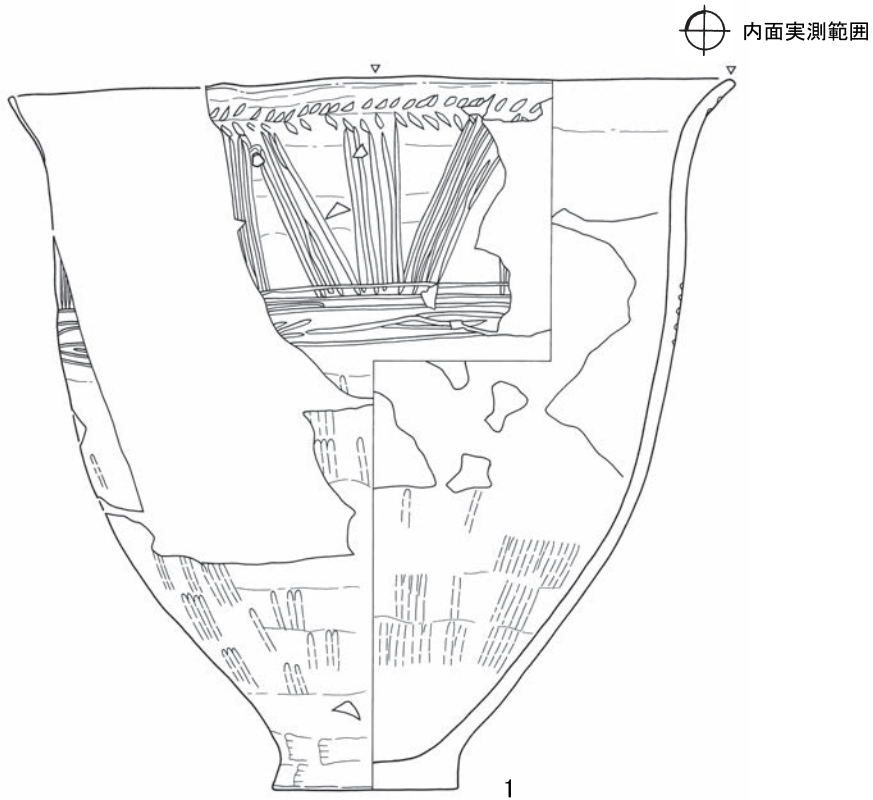
ⅢH-2 (図Ⅳ-171、表Ⅳ-19、図版73)

土器は33点出土した。うち18点が床面直上から出土したⅦ群、擦文土器(1)である。すべて接合したが、口縁部から胴部にとどまり、個体復元には至らなかった。**1**は口縁が外反し、胴部上半が垂直に下がったのち底部に向けてすぼまる器形。外反する口縁部はうすく肥厚し、斜位の刻み列が交互に向きを変えて3段横環する。胴部上半は多重沈線による鋸歯文。右上から左下への沈線を先に施し

ⅢH-2



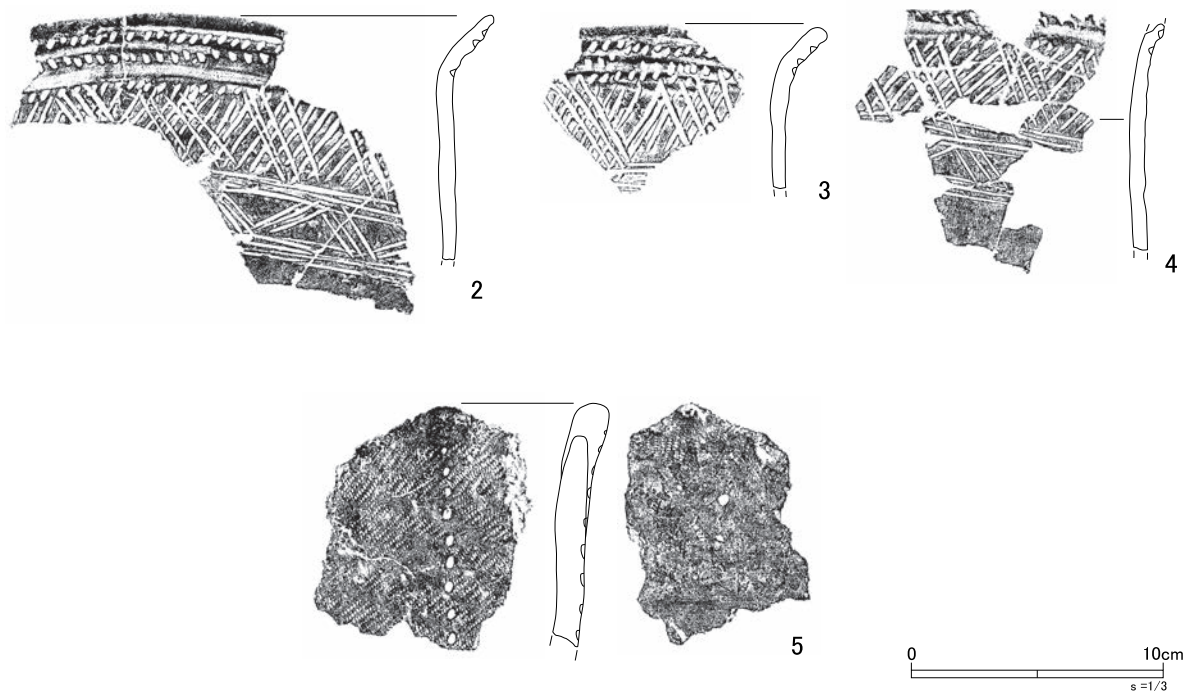
ⅢH-3



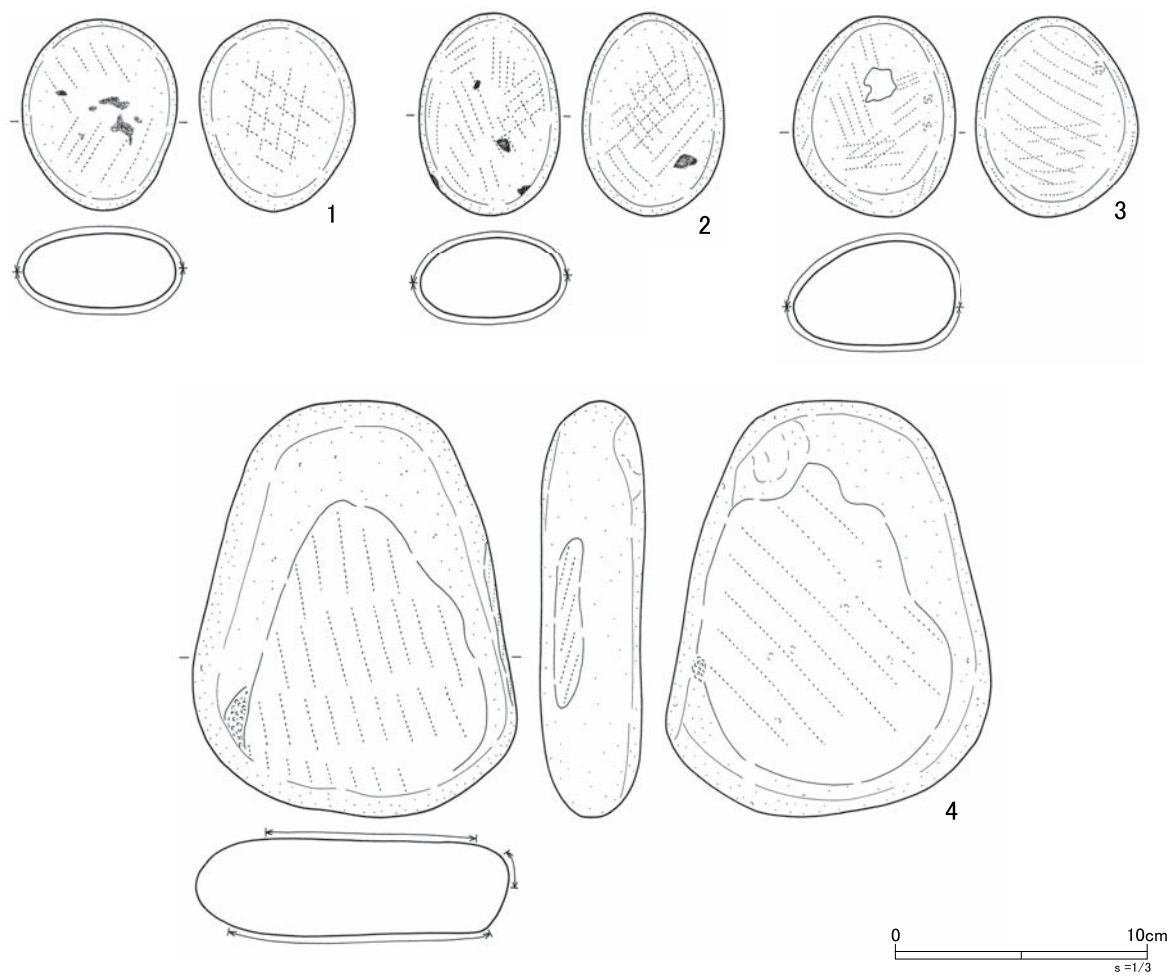
0 10cm
s=1/3

図Ⅳ-171 Ⅲ層遺構出土の土器 (27)

ⅢH-3

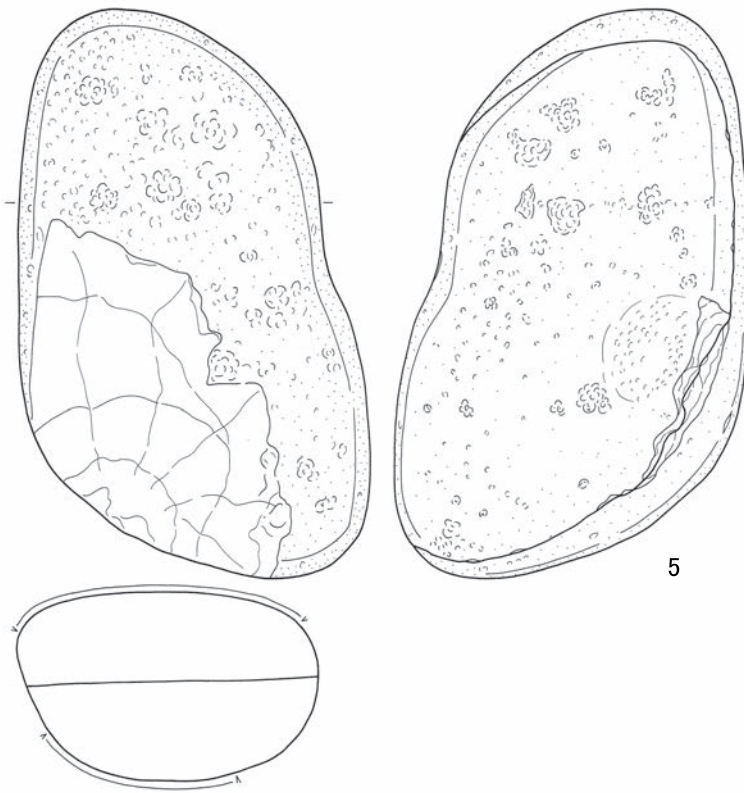


ⅢH-2



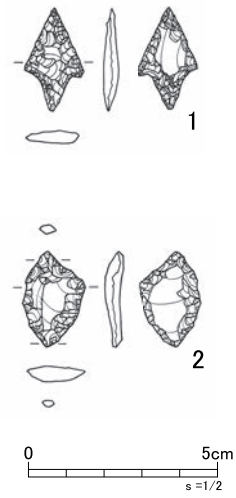
図Ⅳ-172 Ⅲ層遺構出土の土器 (28)・石器 (25)

ⅢH-2



5

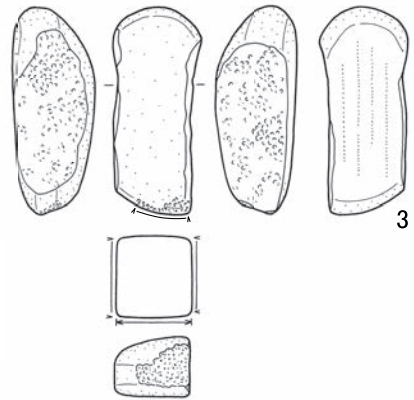
ⅢH-3



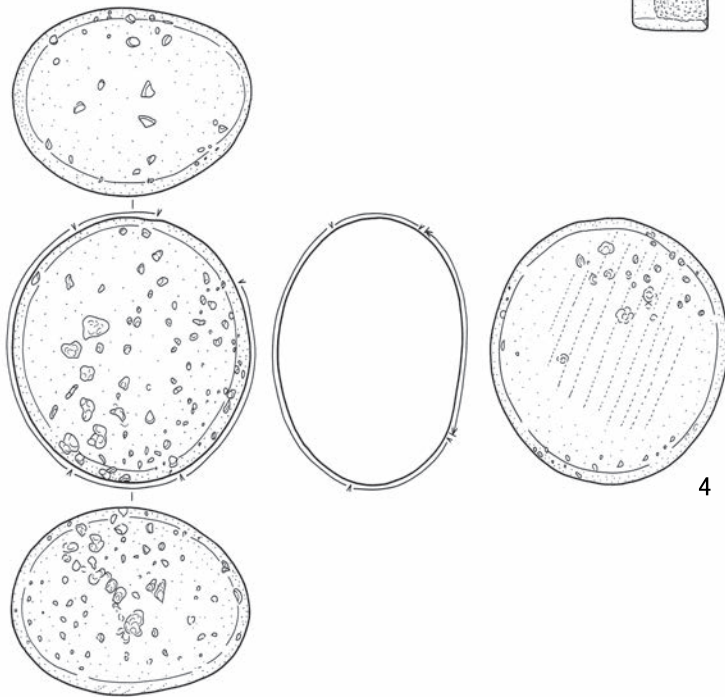
1

2

0 5cm
s=1/2



3

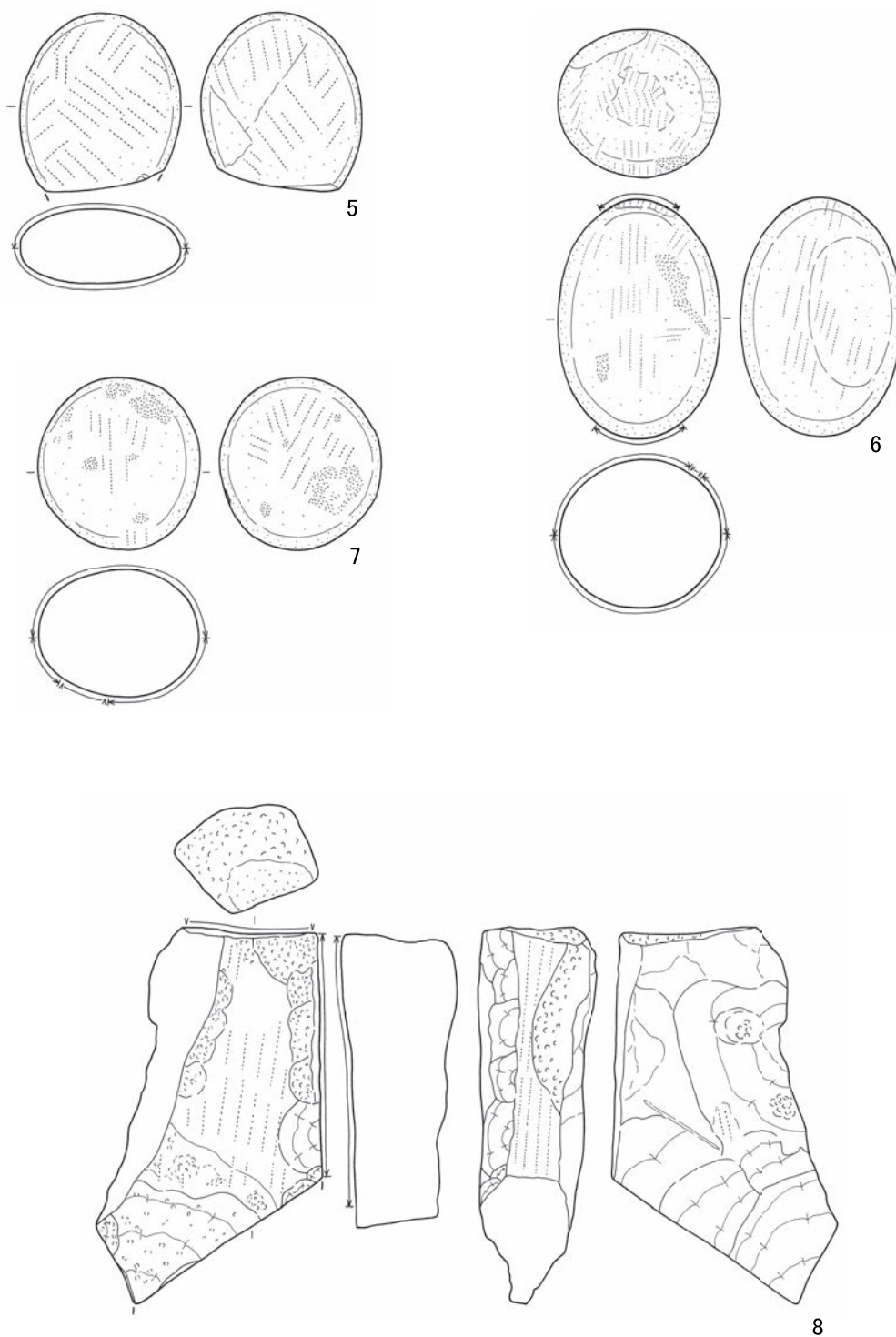


4

0 10cm
s=1/3

図Ⅳ-173 Ⅲ層遺構出土の石器 (26)

ⅢH-3



図IV-174 Ⅲ層遺構出土の石器 (27)

たのち、左上から右下への複数単位の沈線を、間隔をあげながら施文している。本数は4本から7本があり、一定しない。内面は黒色処理がなされて鈍い光沢がある。

ⅢH-3 (図Ⅳ-171・172、表Ⅳ-12・15、図版73・74)

土器は144点が出土した。うち128点が擦文土器で、128点中98点が床面直上から出土した。1～4はⅦ群、擦文土器。1は床面直上で出土した。うすく肥厚した口縁が外反し、垂直に下がった後、胴下半から底部にかけてすぼまる器形。口径は復元で28cmを測るが、底径は7cmほどで、4:1の比率である。容量は8.5L。矢羽状の2段の刻みが口縁部を横環し、胴部上半は集合沈線を縦と斜めを交互に施文させて、直角三角形を連続させたようなモチーフが巡る。2～4は同一個体片。口縁部の薄い肥厚帯を刺突列が3段巡り刺突列の間をごく浅い沈線が横環する。5は下田ノ沢式。ゆるやかな波状口縁で波頂部から刺突列が1条垂下する。

・石器

ⅢH-2 (図Ⅳ-172・173、表Ⅳ-19、図版86)

礫類(114点)を除き、石器等は19点出土。台石・石皿7点(破片含む)、たたき石6点、すり石3点、砥石1点と礫石器が大半を占める。1～3はすり石。3点ともほぼ同じ大きさの扁平な垂円礫を素材としている。1は泥岩、2は花崗岩、3は砂岩。4は砥石。使用面は平坦だが、よく使いこまれて非常に平滑である。砂岩製。5は台石。カマド1から割れた状態で出土した2点が接合した。砂岩製。

ⅢH-3 (図Ⅳ-173、表Ⅳ-19、図版86)

礫類(236点)を除き、石器等は40点出土。フレイク・チップ27点を除くと13点である。1は有柄の石鏃。2は石錐。周縁加工で紡錘形を呈し、上下両端を使用している。いずれも住居の時期に帰属するものではない。可能性として、石鏃は北筒式、石錐は下田ノ沢式期のものではないかと思われる。いずれも黒曜石製。3・4はたたき石。3は角柱状の礫を素材としたもので、特に下端を使用している。平滑な面を持ち、すり石としても兼用した可能性がある。4もすり石を兼ねている。いずれも砂岩製。5～7はすり石。拳大の礫を素材とし、全体的に使用している。5は被熱している。ⅢH-2で出土したすり石と同様の用途に用いられたものである可能性が窺われる(出土点数も双方3点である)。5は泥岩、他は砂岩製。8は砥石。側縁に観察される使用面から、もともと大きかった砥石が割れた可能性がある。砂岩製。(影浦)

8 Ⅲ～Ⅰ層出土の遺物

(1) 概要

Ⅲ層（以上）からは縄文時代前期以降の遺物が出土した。主に、縄文時代中期後半から後期前半（Ⅲ群b類～Ⅳ群a類）の北筒式、続縄文時代の下田ノ沢式と後北C₂-D式、トビニタイ式、擦文土器である。温根沼2遺跡出土の遺物点数は、総じて遺構出土遺物より包含層出土遺物の方が少ない。

(2) 土器（図Ⅳ-175～178、表Ⅲ-3～8・Ⅳ-12・20・21、図版87～89）

土器は、Ⅲ層から2,367点、Ⅱ層から1,118点、Ⅰ層・攪乱から346点、計3,831点が出土した。時期別の内訳は、縄文時代前期押型文40点、縄文時代北筒式1,315点（Ⅲ群b類214点、Ⅲ群b類～Ⅳ群a類448点、Ⅳ群a類653点）、続縄文時代の下田ノ沢式2,061点、後北C₂-D式94点、トビニタイ式49点、擦文土器241点、その他31点である。続縄文時代の下田ノ沢式が53.8%でもっとも多く、北筒式が34.3%とそれに次ぎ、これらで約9割を占めている。

1はⅠ群b類、東釧路Ⅱ式の小片。2・3はⅢ群b類、北筒Ⅱ式（トコロ6類）。いずれとも口縁部が肥厚せず、口唇直下に円形刺突文を巡らせている。4～8は北筒Ⅴ式。7・8は同一個体片。

9はⅣ群c類、堂林式の口縁部。口唇断面は切り出し状を呈する。細かい波状口縁。

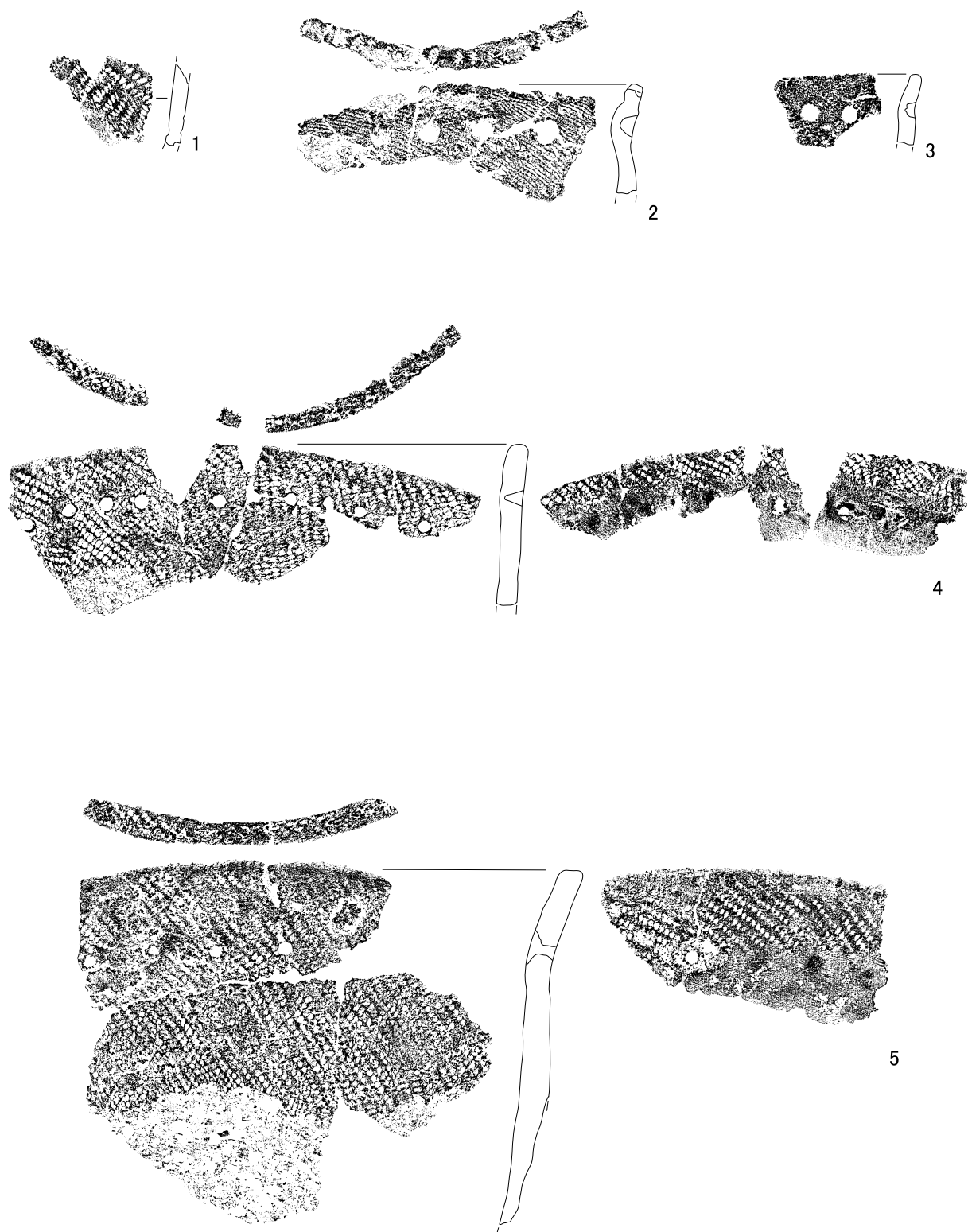
10～18はⅥ群b類、下田ノ沢式。10・11は刺突を充填した細い隆起線が施文されているもの。10は波頂部から隆起線が垂下する。波頂部と、垂下する隆起線の下端にやや径がある刺突が加えられている。10は口唇直下にも口唇沿いに刺突が施文されている。12～14は口縁部を縄線文が巡るもの。12は非常に細い撚り。2本単位で斜めの縄線も交叉して施文されている。14は山形の突起に、縦につまみ出したような肥厚部があり、横方向に穿孔されている。10・11はⅢP-12-1（図Ⅳ-98）、12はⅢP-11-1（図Ⅳ-98）に類似する資料と考えられる。下田ノ沢Ⅰ式。13・14は、ⅢH-5の掘り上げ土から出土した8・9（図Ⅳ-162）に近い資料と考えられる。14～16は突起を有する。14は横に孔が穿たれ吊耳状。15・16は突起部が肥厚し、貫通孔が穿たれている。15・16は刺突文、17は爪形文が施されている。16の刺突は3本組。14・15、17は胴が膨らむ。18は底部片。粘土の継ぎ目で割れており、擬口縁になっている。14はⅢH-10-2（図Ⅳ-93）、15はⅢH-6-3（図Ⅳ-91）に近い資料とみられる。16はⅢH-1-5～7（図Ⅳ-89）と近い位置で出土したもので同一個体の可能性も考えられたが、刺突文のスパンが短いため、別個体と判断した。17はⅢH-12-3（図Ⅳ-96）、ⅢP-16-1（図Ⅳ-98）に近い資料。13～17は下田ノ沢Ⅱ式。

19は後北C₂-D式。口縁部を平行隆起線が2条横環し、口唇上と隆起線上に刻みが加えられている。

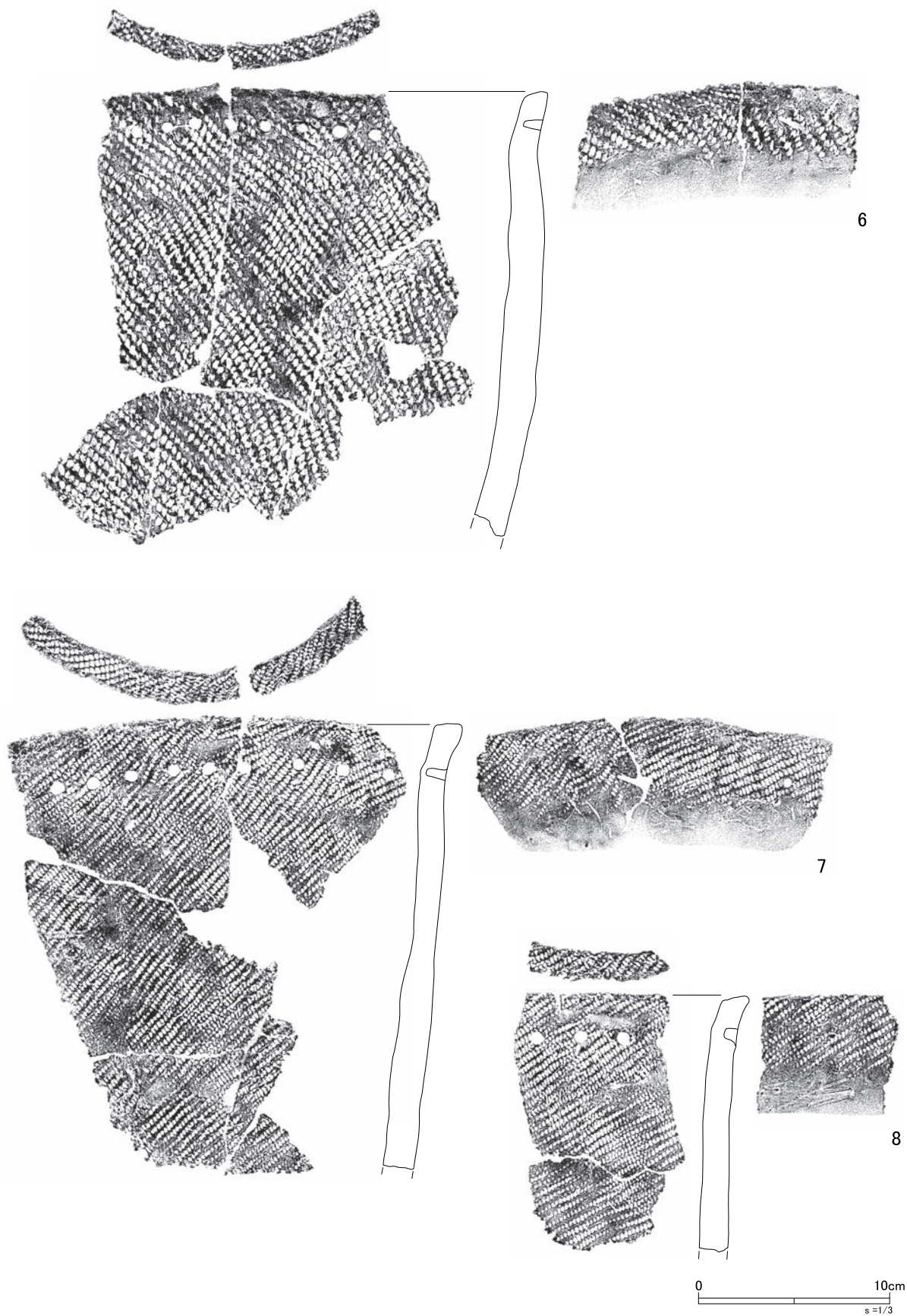
20～23はⅦ群、擦文土器。20・21は不整な鋸歯状沈線を施したもの。22・23は復元個体。いずれも底径が小さく、口径が大きく開く器形。22はわずかに肥厚した口縁部外面を刻み列が2段巡る。刺突列の上下は、ごく浅い沈線が縁取るように横環している。胴部上半には6本単位の集合沈線による鋸歯状のモチーフが巡り、その下部を4本単位の沈線が横環する。口縁部と底の径比は3.46:1。容量は1.05L。23は口縁部が無文。頸部が溝状をなす。右上から左下への斜行沈線が充填的に施されたのち、左上から右下方向への3本単位の斜行沈線が間隔を開けて施文されている。口縁部と底の径比は3.61:1。容量は2.55L。

(3) 石器等（図Ⅳ-179～188、表Ⅲ-3～8・Ⅳ-23・24、図版90～93）

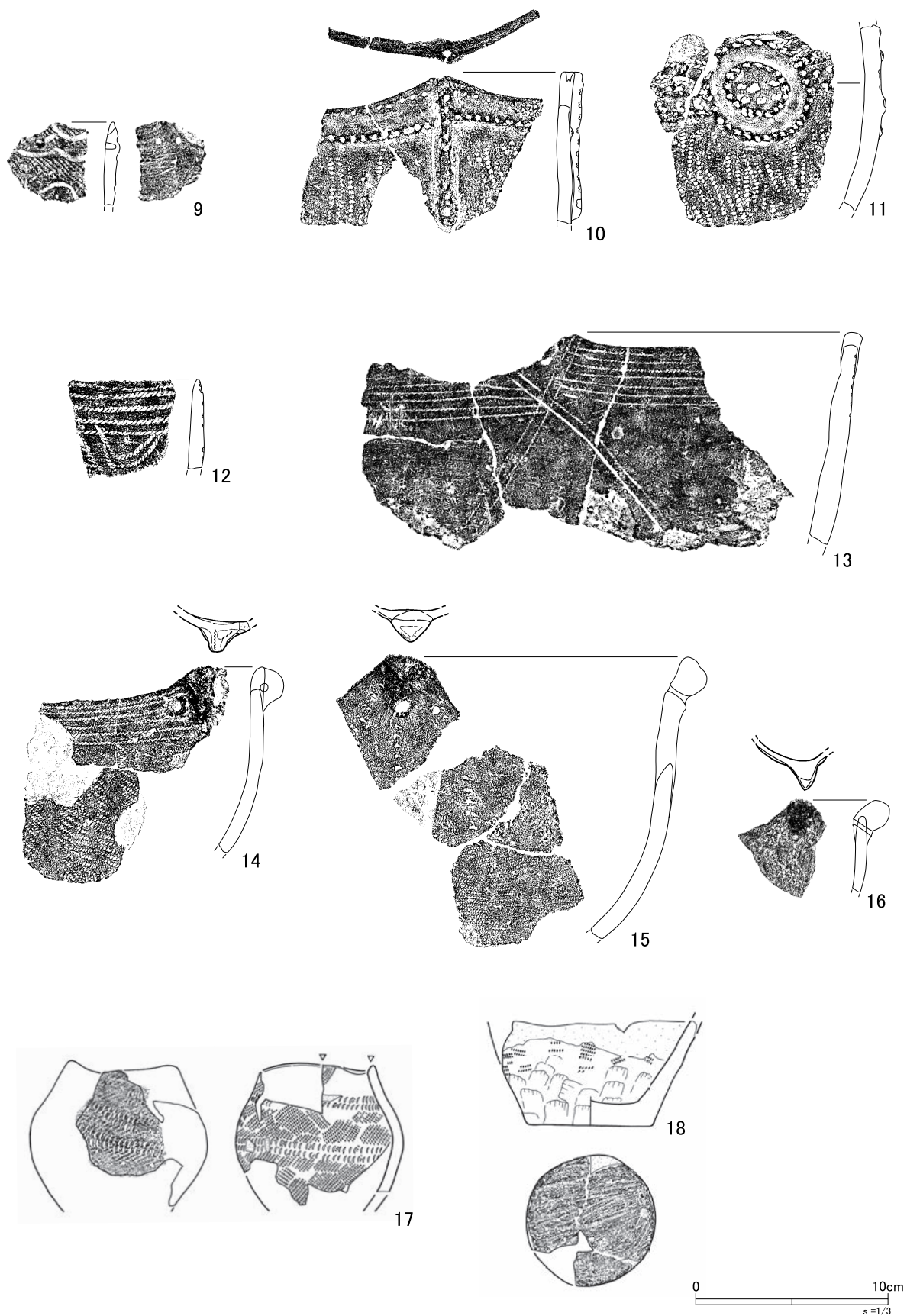
石器等は、Ⅲ層から1,818点、Ⅱ層から785点、Ⅰ層・攪乱から344点、計2,947点が出土した。フリック・チップ2,087点と石核39点を除くと、石器は821点である。器種別の内訳は、たたき石236点、



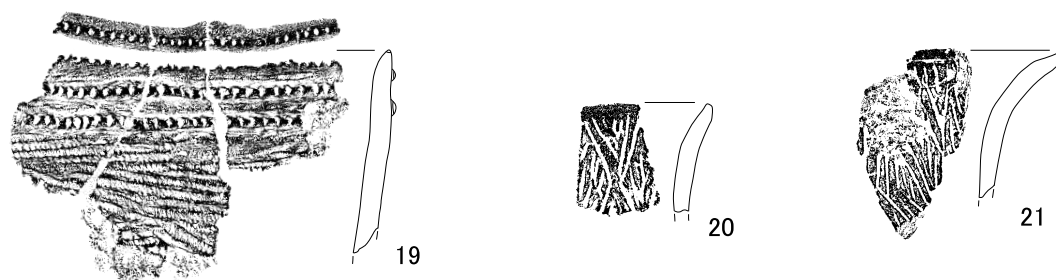
図IV-175 Ⅲ層包含層出土の土器(1)



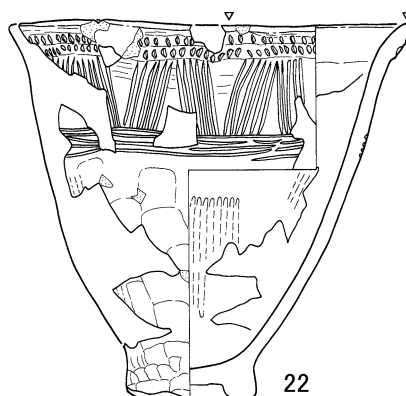
図IV-176 Ⅲ層包含層出土の土器（2）



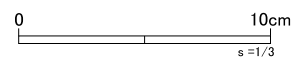
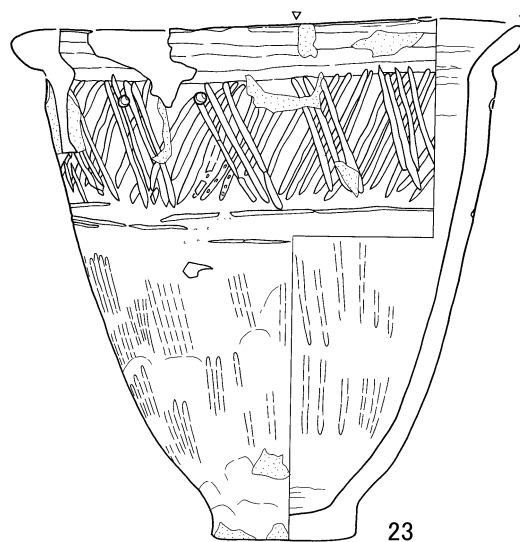
図IV-177 Ⅲ層包含層出土の土器（3）



⊕ 内面実測範囲



⊕ 内面実測範囲



図IV-178 Ⅲ層包含層出土の土器（4）

スクレイパー170点、砥石145点、石鏃56点、石槍またはナイフ51点等が多い。このほかⅠ～Ⅲ層からは14,245点の礫とメノウ等の原石7点、珪化木1点、パミス25点が出土している。礫14,245点中3091点(21.7%)は被熱礫である。

Ⅰ～Ⅲ層で出土した土器片の54%が縄文時代の下田ノ沢式、34%が縄文時代中期末から後期前半の北筒式であり、大きくはこの2時期でⅠ～Ⅲ層出土土器の9割弱を占めていたことからすると、出土石器の帰属時期も大きくはこれらの時期である可能性が高いと考えられる。残り1割の土器がトビニタイ式や後半期の擦文土器であることを考えると、剥片石器と石斧に関しては、ほとんどが北筒式か下田ノ沢式のものと考えて大過ないであろう。ちなみに摩周テフラの降下層(Ⅳ層)を挟んで、下のⅤ層は縄文時代早期後半の東釧路式期の遺構・遺物が検出されているが、Ⅰ～Ⅲ層で出土した土器片3,831点中、Ⅰ群b類は24点(0.6%)である。縄文時代早期後半の石器もⅠ～Ⅲ層に混在する可能性はほとんどないと判断される。

以下、石器の点数はⅠ～Ⅲ層(包含層)の出土点数である。

石鏃(1～29)は56点が出土した。形態的な内訳は三角形平基7点、三角形弱凹基9点、正菱8点、偏菱1点、有茎凸基(かえしが不明瞭なもの)13点、五角形3点、木葉形2点、その他2点、破片11点。破片率は全体の約2割である。1～6は菱形。3は偏菱で、他は正菱。7は木葉形。8は木葉形ないし菱形。9～15は有茎。かえしが不明瞭なものが多い。16～26は三角形。平基と弱凹基からなり、大きくえぐれた凹基は出土していない。27～29は五角形。27は基部が弱凹基。28は欠損した菱形石鏃を再加工したとみられる。すべて黒曜石製。

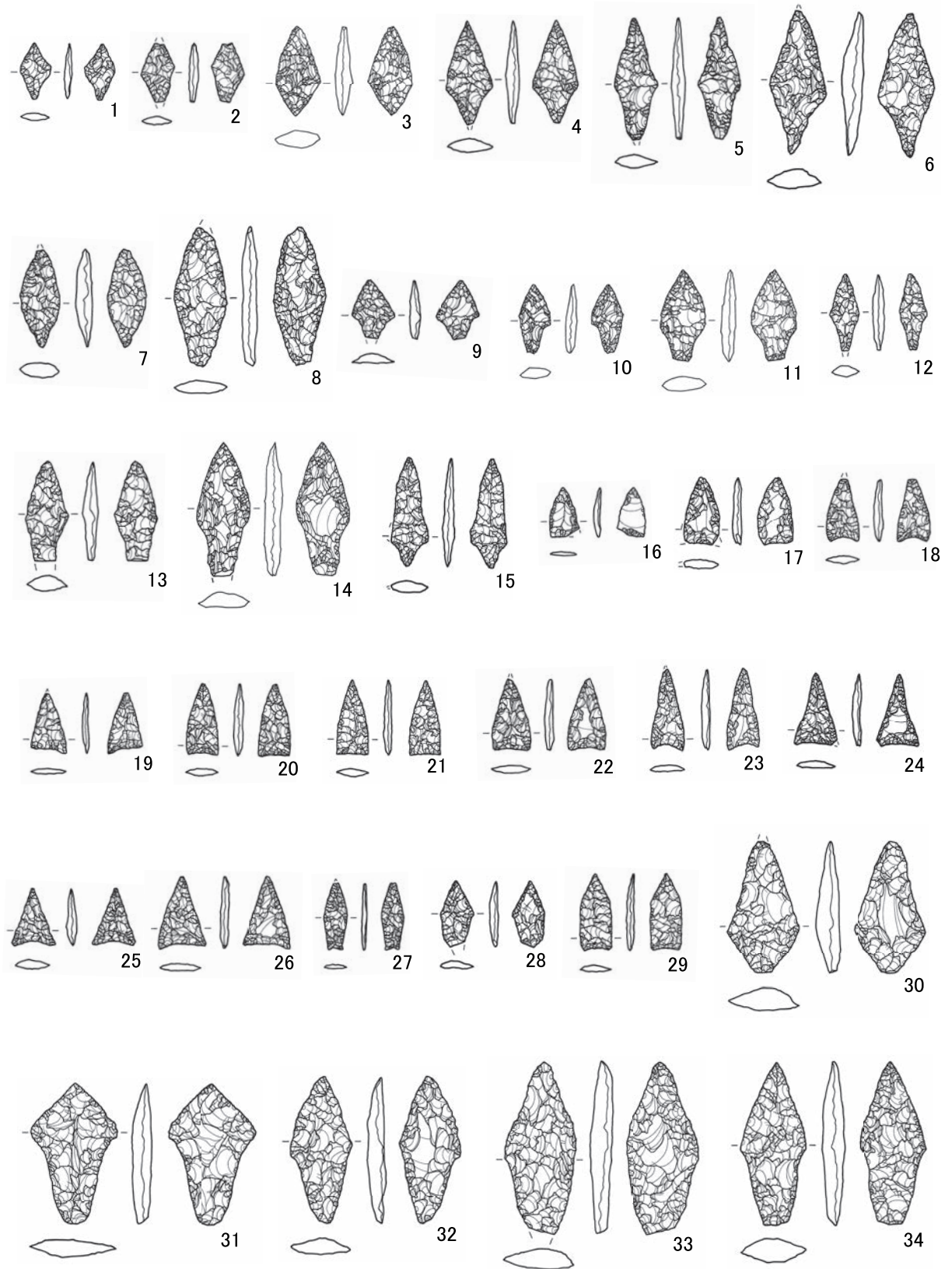
菱形および有形凸基の石鏃については北筒式期、縄文時代双方の可能性がある。しかし、15のように短い基部のものは北筒式にともなうと考えられる。三角形の石鏃(16～26)は縄文時代の可能性が高いと考えられるが、剥片の素材面を大きく残した周縁加工による16は、北筒式期の可能性もある。

石槍またはナイフ(30～44)は51点が出土した。形態的な内訳は菱形8点、有茎凸基(かえしが不明瞭なもの)9点、木葉形5点、破片29点。破片率は57%で石鏃の3倍弱である。形態的には3種に分けたが、菱形と有茎凸基は、どちらにも分けられるような中間タイプが多い。菱形と有茎凸基について掲載では無理に分別しないで大小で並べている。30～39は菱形あるいは有茎凸基。30・31は最大幅が長軸の中心にないもの。いわゆる偏菱。32・34は尖頭部の側縁がやや外側に丸く膨らみ小さいかえしがある。37も同様のタイプかもしれない。35・36は正菱。40～43は木葉形。40は小型。両面調整石器とすべきものかもしれないが、41と同タイプのものとともに石槍またはナイフとした。41は大型。先端は折れている。42は粗い剥離で整形した砂岩製のもの。黒曜石の製品を模したものかもしれない。43は下端を欠損する。44は破片。おそらく木葉形と考えられる。

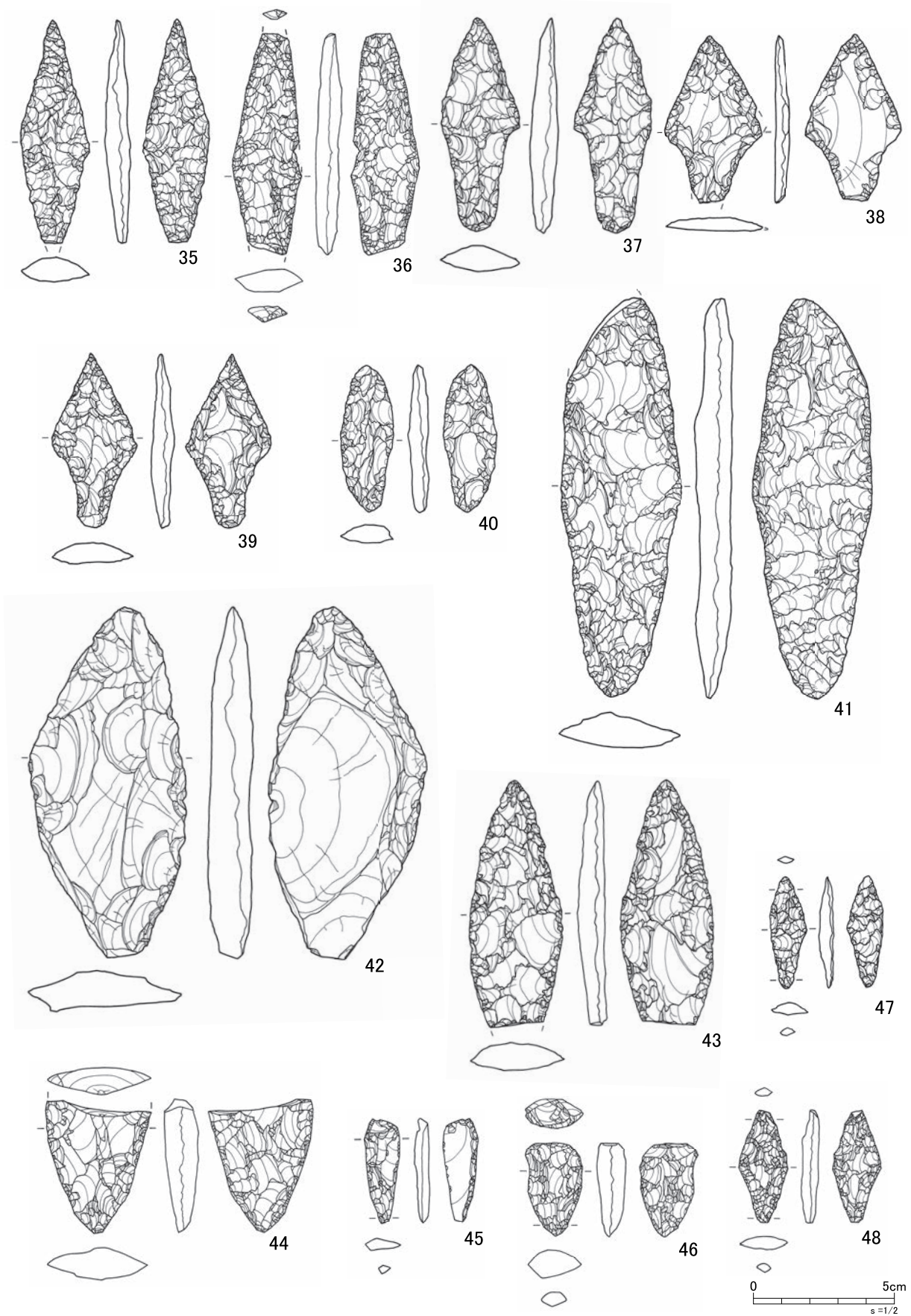
粗い剥離の偏菱(30・31)、尖頭部の側縁がやや外側に丸く膨らみ、小さいかえしがあるもの(32・34)、かえしの部分が中位にあり横に張り出るもの(38・39)、木葉形(40～43)は北筒式期の所産とみられる。

石錐(45～51)は12点出土した。縦長の剥片を素材としたもの3点。石鏃を転用したもの2点、厚手の剥片を素材としたもの2点(両面全面加工1点と片面全面加工1点からなる)、うすい剥片の一端に機能部を作出したもの2点、破片3点。破片のうち1点は石鏃転用、1点は石槍またはナイフ転用の石錐である。45は薄い縦長の剥片を素材とし、縁辺を加工したもの。46は肉厚な剥片を素材とし、両面全面加工を施したもの。縁辺は摩耗で丸くなっている。排土からの採集品だが、他に類品がないため掲載した。47・48は石鏃を転用したもの。上下両端を使用している。49は断面が半円形。裏面は横剥ぎの主剥離面で平坦。50・51は剥片の一端に錐部を作出したもの。49が頁岩製、ほかは黒曜石製。

つまみ付きナイフ(52～58)は9点出土した。52～57は片面周縁加工。58は両面全面加工。55は刃



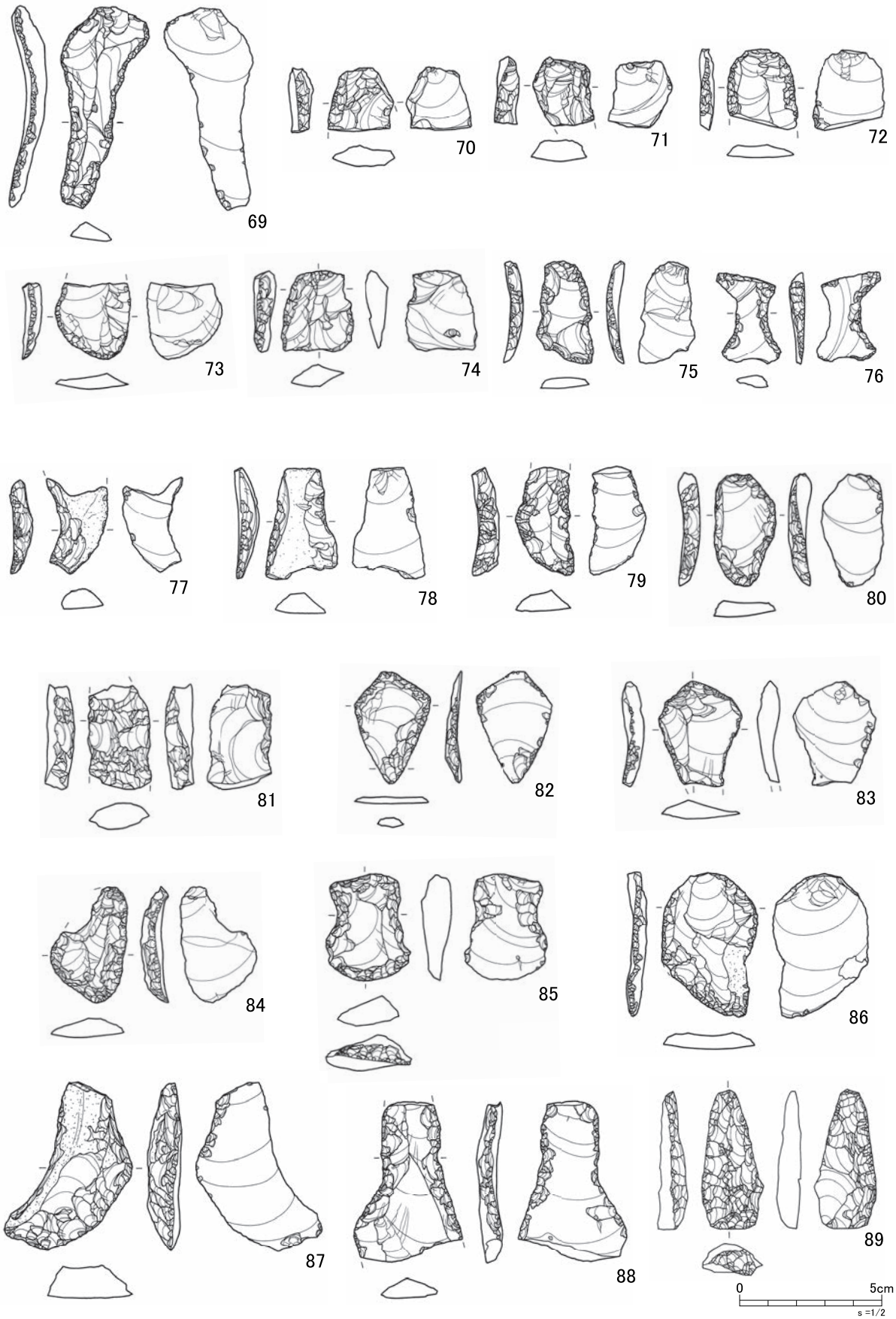
図IV-179 Ⅲ層包含層出土の石器（1）



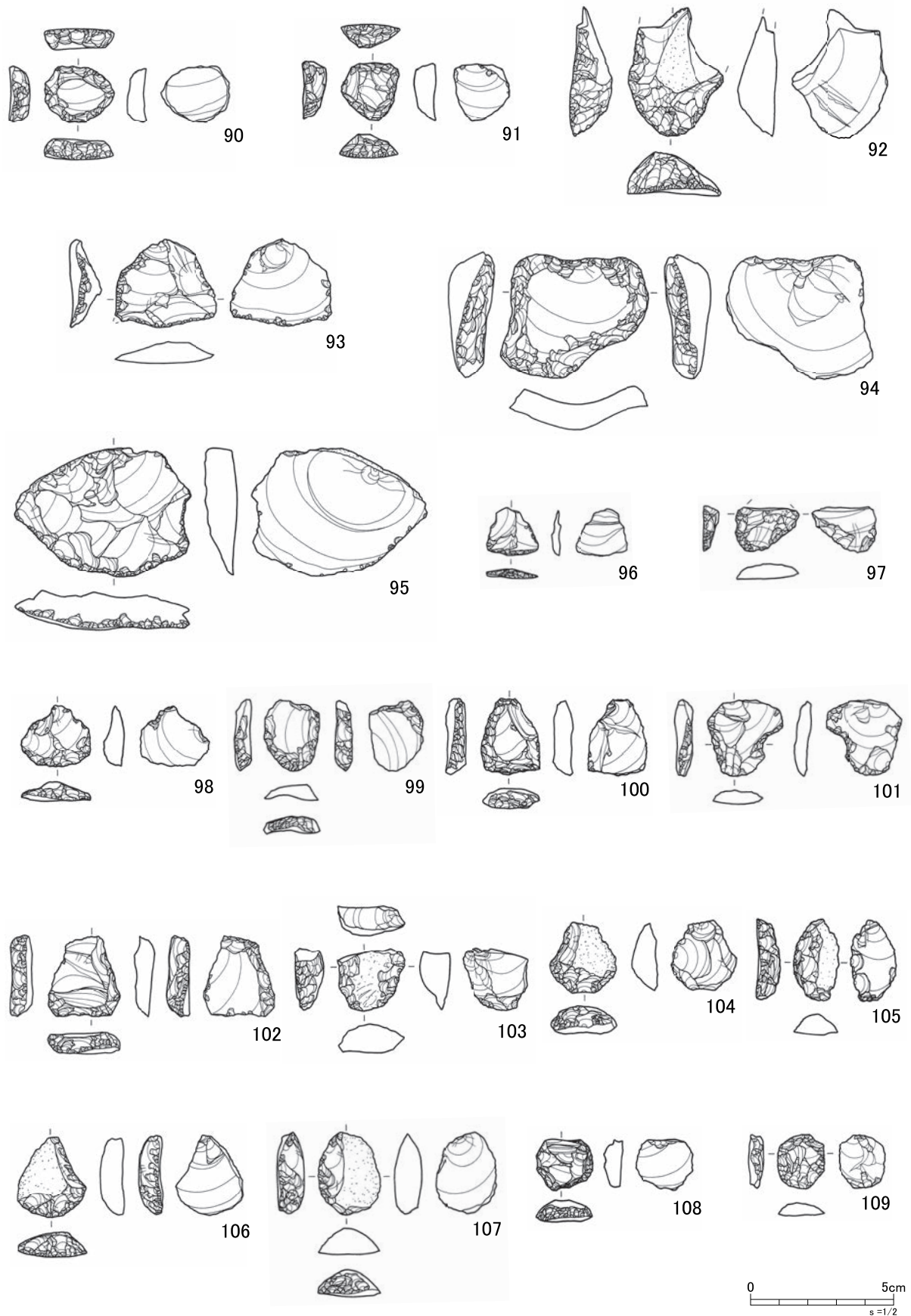
図IV-180 Ⅲ層包含層出土の石器(2)



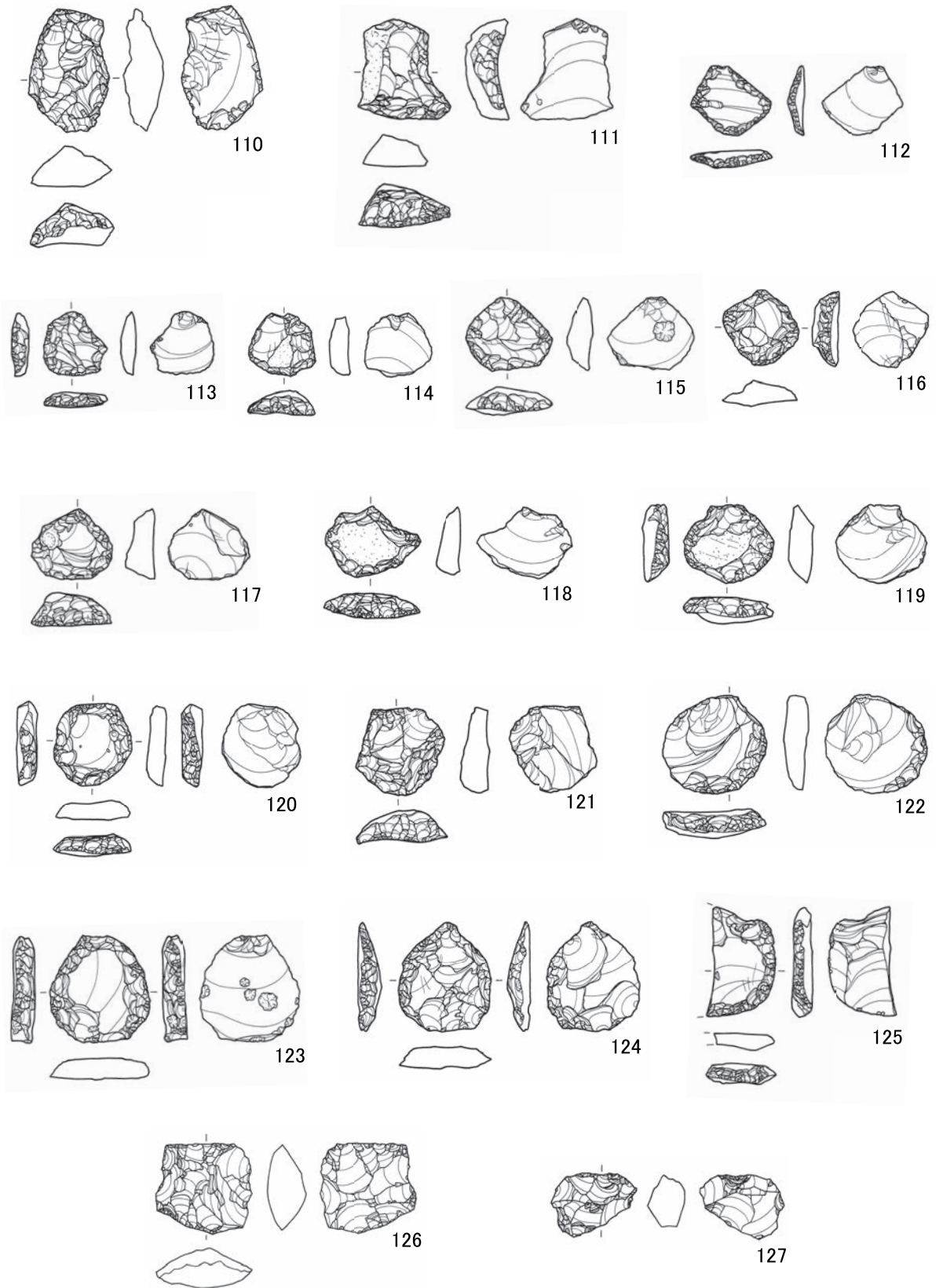
図IV-181 Ⅲ層包含層出土の石器（3）



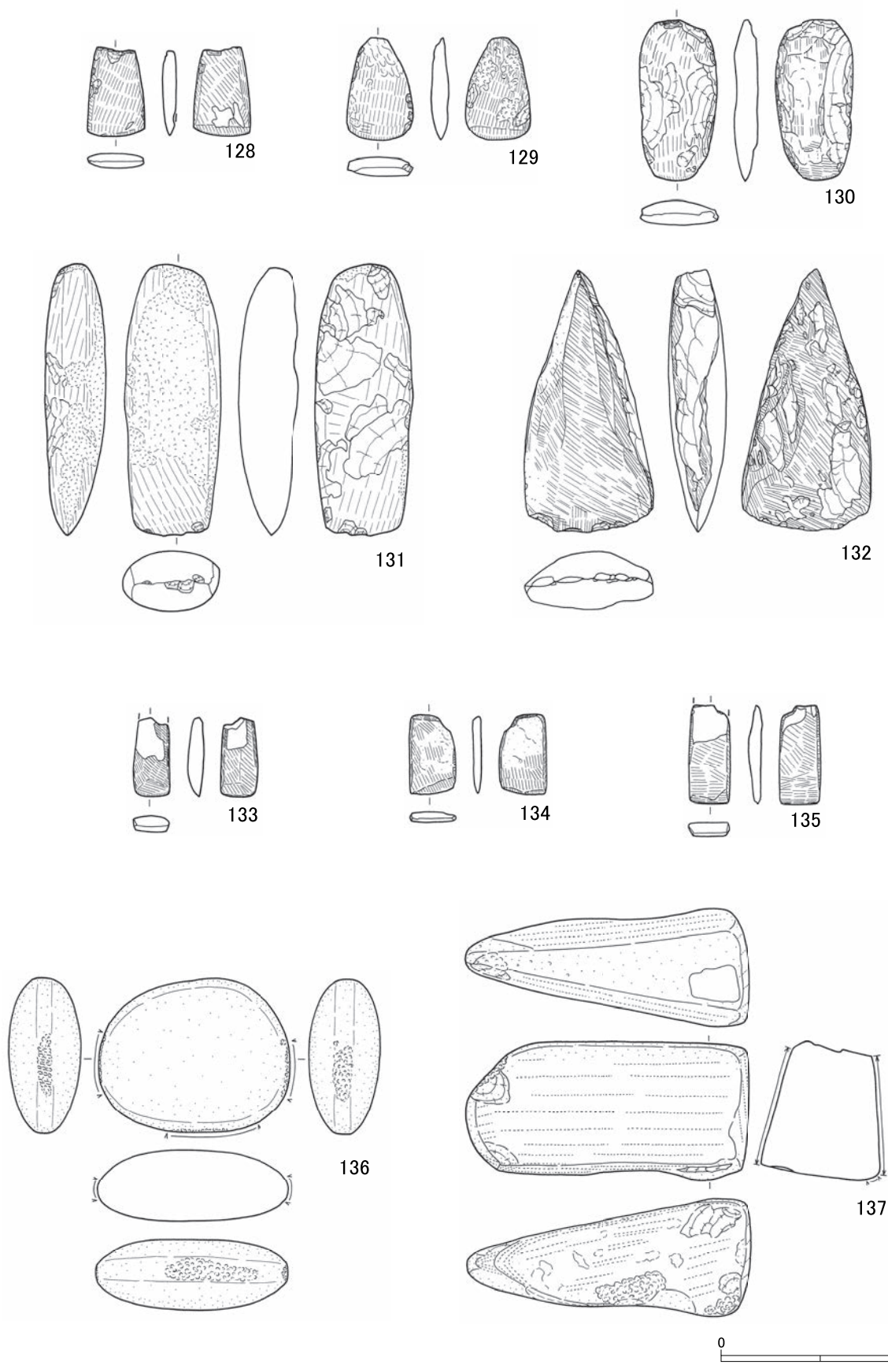
図IV-182 Ⅲ層包含層出土の石器(4)



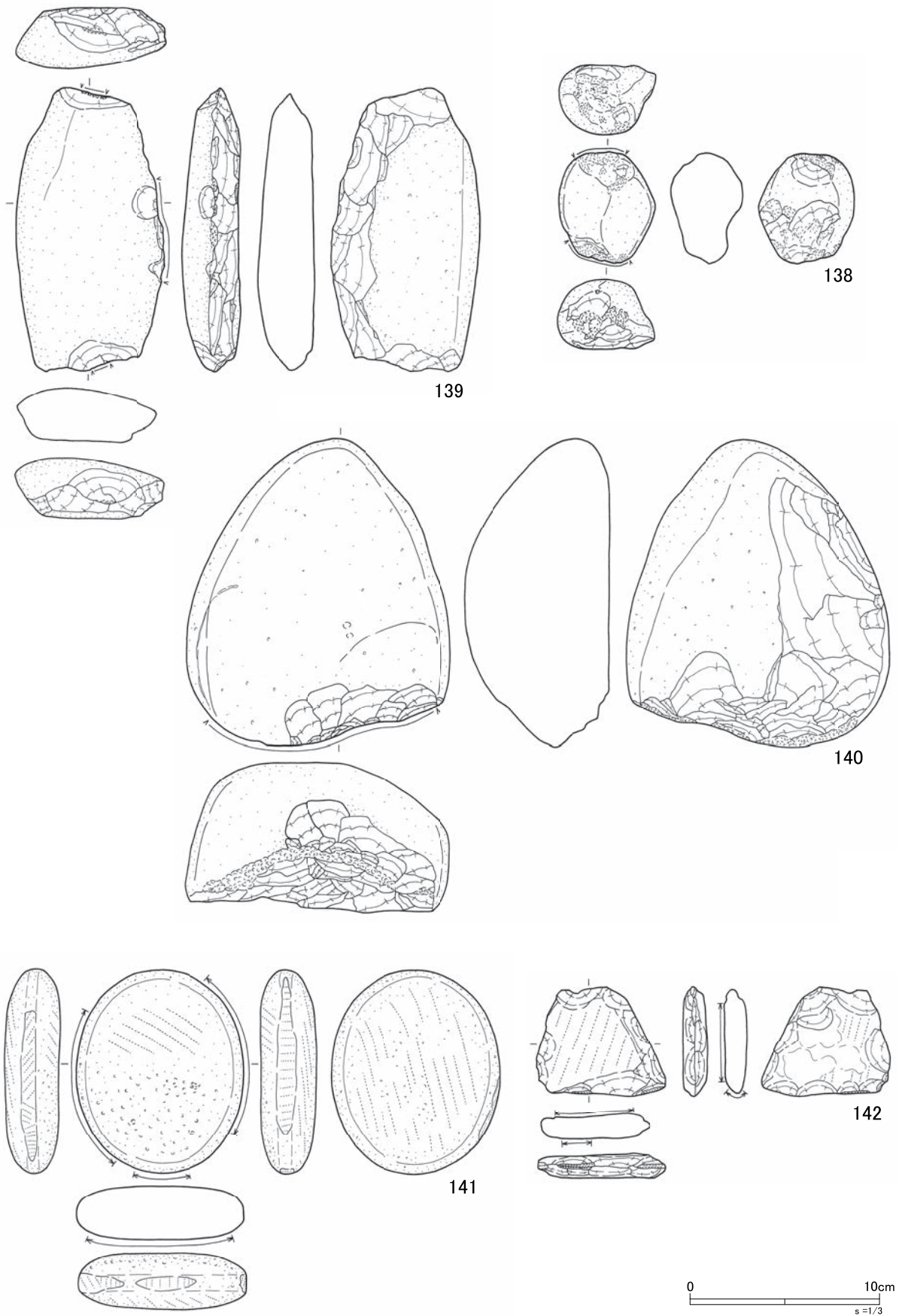
図IV-183 Ⅲ層包含層出土の石器（5）



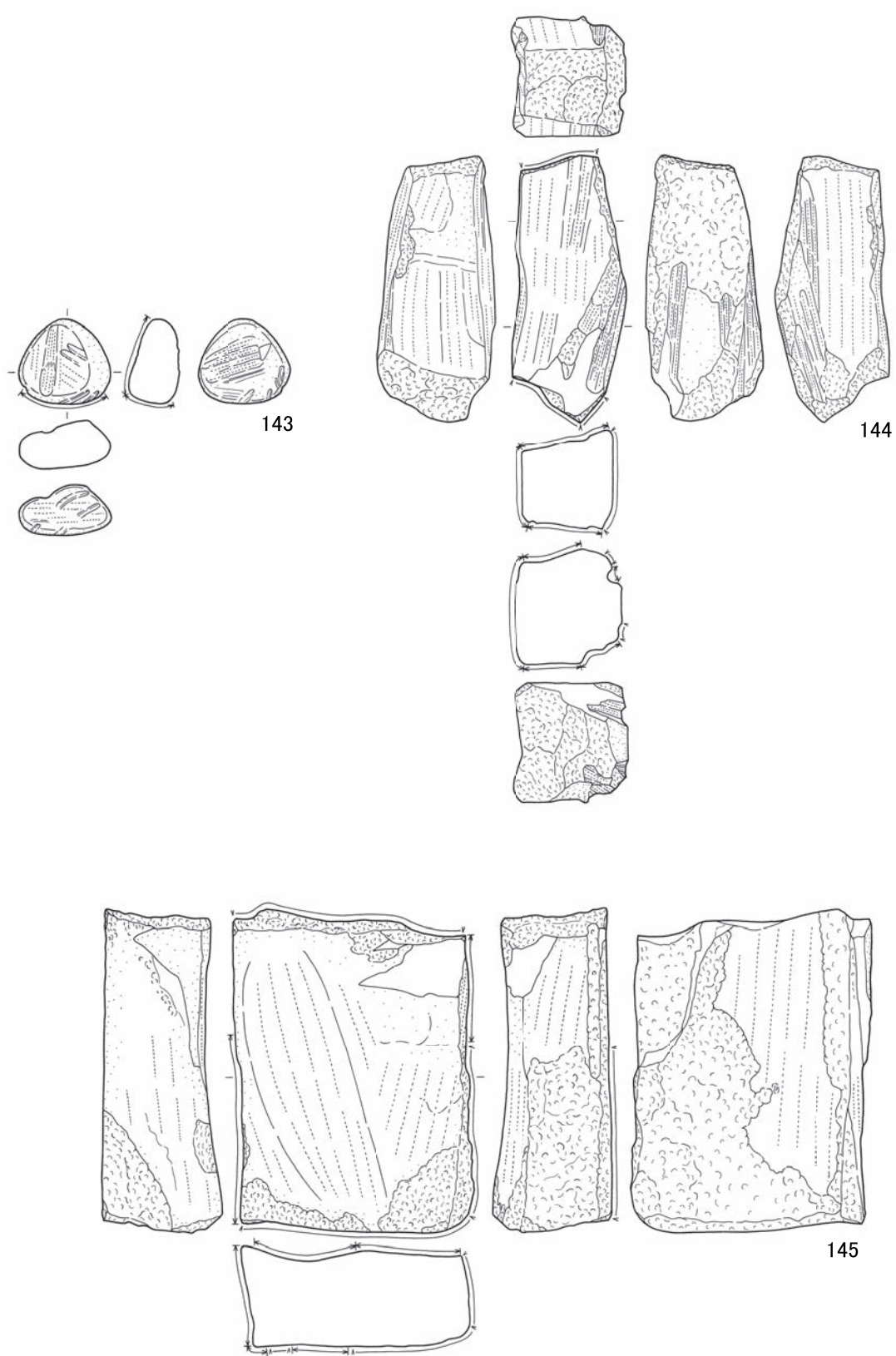
図IV-184 Ⅲ層包含層出土の石器(6)



図IV-185 Ⅲ層包含層出土の石器（7）

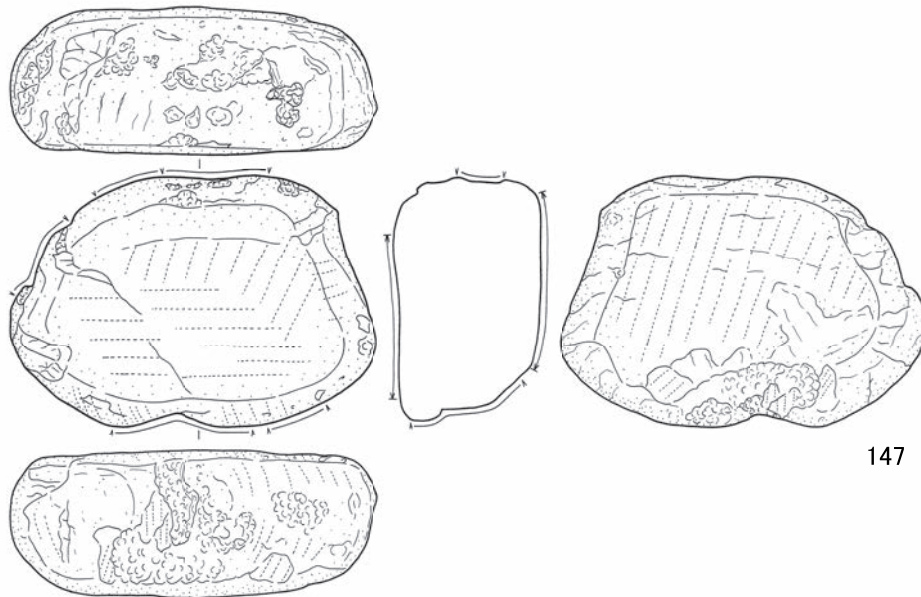
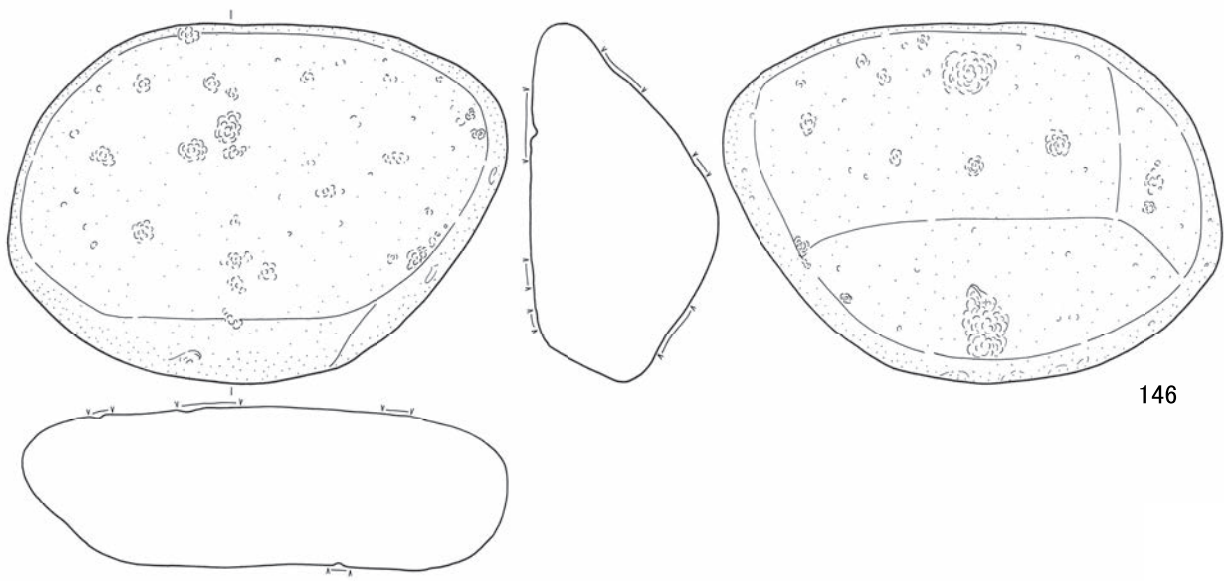


図IV-186 Ⅲ層包含層出土の石器(8)



0 10cm
s=1/3

図IV-187 Ⅲ層包含層出土の石器（9）



図IV-188 Ⅲ層包含層出土の石器 (10)

部が内湾する。57のみ頁岩で、ほかは黒曜石製。つまみ付きナイフは、すべて北筒式に伴うものと判断される。

スクレイパー (59~125) は170点出土した。大きくは縦長剥片を素材とし両側縁に刃部を作出したもの (59~111)、小さな剥片を素材とし周縁に刃部を作出した円形のもの (112~125) に分かれる。これに刃部が内湾するもの (76・85・87・88・111) や、刃部が急角度のもの (71・79・111・114~123) の要素が加わるものもある。円形のものには刃部が全周するものとししないものがあり、形状が四角のものなどもある。いずれのタイプも北筒式にも続縄文時代にもともなう可能性があるが、刃部が内湾するものは北筒式期の可能性が高いと思われる。円形のスクレイパーは、遺構にともなった内容からすると多くが続縄文時代 (下田ノ沢式) にともなうものであろう。73が頁岩製、ほかはすべて黒曜石製。

楔形石器 (126) は7点出土した。126は四角い。上下左右とも縁辺が潰れており、向きを変えて使ったと考えられる。黒曜石製。

U・R フレイク としたものは37点を数える。図示はしていない。

石核 (127) は39点出土した。2点が頁岩、1点がチャート、ほかはすべて黒曜石であった。

石斧 (128~132) は31点出土した。緑色泥岩製が11点、泥岩製10点、片岩製5点、砂岩製3点、珪化岩製1点、粘板岩製1点である。中小型の石斧が多く、大きいものでも131・132クラスのサイズである。132に関しては大型石斧の刃部片の割れ口を研磨した可能性がある。128・129は小型。いずれとも片岩製。130は粘板岩製。摂理に沿って割れた剥片に研磨整形を加えて刃部を作出している。131は泥岩製。一部被熱している。132は緑色泥岩製。

石のみ (133~135) は6点出土した。いずれとも小型で薄い短冊形。全体に研磨整形されている。133と135は基部を欠損している。いずれとも泥岩製。

たたき石 (136~140) は236点出土した。大半が扁平礫を素材として、面、側縁、端部をたたいたものである。両面から打ち欠いて鋭い稜線を作出し、そこを使用しているもの (139・140) が20点ある。他、すり石用途を兼ねているもの (137) が5点、砥石片を転用あるいは砥石を兼ねているものが2点、長軸の両端を使用したもの (138) が1点ある。また、使用痕が微弱で判然としないものが88点 (非掲載・台帳上では?を付した)、破片・小片が11点ある。石材は、砂岩が129点 (54.7%)、粗粒玄武岩が35点 (14.8%)、泥岩34点 (14.4%) の上位3種で84%を占めている。この3種は遺跡周辺、根室半島で普通に採取できる岩石である。一方、安山岩10点 (4.2%)、花崗岩8点 (3.4%) 等は多くない。

すり石 (141) は16点を数えた。たたき石の中にすり石用途も兼ねたものもある。扁平礫を素材とし、面・側縁を使用したものが大半である。使用痕が微弱で判然としないものが9点 (非掲載・台帳上では?を付した)。石材は砂岩7点、粗粒玄武岩3点、凝灰岩3点、泥岩、安山岩、花崗岩各1点である。

石鋸 (142) は3点出土した。いずれも薄い砂岩を素材としたもので、3点中では63g (非掲載) が最大である。142は砥石片を転用したもの。53g。

砥石 (144・145) は145点出土した。破片103点。使用痕が判然としないもの16点を含む (非掲載・台帳上では?を付した)。破片を除く42点では板状が34点、角柱状2点、垂円礫等6点。有溝は5点 (板状1、角柱状2、垂円礫等2) を数える。144点中136点が砂岩製。他は泥岩4点、凝灰岩3点、スコリア2点。143は扁平な垂円礫を用いた有溝砥石。144は4面使用の角柱状砥石。145は4面使用の板状。144に関してはノッカマップ層に産するアルコース砂岩製である。

台石・石皿 (146・147) は23点出土した。使用痕が微弱で判然としないもの14点を含み (非掲載・台帳上では?を付した)、17点が破片である。点数的に少なく、一例を除き3kgに満たない小型のものが多い (たたき石の可能性もある)。石材は17点が砂岩。粗粒玄武岩と泥岩が各2点。凝灰質砂岩と安山岩?が各1点。146は最大のもので6.7kgある。146は安山岩?製、147は砂岩製である。 (影浦)

9 近代の遺構と遺物

(1) 炭窯関連遺構群 (図IV-189~196、表IV-6、図版44~46)

調査区南西部の斜面下で、表土除去の際に広範囲のくぼみを確認していた。上面精査・南北トレンチ調査を行い、順次掘り下げ、炭窯とその関連遺構群を検出した。並列する炭窯2基と隣接する建物跡1棟、炭窯上方の大型楕円形土坑8基、下方の土坑4基、柱穴(杭穴)19基、さらに西側に離れた位置の大型土坑2基で構成される。全体規模は約18×10m、標高約5~8.5mである。

炭窯の形状や構造は、「北海道窯」(三浦 1933)とされる卵形の黒炭窯に近似するものの、規模はやや小型である。道内の調査事例では、明治~大正期は角形(角窯)、昭和になると卵形や楕円形など丸みのある形状が多くなる傾向にあり、当遺跡の炭窯時期は近代~現代、特に昭和初期~20年代の可能性が高いと推察される。(阿部)

炭窯1 (図IV-189~192、表III-11・IV-6、図版44-4~6)

位置 j7・j8区 平面形態 Ω形(卵形)

規模 3.50×3.04/3.50×2.64/1.10m

確認・調査 上面精査の際に、不均質な色調の土壌と炭化木片を検出した。南北トレンチ調査では、赤色や黄色の土壌が厚く堆積し炭化材が多出する状況を確認していた。覆土を掘り下げ、平坦面と壁の立ち上がりを検出し、炭窯とした。平面形は、北側が隅丸形状、南側が楕円状で焚口が張り出す。底面精査の後、付属遺構や周囲の調査を行った。

覆土 上面付近の1層は一部焼土を含む黒褐色土で、炭窯廃絶後の自然堆積・流入土である。覆土の大部分をなす2~6層は、砂質ロームの黄褐色土(2層ほか)と被熱した赤色土(4・6層ほか)が層状またはブロック状に互層になっており、天井の崩落土を含む埋め戻し土とみられる。赤色土中には、炭化木片が含まれる。床面の一部および壁面付近(7層)には、タール状の炭化物が多量に付着し硬化している。

なお炭窯の東西の周囲では、IV~VII層の自然堆積層の上に砂質ローム土(「VIII層」)や粘土を盛り固め、擁護壁をなしている。また砂質ローム土や粘土の表面が被熱し赤変している。

底面・壁 窯床は「VIII層」(VII層下位)砂質ローム中で、ほぼ平坦である。窯壁は直立気味に立ち上がる。窯床・窯壁とも広い範囲が強く被熱し赤変しており、壁面にはタール状の炭の跡が一部残存する。砂質土壌の斜面下部を利用し、地均しや地盤固めを伴わない直接掘削により構築された可能性がある。

付属遺構 斜面上方の北壁で煙道、下方の南側で焚口の構造を検出した。焚口は、粘板岩の板状礫を基底面とし、周囲の土壌が赤変している。焚口両壁際付近には、径13cm・深さ50cmを超える杭穴(ISP-1・2)がある。また焚口西半覆土中には、固結した破碎礫や大型の亜角礫が含まれており、焚口の構造の一部をなしていたものと考えられる。

さらに炭窯の北側斜面上方には、長楕円形の大型土坑群が5基(IP-1~5)連続し、南側斜面下方には土坑群が3基(IP-4・9・12)と杭穴3基(ISP-3・4・8)があり、関連する。

遺物出土状況 上記の破碎礫や大型の亜角礫のほか、覆土中から炭化材片が多数出土した。(阿部)

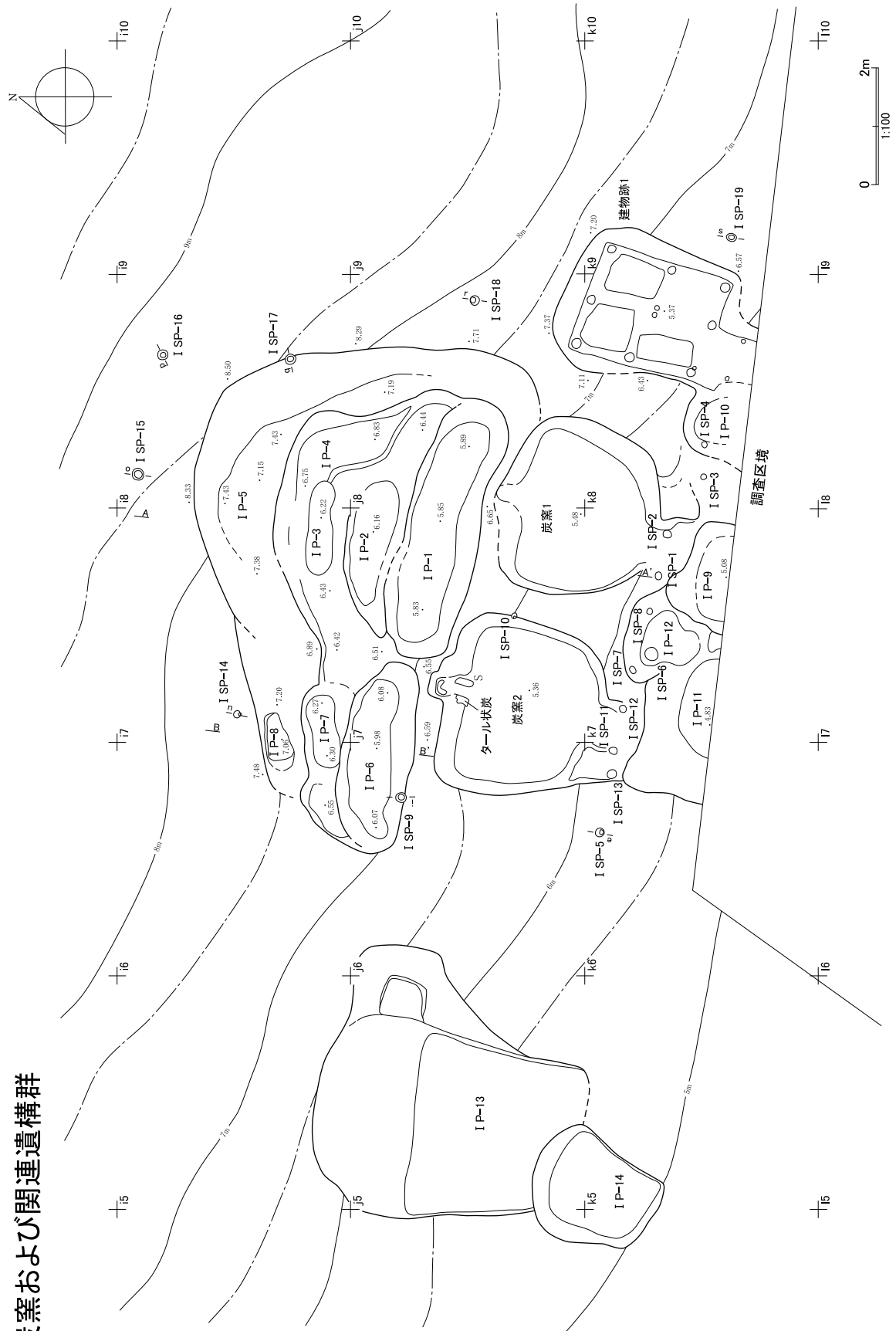
炭窯2 (図IV-189・193・194、表III-11・IV-6、図版45)

位置 j6・j7区 平面形態 Ω形(卵形)

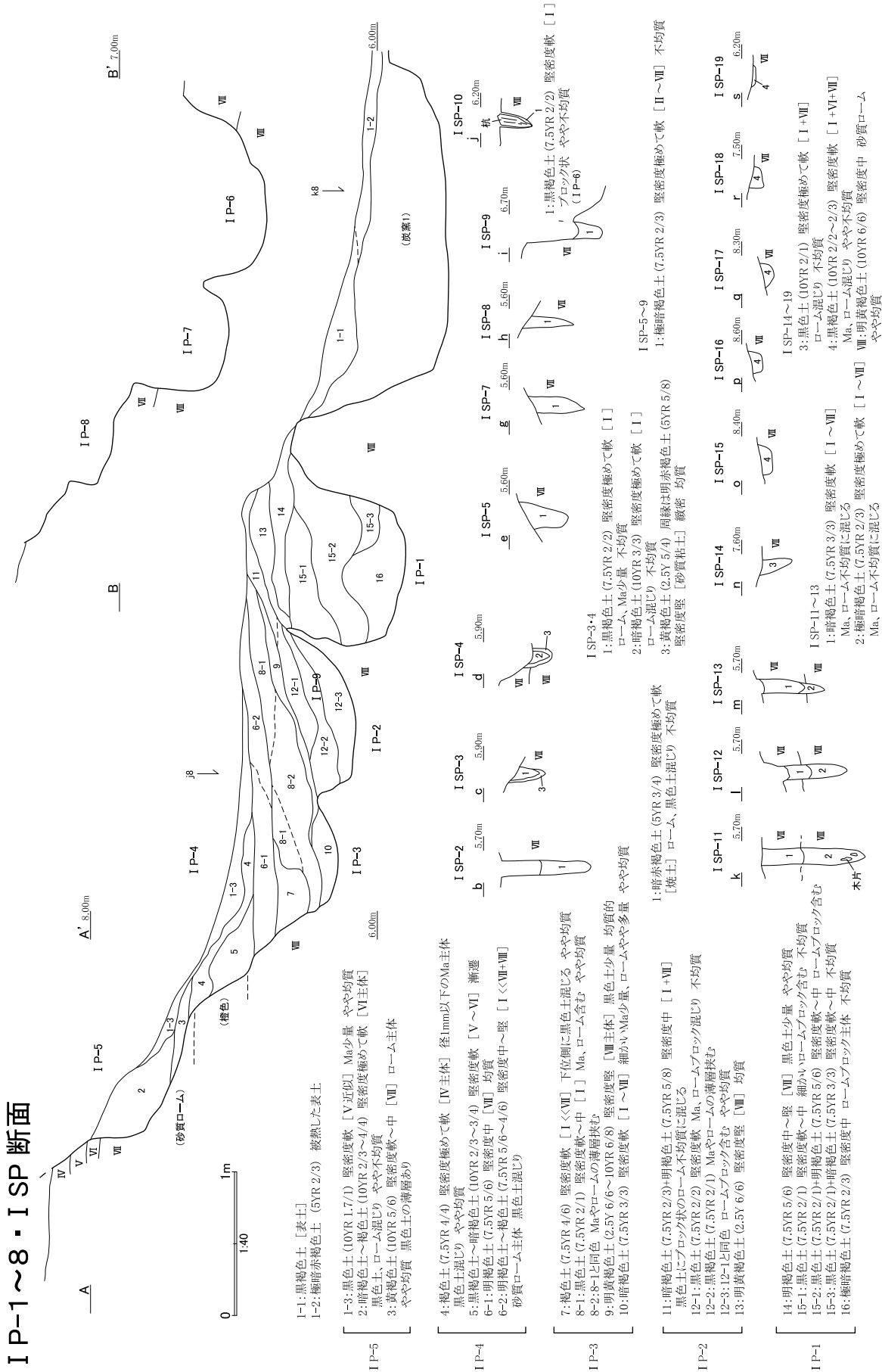
規模 3.73×3.06/3.38×2.65/1.10m

確認・調査 上面精査の際、不均質な色調の土壌と炭化木片を検出した。炭窯1の調査中にその西側

炭窯および関連遺構群

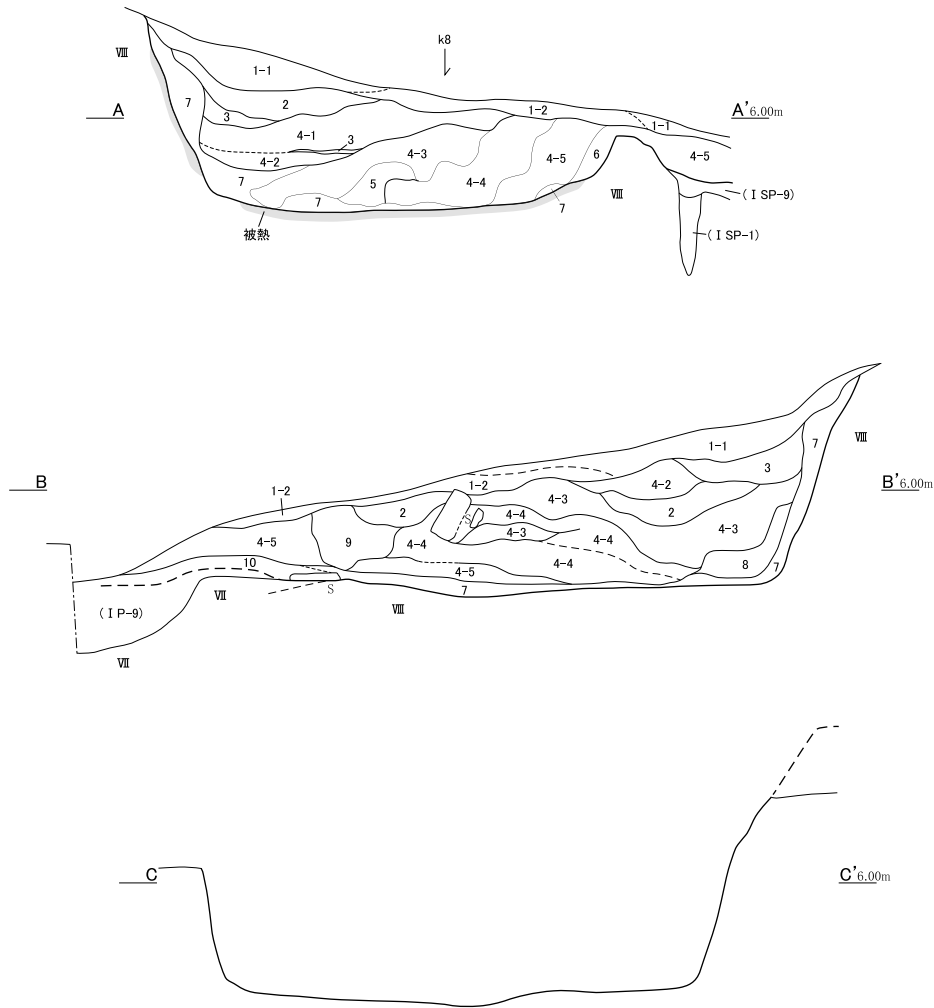


図IV-189 炭窯および関連遺構群



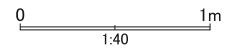
図IV-190 I P-1 ~ 8 · I SP 断面

炭窯1断面

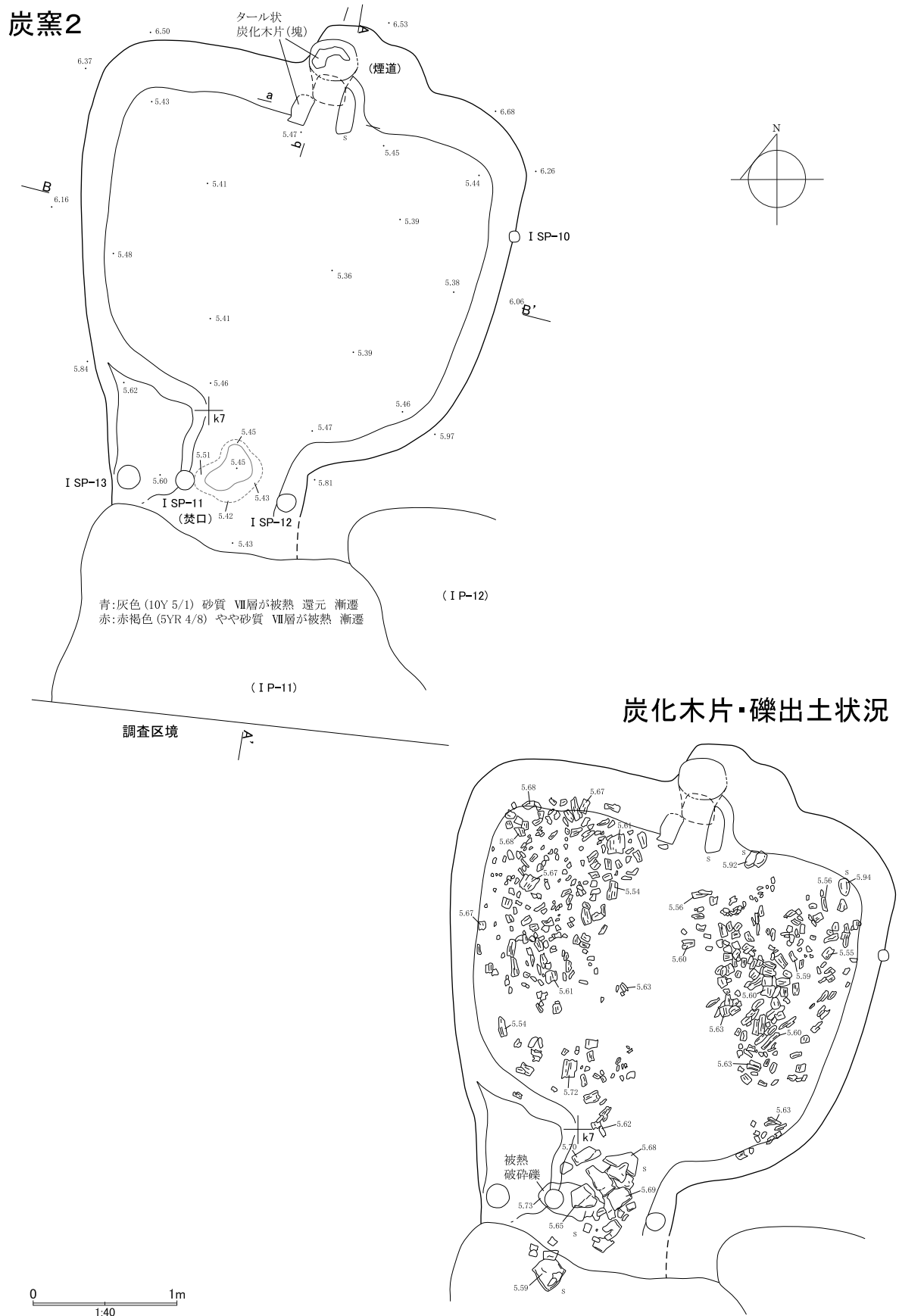


- 1-1: 黒褐色 (7.5YR 2/2) [表土]
- 1-2: 極暗赤褐色 (5YR 2/3) 被熱した焼土
- 2: 黄褐色+赤褐色 (10YR 5/6+2.5YR 4/6) 堅～中
砂質ローム主体 被熱土・黒色土混じり 不均質
- 3: 黒褐色 (5YR 2/2) 軟 細かいタール状炭化木片多量
ローム混じり 不均質
- 4-1: 赤色 (10R 4/6) 中 砂質シルト
被熱部主体 やや均質
- 4-2: 赤褐色 (2.5YR 4/6) 中 やや黒色土混じり
- 4-3: 赤褐色 (2.5YR 4/8) 中 未被熱ローム多く含む
- 4-4: 赤色 (10YR 4/6) 中 ほぼ全て被熱 黒色土の薄層挟む
- 4-5: 赤褐色+黄褐色 (2.5YR 4/6+10YR 5/6) 中 未被熱ローム多く含む
- 5: 明黄褐色 (2.5Y 6/6) 堅～中 [VII] 一部被熱 均質的
- 6: 暗赤褐色 (2.5YR 3/6) 堅～中 [VIII] 被熱赤変および煤状黒色物質
- 7: 黒色 (N 1.5/0) 軟～中 [タール状炭化物]
細かいタール状炭化物多量 均質
- 8: 極暗褐色～赤褐色 (7.5YR 2/3～5YR 4/8) 軟
炭・黒色土・ローム・被熱ローム混じり 不均質
- 9: 暗赤褐色+黒色 (5YR 3/4+N 1.5/0) 極めて堅
径5mm前後の破砕礫
- 10: I P-9(黒色)

VII: 明黄褐色 (10YR 6/6) 中 砂質ローム やや均質

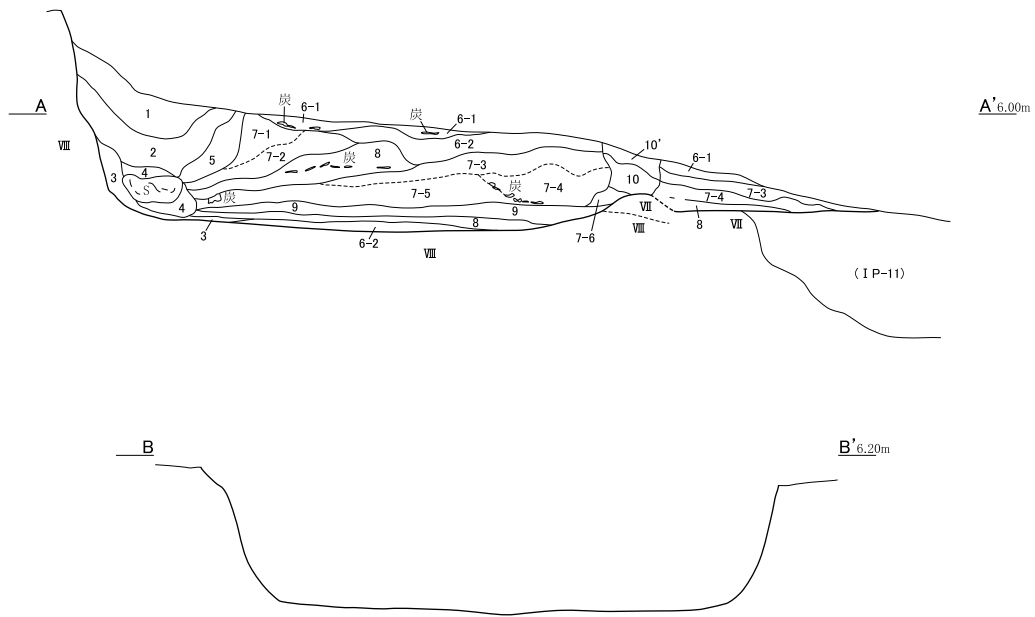


図IV-192 炭窯1断面

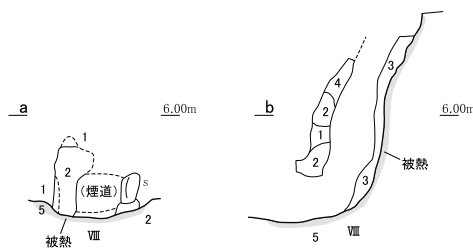


図IV-193 炭窯2平面、炭化木片・礫出土状況

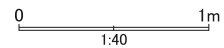
炭窯2断面



- 1: 黒色 (10YR 2/1) 中～堅 [I] 粘質 均質的
- 2: 黒褐色 (10YR 2/3) > 褐色 (7.5YR 4/6) 黒色土にロームブロックが不均質に混じる
- 3: 黒色 (N 1.5/0) 堅 [タール状炭化物>VII] 細かいタール状炭化物及び被熱破碎礫
- 4: 黒色 (N 1.5/0) 極めて堅 [被熱粗粒玄武岩] 被熱発泡 光沢あり
- 5: 明黄褐色 (10Y 6/6) > 極暗褐色 (7.5YR 2/3) 砂質ローム主体 黒色土混じり 不均質
- 6-1: 褐色 (10YR 4/6) 堅 [VII>>黒] やや均質
- 6-2: 明黄褐色 (10YR 6/6) 堅 [VIII] 均質
- 7-1: 明赤褐色～褐色 (5YR 3/6～7.5YR 4/4) [被熱VII+VIII] 不均質
- 7-2: 赤褐色～黄褐色 (2.5Y 4/6～10YR 5/6) [被熱VII<VIII] やや不均質
- 7-3: 赤褐色～黄褐色 (2.5Y 4/6～10YR 5/6) [被熱VII+VIII] やや不均質
- 7-4: 赤褐色～黄褐色 (2.5Y 4/6～10YR 5/6) [被熱VII<VIII] 不均質
- 7-5: 赤色～黄褐色 (10YR 4/6～10YR 5/6) [被熱VII>VIII] やや不均質
- 7-6: 赤褐色～黄褐色 (2.5R 4/6～5YR 2/4) [被熱VII+黒] 不均質
- 8: 赤色 (10YR 4/6) 堅～中 [被熱VIII] 均質的
- 9: 黄褐色 (10YR 5/6) 中～軟 [VII] ローム 均質的
- 10: 暗灰黄色～褐色 (2.5Y 4/2+7.5YR 4/4) 極めて堅 [破碎礫+VII] ブロック状
- 10': 10に6-1が混じる



- 1: 黒褐色 (5YR 2/1) 軟 [タール状炭化物]
- 2: 暗赤褐色 (2.5YR 3/2) 極めて堅 [被熱粗粒玄武岩?] 隙しく被熱 表面はもろい
- 3: 黒色 (N 2/0) 極めて堅 [タール状炭化物] 被熱 光沢あり
- 4: 暗褐色 (7.5YR 3/4) 軟～中 [VIII被熱] 被熱 やや砂質
- 5: 黒褐色 (10YR 2/3) 中～堅 [VIII被熱] 被熱 砂質
- VII: 明黄褐色 (10YR 6/6) 中 砂質ローム やや均質



図IV-194 炭窯2断面

をさらに精査したところ、楕円形をなす炭状黒色物質の輪郭を検出した。半截し掘り下げ、赤色や黄色の土壌が厚く堆積し炭化材が一面に多数出土する状況を確認した。炭化材出土状況などの記録作成後、全体を掘り下げ、平坦面と壁の立ち上がりを検出し炭窯とした。平面形は、北側が隅丸形状、南側が楕円状で焚口が張り出す。底面精査および煙道や焚口などの付属遺構や周囲の調査を行った。

覆土 土層断面で大きく10層に分層した。

北壁付近の1～5層は、表土や煙道の構造土および周辺の崩落土に相当する。うち3層は壁面～坑底付近にタール状の炭化物が固結したもので、4層は排煙口を構成する大型の礫と被熱した粗粒玄武岩が固結している。5層は砂質ローム主体の黄褐色土で、壁面崩落土とみられる。覆土の大部分をなす6～9層はさらに細分され、砂質ロームの黄褐色土（6・9層）と被熱した赤色土（7・8層）が層状またはブロック状に互層になっており、天井の崩落土を含む埋め戻し土とみられる。7・8層赤色土中には、炭化木片が多量に含まれる。床面付近（6～2層）および床面から10～15cm上位（9層）には、純度の高い硬く引き締まった砂質ロームの黄褐色土が版築状に層をなしている。防湿のための地盤固めと考えられ、一度炭出しを行った後、さらに地盤固めを行い複数回利用した跡とみられる。

南部の10層は粗粒玄武岩の破碎礫が密に詰まっており、焚口を構成していたものと考えられる。なお炭窯の東西の周囲では、Ⅳ～Ⅶ層の自然堆積層の上に砂質ローム土（「Ⅷ層」）や粘土を盛り固め、擁護壁をなしている。

底面・壁 窯床は「Ⅷ層」（Ⅶ層下位）砂質ローム中で、ほぼ平坦である。窯壁は直立気味に立ち上がる。窯床・窯壁とも広い範囲がやや被熱赤変し、壁面にはタール状の炭の跡が一部残存する。

付属遺構 斜面上方の北壁で煙道、下方の南側で焚口の構造を検出した。

煙道は北壁中央に位置する。排煙口は浅くくぼんだ底面両側に袖石が残存し、西側が素粒玄武岩の破碎礫、東側が砂岩の大型礫と素粒玄武岩の破碎礫で構成される。タール状の炭化物が固結している。口径は20～25cmである。煙道は、坑底からやや外側に直立気味に立ち上がる。径25～30cmの円筒形で長さ約1.2mほどを測り、外側に約10°傾斜する。壁にはタール状の炭化物が厚く固結している。煙道口は壁面北側にあり、長径32cmの楕円形をなす。

焚口は、中央基底面が還元とみられる青灰色を呈し、周囲の土壌が赤変している。焚口両壁際付近には、径13cm・深さ50cmを超える杭穴（ISP-11・12）がある。底面より約20cm上位の覆土中には、板状礫片が面をなし、粗粒玄武岩の被熱破碎礫がブロック状に堆積する範囲があり、焚口の構造の一部をなしていたものと考えられる。

炭窯の北側斜面上方には、長楕円形の大型土坑群が3基（IP-6～8）連続し、南側斜面下方には土坑群が2基（IP-11・12）と杭穴4基（ISP-5・6・7・13）があり、関連する。

遺物出土状況 上記の破碎礫や板状礫片、大型礫のほか、覆土中～下位から炭化材片が多数出土した。覆土下位（7層）では炭化材片が面をなして多量に出土しており、最終利用時の炭出しの際の残存物とみられる。（阿部）

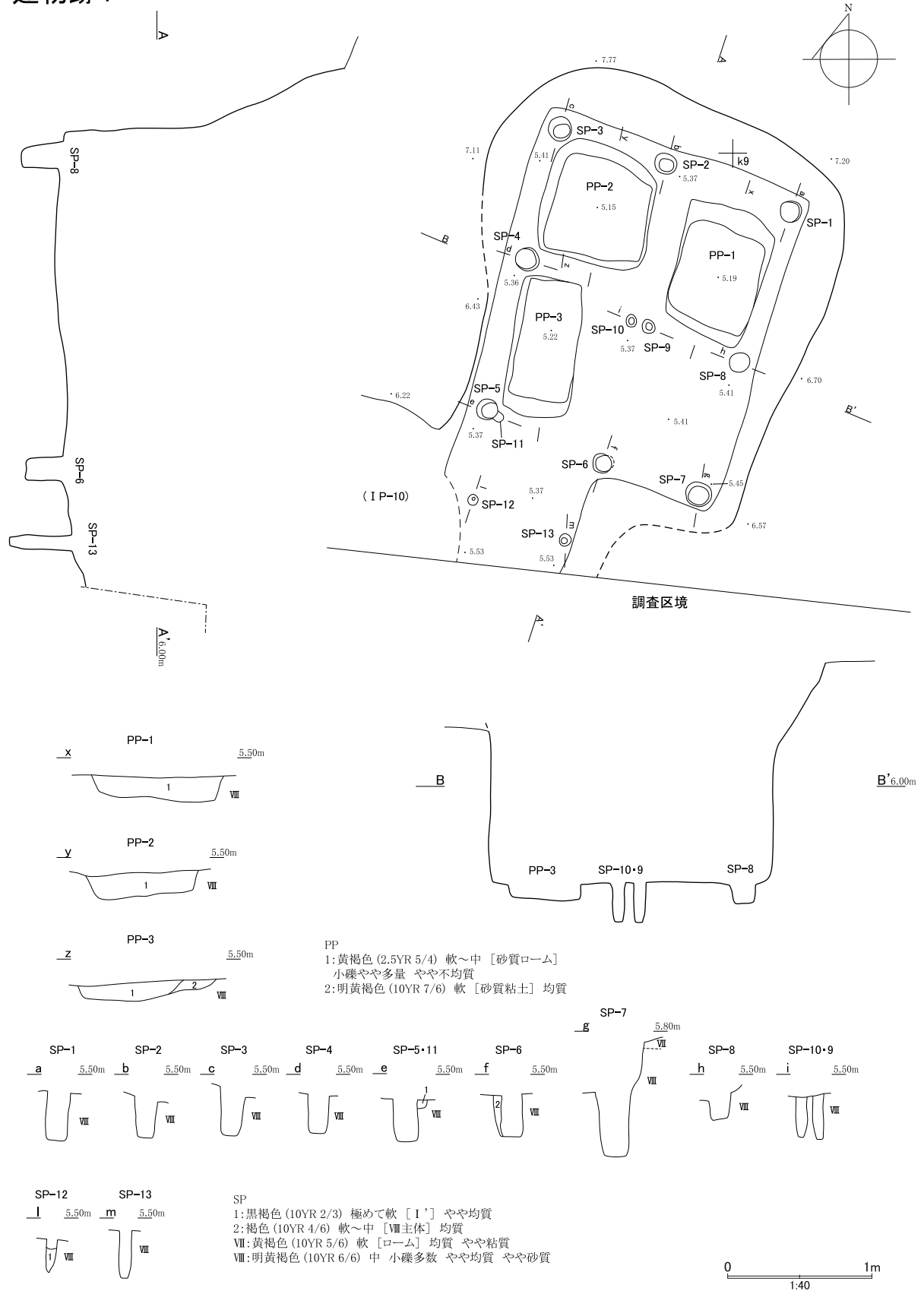
建物跡1 （図Ⅳ-189・196、表Ⅲ-11・Ⅳ-6、図版46-1）

位置 j8・j9・k8・k9区 **平面形態** 長方形+長方形

規模 (3.60)×2.58/(3.16)×1.94/1.50m

確認・調査 炭窯1の東側で表土が大きくくぼむ範囲を確認した。表土、さらに覆土を掘り下げたところ、長方形の平坦面と壁を検出した。底面を精査したところ、土坑・柱穴が整然とした配置で検出され、さらに南側に付属遺構が続いたことから、建物跡とした。緩斜面下で深さ最大1.5mの方形の堅穴を掘削し、その壁際までを利用した建物で、炭窯の見張り小屋や材置き場などの施設と推察される。

建物跡1



図IV-196 建物跡1

覆土 上位は大部分が表土等の黒色土で、下位は斜面上位の北壁側にⅦ層黄褐色ロームを主体とする土壌が厚く堆積していた。崩落土と流入土を主体とする。

底面・壁 坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。検出面付近は崩落し、斜方向に開く。

付属遺構 土坑3基（P P-1～3）、柱穴13基（S P-1～13）を検出した。

土坑は約90×70cm、深さ15cm前後の浅い方形をなしており、柱穴間にパネル状に配置している。柱穴のうちS P-1～8は径15cm前後・深さ30cm前後の支柱穴で、壁際に方形に位置する。S P-9・10は径7cm前後の小型のもので、建物跡中央に隣接する。S P-11～13は径7cmほどの小型のものが方形に配置し、建物跡南側に張り出す出入口構造をなすものと考えられる。（阿部）

I P-1～8（図Ⅳ-189・190、表Ⅲ-11・Ⅳ-6）

炭窯1・2の北側斜面上方にある大型長楕円形土坑群。炭窯の天井や地固め用の砂質ローム（粘土）採掘坑、排水・乾燥用の土坑、作業場などの複数の用途が考えられる。

I S P-1～5は炭窯1の北側に連続して構築されている。最大のI P-1は約4.6×1.4mの長楕円形で、深さは1.1mに達する。土層断面では、I P-1を黒褐色土などで埋めた後にI P-2を掘削し、その砂質ロームをI P-1の上に盛り固めた、と観察される。以下同様に、I P-3、I P-4、I P-5と順に斜面上方へ掘削・埋め戻しを繰り返し、土坑と平坦面を造成している。

I S P-6～8は炭窯2の北側に連続して構築されている。最大のI P-6は約3.3×1.3mの長楕円形で、深さは0.7mほどである。I S P-1～5と同様に面上方へ掘削・埋め戻しを繰り返し、土坑と平坦面を造成している。

I P-9～12（図Ⅳ-189・195、表Ⅲ-11・Ⅳ-6、図版46-2）

炭窯1・2の南側斜面下方に連続・重複する土坑群。I P-9・11は炭窯1・2の「前庭」にあたり、炭化木片を多量含む。焚口での炭の搬出時の作業にかかわるものとみられる。隣接するI P-10・12も炭化物をやや多く含み、関連する。

I P-13・14（図Ⅳ-189）

炭窯1・2から西に少し離れた位置で検出した。当初攪乱として掘り下げたが、I P-13は方形で平坦な坑底をもち、その下方に楕円形土坑I P-14があるなどの状況から、炭窯関連遺構群として記録した。焼成前または焼成後の材置き場や作業場などの用途が考えられる。

I S P-1・2・11・12（図Ⅳ-189・190・195、表Ⅳ-6、図版46-3）

前述の通り、I S P-1・2は炭窯1、I S P-11・12は炭窯2のそれぞれ焚口構造の一部をなす杭穴とみられる。

I S P-3～8・13（図Ⅳ-189・190・195、表Ⅳ-6）

炭窯1・2の南側に、東西方向に列する。径10cm前後（I S P-6除く）で、深さは20～50cmとさまざまである。炭窯の上屋構造を支える柱穴の一部である可能性がある。

I S P-9・10（図Ⅳ-189・190、表Ⅳ-6、図版46-4）

炭窯2の北側土坑I P-6内（I S P-9）および炭窯2の北東側壁（I S P-10）に位置する。炭窯の上屋構造を支える柱穴の一部と考えられる。なおI S P-10には杭そのものが残存していた。

I S P-14～19（図Ⅳ-189・190、表Ⅳ-6）

炭窯関連遺構群の北側～東側周囲に位置する。径15～20cm・深さ10cm前後の浅いものが多いが、土坑群や建物跡などにかかわる杭穴と思われる。（阿部）

(2) 家畜馬の墓

I P-100 (図IV-197、表III-11・IV-6、図版47-1・2)

位置 d24区 平面形態 不整形円形

規模 1.84×1.80/1.21×0.90/0.70m

確認・調査 d24区IV層上面で、円形の黒色土のまとまりと獣骨片を確認した。円形の中心を通るようにトレンチを設定し掘り下げたところ、底面及び壁の立ち上がり^{ほにおい}と獣骨のまとまりを確認した。覆土の状況及び獣骨の遺存状況から近現代の遺構と判断し、獣骨を残しながら覆土を掘り下げた。獣骨の遺存状況は肋骨を除き良好で、出土状況の撮影及び図化を行った。獣骨は形状から馬1頭分と推測される。獣骨以外には蹄鉄が出土した。本遺構は馬を埋葬した土坑墓と推測される。

時期 覆土の堆積状況、獣骨の遺存状況などから、近現代である。(広田)

(3) 近代の遺物 (図IV-197、図版94)

炭窯遺構周辺でわずかながら炆器と磁器の小片が出土している(図版94)。**炆器**はいわゆる焼酎徳利。下地と内面は鉄釉、外面に灰釉。ろくろ整形痕を残し、高台外面は斜めに削られている。穂香川右岸遺跡において類品がまとまって出土している(北埋調報212 2005)。**磁器**は皿とみられる小片。断片的であるが見込みに施された呉須の染付文様は手描きの草花文。二次焼成を受けて、細かい網状の亀裂が観察される。

また、排根線にともなう攪乱層中からサイダー瓶(図左 f25区・排根線攪乱層)、I層(表土)からビール瓶(図右 g19区I層)が出土した(図IV-197、図版94)。いずれも完存品。

サイダー瓶は肩部にエンボスで金線の文字を斜位に施している(「金」四文字、「線」六文字)。底面中央にも○でくくった「B」のエンボスが刻されている。瓶製造時の型枠の継ぎ目が口縁から底部まで縦位に走る。瓶の厚さは一定せず、底の内壁は4mm~12mmと厚さが不均一で傾斜する。ガラス内には気泡が観察される。外底面は梨地肌。色調は濃緑色。瓶口径2.6cm。内口径1.6cm。底径6.6cm。高さ24.0cm。重量は470g。最大容量350ml弱(347mlほど)。おそらくは330ml用であろう。

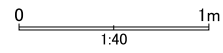
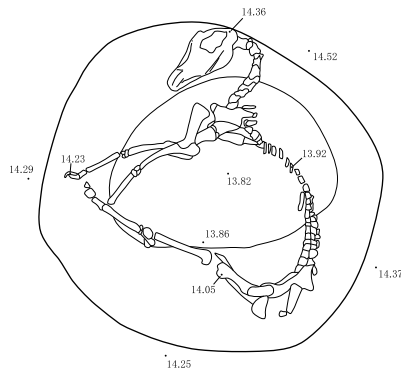
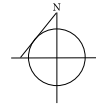
ビール瓶は底部側面にエンボスで「NIPPON BEER KOSEN Co. LTD」と刻されている。『日本麦酒鉾泉株式會社』のビール瓶である。瓶製造時の型枠の継ぎ目が縦位に走る。底の内壁は4mm~8mmと厚さが不均一で微妙に波打つ。色調は濃茶色。瓶口径2.6cm。内口径1.6cm。底径7.8cm。高さ29.0cm。重量は660g。最大容量650ml強(654mlほど)。今日でいう大瓶サイズ(633ml)であろう。

日本麦酒鉾泉株式會社は、愛知県を本拠として事業展開していた加富登^{かぶと}麦酒が1921(大正10)年に三ツ矢シャンペンサイダーの帝国鉾泉と製瓶会社の日本製壺を合併、さらに1925(大正14)年に横浜の金線飲料を併合し設立された企業である。ユニオンビールを主力商品としカプトビール、三ツ矢シャンペンサイダー、金線サイダーを製造販売したが、1933(昭和8)年に大日本麦酒株式會社に併合され消滅した。

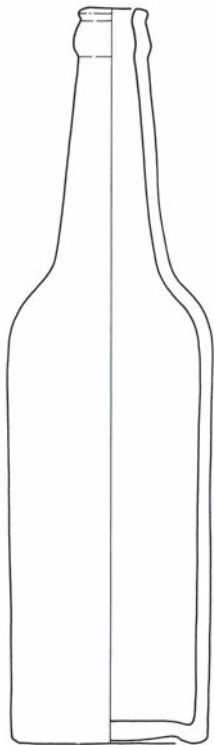
金線サイダーであるが、1899(明治32)年に瓶封入での製造販売が開始されており(王冠栓は1904年から)、販売期間は1933年までの34年間である。この期間中、1915(大正4)年に株式会社となつてから1925(大正14)年までの約10年間は底部側面に「金線飲料株式會社」の文字が陽刻され、1925(大正14)年に日本麦酒鉾泉株式會社に合併された後は、瓶にビール瓶同様「NIPPON BEER KOSEN Co. LTD」と刻された瓶で流通する。本遺跡で出土した瓶は底部側面に社名のエンボスが施されていない瓶であるため、1899(明治32)年から1915(大正4)年の16年間のうちに消費・廃棄されたものである可能性が高い。ビール瓶に関しては、日本麦酒鉾泉株式會社の存続期間である1925(大正14)年から1933(昭和8)年の約8年間のうちに消費・廃棄されたものと考えられる。

ほかに「MEIJISEIKA KAISHA」と陽刻された破碎瓶も出土している。(影浦)

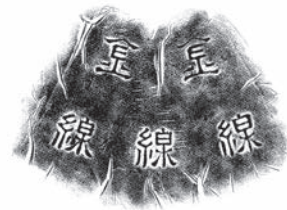
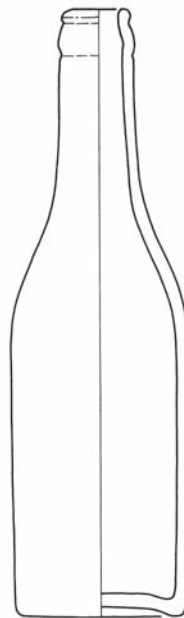
IP-100



ビール瓶



サイダー瓶



図IV-197 IP-100、サイダー瓶・ビール瓶

表IV-1 遺構一覽(1)

遺構名	掲載		検出位置		平面形	規模(m)					時期	備考 (方位等)
	挿図	写真 図版	発掘区	層位		検出面		底面		深さ		
						長径	短径	長径	短径			
V H-1 本体部	IV-1・2	2・3	i・j9・10	V層	楕円形	5.80	4.62	5.01	3.96	0.75	縄文早期後半	N-54°W、柱穴1基。
HP-1	IV-1・2	3-2	j10	V層	楕円形	0.17	0.17	—	—	0.48		
V H-2 本体部	IV-3	3	d17・18	V層	楕円形	(5.10)	(2.86)	(4.56)	(2.51)	(0.30)	縄文早期後半	
HF-1	IV-3	—	d17・18	V層	楕円形	0.32	0.16	—	—	0.06		
V H-3 本体部	IV-4	4	g・h11	V層	隅丸方形	3.31	3.22	2.81	2.56	0.30	縄文早期後半	N-3°E
HF-1	IV-4	4-2	g12	覆土	不整楕円形	0.41	0.23	—	—	0.04		
V P-1	IV-5・6	5	k5・6	V層	円形	2.02	1.96	2.12	1.66	0.44	縄文早期後半	
V P-2	IV-5・6	5	k4・5	V層	不整楕円形	2.04	1.42	1.74	1.32	0.52	縄文早期後半	
V P-3	IV-7	5	l4・5、m4	IV層直下	円形?	(4.60)	—	(3.20)	—	0.75	縄文早期後半	自然地形の可能性がある。
V P-4	IV-5	5	j4・5、k5・6	V層	不整円形	2.00?	1.88	1.74?	1.72	0.38	縄文早期後半	
V P-5	IV-5・6	5	k6	V層	不整円形?	1.98	—	1.80	—	0.54	縄文早期後半	
V P-6	IV-8	6	k5	V層	円形?	0.68	—	0.36	—	(0.20)	縄文早期後半	
V P-7	IV-8	6	k5・15	V層	楕円形?	1.78	—	1.60	—	(0.20)	縄文早期後半	
V P-8	IV-9	6	f・g8	V層	楕円形	2.05	1.66	1.50	1.20	0.32	縄文早期後半	
V P-9	IV-10	6	e9・10	V層	楕円形	0.48	0.37	0.30	0.24	0.10	縄文早期後半	
V P-10	IV-10	7	e9	V層	楕円形	(0.42)	0.40	(0.38)	0.37	0.22	縄文早期後半	
V P-11	IV-11	7	g8・9	V層	おおむね楕円形	1.54	(1.54)	0.59	0.46	0.42	縄文早期後半	中型礫複数。
V P-12	IV-11	7	e・f7	V層	おおむね円形	1.06	1.00	0.96	0.91	0.06	縄文早期後半	
V P-13	IV-12	7	e・f12	VI層	不整円形	1.21	1.19	0.77	0.61	0.26	縄文早期後半	
V P-14	IV-13	8	d・e17	VI層	楕円形	2.75	2.29	2.30	1.83	0.46	縄文早期後半	
V P-15	IV-13	8	e13	VI層	円形?	1.40?	1.20?	—	—	0.14	縄文早期後半	
V P-16	IV-14	8	f12	VI層	楕円形	(0.71)	0.57	(0.50)	0.50	0.14	縄文早期後半	
V P-17	IV-14	8	g11	V層	おおむね円形	1.16	1.12	0.80	0.72	0.28	縄文早期後半	
V P-18	IV-12	9	g・h10・11	V層	楕円形(卵形)	2.82	1.98	2.55	1.70	0.15	縄文早期後半	
V P-19	IV-14	9	f・g11	V層	おおむね楕円形	1.13	0.88	0.74	0.54	0.12	縄文早期後半	
V S-1	IV-15	9	f13	V層	拡散したまとまり	2.0	1.8	—	—	—	縄文早期後半	被熱礫の集石。
V F-1	IV-16	9	k13	VI層	楕円形	0.36	0.24	—	—	0.06	縄文早期後半	
V F-2	IV-16	9	f6	VI層	楕円形	0.45	0.30	—	—	0.08	縄文早期後半	
V F-3	IV-16	9	e・f8・9	V層	不整楕円形	(0.70)	0.59	—	—	0.05	縄文早期後半	
Ⅲ H-1 本体部	IV-59~63	17・18	g16~18・h16 ~18・il7	Ⅲ層	張り出し部を有する楕円形	(8.72)	7.20	(8.24)	6.56	0.32	縄文時代 下田ノ沢Ⅱ式期	
HF-1	IV-61・63	18-2	g・h17	Ⅳ~Ⅴ層	楕円形	2.00	0.77	—	—	0.23		
HP-1	IV-62	—	h17	Ⅴ層	円形	0.08	0.04	0.02	0.04	0.13		
HP-2	IV-62	—	h17	Ⅴ層	楕円形	0.10	0.08	0.02	0.02	0.08		
HP-3	IV-62	18-3	h17	Ⅴ層	不整円形	0.11	0.10	0.04	0.03	0.26		
HP-4	IV-62	—	h17	Ⅴ層	円形	0.11	0.11	0.04	0.03	0.17		
HP-5	IV-62	—	h17	Ⅴ層	不整円形	0.09	0.08	0.02	0.02	0.11		
HP-6	IV-62	—	h17	Ⅴ層	円形	0.19	0.19	0.10	0.09	0.23		
HP-7	IV-62	—	h17	Ⅴ層	楕円形	0.18	0.15	0.06	0.05	0.18		
HP-8	IV-62	—	h17	Ⅴ層	楕円形	0.06	0.05	0.01	0.01	0.13		
HP-9	IV-62	—	h17	Ⅴ層	楕円形	0.20	0.17	0.04	0.03	0.43		
HP-10	IV-62	—	h17	Ⅴ層	円形	0.12	0.11	0.09	0.08	0.18		
HP-11	IV-62	—	h17	Ⅴ層	楕円形	0.90	0.08	0.03	0.02	0.33		
HP-12	IV-61	—	h17	Ⅴ層	不整円形	0.22	0.20	0.05	0.05	0.26		
HP-13	IV-62	—	h17・18	Ⅴ層	円形	0.06	0.05	0.01	0.01	0.10		
HP-14	IV-61	—	h17	Ⅴ層	楕円形	0.23	0.17	0.07	0.07	0.38		
HP-15	IV-61	—	h17	Ⅴ層	不整円形	0.19	0.17	0.06	0.06	0.47		
HP-16	IV-61	—	h17	Ⅴ層	円形	0.16	0.16	0.10	0.09	0.27		
HP-17	IV-61	—	h17	Ⅴ層	円形	0.16	0.15	0.13	0.12	0.35		
HP-19	IV-61	—	g18	Ⅴ層	円形	0.13	0.12	0.03	0.03	0.27		
HP-20	IV-61	—	g17	Ⅴ層	円形	0.10	0.09	0.03	0.03	0.32		
HP-21	IV-61	—	g17	Ⅴ層	楕円形	0.22	0.18	0.08	0.06	0.59		
HP-22	IV-61	—	g17	Ⅴ層	不整楕円形	0.14	0.11	0.05	0.05	0.21		
HP-23	IV-62	—	h18	Ⅴ層	円形	0.08	0.07	0.04	0.03	0.23		
HP-24	IV-62	—	h18	Ⅴ層	不整円形	0.13	0.11	0.09	0.07	0.17		
HP-26	IV-61	—	h18	Ⅴ層	不整円形	0.13	0.11	0.09	0.08	0.10		
HP-27	IV-61	—	h18	Ⅴ層	不整楕円形	0.09	0.07	0.06	0.05	0.08		
HP-28	IV-61	—	g・h18	Ⅴ層	不整円形	0.21	0.19	0.13	0.13	0.12		
HP-29	IV-61	—	g18	Ⅴ層	不整円形	0.12	0.10	0.03	0.02	0.20		
HP-30	IV-61	—	g18	Ⅴ層	円形	0.10	0.09	0.07	0.06	0.10		
HP-31	IV-61	—	g18	Ⅴ層	円形	0.14	0.14	0.05	0.05	0.20		
HP-32	IV-61	—	g17	Ⅴ層	円形	0.08	0.08	0.02	0.02	0.27		
HP-33	IV-61	—	g17	Ⅴ層	楕円形	0.17	0.16	0.06	0.06	0.33		
HP-34	IV-61	—	g17	Ⅴ層	楕円形	0.09	0.08	0.04	0.04	0.04		
HP-35	IV-61	—	h17	Ⅴ層	楕円形	0.11	0.08	0.04	0.03	0.09		
HP-36	IV-61	—	g17	Ⅴ層	不整円形	0.10	0.09	0.03	0.02	0.11		
HP-37	IV-61	—	g17	Ⅴ層	楕円形	0.09	0.07	0.07	0.07	0.13		
HP-38	IV-61	—	g17	V層	楕円形	0.09	0.06	0.01	0.01	0.21		
HP-39	IV-61	—	g17	Ⅴ層	不整円形	0.07	0.07	0.02	0.01	0.09		
HP-40	IV-61	—	g17	Ⅴ層	不整円形	0.15	0.13	0.04	0.03	0.28		
HP-41	IV-61	—	g17	Ⅴ層	円形	0.16	0.15	0.11	0.10	0.30		
HP-42	IV-62	—	h17	Ⅴ層	楕円形	0.20	0.15	0.09	0.06	0.32		
HP-43	IV-62	—	h17	Ⅴ層	円形	0.14	0.13	0.07	0.05	0.12		
HP-44	IV-61	18-4	g17	Ⅴ層	不整円形	0.10	0.10	0.04	0.04	0.09		
HP-45	IV-61	—	g17	Ⅴ層	円形	0.10	0.09	0.04	0.03	0.10		
HP-46	IV-62	—	h17	Ⅴ層	円形	0.09	0.08	0.02	0.02	0.06		
HP-47	IV-62	—	h17	Ⅴ層	不整円形	0.20	0.17	0.10	0.09	0.08		
HP-48	IV-62	—	h17	Ⅴ層	楕円形	0.08	0.07	0.03	0.03	0.11		
HP-49	IV-62	—	h17	Ⅴ層	不整円形	0.07	0.06	0.02	0.02	0.07		
HP-50	IV-62	—	h17	Ⅴ層	不整円形	0.07	0.06	0.03	0.03	0.16		
HP-51	IV-62	—	h17	Ⅴ層	不整円形	0.09	0.08	0.05	0.04	0.09		
HP-52	IV-61	—	h17	Ⅴ層	円形	0.05	0.05	0.01	0.01	0.06		
HP-53	IV-61	—	h17	Ⅴ層	円形	0.07	0.07	0.05	0.04	0.14		
HP-54	IV-61	—	h17	Ⅴ層	円形	0.05	0.05	0.01	0.01	0.09		
HP-55	IV-61	—	h17	Ⅴ層	不整円形	0.10	0.09	0.03	0.03	0.21		
HP-56	IV-61	—	g17	Ⅴ層	円形	0.06	0.05	0.02	0.01	0.13		
HP-57	IV-61	—	g18	Ⅴ層	円形	0.06	0.05	0.01	0.01	0.11		
HP-58	IV-61	—	h18	Ⅴ層	不整円形	0.09	0.09	0.05	0.04	0.13		
HP-59	IV-61	—	h17	Ⅴ層	楕円形	0.08	0.07	0.02	0.01	0.30		
HP-60	IV-61	—	h17	Ⅴ層	不整円形	0.11	0.10	0.05	0.05	0.12		
HP-61	IV-61	—	g17	Ⅴ層	不整円形	0.07	0.06	0.01	0.01	0.08		
HP-62	IV-61	—	g17	Ⅴ層	不整円形	0.23	0.18	0.14	0.12	0.42		
HP-63	IV-61	—	g17	Ⅴ層	不整円形	0.19	0.15	0.08	0.07	0.37		
HP-64	IV-61	—	h17	Ⅴ層	楕円形	0.05	0.04	0.01	0.01	0.12		
HP-65	IV-61	—	g17	Ⅴ層	不整円形	0.15	0.12	0.08	0.07	0.23		
HP-66	IV-61	—	g18	Ⅴ層	円形	0.18	0.17	0.05	0.04	(0.21)		
HP-67	IV-61	—	g18	Ⅴ層	不整円形	0.27	0.23	0.08	0.07	(0.30)		
HP-68	IV-61	—	g17	Ⅴ層	不整楕円形	0.11	0.08	0.03	0.02	0.12		
HP-69	IV-61	—	g17	Ⅴ層	楕円形	0.10	0.07	0.02	0.02	0.06		
HP-70	IV-61	18-5	g17	Ⅴ層	不整楕円形	0.07	0.06	0.02	0.01	0.14		

表Ⅳ-2 遺構一覧(2)

遺構名	掲載		検出位置		平面形	規模 (m)					時期	備考 (方位等)	
	挿図	写真 図版	発掘区	層位		検出面		底面					
						長径	短径	長径	短径	深さ			
Ⅲ H-1	HP-71	IV-61	—	g17	Ⅴ層	楕円形	0.09	0.07	0.04	0.04	0.13	続縄文時代 下田ノ沢Ⅱ式期	
	HP-72	IV-62	—	il7	Ⅴ層	不整円形	0.10	0.09	0.03	0.03	0.30		
	HP-73	IV-62	—	il7	Ⅴ層	不整円形	0.08	0.07	0.04	0.04	0.30		
Ⅲ H-2	本体部	IV-147~151	40・41	b26~27、c26~27	Ⅳ層	隅丸方形	5.80	5.20	5.42	4.75	0.89	擦文文化期後期	
	HF-1	IV-148・149	—	c26	Ⅴ層	不整円形	0.36	0.34	—	—	0.05		
	HF-2A	IV-148・149	41-4	c26	Ⅴ層	円形	0.27	0.26	—	—	0.05		
	HF-2B	IV-148・149	41-4	c26	Ⅴ層	不整円形	0.29	0.20	—	—	0.08		
	HP-1	IV-148・149	41-5	c27	Ⅴ層	円形	0.16	0.16	0.04	0.04	0.13		
	HP-2	IV-148・149	—	c26	Ⅴ層	円形	0.19	0.18	0.08	0.07	0.19		
	HP-3	IV-148・149	—	c26	Ⅴ層	円形	0.17	0.16	0.07	0.07	0.22		
	HP-4	IV-148・149	—	b26	Ⅴ層	円形	0.14	0.12	0.05	0.04	0.08		
	HP-5	IV-148・149	—	b26	Ⅴ層	楕円形	0.33	0.26	0.12	0.10	0.09		
	HP-6	IV-148・149	—	b27	Ⅴ層	楕円形	0.09	0.08	0.02	0.02	0.27		
HP-7	IV-148・149	—	c26	Ⅴ層	不整円形	0.09	0.08	0.02	0.02	0.13			
HP-8	IV-148・149	—	c26	Ⅴ層	不整円形	0.08	0.07	0.02	0.01	0.14			
HP-9	IV-148・149	—	b26	Ⅴ層	不整円形	0.09	0.08	0.02	0.02	0.13			
HP-10	IV-148・149	—	b26	Ⅴ層	楕円形	0.15	0.11	0.03	0.02	0.20			
Ⅲ H-3	本体部	IV-152~156	42・43	b22~24、c22・23	Ⅲ層	隅丸方形?	(7.16)	(4.23)	(6.53)	(3.73)	0.80	擦文文化期後期	
	HF-1	IV-153・154	43-6	b23	Ⅴ層	楕円形	0.25	0.17	—	—	0.05		
	HP-1	IV-153・154	43-7	b23	Ⅴ層	楕円形	0.65	0.37	0.50	0.21	0.12		
	HP-2	IV-153・154	—	b・c23	Ⅴ層	不整楕円形	0.49	0.39	0.19	0.19	0.15		
	HP-3	IV-153・154	—	c23	Ⅴ層	不整円形	0.34	0.29	0.23	0.19	0.36		
	HP-4	IV-153・154	—	b23	Ⅴ層	不整円形	0.09	0.08	0.03	0.02	0.25		
	HP-5	IV-153・154	—	b23	Ⅴ層	円形	0.26	0.24	0.18	0.16	0.13		
	HP-6	IV-153・154	—	b23	Ⅴ層	不整円形	0.25	0.21	0.15	0.14	0.10		
	HP-7	IV-153・154	—	b23	Ⅴ層	円形	0.14	0.14	0.04	0.03	0.34		
	HP-8	IV-153・154	—	c23	Ⅴ層	円形	0.11	0.10	0.02	0.02	0.14		
	HP-9	IV-153・154	—	c23	Ⅴ層	円形	0.08	0.07	0.02	0.02	0.10		
HP-10	IV-153・154	—	c23	Ⅴ層	円形	0.06	0.05	0.02	0.02	0.06			
HP-11	IV-153・154	—	b22・23	V層	不整円形?	0.10	(0.05)	0.02	(0.02)	0.32			
Ⅲ H-4	本体部	IV-137~141	36・37	d・e20~22	Ⅲ層	隅丸方形	6.46	6.05	6.16	5.74	0.51	トビニタイ式期	
	HF-1	IV-138・139	37-1	d21	Ⅴ層	楕円形	0.67	0.45	—	—	0.05		
	HP-1	IV-138・139	37-2	d・e20	Ⅵ層	楕円形	1.46	0.45	1.32	0.34	0.17		
	HP-2	IV-138・139	—	d20	Ⅴ層	不整円形	0.07	0.06	0.03	0.02	0.09		
	HP-3	IV-138・139	37-4	d20	Ⅴ層	円形	0.09	0.09	0.02	0.02	0.17		
	HP-4	IV-138・139	—	d20	Ⅴ層	円形	0.06	0.05	0.02	0.02	0.22		
	HP-5	IV-138・139	—	d20	V層	円形	0.11	0.10	0.03	0.03	0.33		
	HP-6	IV-138・139	—	d20	V層	円形	0.10	0.10	0.04	0.02	0.23		
	HP-7	IV-138・139	—	d20	V層	円形	0.11	0.11	0.03	0.03	0.27		
	HP-8	IV-138・139	—	d20	V層	円形	0.11	0.10	0.03	0.03	0.25		
	HP-9	IV-138・139	—	e21	Ⅴ層	円形	0.08	0.07	0.02	0.02	0.14		
	HP-10	IV-138・139	—	e21	Ⅵ層	円形	0.09	0.08	0.02	0.02	0.14		
	HP-11	IV-138・139	—	e21	V層	楕円形	0.17	0.09	0.08	0.04	0.24		
	HP-12	IV-138・139	—	e21・22	Ⅵ層	不整円形	0.09	0.08	0.03	0.02	0.23		
	HP-13	IV-138・139	—	e22	Ⅵ層	円形	0.09	0.08	0.02	0.02	0.21		
	HP-14	IV-138・139	—	d21	Ⅴ層	円形	0.12	0.12	0.03	0.03	0.14		
	HP-15	IV-138・139	—	d21・22	Ⅴ層	楕円形	0.17	0.09	0.08	0.03	0.11		
	HP-16	IV-138・139	37-5	d22	Ⅴ層	円形	0.10	0.09	0.03	0.02	0.21		
	HP-17	IV-138・139	—	d21・22	Ⅴ層	円形	0.09	0.09	0.02	0.02	0.15		
	HP-18	IV-138・139	—	d21	Ⅴ層	円形	0.08	0.07	0.03	0.03	0.20		
	HP-19	IV-138・139	—	d21	Ⅴ層	不整円形	0.12	0.10	0.02	0.02	0.26		
	HP-20	IV-138・139	—	d21	Ⅴ層	楕円形?	(0.98)	(0.71)	(0.74)	(0.47)	0.21		
	HP-21	IV-138・139	—	d21	Ⅴ層	円形	0.15	0.14	0.08	0.06	0.24		
HP-22	IV-138・139	—	d21	Ⅴ層	円形	0.10	0.08	0.03	0.03	0.15			
HP-23	IV-138・139	—	d20	Ⅴ層	円形	0.11	0.11	0.03	0.02	0.27			
Ⅲ H-5	本体部	IV-142~146	38・39	d15~17、e15・16	Ⅲ層	隅丸方形?	6.65	(2.90)	6.12	(2.68)	0.51	トビニタイ式期	
	HP-1	IV-143・144	—	d16	Ⅴ層	円形	0.11	0.09	0.03	0.02	0.10		
	HP-2	IV-143・144	—	d16	Ⅴ層	円形	0.13	0.13	0.04	0.04	0.28		
	HP-3	IV-143・144	—	d16	Ⅴ層	不整円形	0.12	0.11	0.04	0.03	0.34		
	HP-4	IV-143・144	39-5	d17	Ⅴ層	不整円形	0.10	0.08	0.03	0.02	0.36		
	HP-5	IV-143・144	—	d16	Ⅴ層	円形	0.10	0.09	0.03	0.02	0.18		
	HP-6	IV-143・144	—	d17	Ⅴ層	不整円形	0.11	0.10	0.02	0.02	0.36		
	HP-7	IV-143・144	—	d17	Ⅴ層	円形	0.12	0.12	0.03	0.02	0.39		
	HP-8	IV-143・144	—	d16	Ⅴ層	円形	0.07	0.07	0.02	0.02	0.23		
	HP-9	IV-143・144	—	d16	Ⅴ層	楕円形	0.09	0.08	0.03	0.02	(0.32)		
	HP-10	IV-143・144	—	d16	Ⅴ層	円形	0.09	0.08	0.02	0.02	0.38		
	HP-11	IV-143・144	—	d16	Ⅴ層	円形	0.10	0.09	0.02	0.02	0.44		
	HP-12	IV-143・144	—	d16	Ⅴ層	円形	0.07	0.07	0.02	0.02	0.33		
	HP-13	IV-143・144	—	d16	Ⅴ層	円形	0.08	0.07	0.03	0.02	(0.39)		
	HP-14	IV-143・144	—	d15	Ⅴ層	円形	0.11	0.10	0.03	0.03	0.18		
	HP-15	IV-143・144	—	e15	Ⅴ層	円形	0.11	0.10	0.03	0.03	0.40		
	HP-16	IV-143・144	—	d15	Ⅴ層	円形	0.15	0.14	0.04	0.04	0.30		
	HP-17	IV-143・144	—	d15・16	Ⅴ層	円形	0.17	0.15	0.12	0.11	0.24		
	HP-18	IV-143・144	—	d15	Ⅴ層	楕円形	0.08	0.07	0.03	0.03	0.19		
	HP-19	IV-143・144	—	d15	Ⅴ層	不整円形	0.12	0.11	0.04	0.03	0.32		
	HP-20	IV-143・144	39-6	d15	Ⅴ層	円形	0.09	0.09	0.02	0.02	0.26		
	HP-21	IV-143・144	—	d15	Ⅴ層	不整円形	0.12	0.11	0.03	0.03	0.29		
	HP-22	IV-143・144	39-7	d15	Ⅵ層	円形	0.09	0.08	0.02	0.22	0.31		
	HP-23	IV-143・144	—	d16	Ⅴ層	円形	0.06	0.06	0.02	0.02	0.21		
	HP-24	IV-143・144	—	d15	Ⅴ層	不整円形	0.07	0.06	0.02	0.01	0.21		
	HP-25	IV-143・144	—	d15	Ⅴ層	円形	0.08	0.07	0.02	0.02	0.19		
	HP-26	IV-143・144	—	d15	Ⅴ層	円形	0.07	0.06	0.02	0.01	0.16		
	HP-27	IV-143・144	—	e16	Ⅴ層	円形	0.06	0.06	0.02	0.01	0.12		
	HP-28	IV-143・144	—	e16	Ⅴ層	円形	0.07	0.06	0.01	0.01	0.16		
	HP-29	IV-143・144	—	e16	Ⅴ層	楕円形	0.09	0.06	0.01	0.01	0.15		
	HP-30	IV-143・144	—	e16	Ⅴ層	楕円形	0.09	0.04	0.02	0.01	0.25		
	HP-31	IV-143・144	—	d・e16	Ⅴ層	楕円形	0.05	0.04	0.01	0.01	0.22		
	HP-32	IV-143・144	—	d16	Ⅴ層	楕円形	0.08	0.06	0.01	0.01	0.27		
	HP-33	IV-143・144	—	d15	Ⅴ層	円形	0.06	0.05	0.01	0.01	0.09		
HP-34	IV-143・144	—	e15	Ⅴ層	円形	0.12	0.11	0.07	0.06	0.06			
Ⅲ H-6	本体部	IV-66~69	19	g13・14、h13・14	Ⅲ層	不整方形	7.16	7.04	7.02	6.76	0.68	続縄文時代 下田ノ沢Ⅱ式期	壁が張り出す。
	HF-1	IV-66・67	19-3	g・h13	Ⅴ層	不整楕円形	1.00	0.60	—	—	0.11		
	HP-1	IV-66・68	19-5	g13	Ⅴ層	不整円形	0.14	0.13	0.06	0.06	0.23		
	HP-2	IV-66・68	—	g14	Ⅴ層	不整円形	0.14	0.11	0.07	0.07	0.12		
	HP-3	IV-66・68	—	g14	Ⅴ層	円形	0.14	0.13	0.10	0.09	0.30		
	HP-4	IV-66・68	—	g14	Ⅴ層	円形	0.19	0.18	0.09	0.08	0.23		
	HP-5	IV-66・68	—	h14	Ⅴ層	円形	0.16	0.16	0.07	0.06	0.34		
	HP-6	IV-66・68	—	h13	Ⅴ層	円形	0.13	0.12	0.08	0.06	0.29		
HP-7	IV-66・68	—	g13	Ⅴ層	不整円形	0.20	0.19	0.10	0.09	0.21			
HP-8	IV-66・68	—	g13・14	Ⅴ層	楕円形	0.16	0.12	0.11	0.09	0.33			

表IV-3 遺構一覽(3)

遺構名	掲載		検出位置		平面形	規模(m)					時期	備考 (方位等)				
	挿図	写真 図版	発掘区	層位		検出面		底面		深さ						
						長径	短径	長径	短径							
ⅢH-6	HP-9	IV-66・68	—	g13	Ⅵ層	円形	0.06	0.05	0.02	0.02	0.11	続縄文時代 下田ノ沢Ⅱ式期				
	HP-10	IV-66・68	—	g13	Ⅵ層	円形	0.08	0.07	0.01	0.01	0.09					
	HP-11	IV-66・68	—	g14	Ⅵ層	不整形円形	0.22	0.21	0.12	0.11	0.18					
	HP-12	IV-66・68	—	g14	Ⅵ層	楕円形	0.09	0.08	0.03	0.03	0.24					
	HP-13	IV-66・68	—	h13	Ⅵ層	楕円形	0.07	0.05	0.02	0.02	0.17					
ⅢH-7	HP-14	IV-66・68	—	h13	Ⅵ層	楕円形	0.06	0.05	0.02	0.02	0.15	続縄文時代後期初頭 北筒Ⅲ～Ⅴ式期	N-73°E 袋状土坑。 袋状土坑。 袋状土坑内杭穴。 袋状土坑内杭穴。 袋状土坑。 土坑。			
	本体部	IV-34・36	11・12	e・f8～10	Ⅲ層	楕円形	6.12	4.68	4.60	4.08	0.74					
	HF-1	IV-34・35	12-1	f9	Ⅵ層	楕円形	0.44	0.29	—	—	0.08					
	HF-2	IV-34・35	12-2	f9	V層	不整形楕円形	0.54	0.16	—	—	0.04					
	HP-1	IV-34・36	12-3	e8・9	Ⅵ層	楕円形	0.94	0.69	0.83	0.64	0.68					
	HP-2	IV-34・36	12-4	f9	Ⅳ層	楕円形	0.92	0.80	0.97	0.71	0.31					
	HP-2P-1	IV-34・36	—	f9	Ⅵ層	円形	0.06	0.05	—	—	0.17					
	HP-2P-2	IV-34・36	—	f9	Ⅵ層	円形	0.04	0.04	—	—	0.13					
	HP-3	IV-34・36	12-5	f9	Ⅵ層	楕円形	0.92	0.59	1.07	0.72	0.65					
	HP-4	IV-34・36	—	e9	Ⅵ層	円形	0.41	0.38	0.30	0.28	0.14					
	HP-5	IV-34・36	—	e9	Ⅵ層	円形	0.11	0.10	—	—	0.24					
	HP-6	IV-34・36	—	e9	Ⅵ層	円形	0.08	0.07	—	—	0.22					
	HP-7	IV-34・36	—	e9	Ⅵ層	円形	0.12	0.10	—	—	0.38					
	HP-8	IV-34・36	—	e9	Ⅵ層	円形	0.07	0.07	—	—	0.16					
	HP-9	IV-34・36	—	e9	Ⅵ層	円形	0.08	0.08	0.06	0.06	0.23					
	HP-10	IV-34・36	—	e9	Ⅵ層	円形	0.10	0.08	—	—	0.20					
	HP-11	IV-34・36	12-6	e9	Ⅵ層	円形	0.06	0.05	—	—	0.17					
	HP-12	IV-34・36	12-6	e10	Ⅵ層	円形	0.06	0.06	—	—	0.19					
	HP-13	IV-34・36	—	f9・10	Ⅵ層	不整形楕円形	0.18	0.14	0.06	0.06	0.32					
	HP-14	IV-34・36	—	f9	Ⅵ層	円形	0.14	0.13	0.07	0.07	0.38					
	ⅢH-8	HP-15	IV-34・36	—	f9	Ⅵ層	円形	0.09	0.08	0.04	0.04			0.22	続縄文時代後期初頭 北筒Ⅲ～Ⅴ式期	
		HP-16	IV-34・36	—	f9	Ⅵ層	円形	0.08	0.07	—	—			0.25		
HP-17		IV-34・36	—	f9	Ⅵ層	円形	0.09	0.08	—	—	0.10					
HP-18		IV-34・36	—	f9	Ⅵ層	円形	0.09	0.07	—	—	0.15					
HP-19		IV-34・36	—	f9	Ⅵ層	円形	0.22	0.20	0.10	0.10	0.10					
HP-20		IV-34・36	—	f8	Ⅳ層	不整形楕円形	0.23	0.15	0.12	0.06	0.04					
HP-21		IV-34・36	—	f8	Ⅳ層	円形	0.22	0.20	0.10	0.10	0.08					
HP-22		IV-34・36	—	f8	Ⅳ層	円形	0.20	0.20	0.11	0.11	0.10					
ⅢH-8		本体部	IV-37～39	13	g・h・i 8～10	Ⅲ層	不整形楕円形	6.36	4.98	5.20	3.18	0.64	続縄文時代後期初頭 北筒Ⅲ式	N-55°W		
ⅢH-9		HP-1	IV-108～110	27～29	e・f10～12, g11	Ⅲ層	おおむね方形	(5.62)	5.24	(5.05)	4.70	0.22	続縄文時代後期前葉～ トビニタイ式期	N-12°W		
		HP-2	IV-109～110	28-5	f11	ⅢH-14覆土	楕円形	0.81	0.52	—	—	0.12				
		HP-3	IV-109～110	—	f11	ⅢH-14覆土	不整形楕円形	0.56	0.35	—	—	0.06				
		HP-4	IV-109～110	—	f11	ⅢH-14覆土	不整形楕円形	0.31	0.25	—	—	0.05				
	HP-1	IV-109～110	28-6	f11	ⅢH-14覆土	おおむね円形	0.57	0.52	—	—	0.10					
	HP-2	IV-110	—	f11	ⅢH-14覆土	円形	0.08	0.08	—	—	0.35					
	HP-2	IV-110	—	f11	ⅢH-14覆土	円形	0.07	0.06	—	—	0.20					
	HS-1	IV-109	28-1	f11・12	ⅢH-14覆土	不整形楕円形	0.66	0.64	—	—	—					
	HS-2	IV-109	28-2	f11	ⅢH-14覆土	楕円形	0.78	0.74	—	—	—					
	HS-3	IV-109	28-3	e・f11	ⅢH-14覆土	不整形楕円形	0.74	0.70	—	—	—					
	HS-4	IV-109	28-4	f11・12	ⅢH-14覆土	楕円形	0.50	0.42	—	—	—					
	HC-1	IV-110	28-7	f11	ⅢH-14覆土	不整形	1.05	0.70	—	—	—					
	HC-2	IV-110	—	f11	ⅢH-14覆土	不整形	1.57	0.84	—	—	—					
	HC-3	IV-110	28-8	f11・12	ⅢH-14覆土	不整形	1.70	0.68	—	—	—					
	HC-4	IV-110	—	f12	ⅢH-14覆土	不整形	0.36	0.20	—	—	—					
	ⅢH-10	本体部	IV-70～72	20	e14・15, f14・15	Ⅲ層	不整形楕円形	(6.94)	5.70	(6.10)	5.10	0.34			続縄文時代 下田ノ沢Ⅱ式期	
		HP-1	IV-70～71	20-5	e14・15, f14・15	V層	不整形楕円形	1.11	0.84	—	—	0.04				
HP-1		IV-70～72	—	e15	Ⅳ層	不整形円形	0.14	0.13	0.04	0.04	0.39					
HP-2		IV-70～72	—	e15	Ⅳ層	楕円形	0.30	0.23	0.13	0.11	0.10					
HP-3		IV-70～72	—	e15	Ⅳ層	不整形円形	0.10	0.09	0.05	0.04	0.08					
HP-4		IV-70～72	—	e14	Ⅳ層	円形	0.11	0.10	0.08	0.07	0.07					
HP-5		IV-70～72	—	e14	Ⅳ層	円形	0.20	0.18	0.14	0.13	0.08					
HP-6		IV-70～72	—	e14	Ⅳ層	不整形円形	0.31	0.31	0.23	0.21	0.15					
HP-7		IV-70～72	—	f14	Ⅳ層	楕円形	0.20	0.16	0.13	0.11	0.08					
HP-8		IV-70～72	—	f14	Ⅳ層	不整形楕円形	0.13	0.10	0.10	0.09	0.16					
HP-9		IV-70～72	—	f14	Ⅳ層	楕円形	0.26	0.18	0.12	0.09	0.65					
HP-10		IV-70～72	—	f14	Ⅳ層	楕円形	0.20	0.17	0.12	0.08	0.42					
HP-11		IV-70～72	20-7	f15	Ⅳ層	不整形円形	0.10	0.08	0.06	0.06	0.21					
HP-12		IV-70～72	—	f15	Ⅳ層	不整形円形	0.29	0.26	0.18	0.14	0.36					
HP-13		IV-70～72	—	f14	Ⅳ層	不整形楕円形	0.17	0.10	0.11	0.08	0.23					
HP-14		IV-70～72	—	f14	Ⅳ層	不整形楕円形	0.19	0.14	0.06	0.06	0.42					
HP-15		IV-70～72	—	e15	Ⅳ層	円形	0.19	0.18	0.10	0.08	0.19					
HP-16		IV-70～72	—	e14	Ⅳ層	楕円形	0.15	0.12	0.06	0.06	0.25					
HP-17		IV-70～72	—	f14	Ⅳ層	不整形円形	0.18	0.16	0.10	0.08	0.32					
HP-18		IV-70～72	20-8	f14	Ⅳ層	不整形円形	0.08	0.07	0.06	0.05	0.16					
HP-19		IV-70～72	—	f14	Ⅳ層	不整形円形	0.18	0.17	0.15	0.14	0.10					
HP-20		IV-70～72	—	f14	Ⅳ層	不整形円形	0.13	0.11	0.07	0.06	0.06					
HP-21		IV-70～72	—	f14	Ⅳ層	不整形円形	0.09	0.08	0.05	0.04	0.05					
HP-22		IV-70～72	—	f15	Ⅳ層	不整形円形	0.19	0.17	0.10	0.08	0.30					
HP-23		IV-70～72	—	e・f14	Ⅳ層	不整形円形	0.29	0.26	0.15	0.13	0.54					
HP-24	IV-70～72	—	f15	Ⅳ層	不整形円形	0.14	0.13	0.06	0.06	0.29						
HP-25	IV-70～72	—	f14	Ⅳ層	不整形円形	0.12	0.10	0.06	0.05	0.16						
ⅢH-11	本体部	IV-73・74	21	g15・16, h15・16	V・Ⅵ層	不整形楕円形	(4.42)	3.04	(4.24)	2.74	0.63	続縄文時代 下田ノ沢Ⅱ式期				
	HP-1	IV-73・74	21-3	h16	Ⅵ層	円形	0.43	0.41	—	—	0.03					
	HP-1	IV-73・74	—	h16	Ⅵ層	不整形楕円形	0.09	0.07	0.04	0.04	0.21					
	HP-2	IV-73・74	—	h16	Ⅵ層	円形	0.11	0.10	0.07	0.06	0.19					
	HP-3	IV-73・74	—	h16	Ⅵ層	不整形円形	0.17	0.14	0.09	0.09	0.06					
	HP-4	IV-73・74	—	h16	Ⅵ層	楕円形	0.17	0.12	0.06	0.05	0.25					
	HP-5	IV-73・74	—	h16	Ⅵ層	円形	0.10	0.09	0.02	0.02	0.19					
	HP-6	IV-73・74	21-6	h16	Ⅵ層	不整形円形	0.08	0.08	0.03	0.03	—					
	HP-7	IV-73・74	—	h16	Ⅵ層	楕円形	0.12	0.10	0.06	0.05	0.11					
	HP-8	IV-73・74	—	h16	Ⅵ層	不整形円形	0.14	0.13	0.05	0.05	0.15					
ⅢH-12	HP-9	IV-73・74	—	h16	Ⅵ層	不整形円形	1.40	1.24	0.76	0.18	0.28	続縄文時代 下田ノ沢Ⅱ式期	旧付属遺構1。			
	本体部	IV-75～77	22	d18・19, e18・19	Ⅲ層	円形	6.19	(4.28)	5.17	(4.08)	0.89					
	HP-1	IV-76～77	22-1	e18	Ⅳ層	隅丸長方形?	0.87	0.52	—	—	0.15					
	HP-2	IV-76～77	22-8	e18	Ⅳ層	不整形円形?	0.25	(0.15)	—	—	0.04					
	HP-1	IV-76～77	—	e18	Ⅳ層	不整形円形	0.12	0.12	0.04	0.03	0.17					
	HP-2	IV-76～77	—	e18	Ⅳ層	不整形円形	(0.12)	(0.12)	0.03	0.03	0.35					
	HP-3	IV-76～77	—	e18	Ⅳ層	不整形円形	0.18	(0.15)	0.05	0.04	(0.38)					
	HP-4	IV-76～77	—	e19	Ⅳ層	不整形円形	0.18	0.16	0.07	0.06	0.15					
	HP-5	IV-76～77	—	e19	Ⅳ層	円形	0.10	0.10	0.03	0.02	0.11					
	HP-6	IV-76～77	—	e19	Ⅳ層	円形	0.09	0.09	0.03	0.03	0.12					
	HP-7	IV-76～77	—	e19	Ⅳ層	円形	0.08	0.08	0.02	0.02	0.09					
HP-8	IV-76～77	—	e19	Ⅳ層	円形	0.10	0.10	0.04	0.04	0.08						
HP-9	IV-76～77	—	e18	Ⅳ層	円形	0.08	0.08	0.02	0.02	0.10						
HP-10	IV-76～77	—	e18	Ⅳ層	円形	0.08	0.07	0.03	0.02	0.14						

表Ⅳ-4 遺構一覽(4)

遺構名	掲載		検出位置		平面形	規模 (m)					時期	備考 (方位等)	
	挿図	写真 図版	発掘区	層位		検出面		底面					
						長径	短径	長径	短径	深さ			
ⅢH-12	HP-11	IV-76・77	22-2	e19	Ⅳ層	円形	0.32	0.31	0.27	0.24	0.08	縄文時代 下田ノ沢Ⅱ式期	
	HP-12	IV-76・77	—	e18	Ⅴ層	円形	0.11	0.11	0.05	0.04	0.18		
	HP-13	IV-76・77	—	e19	Ⅳ層	不整形円形	0.14	0.13	0.03	0.03	0.30		
	HP-14	IV-76・77	—	e18	Ⅵ層	円形	0.09	0.09	0.03	0.03	0.15		
	HP-15	IV-76・77	—	e19	Ⅳ層	円形	0.33	0.31	0.26	0.24	0.06		
ⅢH-13	本体部	IV-31~33	10	d12~15、e13~15	Ⅲ層	不明	(11.8?)	(6.0?)	—	—	0.33	縄文時代中期末 北筒Ⅱ式期	
	HP-1	IV-32・33	10-3	e14・15	Ⅳ層	不整形円形	0.53	0.51	—	—	0.14		
	HP-1	IV-31・32	10-2	d15	Ⅳ層	円形	0.15	0.13	0.08	0.06	0.11		
	HP-2	IV-31・32	—	d15	Ⅳ層	不整形円形	0.22	0.16	0.10	0.08	0.39		
	HP-3	IV-31・32	—	d15	Ⅳ層	不整形円形	0.11	0.10	0.06	0.05	0.10		
	HP-4	IV-31・32	—	e15	Ⅳ層	不整形円形	0.23	0.20	0.08	0.08	0.10		
	HP-5	IV-31・32	—	e15	Ⅳ層	不整形円形	0.21	0.16	0.09	0.08	0.18		
	HP-6	IV-31・32	—	e15	Ⅳ層	不整形円形	0.12	0.10	0.06	0.04	0.11		
	HP-7	IV-31・32	—	e14	Ⅳ層	不整形円形	0.23	0.19	0.06	0.05	0.08		
	HP-8	IV-31・32	—	d15	Ⅳ層	不整形円形	0.09	0.07	0.05	0.03	0.10		
	HP-9	IV-31・32	—	d15	Ⅳ層	不整形円形	0.10	0.09	0.04	0.03	0.07		
	HP-10	IV-31・32	10-4	d15	Ⅳ層	不整形円形	0.11	0.08	0.06	0.05	0.32		
	HP-11	IV-31・32	—	e14	Ⅳ層	不整形円形	0.29	0.23	0.16	0.14	0.11		
	HP-12	IV-31・32	—	d15	Ⅳ層	円形	0.12	0.12	0.07	0.05	0.16		
	HP-13	IV-31・32	10-5	d13	Ⅳ層	楕円形	0.19	0.14	0.07	0.07	0.14		
HP-14	IV-31・32	—	d13	Ⅳ層	不整形円形	0.26	0.23	0.12	0.10	0.52			
HP-15	IV-31~33	—	e14・15	Ⅳ層	不整形円形	1.56	1.24	0.80	0.40	0.21	旧付属遺構1。		
ⅢH-14	本体部	IV-111~114	29・30	e11・12、 f・g10~12	Ⅲ層	おおもむ楕円形	9.83	7.58	8.28	8.00	0.42	縄文時代後期	N-10°W
	HF-1	IV-112・113	30-1	f11	ⅢH-15覆土	不整形円形	0.86	0.43	—	—	0.05		
	HF-2	IV-112・113	30-2	f11	ⅢH-15覆土	不整形円形	0.64	0.43	—	—	0.04		
	HF-3	IV-112・113	30-3	g11・12	ⅢH-15覆土	不整形円形	0.42	0.28	—	—	0.04		
	HF-4	IV-112・113	—	g12	ⅢH-15覆土	不整形円形	0.25	0.22	—	—	0.05		
	HF-5	IV-112・113	30-4	g12	ⅢH-15覆土	不整形楕円形	0.32	0.23	—	—	0.04		
	HP-1	IV-112・114	30-5	f12	Ⅳ層	円形	0.13	0.11	0.06	0.06	0.31		
	HP-2	IV-112・114	—	f12	Ⅳ層	円形	0.10	0.09	—	—	0.21		
	HP-3	IV-112・114	—	f12	Ⅳ層	円形	0.10	0.10	—	—	0.16		
	HP-4	IV-112・114	—	f12	Ⅳ層	円形	0.10	0.08	—	—	0.34		
	HP-5	IV-112・114	—	f12	Ⅳ層	円形	0.09	0.08	—	—	0.13		
	HP-6	IV-112・114	—	f12	Ⅳ層	円形	0.11	0.09	—	—	0.41		
	HP-7	IV-112・114	—	f11	Ⅳ層	円形	0.08	0.08	—	—	0.16		
	HP-8	IV-112・114	—	e11	Ⅳ層	円形	0.09	0.08	—	—	0.14		
	HP-9	IV-112・114	—	e11	Ⅳ層	円形	0.16	0.18	—	—	0.24		
	HP-10	IV-112・114	—	e・f11	Ⅳ層	円形	0.10	0.09	—	—	0.16		
	HP-11	IV-112・114	—	e11	Ⅳ層	円形	0.08	0.07	—	—	0.25		
	HP-12	IV-112・114	—	f11	Ⅳ層	円形	0.10	0.09	—	—	0.25		
	HP-13	IV-112・114	—	f11	Ⅳ層	円形	0.13	0.11	—	—	0.50		
	HP-14	IV-112・114	30-6	f11	ⅢH-15覆土	円形	0.11	0.11	—	—	0.48		
	HP-15	IV-112・114	—	f11	ⅢH-15覆土	円形	0.08	0.07	—	—	0.12		
	HP-16	IV-112・114	30-7	f11	Ⅳ層	円形	0.11	0.10	—	—	0.52		
	HP-17	IV-112・114	—	f11	Ⅳ層	円形	0.11	0.10	—	—	0.18		
	HP-18	IV-112・114	—	f11	ⅢH-15覆土	円形	0.08	0.06	—	—	0.13		
	HP-19	IV-112・114	—	f・g11	ⅢH-15覆土	円形	0.12	0.11	—	—	0.22		
	HP-20	IV-112・114	—	g11	ⅢH-15覆土	円形	0.10	0.09	—	—	0.30		
	HP-21	IV-112・114	—	f12	Ⅳ層	円形	0.08	0.07	—	—	0.19		
	HP-22	IV-112・114	—	f・g12	Ⅳ層	円形	0.08	0.07	—	—	0.20		
	HP-23	IV-112・114	—	f12	Ⅳ層	円形	0.07	0.07	—	—	0.18		
	HC-1	IV-111	—	f11	ⅢH-15覆土	不整形円形	0.15	0.05	—	—	—		
	HC-1	IV-111	—	f11	ⅢH-15覆土	不整形	0.40	0.30	—	—	—		
	HC-2	IV-111	—	f11	ⅢH-15覆土	不整形	0.76	0.62	—	—	—		
	HC-3	IV-111	—	f12	ⅢH-15覆土	不整形	0.74	0.45	—	—	—		
ⅢH-15	本体部	IV-115~118	31・32	f・g・h11・12	Ⅲ層	楕円形	7.94	6.45	7.49	5.88	0.55	縄文時代前期 温根沼式期	N-33°W
	HF-1	IV-115・117	31-4	f11	覆土	楕円形	0.32	0.24	—	—	0.05		
	HF-2	IV-115・117	31-6	g11	覆土	楕円形	0.80	0.78	—	—	0.04		
	HF-3	IV-116・117	31-5	g11・12	Ⅳ層	楕円形	0.75	0.60	—	—	0.08		
	HP-1	IV-116・118	32-1・2	g12	Ⅳ層	円形	1.03	(1.02)	0.74	0.64	0.14		
	HP-2	IV-116・118	32-3	g12	Ⅴ層	円形	0.68	0.52	0.59	0.43	0.06		
	HP-3	IV-116・118	—	f12	Ⅳ層	円形	0.15	0.15	—	—	0.33		
	HP-4	IV-116・118	—	f12	Ⅴ層	円形	0.11	0.10	—	—	0.22		
	HP-5	IV-116・118	—	f11	Ⅴ層	円形	0.13	0.12	—	—	0.26		
	HP-6	IV-116・118	—	f11	Ⅴ層	円形	0.18	0.17	—	—	0.32		
	HP-7	IV-116・118	—	g11	Ⅳ層	円形	0.08	0.08	—	—	0.30		
	HP-8	IV-116・118	—	g11	Ⅳ層	円形	0.12	0.12	0.04	0.04	0.25		
	HP-9	IV-116・118	—	g11	Ⅳ層	円形	0.08	0.07	—	—	0.09		
	HP-10	IV-116・118	—	g12	Ⅳ層	円形	0.09	0.08	—	—	0.10		
HP-11	IV-116・118	—	g12	Ⅴ層	円形	0.10	0.09	—	—	0.24			
HP-12	IV-116・118	32-4	f11	Ⅴ層	円形	0.08	0.07	—	—	0.17			
HP-13	IV-116・118	32-4	f11	Ⅴ層	円形	0.09	0.08	—	—	0.26			
HP-14	IV-116・118	—	f11	Ⅴ層	円形	0.10	0.09	—	—	0.37			
ⅢH-16	本体部	IV-78	23	h18・19、i18・19	Ⅲ層	不整形円形	3.36	2.48	3.16	2.24	0.59	縄文時代 下田ノ沢Ⅰ式期	旧ⅢP-4。
	HF-1	IV-78	23-2	h18・19	Ⅴ層	不整形円形	0.80	0.48	—	—	0.08		
	HP-1	IV-78	—	h18	Ⅴ層	楕円形	0.10	0.08	0.09	0.03	0.19		
	HP-2	IV-78	—	i19	Ⅴ層	不整形円形	0.26	0.19	0.08	0.08	0.13		
	HP-3	IV-78	—	h18・19	Ⅴ層	不整形円形	0.06	0.05	0.02	0.02	0.22		
ⅢP-1	IV-79	23	i18	Ⅲ層	隅丸四角形	2.50	2.04	2.14	1.67	0.23	縄文時代下田ノ沢Ⅰ式期		
ⅢP-2	IV-80	23・24	h・i15・16	Ⅳ層	楕円形	1.94	1.64	1.88	1.60	0.65	縄文時代下田ノ沢Ⅰ式期		
ⅢP-3	IV-79	24	h・i14・15	Ⅳ層	楕円形?	(1.65)	(1.40)	(1.55)	(1.40)	0.55	縄文時代下田ノ沢Ⅰ式期		
ⅢP-6	IV-81	24	i19	Ⅲ層	楕円形	2.64	1.62	2.40	1.20	0.44	縄文時代下田ノ沢Ⅰ式期		
ⅢP-7	IV-81	24	i19	Ⅲ層	円形	—	1.70	—	1.38	0.41	縄文時代下田ノ沢Ⅰ式期		
ⅢP-8	IV-81	24	i19	Ⅲ層	不整形円形?	1.84	—	1.56	—	0.38	縄文時代下田ノ沢Ⅰ式期		
ⅢP-9	IV-40	14-1・2	g・h5	Ⅳ層	楕円形	0.79	0.60	0.53	0.34	0.38	縄文時代中期末~後期		
ⅢP-10	IV-82	25	i10	Ⅳ層	不整形円形	1.02	0.89	0.73	0.63	0.41	縄文時代下田ノ沢Ⅱ式期		
ⅢP-11	IV-82	25	h16	Ⅳ層	楕円形	2.33	1.78	1.80	1.35	(0.15)	縄文時代下田ノ沢Ⅰ式期		
ⅢP-12	IV-83・84	25	g19・20、h19・20	Ⅲ層	不整形円形?	3.94	3.86	3.02	2.32	1.04	縄文時代下田ノ沢Ⅰ式期		
ⅢP-13	IV-40・41	14	h・f12・13	Ⅳ層	楕円形	4.00	(2.94)	3.35	(1.94)	0.70	縄文時代後期初頭北筒Ⅲ式		
ⅢP-14	IV-85	26	h15	Ⅲ層	楕円形	1.10	1.00	0.84	0.84	0.68	縄文時代下田ノ沢Ⅰ式期		
ⅢP-15	IV-40・41	14-7・8	i12・13	Ⅳ層	不整形楕円形	1.58	(1.35)	1.28	0.86	0.46	縄文後期初頭		
ⅢP-16	IV-86	26	e17・18、f17・18	Ⅲ層	隅丸四角形	2.22	2.04	1.52	1.32	0.54	縄文時代下田ノ沢Ⅱ式期		
ⅢP-17	PF-1	IV-42	15	f・g10	Ⅲ層	不整形楕円形	3.06	3.10	2.49	2.85	0.36	縄文後期前葉 北筒Ⅲ式?	
	PF-2	IV-42	15-3	f・g10	覆土	不整形楕円形	0.49	0.40	—	—	0.05		
ⅢP-18	PF-1	IV-128	33-5	h13・14、i13・14	Ⅲ層	不整形楕円形	1.91	1.35	1.41	0.92	0.61	縄文時代~縄文時代 統縄文時代~楡文文化期	
	PF-2	IV-129	33-6	f24	Ⅳ層	不整形円形?	0.61	0.49	0.30	0.29	0.34		
ⅢP-20	IV-157	37-6	e20・21	Ⅵ層	不整形円形	1.79	1.51	1.47	1.20	0.25	縄文時代下田ノ沢Ⅰ式期		
ⅢP-21	IV-129	33-7	g14・15	Ⅴ層	不整形円形?	2.16	—	1.80	—	0.40	縄文時代中期後半~縄文時代		

表IV-5 遺構一覧(5)

遺構名	掲載		検出位置		平面形	規模(m)					時期	備考 (方位等)
	挿図	写真 図版	発掘区	層位		検出面		底面		深さ		
						長径	短径	長径	短径			
ⅢP-23	IV-43	3	g・h9	Ⅳ層	不整楕円形	0.78	0.48	0.60	0.32	0.18	縄文時代後期初頭北筒式期?	
ⅢP-24	IV-87	26	f15・16	Ⅳ層	不整円形	2.32	2.26	2.02	1.80	0.17	縄文時代下田ノ沢Ⅰ式期	
ⅢP-25	IV-44	15・5・6	e・f16・17	Ⅳ層	不整楕円形	5.55	4.30	4.70	3.73	0.29	縄文時代後期初頭北筒式期?	
ⅢP-26	IV-119	33-2	g11	Ⅳ層	隅丸方形近似	0.81	0.48	0.59	0.41	0.16	縄文時代前期～中期	赤色顔料あり、土坑墓。
ⅢP-27	IV-43	15・7・8	d18	Ⅳ層	円形	(2.70)	(2.55)	2.14	1.81	0.66	縄文時代後期初頭北筒式期?	
ⅢP-28	IV-120	33-4	g12	Ⅳ層	円形	(0.50)	0.59	(0.43)	0.39	0.28	縄文時代前期～後期前葉	
ⅢS-1	IV-45	16	h・i20	Ⅳ層	楕円形	0.96	0.78	—	—	—	縄文時代後期初頭北筒式期	No 1のみのデータ。
ⅢS-2	IV-46	16	l・m4、15	Ⅳ層	楕円形	(6.00)	(2.35)	—	—	—	縄文時代後期初頭北筒式期	
ⅢS-3	IV-130	33-8	g20	Ⅳ層	円形	0.8	0.7	—	—	—	縄文時代中期末の北筒式期以降	
ⅢS-4	IV-47	16	g・h10	Ⅳ層	楕円形	1.84	1.25	—	—	—	縄文時代後期初頭北筒式期	
ⅢS-5	IV-47	16-7	f8	Ⅳ層	不整楕円形	0.90	0.76	—	—	—	縄文時代後期初頭北筒式期	ⅢH-7関連。
ⅢS-6	IV-130	34-1	f15	Ⅳ層	楕円形	0.60	0.40	—	—	—	縄文時代中期末の北筒式期以降	
ⅢS-7	IV-157	43-8	c・d19・20	Ⅳ層	楕円形	1.34	0.88	—	—	—		
ⅢS-8	IV-48	16-8	f13	Ⅳ層	大小の礫の不規則な拡散	1.80	1.40	—	—	—	縄文時代後期前葉北筒式期	
ⅢS-9	IV-31	10-7・8	d14	Ⅳ層	拳大礫の密集	0.50	0.40	—	—	—	縄文時代中期末北筒Ⅱ式(トコロ6類)期	
ⅢS-10	IV-120	33-3	e・f12	Ⅳ層	不整形	3.82	2.56	—	—	—	縄文時代前期または後期前葉	ⅢH-14関連。
ⅢS-11	IV-130	34-2	d19、e19	Ⅳ層	楕円形	1.50	1.20	—	—	—	縄文時代中期末の北筒式期以降	
ⅢF-1	IV-131	34-3	g14	Ⅳ層	不定形	0.86	0.68	—	—	0.04	縄文時代下田ノ沢式期～擦文文化期	
ⅢF-2	IV-88	—	g19	Ⅳ層	不定形	0.74	0.22	—	—	0.44	縄文時代後半	
ⅢF-3	IV-131	34-4	f18	Ⅳ層	円形	0.26	0.25	—	—	0.06	縄文時代中期末の北筒式期以降	
ⅢF-4	IV-132	34-5	e24	Ⅳ層	不定形	0.70	0.30	—	—	0.11	縄文時代～擦文文化期	
ⅢF-5	IV-131	34-6	g14	Ⅳ層	不定形	0.32	0.22	—	—	0.03	縄文時代下田ノ沢式期～擦文文化期	
ⅢF-6	IV-132	34-7	g15	Ⅳ層	不定形	0.54	0.34	—	—	0.09	縄文時代前期以降	
ⅢF-7	IV-133	34-8	f17	Ⅳ層	長楕円形	0.89	0.46	—	—	0.10	縄文時代前期以降	
ⅢF-8	IV-133	35-1	f17	Ⅳ層	不定形	0.48	0.32	—	—	0.10	縄文時代前期以降	
ⅢF-9	IV-133	35-2	f30	Ⅳ層	不定形	(0.54?)	(0.54?)	—	—	0.08	縄文時代前期以降	
ⅢF-10	IV-134	35-3	e13	Ⅳ層	不整な帯状	(1.27?)	(0.33?)	—	—	0.05	縄文時代前期以降	
ⅢF-11	IV-134	35-4	e13	Ⅳ層	散布状	1m四方程度の範囲	—	—	—	—	縄文時代前期以降	
ⅢF-12	IV-135	35-5	g12	Ⅳ層	不整形	0.39	0.30	—	—	0.08	縄文時代前期以降	
ⅢF-13	IV-135	35-6	g13	Ⅳ層	不定形	0.72	0.44	—	—	0.08	縄文時代前期以降	
ⅢF-14	IV-134	35-7	d14	Ⅳ層	不定形	0.51	0.50	—	—	0.05	縄文時代中期末の北筒式期以降	
ⅢF-15A	IV-132	35-8	d20	Ⅳ層	楕円形	0.40	0.30	—	—	0.07	縄文時代～縄文時代	
ⅢF-15B	IV-132	35-8	d20	Ⅳ層	不定形	0.86	0.65	—	—	0.09	縄文時代～縄文時代	
ⅢF-16	IV-73	21-2	h16	Ⅳ層	不定形	0.66	0.46	—	—	0.07	擦文文化期後期	
ⅢFC-1	IV-132	35-8	d20	Ⅳ層	—	0.60	(0.59)	—	—	—	縄文時代～縄文時代	

表IV-6 I層遺構一覧

遺構名	掲載		検出位置		平面形	規模(m)					時期	備考 (方位等)
	挿図	写真 図版	発掘区	層位		検出面		底面		深さ		
						長径	短径	長径	短径			
炭窯 1	図IV-191・192	44	j7・8	Ⅳ層	Ω形	3.50	3.04	3.50	2.64	1.10	近代	煙道・焚口施設残存。
炭窯 2	図IV-193・194	45	j6・7	Ⅳ層	Ω形	3.73	3.06	3.38	2.65	1.10	近代	焚口施設残存。
建物跡 1	図IV-196	46	j・k8・9	Ⅳ層	長方形+長方形	(3.60)	2.58	(3.16)	1.94	1.50		
PP-1	図IV-196	—	k8・9	Ⅳ層	長方形	0.91	0.66	0.67	0.59	0.16		
PP-2	図IV-196	—	j・k8	Ⅳ層	不整長方形	0.83	0.79	0.68	0.69	0.17		
PP-3	図IV-196	—	k8	Ⅳ層	長方形	0.96	0.46	0.84	0.41	0.12		
SP-1	図IV-196	—	k9	Ⅳ層	円形	0.15	0.15	0.13	0.13	0.34		
SP-2	図IV-196	—	k8	Ⅳ層	円形	0.16	0.14	0.10	0.10	0.28		
SP-3	図IV-196	—	j8	Ⅳ層	円形	0.17	0.16	0.11	0.10	0.32		
SP-4	図IV-196	—	k8	Ⅳ層	円形	0.16	0.16	0.11	0.11	0.26		
SP-5	図IV-196	—	k8	Ⅳ層	円形	0.15	(0.14)	0.12	0.12	0.29		
SP-6	図IV-196	—	k8	Ⅳ層	円形	0.14	0.14	0.13	0.13	0.28		
SP-7	図IV-196	—	k8	Ⅳ層	円形	0.20	0.20	0.14	0.14	0.42		
SP-8	図IV-196	—	k9	Ⅳ層	円形	0.14	0.14	0.11	0.11	0.17		
SP-9	図IV-196	—	k8	Ⅳ層	円形	0.08	0.08	0.04	0.04	0.30		
SP-10	図IV-196	—	k8	Ⅳ層	円形	0.07	0.06	0.03	0.03	0.27		
SP-11	図IV-196	—	k8	Ⅳ層	円形	0.07	(0.05)	(0.05)	(0.05)	0.05		
SP-12	図IV-196	—	k8	Ⅳ層	円形	0.08	0.08	—	—	0.23		
SP-13	図IV-196	—	k8	Ⅳ層	円形	0.08	0.08	0.04	0.04	0.32		
I P-1	図IV-189・190	—	j7・8	Ⅳ層	長楕円形	4.56	1.37	3.88	0.87	1.10	近代	
I P-2	図IV-189・190	—	i・j7・8	Ⅳ層	不整長楕円形	4.36	1.02	2.18	0.70	0.78	近代	
I P-3	図IV-189・190	—	i・j7・8	Ⅳ層	不整長楕円形	(3.40)	(1.20)	1.58	0.45	0.73	近代	
I P-4	図IV-189・190	—	i・j7・8	Ⅳ層	不整長楕円形	(3.80)	(1.40)	(3.20)	(0.82)	0.45	近代	
I P-5	図IV-189・190	—	i・j7・8	Ⅳ層	不整楕円形	(6.50)	(4.30)	(4.40)	(1.00)	0.71	近代	
I P-6	図IV-189・190	—	i・j6・7	Ⅳ層	長楕円形	3.34	1.30	2.74	0.72	0.57	近代	
I P-7	図IV-189・190	—	i6・7	Ⅳ層	不整楕円形	2.78	(0.84)	1.25	0.52	0.64	近代	
I P-8	図IV-189・190	—	i6・7	Ⅳ層	不整楕円形	1.00	0.49	0.80	0.46	0.28	近代	
I P-9	図IV-189・195	46-2	k7	Ⅳ層	不整楕円形	1.88	(1.04)	1.48	(0.58)	(0.57)	近代	
I P-10	図IV-189・195	46-4	k8	Ⅳ層	楕円形	1.34	(1.08)	0.84	(0.90)	0.74	近代	
I P-11	図IV-189・195	—	k6・7	Ⅳ層	不整楕円形	(2.70)	(1.40)	(1.62)	(0.52)	0.64	近代	
I P-12	図IV-189・195	—	k7	V層	不整楕円形	1.70	1.04	(1.40)	(1.02)	0.53	近代	
I P-13	図IV-189	—	i・j5・6	Ⅳ層	不整長方形	4.55	4.62	2.90	3.10	0.70	近代	
I P-14	図IV-189	—	j・k4・5	Ⅳ層	不整楕円形	2.20	1.80	1.72	1.45	—	近代	
I SP-1	図IV-189・195	46-3	k7	Ⅳ層	円形	0.13	0.13	—	—	0.48	近代	炭窯1関連。
I SP-2	図IV-189・190	—	k7	Ⅳ層	円形	0.13	0.13	—	—	0.62	近代	炭窯1関連。
I SP-3	図IV-189・190	—	k8	Ⅳ層	円形	0.09	0.09	—	—	0.25	近代	
I SP-4	図IV-189・190	—	k8	Ⅳ層	円形	0.14	0.14	—	—	0.20	近代	
I SP-5	図IV-189・190	—	k6	Ⅳ層	円形	0.15	0.15	—	—	0.34	近代	
I SP-6	図IV-189・190	—	k7	Ⅳ層	円形	0.25	0.24	0.12	0.06	0.37	近代	
I SP-7	図IV-189・190	—	k7	Ⅳ層	円形	0.11	0.11	—	—	0.39	近代	
I SP-8	図IV-189・190	—	k7	Ⅳ層	円形	0.11	0.11	—	—	0.35	近代	
I SP-9	図IV-189・190	—	j6	Ⅳ層	円形	0.17	0.17	0.06	0.06	0.20	近代	
I SP-10	図IV-189・190	—	j7	Ⅳ層	円形	0.08	0.08	—	—	0.22	近代	杭残存。
I SP-11	図IV-189・190	—	k6	Ⅳ層	円形	0.14	0.13	—	—	0.71	近代	炭窯2関連。
I SP-12	図IV-189・190	—	k7	Ⅳ層	円形	0.14	0.13	—	—	0.58	近代	炭窯2関連。
I SP-13	図IV-189・190	—	k6	Ⅳ層	円形	0.16	0.16	—	—	0.48	近代	
I SP-14	図IV-189・190	—	i7	Ⅳ層	円形	0.11	0.11	—	—	0.22	近代	
I SP-15	図IV-189・190	—	i8	Ⅳ層	円形	0.20	0.20	0.16	0.16	0.08	近代	
I SP-16	図IV-189・190	—	i8	Ⅳ層	円形	0.16	0.14	0.12	0.12	0.09	近代	
I SP-17	図IV-189・190	—	i8	Ⅳ層	円形	0.18	0.17	0.07	0.06	0.08	近代	
I SP-18	図IV-189・190	—	j8	Ⅳ層	円形	0.17	0.17	0.12	0.12	0.10	近代	
I SP-19	図IV-189・190	—	k9	Ⅳ層	円形	0.17	0.14	0.11	0.11	0.04	近代	
I P-100	図IV-197	47	d24	Ⅳ層	不整円形	1.84	1.80	1.21	0.90	0.70	近現代	家畜馬墓。

表Ⅳ-7 遺構出土土器重量一覽

遺構名	土器分類	重量 (g)	計量点数	1点平均 (g)	遺構名	土器分類	重量 (g)	計量点数	1点平均 (g)
Ⅲ H-1	Ⅵ群・Ⅵ群b類	1,658	69	24.0	Ⅲ H-12	Ⅶ群	49	8	6.1
	Ⅵ群c類	328	44	7.5	Ⅲ H-13	Ⅲ群b類~Ⅳ群a類	35	2	17.5
Ⅲ H-2	Ⅶ群	66	7	9.4		Ⅳ群a類	479	4	119.8
	Ⅵ群・Ⅵ群b類	163.6	15	10.9	Ⅵ群・Ⅵ群b類	67	10	6.7	
Ⅲ H-3	Ⅶ群	404	14	28.9	Ⅲ H-14	Ⅱ群	37	1	37.0
	Ⅲ群b類~Ⅳ群a類	65	3	21.7		Ⅲ群b類~Ⅳ群a類	1,942	43	45.2
	Ⅵ群・Ⅵ群b類	253	9	28.1		Ⅳ群a類	2,543	32	79.5
Ⅲ H-4	Ⅶ群	1,012	128	7.9	Ⅲ H-15	Ⅵ群・Ⅵ群b類	1,820	82	22.2
	Ⅲ群b類	13	2	6.5		Ⅱ群	603	22	27.4
	Ⅲ群b類~Ⅳ群a類	11	2	5.5	Ⅲ H-16	Ⅵ群・Ⅵ群b類	33	2	16.5
	V群	231	12	19.3		Ⅵ群・Ⅵ群b類	1,113	94	11.8
	Ⅵ群・Ⅵ群b類	3,646	184	19.8	Ⅲ P-1	Ⅵ群・Ⅵ群b類	355	91	3.9
	Ⅵ群c類	511	36	14.2	Ⅲ P-2	Ⅵ群・Ⅵ群b類	51	3	17.0
	Ⅶ群	360	31	11.6	Ⅲ P-7	Ⅳ群a類	19	2	9.5
Ⅶ群	101	9	11.2	Ⅵ群・Ⅵ群b類		196	22	8.9	
Ⅲ H-5	Ⅲ群b類	70	3	23.3	Ⅲ P-8	Ⅵ群・Ⅵ群b類	413	14	29.5
	Ⅲ群b類~Ⅳ群a類	76	16	4.8	Ⅲ P-10	Ⅵ群・Ⅵ群b類	47.9	11	4.4
	Ⅳ群a類	424	6	70.7	Ⅲ P-11	Ⅵ群・Ⅵ群b類	514	23	22.3
	Ⅵ群・Ⅵ群b類	1,649	121	13.6	Ⅲ P-12	Ⅳ群a類	53	2	26.5
	Ⅵ群c類	88	5	17.6		Ⅵ群・Ⅵ群b類	1,554.40	214	7.3
	Ⅶ群	197	21	9.4	Ⅲ P-13	Ⅳ群a類	1,329	9	147.7
	Ⅶ群	3,311	474	7.0		Ⅵ群・Ⅵ群b類	186	12	15.5
Ⅲ H-6	Ⅳ群a類	798	13	61.4	Ⅲ P-16	Ⅳ群a類	149	3	49.7
	Ⅵ群・Ⅵ群b類	3,414	198	17.2		Ⅵ群・Ⅵ群b類	406	34	11.9
	Ⅶ群	2	1	2.0	Ⅲ群b類~Ⅳ群a類	15	2	7.5	
Ⅲ H-7	I群b類	54	9	6.0	Ⅲ P-17	Ⅳ群a類	91	10	9.1
	Ⅲ群b類	90	10	9.0		Ⅲ P-20	Ⅵ群・Ⅵ群b類	423	5
	Ⅲ群b類~Ⅳ群a類	116	11	10.5	Ⅶ群		58	5	11.6
	Ⅳ群a類	4,149	254	16.3	Ⅲ P-21	Ⅳ群a類	28	1	28.0
	Ⅵ群・Ⅵ群b類	256	34	7.5	Ⅲ P-22	Ⅳ群a類	494	11	44.9
	Ⅶ群	6	1	6.0	Ⅲ P-24	Ⅵ群・Ⅵ群b類	1,296	76	17.1
Ⅲ H-8	Ⅲ群b類~Ⅳ群a類	777	38	20.4	Ⅲ P-25	Ⅲ群b類	391	9	43.4
	Ⅳ群a類	78	2	39.0		Ⅳ群a類	511	4	127.8
	Ⅵ群・Ⅵ群b類	2,554	205	12.5		Ⅵ群・Ⅵ群b類	2	1	2.0
	Ⅵ群c類	105	2	52.5	Ⅲ P-27	Ⅲ群b類~Ⅳ群a類	43.9	2	22.0
Ⅲ H-9	I群b類	10	1	10.0	V H-1	I群b類	14	2	7.0
	Ⅲ群b類	334	30	11.1	V H-2	I群b類	330.4	24	13.8
	Ⅲ群b類~Ⅳ群a類	154	9	17.1		Ⅲ群b類~Ⅳ群a類	34	4	8.5
	Ⅳ群a類	214	3	71.3	V H-2	Ⅵ群・Ⅵ群b類	4	2	2.0
	Ⅵ群・Ⅵ群b類	569	62	9.2		V P-1	I群b類	16	8
	Ⅶ群	25	5	5.0	V P-2	I群b類	130	1,439	0.1
	Ⅶ群	561	27	20.8	V P-3	I群b類	19	1	19.0
Ⅲ H-10	Ⅲ群b類~Ⅳ群a類	5	1	5.0	V P-4	I群b類	158	8	19.8
	Ⅳ群a類	729	8	91.1	V P-8	I群b類	1,147	1,408	0.8
	Ⅵ群・Ⅵ群b類	2,306	254	9.1		Ⅶ群	5	1	5.0
	Ⅶ群	7	2	3.5	V P-9	I群b類	1,573	241	6.5
Ⅲ H-11	Ⅶ群	28	1	28.0	V P-11	I群b類	12	2	6.0
	Ⅵ群・Ⅵ群b類	281.4	37	7.6	V P-15	I群b類	178	59	3.0
	Ⅲ群b類~Ⅳ群a類	235	18	13.1	V P-16	I群b類	31	31	1.0
Ⅲ H-12	Ⅳ群a類	1,320	15	88.0	V P-19	I群b類	110	10	11.0
	Ⅵ群・Ⅵ群b類	10,385	845	12.3					

表Ⅳ-8 包含層出土土器重量一覽

		I層・攪	Ⅱ・Ⅲ層	V~Ⅶ層	總計			I層・攪	Ⅱ・Ⅲ層	V~Ⅶ層	總計
I群b類	重量 (g)	7	212	3,962	4,181	Ⅳ群a類	重量 (g)	2,351.8	13,079.2	0	15,431
	計量点数	3	21	1,132	1,156		計量点数	54	606	0	660
	1点平均 (g)	2.3	10.1	3.5	3.6		1点平均 (g)	43.6	21.6	0	23.4
Ⅱ群	重量 (g)	0	83	0	83	Ⅵ群・Ⅶ群b類	重量 (g)	2,361.8	17,531.9	684	20,577.7
	計量点数	0	40	0	40		計量点数	232	1,881	64	2,177
	1点平均 (g)	0	2.1	0	2.1		1点平均 (g)	10.2	9.3	10.7	9.5
Ⅲ群b類	重量 (g)	212	2,240	56	2,508	Ⅶ群	重量 (g)	169	2,092	23	2,284
	計量点数	14	198	5	217		計量点数	27	213	2	242
	1点平均 (g)	15.1	11.3	11.2	11.6		1点平均 (g)	6.3	9.8	11.5	9.4
Ⅲ群b類~Ⅳ群a類	重量 (g)	14	1,304	26	1,344	Ⅷ群	重量 (g)	22	466.5	0	488.5
	計量点数	1	401	2	404		計量点数	3	49	0	52
	1点平均 (g)	14	3.3	13.0	3.3		1点平均 (g)	7.3	9.5	0	9.4

表IV-9 集石重量一覧

遺構名	種類	重量 (g)	重量小計	重量比 (%)	重量比小計	計量点数	計量点数小計	点数比 (%)	計量点数比小計	1点平均重量 (g)
Ⅲ S-1	たたき石 (被熱)	272	5,434	5	100	1	197	0.5	100	272.0
	礫	5,162		95		196		99.5		26.3
	小計			100%		197		100%		27.6
Ⅲ S-2	たたき石	3,459.7	3,723.7	2.2	2.4	8	10	0.4	0.5	432.5
	たたき石 (被熱)	264		0.2		2		0.1		132.0
	砥石	3,776	3,830	2.4	2.5	23	24	1.2	1.3	164.2
	砥石 (被熱)	54		0.1		1		0.1		54.0
	その他の礫石器・石斧等	230	230	0.1	0.1	2	2	0.1	0.1	115.0
	礫	81,226.4	146,651.4	52.6	95	912	1,880	47.6	98.1	89.1
被熱礫	65,425	42.4		968		50.5		67.6		
小計			100%		1,916		100%		80.6	
Ⅲ S-3	たたき石	1,094	1,094	8.8	8.8	3	3	4.8	4.8	364.7
	礫	10,699	11,340	86	91.2	58	60	92.1	95.3	184.5
	被熱礫	641		5.2		2		3.2		320.5
	小計			100%		63		100%		197.4
Ⅲ S-4	たたき石	74	1,105	0.5	6.9	1	15	0.2	3.2	74.0
	たたき石 (被熱)	1,031		6.4		14		3		73.6
	砥石 (被熱)	138	138	0.9	0.9	3	3	0.7	0.7	46.0
	礫	742	14,828	4.6	92.2	13	442	2.8	96.1	57.1
	被熱礫	14,086		87.6		429		93.3		32.8
	小計			100%		460		100%		34.9
Ⅲ S-5	たたき石	484	754	4	6.3	1	4	0.4	1.6	484.0
	たたき石 (被熱)	270		2.3		3		1.2		90.0
	礫	3,038	11,120	25.6	93.7	69	255	26.6	98.4	44.0
	被熱礫	8,082		68.1		186		71.8		43.5
	小計			100%		259		100%		45.8
Ⅲ S-6	礫	459	1,592	28.8	100	5	30	16.7	100	91.8
	被熱礫	1,133		71.2		25		83.3		45.3
	小計			100%		30		100%		53.1
Ⅲ S-7	たたき石	680	680	1.7	1.7	3	3	1.3	1.3	226.7
	礫	31,494	39,344	78.7	98.3	203	240	83.5	98.7	155.1
	被熱礫	7,850		19.6		37		15.2		212.2
	小計			100%		243		100%		164.7
Ⅲ S-8	すり石 (被熱)	72	72	0.2	0.2	1	1	0.4	0.4	72.0
	砥石	3,680	3,680	11.7	11.7	4	4	1.3	1.3	920.0
	礫	22,485	27,711	71.5	88.1	147	292	49.5	98.3	152.8
	被熱礫	5,226		16.6		145		48.8		36.0
	小計			100%		297		100%		105.9
Ⅲ S-9	砥石	410	410	13.8	13.8	2	2	8.3	8.3	205.0
	礫	2,556	2,556	86.2	86.2	22	22	91.7	91.7	116.2
	小計			100%		24		100%		123.6
Ⅲ S-10	たたき石	400	400	1	1	1	1	0.2	0.2	400.0
	砥石	916	916	2.3	2.3	6	6	1.2	1.2	152.7
	礫	17,197	38,092	43.7	96.7	191	510	36.9	98.6	90.0
	被熱礫	20,895		53		319		61.7		65.5
	小計			100%		517		100%		76.2
Ⅲ S-11	たたき石	1,607	1,915	3	3.6	4	5	0.5	0.6	401.8
	たたき石 (被熱)	308		0.6		1		0.1		308.0
	砥石 (被熱)	510	510	0.9	0.9	1	1	0.1	0.1	510.0
	礫	1,435	51,337	2.7	95.5	87	842	10.3	99.3	16.5
	被熱礫	49,902		92.8		755		89		66.1
	小計			100%		848		100%		63.4
V S-1	たたき石 (被熱)	161	161	2.4	2.4	1	1	1.5	1.5	161.0
	礫	1,310	6,680	19.1	97.6	8	64	12.3	98.5	163.8
	被熱礫	5,370		78.5		56		86.2		95.9
	小計			100%		65		100%		105.2

表IV-10 掲載復元土器一覧 (1)

図	掲載番号	図版	復元番号	出土地点	層位	遺物番号	点数	合計	残片	分類	型式名	推定遺存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	体積高 (cm)	底径 (cm)	推定容量 (L)	実重量 (kg)	復元重量 (kg)	備考
IV-17	1	49	13	V H-2	床直	V H-2	46	7	V H-2覆土 遺物番号1他計29点	I b	東鋼路II式	—	—	(9.60)	—	(8.70)	—	0.22	0.24	
						V H-2	65													
						V H-2	66													
						V H-2	77													
						V H-2	1													
IV-17	1	49	23	V P-4	覆土	V P-4	1	5	I b	東鋼路III式	—	—	(8.10)	—	7.10	—	0.13	0.14		
						V P-9	1													
						V P-9	2													
						V P-9	8													
IV-18	1	49	14	V P-9	覆土	V P-9	3	40	I b	東鋼路II式	—	—	(19.80)	—	—	—	0.87	1.14		
						土器集中1	V													1
						土器集中1	V													2
						土器集中1	V													3
						土器集中1	V													4
						土器集中1	V													5
						土器集中1	V													6
						土器集中1	V													7
						土器集中1	V													8
						土器集中1	V													9
						土器集中1	V													10
						土器集中1	V													11
						土器集中1	V													12
						土器集中1	V													13
						土器集中1	V													14
IV-18	1	49	22	V P-9	覆土	V P-9	10	158	その他未注記97点	I b	コッタロ式	60%	(22.20)	(23.50)	—	—	—	0.77	1.00	
						V P-9	11													
						V P-9	11													
						V P-9	11													

表Ⅳ-11 掲載復元土器一覽(2)

図	掲載番号	図版	復元番号	出土地点	層位	遺物番号	点数	合計	残片	分類	型式名	推定 遺存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	体積 高 (cm)	底径 (cm)	推定 容量 (L)	実重量 (kg)	復元 重量 (kg)	備考	
IV-49	1	55	1	Ⅲ S-9	Ⅲ	1	2	51	Ⅲ S-9 遺物番号1他 計6点	Ⅲ b	北筒Ⅱ式 トコロ6類	75%	(22.40)	(29.00)	—	—	(4.80)	1.92	2.08		
				Ⅲ S-9	Ⅲ	5	19														
				Ⅲ S-9	Ⅲ	6	24														
				d14区	Ⅲ	5	4														
				d15区	Ⅲ	5	2														
IV-50	1	55	5	Ⅲ H-7	覆土下	75	1	39	Ⅲ H-7覆土下 遺物番号75他 計15点	IV a	北筒Ⅲ式 (羅臼式)	—	(25.90)	(34.80)	—	—	—	2.99	4.15	元遺物集中1の11番 No 5	
				Ⅲ H-7	覆土(トコロ)	242	1														
				Ⅲ H-12	覆土	67	1														
				d14区	Ⅲ	2	1														
				e13区	Ⅲ	5	1														
				e13区	Ⅱ	7	1														
				f10区	Ⅲ	22	3														
				f15区	Ⅱ	8	8														
				f15区	Ⅲ	9	2														
				f15区	Ⅲ	14	2														
				f15区	Ⅲ	16	2														
				h12区	Ⅱ	6	7														
h14区	Ⅱ	7	9																		
IV-52	1	56	16	Ⅲ H-8	堅穴覆土	154	1	7	—	IV a	北筒V式	45%	(15.50)	18.20	18.20	(7.90)	(0.90)	0.52	0.72	B調査跡 黒色土Ma以上 JH埋土	
				試掘	Ⅲ	2	2														
				試掘	Ⅲ	5	4														
IV-54	3	57	24	Ⅲ S-2	Ⅲ	13	2	12	Ⅲ S-2Ⅲ層 遺物 番号14他計14点	Ⅲ b	北筒Ⅱ式	—	—	(8.10)	—	9.60	—	0.20	0.22		
				Ⅲ S-2	Ⅲ	14	10														
IV-90	1	59	—	Ⅲ H-6	覆土上	120	3	44	—	VI b	下田ノ沢 Ⅱ式	95%	22.60	(28.10)	(24.00)	(10.60)	4.75	2.32	2.42	口縁部扁平率 (内傾長軸20cm ÷短軸16.6cm) =1.21	
				Ⅲ H-6	覆土上	134	3														
				Ⅲ H-6	覆土上	135	3														
				Ⅲ H-6	覆土上	149	16														
				Ⅲ H-6	覆土上	150	13														
				Ⅲ H-6	覆土上	151	6														
IV-91	2	59	—	Ⅲ H-6	床面	179	1	1	—	VI b	下田ノ沢 Ⅱ式	95%	5.85	6.45	5.00	2.40	—	0.06	0.06	床面焼土跡。破 砕した突起部切 りに炭。口縁部扁 平率(内傾長軸 5cm÷短軸4.4 cm)=1.14	
IV-91	3	59	35	Ⅲ H-6	覆土上	121	1	4	1	VI b	下田ノ沢 Ⅱ式	20%	—	13.90	11.80	—	—	—	—	—	
				Ⅲ H-6	覆土上	135	1														
				e13区	Ⅲ	9	1														
				e13区	Ⅲ	10	1														
IV-93	1	60	9	Ⅲ H-10	覆土下	69	52	127	24	VI b	下田ノ沢式	85%	(19.10)	24.80	24.30	(8.50)	3.60	1.05	1.12		
				Ⅲ H-10	覆土下	70	44														
				Ⅲ H-10	覆土下	71	30														
				Ⅲ H-10	床	92	1														
				Ⅲ H-10	覆土下	75	1														
IV-93	2	60	—	Ⅲ H-10	覆土	26	1	2	—	VI b	下田ノ沢 Ⅱ式	65%	(9.40)	12.70	11.30	5.60	—	3.00	3.00		
				Ⅲ H-6	覆土上	38	1														
IV-94	4	61	4	Ⅲ H-10	覆土上	31	1	18	Ⅲ H-10 覆土 遺物番号8他 計7点	IV a	北筒Ⅲ式	60%	(21.80)	(31.50)	—	—	(5.1) (底なし)	2.48	2.95	No 5 d19	
				Ⅲ H-10	覆土上	32	5														
				Ⅲ H-12	覆土	23	1														
				Ⅲ H-12	床面	158	5														
				Ⅲ H-12	掘土上	248	1														
				Ⅲ P-25	覆土	38	1														
				Ⅲ P-25	覆土	39	1														
				f19区	Ⅲ	1	1														
				f22区	Ⅲ	1	1														
				Ⅲ H-12	覆土	25	2														
				Ⅲ H-12	覆土	26	1														
				Ⅲ H-12	覆土	112	27														
Ⅲ H-12	床直	145	8																		
Ⅲ H-12	床直	146	1																		
Ⅲ H-12	床直	147	2																		
Ⅲ H-12	床直	148	8																		
Ⅲ H-12	床直	149	20																		
Ⅲ H-12	覆土	151	1																		
Ⅲ H-12	覆土	163	3																		
Ⅲ H-12	床直	197	53																		
e18区	Ⅱ	3	3																		
f18区	攪乱	12	1																		
f19区	Ⅲ	5	1																		
f19区	Ⅲ	6	1																		
IV-96	2	62	—	Ⅲ H-12	覆土	121	1	35	Ⅲ H-12 覆土 遺物番号150他 計16点	VI b	下田ノ沢 Ⅱ式	65%	21.20	(24.30)	—	—	(5.5) (下部欠)	1.51	1.72	No 6 No 6 No 6	
				Ⅲ H-12	覆土	144	9														
				Ⅲ H-12	覆土	160	11														
				Ⅲ H-12	覆土	161	6														
				Ⅲ H-12	覆土	162	8														
IV-96	3	62	—	Ⅲ H-12	覆土	124	1	24	1	VI b	下田ノ沢 Ⅱ式	90%	10.10	(12.60)	11.30	(5.50)	0.60	0.40	0.42	No 8 口縁部扁 平率(内傾長軸 9.3cm÷短軸7.1 cm)=1.31	
				Ⅲ H-12	床直	199	20														
				Ⅲ H-12	床直	240	2														
				Ⅲ H-12	床	250	1														
				Ⅲ H-12	覆土	25	1														
IV-97	4	63	10	Ⅲ H-12	覆土	150	13	87	Ⅲ H-12 覆土 遺物番号143他 計33点	VI b	下田ノ沢 Ⅱ式	—	—	(22.10)	—	(10.20)	—	0.65	0.89		
				Ⅲ H-12	覆土	151	15														
				Ⅲ H-12	覆土	152	4														
				Ⅲ H-12	床直	238	3														
				f19区	Ⅲ	3	1														
IV-98	1	64	25	Ⅲ P-16	覆土上	2	14	18	1	VI b	下田ノ沢 Ⅱ式	65%	10.00	11.40	10.20	5.40	0.50	0.27	0.31	口縁部扁平率(内 傾長軸9cm÷短軸 7.7cm)=1.17	
				f17区	Ⅱ	5	2														
				f18区	Ⅲ	9	2														
IV-99	1	65	6	Ⅲ H-5	覆土	156	1	28	1	VI b	下田ノ沢 Ⅰ式	35%	(27.00)	—	—	(26.40)	—	0.98	1.51		
				Ⅲ H-10	覆土上	10	2														
				Ⅲ H-10	覆土	22	2														
				Ⅲ H-10	覆土	30	5														
				Ⅲ H-10	覆土下	71	1														
				Ⅲ P-24	覆土上	3	3														
				Ⅲ P-24	覆土	32	14														
Ⅲ H-9	覆土上	3	1																		
IV-121	1	66	3	Ⅲ H-14	覆土	11	16	59	1	VI b	下田ノ沢 Ⅱ式	65%	(22.50)	19.10	19.10	(12.50)	3.95	1.04	1.32		
				Ⅲ H-14	床面直上	96	1														
				Ⅲ H-14	覆土	99	1														
				Ⅲ H-14	覆土	139	2														
				Ⅲ H-14	床面直上	158	21														
				Ⅲ H-14	床面直上	159	3														
				Ⅲ H-14	床面直上	160	13														
				Ⅲ H-15	覆土上	19	1														
				Ⅲ H-14	覆土	94	15														
				Ⅲ H-14	覆土	95	12														
IV-121	4	66	2	Ⅲ H-14	覆土	94	15	27	Ⅲ H-14覆土 遺物番号9 1点	Ⅲ b~ IV a	北筒式	35% ?	—	(24.30)	—	(8.30)	—	1.70	2.01	No 1 No 1	
				Ⅲ H-14	覆土	95	12														

表IV-12 掲載復元土器一覧(3)

図	掲載番号	図版	復元番号	出土地点	層位	遺物番号	点数	合計	残片	分類	型式名	推定 遺存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	体積 高 (cm)	底径 (cm)	推定 容量 (L)	実重量 (kg)	復元 重量 (kg)	備考
IV-159	8	69	8	ⅢH-4	覆土	111	3	15	ⅢH-4覆土 遺物番号111他 計2点	Ⅵb	下田ノ沢 Ⅱ式	55%	(17.00)	18.80	15.50	6.80	1.80	0.64	0.83	
				ⅢH-4	覆土	165	3													
				ⅢH-4	覆土	166	9													
IV-159	11	69	18	ⅢH-4	掘上土	233	10	10	—	V	幣舞式?	40%以下	—	(9.80)	—	5.00	—	0.21	0.26	
IV-160	1	70	17	ⅢH-5	覆土	65	2	243	ⅢH-5 覆土 遺物番号81他 計148点	Ⅷ	トビニタイ式	65%	(33.50)	(37.00)	(37.00)	—	(13.4) (底なし)	1.57	1.90	No.1
				ⅢH-5	覆土	81	11													No.1
				ⅢH-5	床	98	4													No.1
				ⅢH-5	覆土	137	12													No.1
				ⅢH-5	床	138	2													No.1
				ⅢH-5	床	214	2													No.1
				ⅢH-5	床	215	24													No.1
				ⅢH-5	床	216	40													No.1
				ⅢH-5	床	217	25													No.1
				ⅢH-5	床	218	19													No.1
				ⅢH-5	床	219	15													No.1
				ⅢH-5	床	220	2													No.3
				ⅢH-5	床	221	3													No.1
				ⅢH-5	床	233	82													No.1
IV-171	1	73	12	ⅢH-3	床面	54	77	81	8	Ⅶ	擦文土器	40~ 45%	(28.10)	28.10	28.10	7.10	8.46	0.79	1.03	No.1
				ⅢH-3	床面	88	4													
				f18区	Ⅲ	7	2													
IV-177	17	88	20	f18区	Ⅲ	7	2	7	—	Ⅵb	下田ノ沢 Ⅱ式	30%	(5.60)	(7.20)	—	—	0.2 (底なし)	0.07	0.12	
				f18区	Ⅲ	8	4													
				f18区	Ⅲ	9	1													
IV-177	18	88	21	e17区	Ⅱ	1	1	3	—	Ⅵb	下田ノ沢式	10% 以下	—	(5.40)	—	6.60	—	0.20	0.22	
IV-178	22	89	19	d25区	Ⅱ	3	22	22	d25区Ⅱ層他計18点	Ⅶ	擦文土器	35%	(15.90)	14.90	14.90	(4.60)	1.05	0.17	0.34	
IV-178	23	89	26	f22区	Ⅱ	1	1	19	4	Ⅶ	擦文土器	80%	(20.20)	20.60	20.60	5.60	2.55	0.77	0.86	
				f22区	Ⅲ	3	18													

表IV-13 遺構出土掲載拓影土器一覧(1)

図	掲載番号	図版	破片番号	出土地点	層位	遺物番号	点数	合計	残片	分類	型式名	備考
IV-17	1	49	1①	VP-8	覆土上	11	1	5	VP-8 覆土上 遺物番号12他 計78点	I b	東銅路Ⅱ式	
				VP-8	覆土上	68	1					
				f8区	V	2	1					
				g8区	V	7	2					
IV-18	2	49	1②	f8区	V	2	1	3	—	I b	東銅路Ⅱ式	
				g8区	V	7	2					
IV-18	2	49	2	VP-9	覆土	2	1	4	—	I b	東銅路Ⅱ式	
IV-49	1	55	56	ⅢH-13	覆土下	14	6	6	—	IV a	北筒V式	
IV-51	2		39	ⅢH-7	覆土	280	17	17	ⅢH-7 HP-2 遺物 番号280他計11点	IV a	北筒V式	HP-2
IV-51	3		37	ⅢH-7	覆土中	62	2	3	ⅢH-7 遺物番号62 他計16点	IV a	北筒V式	
				ⅢH-7	覆土下	175	1					
IV-51	4		38①	ⅢH-7	覆土	206	3	5	ⅢH-7 遺物番号 206他計4点	IV a	北筒V式	
				e9区	Ⅲ	9	1					
				e10区	Ⅲ	7	2					
IV-52	5		38②	e10区	Ⅲ	8	4	6	—	IV a	耳栓	
IV-52	6	56	61	ⅢH-7	覆土下	74	1	1	—	IV a	耳栓	
IV-52	2	56	42	ⅢH-8	覆土上	131	3	3	ⅢH-8 覆土上 遺物番号83計1点	Ⅵb	下田ノ沢Ⅰ式	
IV-52	3	56	40	ⅢH-8	覆土上	5	3	9	—	Ⅵb	下田ノ沢Ⅰ式	
			ⅢH-8	覆土上	6	6						
IV-53	5	56	41①	ⅢH-8	覆土上	27	1	6	試掘P320 Ⅲ層 遺物番号7他計5点	Ⅵb	下田ノ沢Ⅰ式	B調査跡 h10 P320 P320
				ⅢH-8	覆土上	6	1					
				ⅢH-8	覆土上	27	1					
				ⅢH-8	堅穴覆土	155	1					
				試掘	Ⅱ	6	1					
				試掘	Ⅲ	7	1					
IV-53	1		54	ⅢP-13	覆土	18	3	3	ⅢH-14 覆土 遺物 番号41他計11点	IV a	北筒V式	
IV-54	1	57	58①	ⅢS-2	Ⅲ	17	8	9	ⅢS-2 Ⅲ層 遺物 番号17他計16点	IV a	北筒Ⅱ式 トコロ5類	No.6
				j5区	I	3	1					
	2	57	58②	k5区	I	1	6	6	—	—	—	
IV-89	1	58	10①	ⅢH-1	覆土上	41	1	4	ⅢH-1 覆土上 遺物番号29 他計13点	Ⅵb	下田ノ沢Ⅱ式	
				ⅢH-1	床面	68	2					
				ⅢH-1	床面	69	1					
				ⅢH-1	床面	68	1					
IV-89	3	58	11	ⅢH-1	覆土下	177	4	4	1	Ⅵb	下田ノ沢Ⅱ式	
				h17区	Ⅲ	9	2					
IV-89	5	58	60②	ⅢH-1	覆土下	176	1	1	ⅢH-1 覆土 遺物番号159 1点	Ⅵb	下田ノ沢Ⅱ式	
				ⅢH-1	床面	122	1					
				ⅢH-1	床面	120	4					
				ⅢH-1	床面	120	4					
IV-89	8	58	12	ⅢH-1	覆土上	1	7	7	37	Ⅵc	北大式	
IV-91	4		36①	ⅢH-6	覆土上	134	4	8	—	Ⅵb	下田ノ沢Ⅱ式	
				ⅢH-6	覆土上	135	2					
				ⅢH-6	覆土3	149	1					
				ⅢH-6	覆土3	151	1					
				ⅢH-6	覆土上	134	2					
IV-91	5		36②	g13区	Ⅲ	10	2	4	18	—	—	

表Ⅳ-14 遺構出土掲載拓影土器一覽(2)

図	掲載 番号	図版	破片 番号	出土地点	層位	遺物 番号	点数	合計	残片	分類	型式名	備考	
IV-92	6	59	34	Ⅲ H-6	覆土上	133	1	4	—	IV a	北筒Ⅲ式 (羅白式)		
				Ⅲ H-14	床面直上	97	1						
				f13区	Ⅲ	4	1						
				k14区	Ⅲ	1	1						
IV-92	7	59	33	Ⅲ H-6	覆土下	34	1	7	Ⅲ H-13 遺物 番号57他計8点	IV a	北筒Ⅲ式 (羅白式)		
				Ⅲ H-14	覆土上	157	1						
				Ⅲ P-13	覆土	18	3						
				f13区	Ⅲ	4	1						
				j12区	I	2	1						
				Ⅲ H-6	覆土下	34	1						
IV-92	7	59	33	Ⅲ H-14	覆土上	157	1	7	Ⅲ H-13 遺物 番号57他計8点	IV a	北筒Ⅲ式 (羅白式)		
				Ⅲ P-13	覆土	18	3						
				f13区	Ⅲ	4	1						
				j12区	I	2	1						
				Ⅲ H-10	覆土	1	2						
IV-93	3	61	45	Ⅲ H-10	覆土下	93	20	22	—	VI b	下田ノ沢Ⅰ式		
				Ⅲ H-10	覆土下	93	20		2				
IV-97	1	63	49①	Ⅲ P-1	覆土2	4	1	3	h22区 Ⅲ層 遺物番号1 他計2点	VI b	下田ノ沢Ⅰ式	No 1	
				Ⅲ P-24	覆土	32	1					No 1	
				Ⅲ P-24	覆土	33	1					No 2	
IV-97	2	63	49②	h20区	Ⅲ	4	1	4					
				h21区	Ⅲ	1	1						
				i23区	Ⅲ	1	1						
				k22区	Ⅲ	1	1						
IV-97	1	64	50	Ⅲ P-7	覆土上	6	4	4	Ⅲ P-7 覆土上 遺物番号1計1点	VI b	下田ノ沢Ⅰ式		
IV-97	1	64	51	Ⅲ P-8	覆土	3	1	11	Ⅲ P-7 覆土上 遺物番号6他計19点	VI b	下田ノ沢Ⅰ式		
				Ⅲ P-7	覆土	16	10						
IV-98	1	64	52	Ⅲ P-11	坑床直上	1	12	16	Ⅲ P-11 坑底直上 遺物番号2他計6点	VI b	下田ノ沢Ⅰ式	No 1	
				Ⅲ P-11	坑床直上	2	4					No 2	
IV-98	1	64	53	Ⅲ P-12	覆土上	32	1	6	5	VI b	下田ノ沢Ⅰ式		
				Ⅲ P-12	覆土上	53	2						2
				Ⅲ F-2	覆土	1	3						1
IV-99	2	64	55	Ⅲ P-16	覆土上	20	4	4	1	VI b	下田ノ沢Ⅱ式		
IV-99	2	65	62	Ⅲ P-24	覆土	32	1	1	—	VI b	下田ノ沢Ⅰ式	No 1	
IV-99	3	65	57	Ⅲ P-24	覆土上	3	1	1	—	VI b	下田ノ沢式		
IV-100	1	63	46	Ⅲ H-12	床面	243	5	80	土器集中2 Ⅲ層 遺物番号1他 計58点	VI b	下田ノ沢Ⅰ式	No11	
				土器集中2	Ⅲ	1	25						
				土器集中2	Ⅲ	2	8						
				f19区	Ⅲ	2	1						
				f19区	Ⅲ	3	1						
				f19区	Ⅲ	5	6						
				f19区	Ⅲ	6	34						
IV-121	1	66	43②	Ⅲ H-9	覆土1	151	1	1	Ⅲ H-9覆土2 遺物 番号167他計16点	Ⅲ b	北筒Ⅱ式 トコロ6類		
	2	66	43①	Ⅲ H-9	覆土2	167	13						
IV-121	3	66	44	Ⅲ H-9	覆土3	129	1	2	Ⅲ H-7 覆土下 遺物 番号132他計4点	IV a	北筒Ⅴ式	HS-3	
				Ⅲ H-9	覆土1	30	1						
IV-122	2		47②	Ⅲ P-10	覆土	1	11	16	—				
				i10区	Ⅲ	10	5						4
IV-122	3	66	47①	Ⅲ H-14	覆土	39	2	12	—	VI b	下田ノ沢Ⅰ式		
				Ⅲ H-14	覆土	43	6						1
				i10区	Ⅱ	5	3						—
				i10区	Ⅲ	9	1						—
				—	—	—	—						—
IV-123	1	67	48①	Ⅲ H-15	覆土	85	4	4	Ⅲ H-14 遺物番号 38他計55点	Ⅱ	温根沼式	HP-1	
	2	67	48②	Ⅲ H-15	覆土	85	3					3	HP-1
IV-123	1	67	59	Ⅲ S-10	Ⅲ	2	1	1	Ⅲ S-10 Ⅲ層 遺物番号2他計5点	Ⅱ	Ⅱ群	押型文	
IV-158	1	68	22	Ⅲ H-4	覆土	141	2	2	—	Ⅷ	トピニタイ式		
				Ⅲ H-4	覆土	14	1						
				Ⅲ H-4	覆土	142	7						
IV-158	2	68	20	e20区	Ⅱ	2	1	9	Ⅲ H-4 覆土 遺物番号142他計2点	Ⅶ	捺文土器		
				Ⅲ H-4	覆土	38	7						
				Ⅲ H-4	覆土	109	2						
IV-158	3	68	21①	Ⅲ H-4	覆土	109	2	9	Ⅲ H-1 覆土上 遺物番号4他計17点	Ⅶ	捺文土器		
	4	68	21②	Ⅲ H-3	覆土上	58	5						5
IV-158	5	68	18	Ⅲ H-4	覆土	69	1	13	Ⅲ H-4 覆土 遺物番号144他計13点	VI b	後北A式	No 2	
				Ⅲ H-4	覆土	113	3						
				Ⅲ H-4	覆土	144	2						
				Ⅲ H-4	覆土	195	1						
				Ⅲ H-5	覆土	55	3						
				e19区	Ⅲ	2	1						
				e20区	Ⅱ	1	2						
IV-158	6	68	19①	Ⅲ H-4	覆土	144	2	2	Ⅲ H-4 覆土 遺物番号144他計41点	VI c	後北C2—D式		
	7	68	19②	Ⅲ H-4	覆土	113	1						1
IV-159	9	69	16①	Ⅲ H-4	覆土	98	1	16	Ⅲ H-4 覆土 遺物番号78他計42点	VI b	下田ノ沢式		
				Ⅲ H-4	覆土	192	1						
				Ⅲ H-4	覆土	193	6						
				Ⅲ H-4	覆土	194	8						

表IV-15 遺構出土掲載拓影土器一覧(3)

図	掲載番号	図版	破片番号	出土地点	層位	遺物番号	点数	合計	残片	分類	型式名	備考
IV-159	10	69	16②	Ⅲ H-4	覆土	9	1	6	同上	Ⅵ b	下田ノ沢式	
				Ⅲ H-4	覆土	111	1					
				Ⅲ H-4	覆土	166	4					
IV-160	2	70	30	Ⅲ H-5	覆土	27	1	26	Ⅲ H-5 覆土 遺物番号27他計11点	Ⅷ	トビニタイ式	
				Ⅲ H-5	覆土	73	3					
				Ⅲ H-5	覆土	75	8					
				Ⅲ H-5	覆土	87	6					
				Ⅲ H-5	覆土	104	1					
				Ⅲ H-5	覆土	105	1					
				Ⅲ H-5	覆土	135	3					
IV-161	3	71	32	Ⅲ H-5	覆土	105	1	2	—	Ⅷ	トビニタイ式	
IV-161	4	71	31	d18区	Ⅱ	3	1	1	—	Ⅷ	トビニタイ式	
IV-161	5	71	63	Ⅲ H-5	床面	212	1	1	Ⅲ H-1 覆土 遺物番号3番1点	Ⅶ	擦文土器	No 1 高台部分
IV-161	6	71	26②	f16区	Ⅱ	8	4	5	Ⅲ H-5 覆土 遺物番号103他計10点	Ⅵ b	下田ノ沢Ⅰ式	
				Ⅲ H-5	覆土	19	1					
				Ⅲ H-5	覆土	103	1					
				Ⅲ H-5	覆土	136	1					
				f16区	Ⅱ	9	1					
IV-161	7	71	26①	g16区	Ⅰ	1	1					
				Ⅲ H-5	掘上土	254	1					
				Ⅲ H-5	掘上土	262	4					
IV-162	8	71	28①	Ⅲ H-5	掘上土	262	2	2	3	Ⅵ b	下田ノ沢式	
IV-162	9	71	28②	Ⅲ H-5	掘上土	262	2	2				
IV-162	10	71	27	Ⅲ H-5	覆土	26	1	1	1	Ⅵ b	下田ノ沢Ⅱ式	
IV-162	11	72	29	Ⅲ H-5	覆土上	274	9	9	1	Ⅵ b	下田ノ沢Ⅱ式	
IV-162	12	72	23	Ⅲ H-5	覆土	5	1	5	Ⅲ P-25 覆土 遺物番号41他計2点	Ⅲ b	北筒Ⅱ式 トコロ6類	
				Ⅲ P-25	覆土	16	1					
				Ⅲ P-25	覆土	41	3					
IV-162	13	72	25	Ⅲ H-5	掘上土	240	2	4	Ⅲ H-5 掘上土 遺物番号275他計31点	Ⅳ a	北筒Ⅱ式 トコロ6類	
				Ⅲ H-13	覆土	69	1					
				Ⅲ P-22	覆土	1	1					
IV-162	14	72	24	Ⅲ H-5	覆土	100	1	10	Ⅲ P-25 覆土 遺物番号16他計24点	Ⅳ a	北筒Ⅲ式	
				Ⅲ H-13	覆土中	56	1					
				Ⅲ P-25	覆土	1	1					
				Ⅲ P-25	覆土	40	1					
				e15区	Ⅲ	2	3					
				e16区	Ⅲ	6	1					
				f13区	Ⅱ	1	1					
				k18区	Ⅲ	2	1					
IV-171	1	73	13	Ⅲ H-2	床	8	11	18	28	Ⅶ	擦文土器	No 1
				Ⅲ H-2	床直	9	3					No 2
				d28区	Ⅲ	1	4					
IV-172	2	74	15①	Ⅲ H-3	床直	88	6	9	Ⅲ H-3 床直 遺物番号88他計13点	Ⅶ	擦文土器	No 1
				Ⅲ H-3	カマド2焼土	92	1					
				d25区	Ⅱ	3	8					
IV-172	4	74	15③	e25区	Ⅲ	1	1					
				Ⅲ H-3	覆土上	65	1	1	c23区 Ⅲ層 遺物番号2他計2点	Ⅵ b	下田ノ沢Ⅱ式	

表IV-16 遺構出土掲載石器一覧(1)

図番号	掲載番号	図版番号	器種	遺構グリッド	層位	遺物番号	形状	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
IV-19	1	50	砥石	V H-1	床面直上	21	大型板状	34.30	44.30	(7.60)	14,800.00	砂岩	側縁に播鉢状の窪みと貫通孔。
IV-20	2	50	砥石	V H-1	床面直上	20	大型板状	24.44	27.40	6.00	5,000.00	砂岩	有溝。台石としても使用。
IV-20	3	50	台石	V H-1	覆土下	16	—	14.85	22.10	4.95	3,200.00	砂岩	石皿としても使用。
IV-20	4	50	台石	V H-1	床面直上	19	—	13.65	19.80	7.40	3,110.00	砂岩	石皿としても使用。
IV-21	5	50	たたき石	V H-1	覆土下	11	扁平礫素材周縁使用	10.30	10.90	3.90	658.00	砂岩	すり石としても使用。
IV-21	1	51	彫器	V H-2	床面	89	側刃	2.45	1.30	0.80	3.00	黒曜石	取り上げNo40?
IV-21	2	51	彫器	V H-2	床面直上	57	側刃	3.02	1.70	1.12	4.70	黒曜石	取り上げNo 8
IV-21	3	51	彫器	V H-2	覆土	16	側刃	3.45	2.00	0.85	6.10	黒曜石	
IV-21	4	51	彫器	V H-2	床面直上	52	側刃	3.54	1.16	1.17	4.50	黒曜石	取り上げNo 3
IV-21	5	51	彫器	V H-2	床面	90	側刃	4.55	1.60	0.85	5.30	黒曜石	取り上げNo41
IV-21	6	51	削片	V H-2	床面直上	58	—	2.95	0.90	0.50	1.10	黒曜石	取り上げNo 9
IV-21	7	51	削片	V H-2	床面直上	53	—	2.75	0.85	0.42	0.70	黒曜石	取り上げNo41
IV-21	8	51	スクレイパー	V H-2	床面直上	33	縦長両側縁	3.25	1.70	0.40	2.20	黒曜石	
IV-21	9	51	楔形石器	V H-2	床面直上	75	—	2.30	1.14	1.12	2.40	黒曜石	取り上げNo26
IV-21	10	51	石斧	V H-2	床面	62	小型・全面研磨	5.75	2.60	1.10	28.00	蛇紋岩	基部欠損。被熱で赤褐色。磨り切り溝有。
IV-21	11	51	たたき石	V H-2	床面直上	60	—	14.50	13.20	7.00	1,917.00	砂岩	すり石としても使用。
IV-22	1	51	石鏃	V P-8	覆土上	13	五角形長身?木葉?	3.92	1.22	0.57	2.20	黒曜石	
IV-22	2	51	石鏃	V P-8	覆土上	18	棒状片面全面加工	4.15	1.25	0.72	3.10	黒曜石	
IV-22	3	51	たたき石	V P-8	覆土上	30	—	7.90	5.50	5.40	357.00	チャート	
IV-22	4	51	たたき石	V P-8	覆土上	56	並円礫・主に長軸両端	8.60	6.80	5.60	(455.00)	安山岩	
IV-22	5	51	たたき石	V P-8	覆土上	74-75	扁平礫・縁辺打ち欠き	8.20	9.30	4.85	(537.00)	玄武岩?	2点接合。
IV-22	6	51	たたき石	V P-8	覆土上	76	扁平礫・縁辺打ち欠き	10.70	9.70	4.10	608.00	粗粒玄武岩	
IV-22	7	51	たたき石	V P-8	覆土上	49	断面三角形	10.95	6.75	4.70	538.00	砂岩	
IV-23	8	51	たたき石	V P-8	覆土上	73	扁平礫・長軸端部	11.25	6.80	3.40	377.00	泥岩	

表Ⅳ-17 遺構出土掲載石器一覧(2)

図 番号	掲載 番号	図版 番号	器種	遺構 グリッド	層位	遺物 番号	形状	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	備考
IV-23	9	51	砥石	V P-8	覆土上	70	板状有溝	8.80	11.05	3.20	363.00	アルコース 砂岩	取り上げ№1。
IV-23	1	51	砥石	V P-10	覆土	4	—	19.40	8.50	4.25	929.00	砂岩	3点接合。
IV-24	1	51	たたき石	V P-14	坑底直上	4	大型円礫	13.80	21.05	9.80	4,300.00	砂岩	
IV-55	1	75	スクレイパー	Ⅲ H-7	覆土下	161	縦長両側縁	5.75	1.60	0.55	4.90	黒曜石	
IV-55	2	75	たたき石	Ⅲ H-7	覆土	217	亜円礫素材	7.30	5.55	6.55	411.00	アルコース 砂岩	
IV-55	3	75	たたき石	Ⅲ H-7	覆土	216	礫片素材・縁辺打ち欠き	9.95	4.80	3.85	246.00	砂岩	
IV-55	4	75	たたき石	Ⅲ H-7	床面直上	272	亜角礫素材	10.75	9.75	6.90	1,230.00	粗粒玄武岩	
IV-55	5	75	たたき石	Ⅲ H-7	覆土	215	亜角礫素材	5.86	3.93	3.73	137.00	砂岩	
IV-55	6	75	たたき石	Ⅲ H-7	床面直上	252	—	8.00	5.37	3.33	185.00	粗粒玄武岩	
IV-55	7	75	すり石	Ⅲ H-7	覆土上	27	亜円礫素材	10.20	7.91	4.50	572.00	砂岩	
IV-55	8	75	石鋸	Ⅲ H-7	覆土	265	—	3.00	3.92	0.40	9.00	砂岩	
IV-55	9	75	石鋸	Ⅲ H-7	覆土下	79	—	3.02	4.19	0.31	7.00	砂岩	
IV-55	10	75	石鋸	Ⅲ H-7	覆土上	185	—	7.30	11.00	1.10	81.00	砂岩	
IV-56	11	75	たたき石	Ⅲ H-7 HP 2	覆土	275	小円礫素材	5.60	5.40	3.18	115.00	砂岩	
IV-56	12	75	砥石	Ⅲ H-7 HP 2	覆土	273	大型板状	21.25	12.90	4.90	1,408.00	砂岩	
IV-56	13	75	石斧片	Ⅲ H-7 HP 3	覆土	282	短冊形	14.10	5.75	4.05	512.00	砂岩	刃部欠損。
IV-56	14	75	砥石	Ⅲ H-7 HP 3	覆土	277	板状	13.50	9.15	0.85	143.00	砂岩	被熱。
IV-57	1	76	石斧	Ⅲ H-8	覆土上	136	—	6.50	3.30	1.40	44.00	泥岩	全面研磨。
IV-57	2	76	たたき石	Ⅲ H-8	覆土中	106	—	7.95	7.10	4.50	327.00	玄武岩	
IV-57	3	76	たたき石	Ⅲ H-8	覆土中	89	楔状に使用?	12.60	6.16	5.02	536.00	砂岩	石斧転用。
IV-57	4	76	砥石	Ⅲ H-8	覆土	52	板状	8.60	8.10	0.60	59.00	砂岩	石鋸にも使用。
IV-58	1	76	たたき石	Ⅲ P-13	覆土下	30	—	9.75	8.30	4.90	593.00	砂岩	すり石としても使用。
IV-58	2	76	たたき石	Ⅲ P-13	覆土	25	角柱状礫素材・面と下端	13.10	5.40	4.15	475.00	砂岩	
IV-58	1	76	石鏃	Ⅲ P-25	覆土	28	菱形	3.40	1.55	0.75	2.90	黒曜石	
IV-58	2	76	たたき石	Ⅲ P-25	覆土	18	—	6.95	5.70	3.35	145.00	砂岩	
IV-58	3	76	たたき石	Ⅲ P-25	覆土	6	—	8.45 (6.80)	2.70 (200.00)			安山岩	
IV-58	1	76	石斧	Ⅲ S-2	Ⅲ	19	—	10.50	4.42	1.25	68.00	泥岩	刃部のみ研磨整形。
IV-58	2	76	たたき石	Ⅲ S-2	Ⅲ	93	—	7.70	5.25	1.70	99.00	砂岩	被熱。
IV-58	1	76	たたき石	Ⅲ S-3	Ⅲ	27	角柱状礫素材	10.35	5.00	4.20	379.00	砂岩	
IV-58	1	76	たたき石	Ⅲ S-4	Ⅲ	4	不定形な扁平礫素材	6.70	5.80	1.85	74.00	砂岩	
IV-101	1	77	石鏃	Ⅲ H-1	覆土	95	三角形平基	1.70	(1.15)	0.32	0.50	黒曜石	
IV-101	2	77	石鏃片	Ⅲ H-1	壁際焼土 覆土下	100	三角形弱凹基	1.95	(1.20)	0.35	(0.40)	黒曜石	
IV-101	3	77	石鏃	Ⅲ H-1	覆土下	34	三角形弱凹基	(2.20)	0.95	0.40	(0.60)	黒曜石	産地分析試料1。
IV-101	4	77	石鏃	Ⅲ H-1	床面	67	三角形弱凹基	2.50	1.25	0.30	0.80	黒曜石	産地分析試料2。
IV-101	5	77	石鏃	Ⅲ H-1	覆土下	21	三角形弱凹基	2.80	1.90	0.35	1.10	黒曜石	
IV-101	6	77	石鏃片	Ⅲ H-1	壁際焼土 覆土下	99	三角形弱凹基	(1.50)	1.18	0.30	(0.50)	黒曜石	産地分析試料3。
IV-101	7	77	石鏃片?	Ⅲ H-1	覆土	96	逆字形	(2.70)	1.30	0.50	(1.40)	黒曜石	
IV-101	8	77	石鏃	Ⅲ H-1	覆土上	50	縦長全面加工	(4.50)	(1.80)	0.90	(6.60)	黒曜石	石槍またはナイフ片転用。
IV-101	9	77	両面調整石器	Ⅲ H-1	覆土下	33	—	4.00	2.50	0.75	7.60	黒曜石	
IV-101	10	77	スクレイパー	Ⅲ H-1	床面	92	—	2.40	1.80	0.50	1.90	黒曜石	産地分析試料4。
IV-101	11	77	スクレイパー	Ⅲ H-1	壁際焼土 覆土下	101	円形周縁加工	2.95	3.05	0.60	4.80	黒曜石	産地分析試料5。
IV-101	12	77	スクレイパー	Ⅲ H-1	覆土下	45	円形周縁加工	3.10	2.60	1.25	8.90	黒曜石	産地分析試料8。
IV-101	13	77	スクレイパー	Ⅲ H-1	床面	91	半円形	2.05	3.85	0.75	5.30	黒曜石	産地分析試料6。
IV-101	14	77	スクレイパー	Ⅲ H-1	壁際焼土 覆土下	102	不定形片側縁	3.10	2.75	0.90	7.60	黒曜石	産地分析試料7。
IV-101	15	77	スクレイパー	Ⅲ H-1	石囲い炉	136	周縁加工	2.70	3.43	0.90	8.80	黒曜石	
IV-101	16	77	たたき石	Ⅲ H-1	床面	89	亜円礫素材	7.50	4.50	2.80	141.00	泥岩	
IV-101	17	77	たたき石	Ⅲ H-1	床面	75	亜円礫素材	7.50	7.10	4.20	326.00	粗粒玄武岩	
IV-101	18	77	たたき石?	Ⅲ H-1	床面	126	亜円礫素材	(11.50)	(9.80)	4.60	(696.00)	泥岩	
IV-101	19	77	石鋸	Ⅲ H-1	覆土上	2	—	(3.50)	(4.00)	0.55	(12.00)	砂岩	
IV-101	20	77	砥石	Ⅲ H-1	床面	88	板状多面使用	7.20	6.60	3.80	150.00	砂岩	被熱。
IV-102	1	77	石鏃	Ⅲ H-6	覆土中	24	三角形平基	2.30	(1.00)	0.30	(0.40)	黒曜石	産地分析試料9。
IV-102	2	77	石鏃	Ⅲ H-6	覆土中	49	三角形平基	(2.07)	1.00	0.37	(0.70)	黒曜石	
IV-102	3	77	石鏃	Ⅲ H-6	覆土上	39	有茎凸基?	(2.37)	1.71	0.55	(2.30)	黒曜石	横に膨らむ形状。
IV-102	4	77	石鏃	Ⅲ H-6	覆土中	88	石鏃転用	(3.05)	1.40	0.60	(2.00)	黒曜石	
IV-102	5	77	石鏃	Ⅲ H-6	覆土下	141	—	3.81	1.80	0.60	2.20	黒曜石	
IV-102	6	77	スクレイパー	Ⅲ H-6	覆土上	124	円形周縁加工	2.20	2.60	0.80	4.70	黒曜石	
IV-102	7	77	楔形石器	Ⅲ H-6	覆土中	89	—	2.45	2.75	0.85	6.20	黒曜石	産地分析試料10。
IV-102	8	77	石斧	Ⅲ H-6	覆土中	53	—	6.00	3.65	1.80	54.00	緑色泥岩	全面研磨。
IV-102	9	77	たたき石	Ⅲ H-6	覆土下	146	下端部使用	10.75	7.80	6.20	744.00	安山岩	すり石としても使用。
IV-102	1	77	石槍またはナイフ	Ⅲ H-10	覆土	55	有茎平基	4.10	1.98	0.65	4.40	黒曜石	
IV-102	2	77	石槍またはナイフ	Ⅲ H-10	覆土上	76	菱形(正)	(12.70)	3.83	0.80	34.00	黒曜石	
IV-102	3	77	石鏃	Ⅲ H-10	覆土	33	逆三角形	(2.56)	1.38	0.42	(1.20)	黒曜石	
IV-102	4	77	砥石	Ⅲ H-10	覆土下	96	板状	11.15	9.85	2.00	319.00	砂岩	線条痕目立つ。
IV-103	1	78	たたき石	Ⅲ H-11	覆土10	26	—	9.20	6.65	2.60	156.00	砂岩	
IV-103	1	78	石鏃	Ⅲ H-12	覆土	122	菱形	3.61	1.26	0.40	1.60	黒曜石	
IV-103	2	78	石鏃	Ⅲ H-12	床面	220	菱形	4.50	1.60	0.65	3.50	黒曜石	
IV-103	3	78	石槍またはナイフ	Ⅲ H-12	床面	241	菱形または有茎凸基	6.00	2.25	1.00	8.00	黒曜石	取り上げ№9
IV-103	4	78	石槍またはナイフ	Ⅲ H-12	覆土	165	菱形または有茎凸基	(6.30)	2.41	0.80	10.10	黒曜石	
IV-103	5	78	石鏃	Ⅲ H-12	覆土	30	縦長周縁加工	3.80	1.33	0.55	2.40	黒曜石	
IV-103	6	78	石鏃	Ⅲ H-12	覆土	166	—	3.05	2.10	0.70	4.60	黒曜石	両端部使用。
IV-103	7	78	つまみ付きナイフ	Ⅲ H-12	覆土	169	周縁加工	6.95	3.95	1.15	37.90	黒曜石	
IV-103	8	78	ナイフ	Ⅲ H-12	覆土	10	周縁加工	8.05	3.05	1.05	26.00	頁岩	
IV-103	9	78	スクレイパー	Ⅲ H-12	覆土	76	円形周縁加工	2.20	2.00	0.50	1.80	黒曜石	被熱。
IV-103	10	78	スクレイパー	Ⅲ H-12	床面	205	円形周縁加工	2.45	1.96	0.42	2.60	黒曜石	
IV-103	11	78	スクレイパー	Ⅲ H-12	覆土	12	周縁加工刃部急角度	2.25	2.10	0.62	2.70	黒曜石	
IV-103	12	78	スクレイパー	Ⅲ H-12	覆土	29	円形周縁加工	2.20	2.40	0.65	3.40	黒曜石	
IV-103	13	78	スクレイパー	Ⅲ H-12	覆土	167	周縁加工刃部急角度	2.40	3.80	1.20	9.90	黒曜石	
IV-103	14	78	スクレイパー	Ⅲ H-12	覆土	73	周縁加工刃部急角度	2.05	2.60	0.90	4.70	黒曜石	

表IV-18 遺構出土掲載石器等一覧(3)

図 番号	掲載 番号	図版 番号	器種	遺構 グリッド	層位	遺物 番号	形状	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材等	備考
IV-103	15	78	スクレイパー	Ⅲ H-12	覆土	53	周縁加工刃部急角度	2.46	1.90	0.96	5.10	黒曜石	
IV-104	16	78	スクレイパー	Ⅲ H-12	床面直上	206	不定形	2.55	4.20	1.30	10.00	頁岩	
IV-104	17	78	石斧	Ⅲ H-12	覆土	104	短冊形・全面研磨	6.55	3.10	1.40	49.00	緑色泥岩	
IV-104	18	78	石斧片	Ⅲ H-12	床面直上	245	短冊形・全面研磨	8.30	4.05	1.10	62.00	緑色泥岩	取り上げNo14
IV-104	19	78	砥石	Ⅲ H-12	床面直上	186	板状	20.50	10.60	1.90	603.00	砂岩	取り上げNo1
IV-104	20	78	石槍またはナイフ	Ⅲ H-12HP-8	覆土	246	菱形	7.20	2.45	0.89	11.80	黒曜石	
IV-104	21	78	石槍またはナイフ片	Ⅲ H-12HFC-2	床直	191	—	(2.25)	81.83	0.60	(2.70)	黒曜石	
IV-104	22	78	石槍またはナイフ片	Ⅲ H-12HFC-2	床直	187	菱形	2.90	1.65	0.55	2.10	黒曜石	
IV-104	23	78	石槍またはナイフ片	Ⅲ H-12HFC-2	床直	190	—	2.60	2.00	0.60	2.80	黒曜石	
IV-104	24	78	石槍またはナイフ片	Ⅲ H-12HFC-2	床直	188	菱形	(3.75)	1.95	0.60	(3.70)	黒曜石	
IV-104	25	78	石槍またはナイフ片	Ⅲ H-12HFC-2	床直	189	—	2.25	2.35	0.80	4.70	黒曜石	
IV-104	26	78	石槍またはナイフ片	Ⅲ H-12HFC-2	床直	193	—	2.90	1.10	0.80	4.40	黒曜石	
IV-104	27	78	石槍またはナイフ片	Ⅲ H-12HFC-2	床直	192	—	3.75	2.45	0.80	6.90	黒曜石	
IV-104	28	78	両面調整石器	Ⅲ H-12HFC-2	床直	194	—	4.20	2.80	1.30	13.90	黒曜石	
IV-104	29	78	スクレイパー	Ⅲ H-12HFC-2	床直	195	片面全面加工	3.10	2.10	1.40	7.80	黒曜石	
IV-105	1	79	石鏃	Ⅲ H-16	覆土中	30	有茎・鋒先形	3.22	1.43	0.40	1.60	黒曜石	
IV-105	2	79	石斧	Ⅲ H-16	覆土上	18	短冊形・全面研磨	7.90	4.20	1.90	102.00	安山岩	旧Ⅲ P-4
IV-105	1	79	砥石	Ⅲ P-2	覆土中・下	4・6	板状	16.35	9.85	1.55	269.00	砂岩	2点接合。
IV-105	1	79	たたき石	Ⅲ P-6	覆土	8	亜円礫素材・下端使用	8.15	7.45	4.85	361.00	玄武岩	取り上げNo2
IV-105	2	79	たたき石?	Ⅲ P-6	覆土	13	亜円礫素材・周縁使用	6.25	4.80	4.00	552.00	粗粒玄武岩	取り上げNo7
IV-105	1	79	たたき石	Ⅲ P-12	覆土下	68	亜円礫素材	7.90	5.70	4.90	340.00	粗粒玄武岩	取り上げNo2.
IV-106	2	79	たたき石	Ⅲ P-12	覆土下	67	亜円礫素材	8.95	6.30	4.00	328.00	泥岩	取り上げNo1.3点接合。
IV-106	3	79	たたき石	Ⅲ P-12	覆土下	69	石斧転用	14.60	5.00	4.00	381.00	粗粒玄武岩	取り上げNo3
IV-106	4	79	砥石	Ⅲ P-12	覆土下	92	板状	11.40	24.65	6.00	2,145.00	砂岩	
IV-106	1	79	石鏃	Ⅲ P-14	床面直上	6	三角形弱凹基	3.00	1.33	0.20	0.90	黒曜石	産地分析試料11。
IV-106	2	79	石鏃	Ⅲ P-14	床面直上	2	有茎・鋒先形	3.00	1.52	0.50	2.80	黒曜石	産地分析試料12。
IV-106	3	79	スクレイパー	Ⅲ P-14	床面直上	1	縦長両側縁	3.24	1.50	0.30	1.90	黒曜石	産地分析試料13。
IV-106	4	79	スクレイパー	Ⅲ P-14	床面直上	5	縦長両側縁	4.60	2.33	0.95	9.10	黒曜石	産地分析試料15。
IV-107	5	79	スクレイパー	Ⅲ P-14	床面直上	3	縦両側縁	(3.80)	2.75	0.66	(8.50)	黒曜石	産地分析試料14。
IV-107	6	79	スクレイパー	Ⅲ P-14	床面直上	8	縦長両側縁	11.70	2.40	0.90	26.40	黒曜石	産地分析試料16。
IV-107	7	79	石斧	Ⅲ P-14	床面直上	4	小型・全面研磨	4.15	2.04	1.05	(15.00)	緑色泥岩	光沢(刃部<体部)。刃部再生。研磨後線顕著。
IV-107	1	80	石鏃	Ⅲ P-16	覆土上	35	菱形	4.95	1.85	0.60	3.70	黒曜石	取り上げNo1
IV-107	1	80	石鏃	Ⅲ P-24	覆土	23	三角形平基	2.23	0.95	0.30	0.40	黒曜石	
IV-107	2	80	石鏃	Ⅲ P-24	覆土上	5	剥片の一端を錐部とする	1.90	1.65	0.65	2.10	黒曜石	
IV-107	3	80	ナイフ片	Ⅲ P-24	覆土	4	有柄・刃部を欠く	(3.30)	3.00	0.72	(7.90)	黒曜石	
IV-107	4	80	スクレイパー	Ⅲ P-24	覆土	25	小剥片素材・周縁加工	2.26	2.10	1.05	3.60	黒曜石	
IV-107	5	80	スクレイパー	Ⅲ P-24	覆土	24	小剥片素材・周縁加工	2.45	2.70	0.96	4.90	黒曜石	
IV-107	6	80	スクレイパー	Ⅲ P-24	覆土	7	円形・周縁加工	2.95	2.30	0.75	4.70	黒曜石	
IV-107	7	80	スクレイパー	Ⅲ P-24	覆土	35	小剥片素材・刃部急角度	2.58	2.90	1.20	8.10	黒曜石	取り上げNo4
IV-107	8	80	楔形石器	Ⅲ P-24	覆土	34	—	3.60	3.00	1.02	11.40	黒曜石	取り上げNo3
IV-119	1	82	石槍またはナイフ	Ⅲ P-26	坑底直上	1	有茎凸基~木葉形	8.00	2.65	0.95	14.40	黒曜石	
IV-119	2	82	石槍またはナイフ	Ⅲ P-26	坑底直上	2・3	木葉形	10.55	(3.05)	0.80	20.60	黒曜石	2点接合。
IV-124	1	80	つまみ付ナイフ	Ⅲ H-9	覆土1	90	縦型両面全面加工	9.75	4.60	1.40	45.50	黒曜石	
IV-124	2	80	たたき石	Ⅲ H-9	覆土1	56	扁平礫・面使用	9.75	8.20	2.70	331.00	砂岩	すり石としても使用。
IV-124	3	80	たたき石	Ⅲ H-9	覆土1	54	長軸両端使用・下端打ち欠き	12.10	5.51	2.20	190.00	砂岩	
IV-124	4	80	たたき石	Ⅲ H-9	覆土1	23	下端打ち欠き	17.30	8.90	5.90	1,394.00	砂岩	
IV-124	5	80	たたき石	Ⅲ H-9	覆土2	178	亜角礫素材	5.51	5.59	3.51	170.00	砂岩	すり石としても使用。
IV-125	6	80	たたき石	Ⅲ H-9	覆土1	91	扁平礫素材	16.45	9.05	5.55	948.00	砂岩	地熱。全体敲打。
IV-125	7	80	たたき石	Ⅲ H-9	覆土1	204	—	14.35	8.70	5.40	964.00	砂岩	
IV-125	8	80	砥石	Ⅲ H-9	覆土1	50	全面的に使用	15.90	10.50	4.00	621.00	砂岩	たたき石としても使用?
IV-126	9	81	砥石	Ⅲ H-9	覆土1	49	板状・全面的に使用	12.10	8.90	4.00	437.00	アルコーズ砂岩	たたき石としても使用?
IV-126	10	81	たたき石	Ⅲ H-9 HS-2	覆土1	106	小礫素材	7.30	4.05	3.92	140.00	砂岩	
IV-126	11	81	たたき石	Ⅲ H-9HS-2	覆土1	104	小礫素材・断面三角形	7.20	4.35	4.00	142.00	砂岩	
IV-126	12	81	たたき石	Ⅲ H-9 HS-2	覆土1	105	小礫素材	8.31	3.50	3.40	116.00	砂岩	
IV-126	13	81	たたき石	Ⅲ H-9 HS-2	覆土1	107	小礫素材	6.40	3.92	3.30	116.00	砂岩	
IV-126	14	81	たたき石	Ⅲ H-9 HS-4	覆土1	147	小礫素材	7.20	4.05	2.70	90.00	砂岩	
IV-127	1	81	たたき石	Ⅲ H-14	床面直上	117	—	13.75	5.95	4.20	463.00	砂岩	被熱。
IV-127	2	81	たたき石	Ⅲ H-14	床面直上	110	—	9.90	7.40	3.90	434.00	砂岩	すり石としても使用。
IV-127	1	81	石鏃	Ⅲ H-15	覆土1	23	縦長・片面全面加工	5.88	1.42	0.66	5.40	黒曜石	
IV-127	2	81	スクレイパー	Ⅲ H-15	覆土1	20	縦長両側縁	7.15	3.46	1.22	26.00	頁岩	
IV-127	3	81	スクレイパー	Ⅲ H-15	覆土1	22	円形全面加工	4.00	3.73	1.00	16.30	黒曜石	
IV-127	4	81	石斧	Ⅲ H-15	覆土2	50	撥形・全面研磨整形	11.07	6.04	1.94	224.00	片岩	
IV-127	5	81	砥石	Ⅲ H-15	覆土2	60	板状	19.60	17.30	1.75	690.00	砂岩	
IV-136	1	82	砥石	Ⅲ S-10	Ⅲ	12	—	15.70	11.85	4.10	830.00	砂岩	3点接合。
IV-136	1	82	石鏃	Ⅲ F-15B	焼土	1	—	5.20	4.40	0.95	2.30	砂岩	被熱。砥石片転用。
IV-163	1	82	たたき石	Ⅲ H-4	覆土	171	亜円礫素材・主に下部部	7.10	5.50	3.60	224.00	粗粒玄武岩	
IV-163	2	82	たたき石	Ⅲ H-4	覆土	46	棒状亜円礫・下部部使用	12.70	3.70	2.40	147.00	泥岩	
IV-163	5	82	たたき石	Ⅲ H-4	覆土	125	亜円礫素材	6.35	3.45	3.30	111.00	粗粒玄武岩	すり石としても使用。
IV-163	3	82	たたき石	Ⅲ H-4	覆土	154	棒状亜円礫・下部部使用	13.20	5.60	4.70	504.00	砂岩	下端打ち欠き。
IV-163	4	82	たたき石	Ⅲ H-4	覆土	45	亜円礫素材	7.40	4.05	3.00	127.00	珪化岩?	すり石としても使用。
IV-163	6	82	たたき石	Ⅲ H-4	覆土	127	—	13.40	7.70	5.60	885.00	砂岩	
IV-163	7	82	たたき石	Ⅲ H-4	覆土	172	—	11.60	9.00	4.20	610.00	泥岩	すり石としても使用。
IV-164	8	82	すり石	Ⅲ H-4	覆土	47	亜円礫素材	7.60	5.75	3.90	244.00	泥岩	
IV-164	9	82	すり石	Ⅲ H-4	覆土	123	亜円礫素材	12.65	8.90	5.40	912.00	砂岩	
IV-164	10	83	台石	Ⅲ H-4	覆土	128	角柱状	27.10	7.90	7.60	2,859.00	砂岩	
IV-164	11	83	台石	Ⅲ H-4	床面直上	169	—	23.00	11.60	9.60	3,500.00	泥岩	
IV-165	12	83	台石	Ⅲ H-4	床面直上	168	—	19.30	11.70	6.40	2,276.00	砂岩	
IV-165	13	83	台石	Ⅲ H-4	覆土	24	—	21.20	13.65	7.90	3,090.00	粗粒玄武岩	
IV-165	14	83	台石・石皿	Ⅲ H-4	覆土	120	—	29.40	19.00	1.65	1,686.00	砂岩	
IV-165	15	83	鉄製品	Ⅲ H-4	覆土	—	—	5.38	0.90	0.92	5.60	鉄	

表Ⅳ-19 遺構出土掲載石器一覧(4)

図番号	掲載番号	図版番号	器種	遺構グリッド	層位	遺物番号	形状	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
IV-165	16	83	台石?	Ⅲ H-4 HP-1	覆土	202	—	33.20	14.80	8.00	6,200.00	砂岩	
IV-166	17	83	たたき石?	Ⅲ H-4 HS-1	床面直上	182	小礫素材	5.70	3.90	2.70	84.00	粗粒玄武岩	
IV-166	18	83	たたき石	Ⅲ H-4 HS-1	床面直上	188	小礫素材	7.20	3.60	3.10	85.00	砂岩	
IV-166	19	83	たたき石	Ⅲ H-4 HS-1	床面直上	186	小礫素材	7.25	4.20	2.25	80.00	砂岩	
IV-166	20	83	たたき石	Ⅲ H-4 HS-1	床面直上	185	小礫素材	7.00	3.35	2.50	81.00	砂岩	
IV-166	21	84	たたき石	Ⅲ H-4 HS-1	床面直上	184	小礫素材	7.30	3.80	2.65	107.00	粗粒玄武岩	
IV-166	22	84	たたき石	Ⅲ H-4 HS-1	床面直上	187	小礫素材	7.85	3.35	3.40	157.00	砂岩	
IV-166	23	84	たたき石	Ⅲ H-4 HS-1	床面直上	189	小礫素材	7.20	3.75	3.30	114.00	砂岩	
IV-166	24	84	たたき石	Ⅲ H-4 HS-1	床面直上	183	扁平礫素材	8.85	4.60	1.90	112.00	粗粒玄武岩	
IV-166	25	84	すり石	Ⅲ H-4 HS-1	床面直上	181	亜円礫素材	7.85	5.70	3.10	201.00	砂岩?	
IV-166	1	84	石鏃	Ⅲ H-5	掘り上げ土	311	三角形弱凹基	2.20	1.35	0.40	0.80	黒曜石	
IV-166	2	84	石槍またはナイフ	Ⅲ H-5	覆土	57	木葉形~菱形	7.15	3.30	1.00	17.70	黒曜石	
IV-166	3	84	石鏃	Ⅲ H-5	掘り上げ土	303	縦長全面加工	3.70	1.50	0.50	2.90	黒曜石	
IV-166	4	84	石鏃	Ⅲ H-5	覆土	58	縦長片面加工	4.60	3.00	1.40	13.20	黒曜石	被熱。
IV-166	5	84	スクレイパー	Ⅲ H-5	掘り上げ土	316	縦長剥片素材側縁加工	3.30	2.20	0.65	4.10	黒曜石	
IV-167	6	84	たたき石	Ⅲ H-5	覆土	106	棒状亜円礫・長軸両端	15.15	6.10	4.50	673.00	粗粒玄武岩	
IV-167	7	84	たたき石	Ⅲ H-5	床面	223	棒状亜円礫・長軸両端	14.60	5.80	4.45	556.00	花崗岩	
IV-167	8	84	たたき石	Ⅲ H-5	覆土	111	—	15.05	8.10	5.80	915.00	砂岩	
IV-167	9	84	たたき石	Ⅲ H-5	覆土	107	下端打ち欠き	13.95	6.94	5.20	674.00	砂岩	
IV-168	10	84	たたき石	Ⅲ H-5	覆土	148	小亜円礫素材・周縁	(4.50)	5.05	2.05	(60.00)	砂岩	
IV-168	11	84	たたき石	Ⅲ H-5	覆土	74	全面的に使用	14.10	8.05	7.25	1,262.00	砂岩	すり石としても使用。
IV-168	12	84	すり石	Ⅲ H-5	覆土	43	板状亜円礫・下側面	6.90	8.90	1.90	112.00	砂岩	たたき石としても使用。
IV-168	13	84	砥石	Ⅲ H-5	覆土	9	板状	6.30	7.30	1.30	63.00	砂岩	
IV-168	14	85	砥石	Ⅲ H-5	覆土	113	角柱状	5.70	4.90	3.90	106.00	アルゴース砂岩	有溝多数。
IV-169	15	85	台石?	Ⅲ H-5	床直	184	—	33.00	15.00	12.90	(9,200.00)	砂岩	
IV-169	18	85	石皿片	Ⅲ H-5	床面	224	—	(9.10)	(11.60)	(5.10)	(648.00)	凝灰岩	被熱。
IV-169	17	85	石皿・台石	Ⅲ H-5	覆土	225	—	20.50	18.50	7.70	4,500.00	砂岩	
IV-168	16	85	石皿・台石	Ⅲ H-5	覆土	171	—	14.90	18.70	4.00	1,444.00	砂岩	被熱。側縁に敲打痕。
IV-170	19	85	たたき石	Ⅲ H-5 HS-2	床直	187	小礫素材	6.50	3.85	3.90	108.00	砂岩	
IV-170	20	85	たたき石	Ⅲ H-5 HS-2	床直	186	小礫素材	7.70	4.50	2.85	122.00	砂岩	
IV-170	21	85	たたき石	Ⅲ H-5 HS-2	床直	188	小礫素材	6.05	4.70	3.45	140.00	砂岩	
IV-172	1	86	すり石	Ⅲ H-2	床面直上	10	亜円礫素材	7.45	6.05	2.95	192.00	泥岩	
IV-172	2	86	すり石	Ⅲ H-2	覆土	3	亜円礫素材	7.90	5.50	3.10	200.00	花崗岩	
IV-172	3	86	すり石	Ⅲ H-2	覆土	4	亜円礫素材	7.80	6.30	4.10	300.00	砂岩	
IV-172	4	86	砥石	Ⅲ H-2	覆土	11	板状	16.35	12.65	4.10	1,060.00	砂岩	
IV-173	5	86	台石?	Ⅲ H-2	カマド1	25・26	—	28.10	18.10	9.90	6,200.00	砂岩	接合する。取り上げNo.3とNo.4
IV-173	1	86	石鏃	Ⅲ H-3	覆土	19	有柄平基	2.70	1.50	0.40	0.80	黒曜石	
IV-173	2	86	石鏃	Ⅲ H-3	覆土	14	石鏃転用?	2.50	1.50	0.40	1.10	黒曜石	
IV-173	3	86	たたき石	Ⅲ H-3	覆土	8	角柱状小礫	8.10	3.45	3.15	133.00	砂岩	すり石としても使用?
IV-173	4	86	たたき石	Ⅲ H-3	覆土	37	亜円礫素材	10.50	9.35	7.40	1,019.00	砂岩	すり石としても使用
IV-174	5	86	すり石	Ⅲ H-3	覆土	3	亜円礫素材	(7.60)	6.95	3.20	(254.00)	泥岩	被熱。
IV-174	7	86	すり石?	Ⅲ H-3	覆土	16	亜円礫素材	10.35	6.95	6.40	647.00	泥岩	
IV-174	6	86	すり石	Ⅲ H-3	カマド1	80	亜円礫素材	7.40	6.90	5.50	388.00	砂岩	
IV-174	8	86	砥石	Ⅲ H-3	覆土	9	板状	14.95	8.90	5.10	744.00	砂岩	

表Ⅳ-20 包含層出土掲載拓影土器一覧(1)

図	掲載番号	図版	破片番号	出土地点	層位	遺物番号	点数	合計	残片	分類	型式名
IV-25	1	52	2①	f 6区	V	10	2	2	e 6区 V層 遺物番号4他計7点	I b	東銅路Ⅱ式
	2	52	2②	e 5区	V	2	2				
IV-25	3	52	3	f 8区	V	11	1	1	—	I b	東銅路Ⅱ式
IV-25	4	52	4①	f10区	V	16	1	2	f10区 V層 遺物番号16他計24点	I b	東銅路Ⅱ式
	5	52	4②	f 6区	V	12	3				
	6	52	4③	f 6区	V	9	1				
IV-25	7	52	1①	e14区	V	8	6	6	e14区 V層 遺物番号8他計25点	I b	東銅路Ⅱ式
IV-25	8	52	1②	f 4区	V	1	1	1	—	I b	東銅路Ⅱ式
IV-175	1	87	10	h 5区	Ⅱ	1	1	2	h 5区 Ⅱ層 遺物番号1他計8点	I b	東銅路Ⅱ式
				i 5区	Ⅱ	1	1				
IV-175	2	87	11	d14区	Ⅲ	4	5	5	d14区 Ⅲ層 遺物番号3他計6点	Ⅲ b	北筒Ⅱ式
IV-175	3	87	18	h10区	Ⅱ	10	1	1	—	Ⅲ b	北筒Ⅱ式
IV-175	4	87	14	g 8区	Ⅲ	3	1	6	g 8区 Ⅲ層 遺物番号3他計11点	IV a	北筒Ⅴ式
				g 8区	Ⅱ	4	5				
IV-175	5	87	15	h13区	Ⅱ	13	4	4	h12区 Ⅱ層 遺物番号5他計15点	IV a	北筒Ⅴ式
IV-176	6	87	13	Ⅲ H-7	覆土中	113	6	10	Ⅲ H-7 覆土中 遺物番号113他計14点	IV a	北筒Ⅴ式
				f10区	Ⅲ	17	3				
				f10区	Ⅲ	21	1				
IV-176	7	87	12①	Ⅲ H-7	覆土上	53	1	7	—	IV a	北筒Ⅴ式
				Ⅲ H-7	覆土中	96	1				
				f10区	Ⅲ	18	1				
IV-176	8	88	12②	f10区	Ⅲ	18	2	2	—	IV c	堂林式
IV-177	9	88	23	e26区	Ⅲ	1	1	1	—	IV c	堂林式

表IV-21 包含層出土掲載拓影土器一覧(2) 石器一覧

図	掲載 番号	図版	破片 番号	出土地点	層位	遺物 番号	点数	合計	残片	分類	型式名
IV-177	10	88	19	h10区	Ⅲ	13	4	5	—	Ⅵb	下田ノ沢Ⅰ式
				h10区	Ⅲ	14	1				
IV-177	11	88	17	h9区	Ⅲ	7	2	2	—	Ⅵb	下田ノ沢Ⅰ式
IV-177	12	88	21	h17区	Ⅱ	7	1	1	Ⅲ H-1 覆土上 遺物番号29計1点	Ⅵb	下田ノ沢Ⅰ式
IV-177	13	88	27	Ⅲ H-4	覆土	110	1	4	g19区 Ⅱ層 遺物番号6他計6点	Ⅵb	下田ノ沢Ⅰ式
				Ⅲ H-4	覆土	111	1				
				Ⅲ P-12	覆土上	34	1				
				g19区	Ⅲ	10	1				
IV-177	14	88	20	h13区	Ⅲ	9	3	3	1	Ⅵb	下田ノ沢Ⅰ式
IV-177	15	88	16	d18区	Ⅲ	13	4	4	—	Ⅵb	下田ノ沢Ⅱ式
IV-177	16	88	22	h17区	攪乱	13	1	1	—	Ⅵb	下田ノ沢Ⅱ式
IV-178	19	88	24	k4区	Ⅲ	5	3	3	k4区Ⅲ層遺物番号5他計83点	Ⅵc	後北C ₂ -D式
IV-178	20	88	25	f16区	Ⅲ	13	1	1	f16区Ⅱ層遺物番号5計3点	Ⅶ	擦文土器
IV-178	21	88	26	g13区	Ⅱ	11	1	1	—	Ⅶ	擦文土器

表IV-22 包含層(V層)出土掲載石器一覧

図 番号	掲載 番号	図版 番号	器種	遺構 グリッド	層位	遺物 番号	形状	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	備考
IV-26	1	53	石鏃片	e3	V	22	三角形長身?	(2.80)	(1.04)	0.34	(0.80)	黒曜石	
IV-26	2	53	石鏃	f5	V	21	五角形長身?平基	2.95	1.00	0.22	0.50	黒曜石	
IV-26	3	53	石鏃	f5	V	46	長身平基	(4.94)	1.15	0.40	(2.40)	黒曜石	
IV-26	4	53	石鏃	h9	V	39	長鋒形	3.55	1.20	0.45	(1.70)	黒曜石	
IV-26	5	53	石鏃片	g8	V	37	長鋒形	3.10	1.55	0.50	(2.50)	黒曜石	
IV-26	6	53	石鏃	f6	V	33	逆三角形・周縁加工	3.45	1.60	0.65	2.70	黒曜石	被熱加工。
IV-26	7	53	石鏃	e5	V	8	長身族転用?	(4.60)	1.75	0.55	2.70	黒曜石	被熱加工。
IV-26	8	53	ナイフ	h14	V	31	有柄両面全面	5.00	2.85	1.20	14.40	黒曜石	
IV-26	9	53	彫器	e13	V	111	側刃	2.20	1.90	6.50	2.60	黒曜石	
IV-26	10	53	彫器	i8	V	12	側刃	2.58	1.11	0.48	1.70	黒曜石	
IV-26	11	53	彫器	f7	V	27	側刃	2.60	1.35	0.65	2.30	黒曜石	
IV-26	12	53	彫器	f6	V	34	側刃	2.60	1.95	0.45	2.20	黒曜石	
IV-26	13	53	彫器	f7	V	26	側刃	3.17	1.68	0.50	3.10	黒曜石	
IV-26	14	53	彫器	f8	V	17	側刃	3.71	1.45	0.65	3.70	黒曜石	
IV-26	15	53	彫器	e10	V	56	側刃	3.80	1.65	0.55	2.70	黒曜石	
IV-26	16	53	彫器	f7	V	25	側刃	3.30	2.00	0.75	5.00	黒曜石	
IV-26	17	53	彫器	f7	V	24	側刃	4.20	2.05	0.90	7.50	黒曜石	
IV-26	18	53	彫器	e4	V	40	側刃	4.10	2.10	1.00	9.50	黒曜石	
IV-26	19	53	彫器	h8	V	35	斜刃	5.00	3.00	0.85	13.80	黒曜石	
IV-26	20	53	彫器	f6	V	35	斜刃	4.85	2.60	1.75	21.00	黒曜石	
IV-26	21	53	彫器片	f8	V	21	斜刃	2.60	2.40	0.75	4.50	黒曜石	
IV-26	22	53	削片	f6	V	28	—	3.25	0.55	0.40	0.60	黒曜石	
IV-26	23	53	石刃	g9	V	47	—	3.32	1.25	0.46	1.70	黒曜石	
IV-26	24	53	石刃	h6	V	10	—	3.60	2.44	0.72	6.10	黒曜石	
IV-27	25	53	スクレイパー	i12	V	32	木葉形	3.10	1.54	0.50	2.20	黒曜石	
IV-27	26	53	スクレイパー	e5	V	10	石刃素材	3.30	1.90	0.45	2.80	黒曜石	
IV-27	27	53	スクレイパー	g10	V	113	石刃素材	3.80	1.50	0.40	2.00	黒曜石	石刃。
IV-27	28	53	スクレイパー片	g9	V	57	石刃素材	2.80	1.32	0.32	0.90	黒曜石	石刃素材 被熱
IV-27	29	53	スクレイパー	e4	V	41	縦長片面全面加工	5.20	2.45	1.00	11.80	黒曜石	
IV-27	30	53	楔形石器	g10	V	120	—	2.50	1.32	1.00	2.70	黒曜石	
IV-27	31	53	楔形石器	e5	V	9	—	3.11	2.33	1.10	7.40	黒曜石	
IV-27	32	53	楔形石器	g9	V	42	—	3.53	2.30	1.68	14.50	黒曜石	
IV-27	33	53	楔形石器	h8	V	34	—	2.71	3.19	1.13	9.70	黒曜石	
IV-27	34	53	石核	f6	V	43	—	2.50	3.16	2.80	17.60	黒曜石	
IV-27	35	53	石核	f5	V	36	—	3.56	1.81	1.56	11.20	黒曜石	
IV-27	36	53	石核	e7	Ⅵ	45	—	1.71	2.58	1.66	7.50	黒曜石	
IV-27	37	53	石斧	f9	V	83	小型・全面研磨	5.90	2.50	1.15	29.00	蛇紋岩	
IV-27	38	53	石斧	f8	V	8	—	(6.70)	2.95	1.70	47.00	蛇紋岩	基部片。磨り切り溝有。
IV-27	39	53	石斧	f6	V	38	短冊形	5.48	4.09	2.00	63.00	泥岩	刃部片。被熱で裏面赤褐色。
IV-27	40	53	たたき石	f13	Ⅵ	59	垂円礫素材	8.40	6.50	5.70	405.00	粗粒玄武岩	被熱。
IV-27	41	53	たたき石	g8	V	51	両端部使用	11.90	7.30	6.00	721.00	粗粒玄武岩	
IV-28	42	53	たたき石	h17	Ⅵ	42	両端部使用	10.80	8.65	5.30	796.00	粗粒玄武岩	
IV-28	43	53	たたき石	e4	V	48	両端部と面使用	14.35	7.90	7.50	1,125.00	粗粒玄武岩	被熱。
IV-29	44	54	たたき石	g17	Ⅵ	44	打ち欠きで鋭い稜線作出	24.70	11.00	7.90	2,046.00	凝灰質砂岩	
IV-29	45	54	たたき石	f9	V	95	打ち欠きで鋭い稜線作出	9.40	19.60	3.60	924.00	凝灰質砂岩	
IV-29	46	54	砥石	e6	V	16	角柱状	8.85	5.00	3.65	140.00	アルコース砂岩	有溝。
IV-30	47	54	砥石	j11	V	10	角柱状	9.20	5.45	4.40	221.00	砂岩	有溝。
IV-30	48	54	砥石	g5	V	23	板状	15.60	10.20	6.30	836.00	アルコース砂岩	
IV-30	49	54	砥石	h9	V	44	板状	8.40	7.30	3.75	218.00	アルコース砂岩	有溝。
IV-30	50	54	台石	g13	V	64	—	16.00	16.00	6.60	2,516.00	砂岩	

表Ⅳ-23 包含層(Ⅲ層・Ⅰ層ほか)出土掲載石器一覧(1)

図 番号	掲載 番号	図版 番号	器種	グリッド	層位	遺物 番号	形状	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	長さ× 長軸長	長さ× 短軸長	石材	備考	
IV-179	1	90	石鏃	h5	Ⅱ	1	菱形(正)	1.84	1.00	0.25	0.30	0.163	—	黒曜石		
IV-179	2	90	石鏃	f7	Ⅱ	64	菱形(正)	(1.97)	1.10	0.30	(0.50)	(0.253)	—	黒曜石		
IV-179	3	90	石鏃	f7	Ⅲ	1	菱形(偏)	3.00	1.45	0.60	1.80	0.600	—	黒曜石		
IV-179	4	90	石鏃	i13	Ⅲ	1	菱形(正)	(3.50)	1.52	0.44	(1.60)	(0.450)	—	黒曜石		
IV-179	5	90	石鏃	f18	Ⅲ	2	菱形(正)	(4.10)	1.40	0.46	(1.70)	(0.417)	—	黒曜石		
IV-179	6	90	石鏃	f18	Ⅲ	14	菱形(正)	(4.82)	1.90	0.70	(4.20)	(0.871)	—	黒曜石		
IV-179	7	90	石鏃	e17	Ⅲ	17	木葉形	(3.31)	1.32	0.56	(2.20)	(0.665)	—	黒曜石		
IV-179	8	90	石鏃	f18	Ⅲ	15	木葉形ないし菱形	(4.70)	1.71	0.44	(3.60)	(0.766)	—	黒曜石		
IV-179	9	90	石鏃	i13	Ⅰ	23	有柄凸基	(2.00)	1.42	0.35	(0.70)	0.350	—	黒曜石		
IV-179	10	90	石鏃	f10	Ⅲ	30	有柄凸基	2.30	1.00	0.35	0.60	0.261	—	黒曜石		
IV-179	11	90	石鏃	f1	Ⅲ	13	有柄凸基	3.05	1.50	0.50	1.50	0.492	—	黒曜石		
IV-179	12	90	石鏃	f13	Ⅲ	10	有柄凸基	(2.53)	0.93	0.40	(0.60)	—	—	黒曜石		
IV-179	13	90	石鏃	g10	Ⅲ	21	有柄凸基	(3.36)	1.44	0.55	(1.80)	(0.536)	—	黒曜石		
IV-179	14	90	石鏃	e4	Ⅲ	10	有柄凸基	(4.48)	1.74	0.60	(3.70)	—	—	黒曜石		
IV-179	15	90	石鏃	g6	Ⅱ	4	有柄凸基	3.64	(1.21)	0.40	(1.00)	(0.275)	—	黒曜石		
IV-179	16	90	石鏃	g20	Ⅱ	20	三角形平基	1.62	(0.96)	0.16	(0.22)	(0.136)	—	黒曜石		
IV-179	17	90	石鏃	i13	Ⅲ	9	三角形平基?	(2.24)	(1.14)	0.30	(0.70)	0.313	—	黒曜石		
IV-179	18	90	石鏃	g19	Ⅲ	22	三角形弱凹基	(2.10)	1.06	0.26	(0.50)	(0.238)	—	黒曜石		
IV-179	19	90	石鏃	h9	Ⅲ	15	三角形弱凹基	(2.05)	1.16	0.20	(0.30)	0.146	—	黒曜石		
IV-179	20	90	石鏃	i13	Ⅲ	8	三角形弱凹基	2.40	1.03	0.22	0.60	0.250	—	黒曜石		
IV-179	21	90	石鏃	i18	Ⅲ	3	三角形平基	2.50	1.05	0.20	(0.40)	0.160	—	黒曜石	産地分析試料17。	
IV-179	22	90	石鏃	d18	Ⅲ	28	三角形弱凹基?	(2.41)	1.28	0.27	(0.70)	(0.290)	—	黒曜石		
IV-179	23	90	石鏃	i18	Ⅲ	2	三角形弱凹基	(2.75)	1.10	0.25	(0.60)	(0.218)	—	黒曜石		
IV-179	24	90	石鏃	d17	Ⅱ	6	三角形弱凹基	2.41	(1.45)	0.27	(0.70)	(0.290)	—	黒曜石		
IV-179	25	90	石鏃	h15	Ⅲ	20	三角形弱凹基	1.90	1.42	0.30	0.50	0.263	—	黒曜石	産地分析試料18。	
IV-179	26	90	石鏃	j21	Ⅲ	1	三角形弱凹基	2.40	1.60	0.26	0.90	0.375	—	黒曜石	産地分析試料19。	
IV-179	27	90	石鏃	g30	Ⅲ	1	五角形凹基	(2.20)	0.75	0.15	(0.20)	(0.091)	—	黒曜石		
IV-179	28	90	石鏃	g11	Ⅱ	8	五角形?	(2.20)	1.10	0.28	(0.60)	(0.273)	—	黒曜石		
IV-179	29	90	石鏃	k4	Ⅰ	1	五角形平基	2.54	1.03	0.22	0.60	0.236	—	黒曜石		
IV-179	30	90	石槍またはナイフ	i20	Ⅲ	3	菱形(偏)	(4.44)	2.38	0.78	(5.90)	(1.329)	—	黒曜石		
IV-179	31	90	石槍またはナイフ	e13	Ⅱ	4	菱形(偏)	4.73	2.90	0.66	5.90	1.247	1.631	—	黒曜石	
IV-179	32	90	石槍またはナイフ	g18	Ⅰ	2	菱形ないし有柄凸基	4.96	2.10	0.53	4.80	0.968	2.362	—	黒曜石	
IV-179	33	90	石槍またはナイフ	e17	Ⅲ	16	菱形(正)	(5.80)	2.42	0.70	(9.10)	(1.569)	—	黒曜石		
IV-179	34	90	石槍またはナイフ	j10	Ⅲ	8	菱形ないし有柄凸基	5.50	2.20	0.78	6.90	1.255	2.500	—	黒曜石	
IV-180	35	90	石槍またはナイフ	g18	Ⅲ	5	菱形(正)	(7.82)	2.37	0.83	(11.20)	(1.432)	—	黒曜石		
IV-180	36	90	石槍またはナイフ	e14	Ⅲ	32	菱形(正)	(7.67)	2.33	0.79	(13.60)	—	—	黒曜石		
IV-180	37	90	石槍またはナイフ	e16	Ⅲ	38	有柄凸基	7.53	2.80	0.91	14.40	1.912	2.689	—	黒曜石	
IV-180	38	90	石槍またはナイフ	e12	Ⅲ	88	有柄凸基	(5.90)	(3.35)	0.50	(7.30)	(1.237)	—	黒曜石		
IV-180	39	90	石槍またはナイフ	i13	Ⅲ	7	有柄凸基	6.14	2.96	7.40	9.60	1.564	2.074	—	黒曜石	
IV-180	40	90	石槍またはナイフ	f18	Ⅲ	12	木葉形	5.16	1.86	0.62	6.40	1.240	2.774	—	黒曜石	
IV-180	41	90	石槍またはナイフ	j22	Ⅲ	9	木葉形	(14.10)	4.25	1.25	(68.70)	(4.872)	—	黒曜石		
IV-180	42	90	石槍またはナイフ	j10	Ⅰ	1	木葉形・菱形	12.40	5.60	1.25	94.00	7.581	2.214	—	砂岩	非実用・模造品?
IV-180	43	90	石槍またはナイフ	e10	Ⅲ	18	木葉形?	(8.70)	3.30	1.00	27.90	—	—	黒曜石		
IV-180	44	90	石槍またはナイフ片	f11	Ⅱ	2	—	(4.38)	3.71	1.19	(15.80)	—	—	黒曜石		
IV-180	45	90	石鏃	d17	Ⅲ	5	縦長剥片素材(周縁加工)	3.63	1.20	0.50	1.80	—	—	黒曜石		
IV-180	46	90	石鏃	排土	排土	1	両面全面加工	3.30	1.90	0.91	6.70	—	—	黒曜石	石槍またはナイフ片転用。	
IV-180	47	90	石鏃	e12	Ⅱ	21	石鏃転用か	3.92	1.28	0.50	2.00	—	—	黒曜石	石鏃転用。	
IV-180	48	90	石鏃	h13	Ⅲ	27	石鏃転用か	3.92	1.70	0.60	3.10	—	—	黒曜石	石鏃転用。	
IV-181	49	90	石鏃	h13	Ⅲ	29	紡錘形断面半円形	5.58	1.80	0.90	13.00	2.330	—	頁岩		
IV-181	50	90	石鏃	j15	攪乱	22	剥片の一端に鈍部	2.10	1.50	0.40	1.00	0.476	—	黒曜石		
IV-181	51	90	石鏃	j10	Ⅲ	7	剥片の一端に鈍部	3.40	(1.85)	0.27	(1.50)	0.441	—	黒曜石		
IV-181	52	91	つまみ付きナイフ	i10	Ⅲ	1	縦長・側縁	3.87	2.59	0.56	5.40	1.395	—	黒曜石		
IV-181	53	91	つまみ付きナイフ	f10	Ⅲ	29	縦長両側縁	(4.15)	(2.15)	0.45	(3.70)	—	—	黒曜石		
IV-181	54	91	つまみ付きナイフ	d18	Ⅲ	24	縦長両側縁	4.90	1.70	0.47	2.80	0.571	—	黒曜石		
IV-181	55	91	つまみ付きナイフ	g10	Ⅲ	15	縦長両側縁・刃部内湾	5.00	2.40	0.50	5.70	1.140	—	黒曜石		
IV-181	56	91	つまみ付きナイフ	d15	Ⅲ	18	縦長側縁	4.85	2.15	0.80	8.00	1.649	—	黒曜石		
IV-181	57	91	つまみ付きナイフ	14	Ⅲ	7	縦長両側縁・刃部内湾	7.30	2.43	0.65	13.00	1.781	—	頁岩		
IV-181	58	91	つまみ付きナイフ	e14	Ⅲ	36	縦長・両面全面	7.20	2.20	0.72	12.10	1.681	—	黒曜石		
IV-181	59	91	スクレイパー	f14	Ⅲ	25	側縁部加工	2.64	1.20	0.30	0.80	0.303	2.200	—	黒曜石	
IV-181	60	91	スクレイパー片	i18	Ⅲ	4	下端部破片・側縁部加工	(2.98)	(1.80)	0.55	(2.50)	—	—	黒曜石		
IV-181	61	91	スクレイパー	f11	Ⅱ	15	側縁部加工	3.66	1.85	0.31	2.00	0.546	1.978	—	黒曜石	刃部縁辺微細剥離。やや摩耗。
IV-181	62	91	スクレイパー片	e11	Ⅱ	2	縦長・側縁部加工	(3.85)	(2.75)	0.40	(4.70)	—	—	黒曜石		
IV-181	63	91	スクレイパー片	i6	Ⅲ	5	縦長・側縁部加工	(3.40)	2.00	0.56	(3.30)	(0.971)	—	黒曜石		
IV-181	64	91	スクレイパー片	i18	Ⅲ	5	縦長・側縁部加工	(3.60)	(2.30)	0.30	(2.20)	(0.611)	—	黒曜石		
IV-181	65	91	スクレイパー	h17	Ⅲ	36	縦長・側縁部加工	4.25	(1.90)	0.55	4.10	0.965	2.237	—	黒曜石	
IV-181	66	91	スクレイパー	i15	Ⅲ	5	縦長・側縁部加工	4.08	2.35	0.40	2.90	0.711	1.736	—	黒曜石	被熱。
IV-181	67	91	スクレイパー	j4	Ⅰ	9	縦長・側縁部加工	5.01	2.61	0.65	9.50	1.896	1.920	—	黒曜石	
IV-181	68	91	スクレイパー	d15	Ⅲ	28	縦長・側縁部加工	5.80	2.37	0.90	11.90	2.052	2.447	—	黒曜石	刃部縁辺微細剥離。やや摩耗。
IV-182	69	91	スクレイパー	f8	Ⅲ	49	縦長・側縁部加工	7.05	3.10	0.60	10.60	1.504	2.274	—	黒曜石	
IV-182	70	91	スクレイパー片	f16	Ⅲ	60	—	(2.22)	(2.30)	(0.74)	(3.70)	—	—	黒曜石		
IV-182	71	91	スクレイパー片	g11	Ⅰ	1	—	(2.36)	2.16	0.75	(4.40)	(1.864)	—	黒曜石	刃部縁辺微細剥離。やや摩耗。	
IV-182	72	91	スクレイパー片	h22	Ⅲ	1	—	(2.83)	2.46	0.46	(3.70)	(1.307)	—	黒曜石		
IV-182	73	91	スクレイパー片	15	Ⅲ	15	—	(2.65)	2.61	0.56	4.00	(1.509)	—	頁岩		
IV-182	74	91	スクレイパー	h10	Ⅱ	5	側縁	2.84	2.50	0.87	4.80	1.690	1.136	—	黒曜石	刃部縁辺微細剥離。やや摩耗。
IV-182	75	91	スクレイパー	g22	Ⅲ	8	縦長・側縁部加工	3.58	1.98	0.40	3.30	0.922	1.808	—	黒曜石	
IV-182	76	91	スクレイパー	e18	Ⅲ	31	縦長・側縁部加工・刃部内湾	3.20	2.25	0.50	2.00	0.625	1.422	—	黒曜石	

表IV-24 包含層(Ⅲ層・I層ほか)出土掲載石器一覧(2)

図 番号	掲載 番号	図版 番号	器種	グリッド	層位	遺物 番号	形状	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	重さ÷ 長軸長	長軸長÷ 短軸長	石材	備考
IV-182	77	91	スクレイパー片	i12	I	1	縦片側縁部加工・ 弱内湾・刃部急角度	(3.30)	(2.10)	0.66	3.40	(1.030)	—	黒曜石	原石面残。
IV-182	78	91	スクレイパー	h18	Ⅲ	3	縦長側縁部加工	3.86	2.50	0.70	6.00	1.554	1.544	頁岩	
IV-182	79	91	スクレイパー	d15	Ⅲ	37	縦長側縁部加工	(3.80)	2.04	0.70	(5.80)	(1.526)	—	黒曜石	
IV-182	80	91	スクレイパー	h7	Ⅲ	7	縦長側縁部加工	3.94	2.17	0.55	5.60	1.421	1.816	黒曜石	刃部縁辺、微細剥離。 やや摩耗。
IV-182	81	91	スクレイパー片	k14	Ⅲ	1	縦長側縁部加工	(3.68)	2.20	0.90	(8.90)	(2.418)	—	黒曜石	
IV-182	82	91	スクレイパー	e17	Ⅲ	18	縦長側縁部加工	3.90	2.65	0.35	3.60	0.923	1.472	黒曜石	石錐転用の可能性。
IV-182	83	91	スクレイパー	e16	Ⅲ	1	縦長側縁部加工	(3.63)	2.90	0.70	(5.60)	(1.543)	—	黒曜石	
IV-182	84	91	スクレイパー	i17	Ⅲ	15	楕円形?・周縁加工	4.10	2.60	0.70	(6.20)	(1.512)	(1.577)	黒曜石	刃部縁辺微細剥離。 やや摩耗。
IV-182	85	91	スクレイパー	e18	Ⅲ	21	縦長側縁部加工	3.73	3.00	1.05	10.70	2.869	1.243	黒曜石	
IV-182	86	91	スクレイパー	k4	Ⅲ	26	縦長側縁部加工	4.98	3.36	0.50	(8.80)	1.767	1.482	黒曜石	原石面残。棒状原 石素材?
IV-182	87	92	スクレイパー	f18	Ⅲ	18	縦長側縁部加工	5.90	4.45	1.12	23.20	3.932	1.326	黒曜石	
IV-182	88	92	スクレイパー	e12	Ⅲ	90	縦長側縁部加工	(5.60)	(3.80)	0.70	(14.20)	(2.536)	(1.474)	黒曜石	
IV-182	89	92	スクレイパー	f18	Ⅲ	1	下端急角度	4.82	2.12	0.99	7.10	1.473	—	黒曜石	石槍またはナイフ 片転用?
IV-183	90	92	スクレイパー	h15	Ⅲ	2	円形周縁加工・ 刃部急角度	1.90	2.35	0.60	3.50	1.489	1.237	黒曜石	刃部縁辺、微細剥離。 やや摩耗。
IV-183	91	92	スクレイパー	k15	Ⅲ	1	円形周縁加工・ 刃部急角度	2.00	2.00	0.80	3.10	1.550	1.000	黒曜石	刃部縁辺微細剥離。 やや摩耗。
IV-183	92	92	スクレイパー片	k11	Ⅲ	4	縦長側縁下端・ 刃部急角度	(4.50)	(3.30)	(1.30)	14.60	—	—	黒曜石	原石面残。棒状原 石素材?
IV-183	93	92	スクレイパー	d15	Ⅲ	38	不定形・周縁微細剥離	3.03	(3.50)	0.70	(7.60)	(2.171)	—	黒曜石	
IV-183	94	92	スクレイパー	e12	Ⅱ	22	不定形全周・刃部急角度	4.13	5.15	1.50	26.70	(5.184)	—	黒曜石	
IV-183	95	92	スクレイパー	h19	Ⅲ	14	不定形周縁	4.48	6.10	1.10	25.20	4.131	1.362	黒曜石	
IV-183	96	92	スクレイパー	j21	Ⅲ	2	円形? 周縁加工	1.64	1.75	0.30	0.70	0.427	1.067	黒曜石	
IV-183	97	92	スクレイパー片	f11	Ⅱ	16	円形? 周縁加工	(1.54)	(2.18)	0.55	(1.70)	—	—	黒曜石	
IV-183	98	92	スクレイパー	i14	Ⅲ	9	円形? 周縁加工	2.16	2.40	0.70	2.40	1.000	1.111	黒曜石	
IV-183	99	92	スクレイパー	h19	Ⅲ	13	円形? 周縁加工・刃部急角度	2.44	1.87	0.55	2.50	1.025	1.305	黒曜石	素材屈曲。
IV-183	100	92	スクレイパー	g17	Ⅱ	11	円形? 周縁加工・刃部急角度	2.63	2.00	0.70	3.60	1.369	1.315	黒曜石	
IV-183	101	92	スクレイパー	h14	Ⅲ	5	円形? 周縁加工	2.65	2.60	0.50	3.20	1.208	1.019	黒曜石	
IV-183	102	92	スクレイパー	f19	I	15	円形? 周縁加工 刃部急角度	2.80	2.50	0.73	5.80	2.071	1.120	黒曜石	
IV-183	103	92	スクレイパー	j22	Ⅲ	1	円形? 周縁加工	(2.20)	(2.30)	1.00	(5.00)	—	—	黒曜石	
IV-183	104	92	スクレイパー	h9	Ⅲ	14	円形?刃部急角度	2.42	2.26	0.86	4.50	1.860	1.071	黒曜石	やや摩耗。転石面 残す。
IV-183	105	92	スクレイパー	h12	Ⅱ	23	楕円形側縁刃部急角度	2.80	1.55	0.72	3.00	1.071	1.806	黒曜石	転石面残。
IV-183	106	92	スクレイパー	f18	Ⅲ	16	下端刃部急角度	2.80	2.34	0.75	4.90	1.849	1.197	黒曜石	転石面残。
IV-183	107	92	スクレイパー	h16	Ⅲ	12	円形・刃部急角度	2.83	2.11	0.92	5.70	2.014	1.341	黒曜石	
IV-183	108	92	スクレイパー	g19	Ⅲ	24	円形・周縁加工・刃部急角度	1.80	1.96	0.64	2.50	1.276	1.089	黒曜石	
IV-183	109	92	スクレイパー	j16	I	6	円形・周縁加工	1.84	1.60	0.50	1.50	0.815	1.150	黒曜石	
IV-184	110	92	スクレイパー	h12	Ⅱ	22	楕円周縁	4.15	2.70	1.30	13.10	3.157	1.537	黒曜石	
IV-184	111	92	スクレイパー	h20	Ⅲ	7	縦側縁加工・内湾・ 下端急角度刃部	3.35	3.10	1.08	11.30	3.373	1.081	黒曜石	原石面残。棒状原 石素材?
IV-184	112	92	スクレイパー	f21	Ⅲ	15	四角形・周縁加工	2.31	2.70	0.48	2.50	1.082	1.169	黒曜石	素材屈曲。
IV-184	113	92	スクレイパー	j13	Ⅲ	11	円形・周縁加工	2.10	2.10	0.60	2.30	1.095	1.000	黒曜石	
IV-184	114	92	スクレイパー	f16	Ⅱ	6	円形・周縁加工・刃部急角度	2.10	2.21	0.60	3.10	1.403	1.052	黒曜石	
IV-184	115	92	スクレイパー	g20	Ⅲ	2	円形・周縁加工・刃部急角度	2.40	2.88	0.83	5.30	1.840	1.200	黒曜石	
IV-184	116	92	スクレイパー	f11	Ⅱ	22	円形・周縁加工・ 刃部急角度	2.50	2.54	0.80	4.30	1.693	1.016	黒曜石	刃部縁辺微細剥離。 やや摩耗。
IV-184	117	92	スクレイパー	g19	Ⅲ	23	円形・周縁加工・刃部急角度	2.41	2.65	0.95	6.50	2.697	1.010	黒曜石	
IV-184	118	92	スクレイパー	f18	Ⅲ	17	円形・周縁加工・刃部急角度	2.41	3.13	0.80	5.70	1.821	1.299	黒曜石	
IV-184	119	92	スクレイパー	j20	Ⅲ	1	円形・周縁加工・刃部急角度	2.61	2.97	0.80	6.70	2.567	1.138	黒曜石	
IV-184	120	92	スクレイパー	h17	Ⅲ	24	円形・周縁加工・刃部急角度	2.72	2.61	0.65	5.70	2.096	1.042	黒曜石	産地分析試料20。
IV-184	121	92	スクレイパー	f14	Ⅲ	19	円形・周縁加工・刃部急角度	2.90	2.90	0.95	8.40	2.897	1.000	黒曜石	
IV-184	122	92	スクレイパー	g17	I	2	円形・周縁加工・刃部急角度	3.27	3.50	0.80	10.30	2.943	1.070	黒曜石	
IV-184	123	92	スクレイパー	f11	Ⅱ	38	円形・周縁加工・刃部急角度	3.58	3.30	0.70	10.60	2.961	1.085	黒曜石	
IV-184	124	92	スクレイパー	h17	Ⅱ	16	円形・周縁加工	3.68	3.10	0.70	8.10	2.201	1.187	黒曜石	
IV-184	125	92	スクレイパー片	g20	Ⅲ	7	円形? 周縁加工	(3.65)	(2.28)	0.55	(5.30)	(1.452)	—	黒曜石	
IV-184	126	92	楔形石器	e9	Ⅲ	30	—	2.98	3.19	1.30	10.90	—	—	黒曜石	
IV-184	127	92	石核	c23	Ⅲ	7	—	2.10	2.70	1.20	6.00	—	—	黒曜石	楔形石器として転用
IV-185	128	92	石斧	f20	Ⅲ	11	全面研磨	4.40	2.80	0.70	16.00	—	—	片岩?	小型。
IV-185	129	92	石斧	f8	Ⅲ	84	全面研磨	5.10	3.25	0.90	22.00	—	—	片岩?	小型。
IV-185	130	92	石斧	e16	Ⅲ	17	全面研磨	8.00	3.82	1.20	55.00	—	—	粘板岩	剥離片に刃部再生か?
IV-185	131	92	石斧	i8	Ⅲ	11	—	13.50	4.85	3.00	308.00	—	—	泥岩	被熱。
IV-185	132	92	石斧	k5	Ⅲ	1	大型石斧の刃部片再加工?	8.75	4.32	2.00	89.00	—	—	緑色泥岩	
IV-185	133	92	石のみ	f17	Ⅲ	44	全面研磨・基部欠損	(3.95)	1.80	0.82	(8.00)	—	—	泥岩	
IV-185	134	92	石のみ	d18	Ⅲ	31	全面研磨	3.92	2.28	0.50	6.00	—	—	泥岩	
IV-185	135	92	石のみ	f9	Ⅲ	70	全面研磨・基部欠損	(4.90)	2.02	0.70	(7.00)	—	—	泥岩	
IV-185	136	93	たたき石	e10	Ⅲ	20	扁平礫素材・側縁部使用	7.15	9.65	3.55	390.00	—	—	砂岩	
IV-185	137	93	たたき石	h20	Ⅲ	24	端部・下面使用	6.80	14.10	5.90	703.00	—	—	砂岩	被熱。すり石とし ても使用。
IV-185	138	92	たたき石	f10	Ⅲ	43	上下両端使用	5.70	5.00	3.60	136.00	—	—	メノウ質頁岩	
IV-186	139	93	たたき石	f10	Ⅲ	44	両面からの打ち欠き	14.65	7.72	3.15	465.00	—	—	凝灰質砂岩	
IV-186	140	93	たたき石	e13	Ⅱ	13	下端たたき潰れ 周辺剥離	16.00	13.75	7.60	2,192.00	—	—	粗粒玄武岩	
IV-186	141	93	すり石	g13	I	28	扁平礫素材・周縁使用	8.80	10.60	2.90	441.00	—	—	砂岩	たたき石としても使用。
IV-186	142	93	石鋸	f10	Ⅲ	47	三縁辺使用	5.60	6.60	1.25	53.00	—	—	砂岩	砥石を転用。
IV-187	143	93	砥石	f17	Ⅲ	33	小型円礫素材、有溝	4.20	4.30	2.35	41.00	—	—	砂岩	
IV-187	144	93	砥石	i13	Ⅲ	6	角柱状・有溝	12.50	5.00	5.50	425.00	—	—	アルコース砂岩	
IV-187	145	93	砥石	i16	Ⅲ	1	板状 複数面使用	14.80	11.20	5.65	1,404.00	—	—	砂岩	
IV-188	146	93	台石	f22	Ⅲ	7	—	18.90	25.50	9.90	6,700.00	—	—	安山岩?	
IV-188	147	93	石皿	e8	Ⅱ	30	—	13.25	19.25	7.80	2,978.00	—	—	砂岩	

V章 自然科学的分析

1 温根沼2遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

1 測定対象試料

温根沼2遺跡は、北海道根室市温根沼271番2外（北緯43°16′28″、東経145°30′18″）に所在し、無名沢に面する海岸段丘上の平坦面から斜面部に位置する。測定対象試料は、竪穴住居跡、土坑等の遺構から出土した木炭34点である（表1）。

試料の年代は、遺構内および周辺の出土土器に基づいて、古い方から順にON2-33、34が縄文時代早期後半（7000BP頃）、ON2-21、22が縄文時代前期後半（5100BP頃）、ON2-30が縄文時代前期後半から後期前葉（5100～3800BP頃）、ON2-18～20が縄文時代中期末葉（4100BP頃）、ON2-12が縄文時代後期前葉（3800BP頃）、ON2-1～3、11、15～17、23～29、31、32が続縄文時代中頃（1900BP頃）、ON2-9、10、13、14がトビニタイ式期（1100BP頃）、ON2-8がトビニタイ式期（1100BP頃）ないし擦文文化期後期（950BP頃）、ON2-4～7が擦文文化期後期（950BP頃）とされる。

2 測定の意義

試料が出土した遺構の絶対年代を明らかにする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸（AAA: Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/l（1 M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1 Mに達した時には「AAA」、1 M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1 mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) δ¹³Cは、試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表し

た値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age: yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0 yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2、3に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2、3に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma=68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma=95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCalv 4.3較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2、3、図1、2に示した。なお、暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BP」または「cal BC/AD」という単位で表され、ここでは前者を表2、図1に、後者を表3、図2に示した。

6 測定結果

測定結果を表1～3、図1、2に示す。較正年代は、全試料をcal BC/ADで算出したほか、縄文時代の年代値となった試料についてはcal BPでも算出した。以下の説明では、縄文時代に属する試料の年代値をcal BPの値 (表2、図1)、それより新しい時代の試料の年代値をcal BC/ADの値で記載した (表3、図2)。また、複数の試料の年代値を比較できるようにマルチプロット図を図3に示している。時期によって4つに分けて図示し、縄文時代早期と中期から後期頃の試料をcal BP、続縄文時代前半頃とトビニタイ式を含む擦文文化期の試料をcal BC/ADで表示した。

以下、出土土器による遺構の推定年代に基づき、縄文時代早期後半、縄文時代前期後半から後期前葉、続縄文時代、トビニタイ式を含む擦文文化期の4時期に分けて説明する。マルチプロット図の区分とおおむね対応するが、マルチプロット図は試料の測定結果に基づいて区分したため、遺構の推定時期による区分とは一致していない場合がある。

- (1) 縄文時代早期後半と推定される試料 (ON 2-33、34)

試料2点の ^{14}C 年代は、ON 2-33が $6810\pm 30\text{yrBP}$ 、ON 2-34が $6790\pm 30\text{yrBP}$ である。暦年較正年代 (1σ) は、ON 2-33が7668～7620cal BP、ON 2-34が7664～7611cal BPの範囲で示され、いずれも

縄文時代早期後葉から末葉頃に相当する（小林編 2008）。

(2) 縄文時代前期後半から後期前葉と推定される試料 (ON 2-12、18~22、30)

試料7点の¹⁴C年代は、4520±30yrBP (ON 2-30) から3450±20yrBP (ON 2-12、20) の間にある。暦年較正年代 (1σ) は、最も古いON 2-30が5297~5065cal BPの間に3つの範囲、最も新しいON 2-12が3813~3643cal BPの間に3つの範囲で示される。古い方から順に、ON 2-21、22、30が縄文時代中期前葉から中葉頃、ON 2-18が中期後葉から末葉頃、ON 2-12、19、20が後期中葉頃（もしくは後期前葉から中葉頃）に相当する（小林編 2008）。ON 2-19~22は推定より新しく、他の試料は推定と一致するか、おおむね近い値となっている。

(3) 続縄文時代と推定される試料 (ON 2-1~3、11、15~17、23~29、31、32)

試料16点の¹⁴C年代は、3780±20yrBP (ON 2-32) から850±20yrBP (ON 2-16) というかなり大きな年代幅を持つ。これらのうち、特に古いON 2-17、27、32と、特に新しいON 2-16、31を除いた11点で見ると、2310±20yrBP (ON 2-11) から1980±20yrBP (ON 2-2) の狭い年代幅にまとまる。これら11点の暦年較正年代 (1σ) は、最も古いON 2-11が401~381cal BCの範囲、最も新しいON 2-2が2~57cal ADの範囲で示され、続縄文時代前半頃に相当する（臼杵編 2007）。ON 2-11は推定よりかなり古い値となったが、他は推定より若干古いか、おおむね近い値となっている。同じ堅穴住居跡から出土したON 2-1~3の年代値には重なり合う範囲がある。これら11点以外で特に古いON 2-17、32は縄文時代後期前葉頃、27は後期中葉頃、特に新しいON 2-31は擦文文化前期頃、16は擦文文化中期から後期頃に相当する（小林編 2008、臼杵編 2007）。

なお、試料ON 2-1~3、26が含まれる1~3世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線IntCalに対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある（尾畝 2009、坂本 2010など）。その日本産樹木のデータを用いてこれらの試料の測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

(4) トビニタイ式期を含む擦文文化期と推定される試料 (ON 2-4~10、13、14)

試料9点のうち、ON 2-13、14を除く7点 (ON 2-4~10) の¹⁴C年代は、1140±20yrBP (ON 2-8) から900±20yrBP (ON 2-5) のかなり狭い年代幅にまとまる。暦年較正年代 (1σ) は、最も古いON 2-8が888~965cal ADの間に2つの範囲、最も新しいON 2-5が1049~1167cal ADの間に3つの範囲で示される。これらはさらに、10世紀前後のON 2-8、10と、11~12世紀頃のON 2-4~7、9に分けて捉えることもできる。擦文文化中期から後期頃（およびトビニタイ式期頃）に相当し、推定におおむね一致する結果である（臼杵編 2007）。

上記以外の2点 (ON 2-13、14) の¹⁴C年代は、2点とも3470±20yrBP、暦年較正年代 (1σ) は、ON 2-13が3824~3652cal BPの間に4つの範囲、ON 2-14が3825~3694cal BPの間に3つの範囲で示され、縄文時代後期中葉頃（もしくは後期前葉から中葉頃）に相当する（小林編 2008）。これら2点は同じ堅穴住居跡の覆土中から出土し、ほぼ同年代を示すが、推定より大幅に古い値となっている。覆土からの出土であるため、堅穴の埋没過程で古い年代の木炭が混入した可能性もあり、出土土器などと合わせて検討を要する。

なお、今回測定された木炭試料34点のうち多くについては、以下に記す古木効果を考慮する必要

がある。

樹木の年輪の放射性炭素年代は、その年輪が成長した年の年代を示す。したがって樹皮直下の最外年輪の年代が、樹木が伐採され死んだ年代を示し、内側の年輪は、最外年輪からの年輪数の分、古い年代値を示すことになる（古木効果）。今回測定された木炭のうち、ON2-4、9、16には樹皮と見られる箇所が確認されたため、その直下（最外年輪）の部位を採取して試料としたが、他の試料には樹皮が残存せず、本来の最外年輪を確認できなかった。このため、上記3点を除く試料について、その木が死んだ年代は測定結果より新しい可能性がある。

試料の炭素含有率は、ON2-21を除く33点が60%を超える適正な値であった。ON2-21は、少量の砂粒の混入があり、炭素含有率は39%となったが、炭化物としては若干低いものの、測定結果に影響するほどではないと考えられる。

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
- 小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション
- 尾寄大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代, 設楽博己, 藤尾慎一郎, 松木武彦編弥生時代の考古学1 弥生文化の輪郭, 同成社, 225-235
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887
- 坂本稔 2010 較正曲線と日本産樹木-弥生から古墳へ-, 第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集, (株)加速器分析研究所, 85-90
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363
- 臼杵勲編 2007 科学研究費補助金基盤研究(B)(2) 北海道における古代から近世の遺跡の暦年代研究成果報告書, 札幌学院大学人文学部

表V-1-1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-172163	ON2-1	Ⅲ H-1 (1号住居跡) 床上	木炭	AAA	-27.50±0.32	2,020±20	77.78±0.22
IAAA-172164	ON2-2	Ⅲ H-1 (1号住居跡) 石囲い炉	木炭	AAA	-24.47±0.31	1,980±20	78.17±0.22
IAAA-172165	ON2-3	Ⅲ H-1 (1号住居跡) 床面直上	木炭	AAA	-27.68±0.40	2,030±20	77.63±0.22
IAAA-172166	ON2-4	Ⅲ H-2 (2号住居跡) 床面直上	木炭	AAA	-26.32±0.33	930±20	89.11±0.24
IAAA-172167	ON2-5	Ⅲ H-2 (2号住居跡) 床面直上	木炭	AAA	-29.66±0.27	900±20	89.40±0.23
IAAA-172168	ON2-6	Ⅲ H-3 (3号住居跡) カマド1上面	木炭	AAA	-26.86±0.48	930±20	89.09±0.24
IAAA-172169	ON2-7	Ⅲ H-3 (3号住居跡) 床面直上	木炭	AAA	-25.89±0.39	960±20	88.70±0.25
IAAA-172170	ON2-8	Ⅲ H-4 (4号住居跡) HF-1 焼土上面	木炭	AAA	-22.06±0.28	1,140±20	86.82±0.24
IAAA-172171	ON2-9	Ⅲ H-5 (5号住居跡) 覆土	木炭	AAA	-26.40±0.26	940±20	88.92±0.23
IAAA-172172	ON2-10	Ⅲ H-5 (5号住居跡) 覆土	木炭	AAA	-25.37±0.47	1,070±20	87.48±0.25
IAAA-172173	ON2-11	Ⅲ H-6 (6号住居跡) 焼土	木炭	AAA	-25.16±0.24	2,310±20	75.01±0.21
IAAA-172174	ON2-12	Ⅲ H-7 (7号住居跡) 壁際	木炭	AAA	-24.80±0.37	3,450±20	65.12±0.20
IAAA-172175	ON2-13	Ⅲ H-9 (9号住居跡) HC2 覆土中	木炭	AAA	-25.08±0.35	3,470±20	64.95±0.19
IAAA-172176	ON2-14	Ⅲ H-9 (9号住居跡) HC3 覆土中	木炭	AAA	-28.77±0.36	3,470±20	64.92±0.20
IAAA-172177	ON2-15	Ⅲ H-10 (10号住居跡) 炉	木炭	AAA	-25.49±0.35	2,160±20	76.46±0.23
IAAA-172178	ON2-16	Ⅲ H-11 (11号住居跡) 焼土	木炭	AAA	-23.91±0.23	850±20	89.90±0.23
IAAA-172179	ON2-17	Ⅲ H-12 (12号住居跡) 床直	木炭	AAA	-22.95±0.40	3,670±20	63.30±0.19
IAAA-172180	ON2-18	Ⅲ H-13 (13号住居跡) 覆土3	木炭	AAA	-26.10±0.35	4,060±20	60.30±0.19
IAAA-172181	ON2-19	Ⅲ H-14 (14号住居跡) HC-1 覆土3	木炭	AAA	-25.06±0.35	3,500±20	64.65±0.19
IAAA-172182	ON2-20	Ⅲ H-14 (14号住居跡) HC-3 覆土3	木炭	AAA	-25.70±0.28	3,450±20	65.08±0.19
IAAA-172183	ON2-21	Ⅲ H-15 (15号住居跡) 覆土2	木炭	AaA	-23.93±0.33	4,420±30	57.67±0.19
IAAA-172184	ON2-22	Ⅲ H-15 (15号住居跡) 覆土2	木炭	AAA	-24.68±0.41	4,500±30	57.14±0.18
IAAA-172185	ON2-23	Ⅲ P-1 (1号土坑) 覆土2	木炭	AAA	-25.83±0.33	2,160±20	76.39±0.21
IAAA-172186	ON2-24	Ⅲ P-2 (2号土坑) 坑底	木炭	AAA	-26.07±0.45	2,170±20	76.32±0.22
IAAA-172187	ON2-25	Ⅲ H-16 (16号住居跡) 覆土下	木炭	AAA	-28.48±0.34	2,130±20	76.74±0.22
IAAA-172188	ON2-26	Ⅲ H-1 (1号住居跡) 覆土下	木炭	AAA	-24.02±0.29	2,010±20	77.89±0.22
IAAA-172189	ON2-27	Ⅲ P-12 (12号土坑) 覆土下	木炭	AAA	-24.37±0.36	3,450±20	65.12±0.19
IAAA-172190	ON2-28	Ⅲ P-16 (16号土坑) 覆土上	木炭	AAA	-25.35±0.37	2,130±20	76.74±0.23
IAAA-172191	ON2-29	Ⅲ P-24 (24号土坑) 覆土	木炭	AAA	-24.30±0.27	2,110±20	76.87±0.22
IAAA-172192	ON2-30	Ⅲ P-26 (26号土坑) 坑底ベンガラ	木炭	AAA	-24.66±0.43	4,520±30	56.98±0.19
IAAA-172193	ON2-31	Ⅲ F-2 (2号焼土) 焼土	木炭	AAA	-24.36±0.30	1,450±20	83.51±0.22
IAAA-172194	ON2-32	Ⅲ S-8 (8号集石) Ⅲ層	木炭	AAA	-24.87±0.33	3,780±20	62.49±0.19
IAAA-172195	ON2-33	V H-3 (住居跡) 覆土3	木炭	AAA	-24.07±0.27	6,810±30	42.86±0.15
IAAA-172196	ON2-34	V P-14 (土坑) 覆土	木炭	AaA	-22.30±0.36	6,790±30	42.95±0.16

[IAA登録番号：#8899]

表V-1-2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代cal BP) (1)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-172174	3,440 \pm 20	65.15 \pm 0.19	3,445 \pm 24	3813calBP-3799calBP (8.5%) 3722calBP-3682calBP (35.9%) 3668calBP-3643calBP (23.8%)	3826calBP-3789calBP (16.8%) 3774calBP-3745calBP (7.6%) 3732calBP-3636calBP (71.0%)
IAAA-172175	3,470 \pm 20	64.94 \pm 0.19	3,466 \pm 24	3824calBP-3792calBP (23.8%) 3766calBP-3748calBP (11.5%) 3729calBP-3692calBP (29.9%) 3657calBP-3652calBP (2.9%)	3830calBP-3685calBP (87.2%) 3665calBP-3645calBP (8.2%)
IAAA-172176	3,530 \pm 20	64.42 \pm 0.19	3,470 \pm 24	3825calBP-3791calBP (25.4%) 3769calBP-3746calBP (14.8%) 3730calBP-3694calBP (28.1%)	3830calBP-3688calBP (89.6%) 3663calBP-3647calBP (5.8%)
IAAA-172179	3,640 \pm 20	63.56 \pm 0.19	3,673 \pm 24	4080calBP-4034calBP (40.6%) 4002calBP-3971calBP (24.5%) 3939calBP-3934calBP (3.1%)	4088calBP-3923calBP (95.4%)
IAAA-172180	4,080 \pm 20	60.16 \pm 0.18	4,063 \pm 24	4574calBP-4518calBP (55.7%) 4465calBP-4449calBP (12.5%)	4785calBP-4765calBP (7.1%) 4619calBP-4508calBP (67.5%) 4485calBP-4440calBP (20.8%)
IAAA-172181	3,500 \pm 20	64.64 \pm 0.18	3,503 \pm 23	3831calBP-3818calBP (10.0%) 3795calBP-3724calBP (58.2%)	3841calBP-3700calBP (95.4%)
IAAA-172182	3,460 \pm 20	64.99 \pm 0.19	3,450 \pm 23	3817calBP-3796calBP (14.0%) 3724calBP-3685calBP (35.7%) 3665calBP-3644calBP (18.5%)	3826calBP-3789calBP (19.7%) 3773calBP-3745calBP (9.3%) 3732calBP-3639calBP (66.4%)
IAAA-172183	4,400 \pm 30	57.79 \pm 0.18	4,422 \pm 25	5211calBP-5202calBP (3.2%) 5048calBP-4961calBP (65.0%)	5260calBP-5245calBP (1.3%) 5234calBP-5224calBP (0.8%) 5215calBP-5188calBP (6.6%) 5056calBP-4873calBP (86.7%)
IAAA-172184	4,490 \pm 20	57.18 \pm 0.17	4,495 \pm 25	5281calBP-5214calBP (29.8%) 5190calBP-5163calBP (13.1%) 5136calBP-5105calBP (14.5%) 5078calBP-5054calBP (10.7%)	5290calBP-5046calBP (95.4%)
IAAA-172189	3,430 \pm 20	65.21 \pm 0.19	3,445 \pm 23	3811calBP-3801calBP (7.0%) 3721calBP-3683calBP (36.8%) 3667calBP-3643calBP (24.4%)	3826calBP-3789calBP (16.4%) 3771calBP-3745calBP (6.8%) 3731calBP-3636calBP (72.2%)
IAAA-172192	4,510 \pm 30	57.02 \pm 0.18	4,517 \pm 26	5297calBP-5271calBP (12.5%) 5184calBP-5120calBP (31.5%) 5112calBP-5065calBP (24.2%)	5301calBP-5213calBP (31.1%) 5191calBP-5052calBP (64.3%)

表V-1-2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代cal BP) (2)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-172194	3,770 \pm 20	62.51 \pm 0.18	3,776 \pm 24	4225calBP-4202calBP (16.4%) 4177calBP-4173calBP (2.2%) 4159calBP-4140calBP (15.5%) 4130calBP-4091calBP (34.1%)	4237calBP-4086calBP (95.4%)
IAAA-172195	6,790 \pm 30	42.94 \pm 0.15	6,806 \pm 28	7668calBP-7620calBP (68.2%)	7681calBP-7595calBP (95.4%)
IAAA-172196	6,740 \pm 30	43.19 \pm 0.15	6,789 \pm 29	7664calBP-7611calBP (68.2%)	7675calBP-7587calBP (95.4%)

[参考値]

表V-1-3 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代cal BC/AD) (1)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-172163	2,060 \pm 20	77.38 \pm 0.21	2,019 \pm 22	46calBC-5calAD (68.2%)	89calBC-76calBC (2.6%) 56calBC-52calAD (92.8%)
IAAA-172164	1,970 \pm 20	78.26 \pm 0.21	1,978 \pm 22	2 calAD-57calAD (68.2%)	40calBC-70calAD (95.4%)
IAAA-172165	2,080 \pm 20	77.2 \pm 0.21	2,034 \pm 22	84calBC-80calBC (2.3%) 55calBC-4calAD (65.9%)	109calBC-26calAD (95.1%) 44calAD-46calAD (0.3%)
IAAA-172166	950 \pm 20	88.86 \pm 0.23	926 \pm 21	1044calAD-1100calAD (42.3%) 1119calAD-1154calAD (25.9%)	1035calAD-1160calAD (95.4%)
IAAA-172167	980 \pm 20	88.55 \pm 0.22	900 \pm 20	1049calAD-1085calAD (39.5%) 1124calAD-1137calAD (10.7%) 1150calAD-1167calAD (18.0%)	1042calAD-1105calAD (47.7%) 1117calAD-1206calAD (47.7%)
IAAA-172168	960 \pm 20	88.75 \pm 0.22	928 \pm 21	1043calAD-1058calAD (12.4%) 1075calAD-1105calAD (25.2%) 1118calAD-1154calAD (30.6%)	1035calAD-1158calAD (95.4%)
IAAA-172169	980 \pm 20	88.54 \pm 0.24	963 \pm 22	1025calAD-1046calAD (28.5%) 1093calAD-1120calAD (32.8%) 1141calAD-1147calAD (6.9%)	1020calAD-1056calAD (34.1%) 1076calAD-1154calAD (61.3%)
IAAA-172170	1,090 \pm 20	87.34 \pm 0.24	1,135 \pm 22	888calAD-903calAD (16.7%) 919calAD-965calAD (51.5%)	778calAD-790calAD (2.4%) 827calAD-841calAD (1.6%) 864calAD-983calAD (91.4%)
IAAA-172171	970 \pm 20	88.66 \pm 0.22	943 \pm 20	1035calAD-1050calAD (14.0%) 1084calAD-1125calAD (40.5%) 1136calAD-1151calAD (13.7%)	1029calAD-1154calAD (95.4%)

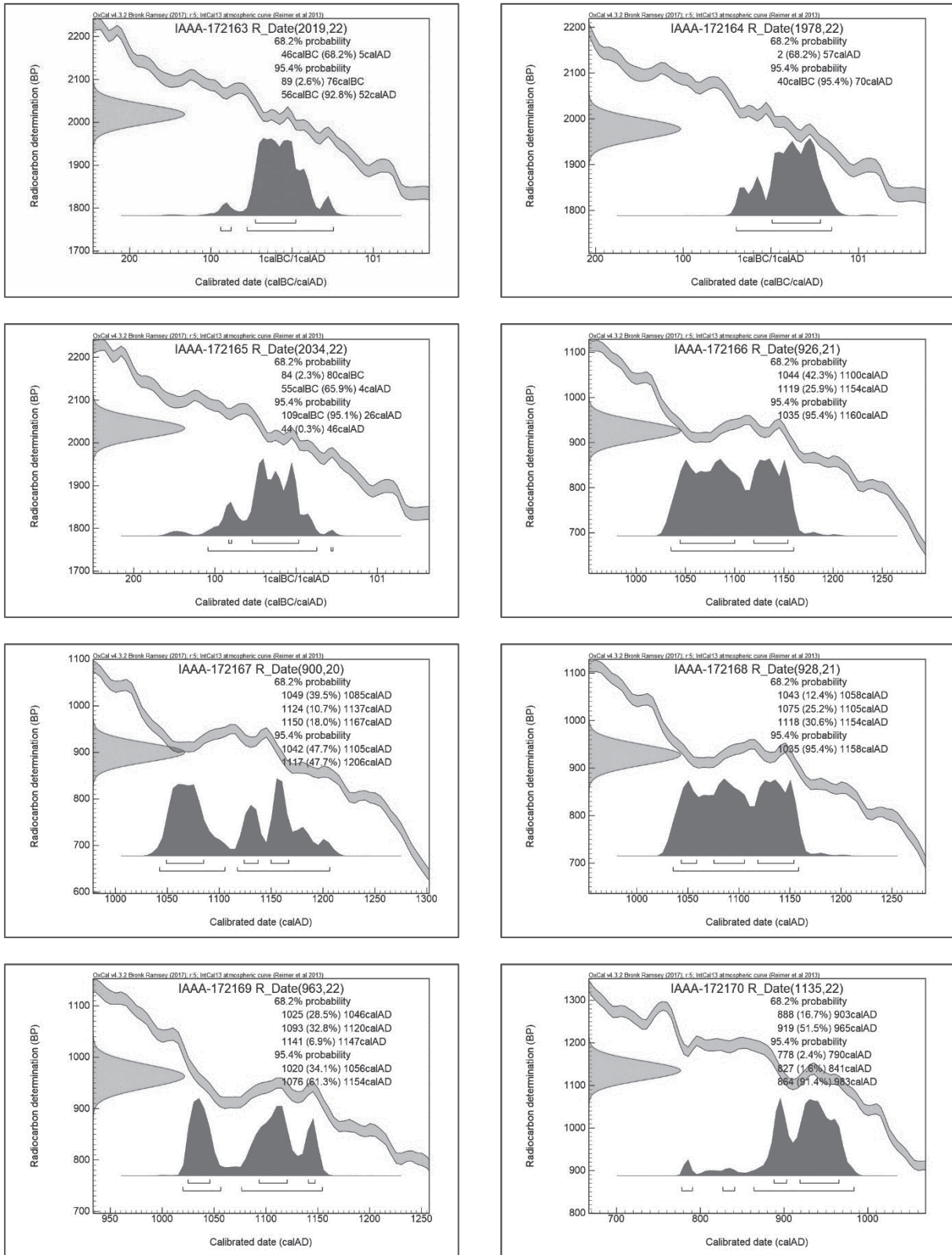
表V-1-3 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代cal BC/AD) (2)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-172172	1,080 \pm 20	87.41 \pm 0.24	1,074 \pm 23	905calAD-916calAD (11.0%) 967calAD-1013calAD (57.2%)	897calAD-925calAD (20.1%) 943calAD-1019calAD (75.3%)
IAAA-172173	2,310 \pm 20	74.99 \pm 0.21	2,309 \pm 22	401calBC-381calBC (68.2%)	406calBC-361calBC (95.4%)
IAAA-172174	3,440 \pm 20	65.15 \pm 0.19	3,445 \pm 24	1864calBC-1850calBC (8.5%) 1773calBC-1733calBC (35.9%) 1719calBC-1694calBC (23.8%)	1877calBC-1840calBC (16.8%) 1825calBC-1796calBC (7.6%) 1783calBC-1687calBC (71.0%)
IAAA-172175	3,470 \pm 20	64.94 \pm 0.19	3,466 \pm 24	1875calBC-1843calBC (23.8%) 1817calBC-1799calBC (11.5%) 1780calBC-1743calBC (29.9%) 1708calBC-1703calBC (2.9%)	1881calBC-1736calBC (87.2%) 1716calBC-1696calBC (8.2%)
IAAA-172176	3,530 \pm 20	64.42 \pm 0.19	3,470 \pm 24	1876calBC-1842calBC (25.4%) 1820calBC-1797calBC (14.8%) 1781calBC-1745calBC (28.1%)	1881calBC-1739calBC (89.6%) 1714calBC-1698calBC (5.8%)
IAAA-172177	2,160 \pm 20	76.38 \pm 0.22	2,156 \pm 24	349calBC-315calBC (27.5%) 209calBC-168calBC (40.7%)	355calBC-289calBC (37.3%) 233calBC-111calBC (58.1%)
IAAA-172178	840 \pm 20	90.10 \pm 0.23	854 \pm 20	1169calAD-1215calAD (68.2%)	1156calAD-1247calAD (95.4%)
IAAA-172179	3,640 \pm 20	63.56 \pm 0.19	3,673 \pm 24	2131calBC-2085calBC (40.6%) 2053calBC-2022calBC (24.5%) 1990calBC-1985calBC (3.1%)	2139calBC-1974calBC (95.4%)
IAAA-172180	4,080 \pm 20	60.16 \pm 0.18	4,063 \pm 24	2625calBC-2569calBC (55.7%) 2516calBC-2500calBC (12.5%)	2836calBC-2816calBC (7.1%) 2670calBC-2559calBC (67.5%) 2536calBC-2491calBC (20.8%)
IAAA-172181	3,500 \pm 20	64.64 \pm 0.18	3,503 \pm 23	1882calBC-1869calBC (10.0%) 1846calBC-1775calBC (58.2%)	1892calBC-1751calBC (95.4%)
IAAA-172182	3,460 \pm 20	64.99 \pm 0.19	3,450 \pm 23	1868calBC-1847calBC (14.0%) 1775calBC-1736calBC (35.7%) 1716calBC-1695calBC (18.5%)	1877calBC-1840calBC (19.7%) 1824calBC-1796calBC (9.3%) 1783calBC-1690calBC (66.4%)
IAAA-172183	4,400 \pm 30	57.79 \pm 0.18	4,422 \pm 25	3262calBC-3253calBC (3.2%) 3099calBC-3012calBC (65.0%)	3311calBC-3296calBC (1.3%) 3285calBC-3275calBC (0.8%) 3266calBC-3239calBC (6.6%) 3107calBC-2924calBC (86.7%)
IAAA-172184	4,490 \pm 20	57.18 \pm 0.17	4,495 \pm 25	3332calBC-3265calBC (29.8%) 3241calBC-3214calBC (13.1%) 3187calBC-3156calBC (14.5%) 3129calBC-3105calBC (10.7%)	3341calBC-3097calBC (95.4%)

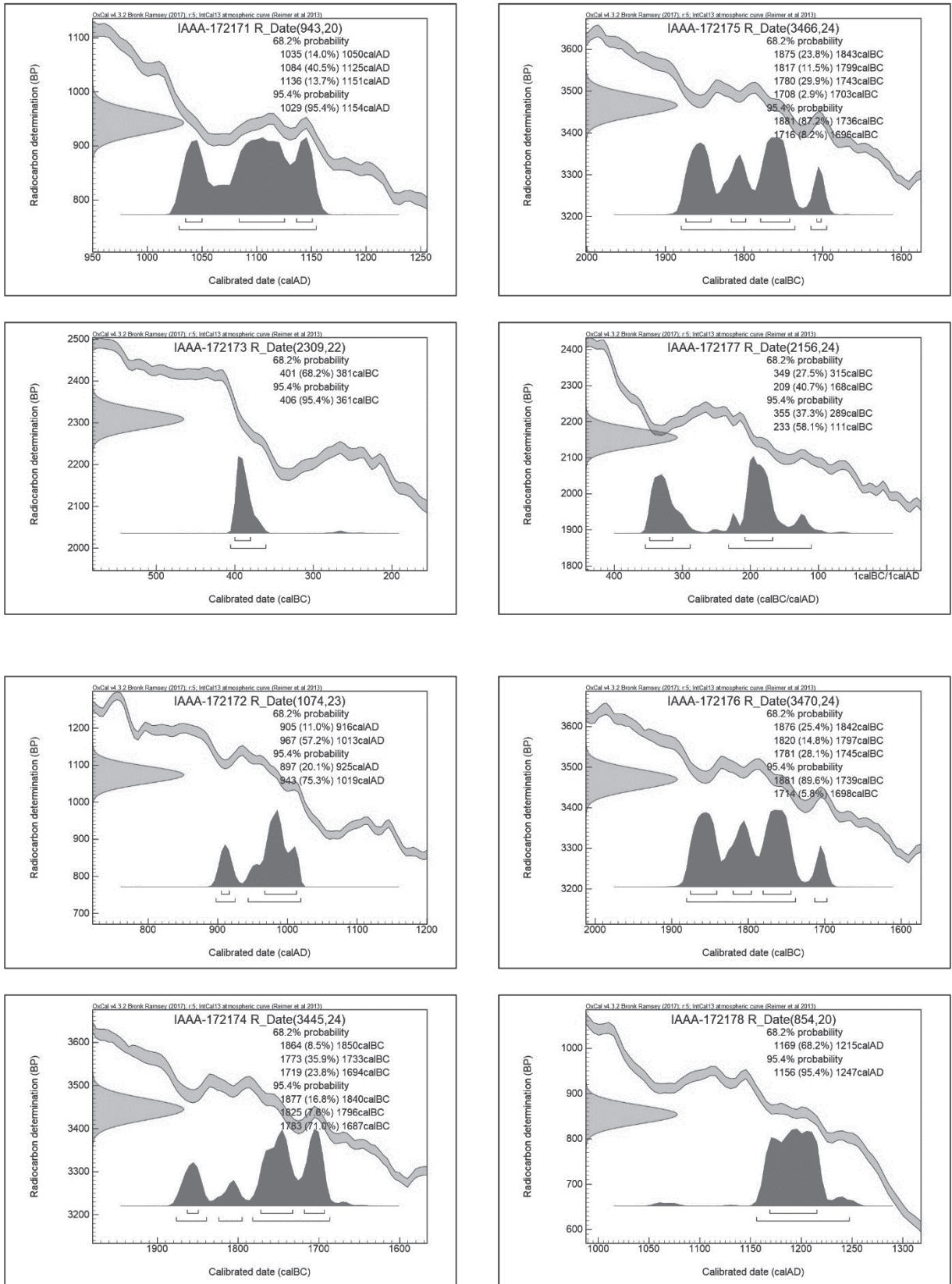
表V-1-3 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代cal BC/AD) (3)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-172185	2,180 \pm 20	76.26 \pm 0.21	2,163 \pm 22	349calBC-315calBC (34.1%) 209calBC-174calBC (34.1%)	356calBC-284calBC (46.7%) 256calBC-250calBC (0.5%) 235calBC-156calBC (46.0%) 134calBC-117calBC (2.1%)
IAAA-172186	2,190 \pm 20	76.15 \pm 0.20	2,171 \pm 22	351calBC-302calBC (45.1%) 210calBC-182calBC (23.1%)	358calBC-279calBC (54.4%) 259calBC-242calBC (2.2%) 236calBC-166calBC (38.8%)
IAAA-172187	2,180 \pm 20	76.19 \pm 0.21	2,126 \pm 22	198calBC-151calBC (45.3%) 139calBC-113calBC (22.9%)	343calBC-326calBC (2.9%) 205calBC-88calBC (88.7%) 76calBC-58calBC (3.8%)
IAAA-172188	1,990 \pm 20	78.05 \pm 0.21	2,006 \pm 22	40calBC-20calAD (68.2%)	49calBC-53calAD (95.4%)
IAAA-172189	3,430 \pm 20	65.21 \pm 0.19	3,445 \pm 23	1862calBC-1852calBC (7.0%) 1772calBC-1734calBC (36.8%) 1718calBC-1694calBC (24.4%)	1877calBC-1840calBC (16.4%) 1822calBC-1796calBC (6.8%) 1782calBC-1687calBC (72.2%)
IAAA-172190	2,130 \pm 20	76.68 \pm 0.22	2,126 \pm 23	198calBC-150calBC (44.9%) 140calBC-112calBC (23.3%)	343calBC-325calBC (3.5%) 205calBC-88calBC (87.5%) 77calBC-57calBC (4.4%)
IAAA-172191	2,100 \pm 20	76.98 \pm 0.22	2,113 \pm 23	181calBC-99calBC (68.2%)	199calBC-55calBC (95.4%)
IAAA-172192	4,510 \pm 30	57.02 \pm 0.18	4,517 \pm 26	3348calBC-3322calBC (12.5%) 3235calBC-3171calBC (31.5%) 3163calBC-3116calBC (24.2%)	3352calBC-3264calBC (31.1%) 3242calBC-3103calBC (64.3%)
IAAA-172193	1,440 \pm 20	83.62 \pm 0.21	1,447 \pm 21	601calAD-640calAD (68.2%)	574calAD-648calAD (95.4%)
IAAA-172194	3,770 \pm 20	62.51 \pm 0.18	3,776 \pm 24	2276calBC-2253calBC (16.4%) 2228calBC-2224calBC (2.2%) 2210calBC-2191calBC (15.5%) 2181calBC-2142calBC (34.1%)	2288calBC-2137calBC (95.4%)
IAAA-172195	6,790 \pm 30	42.94 \pm 0.15	6,806 \pm 28	5719calBC-5671calBC (68.2%)	5732calBC-5646calBC (95.4%)
IAAA-172196	6,740 \pm 30	43.19 \pm 0.15	6,789 \pm 29	5715calBC-5662calBC (68.2%)	5726calBC-5638calBC (95.4%)

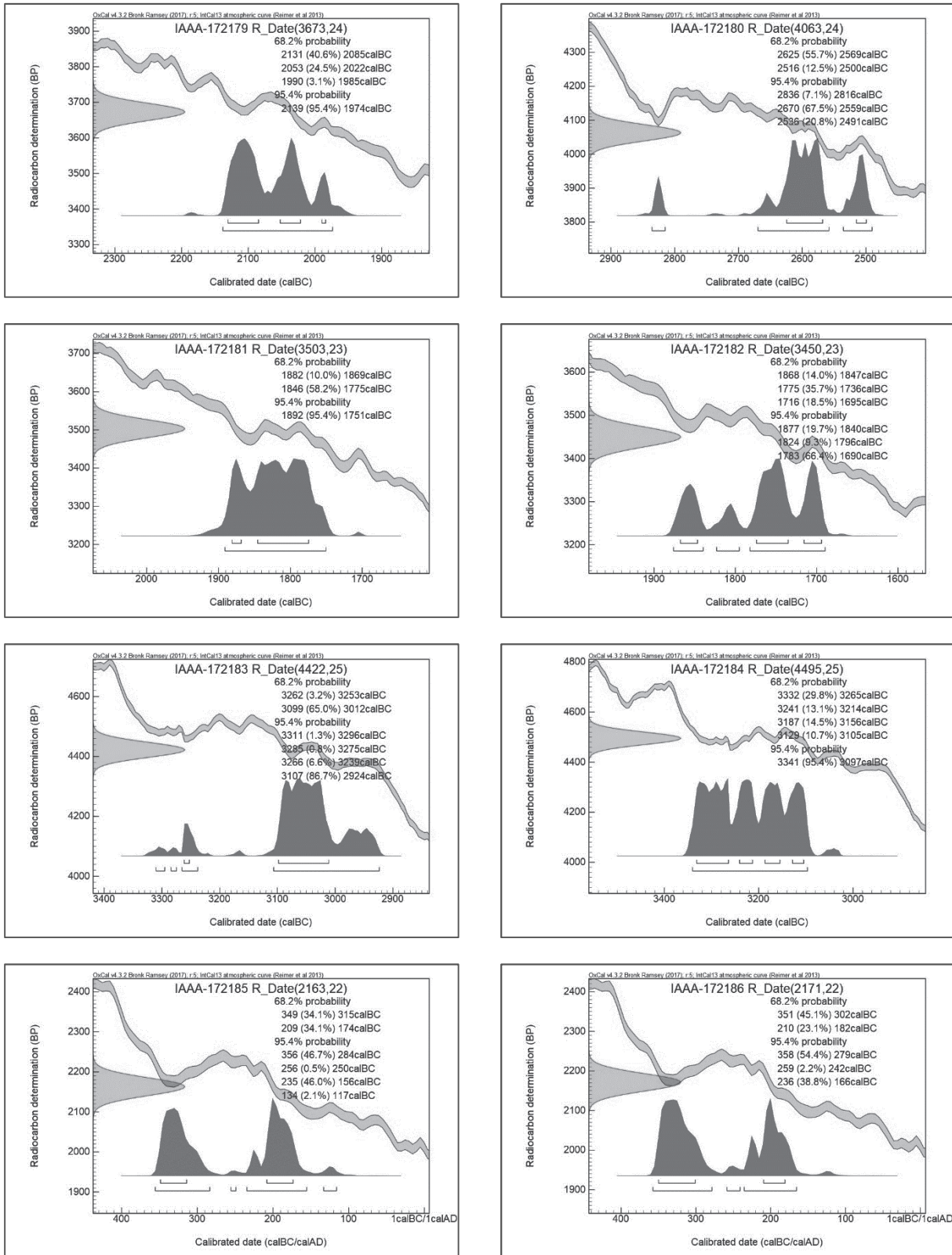
[参考値]



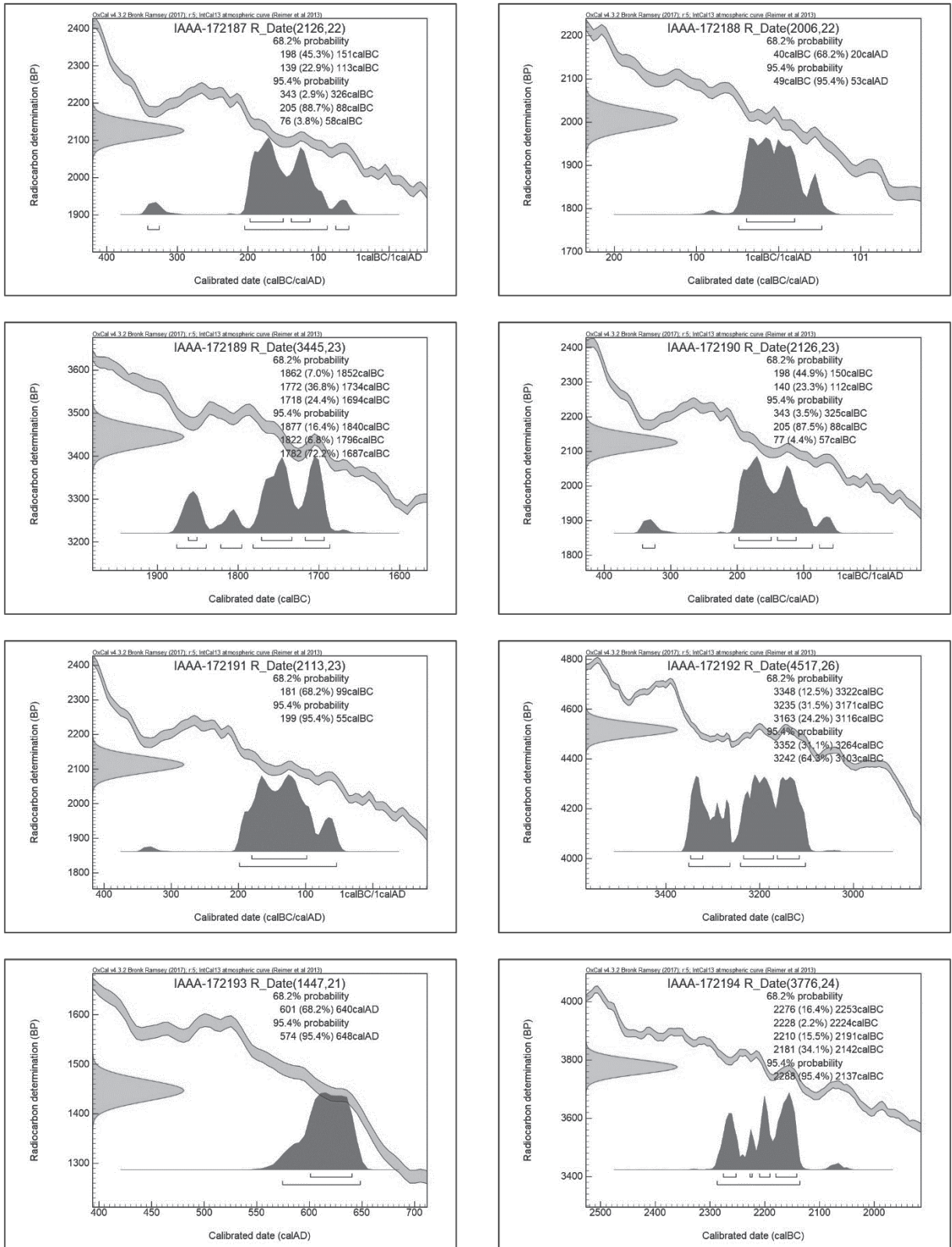
図V-1-1 暦年較正年代グラフ(1)(cal BC/AD 参考)



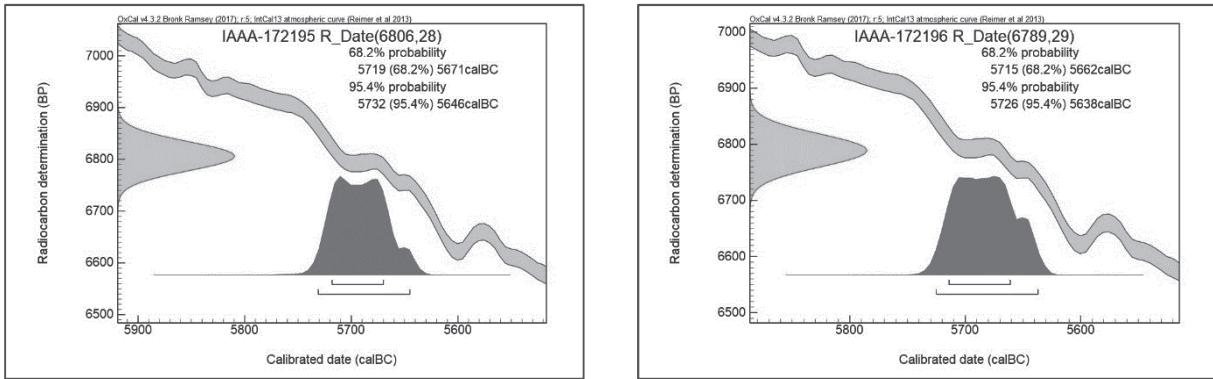
図V-1-1 暦年較正年代グラフ(2) (cal BC/AD 参考)



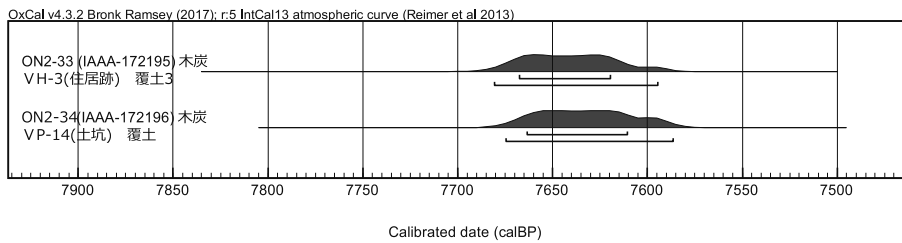
図V-1-1 暦年較正年代グラフ (3) (cal BC/AD 参考)



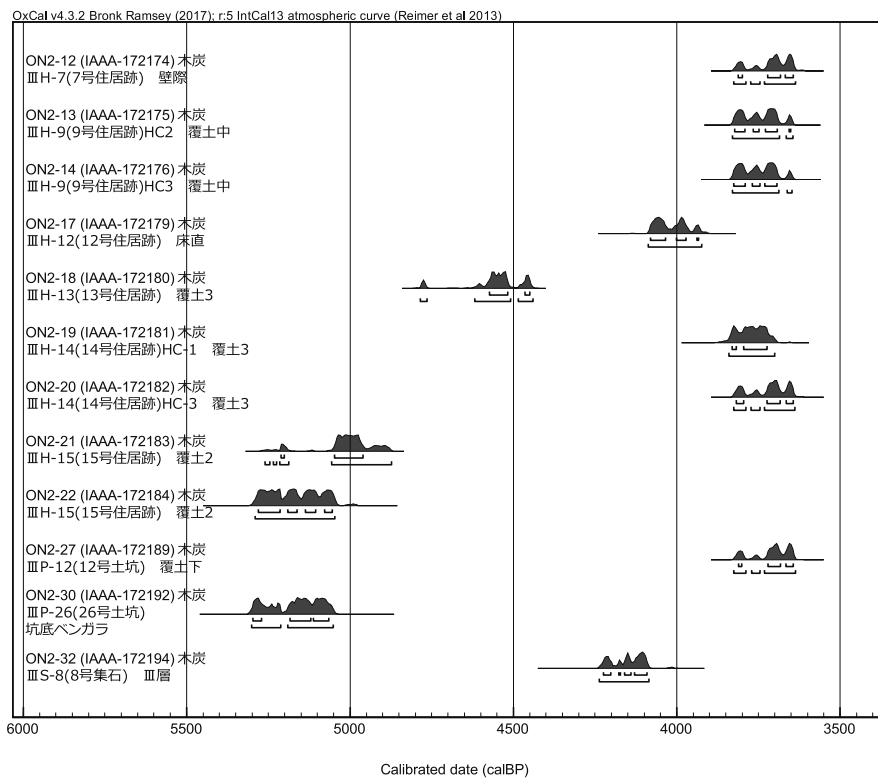
図V-1-1 暦年較正年代グラフ(4) (cal BC/AD 参考)



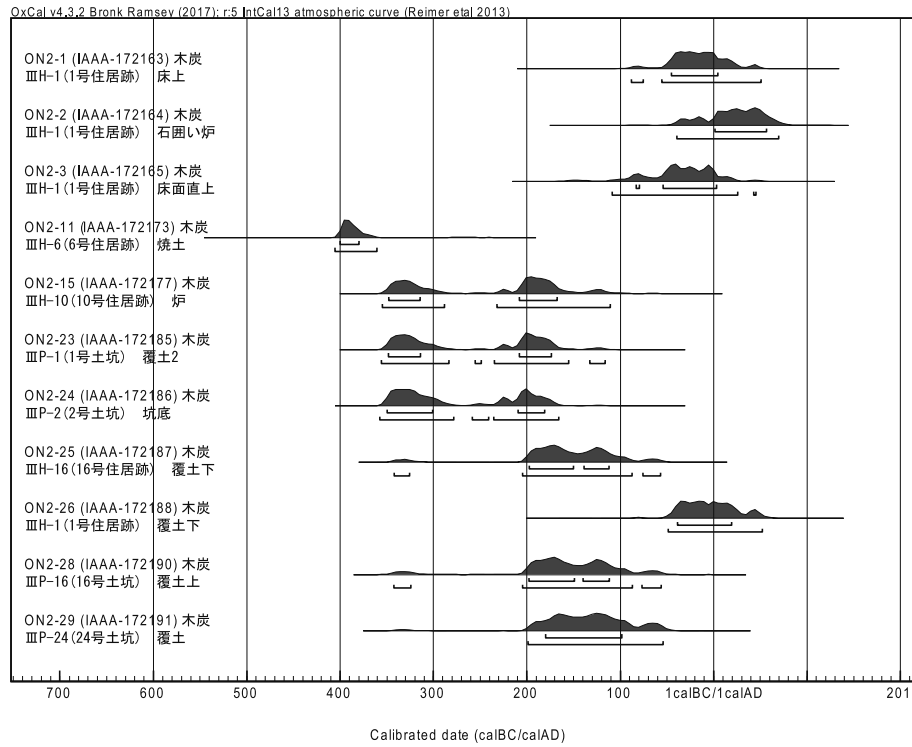
図V-1-1 暦年較正年代グラフ(5) (cal BC/AD 参考)



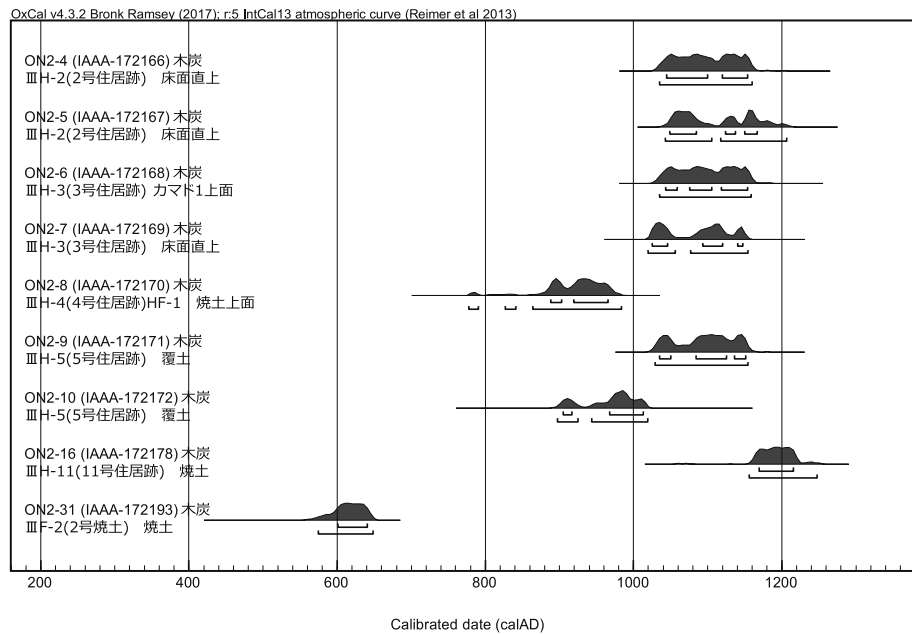
図V-1-2 暦年較正年代グラフ(1) (マルチプロット図、cal BP、参考)
縄文時代早期の試料を示した。



図V-1-2 暦年較正年代グラフ(2) (マルチプロット図、cal BP、参考)
縄文時代中期から後期の試料を示した。



図V-1-2 暦年較正年代グラフ(3)(マルチプロット図、cal BP、参考) 続縄文時代前半の試料を示した。



図V-1-2 暦年較正年代グラフ(4)(マルチプロット図、cal BC/AD、参考) 擦文文化期・トビニタイ式期の試料を示した。

2 温根沼2遺跡出土黒曜石製石器の産地推定

竹原弘展（株式会社 パレオ・ラボ）

1. はじめに

根室市温根沼に所在する温根沼2遺跡から出土した続縄文時代前半の黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

2. 試料と方法

分析対象は、黒曜石製石器20点である（表V-2-1）。時期は、続縄文時代下田ノ沢式期とみられている。試料は、測定前にメラミンフォーム製スポンジと精製水を用いて、測定面の表面の洗浄を行った。

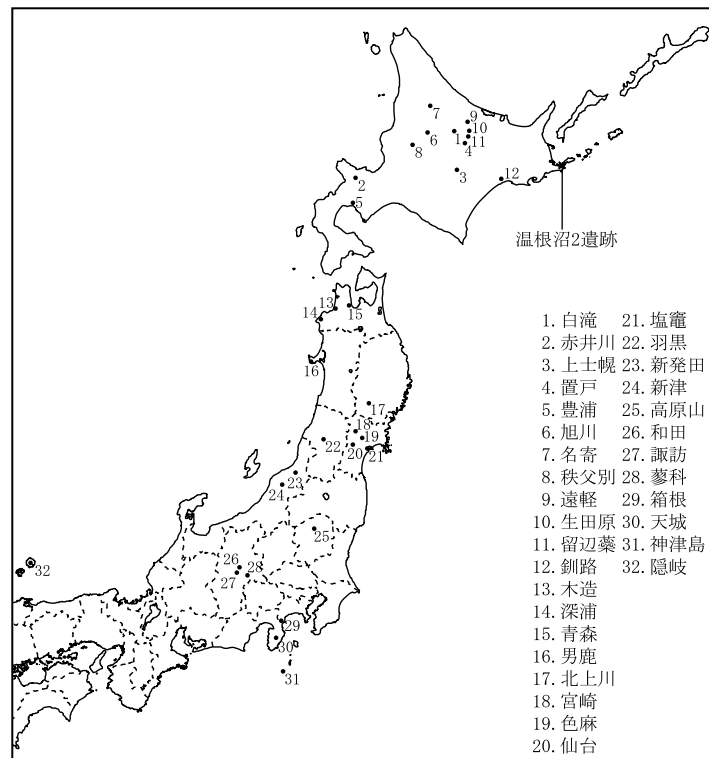
分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム（Rh）、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000μA、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた（望月，1999など）。本方法では、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム（K）、マンガン（Mn）、鉄（Fe）、ルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）、イットリウム（Y）、ジルコニウム（Zr）の合計7元素のX線強度（cps；count per second）について、以下に示す指標値を計算する。

$$1) \text{ Rb 分率} = \frac{\text{Rb 強度} \times 100}{\text{Rb 強度} + \text{Sr 強度} + \text{Y 強度} + \text{Zr 強度}}$$

表V-2-1 黒曜石製遺物分析対象一覧

試料番号	分類	遺構／ (発掘区)	層位	遺物 番号	重量 (g)	推定時期	掲載番号
1	石鏃	Ⅲ H-1	フクド下	34	0.6	続縄文時代下田ノ沢式期	IV-101-3
2	石鏃	Ⅲ H-1	床面	67	0.8	続縄文時代下田ノ沢式期	IV-101-4
3	石鏃片	Ⅲ H-1	覆土下	99	0.5	続縄文時代下田ノ沢式期	IV-101-6
4	スクレイパー	Ⅲ H-1	床面	92	1.9	続縄文時代下田ノ沢式期	IV-101-10
5	スクレイパー	Ⅲ H-1	覆土下	101	4.8	続縄文時代下田ノ沢式期	IV-101-11
6	スクレイパー	Ⅲ H-1	床面	91	5.3	続縄文時代下田ノ沢式期	IV-101-13
7	スクレイパー	Ⅲ H-1	覆土下	102	7.6	続縄文時代下田ノ沢式期	IV-101-14
8	スクレイパー	Ⅲ H-1	覆土下	45	8.9	続縄文時代下田ノ沢式期	IV-101-12
9	石鏃	Ⅲ H-6	覆土中	24	0.4	続縄文時代下田ノ沢式期	IV-102-1
10	楔形石器	Ⅲ H-6	覆土中	89	6.2	続縄文時代下田ノ沢式期	IV-102-7
11	石鏃	Ⅲ P-14	坑底直上	6	0.9	続縄文時代下田ノ沢式期	IV-106-1
12	石鏃	Ⅲ P-14	坑底直上	2	2.8	続縄文時代下田ノ沢式期	IV-106-2
13	スクレイパー	Ⅲ P-14	坑底直上	1	1.9	続縄文時代下田ノ沢式期	IV-106-3
14	スクレイパー	Ⅲ P-14	坑底直上	3	8.5	続縄文時代下田ノ沢式期	IV-107-5
15	スクレイパー	Ⅲ P-14	坑底直上	5	9.1	続縄文時代下田ノ沢式期	IV-106-4
16	スクレイパー	Ⅲ P-14	坑底直上	8	26.4	続縄文時代下田ノ沢式期	IV-107-6
17	石鏃	i18	Ⅲ	3	0.4	続縄文時代下田ノ沢式期	IV-189-21
18	石鏃	h15	Ⅲ	20	0.5	続縄文時代下田ノ沢式期	IV-189-25
19	石鏃	j21	Ⅲ	1	0.9	続縄文時代下田ノ沢式期	IV-189-26
20	スクレイパー	h17	Ⅲ	24	5.7	続縄文時代下田ノ沢式期	IV-194-120



図V-2-1 黒曜石産地分布図（東日本）

2) $Sr \text{ 分率} = Sr \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$

3) $Mn \text{ 強度} \times 100 / Fe \text{ 強度}$

4) $\log (Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$

そして、これらの指標値を用いた2つの判別図（横軸Rb分率－縦軸Mn強度×100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率－縦軸log（Fe強度/K強度）の判別図）を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定する。この方法は、できる限り蛍光X線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせることで指標値を算出するため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。ただし、風化試料の場合、log（Fe強度/K強度）の値が減少する（望月，1999）。試料の測定面には、なるべく平滑な面を選んだ。

原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。表V-2-2に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を、図V-2-1に各原石の採取地の分布図を示す。

3. 分析結果

表V-2-3に石器の測定値および算出した指標値を、図V-2-2と図V-2-3に黒曜石原石の判別図に石器の指標値をプロットした図を示す。視覚的にわかりやすくするため、図では各判別群を楕円で取り囲んだ。

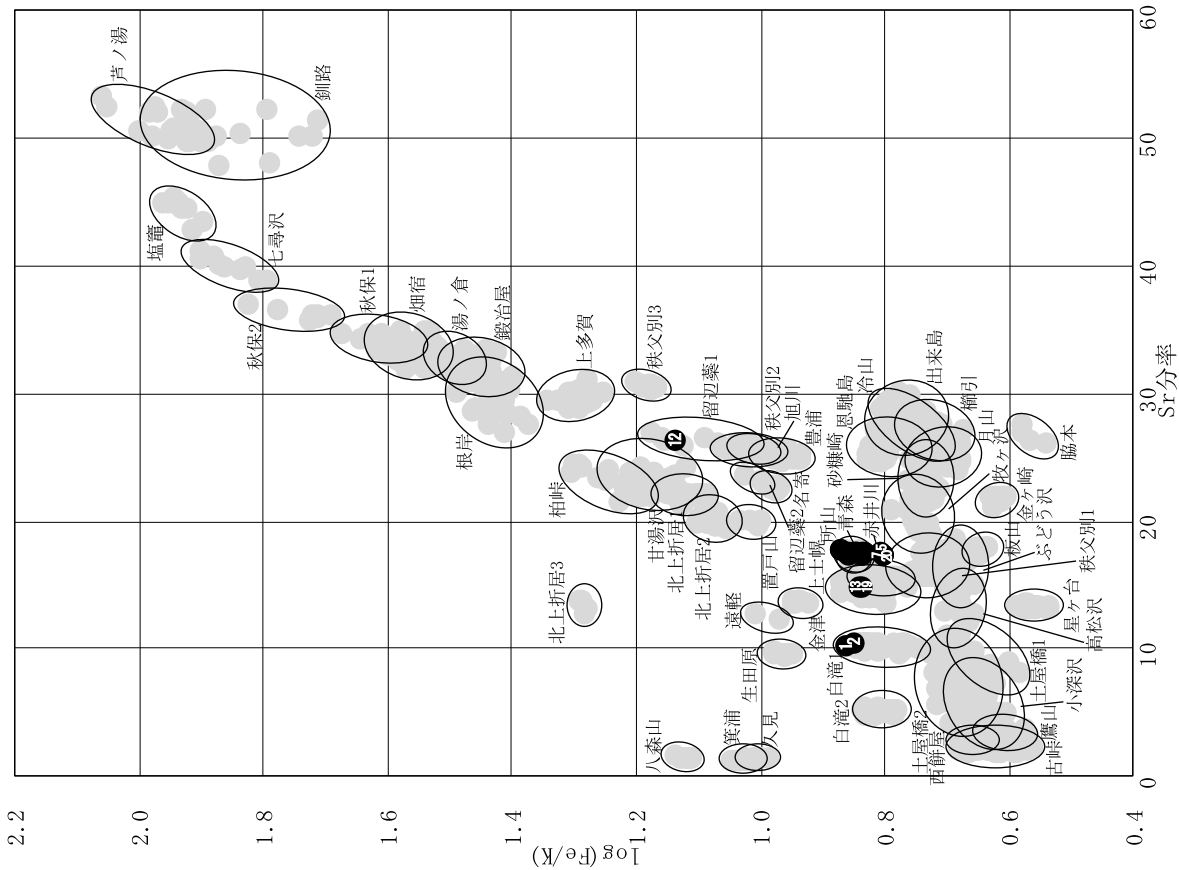
分析の結果、2点が白滝1群（北海道、白滝エリア）、2点が上士幌群（北海道、上士幌エリア）、12点が所山群（北海道、置戸エリア）、1点が留辺蘂1群（北海道、留辺蘂エリア）の範囲にプロットされた。残り3点は、図V-2-2では所山群の範囲にプロットされたが、図V-2-3では所山群の範囲の下方にプロットされた。これは、先述したように遺物の風化による影響と考えられ（望月，1999）、所山群に属する可能性が高い。

また、赤井川群と上士幌群の図V-2-2、3の判別図では、一部に重複があるため、区別が困難な場合がある。そこで、以下に示すY分率を算出した。

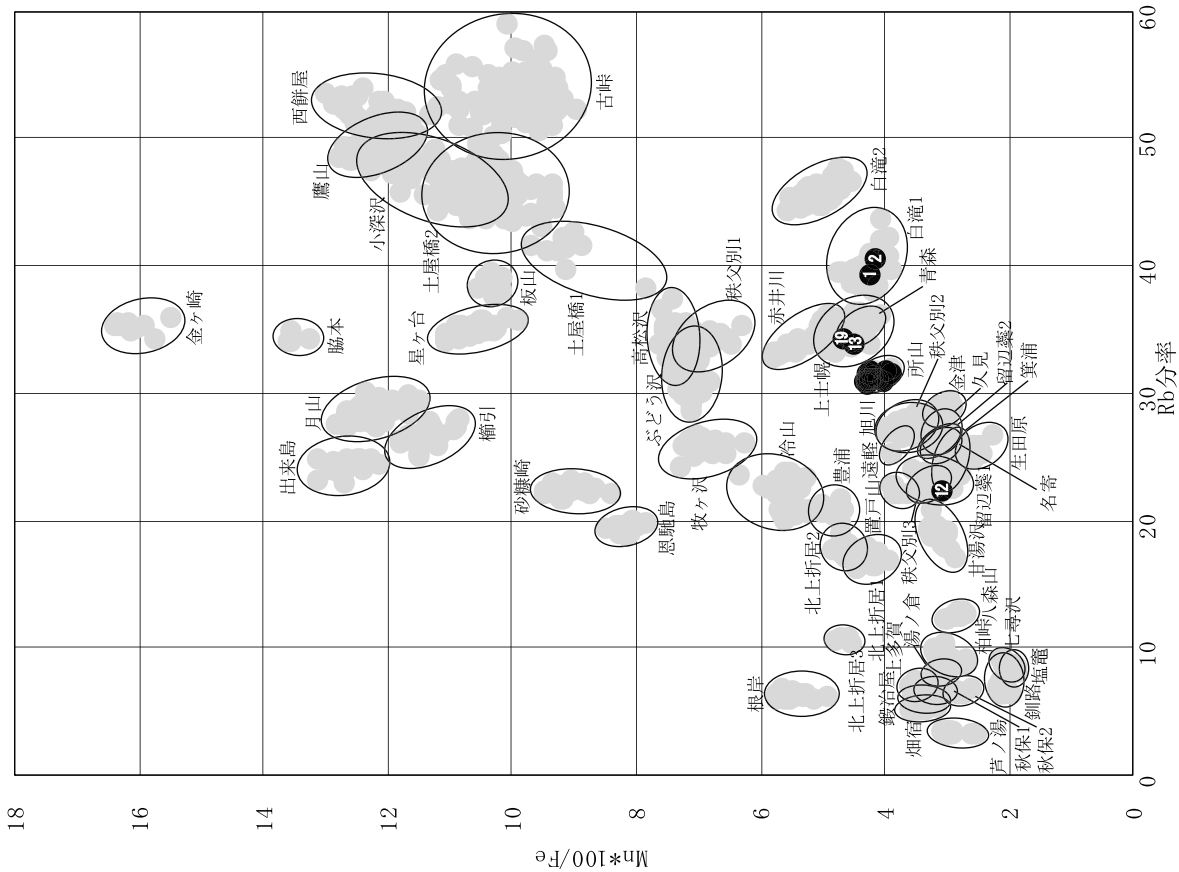
$Y \text{ 分率} = Y \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$

表V-2-2 東日本黒曜石産地の判別群

都道府県	エリア	判別群名	原石採取地
北海道	白滝	白滝1	赤石山山頂 (43), 八号沢露頭 (15)
		白滝2	7の沢川支流 (2), IK露頭 (10), 十勝石沢露頭直下河床 (11), アジサイの滝露頭 (10)
	赤井川	赤井川	曲川・土木川 (24)
	上士幌	上士幌	十勝三股 (4), タウシユベツ川右岸 (42), タウシユベツ川左岸 (10), 十三ノ沢 (32)
	置戸	置戸山	置戸山 (5)
		所山	所山 (5)
	豊浦	豊浦	豊泉 (10)
	旭川	旭川	近文台 (8), 雨紛台 (2)
	名寄	名寄	忠烈布川 (19)
	秩父別	秩父別1	中山 (65)
		秩父別2	
		秩父別3	
	遠軽	遠軽	社名淵川河床 (2)
	生田原	生田原	仁田布川河床 (10)
留辺蘂	留辺蘂1	ケシヨマップ川河床 (9)	
	留辺蘂2		
釧路	釧路	釧路市管スキー場 (9), 阿寒川右岸 (2), 阿寒川左岸 (6)	
青森	木造	出来島	出来島海岸 (15), 鶴ヶ坂 (10)
	深浦	八森山	岡崎浜 (7), 八森山公園 (8)
	青森	青森	天田内川 (6)
秋田	男鹿	金ヶ崎	金ヶ崎温泉 (10)
		脇本	脇本海岸 (4)
岩手	北上川	北上折居1	北上川 (9), 真城 (33)
		北上折居2	
		北上折居3	
宮城	宮崎	湯ノ倉	湯ノ倉 (40)
	色麻	根岸	根岸 (40)
	仙台	秋保1	土蔵 (18)
		秋保2	
塩竈	塩竈	塩竈 (10)	
山形	羽黒	月山	月山荘前 (24), 大越沢 (10)
		榎引	たらのき代 (19)
新潟	新発田	板山	板山牧場 (10)
	新津	金津	金津 (7)
栃木	高原山	甘湯沢	甘湯沢 (22)
		七尋沢	七尋沢 (3), 宮川 (3), 枝持沢 (3)
長野	和田	西餅屋	芙蓉バーライト土砂集積場 (30)
		鷹山	鷹山 (14), 東餅屋 (54)
		小深沢	小深沢 (42)
		土屋橋1	土屋橋西 (10)
		土屋橋2	新和田トンネル北 (20), 土屋橋北西 (58), 土屋橋西 (1)
		古峠	和田峠トンネル上 (28), 古峠 (38), 和田峠スキー場 (28)
		ブドウ沢	ブドウ沢 (20)
	牧ヶ沢	牧ヶ沢下 (20)	
	高松沢	高松沢 (19)	
	諏訪	星ヶ台	星ヶ台 (35), 星ヶ塔 (20)
神奈川	箱根	蓼科	冷山 (20), 麦草峠 (20), 麦草峠東 (20)
		芦ノ湯	芦ノ湯 (20)
		畑宿	畑宿 (51)
		鍛冶屋	鍛冶屋 (20)
静岡	天城	上多賀	上多賀 (20)
		柏峠	柏峠 (20)
東京	神津島	恩馳島	恩馳島 (27)
		砂糠崎	砂糠崎 (20)
島根	隠岐	久見	久見バーライト中 (6), 久見採掘現場 (5)
		箕浦	箕浦海岸 (3), 加茂 (4), 岸浜 (3)



図V-2-3 黒曜石産地推定判別図(2)



図V-2-2 黒曜石産地推定判別図(1)

表V-2-3 測定値および産地推定結果

試料番号	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率 (cps)	Mn*100/Fe	Sr分率	log Fe/K	Y分率	判別群	エリア	試料番号
1	222.1	68.4	1620.0	641.5	165.6	305.2	524.2	39.20	4.22	10.12	0.86	18.65	白滝1	白滝	1
2	282.6	83.1	1999.5	731.4	186.7	336.5	550.0	40.53	4.16	10.35	0.85	18.65	白滝1	白滝	2
3	251.7	78.8	1867.1	727.8	411.7	338.2	855.9	31.19	4.22	17.64	0.87	14.49	所山	置戸	3
4	280.0	83.8	1955.5	763.8	434.8	362.0	916.8	30.83	4.28	17.55	0.84	14.61	所山	置戸	4
5	333.0	90.0	2126.4	832.6	454.2	382.1	954.4	31.74	4.23	17.31	0.81	14.57	所山?	置戸?	5
6	273.4	80.9	1921.2	741.3	413.3	349.3	867.2	31.26	4.21	17.43	0.85	14.73	所山	置戸	6
7	267.8	72.5	1712.9	657.1	372.0	309.5	783.1	30.97	4.23	17.53	0.81	14.59	所山?	置戸?	7
8	305.5	89.6	2101.6	820.3	461.8	382.9	975.2	31.07	4.26	17.49	0.84	14.50	所山	置戸	8
9	231.8	66.8	1673.5	611.7	339.7	281.2	696.9	31.70	3.99	17.61	0.86	14.57	所山	置戸	9
10	311.8	94.0	2200.9	848.0	478.6	397.9	1000.7	31.12	4.27	17.56	0.85	14.60	所山	置戸	10
11	283.6	86.2	2072.9	806.8	450.5	376.8	950.4	31.22	4.16	17.43	0.86	14.58	所山	置戸	11
12	270.0	113.6	3699.2	682.9	802.4	373.3	1197.8	22.34	3.07	26.25	1.14	12.21	留辺薬1	留辺薬	12
13	241.7	75.7	1685.2	686.3	298.4	363.8	677.5	33.87	4.49	14.73	0.84	17.96	上土幌	上土幌	13
14	316.4	90.9	2157.5	844.4	476.3	397.6	995.8	31.11	4.21	17.55	0.83	14.65	所山	置戸	14
15	247.3	73.3	1704.0	687.1	388.9	332.3	831.0	30.68	4.30	17.37	0.84	14.84	所山	置戸	15
16	314.0	92.0	2150.3	847.0	467.3	393.4	976.5	31.55	4.28	17.41	0.84	14.66	所山	置戸	16
17	233.9	68.0	1745.9	633.4	354.6	290.0	733.0	31.50	3.90	17.63	0.87	14.42	所山	置戸	17
18	237.6	69.1	1715.7	675.6	380.2	321.8	809.6	30.89	4.03	17.38	0.86	14.71	所山	置戸	18
19	279.7	89.7	1917.7	800.2	345.0	427.2	862.4	34.27	4.68	14.78	0.84	18.30	上土幌	上土幌	19
20	309.5	85.1	1961.1	802.2	448.9	373.8	963.7	30.99	4.34	17.34	0.80	14.44	所山?	置戸?	20

赤井川群および上土幌群の原石および石器について、横軸Y分率、縦軸Mn強度×100/Fe強度をプロットした判別図を図V-2-4に示す。図V-2-4においても、2点いずれもが上土幌群と判断できる。

表V-2-3に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。また、表V-2-4に器種別の産地を示す。

表V-2-4 器種別の産地

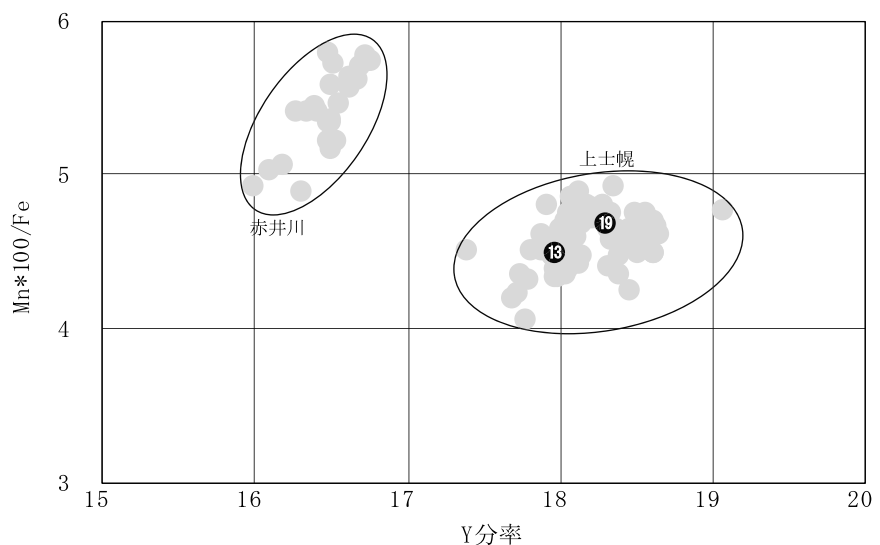
時期	器種	白滝	上土幌	置戸	留辺薬	計
続縄文 下田ノ沢式	石鎌	2	1	5		8
	石槍またはナイフ				1	1
	楔形石器			1		1
	スクレイパー		1	9		10
	計	2	2	15	1	20

4. おわりに

温根沼2遺跡より出土した続縄文時代下田ノ沢式期の黒曜石製石器20点について、蛍光X線分析による産地推定を行った結果、2点が白滝、2点が上土幌、15点が置戸、1点が留辺薬エリア産と推定された。

引用文献

望月明彦(1999) 上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定. 大和市教育委員会編「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2—上和田城山遺跡篇—」: 172-179, 大和市教育委員会.



図V-2-4 黒曜石産地推定判別図(3)

3 温根沼2 遺跡における樹種同定報告

株式会社古環境研究所

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、木材構造から概ね属レベルの同定が可能である。また木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能である。本報告では、温根沼2 遺跡より出土した炭化材の樹種を同定し、当時の木材利用と周辺植生について検討する。

2. 試料と方法

試料は、ⅢH-1 (床面、床面直上、覆土下、覆土)、ⅢH-2 (床面直上)、ⅢH-5 (覆土)、ⅢH-9HC-1 (覆土中)、ⅢH-9HC-2 (覆土中)、ⅢH-9HC-3 (覆土中)、ⅢH-11 (覆土中)、ⅢH-14HC-1 (覆土3)、ⅢH-14HC-2 (覆土3)、ⅢH-14HC-3 (覆土3)、ⅢH-15 (覆土2)、ⅢH-16 (覆土下)、ⅢP-12 (覆土下)、ⅢP-16 (覆土上)、VH-3 (覆土3)、炭窯2 (覆土)より出土した炭化材計49点である。

樹種同定は、以下の方法で行った。試料を割り折りして新鮮な横断面 (木口と同義)、放射断面 (柾目と同義)、接線断面 (板目と同義) の基本三断面の断面を作製し、落射顕微鏡 (OPTIPHOTO-2: Nikon) によって50~1000倍で観察した。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

3. 結果

表V-3-1に結果を示し、主要な分類群の基本三断面の顕微鏡写真を写真図版に示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

1) モミ属 *Abies* マツ科 試料9、11、44

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で1分野に1~4個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、数珠状末端壁が見られる。放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からモミ属に同定される。日本に自生するモミ属は5種であり、モミ以外は亜寒帯種である。常緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

2) ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科 試料34、35、38

小型で丸い、放射方向にややのびた道管が、単独あるいは2~3個放射方向に複合し散在する散孔材である。道管の穿孔は単穿孔で、道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。放射組織は単列の異性放射組織型である。

以上の特徴からヤナギ属に同定される。ヤナギ属は落葉の高木または低木で、北海道、本州、四国、九州に分布する。材は軽軟で、耐朽性、保存性は低く、建築、器具などに用いられる。

3) クルミ属 *Juglans* クルミ科 試料12、17、18、21、22

大型で丸い道管が、単独あるいは2~数個放射方向に複合してまばらに散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、道管の径は徐々に減少する。軸方向柔細胞が多少波打ちながら、短接線状に1列に並び、網状柔組織をつくる傾向がある。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織はほとんどすべて平伏細胞からなるが、ときおり上下の縁辺にいくぶん大きい方形細胞が見られる。放射組織は同性放

射組織型で、1～3細胞幅である。

以上の特徴からクルミ属に同定される。クルミ属にはオニグルミ、ヒメグルミがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15～30m、径70～90cmである。材は耐朽性、保存性は低い、狂いが少なく靱性に富んでおり、建築、器具、彫刻など広く用いられる。

4) ハンノキ属 *Alnus* カバノキ科 試料3、5、19、45

小型で丸い道管が、放射方向に連なる傾向をみせて散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は10～30本ぐらいである。放射組織は、平伏細胞からなる単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からハンノキ属に同定される。ハンノキ属には、ハンノキ、ヤシャブシ、ケヤマハンノキなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。落葉の高木または低木である。

5) コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 試料8、28、29、30、32、43、46、48

年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の特徴からコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガンシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靱で弾力に富み、建築材などに用いられる。

6) ニレ属 *Ulmus* ニレ科 試料16、31、33、47

年輪のはじめに中型から大型の道管が1～3列配列する環孔材である。孔圏部外的小道管は多数複合して花束状、接線状、斜線状に比較的規則的に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で、1～5細胞幅ぐらいである。

以上の特徴からニレ属に同定される。ニレ属にはハルニレ、オヒョウなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する落葉の高木である。材は器具、旋作、薪炭などに用いられる。

7) カツラ *Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc. カツラ科 試料10、24、25、26、27、37

小型で薄壁の角張った道管が、単独ないし2～3個複合してかなり密に散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～40本ほどである。放射組織は異性放射組織型で、2細胞幅である。道管内にチロースが多数存在する。

以上の特徴からカツラに同定される。カツラは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、通常高さ15～20m、径50～60cmであるが、大きいものは高さ35m、径2mに達する。材は軽軟で靱性があり加工しやすく、建築材などに用いられる。

8) サクラ属 *Prunus* バラ科 試料14、15

丸い道管が単独あるいは2～3個放射方向および斜め方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性に近い異性放射組織型を示す。

以上の特徴からサクラ属に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。

9) ウルシ属 *Rhus* ウルシ科 試料39、40、42

年輪のはじめに大型の道管が単独あるいは2～3個複合して配列する環孔材である。晩材部で小道

管が単独あるいは主に放射方向に2～3個複合して散在する。早材から晩材にかけて道管の径は徐々に減少していく。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性放射組織型で、1～3細胞幅ぐらいである。

以上の特徴からウルシ属に同定される。ウルシ属にはヤマハゼ、ウルシ、ヌルデ、ヤマウルシ、ツタウルシなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑または落葉の低木～高木、または籐本である。

10) エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科 試料20

年輪のはじめに、やや小型で丸い道管が、おもに2～4個放射方向に複合して散在し、晩材部ではごく小型で角張った道管が単独あるいは数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけて緩やかに減少する。軸方向柔細胞が、晩材部において接線状に配列する。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は10本前後である。放射組織は、異性放射組織型で1～3細胞幅である。

以上の特徴からエゴノキ属に同定される。エゴノキ属には、エゴノキ、ハクウンボクなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の小高木で、高さ10m、径30cmである。材は器具、旋作、薪炭などに用いられる。

11) トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科 試料1、2、4、6、7、13、36

年輪のはじめに、大型で厚壁の丸い道管が、ほぼ単独で1～3列配列する環孔材である。孔圏部外では、小型でまると厚壁の道管が、単独あるいは放射方向に2～3個複合して散在する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。軸方向柔細胞は早材部で周囲状、晩材部では翼状から連合翼状である。道管の穿孔は単穿孔である。内部にはチロースが著しい。放射組織は同性放射組織型で、1～3細胞幅である。

以上の特徴からトネリコ属に同定される。トネリコ属にはヤチダモ、トネリコ、アオダモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する落葉または常緑の高木である。材は建築、家具、運動道具、器具、旋作、薪炭など広く用いられる。

12) 広葉樹 broad-leaved tree 試料23

道管と放射組織が存在する。

以上の特徴から広葉樹に同定される。なお本試料は小片で保存状態が悪く、また、炭化灰状になったものの細胞に粘土が詰まった状態であったことから、広葉樹の同定にとどめる。

13) 不明 unknown 試料41、49

試料番号41は極めて細片であり、堆積物粒子が付着するため、同定に至らなかった。試料番号49は木材の形質を呈しておらず、液状化して熱を受け発泡しつつ炭化したタール状物質であった。

4. 所見

同定の結果、温根沼2遺跡の炭化材は、コナラ属コナラ節8点、トネリコ属7点、カツラ6点、クルミ属5点、ハンノキ属4点、ニレ属4点、モミ属3点、ヤナギ属3点、ウルシ属3点、サクラ属2点、エゴノキ属1点、広葉樹1点、不明2点であった。

コナラ属コナラ節は強靱で弾力に富み、建築材としても用いられる木材である。北海道ではミズナラ、カシワなどが考えられるが、ナラ類は建築材だけではなく火持ちの良い薪炭材としても重宝される。トネリコ属は概して強靱で堅硬な材で、従曲性が非常に大きく、割裂は容易である。トネリコ属は器の木地によく利用されており、中でも挽物の椀の報告例が多い。カツラは木理通直で節その他の欠点は少なく、軽軟均質で、耐朽性・保存性は低いが、切削・加工が極めて容易で狂いが少ない樹木

である。大径木が多く欠点が少ないため大きい寸法の板材をとることができ、北日本では触れた時の冷感が弱いことから床板などに利用される。アイヌの事例としては丸木舟や刳物の食器などに重用されていた。クルミ属は強さ中庸で保存性が低いが、木理通直で狂いが少なく、粘り気が強く切削・加工は容易で、家具や器具、建築の内装などに利用される。ハンノキ属は耐朽性・保存性、切削・加工性ともに中庸な材で、挽物の器、杓子などの器具に利用されることが多い。アイヌの事例では、おしゃぶりにケヤマハンノキを利用したものがある。ニレ属のうち、ハルニレは重硬、オヒョウは強さ中庸で、アキニレはあまり強い材とは言えない。また、切削性や寸法安定性は不良で、色艶は冴えないが木目がケヤキに似るため、その代用材として器具や家具の部材として利用されることがある。なお、アイヌの事例としては火切臼としてハルニレ材を、アツシと呼ばれる織物のためにオヒョウの樹皮から採った繊維を利用している。モミ属は耐朽性・保存性は低いが、軽軟なため加工が容易な材である。建物の内装や建具によく利用され、高い防虫効果を期待され食品などの保管箱に利用されることもある。ヤナギ属は耐朽性・保存性は低く、切削・加工の容易で柔軟性に富む材である。器具などに利用されるが、材質からあまり重宝されない。なお、北海道ではイナウと呼ばれるアイヌの祭具の利用例がある。ウルシ属は低木から高木または籐本であり、概して中庸のヌルデ、やや弱く脆いが建築から木工細工に広く用いられるウルシなどがあるが、北海道ではヤマウルシ、ツタウルシが自生する。サクラ属は耐朽性・保存性の高い材で、切削・加工の難度は中庸で、概して堅硬な材と言える。縄文時代でサクラ属は比較的多く利用され、鉢などの容器や柱材などの報告例がある。エゴノキ属はやや堅硬であるが、切削・加工は容易な材である。

本遺跡で同定された樹木のほとんどは、温帯に分布する樹種であった。コナラ属コナラ節は日当たりの良い山野に生育し、ミズナラなどの冷温帯落葉広葉樹林の主要構成要素や、海岸沿いで生育するカシワなどが含まれる。また、山地に生育する樹木は他にヤシャブシ（ハンノキ属）、ハルニレやオヒョウ（ニレ属）、エゴノキ属、ウルシ属がある。モミ属は日本に5種が自生しており、そのうちウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソは亜寒帯に、モミは温帯を中心に分布し、谷間や緩傾斜地の適潤な深層の肥沃地を好んで生育する。なお、トネリコ属、カツラ、クルミ属、ハンノキ（ハンノキ属）、アキニレ（ニレ属）、ヤナギ属、サクラ属は、河川や沢沿いなどの湿地や水湿のある適潤地に生育する。

これらの樹木は、いずれも当時遺跡周辺に分布していたとみられる。また、トネリコ属などの適潤地を好む樹木が多く、遺跡の立地から近隣の沼や河川沿いの湿性にこれらの樹木が生育していた。同定された中にはアイヌの民俗例に見られるものもあり、北海道の豊富な森林資源から用材を得ており、当時遺跡周辺からか、または地域的な流通によって近隣地域よりもたらされたと推定される。

参考文献

- 伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学，雄山閣，p.449.
- 佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.
- 佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.
- 島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296.
- 山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第1号，植生史研究会，p.242.

表V-3-1 根室市温根沼2 遺跡における樹種同定結果

試料番号	採取地点	採取層位	サンプルNo	結果 (学名/和名)		備考
1	Ⅲ H-1	床面	1	<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	
2	Ⅲ H-1	床面	2	<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	
3	Ⅲ H-1	床面	3	<i>Alnus</i>	ハンノキ属	
4	Ⅲ H-1	床面	4	<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	
5	Ⅲ H-1	床面	5	<i>Alnus</i>	ハンノキ属	
6	Ⅲ H-1	床面	6	<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	
7	Ⅲ H-1	床面	8	<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	
8	Ⅲ H-1	床面	11	<i>Quercus sect. Prinus</i>	コナラ属コナラ節	
9	Ⅲ H-1	床面直上	22	<i>Abies</i>	モミ属	
10	Ⅲ H-1	床面直上	24	<i>Cercidiphyllum japonicum</i> Sieb. et Zucc.	カツラ	
11	Ⅲ H-1	覆土	31	<i>Abies</i>	モミ属	
12	Ⅲ H-1	覆土	33	<i>Juglans</i>	クルミ属	
13	Ⅲ H-2	床面直上	2	<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	
14	Ⅲ H-2	床面直上	4	<i>Prunus</i>	サクラ属	
15	Ⅲ H-2	床面直上	5	<i>Prunus</i>	サクラ属	
16	Ⅲ H-2	床面直上	8	<i>Ulmus</i>	ニレ属	
17	Ⅲ H-2	床面直上	10	<i>Juglans</i>	クルミ属	
18	Ⅲ H-2	床面直上	11	<i>Juglans</i>	クルミ属	
19	Ⅲ H-2	床面直上	12	<i>Alnus</i>	ハンノキ属	
20	Ⅲ H-2	床面直上	13	<i>Styrax</i>	エゴノキ属	
21	Ⅲ H-2	床面直上	15	<i>Juglans</i>	クルミ属	
22	Ⅲ H-2	床面直上	17	<i>Juglans</i>	クルミ属	
23	Ⅲ H-5	覆土	6	broad-leaved tree	広葉樹	炭化灰状
24	Ⅲ H-9HC-1	覆土中	1	<i>Cercidiphyllum japonicum</i> Sieb. et Zucc.	カツラ	
25	Ⅲ H-9HC-1	覆土中	2	<i>Cercidiphyllum japonicum</i> Sieb. et Zucc.	カツラ	
26	Ⅲ H-9HC-1	覆土中	3	<i>Cercidiphyllum japonicum</i> Sieb. et Zucc.	カツラ	
27	Ⅲ H-9HC-1	覆土中	4	<i>Cercidiphyllum japonicum</i> Sieb. et Zucc.	カツラ	
28	Ⅲ H-9HC-2	覆土中	5	<i>Quercus sect. Prinus</i>	コナラ属コナラ節	
29	Ⅲ H-9HC-2	覆土中	6	<i>Quercus sect. Prinus</i>	コナラ属コナラ節	
30	Ⅲ H-9HC-3	覆土中	7	<i>Quercus sect. Prinus</i>	コナラ属コナラ節	
31	Ⅲ H-9HC-3	覆土中	8	<i>Ulmus</i>	ニレ属	
32	Ⅲ H-9HC-3	覆土中	9	<i>Quercus sect. Prinus</i>	コナラ属コナラ節	
33	Ⅲ H-11	覆土中	2	<i>Ulmus</i>	ニレ属	
34	Ⅲ H-14HC-1	覆土3	10	<i>Salix</i>	ヤナギ属	
35	Ⅲ H-14HC-1	覆土3	11	<i>Salix</i>	ヤナギ属	
36	Ⅲ H-14HC-2	覆土3	12	<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	
37	Ⅲ H-14HC-2	覆土3	13	<i>Cercidiphyllum japonicum</i> Sieb. et Zucc.	カツラ	
38	Ⅲ H-14HC-2	覆土3	14	<i>Salix</i>	ヤナギ属	
39	Ⅲ H-14HC-3	覆土3	15	<i>Rhus</i>	ウルシ属	
40	Ⅲ H-14HC-3	覆土3	16	<i>Rhus</i>	ウルシ属	
41	Ⅲ H-15	覆土2	1	unknown	不明	細片
42	Ⅲ H-15	覆土2	2	<i>Rhus</i>	ウルシ属	
43	Ⅲ H-15	覆土2	3	<i>Quercus sect. Prinus</i>	コナラ属コナラ節	
44	Ⅲ H-16	覆土下	—	<i>Abies</i>	モミ属	
45	Ⅲ H-1	覆土下	—	<i>Alnus</i>	ハンノキ属	
46	Ⅲ P-12	覆土下	3	<i>Quercus sect. Prinus</i>	コナラ属コナラ節	
47	Ⅲ P-16	覆土上	1	<i>Ulmus</i>	ニレ属	
48	VH-3	覆土3	1	<i>Quercus sect. Prinus</i>	コナラ属コナラ節	
49	炭窯2	覆土	—	unknown	不明	タール状物質



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
モミ属 試料番号11 IIIH-1 覆土



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
ヤナギ属 試料番号34 IIIH-14HC-1 覆土3



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
クルミ属 試料番号17 IIIH-2 床面直上

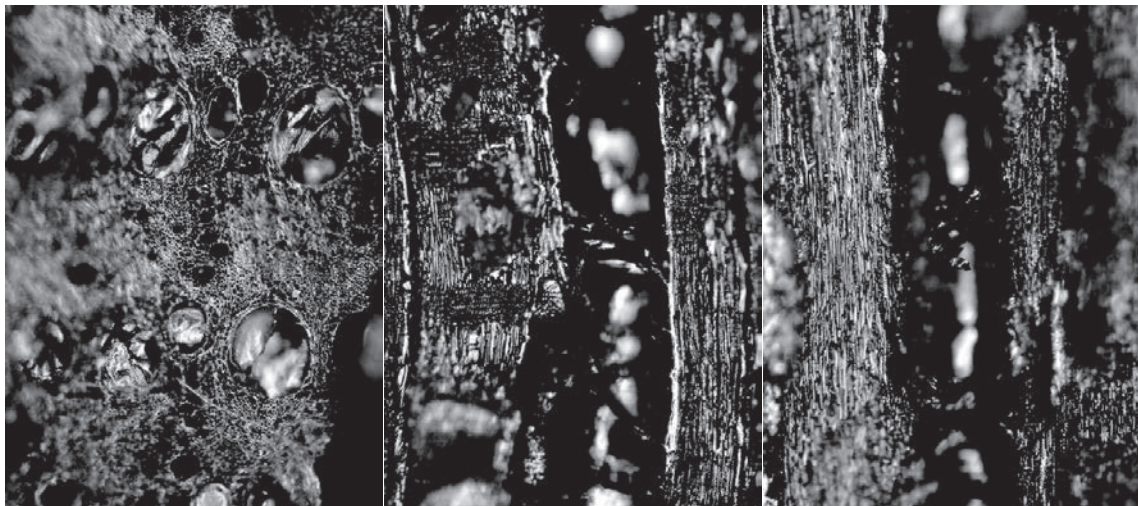
図版V-3-1 温根沼2 遺跡の木材 I



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
 ハンノキ属 試料番号19 IIIH-2 床面直上



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
 コナラ属コナラ節 試料番号8 IIIH-1 床面

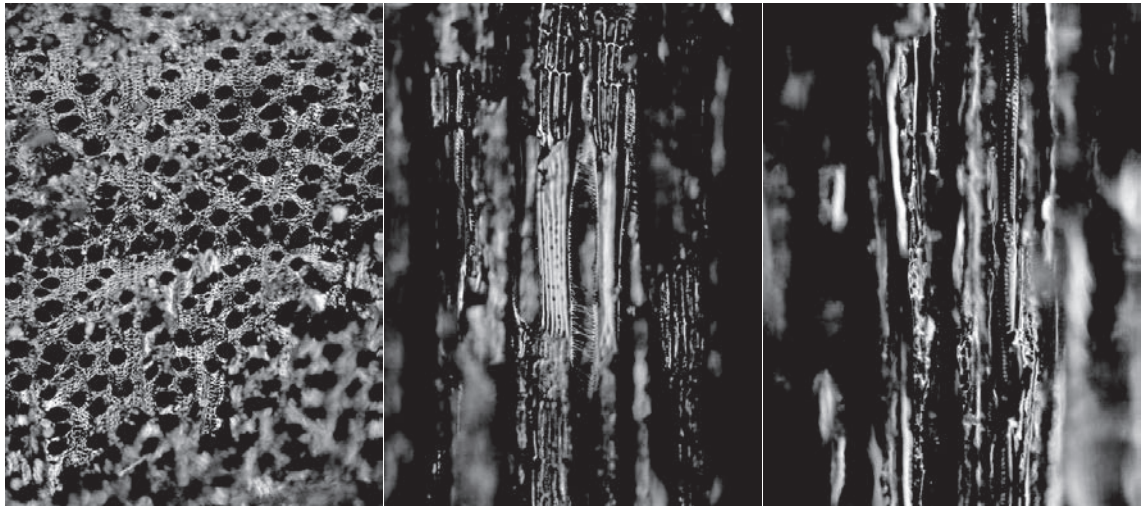


横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
 コナラ属コナラ節 試料番号28 IIIH-9HC-2 覆土中

図版V-3-2 温根沼2 遺跡の木材 II



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
ニレ属 試料番号33 IIIH-11 覆土中



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
カツラ 試料番号24 IIIH-9HC-1 覆土中



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
サクラ属 試料番号14 IIIH-2 床面直上

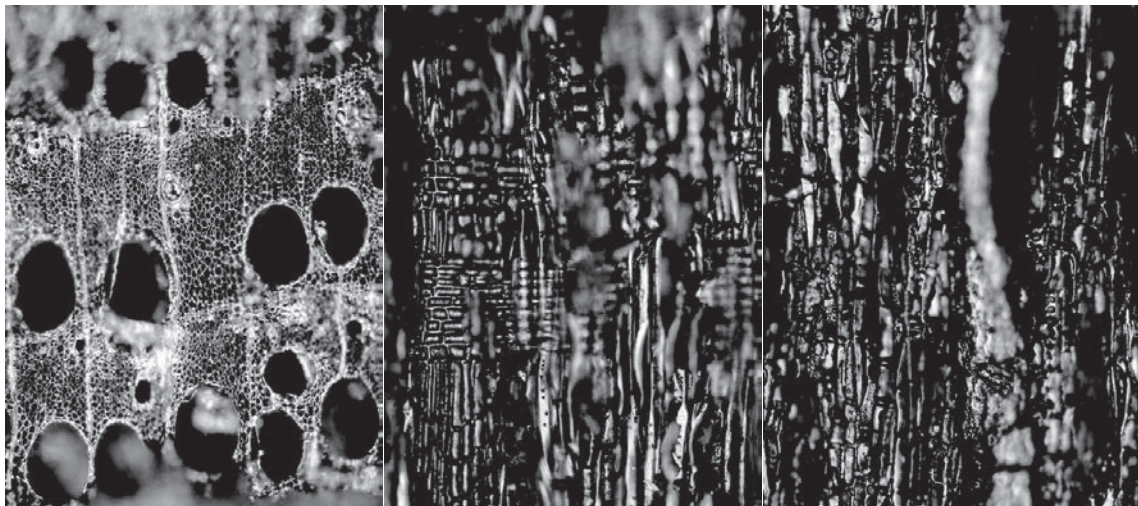
図版V-3-3 温根沼2遺跡の木材 III



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
ウルシ属 試料番号39 IIIH-14HC-3 覆土3



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
エゴノキ属 試料番号20 IIIH-2 床面直上



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
トネリコ属 試料番号1 IIIH-1 床面

図版V-3-4 温根沼2 遺跡の木材 IV

4 根室市温根沼2遺跡出土種実の同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

温根沼2遺跡は、北海道根室市温根沼に所在し、根室半島の付け根に位置する縄文時代～擦文文化期にかけての遺跡である。本分析調査では、遺構覆土より検出された炭化種実の同定を実施し、当時の植物利用および周辺植生に関する情報を得る。

1. 試料

試料は、ⅢH-2HF-1の上面、ⅢH-2のカマド1粘土、ⅢH-3のカマド1覆土、カマド1カマド内、カマド1粘土、カマド2粘土、カマド2焼土、ⅢH-6の焼土、ⅢH-9HF-1の焼土上面、ⅢP-2F-1の焼土から検出された炭化種実35点93個である。試料は遺構覆土のフローテーションにより検出され、全て乾燥した状態で容器に収納されている（試料番号1～35）。各試料の詳細は、結果とともに表V-4-1に示す。

2. 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な炭化種実を拾い出す。

同定は、現生標本や石川（1994）、中山ほか（2010）、鈴木ほか（2012）等を参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて結果を一覧表で示す。同定された分類群は、写真を添付する他、種実の大きさをデジタルノギスで計測し、結果を一覧表に記して同定根拠とする。種実以外の分析残渣は、確認される種類の個数を一覧表に併記する。分析後は、種実を分類群別に容器に入れ、分析残渣を容器に戻して返却する。

3. 結果

炭化種実同定結果を表V-4-1に、種実の写真を図版1に示す。

分析に供された35試料を通じて、炭化種実は1個も確認されなかった。炭化していない種実遺体は、ⅢH-3のカマド1粘土（試料番号13）より1個確認され、落葉広葉樹のエゾニワトコの核に同定された。他の34試料からは、炭化していないスギナ類の地下茎やミミズ類の卵、虫類が確認され、いずれも極めて良好な保存状態を示す。以下、種実の形態的特徴等を述べる。

・エゾニワトコ (*Sambucus racemosa* L. subsp. *kamtschatica* (E.Wolf) Hulten) スイカズラ科ニワトコ属

核（内果皮）は淡黄灰褐色、長さ2.41mm、幅1.76mm、厚さ1.03mmのやや偏平広倒卵体で基部が尖る。背面は丸みがあり、腹面正中線上は鈍稜をなし、基部に小さな孔がある。内果皮はやや硬く、表面には横皺状模様が発達する。出土核は腹面基部を欠損する。

4. 考察

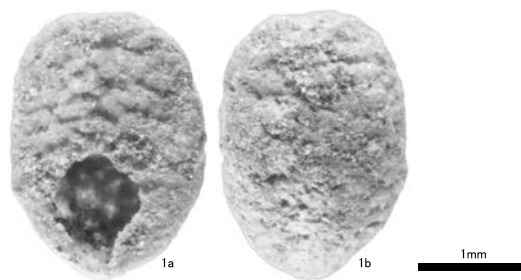
炭化種実同定の結果、炭化種実は1個も確認されなかった。試料は、炭化していない種実1個（エゾニワトコ）と、スギナ類の地下茎やミミズ類の卵、虫類から成り、いずれも極めて良好な保存状態を示す。

ⅢH-3のカマド1粘土より確認されたエゾニワトコは、山野の林縁などの明るい場所に生育する低

木または高木の落葉広葉樹で、現在の本地域にも分布する。遺跡周辺域の森林の林縁等に生育していたと考えられる。ただし、極めて良好な保存状態を考慮すると、遺構の時期の植生を反映するものであるかは課題が残るため、試料の履歴を慎重に検討することが望まれる。

表V-4-1 炭化種実同定結果一覧

試料番号	遺構／(発掘区)	層位	遺物番号／フロッテーション番号		数量		分類群／部位	個数	備考
			遺物番号	フロッテーション番号	重量 (g)	点数			
1	Ⅲ H-2HF-1	上面	32		0.01以下	1	種実ではない	—	ミミズ類の卵
2	Ⅲ H-2HF-1	上面	33		0.01以下	1	種実ではない	—	ミミズ類の卵
3	Ⅲ H-2	カマド1粘土	53-1		0.1	1	種実ではない	—	スギナ類の地下茎
4	Ⅲ H-2	カマド1粘土	53-2		0.3	1	種実ではない	—	スギナ類の地下茎
5	Ⅲ H-3	カマド1覆土	22-1		0.01以下	1	種実ではない	—	スギナ類の地下茎 (破片)
6	Ⅲ H-3	カマド1覆土	22-2		0.01以下	1	種実ではない	—	菌類の菌核
7	Ⅲ H-3	カマド1覆土	22-3		0.01	1	種実ではない	—	スギナ類の地下茎 (破片)
8	Ⅲ H-3	カマド1覆土	23		0.01	1	種実ではない	—	スギナ類の地下茎 (破片)
9	Ⅲ H-3	カマド1覆土	24		0.02	4	種実ではない	—	スギナ類の地下茎 (破片2), ミミズ類の卵 (1), 虫類 (破片1)
10	Ⅲ H-3	カマド1覆土	27		0.01	2	種実ではない	—	スギナ類の地下茎 (破片1), ミミズ類の卵 (破片4)
11	Ⅲ H-3	カマド1カマド内	28		0.01以下	1	種実ではない	—	ミミズ類の卵
12	Ⅲ H-3	カマド1粘土	54		0.1	9	種実ではない	—	スギナ類の地下茎 (2), ミミズ類の卵 (7)
13	Ⅲ H-3	カマド1粘土	55		0.01以下	1	エンゾワトコ核	1	非炭化, 長さ2.41, 幅1.76, 厚さ1.03mm, 腹面基部欠損
14	Ⅲ H-3	カマド1粘土	57		0.5	3	種実ではない	—	スギナ類の地下茎 (2, 破片3)
15	Ⅲ H-3	カマド1粘土	60		0.06	2	種実ではない	—	スギナ類の地下茎 (破片1), ミミズ類の卵 (破片1)
16	Ⅲ H-3	カマド1粘土	62		0.02	1	種実ではない	—	スギナ類の地下茎
17	Ⅲ H-3	カマド1粘土	63		0.2	7	種実ではない	—	スギナ類の地下茎 (4, 破片3)
18	Ⅲ H-3	カマド1粘土	64		0.6	8	種実ではない	—	スギナ類の地下茎 (7, 破片1)
19	Ⅲ H-3	カマド1粘土	65-1		0.2	4	種実ではない	—	スギナ類の地下茎 (2, 破片1), ミミズ類の卵 (1)
20	Ⅲ H-3	カマド1粘土	65-2		0.01以下	3	種実ではない	—	ミミズ類の卵 (3)
21	Ⅲ H-3	カマド1焼土	68		0.3	2	種実ではない	—	スギナ類の地下茎 (1, 破片1)
22	Ⅲ H-3	カマド1焼土	69-1		0.1	3	種実ではない	—	スギナ類の地下茎
23	Ⅲ H-3	カマド1焼土	69-2		0.05	4	種実ではない	—	スギナ類の地下茎 (1, 破片2)
24	Ⅲ H-3	カマド2粘土	72		0.6	6	種実ではない	—	スギナ類の地下茎 (2, 破片3)
25	Ⅲ H-3	カマド2粘土	73		0.2	3	種実ではない	—	スギナ類の地下茎 (3)
26	Ⅲ H-3	カマド2粘土	81		0.1	1	種実ではない	—	スギナ類の地下茎
27	Ⅲ H-3	カマド2焼土	86		0.02	1	種実ではない	—	スギナ類の地下茎 (破片)
28	Ⅲ H-3	カマド2粘土	87-1		0.5	4	種実ではない	—	スギナ類の地下茎 (2, 破片1)
29	Ⅲ H-3	カマド2焼土	87-2		0.02	1	種実ではない	—	スギナ類の地下茎
30	Ⅲ H-3	カマド2焼土	88-1		0.4	1	種実ではない	—	スギナ類の地下茎
31	Ⅲ H-3	カマド2焼土	88-2		0.1	2	種実ではない	—	スギナ類の地下茎 (2)
32	Ⅲ H-6	焼土	17		0.01以下	1	種実ではない	—	ミミズ類の卵 (破片)
33	Ⅲ H-9HF-1	焼土上面	36-1		0.2	4	種実ではない	—	スギナ類の地下茎 (1, 破片3)
34	Ⅲ H-9HF-1	焼土上面	36-2		0.2	5	種実ではない	—	スギナ類の地下茎 (3, 破片1)
35	Ⅲ P-2F-1	焼土	2		0.1	2	種実ではない	—	スギナ類の地下茎 (1, 破片1)
合計					5.02	93		1	



1. エゾワトコ核 (試料番号13)

図版V-4-1 種実遺体

引用文献

石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2010, 日本植物種子図鑑 (2010年改訂版). 東北大学出版会, 678p.
 鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文, 2012, ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実一形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実632種—. 誠文堂新光社, 272p.

5 根室市温根沼2遺跡の動物遺体同定

中村賢太郎 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

根室市に位置する温根沼2遺跡の発掘調査では、続縄文文化期、トビニタイ式期、擦文文化期の住居跡などが検出された。ここでは、住居跡などの遺構から出土した動物遺体の同定結果を報告する。

2. 試料と方法

試料は発掘調査現場および水洗選別で採取された62包の動物遺体である。試料が採取された遺構は、住居跡であるⅢH-1、ⅢH-2、ⅢH-3、ⅢH-9、ⅢH-11、およびⅢP-2、ⅢP-12である。遺構の時期は、ⅢH-1、ⅢH-11、ⅢP-2、ⅢP-12が続縄文時代の下田ノ沢式期、ⅢH-2とⅢH-3が擦文文化期後期、ⅢH-9が時期不明である。

試料の観察を肉眼と実体顕微鏡下で行い、標本との比較により分類群と部位を同定した。

3. 結果と考察

同定されたのは、ニシン科 (Clupeidae)、サケ科 (Salmonidae)、カレイ科 (Pleuronectidae)、種不明の硬骨魚綱 (Osteichthyes)、ヒグマ (*Ursus arctos*)、シカ (*Cervus nippon*)、種不明の哺乳綱 (Mammalia) の7分類群である。なお、種不明の哺乳綱のうち2点はイヌ (*Canis lupus familiaris*) の可能性がある。また、鳥綱 (Aves) の可能性がある骨片も見られた。

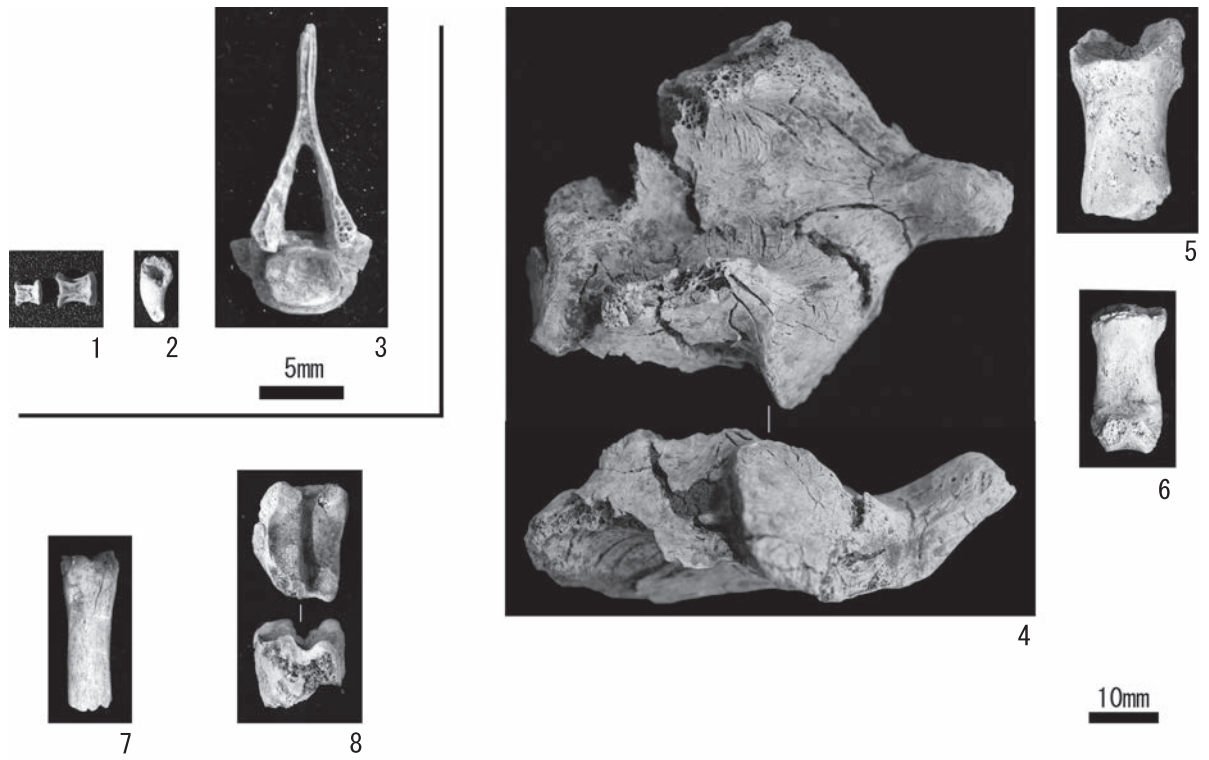
続縄文時代下田ノ沢式期のⅢH-1では、壁際焼土からヒグマの軸椎、基節骨、中節骨が各1点、覆土下からシカ基節骨1点など、大型哺乳綱の骨片が見られ、いずれの骨も焼けていた。ヒグマの軸椎は、収縮による亀裂が見られ、骨に軟質部が付着した状態で高温にさらされたと推定される。同じ時期のⅢH-11の焼土では、硬骨魚綱の椎骨4点が見られ、いずれも焼けていた。同じ時期のⅢP-2では鳥綱の可能性のある四肢骨片1点が見られ、焼けていた。同じ時期のⅢP-12では、カレイ科の第1椎骨1点、腹椎11点、尾椎12点などの魚骨が見られ、他の遺構とは異なり、骨が焼けていなかった。

擦文文化期後期のⅢH-2では、カマド焼土でニシン科腹椎6点、サケ科歯1点、カレイ科腹椎1点などの魚骨や哺乳綱が見られ、床面ではイヌの可能性のある基節骨1点を含む哺乳綱の骨片が見られ、いずれも焼けていた。同じ時期のⅢH-3のカマドでは、ニシン科の腹椎と尾椎、カレイ科の腹椎と尾椎など多くの魚骨と、イヌの可能性のある基節骨やヒグマの可能性のある骨片やシカの可能性のある骨片各1点を含む哺乳綱の骨片が見られ、いずれも焼けていた。

時期不明のⅢH-9の焼土上面では、鳥綱の可能性のある四肢骨片1点が見られ、焼けていた。

表V-5-1 根室市温根沼2遺跡動物遺体同定一覧

試料番号	遺構／(発掘区)	層位	遺物番号／フロレーション番号 (温2-#)	分類群	部位	左右	部分・状態	数量	備考
1a	Ⅲ H-1	壁焼土	骨2	ヒグマ	軸椎	—	椎体	1	焼、亀裂収縮
1b	Ⅲ H-1	壁焼土	骨2	ヒグマ	軸椎	—	破片	1	焼
2	Ⅲ H-1	壁際焼土	5	哺乳綱 (大型)	不明	不明	破片	2	焼
3	Ⅲ H-1	壁際焼土	8-1	ヒグマ	中節骨 (前後不明)	不明	ほぼ完存	1	焼
4a	Ⅲ H-1	壁際焼土	8-2	ヒグマ	基節骨 (前後不明)	不明	近位端	1	焼
4b	Ⅲ H-1	壁際焼土	8-2	ヒグマ?	脛骨	右	遠位端、破片	1	焼
4c	Ⅲ H-1	壁際焼土	8-2	ヒグマ?	四肢骨	不明	骨端破片	1	焼
5	Ⅲ H-1	壁際焼土	9	ヒグマ?	寛骨	左	寛骨臼、破片	3	焼
6	Ⅲ H-1	石囲い炉焼土	(セパレーションNo.) 11	哺乳綱 (大型)	不明	不明	破片	1	焼
7	Ⅲ H-1	石囲い炉焼土	(セパレーションNo.) 18	哺乳綱 (大型)	不明	不明	破片	2	焼
8	Ⅲ H-2	床面	5	哺乳綱 (大型)	中手骨あるいは中足骨	不明	近位端	1	焼
9	Ⅲ H-2	床面	6	イヌ?	基節骨 (前後不明)	不明	近位端	1	焼
10	Ⅲ H-2	床面	7	哺乳綱	椎骨	—	尾椎?	1	焼
11	Ⅲ H-2	床面	9	哺乳綱	不明	不明	破片	1	焼
12	Ⅲ H-2, HF-1	上面	33	哺乳綱	不明	不明	破片	2	焼
13	Ⅲ H-2	カマド焼土	74	カレイ科	腹椎	—	椎体	1	焼
14	Ⅲ H-2	カマド1焼土	75	サケ科	歯	不明	遊離歯	1	焼
15	Ⅲ H-2	カマド1焼土	76	哺乳綱	不明	不明	破片	1	焼
16	Ⅲ H-2	カマド1焼土	77-1	哺乳綱	不明	不明	破片	3	焼
17	Ⅲ H-2	カマド1焼土	77-2	ニシン科	腹椎	—	椎体	6	焼
18	Ⅲ H-3	カマド1	2	イヌ?	基節骨 (前後不明)	不明	遠位端	1	焼
19	Ⅲ H-3	カマド1覆土	21	哺乳綱	不明	不明	破片	1	焼
20a	Ⅲ H-3	カマド1覆土	22-1	ニシン科	腹椎	—	椎体	4	焼
20b	Ⅲ H-3	カマド1覆土	22-1	ニシン科	尾椎	—	椎体	4	焼
20c	Ⅲ H-3	カマド1覆土	22-1	カレイ科	腹椎	—	椎体	1	焼
20d	Ⅲ H-3	カマド1覆土	22-1	硬骨魚綱	椎骨	—	椎体	4	焼
21	Ⅲ H-3	カマド1覆土	22-2	哺乳綱	不明	不明	破片	2	焼
22	Ⅲ H-3	カマド1覆土	23-1	哺乳綱	不明	不明	破片	1	焼
23a	Ⅲ H-3	カマド1覆土	23-2	ニシン科	腹椎	—	椎体	1	焼
23b	Ⅲ H-3	カマド1覆土	23-2	硬骨魚綱	腹椎	—	椎体	1	焼
23c	Ⅲ H-3	カマド1覆土	23-2	硬骨魚綱	椎骨	—	椎体	1	焼
24a	Ⅲ H-3	カマド1覆土	24-1	哺乳綱	指骨	不明	遠位端	1	焼
24b	Ⅲ H-3	カマド1覆土	24-1	哺乳綱	不明	不明	破片	4	焼
25a	Ⅲ H-3	カマド1覆土	24-2	ニシン科	腹椎	—	椎体	4	焼
25b	Ⅲ H-3	カマド1覆土	24-2	硬骨魚綱	椎骨	—	椎体	6	焼
26	Ⅲ H-3	カマド1覆土	27-1	哺乳綱	指骨	不明	遠位端	1	焼
27a	Ⅲ H-3	カマド1覆土	27-2	ニシン科	尾椎	—	椎体	1	焼
27b	Ⅲ H-3	カマド1覆土	27-2	カレイ科	腹椎	—	椎体	1	焼
27c	Ⅲ H-3	カマド1覆土	27-2	硬骨魚綱	椎骨	—	椎体	4	焼
28	Ⅲ H-3	カマド2カマド内	31-1	哺乳綱	不明	不明	破片	1	焼
29	Ⅲ H-3	カマド2カマド内	31-2	哺乳綱 (小型)	指骨	不明	完存	1	焼
30a	Ⅲ H-3	カマド2カマド内	31-3	ニシン科	腹椎	—	椎体	19	焼
30b	Ⅲ H-3	カマド2カマド内	31-3	カレイ科	腹椎	—	椎体	15	焼
30c	Ⅲ H-3	カマド2カマド内	31-3	カレイ科	尾椎	—	椎体	15	焼
30d	Ⅲ H-3	カマド2カマド内	31-3	硬骨魚綱	椎骨	—	椎体	25	焼
31	Ⅲ H-3	カマド2カマド内	47	カレイ科	腹椎	—	椎体	1	焼
32a	Ⅲ H-3	カマド2カマド内	48	ニシン科	腹椎	—	椎体	2	焼
32b	Ⅲ H-3	カマド2カマド内	48	ニシン科	尾椎	—	椎体	2	焼
32c	Ⅲ H-3	カマド2カマド内	48	硬骨魚綱	椎骨	—	椎体	4	焼
33	Ⅲ H-3	カマド1粘土	55	哺乳綱	指骨	不明	遠位端	1	焼
34	Ⅲ H-3	カマド1粘土	56-1	哺乳綱	頭蓋骨	不明	破片	1	焼
35	Ⅲ H-3	カマド1粘土	56-2	硬骨魚綱	椎骨	—	椎体	3	焼
36	Ⅲ H-3	カマド1	60	哺乳綱	不明	不明	破片	2	焼
37	Ⅲ H-3	カマド1焼土	68-1	哺乳綱	頭蓋骨	不明	破片	1	焼
38a	Ⅲ H-3	カマド1焼土	68-2	シカ?	中手骨あるいは中足骨?	不明	遠位端破片?	1	焼
38b	Ⅲ H-3	カマド1焼土	68-2	哺乳綱	不明	不明	破片	1	焼
39	Ⅲ H-3	カマド1焼土下	71	哺乳綱	不明	不明	破片	2	焼
40	Ⅲ H-3	カマド2	73	哺乳綱	指骨?	不明	破片	2	焼
41	Ⅲ H-3	カマド2粘土	79-1	哺乳綱 (小型)	指骨	不明	ほぼ完存	1	焼
42	Ⅲ H-3	カマド2粘土	79-2	硬骨魚綱	椎骨	—	椎体	9	焼
43	Ⅲ H-3	カマド2粘土	79-3	硬骨魚綱	歯	不明	遊離歯	1	焼
44a	Ⅲ H-3	カマド2粘土	81-1	哺乳綱	肋骨	不明	破片	1	焼
44b	Ⅲ H-3	カマド2粘土	81-1	哺乳綱	指骨?	不明	破片	1	焼
44c	Ⅲ H-3	カマド2粘土	81-1	哺乳綱	不明	不明	破片	8	焼
45	Ⅲ H-3	カマド2粘土	81-2	硬骨魚綱	椎骨	—	椎体	2	焼
46a	Ⅲ H-3	カマド2粘土	82	ニシン科	腹椎	—	椎体	2	焼
46b	Ⅲ H-3	カマド2粘土	82	カレイ科	腹椎	—	椎体	5	焼
46c	Ⅲ H-3	カマド2粘土	82	硬骨魚綱	椎骨	—	椎体	4	焼
47	Ⅲ H-3	カマド2粘土	83	哺乳綱	不明	不明	破片	1	焼
48a	Ⅲ H-3	カマド2焼土	85	ニシン科	尾椎	—	椎体	1	焼
48b	Ⅲ H-3	カマド2焼土	85	硬骨魚綱	椎骨	—	椎体	6	焼
49	Ⅲ H-3	カマド2焼土	86-1	哺乳綱	不明	不明	破片	5	焼
50a	Ⅲ H-3	カマド2焼土	86-2	ニシン科	腹椎	—	椎体	7	焼
50b	Ⅲ H-3	カマド2焼土	86-2	硬骨魚綱	椎骨	—	椎体	7	焼
51	Ⅲ H-3	カマド2焼土	86-3	硬骨魚綱	歯	不明	遊離歯	1	焼
52	Ⅲ H-3	カマド2焼土	87-1	哺乳綱	不明	不明	破片	10	焼
53a	Ⅲ H-3	カマド2焼土	87-2	ニシン科	腹椎	—	椎体	2	焼
53b	Ⅲ H-3	カマド2焼土	87-2	ニシン科	尾椎	—	椎体	3	焼
53c	Ⅲ H-3	カマド2焼土	87-2	硬骨魚綱	椎骨	—	椎体	4	焼
54	Ⅲ H-3	カマド2焼土	88-1	ヒグマ?	中手骨あるいは中足骨	不明	遠位端	1	焼
55	Ⅲ H-3	カマド2焼土	88-2	ニシン科	腹椎	—	椎体	1	焼
56	Ⅲ H-3	カマド2焼土	89	哺乳綱	不明	不明	破片	1	焼
57	Ⅲ H-9	焼土上面	44	鳥綱?	四肢骨	不明	破片	1	焼
58	Ⅲ H-11	焼土	(セパレーションNo.) 1	硬骨魚綱	椎骨	—	椎体	4	焼
59	Ⅲ P-2 F-1	焼土	2	鳥綱?	四肢骨	不明	骨幹破片	1	焼
60a	Ⅲ H-1 (旧Ⅲ P-5)	覆土下	—	シカ	基節骨 (前後不明)	不明	近位端	1	焼
60b	Ⅲ H-1 (旧Ⅲ P-5)	覆土下	—	哺乳綱	不明	不明	破片	1	焼
61a	Ⅲ H-2	床面	4	哺乳綱	指骨	不明	遠位端	1	焼
61b	Ⅲ H-2	床面	4	哺乳綱	不明	不明	破片	6	焼
62a	Ⅲ P-12	覆土上	—	カレイ科	第1椎骨	—	ほぼ完存	1	焼
62b	Ⅲ P-12	覆土上	—	カレイ科	腹椎	—	椎体	11	焼
62c	Ⅲ P-12	覆土上	—	カレイ科	尾椎	—	椎体	12	焼
62d	Ⅲ P-12	覆土上	—	硬骨魚綱	腹椎	—	椎体	4	焼
62e	Ⅲ P-12	覆土上	—	硬骨魚綱	尾椎	—	椎体	10	焼
62f	Ⅲ P-12	覆土上	—	硬骨魚綱	尾部棒状骨	—	ほぼ完存	1	焼



図版V-5-1 温根沼2遺跡出土動物遺体

1. ニシン科腹椎・尾椎 (20) 2. サケ科歯 (14) 3. カレイ科第1椎骨 (62) 4. ヒグマ軸椎 (1)
5. ヒグマ基節骨 (4) 6. ヒグマ中節骨 (3) 7. イヌ?基節骨 (9) 8. シカ基節骨 (60)

6 温根沼2遺跡出土石製品の岩石学的分析

アースサイエンス株式会社 加藤孝幸・飯田友章

1. 分析試料

分析した試料は表V-6-1のとおりである。

表V-6-1 分析試料一覧

分析番号	グリット 遺構名	遺物番号	日付	層位	分類等	石材	重量 (g)	備考
ON2-1	f17	8	2017年7月26日	Ⅱ	石核	頁岩	12	
ON2-2	j9	7	2017年5月30日	Ⅲ	フレイク	頁岩	6	
ON2-3	f7	38	2017年7月3日	V	原石片	頁岩	346	
ON2-4	VP-8	23	2017年7月6日	覆土上	フレイク	珪化岩	81	縄文時代早期後半。 下川町産の珪化岩に似る。

参考として、下川町の上名寄8遺跡の珪化岩2点についても分析した。

2. 肉眼鑑定

肉眼鑑定はルーペ（10×，20×）と実体顕微鏡（20×～50×）を併用して行った。結果は表V-6-2の通りである。

表V-6-2 肉眼鑑定結果

分析番号	岩石名	色調	肉眼的特徴
ON2-1	珪質頁岩	帯褐灰色	細粒ち密で、貝殻状断口を示す。塊状無層理で大部分は透明感に乏しい。厚さ1mm強の透明感ある薄層部あり。
ON2-2	珪質頁岩	灰色	珪化がやや強く、若干の透明感あり。原岩の泥岩の堆積構造が縞状構造として残存。
ON2-3	珪質頁岩 (～珪化岩)	黒色	細粒ち密で、貝殻状断口を示す。塊状無層理で透明感に乏しい部分から、黒曜石様に透明感に富む部分までがある。
ON2-4	珪化岩	赤色	酸化鉄を微量含む強珪化岩、原岩はあるが不明。透明感強い。割れ目に白色微細の石英が成長する。
A	珪化岩	橙色	透明感のある強珪化岩。原岩は火砕岩の可能性はあるが、詳細不明。
B	珪化岩	白色/黒色/赤褐色	透明感のある強珪化岩。晶洞に微細な石英がコロフォーム状に成長。原岩は火砕岩の可能性はあるが、詳細不明。

注：A、Bは比較資料（上名寄8遺跡）。

3. 蛍光X線分析

3.1 蛍光X線分析の方法

蛍光X線分析はエネルギー分散法蛍光X線分析装置を使用し、非破壊で行った。

蛍光X線分析のうちファンダメンタルパラメータ法（FP法）による分析は、試料をそのまま非破壊で、また粉末状態で、あるいは微量でも分析できるため、簡便な分析方法である。

以下はJEOL製 JSX-3100R II（XRF）分析装置を使用した場合である。各元素の一般的な測定条件を表3に例として示す。蛍光X線のエネルギーは個々の試料の条件によって、ほぼ表に示した範囲で変動する。X線管球は、エンドウィンドウ型のRh管球を用いている。測定環境は大気および真空状態で測定している。なお、試料室（大気および真空状態）とX線強度の関係は、軽元素（Na～Ca）のX線は大気により吸収され減衰する。よってFP法の場合は真空状態で測定を行ない、測定時間は一試料につき約60秒である。

定量分析は付属のソフトを用いファンダメンタルパラメータ法（FP法）によって行う。

なお、この装置では、Na-Uの元素が定量可能であり、C, N, Oといった軽元素は検出できない。

試料の測定で用いるFP法は、標準試料を用いた検量線法とは異なり、分析線の強度が試料の組成と基礎的定数（ファンダメンタルパラメータ）の関数として記述できるという考え方を基礎とした理論計算法である。この方法は、出所不明の未知試料の分析や、上述のように試料の形状や量に関わらず前処理なしで定量できるメリットがある。

表V-6-3 各元素の測定条件（例）

スペクトル名				蛍光X線 エネルギー (KeV)	スペクトル 強度比
K線		L線			
K α	K β	L α	L β		
Na-P				1.04-2.01	K α /K β 比 \approx 5~7
S-Ba	S-Ba			2.31-36.38	
		La-U	La-U	4.65-17.22	L α /L β 比 \approx 1

※特性X線、コンプトン散乱線（Rh）：Rh K α COMP, Rh K β COMP

分析を行なった試料は非破壊でそのまま試料室に設置し、真空状態で測定を行なった。

3.2 蛍光X線分析の結果

3.2.1 蛍光X線分析を行った試料の写真と分析ポイントを図版V-6-1に示す。また、分析結果を表V-6-4に示す。

4. 考察

4.1 試料の分析結果

(1) 珪質頁岩と珪化岩

分析値を各酸化物-SiO₂図にプロットした（図版V-6-1）。

これらの図（ハーカー図）は、本来SiO₂がより低い火成岩類について使用する図である。SiO₂が増えれば他の元素（酸化物表示）は当然減るので、この図では各酸化物はSiO₂が増加するのに反比例して減少する。

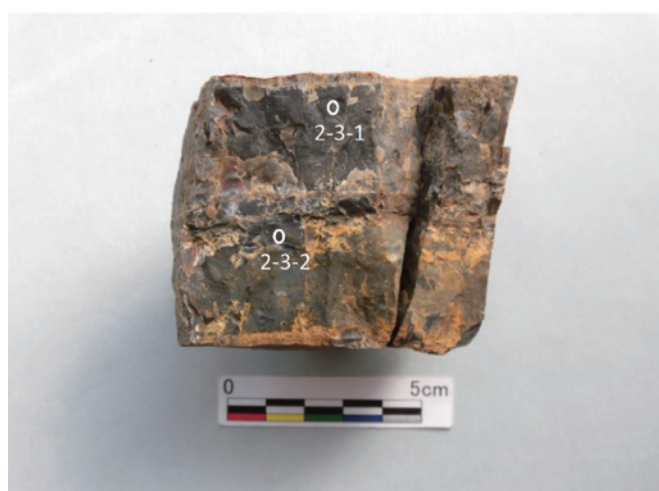
温根沼2遺跡出土の4試料（ON-1～4）は珪質頁岩ないし珪化岩で、原岩は少なくともON-1～3については泥岩であると考えられる。ON-4については珪化が進みすぎており、不明である。



No.ON2-1 分析ポイント



No.ON2-2 分析ポイント



No.ON2-3 分析ポイント

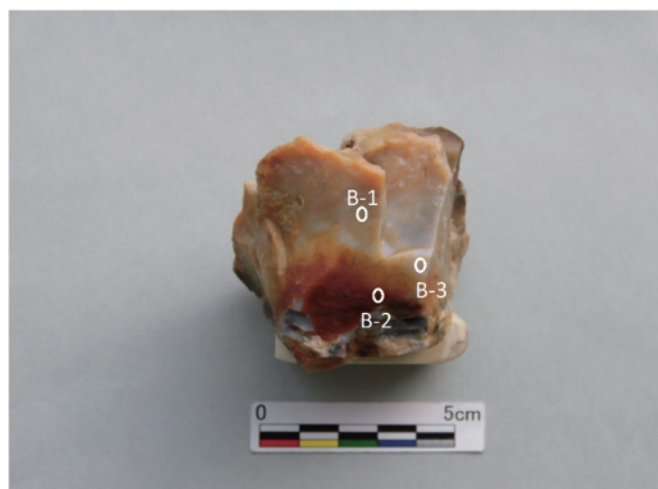
図版V-6-1 (1) 試料の写真と分析ポイント



No.ON2-4 分析ポイント



比較サンプルA 分析ポイント



比較サンプルB 分析ポイント

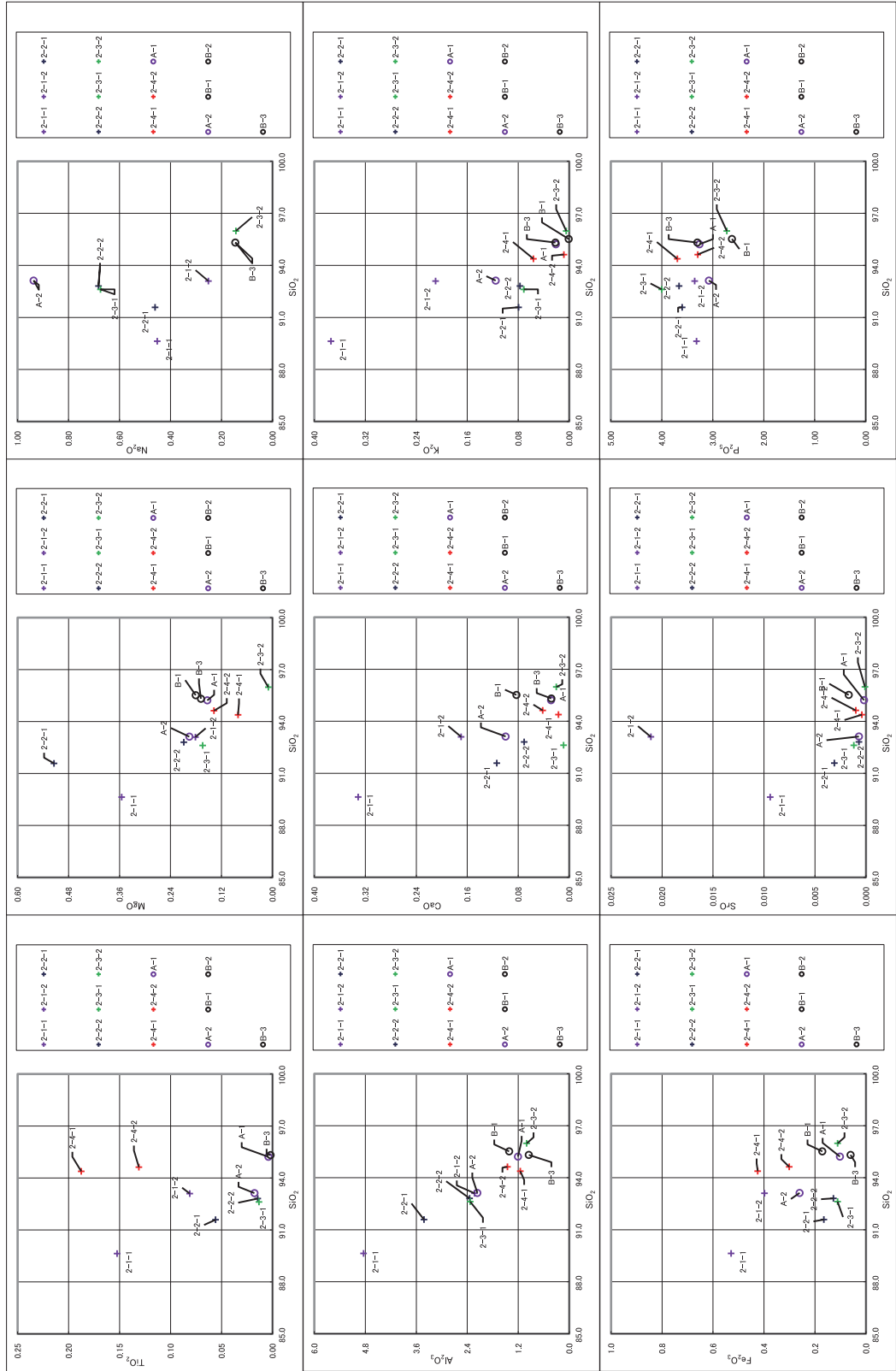
図版V-6-1 (2) 試料の写真と分析ポイント (続)

表V-6-4 温根沼2 遺跡、珪質頁岩・珪化岩分析結果

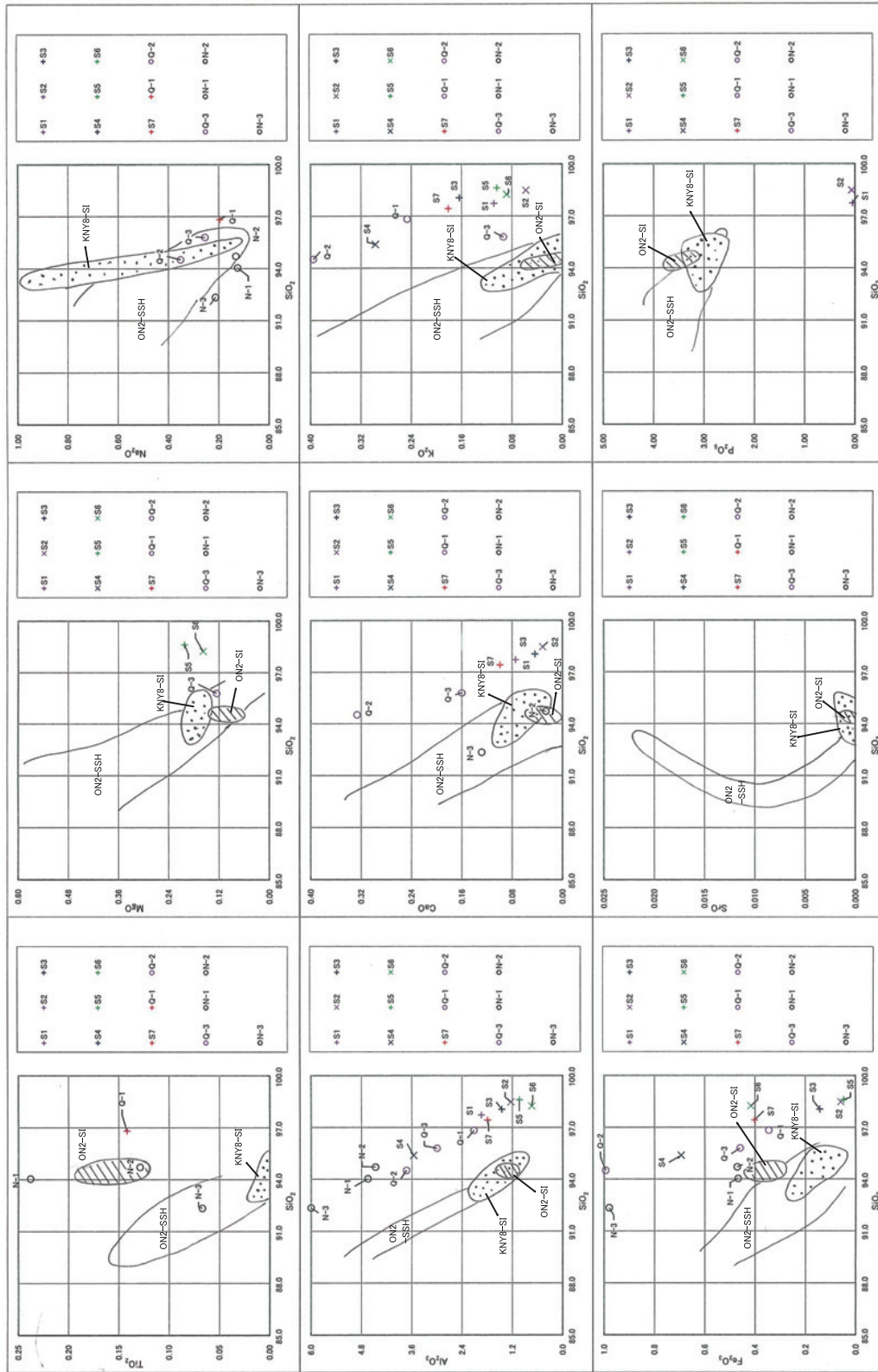
番号	No.ON2-1		2-1-2		2-2-1		No.ON2-2		2-2-2		2-3-1		No.ON2-3		2-3-2		2-4-1		No.ON2-4		2-4-2	
	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%
酸化物	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%
SiO ₂	89.63	93.59	93.10	96.09	91.59	94.79	92.81	95.78	92.62	95.79	95.98	97.99	94.38	97.20	94.63	97.21	94.38	97.20	94.63	97.21	94.38	97.20
TiO ₂	0.15	0.12	0.08	0.06	0.06	0.04	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.19	0.15	0.13	0.10	0.19	0.15	0.13	0.10	0.19	0.15
Al ₂ O ₃	4.84	2.98	2.23	1.36	3.42	2.09	2.35	1.43	2.33	1.42	1.00	0.60	1.15	0.70	1.46	0.88	1.15	0.70	1.46	0.88	1.15	0.70
Fe ₂ O ₃	0.53	0.21	0.40	0.15	0.17	0.06	0.13	0.05	0.11	0.04	0.11	0.04	0.42	0.16	0.30	0.12	0.42	0.16	0.30	0.12	0.42	0.16
MgO	0.35	0.55	0.18	0.28	0.51	0.79	0.21	0.32	0.16	0.25	0.01	0.02	0.08	0.12	0.21	0.21	0.08	0.12	0.21	0.21	0.08	0.12
CaO	0.33	0.37	0.17	0.19	0.11	0.13	0.07	0.08	0.01	0.01	0.01	0.02	0.02	0.02	0.04	0.05	0.02	0.02	0.04	0.05	0.02	0.02
Na ₂ O	0.45	0.46	0.25	0.25	0.46	0.46	0.68	0.68	0.67	0.68	0.14	0.14	0.06	0.04	0.01	0.01	0.06	0.04	0.01	0.01	0.06	0.04
K ₂ O	0.37	0.25	0.21	0.14	0.08	0.05	0.08	0.05	0.07	0.05	0.07	0.00	0.06	0.00	0.01	0.01	0.06	0.00	0.01	0.01	0.06	0.00
P ₂ O ₅	3.32	1.47	3.36	1.47	3.60	1.58	3.66	1.60	4.00	1.75	2.72	1.18	3.70	1.61	3.30	1.43	3.70	1.61	3.30	1.43	3.70	1.61
SrO	0.01	0.01	0.02	0.01	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
SO ₂																						

番号	比較サンプルA(上名寄)		B-1		B-2		比較サンプルB(上名寄)		B-3	
	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%
酸化物	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%
SiO ₂	95.22	97.53	93.13	95.81	95.52	97.58	58.34	74.21	95.32	97.52
TiO ₂	0.00	0.00	0.02	0.01			0.12	0.12	0.00	0.00
Al ₂ O ₃	1.21	0.73	2.16	1.31	1.42	0.85	5.92	4.44	0.95	0.57
Fe ₂ O ₃	0.10	0.04	0.26	0.10	0.17	0.07	25.31	12.11	0.06	0.02
MgO	0.15	0.23	0.20	0.30	0.18	0.28	2.06	3.91	0.17	0.26
CaO	0.03	0.03	0.10	0.11	0.08	0.09	0.28	0.38	0.03	0.03
Na ₂ O			0.94	0.93					0.15	0.14
K ₂ O	0.02	0.01	0.12	0.08	0.00	0.00	0.34	0.27	0.02	0.01
P ₂ O ₅	3.26	1.41	3.08	1.34	2.62	1.13	6.91	3.72	3.30	1.43
SrO	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.01	0.01	0.01	0.01
SO ₂			0.01	0.01			0.70	0.83		

赤字: 微量成分(検出限界)のため参考値として表記(Na₂OとMgOは軽元素のため、誤差が大きい)。
 分析方法: 非破壊、真空状態で測定。100%ノーマライズ。空欄は未検出。



図V-6-1 温根沼2遺跡試料の酸化物-SiO₂図(重量%) 2-1~2-4:ON2-1~ON2-4 A, B:上名寄8遺跡



図V-6-2 下川町サンル4 遺跡試料の酸化物-SiO₂図 (重量%)
 ON2-SSH: 温根沼2-珪質頁岩, ON2-SI: 温根沼2-珪化岩, KNY8-SI: 上名寄8-珪化岩

ON2-1およびON2-2は「珪質頁岩」と認識されるが、ON2-3は珪質頁岩的部分（不透明）と珪化岩的部分（透明）が共存する。ON2-4は赤色珪化岩で、原岩不明である。

化学分析の結果、100%ノーマライズ（重量%）データのと看、目視で透明感が強くなり、かつ原岩も不明になる珪質頁岩-珪化岩境界は $\text{SiO}_2=94\%$ 前後となった。

比較試料の上名寄8遺跡の珪化岩2試料はA-2ポイントが94%を割るものの、他（A-1, B-1, B-3）は94%を越える（図版V-6-1）。

（2）下川町、上名寄8遺跡との比較

比較試料の上名寄8遺跡は珪化岩（A,B）であり、温根沼2遺跡で上名寄試料との類似性を検討できるのはON2-4である。

酸化物- SiO_2 図（図版V-6-1）でみると、両者は全体として $\text{SiO}_2 94\sim 95\%$ 前後で類似している。ところが、ON2-4は上名寄8遺跡試料に比べて、 TiO_2 と Fe_2O_3 に富むことが明瞭である（図版V-6-1, 図版V-6-2）。

したがって、温根沼2遺跡の珪化岩試料は、上名寄8遺跡のそれとは化学組成が異なる。

（3）下川町、サンル4線遺跡との比較

北海道埋蔵文化財センター（2009）によると、サンル4線遺跡では珪化岩7試料が波長分散法蛍光X線で全岩分析されている。これらは $\text{SiO}_2=95.4\sim 98.6$ 重量%（100%ノーマライズ）である。

TiO_2 は検出されておらず、 Fe_2O_3 は0.69%以下で、検出されないものもあり、変化に富む。

したがって、ON2-4とは TiO_2 が検出されないという点異なる。

また、珪質頁岩2試料があり、全岩化学分析を行っていないが、波長分散法EPMAによる鉱物の分析が6点行われている。これが全岩化学分析値に近似できるとすると、 $\text{SiO}_2 92\sim 97\%$ の範囲にある。これらサンル4線遺跡の珪質頁岩~珪化岩はON1~ON3に比べて、全体として SiO_2 や Fe_2O_3 に富むなどの違いがある（図V-6-3）。

ただし、サンル4線遺跡の分析値は、波長分散法蛍光X線やEDS（エネルギー分散法EPMA）で分析しているため、今回行ったエネルギー分散法蛍光X線とは分析値が系統的にずれている可能性がある。とくに、 SiO_2 は多量に含まれているため、例えば4%の誤差があるだけで、サンル4遺跡と温根沼2遺跡の分析値が一部一致する可能性が出てくる。それでも両者の Fe_2O_3 や TiO_2 量の違いは残る。

（4）渡島半島との比較

渡島半島の珪質頁岩は温根沼2遺跡にとって、非常に遠融地である。渡島半島の珪質頁岩の分析は破壊分析でかつ、主成分はICP発光分光分析で行われた。珪質頁岩のみ分析しており、珪化岩は分析していないこともあり。 SiO_2 が主として90%以下である（森町教育委員会 2006）。一部の高 SiO_2 の試料も温根沼2遺跡のデータに比べて高 K_2O 、高 MgO 、高 Fe_2O_3 であるなど組成が温根沼とは異なる。

（5）温根沼2遺跡試料の産地

上述のように温根沼2遺跡の試料はみかけが一部上名寄8遺跡のものと類似しているが、化学組成からみると異なる可能性が高い。

一般に縄文時代の遺跡に出土する珪質頁岩~珪化岩は、堆積岩とくに泥岩が、火成岩の貫入を受けた接触変質帯に形成される（藤田ほか 2005・森町教育委員会 編 2006など）。珪化岩は原岩が堆積岩

である他に、しばしば凝灰岩などの火砕岩であることが多い。これらの石材は生活必需品であるため、比較的近傍にあればそれを利用するであろう（加藤 2017）。

温根湯の周辺には白亜紀～古第三紀始新世始めにかけての地層である根室層群が分布する（君波 1990）。温根湯の東岸や根室市西方の海岸などには、浜中層（君波 1978：三谷ほか 1958の根室累層）が分布する。

この地層は凝灰質な砂岩泥岩などからなるが、ドレライトのシート状岩体の貫入により硬化変質を受けている（三谷ほか 1958）。

したがって、温根沼2遺跡ではその近傍から珪質頁岩や珪化岩を調達できた可能性が高い。

今後、この見地から、遺跡の周辺における珪質頁岩や珪化岩の分布を調査・サンプリングし、今回分析した試料との比較検討を行うことが望ましい。

なお、上述したように下川町サンル4線遺跡の分析値はエネルギー分散法ではなく、精度の異なる波長分散法蛍光X線分析を採用している。また、渡島半島の珪質頁岩の分析は、破壊分析でかつ、ICP分析を行っている。しかし、非破壊で行うことが多い考古資料の分析には、今回のようなエネルギー分散法蛍光X線を使用せざるを得ない。この方法による珪質頁岩の産地試料の分析は皆無に近いので、今後各産地の分析値を大規模に増やす必要がある。

引用文献

- アースサイエンス(株) (2009)：サンル4線遺跡出土石器の岩石学的分析。北海道埋蔵文化財センター (2009)：「下川町サンル4線遺跡－天塩川サンルダム建設事業の内埋蔵文化財発掘調査報告書」65-70.
- 藤田 登・加藤孝幸・横山英介 (2005)：渡島半島における黒鷲岬巨大珪質頁岩原産地－森町鷲ノ木遺跡群の調査から。考古学ジャーナル 535 29-32.
- 加藤孝幸 (2017)：石材供給源推定の試みから見える石質の価値観－黒曜石と珪質頁岩，蛇紋岩関連土器，および蛇紋岩関連玉類。第71回地学団体研究会総会 プログラム・講演要旨集 35-38.
- 君波和雄 (1978)：根室層群の層序の再検討。地球科学 32 120-132.
- 君波和雄 (1990)：根室帯，釧路－根室地域。加藤誠ほか編「日本の地質1 北海道地方」43-45.
- 三谷勝利・藤原哲夫・長谷川潔 (1958)：5万分の1地質図幅「根室南部」および同説明書。北海道立地下資源調査所 40p.
- 森町教育委員会 (2006)：茅部郡森町埋蔵文化財調査報告書「鷲ノ木4遺跡」分冊「自然科学等による諸分析」.

7 温根沼2遺跡出土鉄製品の金属考古学的調査結果

岩手県文化振興事業団

1 はじめに

北海道根室市温根沼2遺跡は、一般国道44号根室市温根沼改良工事に伴い、平成29年度に緊急発掘された遺跡である。発掘調査の結果、トビニタイ式期の堅穴住居跡から不明鉄器が検出された。資料保全を図るため、保存科学的処理が施こされた。その過程で採取できた鏝片を用い、素材となった地金の組成を明らかにし、当該資料の来歴を明らかにするうえでの基礎情報を得ることを目的として、金属考古学的調査が実施された。

公益財団法人北海道埋蔵文化財センターでは平成21年から平成23年に、根室市トーサムポロ湖周辺堅穴群の緊急発掘調査を、平成27年から平成28年には別当賀一番沢川遺跡の緊急発掘調査を行い、オホツク文化期およびアイヌ文化期の遺構から数十点にのぼる鉄器を検出した¹⁾。岩手県立博物館においてその多くの金属考古学的調査が実施され、地金の組成に基づく分類が行われた。そこで、今回実施した温根沼2遺跡出土鉄製品の調査結果を、トーサムポロ湖周辺堅穴群および別当賀一番沢川遺跡のアイヌ文化期の遺物包含層から出土した鉄製品の調査結果（赤沼 2015）（赤沼 2019）と比較し、素材となった地金の来歴について検討した。以下に調査結果を報告する。

2 調査資料

2-1 調査資料の概要

調査資料は図V-7-1 a₁に示す不明鉄器である。鏝化が進行し、著しく変形しているため、器種の特定は困難であった。図V-7-1 b₁のX線透過写真が示すように、鏝化が進んだ複数の鉄器が固着した可能性がある。当該資料の出土状況および形態学的特徴については、公益財団法人北海道埋蔵文化財センター・広田良成氏により別途記載されている。

2-2 調査試料の採取

調査には保存科学的処理の過程で採取された微小鏝片を用いた。採取した試料を2分し、大きい方の鏝片を組織観察に、小さい方の鏝片を化学分析に供した。

3 調査方法

組織観察用試料についてはエポキシ樹脂に埋め込み、エメリー紙、ダイヤモンドペーストを使って研磨した。研磨面を金属顕微鏡で観察し、鏝化前の組織を推定するうえで重要と判断された領域および鏝中に見出された鉱物相を、エレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー（EPMA: JEOL JXA-8230）で分析した。

採取した資料が脆弱なため化学分析用試料については表面に付着する土砂、鏝をピンセットで丹念に除去し、エチルアルコール、アセトンで超音波洗浄した。試料を130℃で2時間以上乾かしメノー乳鉢で粉碎、テフロン分解容器に秤量した後、塩酸、硝酸、およびフッ化水素酸を使って溶解した。溶液を蒸留水で定溶とし、全鉄（T.Fe）、銅（Cu）、ニッケル（Ni）、コバルト（Co）、マンガン（Mn）、リン（P）、イオウ（S）、チタン（Ti）、砒素（As）、ケイ素（Si）、カルシウム（Ca）、アルミニウム（Al）、マグネシウム（Mg）、ジルコニウム（Zr）、クロム（Cr）、バナジウム（V）、およびタングステン（W）の17元素を、高周波誘導結合プラズマ発光分光分析法（ICP-AES法）で分析した。

4 調査結果

4-1 組織観察結果

図V-7-1 a₁に示す部位から摘出した試料のマクロ組織（図V-7-1 c₁）はその全域が錆化した組織によって構成され、いたるところに空隙や亀裂がみられた。マクロ組織領域Reg.1内部のEPMA反射電子組成像（BEI）には、微細な欠落孔と推定される空隙（C_m）によって構成される組織が観察された（図V-7-1 d_{1,2}）。これまでに行われた出土鉄器の金属考古学的調査結果をふまえると（佐々木・村田 1984）、空隙は錆化前の鋼のセメンタイト（Fe₃C）が欠落して生じた組織の可能性が高い。空隙をセメンタイトの欠落孔とみなすとその分布状況から、マクロ組織領域Reg.1内部は炭素量0.1mass%以下の鋼と推定される（東北大学金属材料研究所編 1953）（佐藤知雄編 1968）。既述のとおり、微小試料における局所的領域での観察結果であり、当該組織が調査対象とした鉄器全体に及んでいたかどうかは不明である。なお、摘出した試料に非金属介在物を見出すことは出来なかった。

4-2 摘出した試料の化学組成

表V-7-1に摘出した試料の化学成分分析結果を示す。T. Feは57.15mass%で、錆化が進んだ試料が分析されたことがわかる。組織観察結果とよく整合する結果である。摘出した試料には、0.010mass%のCu、0.009mass%のNi、0.020mass%のCoが含有されていて、他に0.65mass%のP、0.07mass%のSが検出された。

5 考察

5-1 鉄器地金の組成

鉄器の素材となる鉄は炭素量によって銑鉄と鋼に分類される。現代の金属工学の分類基準に従えば、炭素量2mass%未満の鉄を鋼、炭素量2mass%以上の鉄を銑鉄という（日本鉄鋼協会編 1981）。生産方法、生産設備、生産道具などが異なる現代において製造された鉄の分類基準を、直ちに前近代の鉄に当てはめることは危険である。本稿が対象とする中世においては、当時の設備および道具で熔融可能であった鉄を銑鉄、熔融不能で加熱・鍛打して加工・整形された鉄を鋼として扱ったと考えられる。

調査試料の組織観察結果に基づけば、当該試料は炭素量0.1mass%以下の亜共析鋼を素材としていた可能性が高く、焼き入れや焼き戻しといった熱処理が施されたことを示す組織は見出されなかった。化学成分分析によって0.65mass%のP、0.07mass%のSが検出されているが、錆化が進んだ試料からの分析結果であることをふまえると、埋蔵環境からの富化の可能性もあり、ただちに鋼の製造に使用された原料鉱石に相当量のPやSが含有されていたことを指摘することは難しい。

5-2 Ni・Co・Cu三成分比に基づく調査資料の分類

鋼製鉄器の素材として使用された鋼は、製錬をはじめとする複数の操作を経て製造される。出発物質として同一の製鉄原料が使用されたとしても、製造方法や製造条件によって最終的に得られる鋼の組成にばらつきが生じる。従って、金属考古学的調査結果、とりわけ摘出した試料の化学組成や非金属介在物組成を単純に比較するという解析方法では、実態を反映した資料分類は難しい。

表V-7-1のうちNi、Co、Cuの三化学成分は鉄よりも錆にくい金属のため、一度鉄中に取り込まれた後はそのほとんどが鉄中にとどまると推定される²⁾。従って、合金添加処理が施されていなかったとすると、その組成比は鋼製造法の如何に係わらず製鉄原料の組成比に近似すると考えられる²⁾。

図V-7-2は表V-7-1から摘出した試料に含有されるNi、Co、およびCuの三成分比、すなわ

ち $(\text{mass}\% \text{Co})/(\text{mass}\% \text{Ni}) (\text{Co}^*)$ と $(\text{mass}\% \text{Cu})/(\text{mass}\% \text{Ni}) (\text{Cu}^*)$ および $(\text{mass}\% \text{Ni})/(\text{mass}\% \text{Co}) (\text{Ni}^{**})$ と $(\text{mass}\% \text{Cu})/(\text{mass}\% \text{Co}) (\text{Cu}^{**})$ を求めプロットした図である。なお、図にはトーサムポロ湖周辺のアイヌ文化期に比定される遺構から出土した鉄器 (S_{a1} 、 S_{a2}) の調査結果を示した。図では、非金属介在物中に鉄チタン酸化物が見出された鉄器を黒丸 (●)、鉄チタン酸化物が見出されなかった鉄器を白丸 (○)、非金属介在物が見出されなかった鉄器を白三角 (△) で示した。

図V-7-2から明らかのように、調査したNo.1不明鉄器は図V-7-2 a_{1,2}ではRf 3およびRf 5の近傍に分布する。これまでに筆者らが実施した鉄器、鉄塊の調査結果(小野、赤沼、目時、小杉山 2013)に基づけば、当該領域に分布する鉄器は来歴不明で、現段階でその供給候補地を指摘することは難しい。根室市周辺の遺跡から当該領域に分布する複数の鉄器が見出されていることをふまえると、トビニタイ式期における東北海道への重要な供給地域の一つであった可能性がある。その供給地域については今後調査結果を重ね、解明を図る必要がある。

表V-7-1 出土鉄器の分析結果

No.	化学組成 (mass%)																
	T. Fe	Cu	Ni	Co	Mn	P	S	Ti	As	Si	Ca	Al	Mg	Zr	Cr	V	W
1	57.15	0.010	0.009	0.020	<0.001	0.65	0.07	0.020	<0.01	0.66	0.008	0.054	0.005	<0.001	<0.001	<0.001	<0.001
No.	マイクロ組織	非金属介在物組成	Cu・Ni・Co三成分比														
			Co* (Co/Ni)	Cu* (Cu/Ni)	Ni** (Ni/Co)	Cu** (Cu/Co)											
1	Cm (.0.1以下)	no	2.22	1.00	0.45	0.5											

*分析はICP-AES法による。Cmはセメントタイトの欠落孔と推定される組織。括弧内の数値はマイクロ組織から推定される炭素量。

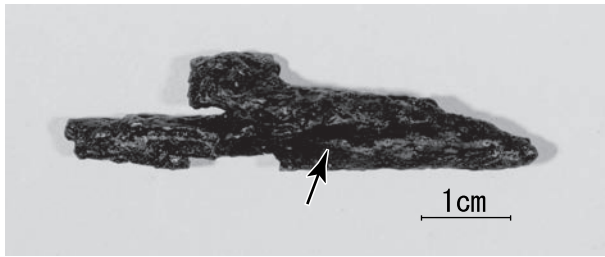
注)

- 1) 公益財団法人北海道埋蔵文化財センター・広田良成氏からの御教授による。
- 2) 早稲田大学理工学術院基礎理工学部・伊藤公久教授からの御教授による。

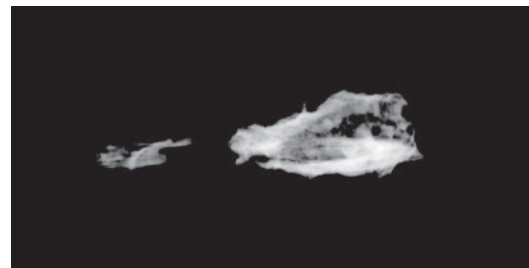
引用・参考文献

- 赤沼英男 2015「付篇7. 金属器の金属考古学的調査結果」『根室市トーサムボロ湖周辺竪穴群（1）』
公益財団法人北海道埋蔵文化財センター
- 小野哲也、赤沼英男、目時和哉、小杉山大輔 2018「前近代の北方社会における鉄器流通実態の解明
（4）～列島内鉄生産関連遺跡出土資料との比較検討～」『岩手県立博物館研究報告』第35号、編集中
- 佐々木稔、村田朋美 1984「古墳出土鉄器の材質と地金の製法」季刊考古学8、pp.27-33
- 佐藤知雄編 1968『鋼の顕微鏡写真と解説』丸善株式会社
- 東北大学金属材料研究所編 1953『金属顕微鏡組織』丸善株式会社
- 日本鉄鋼協会編 1981『鉄鋼便覧』
- 赤沼英男 2019「付篇4. 鉄製品の金属考古学的調査結果」『根室市別当賀一番沢川遺跡』公益財団法人
北海道埋蔵文化財センター

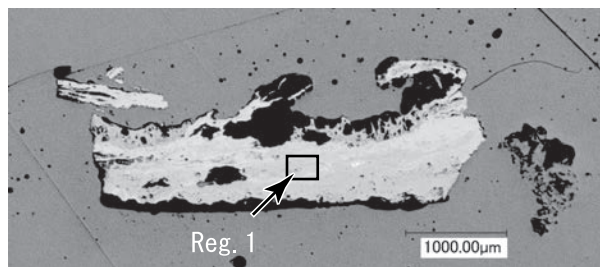
a₁



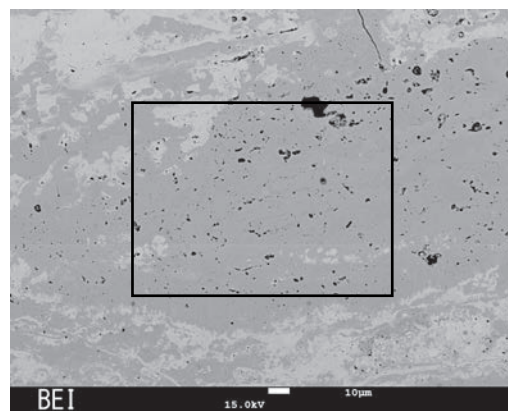
b₁



c₁

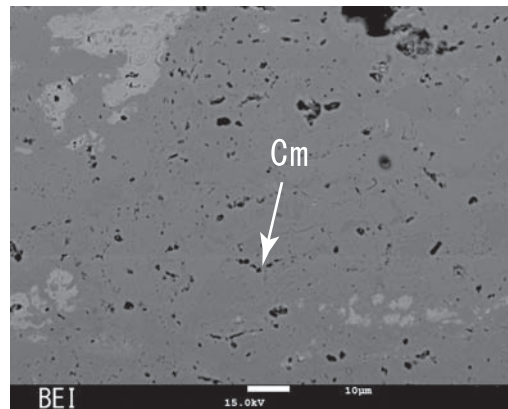


d₁



c₁ 領域 (Reg. 1) 内部

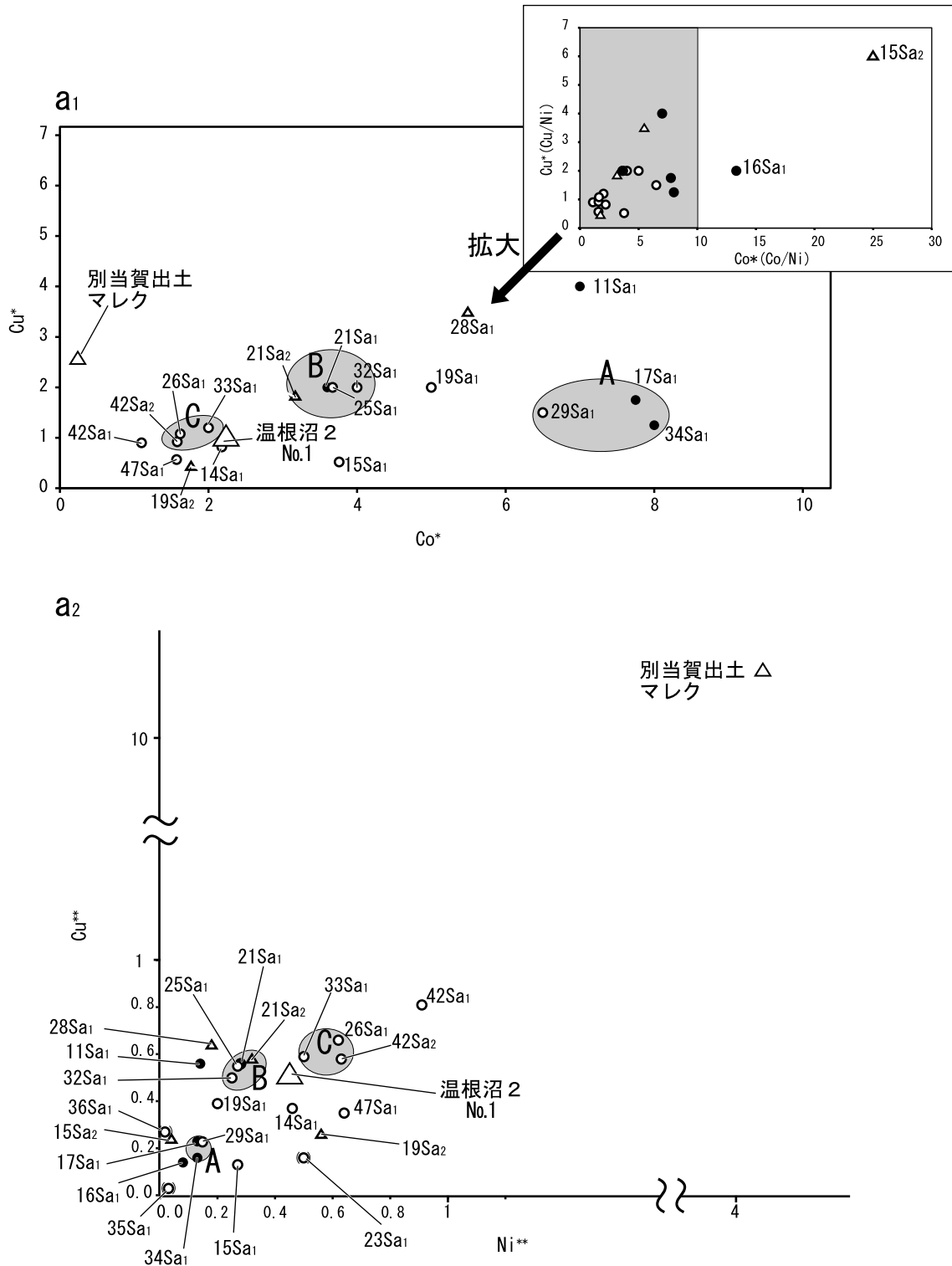
d₂



d₁ 枠内部

図V-7-1 No. 1の組織観察結果

a₁ : 調査資料の外観。矢印は試料摘出位置。b₁ : 調査資料のX線透過写真。c₁ : 摘出した試料のマクロ組織。d_{1,2} : c₁領域 (Reg. 1) 内部のEPMAによる反射電子組成像 (BEI)。Cm=セメンタイト (Fe₃C) の欠落孔と推定される。



図V-7-2 調査資料に含有されるCu・Ni・Coの三成分比

$Co^* = (\text{mass}\%Co) / (\text{mass}\%Ni)$ 、 $Cu^* = (\text{mass}\%Cu) / (\text{mass}\%Ni)$ 、 $Ni^{**} = (\text{mass}\%Ni) / (\text{mass}\%Co)$ 、 $Cu^{**} = (\text{mass}\%Cu) / (\text{mass}\%Co)$ 、黒丸 (●) は非金属介在物中に鉄チタン酸化物が見出された試料、白丸 (○) は非金属介在物中に鉄チタン酸化物が見出されなかった試料、白三角 (△) は非金属介在物が見出されなかった試料。

VI章 総括

1. 遺物の出土傾向について

遺構は竪穴住居跡19軒、土坑45基、集石12か所、焼土18か所、フレイク集中1か所等が検出された。主な時期はV層を主体とする縄文時代早期後半（東釧路Ⅱ式）、Ⅲ層を主体とする縄文時代中期後半から後期前葉（北筒式）、続縄文時代（下田ノ沢式）、トビニタイ式期を含む擦文文化期後期である。遺構分布は各時期でまとまっており、遺物分布の濃淡も遺構分布にほぼ対応する（図Ⅲ-11～20）。

遺物は総数55,412点（遺構30,450点、包含層24,962点）が出土した（試掘資料202点は除く）。内訳は土器12,951点（遺構7,847点、包含層5,104点）、石器等10,922点（遺構7,255点、包含層3,667点）、礫・原石類31,485点（遺構15,318点、包含層16,167点）、このほかに焼成粘土塊20点、陶磁器・ガラス瓶23点、鉄製品等11点が出土している。

V・VI層からは縄文時代早期後半の遺物が出土した。遺構は竪穴住居跡3軒、土坑19基、集石1基、焼土3か所、土器集中1か所が検出された。遺物は遺構から4,159点（土器等3,484点 石器等284点 礫・原石類391点）、包含層から3,883点（土器等1,273点 石器等720点 礫・原石類1,889点、焼成粘土塊1点）、計8,042点が出土した。包含層よりも遺構からの出土量が多い。

土器をみると遺構から3,484点、包含層（V・VI層）から1,273点、計4,757点が出土した。分類別では、遺構出土3,484点中3,476点（98.9%）、包含層（V・VI層）出土1,273点中1,199点（94.2%）がI群b類であった。したがってV層・VI層の遺構・包含層で出土した石器等に関しても、I群b類の東釧路式系の土器にともなう可能性が高いと考えられる。

縄文時代早期後半においては包含層出土遺物より遺構出土遺物が多いが、遺構出土の遺物について、まとまった量が出土しているもの、かつ出土遺物の種類が偏るものは、遺物廃棄または土と一緒に遺構内へ入れられた遺物の可能性も考えられる。仮にそうであるならば、それは摩周テフラ（Ⅳ層）降灰以前の時期であり、遺構のくぼみに遺物を入れたのは縄文時代早期後半の人々である。VH-1・2、VP-2、VP-8・10・14の出土遺物の内容に、そうした行為の可能性が窺われる。

たとえばVH-2では住居全体の約2分の1の調査（半分が調査範囲外）であるにもかかわらず、20点の彫器が出土した（覆土13点、床面直上4点、床面3点）。ほか石刃・削片7点等が出土しており、住居を埋め戻す際に彫器等を選択して入れた可能性が考えられる。VP-8では礫等も含めて1,507点の遺物が出土したが、うち1,497点（99.3%）が覆土上層からの出土であった。その内訳はI群b類（東釧路Ⅱ式）の土器片が1,407点、フレイク・チップ類42点、たたき石10点、石核5点、砥石2点（うち1点は有溝）、石鏃、石錐、スクレイパー、彫器、U・Rフレイク、削片が各1点、ほかに被熱礫6点、礫18点である。土器は比較的大きな破片が主体のもの（掲載図Ⅳ-17・18 VP-8出土分は接合2点+未接合残19点の計21点、329g）と細かい破片が主体のもの（未掲載）の2個体が最小個体数として数えられる。未掲載の同一個体は1,387点（覆土上層1,386点・覆土下層1点）を数え、重さは818gである。1点平均0.59gの微細片で接合できなかったが、意図的に細かく粉碎したものを他の遺物と一緒に覆土の上部へ入れた可能性も考えられる。

I～Ⅲ層からは縄文時代前期以降の遺物が出土した。型的には縄文時代の温根沼式と北筒式、続縄文時代の下田ノ沢式と後北C₂-D式、トビニタイ式、擦文土器（後半期）等があり、遺構は竪穴住居跡16軒、土坑26基、集石11か所、焼土15か所、土器集中1か所、フレイク集中1か所を検出してい

る。時期を特定できない遺構もあるが、特定できたものでは下田ノ沢式土器を伴った遺構が多く、竪穴住居跡6軒と土坑13基（Ⅲ層の土坑の半数）を確認した。遺物は遺構から24,866点（土器等4,358点、石器等6,697点、礫・原石類13,799点、焼成粘土塊等11点、金属器1点）、包含層から21,079点（土器等3,831点、石器等2,947点、礫・原石類14,278点、焼成粘土塊8点、近現代遺物15点）、計45,945点が出土した。

土器は遺構から4,358点、包含層（Ⅰ～Ⅲ層ほか）から3,831点、計8,189点が出土した。土器型式の内訳では遺構出土・包含層出土ともに下田ノ沢式がもっとも多い。遺構では4,358点（100%）中2,755点（63.1%）Ⅲ層遺構VI b2,509点中23点は後北A式）、包含層では3,831点（100%）中2,058点（53.7%）が下田ノ沢式である。下田ノ沢式に次いで北筒式が多い。遺構4,358点（100%）中696点（16.0%）で下田ノ沢式との比は3：1。包含層では3,831点（100%）中1,315点（34.3%）を数え、下田ノ沢式との比は2.9：1である。ほか後北C₂-D式は遺構から95点（2.2%）、包含層から94点（2.5%）が出土している。この3者を併せると遺構では81.3%、包含層では90.5%であり、これらでⅢ層以上から出土した土器の8～9割弱を占めている。この他にⅠ～Ⅲ層からまとまった点数が出土した土器はトビニタイ式と後半期の擦文土器である。これらを統合して考えると、Ⅰ～Ⅲ層で出土した石器については縄文時代の下田ノ沢式期と縄文時代の北筒式期の所産が大半と考えられる。剥片石器に関しては、ほとんどがこれらの時期に帰属すると考えて大過ないであろう。

また、Ⅰ～Ⅲ層においても包含層出土遺物より遺構出土遺物のほうが多い。遺構と包含層との遺物分布面積の差を加味すると実際の出土遺物の密度差は出土点数の単純比較より大きくなる。遺構出土の遺物については、まとまった量が出土したもの、かつ出土遺物の種類が偏るものについては、縄文時代早期後半同様、人為的な遺物廃棄の可能性も考えられる。下田ノ沢式期の遺構でみると、ⅢH-6・10・12・16、ⅢP-1・6・7・12・16・24の出土遺物の内容に、そうした行為性が窺われる。

ⅢH-12では覆土から床面にかけて複数個体の下田ノ沢Ⅱ式土器が出土した。石器は覆土から床面直上にかけて黒曜石製のフレイク集中（HFC-1～4）が4か所で確認されている。これらのフレイク集中の分布は竪穴住居の北側に偏るもので、HFC-2は細かい炭のまとまりとも重なっている。また、全体的に黒曜石製の石槍またはナイフ、スクレイパーといった剥片石器の多さが目につく。石槍またはナイフは全体で14点（うち10点は破片）が出土し、HFC-2では6点（すべて破片）が出土した。スクレイパーは全体で41点（覆土37点・床面直上3点・床面1点）が出土している。これらについても上述のⅢH-2と同様に竪穴住居を埋め戻す際に人為的に入れた可能性が考えられる。

ⅢH-6では炉の真上で倒立状態の土器が間層をはさんで出土した。炉の上であることを意識した配置であろう。この土器は無文で胴部下半と底部を欠く。また、炉のすぐ横からは小型土器も出土した。小型土器はⅢH-1やⅢH-10の床面や覆土下部、さらにⅢP-16の坑口部でも出土している。

下田ノ沢式期と考えられる土坑には、覆土内に被熱礫や炭化材を伴うものが6基ある（ⅢP-1・6・7・12・16・24）。これらの土坑には石器をとまなうものもあり、石鏃（ⅢP-16・24）、石槍またはナイフ（ⅢP-24）、スクレイパー（ⅢP-12・24）、楔形石器（ⅢP-24）、石核（ⅢP-7・12・16）、たたき石（ⅢP-6・12・16）、砥石（ⅢP-12・24）など器種が共通するものもある。

これらのうちⅢP-12は径が4m弱、深さ80cm以上の大型土坑であるが、覆土の下層と上層において出土遺物に顕著な違いがあった。覆土下層から礫197点、被熱礫222点、たたき石7点等、礫と礫石器が主体的に出土し、炭も検出した。上層からはこまかい土器片が216点（うち下田ノ沢Ⅰ式211点）、尖頭器を除いた各種の剥片石器、フレイク・チップ類、たたき石8点、砥石3点が出土。他に焼けていない魚骨（カレイ科）のまとまりも回収された。出土遺物の上下差については凍上現象の可能性も

考えられるが、土坑の性格として、物を入れることを主目的として掘った可能性もある。

2. 下田ノ沢式期の遺構と遺物について

温根沼2遺跡では続縄文時代下田ノ沢式期の遺構遺物がまとまって検出された。ここでは当該期の検出遺構、出土した土器と石器について、その特徴等を述べる。

・住居跡・土坑 (図VI-1)

下田ノ沢式期の遺構(堅穴)は堅穴住居跡6軒、土坑13基が確認された。下田ノ沢I式期の遺構(ⅢH-16、ⅢP-1・6~8・11・12)は主に斜面上部、下田ノ沢II式期の遺構(ⅢH-1・6・11・12、ⅢP-16)は台地上平坦部に分布する。遺構の形状や特徴は堅穴住居跡と土坑とで共通点が多い。

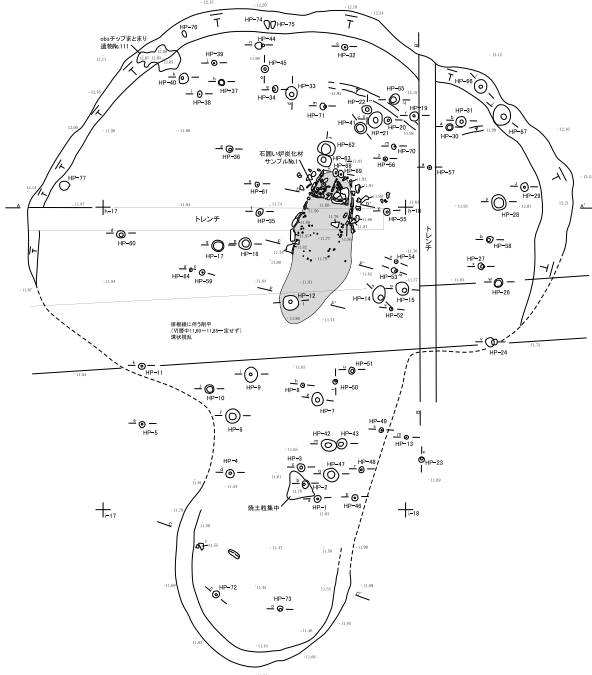
平面形は**不整な円形ないし楕円形**で、壁の一部が不規則に外へ張り出すなどいびつなものが大半である。当該期の住居跡には細長い張り出し部が伴うものと伴わないものがあることは知られているが、当遺跡で張り出しのあるものはⅢH-1のみである。住居の壁については、ⅢH-12の東側半分の壁が掘り上げ土状であった。人為的な堆積土を掘り込んだと考えられる。住居の床や土坑の坑底については、**段差構造**のあるものがある(ⅢH-6・11・16、ⅢP-12・16)。その場合、南側あるいは南西が一段低くなる傾向がある。ⅢH-6で検出された柱穴は、ほとんど南西側の一段下がった範囲の床面にまとまり、北東側の一段高い側ではほとんど確認されなかった。ⅢH-11にも同様の傾向が窺われる。しかしながら、下田ノ沢式期の他の遺跡で発掘された住居跡では、こうした段差は確認されていない。住居の炉は石囲いのあるものとないものがある。石囲いがあるもの(ⅢH-1・12)は、いずれとも南北方向に細長い構造であった。**細長い炉**は下田ノ沢式期の他遺跡の住居跡でも検出されている。

・土器 (図VI-2・3)

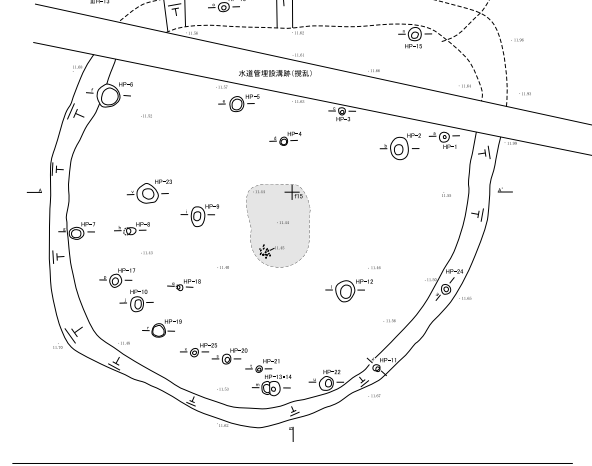
当遺跡で出土した下田ノ沢式土器は諸特徴から大きく3つの群に分けられる。

第1群は下田ノ沢I式の後半段階と考えられるもの(図VI-2-1~8)。ⅢH-14から出土した1とⅢP-12より出土した2は口縁部を下田ノ沢I式の指標である浅い突き瘤文が巡る。2は小さく山形に突き出た口縁で、頂部に垂直方向の刺突が加えられている。隆起線が垂下し、隆起線上に径の小さい刺突が充填されている。この諸特徴との共通性から3・5~8も同じ段階と考えられる。特徴を整理すると、胴部下半が直線的に開く土器で、上半はかすかに膨らんだのち口縁に向けてわずかに内傾する器形(3)と、そのまま垂直に立ち上がる器形(1・2・5・6)とがある。口縁が小さな山形を呈するもの(2・3・5・6)があり、その頂部に垂直方向の刺突を加えるものがある(2・3・6)。器形復元されたものでは、やや大きい突起と小さい突起が2種2対のものもある(5)。山形口縁の下が瘤状に肥厚して外側へ突き出したものがある(3・5)。突起部以外の口縁はやや丸みを帯びた角形が多い。復元された土器では口縁の上面観は円形(5)である。口縁部を撚りの細い縄線が複数横環するものがある(3・4・8)。また、隆起線が山形の口縁から垂下するもの(2・3・5・6)、口縁を横環するもの(3・5・6)、環状を呈するもの(7)、四角い区画を呈するもの(8)がある。これらの隆起線上には径の小さい刺突が充填的に加えられている。第1群とした土器の一部は釧路市興津遺跡Ⅲの沢分類(釧路埋文1979)による下田ノ沢II式の古手(Ⅲ群6類)の可能性もあるが、今回は熊木分類(熊木2000)に依拠して、突瘤文があるもの及びそれと並行関係にある資料を下田ノ沢I式とした。9は非常に細い撚糸を密に巻きつけた絡条体圧痕文が口縁部を複数巡る。隆起線による四角い区画が垂下し、区画内と多段の絡条体圧痕文の下に刺突列が施されている。細い撚糸の使用や

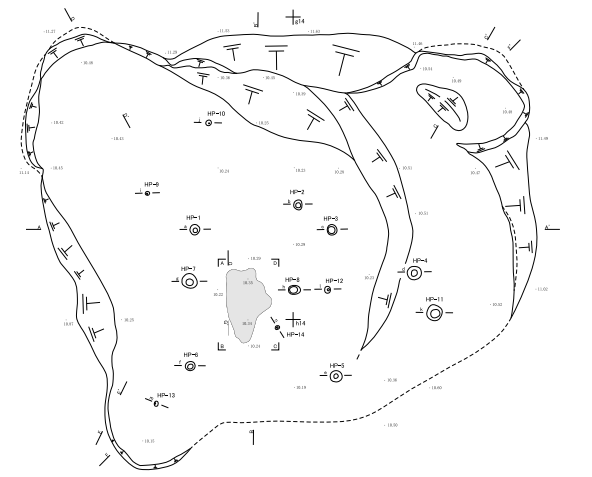
ⅢH-1



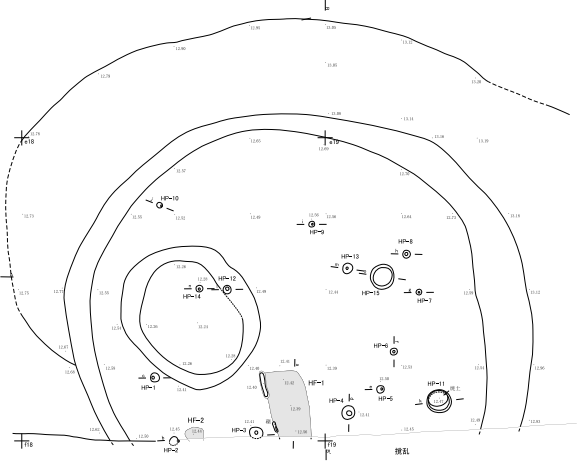
ⅢH-10



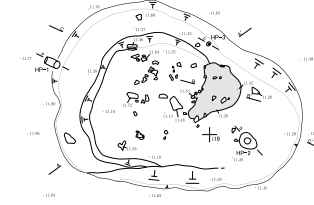
ⅢH-6



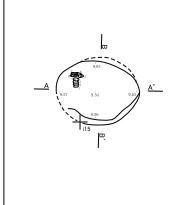
ⅢH-12



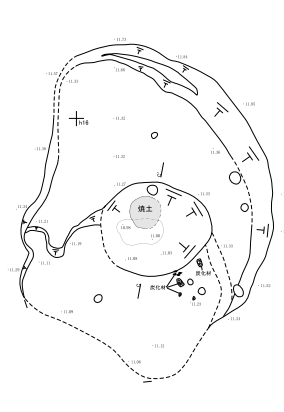
ⅢH-16



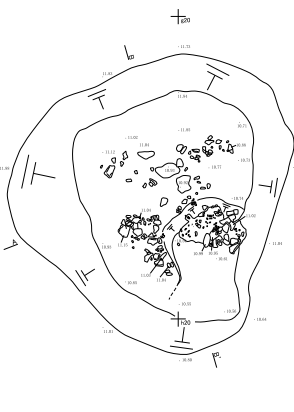
ⅢP-14



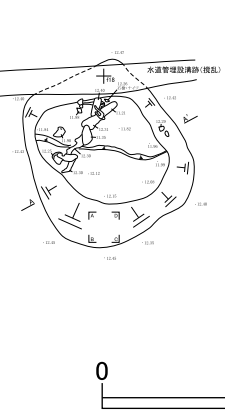
ⅢH-11



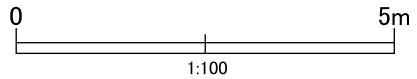
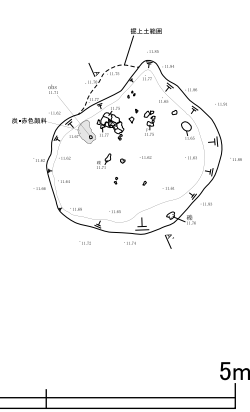
ⅢP-12



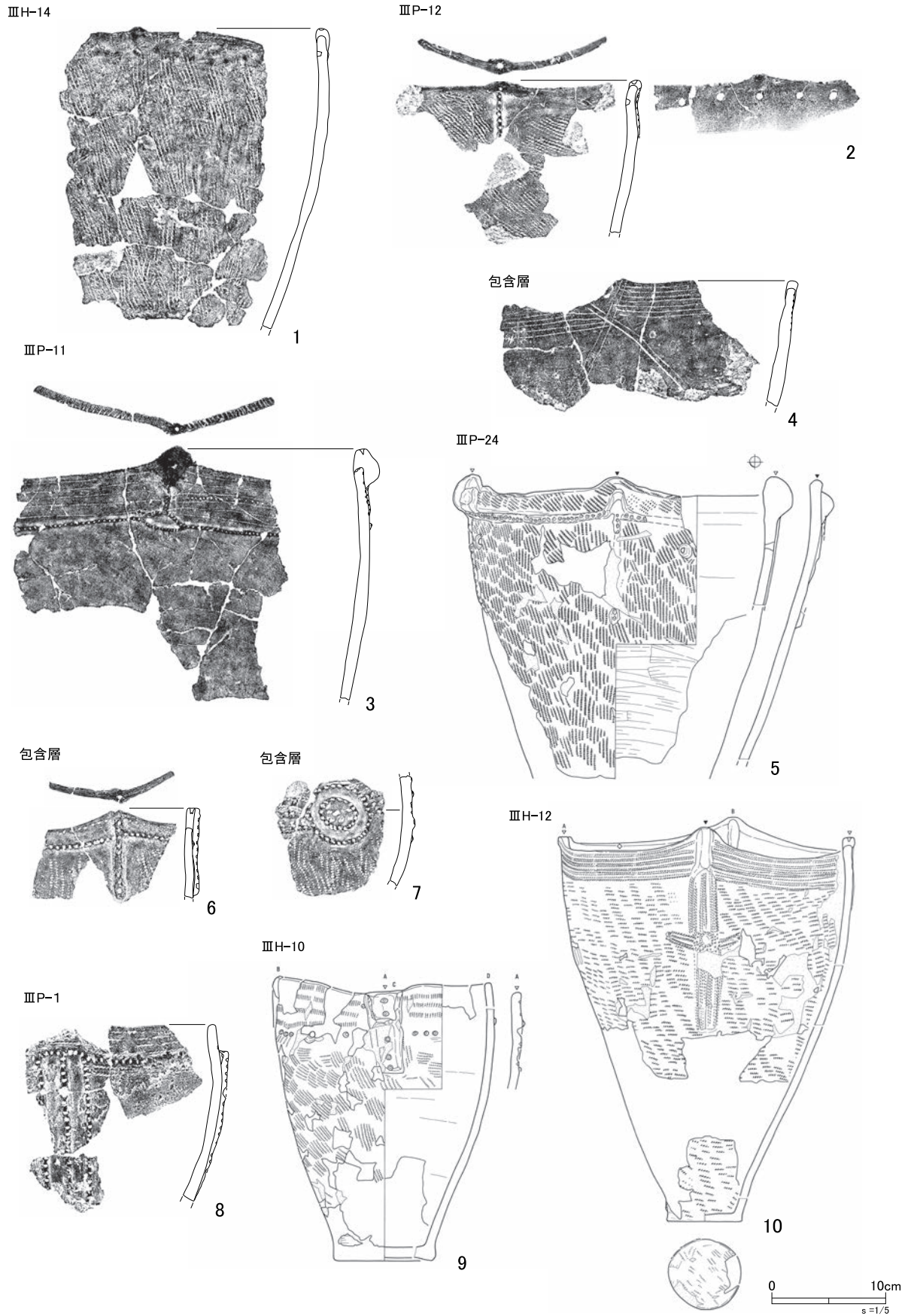
ⅢP-16



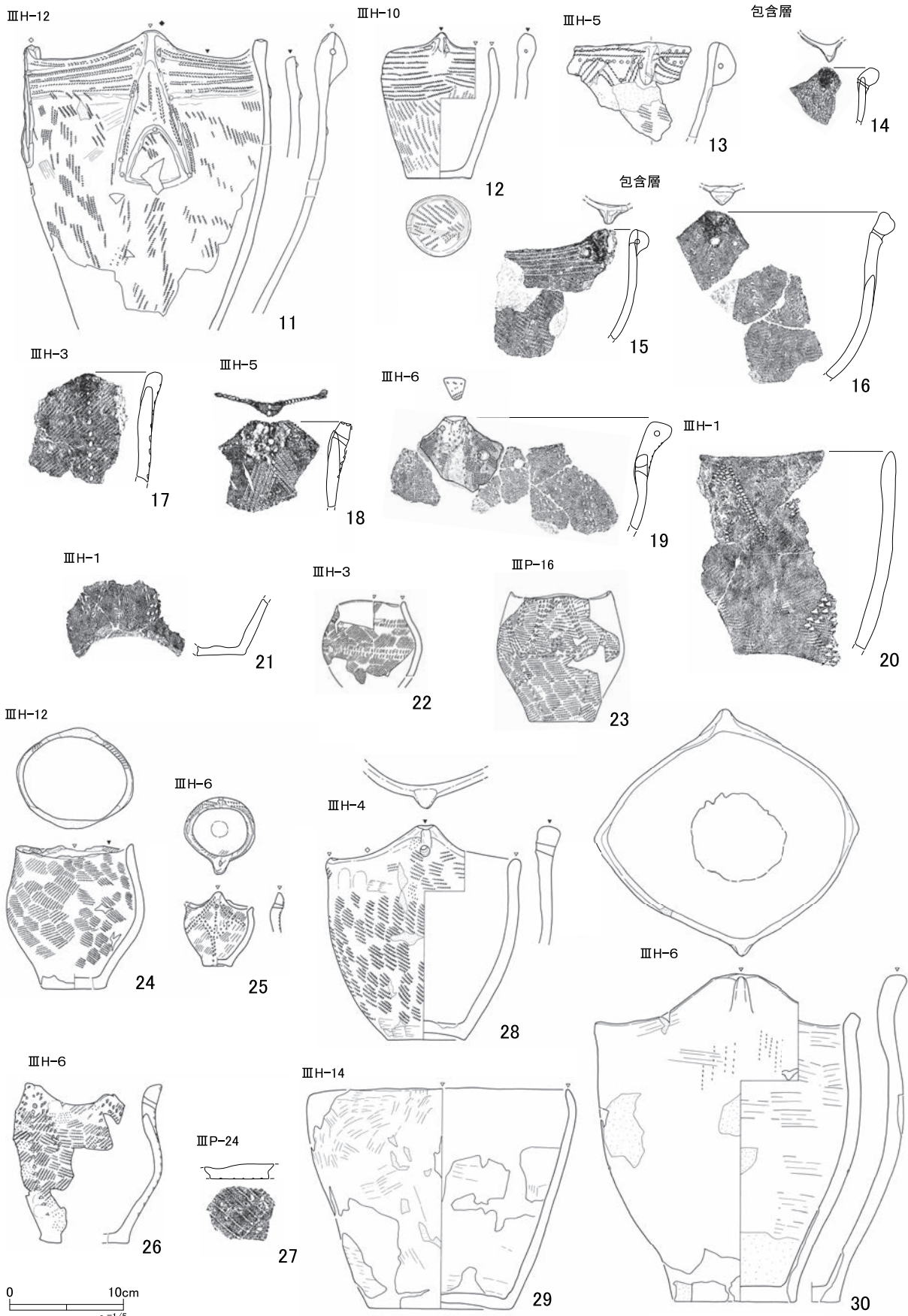
ⅢP-24



図Ⅵ-1 下田ノ沢式期の遺構



図VI-2 下田ノ沢式土器 (1)



図VI-3 下田ノ沢式土器(2)

隆起線による四角い区画や刺突列から、2・3・5～8に近い段階とみられる。下田ノ沢Ⅰ式の特徴の一つとして底部の張り出しが知られているが、9の底部はわずかながら外に張り出しており、その点でも整合的である。

第2群は下田ノ沢Ⅱ式の古い段階と考えられるもの(図Ⅵ-2-10・Ⅳ-3-11・12)である。主にⅢH-12とⅢH-10から出土した土器のまとまりとトビニタイ式の住居であるⅢH-5の覆土中に混在した資料である。器形的には第1群の土器とあまり変わらない。突起は大小の2種2対をなすもの(10・11)があるが、2対だけのもの(12)もある。山形の突き出しは第1群より大きい。大きい方の突起は第1群同様に肥厚するが、第1群の肥厚が瘤状で外側にのみ見られたのに対し、縦位の肥厚で、突起の外側だけでなく内側にも肥厚する(10～12)点が異なる。また、小さい方の突起の頂部に刺突を加えているものもある(10)。第1群の土器にみられた特徴の名残と考えられる。11の小さい方の突起にも(刺突ではないが)指頭圧とみられる凹み加えられている。復元土器では口縁の上面観はいずれも円形(10～12)である。口縁に撚りの異なる原体の2本組による矢羽状の縄線を巡らせるもの(10・11)が現れ、複数の微隆起線が2本組の縄線と一緒に横環する。縄線のみが横環するもの(12)もあるが、同様に2本組の施文である。また、使用原体は第1群の縄線より太い。ほか、底面にも地文を施すもの(10・12)や突起下に微隆起線が垂下して区画的にモチーフを構成するもの(10・11)がある。微隆起線の末端や交点および屈曲点には刺突が加えられる。10では環状に区画された微隆起線上に刺突が密に加えられている(図版62)。7～9との共通性から、この充填刺突は古い属性と捉えられる。

13・14は縦位の肥厚があるが、内面側に肥厚がみられないもの。13は口縁に撚りの細い縄線と刺突列が各2段巡り、その下を波状の縄線が巡る。14は3本単位の細い刺突を斜めと縦に加えたもので、下地は撚りの異なる細い2本の撚糸を巻きつけたものを転がした矢羽状の撚糸文である。13の刺突文の横環に着目した際、第1群に近い資料とも考えられたが、14において複数本組の刺突が加えられ矢羽状の撚糸文が用いられている点からすると、これらは第2群と次に挙げる第3群との間を埋める段階かと考えられる。

第3群はⅢH-6から出土した土器と諸特徴が共通するもの(図Ⅵ-3-15～30)である。第2群では口径に対して底径が小さいアンバランスな器形の土器が多くみられたが、第3群は口径と底部の径差が小さくなり形状が安定して器壁も肉厚になる。口唇断面は内削ぎの丸みを帯びた切り出し状が多い。また、わずかに上げ底になるものがある(23・25・28・29)。胴部下半が大きく開きそこから口縁に向けて垂直に立ち上がる器形(15・16・25・28)と大きく内傾する器形(22・23・24・26・29)があるが、最大径かそれに近い幅が胴部中央に来るものが多い。頸部は突起部下で大きく屈曲するもの(19・26・30)とわずかに屈曲するもの(25・28)とがある。口縁部の上面観が、やや潰れたような楕円形を呈するもの(23～25・30 26?)がある。大ぶりの突起がある方が短軸である場合が比較的みられる。口縁部内径で長軸を短軸で割り返した数値は、25が1.14、23が1.17、30が1.21、24が1.31(表Ⅳ-9)、平均1:1.21の比である。扁平であるのは上半部のみであり、胴部中位から底部にかけては円形である。

口縁部は、引き続き大小2種2対の突起のもの(24?・26・30)があるが、2対だけのもの(25・28)もある。突起の突き出しは第2群よりも大きくなる。突起については引き続き肥厚するものがあるが、その場合、第2群のような内面側の肥厚はなく、上面観は三角形を呈する(16・19・28・30)ものが多い。肥厚部に貫通孔を穿つもの(16・18・25・26・28)があり、横方向に穿孔した吊耳状のもの(15・19)もある。なお、15は肥厚がやや弱く完全な三角形ではない。また、突起が欠損したも



図VI-4 下田ノ沢式に伴った石器

の(23~25)があるが、これらはいずれも遺構覆土からの出土土器で、意図的に打ち欠いた可能性も考えられる。

文様は、2本組あるいは3本組の細い工具による連続的な刺突が大きな特徴として挙げられる。刺突は突起を起点に斜位と縦位に施したものが多く(16~19・23・25・26)、横位の刺突列との組み合わせで幾何状のモチーフが連続するもの(23)もある。地文には非常に細かい撚りによる矢羽状の撚糸文を用いたもの(18・19)がある。そのほか原体を斜め方向に回転施文させた横走縄文(20・23・26)やナデ処理で無文化した土器(29・30)もある。

27は撚糸文を底面に施文している。類例は羅白町のポン春^{しゅんかる こたん}古丹川北岸遺跡に多い。

諸属性をみると第3群は第2群より新しい段階の下田ノ沢Ⅱ式と考えられる。また、管見では第1群・第2群は道東部にまとまった類例があるが、第3群については今のところ出土例が少ない。

・石器(図Ⅵ-4)

石鏃(1~10・14~17)は三角形(1~7)、菱形ないし有茎凸基(8~10)、先端の側縁が膨らむ矛形(14~17)の3種がある。三角形の石鏃が多く、矛形は少なく、用途別の使い分けがなされていたかもしれない。石槍またはナイフ(11~13)は菱形ないし有茎凸基が大半。石錐(18~22)は剥片の下端に周縁加工したもの(18・19)、全面的に加工したもの(20)のほかに、石槍片や石鏃を転用したもの(21・22)がある。ナイフ(23・24)は柄があり、刃部側縁が外へ張り出すもの(24)がある。スクレイパーはやや縦長の剥片を素材として側縁や下端を刃部とするもの(25~27)、四角形ないし円形を呈し周縁に刃部を作出したもの(28~40)の2種がある。後者は下端や側縁の一部が急角度の刃部を呈するもの(30~34・38~40)があり、総じて小型である。27は例外的に大きい。墓(ⅢP-14)の副葬品であり、特に用意された可能性がある。剥片石器については大半が黒曜石製。

石斧(41~46)は全面を入念に研磨した中小型が多い。たたき石(47~51)は扁平礫を素材として広い平坦面を叩いたもの(47・48)と全体的に叩いたもの(49)、やや厚みのある亜円礫を素材として使用部がくぼんだもの(50)と主に下端部を叩いたもの(51)とがある。すり石は出土数が少ないが、たたき石の中にすり石の用途を兼ねているもの(51)がいくらかある。石鋸(52)は砥石片の側縁を使用したものである。砥石(53~55)は板状素材で広い面を使用したものが多いが、厚みのあるものでは側面を使用しているもの(53)もある。礫石器の素材は各時期通じて砂岩、泥岩、粗粒玄武岩が多く、安山岩は比較的少ないが、大半が遺跡周辺ないし根室半島で採取できるものである。

3. 下田ノ沢式期の住居跡(ⅢH-1)で検出されたヒグマの焼骨について

ⅢH-1の北壁際に焼土ブロック(東西長軸4.3m×南北短軸0.6~1.0m)があり、中から大型の哺乳類とみられる焼けた動物骨がいくつか検出された。同定結果はヒグマで、判別された部位は軸椎、中節骨、基節骨である。また、ヒグマ?として、脛骨、四肢骨、寛骨がある(V章5節)。焼土ブロックは層厚10cm前後であるが、骨が検出された中心部は炭化材や焼けていない他の土の混入がなかった。住居の壁際で火を焚くことは考えられず、他の場所で焚いた焼土と焼骨を炭等の不純物を除去しながら北壁沿いに盛ったとみられる。住居の石囲い炉(ⅢH-1HF-1)は長軸2m、短軸77cmと比較的規模が大きなもので、石で囲われた中に焼土があった。その焼土中にも焼骨があり、種不明の大型哺乳類という同定結果が得られている。このことから炉内の焼土とそこで焼いたヒグマの骨とを数次にわたって北側の壁際に盛っていた可能性が考えられる。

儀礼行為を窺わせるヒグマ焼骨の出土例としては縄文時代晩期の事例がいくつか知られている。北

見市中ノ島遺跡でA号遺構とK・L-61・62区において焼けたヒグマの基節骨、中節骨、末節骨、橈骨、尺骨、四肢骨等が出土した事例（西本 1989 a・b）、釧路市幣舞遺跡で焼土域から指趾骨を中心とした出土例（釧路市埋文 1994・1996・1999）、斜里町ピラガ丘遺跡秋山地点P I T19において頬骨、頭蓋骨片や陰茎骨と思しき焼骨が出土した例（西本 1990）、そのほか斜里町尾河台地（斜里町教委 1983）、同町谷田遺跡（斜里町教委 1988）などがある。また、釧路市幣舞遺跡では縄文時代晩期緑ヶ岡式期と考えられる40号土坑からヒグマ頭骨が出土した例も知られている（釧路埋文 1996・金子 1996・石川 2004 a）。しかしながら続縄文文化期の遺跡でヒグマ焼骨の確実な事例は極めて少なく、今回、下田ノ沢式期の住居跡からその焼骨が出土したことはヒグマ儀礼を考える上での貴重な事例になると言えるであろう。

4. 擦文文化期の住居跡（ⅢH-2・3）で検出された動物遺存体について

ⅢH-2の床面からイヌ（*Canis lupus familiaris*）の可能性のある焼けた基節骨（試料番号18）が出土した。犬は縄文時代から続縄文時代初頭、オホーツク文化期、アイヌ文化期の遺跡・遺構では類例がそれなりにあるが、擦文文化期においては非常に少ない。横山英介（横山 1990）によれば、松前町札前遺跡で被熱した左脛骨、左踵骨、尾椎骨が出土。苫前町香川三線遺跡では住居跡（AH-11）内カマド付近より被熱した左上顎骨、臼歯、左上犬歯が出土。そのほか神恵内村^{かもえない}観音洞窟から部位・被熱等が未詳の出土例があるとのことだが、当該期の事例として非常に希少な類例と言える。

また、ⅢH-3カマド1の焼土からシカ？の中手骨あるいは中足骨？（試料番号38a）、カマド2からヒグマ？の中手骨あるいは中足骨（試料番号54）が出土した。擦文文化期においてはヒグマ骨の出土例も非常に少ない。西本豊弘の集成（西本 1989 a）によれば豊浦町小幌洞窟A地点、斜里町須藤遺跡、神恵内村観音洞窟、北見市中ノ島遺跡の4例、その後、苫前町香川6線遺跡での類例が加えられているが、いずれにしても多くはない。具体的には豊浦町小幌洞窟から犬歯の加工品、斜里町須藤遺跡から四肢骨や頭蓋骨が出土した。神恵内村観音洞窟では擦文文化期の包含層から頭部を欠く四肢骨が出土したもので、金子浩昌により洞窟以外の場所でのクマ送りが行われた可能性が指摘されている（金子 1984）。また、北見市中ノ島遺跡の類例は擦文期の住居跡から10mほど離れた場所で上下顎歯が出土したもので、頭蓋骨1個が置かれていた可能性が指摘されている（西本 1989）。他、苫前町香川6線遺跡では当該期の包含層から末節骨（西本 1988）、千歳市オサツ2遺跡（道埋文 1995・1996）では3軒の住居跡SH-3（床）・4（覆土）・12（床・炉焼土）からヒグマの四肢骨が出土した。うちSH-4と12は擦文文化前期末の住居跡である。

続縄文時代～擦文文化期を通じてヒグマの出土事例が乏しい状況にあるが、続くアイヌ文化期でも出土例が少ないことが指摘されている（西本 1989）。このことから宇田川洋は主体的にクマ送りをするようになったのは19世紀後葉からとの見解（宇田川 1985）を示し、その後18世紀以降に修正（宇田川 1989）したが、西本豊弘は18世紀初めの『蝦夷談筆記』（松宮観山 1710）にクマを飼い10月に送る記事があることから、クマ送りは「少なくとも17世紀後半にはさかのぼる可能性が高い」（西本 1989）として、ヒグマ骨の出土例の乏しいことが、必ずしもクマ送りがなされなかった証拠にはならない可能性を述べた。

このほかⅢH-2カマド1の焼土からはカレイ科腹椎、サケ科の歯、ニシン科腹椎等、ⅢH-3カマド1・2からはニシン科とカレイ科の椎骨等、魚骨も出土している。

5. トビニタイ式期の住居内の集石と集石に含まれるたたき石について

トビニタイ式期と考えられる住居跡では、集石とそこに含まれるたたき石が特徴的である。いずれも掌に収まるほどの小礫を利用したもので使用痕が酷似する。ⅢH-4HS-1出土のたたき石は8点あり、最少80g、最大157g。その平均重量は102.5gである。ⅢH-5HS-2出土のたたき石は3点あり、最少108g、最大140g、平均重量は123.3gである。ⅢH-9HS-2出土のたたき石は4点あり、最少116g、最大142g、平均重量は128.5gである。トビニタイ式期の住居跡にともなう集石は、100g未満の礫を主として構成され、平均的なサイズでまとまる特徴がある（表Ⅵ-1）。

（影浦）

表Ⅵ-1 トビニタイ期の集石遺構

集石名	点数	総重量	平均重量	構成内容	石材
ⅢH-4 HS-1	27	2,264g	83.8g	礫18 たたき石8 すり石1	粗粒玄武岩17 砂岩9 泥岩1
ⅢH-5 HS-1	111	7,204g	64.9g	礫109 被熱礫2	泥岩54 砂岩52 粗粒玄武岩5
ⅢH-5 HS-2	168	11,528g	68.6g	礫148 台石片?17 たたき石3	砂岩109 泥岩40 粗粒玄武岩19
ⅢH-5 HS-3	20	8,211g	410.6g	礫20	砂岩11 泥岩4 粗粒玄武岩4 安山岩1
ⅢH-9 HS-1	236	10,811g	45.8g	礫236	砂岩105 粗粒玄武岩105 泥岩26
ⅢH-9 HS-2	208	15,736g	75.7g	礫202 たたき石4 被熱礫2	砂岩147 粗粒玄武岩31 泥岩27 凝灰岩2 礫岩1
ⅢH-9 HS-3	133	7,999g	60.1g	礫130 被熱礫3	粗粒玄武岩115 砂岩16 泥岩2
ⅢH-9 HS-4	50	2,530g	50.6g	礫47 被熱礫2 たたき石1	砂岩38 泥岩10 粗粒玄武岩2

引用・参考文献

論文・書籍・資料等

- 三浦伊八郎 1933 『炭窯百態』 三浦書店
- 児玉作左衛門・大場利夫 1956 「根室國温根沼遺跡の発掘について—温根沼式押型文遺跡—」『北方文化研究報告』第11輯 北海道大学
- 河野広道 1958 「北海道出土の廻転押型文土器について」『アイヌ・モシリ』第2号 北海道学芸大学考古学研究会
- 長谷川潔・三谷勝利 1959 『5万分の1地質図幅説明書 根室北部』(釧路—第13号) 北海道立地下資源調査所
- 鈴木公雄 1969 「土器型式における時間の問題」『上代文化』第38輯 国学院大学考古学会
- 石附喜三男 1969 「擦文式土器とオホーツク式土器の融合・接触関係」『北海道考古学』第5輯 北海道考古学会
- 宇田川洋 1982 「住居」『縄文文化の研究6 続縄文・南島文化』 雄山閣
- 澤 四郎 1982 「釧路地方の土器」『縄文文化の研究6 続縄文・南島文化』 雄山閣
- 西 幸隆 1982 「道東地方の墳墓」『縄文文化の研究6 続縄文・南島文化』 雄山閣
- 上野秀一 1982 「石器」『縄文文化の研究6 続縄文・南島文化』 雄山閣
- 田才雅彦 1983 「北大式土器」『北奥古代文化』14
- 金子浩昌 1984 「〔2〕自然遺物2.動物遺体」『神恵内^{かもえない}観音洞窟』
- 宇田川洋 1985 「アイヌ文化期の送り場遺跡」『考古学雑誌』第70巻第4号
- 大沼忠春 1986a 「北海道の押型文土器」『考古学ジャーナル』No267 ニュー・サイエンス社
- 大沼忠春 1986b 「施文原体の変遷—東釧路式土器— 原体と施文のあり方—」『季刊 考古学』第17号 雄山閣
- 西本豊弘 1986 「b 中ノ島遺跡出土の動物遺体」『中ノ島遺跡Ⅱ』
- 西本豊弘 1987 「第4節 香川三線遺跡出土骨片の同定」『香川三線遺跡』 苫前町教育委員会
- 西本豊弘 1988 「第4節 香川6・香川三線遺跡出土骨片の同定」『香川6遺跡・香川三線遺跡』 苫前町教育委員会
- 横山英介 1988 「擦文時代の剥片石器・剥片とその評価—加工具にみられる鉄器化の完了について—」『考古学研究』第35巻第3号 考古学研究会
- 遠藤香澄 1989 「5 まとめ」『美沢川流域の遺跡群XⅡ』北埋調報58 (財)北海道埋蔵文化財センター
- 西本豊弘a 1989 「「クマ送り」の起源について」『考古学と民族誌 渡辺仁教授古希記念論文集』 六興出版
- 西本豊弘b・宮宏明 1989 「北見市中ノ島遺跡の動物遺体について」『北網圏北見文化センター研究報告(考古学関係論文集Ⅰ)』
- 横山英介 1990 『擦文文化』考古学ライブラリー59 ニュー・サイエンス社
- 西本豊弘 1990 「付篇1 ピラガ丘遺跡秋山地点から出土した動物遺体について」『ピラガ丘遺跡秋山地点発掘調査報告書』
- 西田 茂 1993 「ふたたび東釧路Ⅱ式について」『考古論集—潮見 浩先生退官記念論文集—』

- 佐藤一夫 1994 『地震考古学について』 苫小牧市博物館・埋蔵文化財センター 平成5年度職場内研修資料
- 工藤研治 1994 「続縄文時代」『北海道考古学』第30輯 北海道考古学会
- 西田 茂 1995 「東釧路Ⅱ式について」『北海道考古学』第31輯 北海道考古学会
- 金子浩昌 1996 「V自然科学的調査 1 釧路市幣舞遺跡出土の動物遺体」『釧路市幣舞遺跡調査報告書Ⅲ』
- 小山正忠・竹原秀雄 1997 『新版 標準土色帖』1997年版 財団法人日本色彩研究所
- 熊木俊明 1997 「宇津内式土器の編年—続縄文土器における文様割りつけ原理と文様単位(1)」『東京大学考古学研究室研究紀要』第15号 東京大学考古学研究室
- 内山真澄 1998 「続縄文期における石鏃の変化」『時の絆 石附喜三男先生を偲ぶ [道を辿る]』石附喜三男先生を偲ぶ本刊行委員会
- 佐藤百合香 1998 「ヤリムカシ1 堅穴群付近の植生」『ヤリムカシ1 堅穴群発掘調査報告書』根室市教育委員会
- 宮夫 靖夫 1999 「東釧路式土器の分類と編年について<難解なⅢ式とコッタロ式の分類を中心として>」『苫小牧市埋蔵文化財調査センター所報』1
- 渡辺 修 1999 「北海道産主要セリ科検索図譜(その1・大型種) 一葉で見分ける植物2-」『知床博物館研究報告』第20集 斜里町立知床博物館
- 武田 修 2000 「第XIV章 まとめ」『常呂川河口遺跡(2)』常呂町(現北見市)教育委員会
- 熊木俊朗 2000 「下田ノ沢式土器の再検討—続縄文時代前半期の北海道東部における土器型式の動態」『物質文化』69 物質文化研究会
- 熊木俊朗 2001 「第四章 考察 第三節 ^{こうぼく}後北C₂-D式土器の展開と地域差」『トコロチャシ跡遺跡』東京大学大学院人文社会系研究科
- 熊谷仁志 2001 「北海道の土器」『新 北海道の古代1 旧石器・縄文文化』北海道新聞社
- 熊木俊朗 2003 「道東北部の続縄文文化」『新 北海道の古代2 続縄文・オホーツク文化』北海道新聞社
- 澤井 玄 2003 「トビニタイ文化」『新 北海道の古代2 続縄文・オホーツク文化』北海道新聞社
- 向井正幸 2003 「黒曜石製石器の被熱痕跡と加熱処理による石器の強化—先史時代の人々の技術革新を探る—」『旭川市博物館研究報告』第9号
- 花岡正光 2003 「第I章4(2) 地形・地質の概要 遺跡の地形・地質」『根室市 穂香堅穴群(2)』北埋調報184
- 工藤研治 2004 「続縄文文化の土器」『考古資料大観 第11巻 続縄文・オホーツク・擦文文化』小学館
- 中田裕香 2004 「オホーツク・擦文文化の土器」『考古資料大観 第11巻 続縄文・オホーツク・擦文文化』小学館
- 石川 朗 2004a 「北海道東部縄文晩期後半から続縄文初頭における動物の取り扱いについて—釧路市幣舞遺跡を例として」『アイヌ文化の成立：宇田川洋先生華甲記念論文集』宇田川洋先生華甲記念論文集刊行実行委員会
- 石川 朗 2004b 「石器・石製品—道東・道北」『考古資料大観 第11巻 続縄文・オホーツク・擦文文化』小学館

- 立田 理 2004 「Ⅶ 成果と問題点 2 黒または赤色を呈する石斧について」『柏木川13遺跡』
北埋調報203 (財)北海道埋蔵文化財センター
- 榊田朋広 2006 「トビニタイ式土器における文様構成の系統と変遷」『物質文化』81 物質文化研
究会
- 遠藤香澄 2008 「縄文系平底土器」『小林達雄先生古稀記念企画 総覧 縄文土器』『総覧 縄文
土器』刊行委員会
- 熊谷仁志 2008 「北海道押型文系土器」『小林達雄先生古稀記念企画 総覧 縄文土器』『総覧
縄文土器』刊行委員会
- 斜里町知床博物館編 2009 『知床の考古』北海道新聞社
- 熊谷仁志 2009 「縄文前期」『知床の考古』北海道新聞社
- 熊木俊朗 2009 「続縄文文化」『知床の考古』北海道新聞社
- 鈴木 信 2009 「続縄文文化における物質文化転移の構造」『国立歴史民俗博物館研究報告』第152
集
- 岸本博志・長谷川健他 2009 「最近約1万4千年間の摩周火山のテフラ層序と噴火様式」『火山』
第54巻第1号
- 山元孝広・伊藤順一他 2010 「北海道東部, 屈斜路・摩周カルデラ噴出物の放射性炭素年代値」『地
質調査研究報告』第61巻第5/6号
- 新美倫子・猪熊樹人他 2010 「根室市関江谷1 竪穴群^{せきえだに}詳細分布調査報告Ⅰ」『根室市歴史と自然の
資料館紀要』第22号
- 木村幸一・内川講二・野口高弘・三谷麻衣・新西正昭・畠山真介 2011 「風蓮湖周辺及び温根沼地
区湖沼湿原調査」『国土地理院時報』No121
- 田代雄介 2011 「第4章 まとめと考察 斜里町内におけるチャシコツ岬下B遺跡出土のトビニタ
イ土器の位置付けについて」『チャシコツ岬下B遺跡発掘調査報告書』斜里町文化財調査報告XX
XⅢ
- 新美倫子・大谷茂之他 2011 「根室市関江谷1 竪穴群^{せきえだに}詳細分布調査報告Ⅱ」『根室市歴史と自然の
資料館紀要』第23号
- 新美倫子・猪熊樹人他 2012 「根室市関江谷1 竪穴群^{せきえだに}詳細分布調査報告Ⅲ」『根室市歴史と自然の
資料館紀要』第24号
- 村本周三 2013 「斜里平野における縄文時代前期の石器群」『北海道考古学』第49輯 北海道考古
学会
- 内山幸子 2014 『イヌの考古学』ものが語る歴史シリーズ⑩ 同成社
- 村本周三 2016 「北海道斜里平野における縄文時代中期～後期前半の石器群」『北海道考古学』第
52輯 北海道考古学会

団体・組織刊行物

- ペドロジスト懇話会 1984 『土壌調査ハンドブック』博友社
- 根室市教育委員会 1987 『根室市の自然と文化財』
- 関西大学考古学展示室 1991 『麦酒 ビンビンものがたり』関西大学博物館実習展
- 北海道環境科学研究センター 2005 『北海道の湖沼』北海道環境科学研究センター環境科学部地
域環境科

- 斜里町立知床博物館 2012 『野外図鑑 オホーツク海岸の石』
 日本鳥学会編 2012 『日本鳥類目録』改訂第7版 文一総合出版
 兵庫県立考古博物館 2015 『地震・噴火・洪水—災害復興の3万年史—』
 根室市 春国岱原生野鳥公園ネイチャーセンター 2016 『調べてわかった！風蓮湖・春国岱の鳥たち』
 (観光パンフレット)

図鑑類

- 辻井達一・梅沢俊・佐藤孝夫 1992 『新版 北海道の樹』 北海道大学図書刊行会
 鮫島惇一郎・辻井達一・梅沢俊 1993 『新版 北海道の花<増補版>』 北海道大学図書刊行会
 牧野富太郎 1996 『改訂版 原色牧野植物大図鑑 合弁花・離弁花編』 北隆館
 水島敏博・鳥澤雅監修 上田吉幸・前田圭司・嶋田 宏・鷹見達也編 2003 『漁業生物図鑑 新
 北のさかなたち』 北海道新聞社
 河井大輔・川崎康弘・島田明英 2003 『北海道野鳥図鑑』 亜璃西社
 木野田 君公 2006 『札幌の昆虫』 北海道大学出版会
 堀 繁久 2006 『探そう！ ほっかいどうの虫』 北海道新聞社
 梅沢 俊 2007 『新北海道の花』 北海道大学出版会
 近田文弘監修 亀田龍吉・有沢重雄 2010 『花と葉で見わかる野草』 小学館

発掘調査報告書(市町村)

- 東京大学文学部 1964 『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡 下巻』
 根室市教育委員会 1966 『北海道根室の先史遺跡』
 厚岸町下田ノ沢遺跡群調査会 1972 『北海道厚岸町下田ノ沢遺跡』
 羅臼町教育委員会 1975 『幾田』
 釧路市立郷土博物館 1976 『釧路市三津浦遺跡発掘報告』
 北見市郷土博物館 1978 『北見市中ノ島遺跡発掘調査報告書』
 釧路市立郷土博物館・釧路市埋蔵文化財センター 1978 『釧路市興津遺跡発掘報告Ⅱ』
 釧路市立郷土博物館・釧路市埋蔵文化財センター 1979 『釧路市興津遺跡発掘報告Ⅲ』
 斜里町教育委員会 1981 『一須藤遺跡・内藤遺跡発掘調査報告書—』斜里町文化財調査報告Ⅰ
 斜里町教育委員会 1983 『尾河台地遺跡発掘調査報告書』斜里町文化財調査報告Ⅱ
 北網圏北見文化センター 1986 『中ノ島遺跡Ⅱ』
 根室市教育委員会 1986 『根室市別当賀一番沢川遺跡発掘調査報告書』
 釧路市埋蔵文化財センター 1987 『釧路市 桜ヶ岡1・2遺跡調査報告書』
 苫前町教育委員会 1987 『香川三線遺跡』
 苫前町教育委員会 1988 『香川6遺跡・香川三線遺跡』
 釧路市埋蔵文化財センター 1988 『釧路市 桜ヶ岡2遺跡調査報告書』
 斜里町教育委員会 1988 『谷田遺跡発掘調査報告書』斜里町文化財調査報告Ⅲ
 羅臼町教育委員会 1988 『ボン春 荊古丹川北岸遺跡』羅臼町文化財報告 12
 羅臼町教育委員会 1989 『幾田遺跡(2)』羅臼町文化財報告 13
 斜里町教育委員会 1990 『ピラガ丘遺跡 一秋山地点発掘調査報告書—』斜里町文化財調査報告Ⅳ
 釧路市埋蔵文化財センター 1994 『釧路市幣舞遺跡調査報告書Ⅱ』

- 根室市教育委員会 1998 『ヤリムカシ1 堅穴群発掘調査報告書』
斜里町教育委員会 1999 『ボンシュマトカリベツ13遺跡・ボンシュマトカリベツ11遺跡・峰浜海岸
1 遺跡・ボンシュマトカリベツ 9 遺跡発掘調査報告書』斜里町文化財調査報告 X
釧路市埋蔵文化財センター 1996 『釧路市幣舞遺跡調査報告書Ⅲ』
釧路市埋蔵文化財センター 1999 『釧路市幣舞遺跡調査報告書Ⅳ』
常呂町(現北見市)教育委員会 2000 『常呂川河口遺跡(2)』
斜里町教育委員会 2001 『大栄6 遺跡』斜里町文化財調査報告 XⅣ
釧路市埋蔵文化財センター 2001 『釧路市大楽毛1 遺跡調査報告書Ⅰ』
釧路市埋蔵文化財センター 2002 『釧路市大楽毛1 遺跡調査報告書Ⅱ』
釧路市埋蔵文化財センター 2005 『釧路市幣舞2 遺跡調査報告書Ⅰ』
釧路市埋蔵文化財センター 2009 『釧路市幣舞2 遺跡調査報告書Ⅱ』
北地文化研究会 2009 『根室市弁天島遺跡14号堅穴の発掘調査』
斜里町教育委員会 2011 『チャシコツ岬下B遺跡 発掘調査報告書』

財団法人・公益財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書

- (財)北海道埋蔵文化財センター 1995 『千歳市 オサツ 2 遺跡(1)・オサツ14遺跡』北埋調報
96
(財)北海道埋蔵文化財センター 1996 『千歳市 オサツ 2 遺跡(2)』北埋調報 103
(財)北海道埋蔵文化財センター 2002 『根室市穂香堅穴群』北埋調報 170
(財)北海道埋蔵文化財センター 2003 『根室市穂香堅穴群(2)』北埋調報 184
(財)北海道埋蔵文化財センター 2004 『根室市穂香堅穴群(3)』北埋調報 198
(財)北海道埋蔵文化財センター 2005 『根室市穂香川右岸遺跡』北埋調報 212
(財)北海道埋蔵文化財センター 2005 『遠軽町 栄野1 遺跡・新野上2 遺跡』北埋調報 213
(財)北海道埋蔵文化財センター 2008 『釧路市天寧1 遺跡』北埋調報 254
(財)北海道埋蔵文化財センター 2012 『鶴居村 下幌呂1 遺跡』北埋調報 287
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2015 『根室市 トーサムポロ湖周辺堅穴群(1)』北埋調報
317
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2016 『根室市 トーサムポロ湖周辺堅穴群(2)』北埋調報
324
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2017 『福島町 館崎遺跡』北埋調報 333
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2017 『根室市幌茂尻1 遺跡』北埋調報 340
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2018 『根室市 温根沼3 遺跡』北埋調報 342
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2019 『根室市 別当賀一番沢川遺跡』北埋調報 355

報告書抄録

ふりがな	ねむろし おんねとう2いせき							
書名	根室市 温根沼2遺跡							
副書名	一般国道44号根室市温根沼改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書(北埋調報)							
シリーズ番号	第354集							
編著者名	笠原 興・影浦 覚・阿部明義・広田良成							
編集機関	(公財)北海道埋蔵文化財センター							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1 TEL (011) 386-3231							
発行年月日	西暦2019年3月27日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	(h-17杭)				
おんねとう2いせき 温根沼2遺跡	ほっかいどうねむろしおんねとう 北海道根室市温根沼 271番2外	01223	307	43° 16′ 28″	145° 30′ 18″	20170511 ～ 20171027	4,040	根室道路 事業に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
温根沼2遺跡	集落跡	縄文時代中～後期・ 続縄文時代・ 擦文文化期・ (トビニタイ式)	竪穴住居跡16、 土坑墓1、土坑25、 集石11、焼土15、 土器集中1、 フレイク集中1 炭窯跡(近現代) 家畜馬の墓(近現代)	土器(温根沼式、北筒Ⅱ～ Ⅴ式、下田ノ沢式、トビニ タイ式、擦文)・石器(石 鏃、石槍またはナイフ、石 錐、スクレイパー、楔形石 器、たたき石、砥石ほか) ・礫		トビニタイ式期の住居 跡、下田ノ沢式期の焼 失住居跡と墓、床面に 袋状の付属土坑のある 北筒式期の住居跡、温 根沼式期の住居跡等。		
		縄文時代早期	竪穴住居跡3、土坑19、 集石1、焼土3、 土器集中1	縄文土器(東釧路Ⅱ式)・ 石器(石鏃、スクレイパー、 彫器、楔形石器、たたき石、 砥石ほか)・礫		東釧路Ⅱ式期の住居跡、 土坑、集石等。		
要 約	<p>温根沼2遺跡は、根室市街から南西へ約9km、温根沼地区の海岸段丘上(標高18m前後)から無名沢に接する低位段丘部(標高4m前後)にかけて広がる。</p> <p>Ⅲ層から縄文時代前期～擦文文化期の遺構遺物、無遺物のⅣ層(摩周テフラ層)を間に挟んで、下のⅤ層からは縄文時代早期の遺構遺物を検出した。Ⅲ層の主な遺構としては、トビニタイ式期の住居跡(ⅢH-4・5)、擦文文化期の住居跡(ⅢH-2・3)、続縄文時代下田ノ沢式期の住居跡(ⅢH-1・6・10～12・16)、北筒式期の住居跡(ⅢH-7・8・13)、温根沼式期の住居跡(ⅢH-15)、下田ノ沢式の土坑墓(ⅢP-14)等が挙げられる。</p> <p>Ⅴ層では、竪穴住居跡3軒、土坑19基、集石1か所、焼土3か所、土器集中1か所を検出した。土器集中は一個体のコッタロ式であったが、Ⅴ層から検出した遺構の多くは東釧路Ⅱ式期と考えられる。</p> <p>遺物は約55,400点が出土した。包含層出土より遺構覆土内出土の遺物が多い。遺構内の出土遺物を見ると、石槍またはナイフとスクレイパーが多い例(ⅢH-12)、彫器が多い例(ⅤH-2)、たたき石が多い例(ⅢP-12、ⅤP-8)、砥石が多い例(ⅢH-15)など、出土遺物に偏移的な傾向が窺われるものもいくらか見受けられる。器種別にみると、Ⅲ層の遺構・包含層では小型の円形スクレイパーが多く、Ⅴ層の遺構・包含層では彫器が多く目につく。Ⅲ層・Ⅴ層を通じてたたき石と砥石が多い。たたき石には縁辺に両面から粗い剥離を加えたチョッパー状のものが一定数ある。</p>							

(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第354集

根室市 温根沼2遺跡

— 一般国道44号根室市温根沼改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

発行 平成31(2019)年3月27日

編集 公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1
TEL (011) 386-3231 FAX (011) 386-3238
[E-mail] mail@domaibun.or.jp
[URL] <http://www.domaibun.or.jp/>

印刷 北海道チャート株式会社
〒060-0008 札幌市中央区北8条西18丁目1-7 フレクスビル3F
TEL (011) 631-9901 FAX (011) 631-1123